三重県埋蔵文化財調査報告123—1

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ

明気窯跡群・大日山古墳群
甘糟遺跡・巣護遺跡

１９９５・３

三重県埋蔵文化財センター

明気窯跡群全景（東から）

明気１・２号窯（東から）

明気 1 号窯　焼成部北側壁面断面

明気 2 号窯　焚口部断面

序

一般国道42号松阪・多気バイパスは、松阪市東部の古井町から多気町仁田に至る、全長約12キロの路線で、現在の国道42号線の混雑緩和とバイパス周辺の地域開発に寄与することを目的に計画されました。

ところがこの計画路線内には、私たち祖先の歴史【埋蔵文化財（遺跡）】がたくさん残っていることがわかりました。言うまでもなく、これら埋蔵文化財は地域固有の歴史遺産として、私たち祖先の生活の一端を知る唯一の手掛かりとなるもので、一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものです。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設との調和をはかるため、建設省など関係機関と協議を重ねてきました。その結果、バイパスの建設工事によって、どうしても保存のできない遺跡については、発掘調査し記録を残すことになりました。

発掘調査は用地買収の後、工事着工に先立って平成２年度から開始されました。バイパスの早期開通をめざす櫛田川両岸の地区は多くの遺跡が密集するところでもありました。この地区では、平成６年度までの４年間を費やし、９遺跡約３万㎡を発掘調査いたしました。この中には、鴻ノ木遺跡のように縄文時代早期前半の竪穴住居や炉跡を多数発見、完形になる押型文土器が出土するなど、全国的に注目される発見もあり、多大の成果をあげることができました。

今回報告するのは、この内の明気窯跡群、大日山古墳群、甘糟遺跡、巣護遺跡の４遺跡で、松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書の第１分冊にあたります。今後、順次報告書を刊行していく予定です。これらの遺跡は調査後に工事が進められ、今ではその姿を見ることはできませんが、この調査報告書が各遺跡の姿を記録した唯一のものとして、古代史研究はもとより地域文化の理解と向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、社団法人中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位、地元の方々などからご理解、ご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成７年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　川村政敬

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成５・６年度に整理・報告書作成業務を実施した、明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡（多気郡条里遺構）の発掘調査報告書である。

2．現地発掘調査および整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』II・III・IV・Vおよび『国道42号バイパス　松阪・多気　発掘調査だより』No.３・５・６・７・９で紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。なお、多気郡条里遺構については、調査を実施した地区の小字名をとって巣護遺跡と改めた。

4．写真図版に使用した航空写真の一部は、建設省紀勢国道工事事務所より提供を受けたものである。

5．本書に使用した地図は、建設省紀勢国道工事事務所作成の松阪・多気バイパス平面図（１：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（１：25,000），多気町作成の都市計画図（１：2,500）を使用した。

6．本書の執筆の分担については目次に示したほか文末にも記した。編集・校正を田村が行い、伊藤克幸が全体を校閲した。本書に掲載した遺構写真は田村、野原、東、西村、宇河が、遺物写真は田村、東、西村、が撮影した。

7．本報告書には広岡公夫、三辻利一の両氏から玉稿を賜った。

8．本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。

9．発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の諸氏からご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

赤塚次郎	泉　択良	一瀬和夫	伊藤正人	岩瀬彰利	岩中淳之	大下　明	岡田　登
奥　義次	門暉代司	加納　実	河瀬信幸	久保勝正	定森秀夫	柴垣　勇	壇原　徹
千葉　豊	冨井　真	外山秀一	中里　守	楢崎彰一	成瀬正和	西田尚史	西田泰民
西山要一	野口哲也	八賀　晋	服部信博	広岡公夫	福田　昭	福田哲也	藤沢良祐
望月精司	三辻利一	矢野健一	山田邦和				

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

凡　　例

1．調査区の位置は、国土座標第Ⅵ系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。
　なお、真北は座標北のＮ０°18′44″Ｗ、磁北は座標北のＮ６°48′44″Ｗである。

2．発掘調査および整理作業は、『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関する基本マニュアル』（三重県埋蔵文化財センター　1993）に基づき実施した。本報告書で使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。

ＳＨ	竪穴住居	ＳＢ	掘立柱建物	ＳＡ	柵	ＳＸ	墓
ＳＺ	性格不明遺構	ＳＤ	溝	ＳＥ	井戸	ＳＫ	土坑
Pit	ピット						

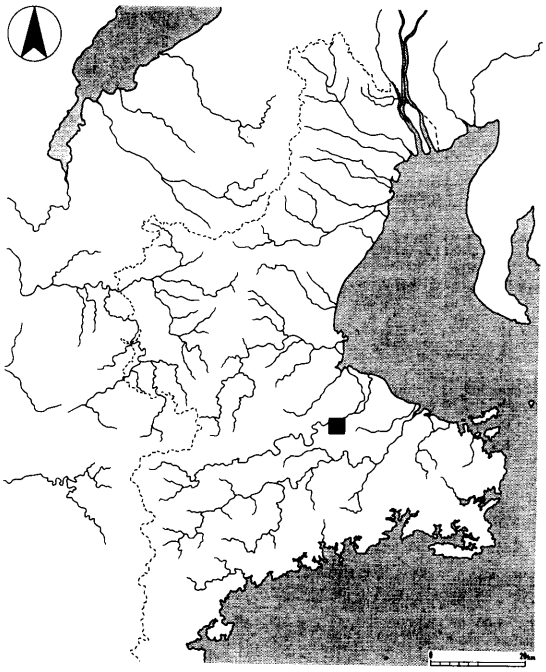
3．本報告書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。当該箇所のキャプションに記した。

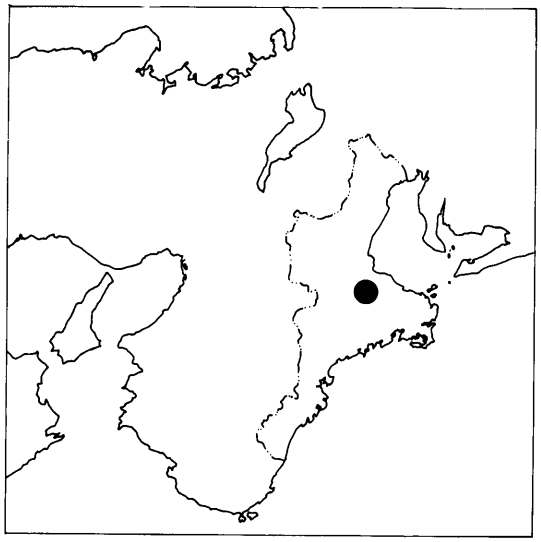
1）地形図		3）遺物実測図	
遺跡地形図	1:5,000	土器	原則として1:4　ただし拓影は1:3
調査区位置図	1:2,000	石器	原則として2:3
2）遺構実測図			
遺構平面図	1:200		
遺構実測図	1:20、1:50、1:100		

4．本報告書では、土層および遺物の色調について、小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版1989）を使用した。

5．本報告書に掲載した遺物写真の縮尺は概ね1:3 もしくは1:2である。

6．本報告書では、用語の漢字表記を次のように統一した。
　どこう……その性格が墓と認められるものについては「土坑」「墓坑」とし、それ以外のものは「土坑」とした。
　わん……「碗」「椀」「椀」があるが、「椀」を用いた。
　つき……「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。
　なべ……「堝」「鍋」があるが、「鍋」を用いた。





目　　次

Ⅰ．前　　言 ……（田村陽一）
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の体制 …… 5
　3．現地調査の方法 …… 6
Ⅱ．位置と環境 ……（西村修久）
　1．位置について …… 9
　2．歴史的環境 …… 9
Ⅲ．明気窯跡群
　1．はじめに ……（宇河雅之）… 17
　2．遺構の分布概要 ……（　〃　）… 21
　3．明気１号窯 ……（　〃　）… 22
　4．明気２号窯 ……（　〃　）… 37
　5．明気３号窯 ……（　〃　）… 48
　6．明気４号窯 ……（　〃　）… 56
　7．明気５号窯 ……（　〃　）… 58
　8．その他の遺構 ……（　〃　）… 65
　9．明気窯跡群の考古地磁気測定 ……（広岡公夫・田中彰子）… 74
　10. 明気窯跡群および明気古墳群出土須恵器の蛍光Ｘ線分析 ……（三辻利一）… 83
　11. 明気窯跡群および周辺の遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析 ……（　〃　）… 101
　12. 結語 ……（宇河雅之）… 107
　遺物観察表 …… 117
　写真図版 …… 145
Ⅳ．大日山古墳群 ……（西村修久）
　1．周辺の古墳 …… 199
　2．２号墳 …… 202
　3．３号墳 …… 207
　4．４号墳 …… 209
　5．結語 …… 211
　遺物観察表 …… 213
　写真図版 …… 215
Ⅴ．甘糟遺跡 ……（田村陽一）
　1．はじめに …… 223
　2．遺構 …… 224
　3．遺物 …… 225
　4．結語 …… 227
　遺物観察表 …… 228
　写真図版 …… 230
Ⅵ．巣護遺跡
　1．はじめに ……（田村陽一）… 233
　2．調査の結果　Ａ地区 ……（東　良樹）… 234
　　Ａ地区遺物観察表 …… 238
　　調査の結果　Ｂ地区 ……（田村陽一）… 240
　3．結語 ……（　〃　）… 247
　Ｂ地区遺物観察表 …… 249
　写真図版 …… 252
報告書抄録 …… 262

◆　表紙カット　ヘラ記号を有する須恵器（明気窯跡群出土）

挿 図 目 次

Ⅰ．前言
第１図　路線・工区・遺跡位置図……２
Ⅱ．位置と環境
第２図　遺跡位置図……12
Ⅲ．明気窯跡群
第３図　遺跡地形図……18
第４図　調査区位置図……19
第５図　地区割図……20
第６図　窯跡群分布図……20
第７図　尾根上の遺構……21
第８図　調査区平面図……23・24
第９図　１・２号窯実測図……25
第10図　１号窯断面図……26
第11図　１号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…31
第12図　１号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…32
第13図　１号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…33
第14図　１号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…34
第15図　１号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…35
第16図　１号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…36
第17図　１号窯窯体内堆積土中出土遺物実測図……36
第18図　２号窯実測図……38
第19図　２号窯断面図……40
第20図　２号窯灰原断面図……41・42
第21図　２号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…45
第22図　２号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…46
第23図　２号窯窯体内堆積土中出土遺物実測図……47
第24図　３号窯整地層出土遺物実測図……49
第25図　３号窯灰原出土遺物実測図……50
第26図　３号窯灰原出土遺物実測図……51
第27図　３号窯灰原出土遺物実測図……52
第28図　３号窯灰原出土遺物実測図……53
第29図　３号窯灰原出土遺物実測図……54
第30図　３号窯灰原出土遺物実測図及び拓影……55
第31図　４号窯窯体床面出土遺物実測図……56
第32図　４号窯実測図……57
第33図　５号窯実測図……59
第34図　５号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…61
第35図　５号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図…62
第36図　５号窯窯体床面及び灰原出土遺物断面実測図・拓影……63
第37図　５号窯窯体床面及び灰原出土遺物断面実測図・拓影……64
第38図　落ち込み１出土遺物実測図……66
第39図　落ち込み２出土遺物実測図……67
第40図　落ち込み３出土遺物実測図……68
第41図　遺構出土遺物実測図……69
第42図　包含層（第１地区）出土遺物実測図……70
第43図　包含層（第２地区）出土遺物実測図……71
第44図　包含層（第３地区）出土遺物実測図……72
第45図　ヘラ記号拓影……73
第46図　西南日本の考古地磁気永年変化と明気古窯跡群の考古地磁気測定結果……78
第47図　明気1・2号窯出土須恵器のRb-Sr 分布図 …87
第48図　明気1・2号窯出土須恵器のK-Ca 分布図 …87
第49図　明気4・5号窯出土須恵器のRb-Sr 分布図 …87
第50図　明気4・5号窯出土須恵器のK-Ca 分布図 …87
第51図　明気1・2号群と明気4・5号群との相互識別…87
第52図　明気３号窯灰原出土須恵器のRb-Sr分布図……88
第53図　明気３号窯灰原出土須恵器のK-Ca分布図……88
第54図　明気1・2 号群と明気３号群との相互識別…88
第55図　中尾窯出土須恵器のRb-Sr分布図 ……88
第56図　中尾窯出土須恵器のK-Ca分布図 ……88
第57図　根後２号窯出土須恵器のRb-Sr分布図……89
第58図　根後２号窯出土須恵器のK-Ca 分布図……89
第59図　大仏八端１号窯出土須恵器のRb-Sr分布図……89
第60図　大仏八端１号窯出土須恵器のK-Ca分布図……89
第61図　根後群と大仏八端群の相互識別……89
第62図　明気古墳群出土須恵器のRb-Sr 分布図……90
第63図　明気古墳群出土須恵器のK-Ca 分布図……90
第64図　河田Ｃ－18号墳出土須恵器のRb-Sr分布図……90
第65図　河田Ｃ－18号墳出土須恵器のK-Ca分布図……90
第66図　上ノ垣外遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図…90
第67図　上ノ垣外遺跡出土須恵器のK-Ca 分布図…90
第68図　昼河古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図……91
第69図　昼河古墳群出土須恵器のK-Ca分布図……91
第70図　明気窯出土須恵器のRb-Sr 分布図 ……103
第71図　明気窯出土須恵器のK-Ca 分布図 ……103
第72図　Na因子の比較 ……103
第73図　明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図 ……104
第74図　明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のK-Ca分布図 ……104
第75図　大日山２号墳出土須恵器のRb-Sr分布図 ……104
第76図　大日山２号墳出土須恵器のK-Ca分布図 ……104
第77図　大日山３号墳出土須恵器のRb-Sr分布図 ……104
第78図　大日山３号墳出土須恵器のK-Ca分布図 ……104
第79図　大日山尾根北裾出土須恵器のRb-Sr分布図 ……105
第80図　大日山尾根北裾出土須恵器のK-Ca分布図 ……105
第81図　杯身・蓋分類図 ……114
第82図　甕分類図 ……115
第83図　杯身・蓋法量分布図 ……116
Ⅳ．大日山古墳群
第84図　大日山古墳群周辺の古墳 ……201
第85図　遺跡地形図 ……202
第86図　古墳分布図 ……203
第87図　調査区地形測量図 ……204
第88図　２号墳墳丘断面図 ……205
第89図　２号墳出土遺物実測図・拓影 ……206
第90図　３号墳主体部実測図 ……207
第91図　３号墳出土遺物実測図・拓影 ……208
第92図　４号墳出土遺物実測図 ……209
第93図　尾根北斜面採集遺物実測図・拓影 ……209
第94図　４号墳主体部実測図 ……210
Ⅴ．甘糟遺跡
第95図　遺跡地形図 ……223
第96図　調査区位置図 ……224
第97図　出土遺物実測図 ……226
Ⅵ．巣籠遺跡
第98図　調査区位置図 ……233
第99図　Ａ地区平面図 ……235
第100図　Ａ地区出土遺物実測図……236
第101図　Ａ地区出土縄文土器実測図・拓影……236
第102図　Ａ地区出土遺物実測図・拓影……237
第103図　Ｂ地区平面図……241
第104図　Ｂ地区出土遺物実測図・拓影……242
第105図　Ｂ地区出土遺物実測図・拓影……243
第106図　Ｂ地区出土遺物実測図・拓影……244
第107図　Ｂ地区出土遺物実測図・拓影……245

図 版 目 次

明気窯跡群

ＰＬ．１　調査後全景 ……145
ＰＬ．２　調査前近景、調査前全景 ……146
ＰＬ．３　３～５号窯調査前全景、調査後遠景 ……147
ＰＬ．４　１・２号窯全景 ……148
ＰＬ．５　１号窯 ……149
ＰＬ．６　１・２号窯全景、１号窯焼成部遺物出土状況 ……150
ＰＬ．７　１号窯焼成部堆積土層断面、１号窯焚口 ……151
ＰＬ．８　１号窯煙道付近と溝、１号窯焼成部北側壁のピット ……152
ＰＬ．９　１号窯焼成部断面、１号窯断ち割り状況 ……153
ＰＬ．10　１号窯焼成部天井部断面、１号窯焼成部床面～北側壁断面 ……154
ＰＬ．11　２号窯全景、焚口部埋積土断面 ……155
ＰＬ．12　２号窯焼成部遺物出土状況 ……156
ＰＬ．13　２号窯 ……157
ＰＬ．14　２号窯焼成部遺物出土状況 ……158
ＰＬ．15　２号窯灰原断面、２号窯焚口部 ……159
ＰＬ．16　２号窯焼成部側壁のスサ入り粘土貼り付け状況 ……160
ＰＬ．17　２号窯と溝、同上断面 ……161
ＰＬ．18　２号窯煙道付近の溝と断面、２号窯焚口部断面 ……162
ＰＬ．19　１・２号窯灰原調査風景、２号窯焚口部北側壁断面 ……163
ＰＬ．20　１号窯灰原調査風景、調査後全景 …164
ＰＬ．21　３号窯灰原検出状況、第２次調査区（３・４・５号窯）全景 ……165
ＰＬ．22　３号窯前庭部、作業風景 ……166
ＰＬ．23　４号窯全景、作業風景 ……167
ＰＬ．24　５号窯全景 ……168
ＰＬ．25　５号窯焼成部焼台と断面、焼台 ……169
ＰＬ．26　ＳＫ16、ＳＤ４断面 ……170
ＰＬ．27　ＳＨ６・ＳＫ７、ＳＫ７ ……171
ＰＬ．28　１・２号窯間地山直上の遺物出土状況、熱残留磁気測定サンプリング作業（５号窯） ……172
ＰＬ．29　出土遺物 ……173
ＰＬ．30　出土遺物 ……174
ＰＬ．31　出土遺物 ……175
ＰＬ．32　出土遺物 ……176
ＰＬ．33　出土遺物 ……177
ＰＬ．34　出土遺物 ……178
ＰＬ．35　出土遺物 ……179
ＰＬ．36　出土遺物 ……180
ＰＬ．37　出土遺物 ……181
ＰＬ．38　出土遺物 ……182
ＰＬ．39　出土遺物 ……183
ＰＬ．40　出土遺物 ……184
ＰＬ．41　出土遺物 ……185
ＰＬ．42　出土遺物 ……186
ＰＬ．43　出土遺物 ……187
ＰＬ．44　出土遺物 ……188
ＰＬ．45　出土遺物 ……189
ＰＬ．46　出土遺物 ……190
ＰＬ．47　出土遺物 ……191
ＰＬ．48　出土遺物 ……192
ＰＬ．49　出土遺物 ……193
ＰＬ．50　出土遺物 ……194
ＰＬ．51　出土遺物 ……195
ＰＬ．52　出土遺物 ……196
ＰＬ．53　出土遺物 ……197

大日山古墳群

ＰＬ．１　調査前遠景 ……215
ＰＬ．２　調査前近景 ……216
ＰＬ．３　調査後遠景、調査後全景 ……217
ＰＬ．４　２号墳、２号墳墳丘盛土断面と溝状遺構 ……218
ＰＬ．５　３号墳主体部 ……219
ＰＬ．６　４号墳主体部 ……220
ＰＬ．７　出土遺物 ……221
ＰＬ．８　出土遺物 ……222

甘糟遺跡

ＰＬ．１　遺跡近景、低位段丘部近景 ……230
ＰＬ．２　出土遺物 ……231
ＰＬ．３　出土遺物 ……232

巣護遺跡

ＰＬ．１　調査前全景、調査後全景 ……252
ＰＬ．２　Ｂ地区全景 ……253
ＰＬ．３　Ａ地区出土遺物 ……254
ＰＬ．４　Ａ地区出土遺物 ……255
ＰＬ．５　Ａ地区出土遺物 ……256
ＰＬ．６　Ｂ地区出土遺物 ……257
ＰＬ．７　Ｂ地区出土遺物 ……258
ＰＬ．８　Ｂ地区出土遺物 ……259
ＰＬ．９　Ｂ地区出土遺物 ……260
ＰＬ．10　Ｂ地区出土遺物 ……261

表　目　次

Ⅰ．前　言

第１表　遺跡概況……3
第２表　調査経過および予定……4
第３表　現地説明会開催一覧……7
第４表　発掘調査遺跡一覧……8

Ⅱ．位置と環境

第5-1表　遺跡一覧表……13
第5-2表　遺跡一覧表……14

Ⅲ．明気窯跡群

第６表　明気１号窯・上層床のNRMの磁化測定結果……77
第７表　明気１号窯・上層床の50 0e消磁後の磁化測定結果……77
第８表　明気１号窯・下層床のNRMの磁化測定結果……77
第９表　明気１号窯・下層床の50 0e消磁後の磁化測定結果……77
第10表　明気２号窯・上層床のNRMの磁化測定結果……77
第11表　明気２号窯・上層床の50 0e消磁後の磁化測定結果……77
第12表　明気２号窯・下層床のNRMの磁化測定結果……79
第13表　明気２号窯・下層床の50 0e消磁後の磁化測定結果……79
第14表　明気４号窯のNRMの磁化測定結果……79
第15表　明気４号窯の50 0e消磁後の磁化測定結果……80
第16表　明気５号窯のNRMの磁化測定結果……80
第17表　明気５号窯の50 0e消磁後の磁化測定結果……81
第18表　明気古窯跡群の考古地磁気測定結果……82
第19-1表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……91
第19-2表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……92
第19-3表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……93
第19-4表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……94
第19-5表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……95
第19-6表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……96
第19-7表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……97
第19-8表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値……98
第20-1表　三重県内古墳等出土須恵器の分析データ……99
第20-2表　三重県内古墳等出土須恵器の分析データ……100
第21-1表　明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値……105
第21-2表　明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値……106
第22表　出土地別、器種別ヘラ記号一覧……110
第23-1表　遺物観察表……117
第23-2表　遺物観察表……118
第23-3表　遺物観察表……119
第23-4表　遺物観察表……120
第23-5表　遺物観察表……121
第23-6表　遺物観察表……122
第23-7表　遺物観察表……123
第23-8表　遺物観察表……124
第23-9表　遺物観察表……125
第23-10表　遺物観察表……126
第23-11表　遺物観察表……127
第23-12表　遺物観察表……128
第23-13表　遺物観察表……129
第23-14表　遺物観察表……130
第23-15表　遺物観察表……131
第23-16表　遺物観察表……132
第23-17表　遺物観察表……133
第23-18表　遺物観察表……134
第23-19表　遺物観察表……135
第23-20表　遺物観察表……136
第23-21表　遺物観察表……137
第23-22表　遺物観察表……138
第23-23表　遺物観察表……139
第23-24表　遺物観察表……140
第23-25表　遺物観察表……141
第23-26表　遺物観察表……142
第23-27表　遺物観察表……143
第23-28表　遺物観察表……144

Ⅳ．大日山古墳群

第24表　大日山古墳群周辺の古墳……200
第25-1表　遺物観察表……213
第25-2表　遺物観察表……214

Ⅴ．甘糟遺跡

第26-1表　遺物観察表……228
第26-2表　遺物観察表……229

Ⅵ．巣護遺跡

第27-1表　Ａ地区出土遺物観察表……238
第27-2表　Ａ地区出土遺物観察表……239
第28表　三重県出土の石帯一覧……239
第29-1表　Ｂ地区出土遺物観察表……249
第29-2表　Ｂ地区出土遺物観察表……250
第29-3表　Ｂ地区出土遺物観察表……251

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置する、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目ざましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現在でも三重県南部の東紀州地域や南勢地域への幹線道路の交点に位置することに変わりはない。

バイパスの建設計画

一般国道42号は和歌山県和歌山市を起点とし、紀伊半島沿岸の諸都市を連絡し、三重県津市に至る幹線道路である。東紀州方面から松阪市への入口にあたる櫛田川に架かる両郡橋付近は、道路幅員が狭いため慢性的な交通渋滞に悩まされている。また、松阪市内も幹線道路の市街地集中のため、激しい交通渋滞が繰り返されており、交通環境が極度に悪化している。

これらの状況を抜本的に解消する方策として、多気郡多気町仁田から松阪市古井町に至る延長11.9kmの、松阪市街地の環状機能も併せ持ち、さらに周辺の土地利用の拡大・工業開発の促進等、地域の活性化をも期待する一般国道42号松阪・多気バイパスが計画されたのである。

計画路線は第１図のように、９・10・11・12の４つの工区に分けられている。９工区は多気町仁田～松阪市中万町の3.1km、10工区は松阪市中万町～同市八太町の1.4km、11工区は松阪市八太町～上川町の5.0km、12工区は松阪市上川町～古井町の2.4kmである。

バイパス建設事業は昭和59（1984）年５月４日に11・12工区が、昭和62（1987）年２月３日に都市計画決定がなされた。昭和62年度中に９工区は事業化され、翌63（1988）年度には用地買収に着手、平成元（1989）年度には、10～12工区も事業化され用地買収も開始された。

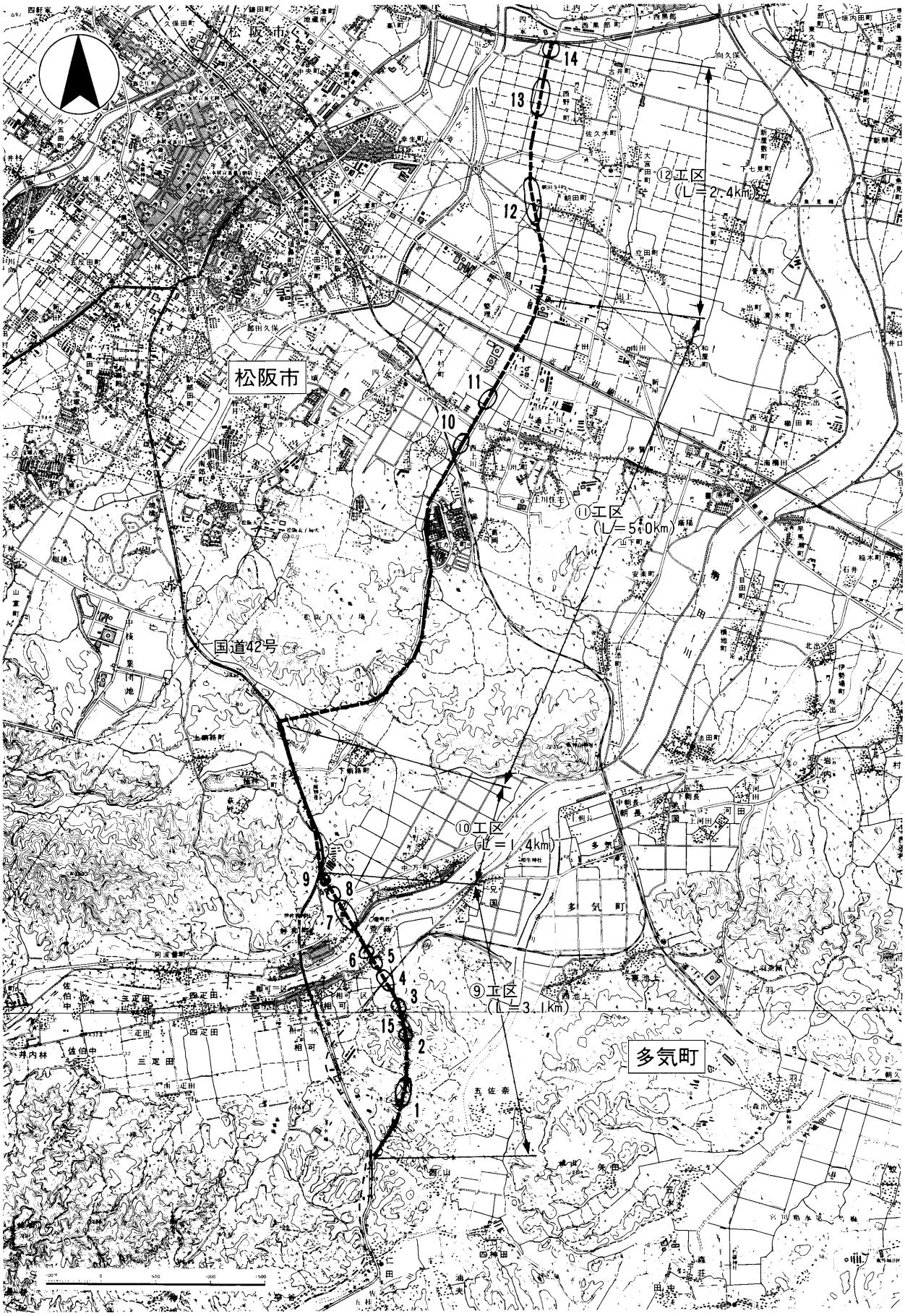
埋蔵文化財の保護協議

一方、この道路建設事業にかかる埋蔵文化財保護についての調整・協議は、昭和63年11月に建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所から、９工区の埋蔵文化財の有無について三重県教育委員会に照会があった。これを受けて、県教育委員会文化課では分布調査を実施、９工区（3.1km）内に９カ所、面積にして38,250㎡の埋蔵文化財が所在することが判明した。この結果をもとに紀勢国道工事事務所と第１回の協議を行い、事業の全体計画の説明を受けた。文化課からは、全面が遺跡とした場合の調査期間、調査経費、必要調査員数等の概略資料を提示した。この段階では用地買収も進んでおらず、平成元年度中の発掘調査はあり得ないと判断した。そして、昭和63年12月２日付け教文第1684号で、正式に分布調査結果を紀勢国道工事事務所長あてに通知した。この時点で10～12工区の計画図面が追加提示され、予定路線内の埋蔵文化財の有無について、分布調査依頼があった。

なお、建設省から出される文化財保護法57条３による文化庁への通知はこの間に行われている。

平成元年３月から４月にかけて、10～12工区（8.8km）内の埋蔵文化財分布調査を、新設の三重県埋蔵文化財センターで実施した。その結果５カ所、29,300㎡の埋蔵文化財の所在を確認し、平成元年５月９日付け教埋第72号で紀勢国道工事事務所長あてに通知した。

このような経緯を経て、７月には第２回目の協議を行った。当センターから分布調査の結果並びに各遺跡の状況等の説明を、建設省からは用地買収状況の説明が行われた。そして、建設省側から平成２年



第１図　路線、工区、遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院　松阪・国束山 1:25,000）

番号	遺跡名	所在地	確認面積㎡	現状	種類	時代	概要	工区
1	明気窯跡群	多気町相可字明気	2,000	山林	散布地 窯跡	古墳	平成４～５年度調査。須恵器窯５基、竪穴住居等を確認。	9工区
2	明気古墳群	多気町相可字明気	900	山林	古墳	古墳	平成３年度多気町教委試掘で７号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施。	
3	甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成３年度試掘調査。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	7,500	水田	散布地 条里	古墳～中世	平成５年度調査。旧称【多気郡条里遺構】。明確な条里遺構は確認できず。	
5	上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外	6,000	畑 水田	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	平成５～６年度調査。縄文～中世の遺構・遺物を検出。	
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文・中世	平成６年度第１次調査。縄文時代後期前葉の竪穴住居や土坑を多数確認。同時代の遺物多量に出土。	
7	鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	11,200	水田 宅地	集落跡	縄文 古墳～中世	平成２～６年度調査。縄文時代早期、弥生、古墳、奈良～平安時代の集落跡、墓跡等を確認。	
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	5,200	水田	集落跡	縄文 古墳～中世	平成３年度調査。奈良～平安時代の集落跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成２年度試掘調査。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器樽形瑞、壺片、円筒埴輪片が出土。	
10	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	4,200	水田	散布地	中世	平成６年度試掘調査。遺構は確認できず。遺物は客土からのため、本調査に至らず。	11工区
11	廿チ遺跡	松阪市上川町字廿チほか	3,700	水田	散布地	中世	平成７年度調査。ピット。溝などを検出。ほ場整備事業時にかなり削平か。	
12	堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町・平田・斎宮	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成６年度調査。弥生～室町時代の遺構を多数確認。銅鐸形土製品などの遺物が多量に出土。	12工区
13	御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成４年度試掘調査。遺構・遺物ともに確認できず、本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成７年度調査。遺構密度が薄く、遺跡の縁辺部か。	
15	大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成５年度工事中発見。直径約20m、高さ約２mの円墳。主体部なし。他に丘陵斜面に主体部２基。	9工区

第１表　遺　跡　概　況

度から試掘調査を、３年度から本格的な調査を開始してほしい旨の要望が出された。

８月には当センターから、試掘調査の面積とその具体的方法について建設省に提示したが、しばらく進展はみられなかった。

年が改まった平成２（1990）年２月13日に第３回目の協議が行われた。この協議では９工区の用地買収状況が主課題となり、この場で建設省より再度、平成２年度からの発掘調査開始の要請があった。これを受けて、３月に当センターと建設省の間で全体計画や調査体制などの具体的な最終協議を行い、さし迫った期間と予算枠の中で、平成２年度から部分的に発掘調査を開始することを決定した。これによって、当面は第９工区の現地発掘調査のみを対象にし、２年度は試掘調査として2,000㎡と本調査を2,000㎡の計4,000㎡を発掘調査することとし、調査担当職員を２名あてることが決まった。

以上のような経過を経て、平成２年度には当センター管理指導課内に２名の松阪・多気バイパス担当職員を配置し、事業地内の発掘調査を開始するに至った。

発掘調査事業の開始

平成２年度に入って本格的な発掘調査事業に着手をした。

建設省から受託する調査事業として、すでに昭和59（1984）年度から国道１号亀山バイパスの、昭和63（1988）年度から国道23号中勢道路の埋蔵文化財発掘調査が実施されてきており、調査体制などについては先行する二者と同様の方式をとることになった。（調査体制については後述する）

平成２年４月１日付けで三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で業務委託協定が結ばれ、同時

に前二者と（社）中部建設協会理事長を交えた三者による業務分担協定も締結した。また、三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で平成２年度の業務委託契約書を取り交わし、いよいよ現地発掘調査の幕が開いた。

なお、６月には松阪市中万町の県道脇バイパス用地内に仮設プレハブを建設し、『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所』として以後の日常的な調査活動の基地とした。この仮設プレハブは遺物整理作業などの日常の業務遂行には狭いなど種々の問題があり、平成３（1991）年９月に廃止し、同市射和町の鴻ノ木遺跡第２次調査地跡地に、９工区全体の調査で出土する遺物量や、必要人員などを考慮した規模の新プレハブを建設した。

発掘調査の期間

すでに述べてきたように、計画されたバイパスは９～12工区というように全体が４つの工区に分けられており、全体の具体的計画や用地買収などについて、不確定要素が大きいまま発掘調査に入らねばならなかったことから、建設省との二者協定や、（社）中部建設協会を交えた三者協定などについても、中途で見直しや変更が必要となった。つまり、当初の協定では事業の対象を、とりあえず第９工区の現地発掘調査のみに限定してスタートしたため、後の工事計画や用地買収の進展等に伴って新たに発掘調査が必要になった11・12工区については協定を変更せざるを得なくなった。そのため、平成５（1993）年４月１日付けで建設省との二者協定を変更した。その結果、現地発掘調査は松阪・多気バイパスの全区間を対象に平成９（1997）年度まで実施し、並行して出土遺物の整理・報告書作成を平成５年度から同10（1998）年度まで実施することになった。

この協定変更に伴って、建設省・三重県教育委員会・（社）中部建設協会の三者による業務分担に関する協定書の変更、および建設省・（社）中部建設協会の二者による協定変更も同時に行われている。

工区	No.	遺跡名	調査対象面積(㎡)			調査面積(㎡)									備考
			確認面積	5.4.1協定	7.3.31現在	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
9工区	1	明気窯跡群	2,000	2,900	2,900			範 1,500	1,400	報Ⅰ					
	2	明気古墳群	900	0	0										平成４年度多気町教委調査
	3	甘糟遺跡	2,650	0	0		範			報Ⅰ					試掘調査のみ
	4	巣護遺跡	7,500	2,300	2,300		範		2,300	報Ⅰ					旧称　多気郡条里遺構
	5	上ノ垣外遺跡	6,000	5,000	5,000	範		範	1,950 ※ 112	3,050 ※ 64	範　報Ⅱ				
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600				範	1,100 ※ 333	範	500 報Ⅲ			
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,560	範1,500 ※ 850	460	3,500 ※2,321	5,800 ※2,200	1,300			報Ⅳ		遺構・遺物多数のため整理に３ヵ年
	8	朱中遺跡	5,200	5,200	5,200	範	4,800 ※ 900			400	報Ⅴ				
	9	朱中古墳	400	0	0	範					報Ⅴ				試掘調査のみ
	15	大日山古墳群	600	—	600					600 報Ⅰ					平成６年１月工事中新発見
11工区	10	中野前遺跡	4,200	4,200	0					範			報Ⅵ		試掘調査のみ 旧称　石津遺跡
	11	廿チ遺跡	3,700	3,700	1,600					範	1,600		報Ⅵ		旧称　東牛込遺跡
12工区	12	堀町遺跡	9,200	9,200	9,700				範	3,000	3,100	3,600	報Ⅶ		
	13	御堂山遺跡	8,100	0	0			範					報Ⅶ		試掘調査のみ
	14	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300					範	1,300		報Ⅶ		
調査面積合計		範囲確認調査				622	1,052	850	452	496	96	—			
		本調査				1,500 ※ 850	5,260 ※ 900	5,000 ※2,321	11,450 ※2,312	9,450 ※ 397	6,000 —	4,100			
		合計	68,150	52,800	42,760	2,122 ※ 850	6,312 ※ 900	5,850 ※2,321	11,902 ※2,312	9,946 ※ 397	6,096 —	4,100			※は下層㎡数
調査担当職員数		現地調査				2	2	2	4	3	2	2	0		
		整理調査				0	0	0	1	2	3	3	3		
		合計				2	2	2	5	5	5	5	3		

第２表　調査経過および予定　（範…範囲確認調査　報…報告書作成　※は下層調査面積）

2．調査の体制

昭和61（1986）年度以降に一般国道１号亀山バイパスで、昭和63年度からの一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査事業で採用された、いわゆる三者体制を当該事業でも採り入れた。すなわち、三重県教育委員会（受託者）は建設省（委託者）と調査に関する委託契約を結ぶ一方、建設省（委託者）は外郭団体である（社）中部建設協会（受託者）と現場作業に係る作業員の任用や労務管理、各種機材の手配等といった土工部門に関した委託契約を結ぶ。そして、国・県・協会の三者間の協力関係を明らかにするため三者で協定を結ぶことで、当該事業を推進しようという方法である。

この三者体制については、【三重県埋蔵文化財発掘調査報告100-4 『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994・3，pp.2～15】に詳しいので、それを参照されたい。

調査の体制

調査は三重県埋蔵文化財センターが担当した。平成２年度は現地調査担当が管理指導課内におかれたが、３年度以降は調査第二課第二係として独立し、当該事業の調査に専念することになった。

平成５年度からは現地調査と並行して報告書作成も開始した。報告書作成は基本的にひとつの遺跡について２年間で整理・報告する形をとり、初年度に遺物整理を行い２年度で報告書の編集・印刷・刊行を行うことにした。平成５年度は１名、同６年度は２名の職員が、第１分冊（明気窯跡群、甘糟遺跡、巣護遺跡、大日山古墳群）の整理・報告書作成作業を担当した。

また、平成５年度からは「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づいて、松阪市および多気町両教育委員会から各１名、計２名の職員の派遣を受け、調査体制の強化、充実をはかった。以下は平成２年度から６年度の調査体制である。

【平成２年度】

三重県埋蔵文化財センター

所長	中林昭一
次長	森下和光
次長兼	
調査第二課長	山澤義貴
主査	新田　洋
管理指導課主事	河瀬信幸
主事	小林　秀
総務課長	青木真一
総務課主事	堀内念伸、寺前秀紀

【平成３年度】

所長	中林昭一
次長	東谷　勇
次長兼	
管理指導課長	山澤義貴
調査第二課長	新田　洋
主査	田中喜久雄
技師	野原宏司
総務課長	青木真一
総務課主事	堀内念伸、寺前秀紀

【平成４年度】

所長	久保富子
次長	東谷　勇
次長	山澤義貴
調査第二課長	新田　洋
主査	駒田利治
第二係長	田村陽一
主事	宇河雅之
調査補助員	河角龍典（立命館大学生）
	瀬野弥知世（皇學館大学生）
	塚田幸子（皇學館大学生）
	奥　明子（松阪女子高校生）
	高谷典子（松阪女子高校生）
総務課長	小柳　清
総務課主事	堀内念伸、寺前秀紀

【平成５年度】

所長　久保富子
次長　若林祥男
次長　山澤義貴
主幹兼
調査第二課長　伊藤克幸
主査　倉田直純
第二係長　田村陽一
主事　東　良樹
主事　宇河雅之
主事　西村修久（多気町より派遣）
主事　小浜　学（松阪市より派遣）
調査補助員　瀬野弥知世（皇學館大学生）
塚田幸子（皇學館大学生）
総務課長　小柳　清
総務課主事　伊藤直樹、寺前秀紀

【平成６年度】

所長　川村政敬
次長　若林祥男
次長　山澤義貴
主幹兼
調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主事　東　良樹
主事　宇河雅之
主事　西村修久（多気町より派遣）
主事　小浜　学（松阪市より派遣）
調査補助員　瀬野弥知世（皇學館大学生）
塚田幸子（皇學館大学生）
総務課長　小柳　清
総務課主事　伊藤直樹、橋川　功

以上のほか室内整理員として、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

谷久保美知代　白石みよ子　山分　孝子
中里　輝子　中村　敬子　広瀬　則代
山路　艶子　廣田　洋子　服部美奈子
脇葉　輝美

３．現地調査の方法

調査の対象となる遺跡には、縄文時代から中・近世にわたる集落遺跡や墓地跡、古墳群や須恵器窯跡群など多種多様なものがあった。そのため、統一的な調査方法をとることは不可能であり、各遺跡の性格に応じた調査方法を適宜採用した。ここでは、原則的な調査方法について示しておきたい。

地区割

バイパス計画路線は９工区および11・12工区においてはほぼ南北方向をとるため、４ｍ方眼で設定する地区杭は、各遺跡ごとに適切な道路中心杭２点を結ぶ延長方向に、北から南へ数字を、これと直交する方向には西から東へアルファベットを与え、各グリッドの北西の杭をそのグリッドの名称とした。

なお、今回の調査では100ｍ単位で設定する大地区は設定しなかった。

遺構カード

遺構カードは原則として４ｍ×４ｍのグリッドごとに作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係、埋土の色調・状態等を明示することにした。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付し、土坑、溝、竪穴住居跡などについては遺跡ごとの通し番号をつけることとした。

また、遺構を掘削した場合は、掘削の完了日と出土遺物についても、遺構カードに記入することとした。

遺構略測図

遺構カードが記入されたら、掘立柱建物の検討を行うなどのため、その日内に100分の１の遺構略測図を作成する。

写真撮影

遺構等の写真撮影は、原則として６×７㎝版（モノクロ、カラーポジ）および35㎜版（モノクロ、カラーポジ）を使用する。このほか全景や特殊遺構な

どについては、４×５インチ版（モノクロ、カラーポジ）もあわせて使用する。また、報道依頼関係に使用するカラーネガ（35㎜版）も、必要に応じて使用した。

使用したカメラは、アサヒペンタックス６×７、ニコンＦＥ２、ウィスタＳＰ（４×５インチ版）である。

また、遺物の写真撮影にはマミヤＲＺ67を使用した。

遺構実測

道路工事計画に関する杭はすべて国土座標に基づいている。そのため、将来予想される隣接地での発掘調査との関連が把握できるように、遺構実測は国土座標に基づいて行った。当地域は第６座標系に属する。

遺構実測は現地調査期間の短縮のため、空中写真測量を原則としつつ、遣り方実測も随時実施した。また、各遺構の遺物出土状況図など詳細な実測図はすべて手書きで行った。

なお、遺構実測図には地区杭も表示するようにした。

公開・普及

現地発掘調査が終了し、遺構実測も終了もしくはほぼ終わる段階で、一般地域住民を対象に調査成果の公開と、埋蔵文化財に対する認識を深めてもらうことを目的として、可能な限り現地説明会を実施することにした。

なお、現地説明会の時には説明資料として『国道42号バイパス　松阪・多気発掘調査だより』を刊行している。

遺　跡　名	説明会開催年月日	参加人員
明気１・２号窯	平成５年２月13日	１５０
明気３～５号窯	平成５年７月31日	１５０
巣　護　遺　跡	平成５年12月４日	１４０

第３表　現地説明会開催一覧

現地説明会（明気窯跡群）

番号		遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	担当者
1	9工区	明気窯跡群	多気町相可字明気	平成4（1992）年8月28日～9月30日〈試掘〉 〃　10月18日～平成5（1993）年2月28日 平成5（1993）年4月19日～10月29日 ＊平成4年6月17日～6月25日予備調査（磁気探査）	530 1,500 1,400 計 2,430	田村陽一・宇河雅之 田村陽一・宇河雅之 宇河雅之・西村修久
2		明気古墳群	多気町相可字明気			多気町教育委員会 西村修久・中里　守
3		甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試掘〉	144 計 144	田中喜久雄・野原宏司
4		巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試掘〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡条里遺構】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東　良樹
5		上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成5（1993）年1月28日～2月1日〈試掘〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）1月27日 平成6（1994）年4月18日～8月31日	68 96 1,950　＊112 3,050　＊64 計 5,164　＊176	河瀬伸幸 田村陽一・宇河雅之 西村修久 東　良樹・下平康弘
6		新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	平成5（1993）年7月9日～7月12日〈試掘〉 平成6（1994）年5月23日～8月24日 ＊平成8年度第2次調査予定	96 1,100　＊333 計 1,196　＊333	宇河雅之 小浜　学・西村修久
7		鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成2（1990）年10月11日～平成3（1991）年3月19日 平成3（1991）年4月23日～5月31日 平成4（1992）年5月11日～8月31日 平成5（1993）年4月19日～8月29日 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年3月31日 平成6(1994)年8月23日～平成7(1995)1月25日	272 1,500　＊850 460 3,500　＊2,321 3,600　＊400 2,200　＊1,800 1,300 計12,832　＊5,371	河瀬伸幸 河瀬伸幸・小林　秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河雅之・田村陽一 東　良樹・小浜　学 小浜　学・田村陽一 下平康弘・田村陽一
8		朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成3（1991）年6月1日～8月24日 平成3（1991）年10月14日～平成4（1992）年3月13日 平成6（1994）年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500　＊900 400 計 5,384　＊900	河瀬伸幸 田中喜久雄・野原宏司 田中喜久雄・野原宏司 東　良樹
9		朱中古墳	松阪市射和町字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成5（1993）年6月25日～8月20日	98 1,000 計 1,098	河瀬伸幸 西村修久
10	11工区	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6（1994）年9月26日～10月5日〈試掘〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【石津遺跡】	176	東　良樹
11		廿チ遺跡	松阪市上川町字廿チほか	平成6（1994）年10月6日～10月14日〈試掘〉 平成7年度本調査予定 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【東牛込遺跡】	144	東　良樹
12	12工区	堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町・斎宮ほか	平成5（1993）年7月19日～7月23日〈試掘〉 平成6（1994）年8月26日～平成7（1995）年2月20日 平成7年度第2次調査、平成8年度第3次調査予定	356 3,000	宇河雅之 小浜　学
13		御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	平成5（1993）年1月26日～1月27日〈試掘〉	224	宇河雅之
14		山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	平成6（1994）年10月17日～10月20日〈試掘〉 平成7年度本調査予定	176	東　良樹
15	9	大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	平成6（1994）年4月7日～6月10日	600	西村修久・小浜　学

第4表　発掘調査遺跡一覧　（調査面積欄の＊印は下層調査面積）

II. 位置と環境

1．位置について

国道42号線松阪・多気バイパスの第９工区は、松阪市中万町と多気町仁田を弓状に結ぶ3.1kmのルートである。その間、櫛田川を横断することになるが、同時に、両岸の段丘、そして段丘を見下ろす低丘陵も横切ることになる。そのルート上は、適度の水、適度の平地、適度の山林というように、人々が生活するには条件の良好な場所であったようで、様々な遺跡が存在する地域である。

奈良県境の高見山に源をもつ櫛田川は、何回かの屈曲を重ねながら、東方向へと流れる。最初は山間を鋭く切るように流れるが、次第に両岸の段丘面を広げ、当バイパスが横切る付近ではまさしく中流域の様相である。しかし、そこから2.5kmほど東方で丘陵地東端の神山にぶつかり、伊勢平野へと流れ出して下流域となる。そのポイントはまた、多気町側から佐奈川が、松阪市側から孫川が合流する所でもある。さらに、以前は櫛田川の本流であったともされる祓川を分流する地点でもある。

2．歴史的環境

以下、櫛田川が中流から下流に流れを変えようかという当松阪・多気バイパス第９工区建設予定地域を中心にして、周辺の歴史を概観してみたい。

＜先土器時代＞

櫛田川流域における人々の足跡は、古くは、先土器時代にまで遡る。それは、主にナイフ形石器の存在で確認される。当バイパス路線の付近では、櫛田川左岸、松阪市中万町の上寺遺跡(52)でチャート製のナイフ形石器が発掘調査時に出土しているし、櫛田川に注ぐ佐奈川の流域では、上世古遺跡(136)で採集されている。しかし、数量としてはいずれも１点のみで、遺跡の規模は小さい。対して、櫛田川とは南におよそ７～８km離れて並行するように流れる宮川の流域には、当時の拠点的な遺跡ともされる大規模な出張遺跡が存在し、遺跡数も櫛田川流域よりは多い。櫛田川と宮川の間の外城田川流域には、踏査で数点のナイフが表採された平林遺跡(100)や三川遺跡(92)が所在し、大規模な遺跡と小規模な遺跡の中間的な規模を想定させる。

他に、先土器時代の遺物として、古墳群の調査の際に、多気町東谷Ｃ遺跡（河田古墳群）(82)で男女倉型の木葉形尖頭器が出土している。また、先土器時代の末期の細石刃が、上村池Ｂ遺跡(91)で表採されている。

＜縄文時代＞

やがて人々は、土器作りを学習し、土器を生活の中で活用し始める。その初期の時期、すなわち縄文時代草創期の土器として確実視されるものは、県内では今のところ見つかっていない。しかし、多気町坂倉遺跡(98)出土の土器片の中には、草創期末葉に位置付けられる可能性をもつものが見受けられる。一方、この時期の代表的な石器である神子柴型石斧・有舌尖頭器・木葉形尖頭器などの出土は、櫛田川中流域にも点々とみられる。例えば、近畿自動車道が櫛田川を横切る松阪側の段丘に上ノ広遺跡・王子広遺跡が所在し、この時期の石器がまとまって出土する。さらに、10kmほど下流の多気町側中位段丘上には牟山遺跡(70)が知られる。多気町佐奈川の流域では、フケ遺跡(107)で神子柴型石斧が、そして上タコリ遺跡(60)で完形の有舌尖頭器が単独ではあるが出土している。全国レベルでは土器の使用が確立される時期、櫛田川の中流域では、まだ土器の使用が一般的ではなかったのか、それとも単に見つかっていないだけなのか、とにかく現段階では、当時はまだまだ石器のみの生活だったといえるようである。

しかし、縄文時代も早期になると、土器もさかんに活用されるようである。櫛田川流域での早期押型文土器の出土は県内でも目立つところである。当バイパス路線内の鴻ノ木遺跡(7)をはじめ、同じ段丘に並ぶ鐘突(53)・上寺・射原垣内(48)の各遺跡や対岸の牟山・坂倉両遺跡での、わりあい狭い範囲での出土は、当時の人々の生活の拠点地域を推測させる。

もっとも、押型文土器の型式を考慮すると、これらの遺跡の盛衰に時間的な差があり、その点について奥義次氏は、坂倉→鐘突→鴻ノ木→射原垣内→上寺・牟山という順序を示されている[1]。また、鴻ノ木遺跡や坂倉遺跡では炉跡や円形土坑も検出され、遺構のうえでも縄文時代早期を今日に伝えている。

次の縄文時代前期は、全県的に確認遺跡数が少なくなる。櫛田川の流域でもその傾向には変わりなく、前述の早期の遺跡群が、そのまま前期にまで発展を続ける様相は見られない。しかし一方では、勢和村のアカリ遺跡など少数ながら安定した遺跡もみられる。

縄文時代中期は、遺跡数が増加し、また出土する土器は、関東系・瀬戸内系・北陸系・東海系などのものが入り交じり、活発な地域間交流がうかがえる時期である。後半になると、地方色を加味した土器も出現するようになる。ところが、個々の遺跡の規模を見ると、小さく不安定なものが多い。櫛田川流域にも中期の土器の出土・採集地は点々と有るが、いずれも少量の土器片で、例えば田中廻り遺跡(101)では、中期の土器は次時期の土器に混じって数片出土しているにすぎない。また、多気町ナゴサ遺跡(112)のように、大きな川筋から少しはずれた小さな尾根に立地する遺跡もみられる。以後の時期も含めて、このような、時期による遺跡数・遺跡規模の変化は、縄文社会の構造の変化によるものなのか、単に現在の調査の限界によるものなのか、興味深いところである。

やがて、沈線と磨消縄文で特徴づけられる瀬戸内系の中津式土器が登場し、縄文時代後期が始まる。福田Ｋ２式の時期を経て、北白川上層式などの西日本系の縁帯文土器が盛行する後期前葉にはまた、関東系の堀之内式の土器もよく見かける。この時期、櫛田川中流域ではその流れに沿って、勢和村宮切、松阪市王子広、多気町新徳寺（6）、松阪市射原垣内などの各遺跡が形成される。これらの遺跡は、出土土器の型式にほとんど差がなく、同時期にそれぞれの地区で集落を形成していたとも考えられる。石錘の出土が多くなり、人々は川岸に集まり、漁も始めたようである。

後期後葉になると遺跡数が減ってしまう反面、櫛田川流域では勢和村新神馬場遺跡、宮川流域では伊勢市佐八藤波遺跡など、現在でも多数の遺物が表採できる密度の濃い遺跡がみられるようにもなる。櫛田川と宮川の間、外城田川の流域に所在する多気町森荘川浦遺跡（114）もこの後期後葉から末葉にかけて繁栄した遺跡である。そして、つぎの晩期にまで続く様相を示す。

晩期の遺跡は、あまり目だったものは見当たらないが、当バイパス付近では下宮前Ａ遺跡(54)や射原垣内遺跡に土器の断片がみられる。また、櫛田川が沖積地に流れ出る地点の松阪市閑浄寺遺跡(36)でも土器が確認されている。

＜弥生時代＞

弥生時代になっても人々はやはり、櫛田川の段丘を好んだようである。上寺遺跡や鐘突遺跡では弥生前期の土器が出土し、また、鐘突遺跡では円形の竪穴住居も検出された。この、松阪市射和町・中万町における櫛田川から松阪丘陵の裾部にかけての段丘は、以後、古墳時代も奈良・平安時代も、中世においても、延々と人々の生活・居住に適した場所として活用されてきたことが、幾度かの発掘調査で確かめられてきている。

一方、櫛田川の右岸では、明和町神前山古墳群所在地で前期の甕や壷が出土している。そして、櫛田川をさかのぼると、近畿自動車道建設に関わって調査された花ノ木遺跡が中期の遺跡として存在する。竪穴住居と四隅の切れる方形周溝墓が検出され、東海系の縄文を施した土器が出土している。また、県立相可高校のグランド一帯(55)では、後期から古墳時代前期にかけての土器が昭和30年代の工事に伴って出土している。中流域の段丘上に、小規模なムラが形成されたのではないだろうか。

逆に川を下り沖積地が広がる祓川の流域に出ると、明和町金剛坂遺跡(74)・寺垣内遺跡(75)・斎宮跡古里地区(73)・北野遺跡など、中期から後期にかけて大集落が営まれている。広い沖積地を背景に、大きなムラが形成されていったのであろう。同様の大集落の様相は、松阪市の草山遺跡(26)にも見られる。社会が広い範囲で組織化され、古墳を作り出す時期への準備が進んでいる現れといえよう。

さて、弥生時代の祭器として銅鐸の存在は良く知

られるところであるが、多気町四疋田の丘陵裾(71)でも出土したといわれる[2]。銅鐸そのものが行方不明になっていることが残念である。

＜古墳時代＞

古墳時代は、主に古墳の分布で概観してみたい。

古墳時代前期の4世紀後半、古墳はまず松阪市街地に近い金剛川の流域に築かれる。久保古墳(27)、高田2号墳(30)、茶臼山古墳がそれである。また、わかっている出土品が少なく決定的な事はいえないものの、裾部で検出された円筒埴輪棺から坊山1号墳(29)もこの時期の古墳と考えられている。特に、久保・茶臼山の両墳は直径50mを越える規模で、三角縁神獣鏡をもつことが注目される。

5世紀になると、金剛川左岸（阪内川右岸）に宝塚1号墳(23)が築造される。この全長95mの前方後円墳は、大きさ、墳形ともまさしく首長墓の様相を示す。一方、櫛田川の右岸、多気町、明和町、玉城町にまたがる玉城丘陵にも5世紀になると古墳が出現する。辺長49×38mの方形で、滑石製小型丸底壷と半円透孔のある円筒埴輪が出土している権現山2号墳(88)がそれである。

5世紀後半には、宝塚1号墳の北隣に同2号墳が、金剛川流域には大塚山古墳が築かれる。そして玉城丘陵では高塚1号・大塚1号・神前山1号(83・81・79)の各帆立貝式古墳が築造される。

以上のような4～5世紀にかけての古墳の様相、そしてそこからうかがい知れる社会状況については、下村登良男氏の論考があるので参照されたい[3]。

6世紀になると、全国的にそうであるように、櫛田川流域でもやはり群集墳の形成が始まる。特に玉城丘陵には、7世紀にかけて400を越える古墳が造営されている。櫛田川と佐奈川に挟まれた丘陵地にも明気・立岡山・黒田山（2・67・62）などの古墳群がみられ、櫛田川左岸の松阪丘陵縁辺部にも尾だけ・中万大谷・やつで（49・44・41）等の古墳群が存在する。河川流域の広い生産基盤を背景に、古墳造営の可能な集団が多数存在していたわけである。これら群集墳の個々の古墳については、墳形のうえからは円墳と方墳に大別でき、両者を比較した場合方墳は概して新しい感がある。また、埋葬施設については主に木棺直葬と横穴式石室であるが、多気町内の櫛田川と佐奈川に挟まれた丘陵上の古墳には横穴式石室は現在のところ見られず、その採用については造営集団による片寄りがあるようである。

古墳の造営は7世紀中頃まで続くようで、多気町で発掘調査された女山4号墳(89)や森出7号墳(120)はその終末の時期の古墳である。

ところで、6世紀末ごろからはこの地域でも須恵器窯の操業がみられる。櫛田川以北では根後・分れ谷窯跡（25・33）が、以南では中尾・明気などの窯跡（69・1）が今日にそれを伝えるが、明気古墳群の付近には蜜柑園造成時に窯跡らしきものがあったとも聞く。特に櫛田川の右岸地域は、現在知られる窯跡以上の規模の須恵器生産地であったようだ。

このように、古墳造営や須恵器窯の操業をみると、この地域が古墳時代末、政治的・経済的・技術的に安定充実し、賑わいをみせていたように思える。しかし、当時の集落跡は当バイパス付近では今のところ見つかっていない。段丘の微高地にある現在の集落と重なるのかもしれないが、今後の発見が期待される。ともあれ、この社会的エネルギーは以後の櫛田川中流域の歴史に引き継がれる。

＜奈良・平安時代＞

須恵器窯は、7世紀後半、外城田川沿いで操業されるようになる。原・市寄窯跡群(126・127)は7世紀後半から8世紀前半にかけての計14基の窯跡であり、製品の供給地として「斎宮」をも想定できるようである[4]。

仏教の広まりに従い、8世紀には寺院の建立もなされた。松阪市では丹生寺廃寺や御麻生薗廃寺、大雷寺廃寺(35)、多気町では釈尊廃寺、逢鹿瀬廃寺(134)、四神田廃寺（佐奈山廃寺）(106)などで古瓦の出土を見る。同時に、瓦窯の存在もまた注目される。近畿自動車道の建設に伴い発掘調査された多気町牧瓦窯跡群は、8基の窯からなり、8世紀の初頭から中葉ごろにかけて操業していたと考えられる。4・8号窯で焼かれた瓦と丹生寺廃寺・御麻生薗廃寺で出土している瓦が同范であり、生産地と供給先の関係が明かとなっている。また、同様に、西谷遺跡（栃ヶ池瓦窯）(133)と逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺の関係も考察されている。なお、瓦片が採集され、現在四神田廃寺としている遺跡については、瓦窯跡

第2図　遺跡位置図（1:50,000）

（国土地理院　大河内・松阪・横野・国束山　1:25,000）

No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
1	明気窯跡群	須恵器窯5基	R42バイパス関連
2	明気古墳群	古墳12基	〃
3	甘糟遺跡	中世土師・陶器片	〃
4	巣護遺跡（多気郡条里）	平安末～鎌倉土器、石帯	〃
5	上ノ垣外遺跡	縄文～鎌倉土器、大珠	〃
6	新徳寺遺跡	縄文後期の竪穴住居・土器	〃
7	鴻ノ木遺跡	縄文早期炉跡、竪穴。押型文	〃
8	朱中遺跡	奈良～平安土器・掘立・竪穴	〃
9	朱中古墳	樽形埴片	〃
10	石津遺跡	山茶椀・天目茶椀等細片	〃
11	東牛込遺跡	山茶椀、近世陶器等	〃
15	大日山古墳群	古墳4基	〃
21	池田遺跡	石鏃・石匙・磨製石斧	
22	長庄野遺跡	ナイフ	
23	宝塚古墳群	1号前方後円墳　全長95m。 2号帆立貝式　径60m。	
24	上出（かみで）遺跡	方形周溝、方墳、家型埴輪 ナイフ、石鏃、石匙	S41度 発掘調査
25	根後窯址	1～3号窯、6～7C須恵	
26	草山遺跡	方形周溝墓、弥生竪穴・掘立、 奈良～中世掘立	S57～S59度 発掘調査
27	久保古墳	径52.5、高6m円墳	漢式鏡、車輪石等出土とも
28	権現山古墳群	円墳4基	
29	坊山古墳群	円墳3基。1号墳　径40m・神獣鏡・円筒埴輪棺。	1号S60度 発掘調査
30	高田古墳群	円墳3基。2号墳　径27m・銅鏡・石釧・円筒埴輪棺。	
31	貴田寺廃寺	軒丸・軒平瓦	
32	分れ谷遺跡	縄文土器片（中期後半～後期初頭）。	
33	分れ谷窯	窯壁一部露呈	
34	西野々広古墳群	前方後円墳1基、円墳11基	
35	大雷寺廃寺	軒丸・軒平瓦	
36	閑浄寺遺跡	大溝、古墳竪穴、奈～平掘立	S62度 発掘調査
37	天王山古墳群	円墳10基。 円筒埴輪・人物埴輪・須恵器	
38	西谷古墳群	円墳3基	
39	山添古墳群		S59度 発掘調査
40	山添遺跡	伊勢型鍋、井戸	S53度 発掘調査
41	やつで古墳群	円墳3基。3号墳横穴式石室	
42	長谷古墳	円墳、石室	
43	片田古墳		痕跡墳
44	中万大谷古墳群	円墳7基。3号墳横穴式石室	
45	弁天窟古墳	横穴式石室	
46	神山城跡	台状地、堀切	
47	八の坪遺跡	土師器	
48	射原垣内遺跡	縄文弥生古墳竪穴、室町掘立 押型文土器、石斧、古式土師	S54度 発掘調査
49	尾だけ古墳群	円墳7基。5号墳須恵器杯身	
50	岡山古墳	円墳	
51	戸笠遺跡	弥生土器片、山茶椀片	S54度 発掘調査
52	上寺遺跡	弥生古墳奈良竪穴住居、ナイフ、 押型文	S55度 発掘調査
53	鐘突遺跡	弥生奈良竪穴住居、押型文土器	S55度 発掘調査
54	下宮前A・B遺跡	石鏃・縄文土器片・須恵器片・ 土師器片	
55	校庭遺跡	台付壷等	
56	九十九戸遺跡	サヌカイト片、山茶椀片	
57	柚木元遺跡	サヌカイト片、山茶椀片	
58	中万前遺跡	サヌカイト片、須恵器片	
59	藪ノ下遺跡	サヌカイト片、須恵器片	
60	上タコリ遺跡	有舌尖頭器	
61	高寺遺跡	石鏃、須恵器片	
62	黒田山古墳群	古墳15基、石鏃	
63	宮ノ谷古墳群	円墳2基	
64	石山古墳群	円墳6基	
65	石塚谷古墳	円墳。銀象眼鉄刀	H3度 発掘調査
66	倉懸古墳群	円墳2基	H4度 発掘調査
67	立岡山遺跡群	円墳4基。中世墓群。	H3度 発掘調査
68	中尾古墳群	円墳2基	
69	中尾窯跡	須恵器窯	S50 発掘調査
70	牟山遺跡	尖頭器、石斧、押型文土器	S38度 発掘調査
71	(伝)銅鐸出土地	S19年に銅鐸が出土したという	
72	狐谷古墳群	須恵器(杯蓋身・埴等)のスケッチが残るのみ	
73	斎宮跡	官衙跡の他に方形周溝墓等	国史跡
74	金剛坂遺跡	縄文土器、方形周溝墓、竪穴住居	S44・59・60 発掘調査

第5－1　遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
75	寺垣内遺跡	パレス壷、方形周溝墓、竪穴住居	S60・61度発掘調査
76	神殿遺跡	方形周溝墓、竪穴住居、独鈷石	S60・61度発掘調査
77	川原口遺跡	竪穴住居、土器焼成坑	S61度発掘調査
78	コドノA・B遺跡	ナイフ、有舌・木葉尖頭器、石鏃	
79	神前山古墳群	1号帆立貝、画文帯神獣鏡特殊線、埴輪、弥生土器	S47度発掘調査
80	天王山古墳群	6号前方後円墳。19号　径52m円墳。	
81	大塚古墳群	1号帆立貝式、埴輪	
82	河田古墳群	総数100基 現在までに52基が発掘調査済	S48・49・50・57・60・H2発掘
83	高塚古墳群	1号帆立貝式、埴輪	
84	上村池古墳群	横穴式石室も多い	
85	ユブミ古墳群	2号前方後円墳	
86	斎宮池古墳群	12号前方後円墳	
87	朝久田古墳群	円墳・方墳計24基	
88	権現山古墳群	方墳2基。2号から石製小型壷、埴輪。	
89	女山古墳群	4号方墳、木棺直葬。須恵器	S47度発掘調査
90	坂倉古墳群	円墳4基	
91	上村池B遺跡	細石刃	
92	三川遺跡	ナイフ	
93	マイラ遺跡	石棒	
94	畑ノ田遺跡	有舌尖頭器	
95	東裏遺跡	掘立柱建物。須恵円面硯 緑釉風字硯、「中臣」墨書土器	S53発掘調査
96	カウジデン遺跡	掘立柱建物、土馬、斎串 「中万」墨書土器	S54度発掘調査
97	多気遺跡	石鏃	
98	坂倉遺跡	縄文早期炉跡・土坑。 押型文土器、尖頭器、耳飾	S49度発掘調査
99	長迫間A・B遺跡	掘立柱建物。須恵器、土師器	S47度発掘調査
100	平林遺跡	ナイフ、木葉形尖頭器	
101	田中廻り遺跡	縄文後期土器	S52度発掘調査
102	五佐奈遺跡	井戸、斎串	S52度発掘調査
103	西山城跡	土塁、堀。伊勢型鍋	H6度発掘調査
104	片倉氏館跡	山茶椀等	H6度試掘
105	ミゾコ遺跡	井戸、石組遺構。伊勢型鍋	S59度発掘調査
106	四神田廃寺	軒丸・軒平瓦	
107	フケ遺跡	石斧、縄文早期土器	

No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
108	サソダ遺跡	ナイフ	
109	矢田城跡	土塁、台状地	
110	向野遺跡	舟底形石器	
111	南山西窯跡群	須恵器窯2基。飛鳥以降	
112	ナゴサ遺跡	柳葉形尖頭器、石斧、縄文中期土器	
113	二ツ山遺跡	木葉形尖頭器片、石剣片	
114	森荘川浦遺跡	石鏃、石斧、土偶片、縄文後期土器	H元・6度発掘調査
115	林中窯跡	須恵器片	
116	長安寺窯跡群	須恵器窯2基。飛鳥以降	
117	南ノ山窯跡		
118	北の山B・C窯跡	須恵器	
119	北の山A窯跡	須恵器	
120	森出古墳群	7号方墳・木棺直葬・須恵長頸壷等	S49度 7号発掘調査
121	笠木館跡	多郭連続形式、土塁、空堀	S50～S51測量調査
122	中村ノ内窯跡		
123	ぼうず山古墳群	円墳19基	
124	山神城跡	堀切、土塁、土橋	H2度発掘調査
125	泉貢窯跡	須恵器窯。10c前半	H2度発掘調査
126	原窯跡群	須恵器窯11基。飛鳥以降	S38度10・11号発掘調査
127	市寄窯跡群	須恵器窯3基。7c末～8c	
128	ハム谷窯跡群		
129	池ノ谷窯跡群	須恵器窯3基。古墳～奈良ごろ。	
130	コノハタ遺跡	木葉形尖頭器	
131	ナゴ遺跡	石鏃、石匙、石斧	
132	牛バサマA・B遺跡	押型文土器、有孔石製品	H元度発掘調査
133	西谷遺跡 (栃ヶ池瓦窯)	軒丸・軒平瓦	
134	相鹿瀬廃寺	軒丸・軒平瓦	
135	五桂池遺跡群	石鏃、石匙、石斧	
136	上世古遺跡	ナイフ	
137	近長谷城跡	堀切、平坦地	
138	近長谷寺	十一面観音、資財帳	
139	日向遺跡	ナイフ、木葉形尖頭器	
140	佐奈水銀鉱山跡	9ヵ所の坑口。S18年探鉱。	H元度2基の坑口測量調査

第5－2　遺跡一覧表

ではないかという見方もある[5]。

ところで、櫛田川中流から下流にかけては、飯野・多気両郡に施行された条里制の地割りがみられるところである。条は北から南に区画され、多気町津田地区あたりは多気郡の第十六条となる。里は、西から東へ数えられ、現在残る三疋田、四疋田という地名は、里数を冠するものであることはよく知られている。しかし、当地域の条里地割りは、地域全体がひとつの碁盤目で区切られるのではなく、場所によって地割りの方向性をやや異にするようである。そのことが一つの特徴ともいえ、耕地が徐々に整備された証しともいわれている[6]。

9世紀の始め、この水田地域の一部は荘園として京都東寺に寄進された。川合荘、大国荘と称され、東寺にとっては重要な寺領であった。しかし、多気・飯野の両郡は度会郡とともに古来より神三郡といわれ、伊勢神宮支配の土地でもあった。東寺と神宮とのもめごとも少なからずあったようで、10・11世紀の記録に見られる。また、多気町内にあった成願寺（はっきりした所在地は不明）と東寺の紛争の記録も残る。当時の土地支配の複雑性を垣間見ることができるといえよう。

一方、仁和元(885)年、多気町長谷の山腹に近長谷寺(138)が建立される。在地の豪族飯高諸氏による創建である。本尊の木造十一面観音立像は平安後期の作とされ、国指定重要文化財となっている。同じく国の重文指定をうけている資財帳には、寄進者として藤原、橘、中臣などの貴族階級、敢、磯部、伊勢などの地方豪族と思われる人々、斎王徽子をはじめ斎宮に関わる人々、神宮の官職を持つ人々などの名が見え、中央や近隣地域との結び付きの一端が示される。

また、古代における様相の一部は発掘調査からもうかがえる。多気町河田の東裏遺跡(95)やカウジデン遺跡(96)、五佐奈遺跡(102)では奈良～平安時代ごろの土器や祭祀遺物（斎串・土馬）が出土し、掘立柱建物が検出されている。中でも、緑釉の風字硯や「中臣」と墨書された椀の出土には、この地域では一般的でない何か特別な意味合いを感じる。中央からの役人がいたのであろうか、荘園経営に関する“事務所”があったのであろうか？　また、カウジデン遺跡から出土した皿や椀の「中万」という墨書は、櫛田川を挟んだ松阪側の集落名である中万との関わり、同時に大国荘との関わりで興味深い。発掘調査報告書によると、中万の人々による出作の可能性も指摘されているようである。

＜鎌倉時代以降＞

武士が台頭した時代、北畠氏の支配下にあったこの地には、山城跡も所々にみられる。玉城町の田丸城の支城として重要な位置をしめた神山城(46)、外宮神官度会家行が根拠地を置いたといわれる近長谷城(137)などである。また、多気町笠木の舌状台地には笠木館跡(121)が確認されている。この館跡は東西500m・南北400mの規模をもち、土塁や堀で区画された郭を連ねる構造のものである。この館の西南約1.5kmの山頂には矢田城跡(109)が所在し、山城と館の有機的な関連がうかがわれる。

神山城の北東の平地では、石積み井戸や掘立柱建物を検出し天目茶椀や土師器鍋・羽釜を多数出土した山添遺跡(40)が調査されており、また、射原垣内遺跡でも室町時代を主体とした集落跡が調査により明かとなった。多気町側では、矢田城の南西の東の平地で鎌倉～室町時代にかけての遺跡であるミゾコ遺跡(105)が発掘調査されている。これら発掘調査された遺跡及びその周辺の水田・畑の他に、三疋田や四疋田の水田地、荒蒔や兄国の自然堤防上など、各所に鎌倉～室町期のものと思われる土師器細片が散布している。現在の地表とほとんど変わらないところで中世の人々も生活していたのであろう。集落などは、現在のものと多分に重なっているのではないだろうか。

＜水銀について＞

ところで、勢和村丹生を中心として採取された水銀については、少し付記しておかなければならないであろう。8世紀末成立の『続日本紀』には、文武天皇二（698）年や和銅六（713）年に伊勢国からの朱砂（辰砂）・水銀の献上の記述が見られる。伊勢の地に、丹生のほかにまとまった水銀鉱山が知られていない以上、これらの記述の水銀（辰砂）は丹生のものとみて差支えないと思われる。奈良時代中頃の東大寺の盧舎那仏造営に際しては、大量の水銀が使用されているが、これも丹生産のものであろうこと

が定説となっている。平安時代後期に成立した『今昔物語集』にも伊勢国の水銀に関係する話がみられ、当時丹生の水銀鉱はよく知れわたったものであったようだ。中世には全国唯一の水銀座が組織されていたことが知られている。そして、丹生から櫛田川筋に約８㎞下流の射和の地には、水銀を原料として白粉を生産する産業が興り、江戸時代を通しての射和の繁栄につながる。

これら文献に現れるはるか以前にも、辰砂は赤彩の原料として利用されている。縄文時代後期の松阪市王子広遺跡や多気町森荘川浦遺跡からは朱彩された土器が出土しているのである。勢和村の池の谷遺跡では、縄文晩期の朱彩土器とともに、辰砂原石も出土している。

中央構造線に沿って存在する辰砂の鉱脈は、当地域に長い間“特産物”を供給し続けたのである。

（西村修久）

〔註〕

① （参考文献１）

② 「伝銅鐸出土地」として、多気町の指定文化財となっている。1944（昭和19）年秋、流水文銅鐸が出土したとのことであるが、写真・図等も残されていない。

③ （参考文献11）

④ （参考文献12）

⑤ （参考文献13）

⑥ （参考文献14）

〔参考文献〕

1 『多気町史　通史』多気町　1992

2 『松阪市史　第二巻　資料編　考古』松阪市　1978

3 奥義次「多気町内の遺跡めぐり①～㉘」『広報たき』連載　1974～1976

4 『三重県多気郡明和町遺跡地図』明和町　1988

5 『第12回三重県埋蔵文化財展　三重の縄文時代』三重県埋蔵文化財センター　1992

6 『ふびと　34　―多気地域地域調査報告―』三重大学歴史研究会　1978

7 三重大学原始古代史部会「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと　36』三重大学歴史教室・同研究会　1979

8 『三重の中世城館』三重県教育委員会　1977

9 『三重県埋蔵文化財センター研究紀要　第２号』三重県埋蔵文化財センター　1993

10 「東大寺要録」『続々群書類従　第11巻』所収

11 下村登良男「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1983

12 宇河雅之・瀬野弥知世・塚田幸子「市寄窯跡群出土の須恵器について」『Mie history vol.7』三重歴史文化研究会　1994

13 河北秀実「西谷遺跡（栃ヶ池瓦窯）・逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺採集瓦の同笵関係と想定される供給パターン」『Mie history vol.7』三重歴史文化研究会　1994

14 倉田康夫「伊勢湾西岸地域における条里制の歴史地理学的考察」『条里制と荘園』　東京堂出版　1976

15 下村登良男・奥義次『上寺遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981

16 下村登良男・奥義次『鐘突遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981

17 『射原垣内遺跡発掘調査概報』松阪市教育委員会　1980

18 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1979

19 『新神馬場遺跡発掘調査報告書』三重県立津高等学校地歴部　1972

20 下村登良男『大阪変圧器ＫＫ三重工場埋蔵文化財発掘調査報告』多気町教育委員会　1974

21 吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』多気町教育委員会　1974

22 下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会　1986

23 川村輝夫他『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』多気町教育委員会　1983

24 三ッ木貞夫・谷本鋭次「多気郡多気町カウジデン遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1980

25 増田安生『ミゾコ遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1985

26 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　－第１分冊１－』三重県教育委員会　1989　・・・・上ノ広遺跡・花ノ木遺跡・浅間山北遺跡・釈尊寺遺跡・下村Ａ遺跡　他

27 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　－第１分冊２－』三重県教育委員会　1989　・・・・牧瓦窯跡群・鍬系中世墓群

28 『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　－第１分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1992　・・・・佐奈水銀鉱山跡・牛バサマＡ遺跡・牛バサマＢ遺跡

29 『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　－第２分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1992　・・・・泉貢窯跡・山神城跡

30 三ッ木貞夫・森田尚宏他『出張遺跡調査報告書』大台町出張遺跡調査会　1979

31 「多気ニュータウン埋蔵文化財ニュース」多気町教育委員会　1991　［各戸配布資料］

32 「多気町　遺跡ニュース」多気町教育委員会　1992　［現地説明会資料］

・その他、「三重県埋蔵文化財年報」三重県教育委員会（昭和63年度まで）及び「三重県埋蔵文化財センター年報」三重県埋蔵文化財センター（平成元年度以降）、関係各市町村の『遺跡台帳』を参考にした。

III. 明気窯跡群

1. はじめに

明気窯跡群の位置と立地

明気窯跡群は、櫛田川の中流域において発達していた河岸段丘が徐々に衰退し、沖積平野へと移行する付近の南側丘陵に位置している。浅間丘陵（北部）と称されるこの広大な丘陵は、櫛田川とその支流の佐奈川に挟まれた標高40～50mの中位段丘面で、中央構造線に対し直行する幾筋もの谷底平野と、その開析により生じた尾根筋で構成されている。

浅間丘陵の地質は、主として領家花崗岩類・片麻岩類の分布域に属し、特に明気窯跡群付近は、花崗閃緑岩風化土が基盤となっている。

以上の地理的条件下において、窯跡群は多気町役場から見て北東方向に派生する尾根の東側斜面に立地している。窯跡群の面する谷は、多気中学校付近に開口する、比較的規模の小さな谷底平野の最深部にあたる。

行政区画上は多気郡多気町相可字明気に属している。

窯跡群の分布

伊勢湾西岸域における須恵器の窯跡数は、未調査のものも含め、総基数は130余基にのぼる。なかでも徳居窯跡群は、鈴鹿市から安芸郡河芸町・津市にまたがる最大の窯跡群であり、38基の存在が知られている。この窯跡群は近接する稲生窯跡群（２基）・岸岡山窯跡群（２基）と共に、伊勢湾西岸域北部の中核を成していたと考えられる。

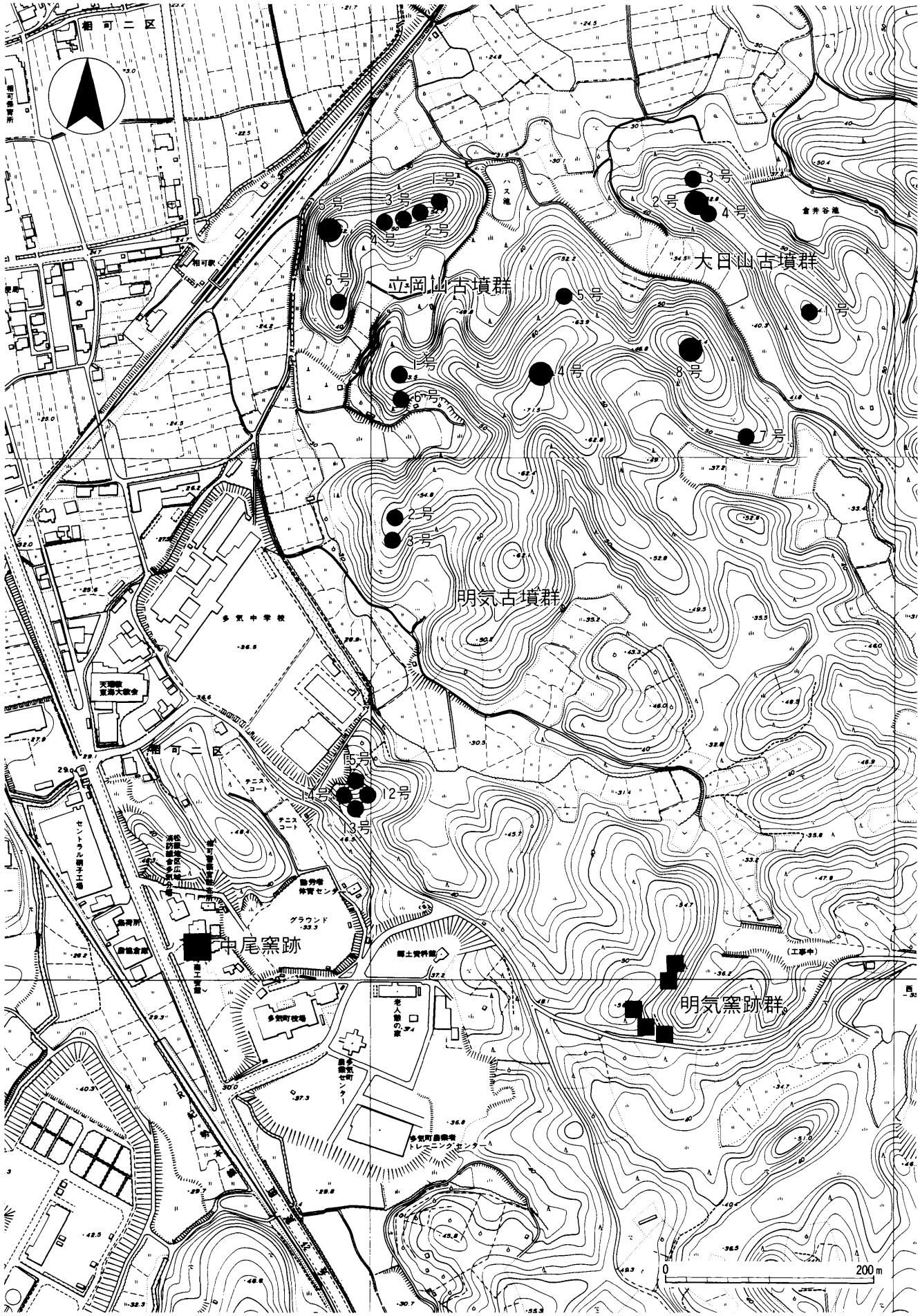
一方、伊勢湾西岸域南部においては、度会郡玉城町の原窯跡群（10基）を東端に、多気郡多気町東部に至る約４㎞四方において、13群35基（総じて外城田（ときだ）窯跡群と呼称）の分布が確認されている。西端の明気窯跡群と近接する中尾窯跡（１基）を含め県下第２の集中地域と言える。

外城田窯跡群の位置する外城田川・佐奈川の付近は、先述のとおり、いわゆる中央構造線が東西に通り、地質的にかなり複雑な様相を呈している。そういった中で窯の分布位置は、その殆どが領家花崗岩・片麻岩類の地質を有する土地と合致している。これは単なる偶然ではなく、意図的に選地が成されていたと考えられ、その要因としては、明気窯跡群の花崗閃緑岩風化土に代表される火成岩が、付近に分布する砂岩・礫岩・堆積層と言った地質よりも高熱に強く、また窖を穿つ際においても掘削し易く、単層である点が考えられる。いずれにせよこの地域における特色の一つと言えよう。

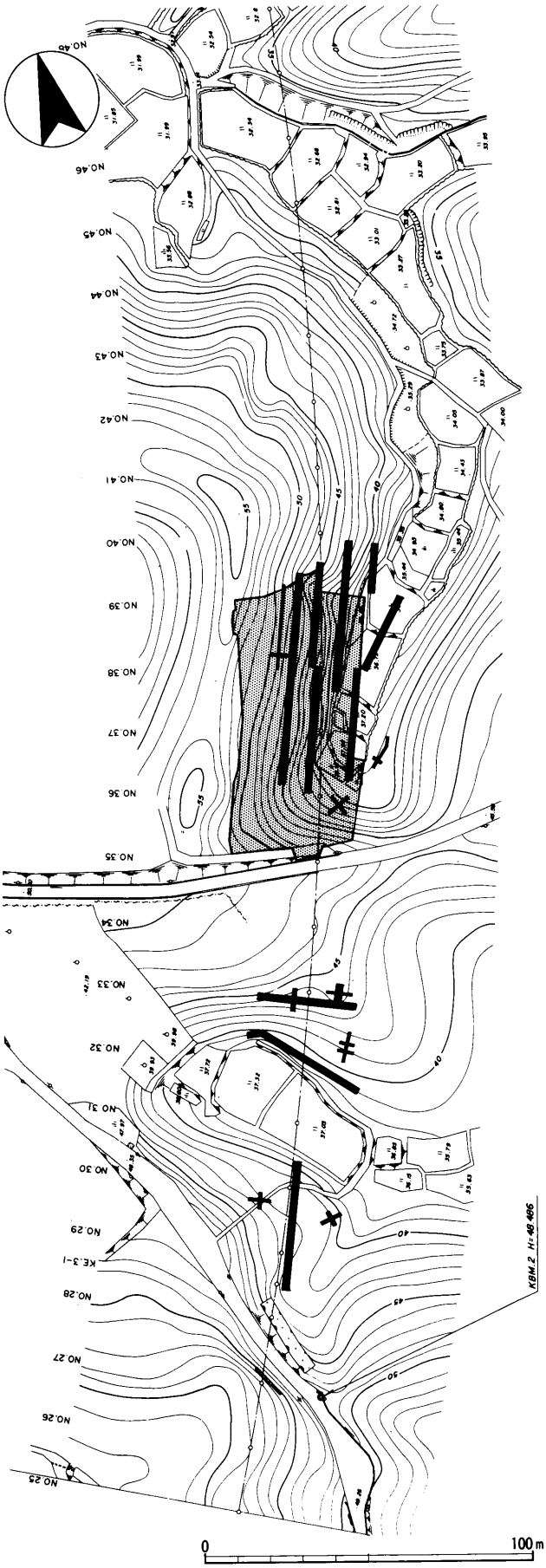
窯跡群の年代

県下における須恵器窯の出現は、５世紀後半代とされており、北勢域の稲生１号窯と中勢域の久居２・４号窯がそれに該当する。その後６世紀代を経て７世紀に至り窯の基数は爆発的に増加する。そして８世紀に入りその数は減少傾向となる。こういった様相は伊勢湾西岸北部・南部の両域において一様に見られるのであるが、９世紀以降のものについては墓明窯跡や七和窯跡群、12世紀代の岡山３・５号窯など北部域に限り存続するようである。

ただ、度会郡玉城町の泉貢窯跡は、その操業が10世紀代にまで下ると考えられ、南勢地域においても、小規模ながら続けられる窯業生産が窺われる。



第3図　遺跡地形図（1:5,000）



第4図　調査区位置図（1:2,000）

また外城田窯跡群を中心とする南部域の須恵器窯の出現は、従来7世紀初頭の明気窯跡群・中尾窯跡に求められてきた。しかし多気郡多気町森荘の外城田小学校には「北ノ山出土」と注記された焼け歪みのある6世紀後半代の杯身が保管されており、南部における窯の操業開始時期を若干引き上げる必要があるかもしれない。

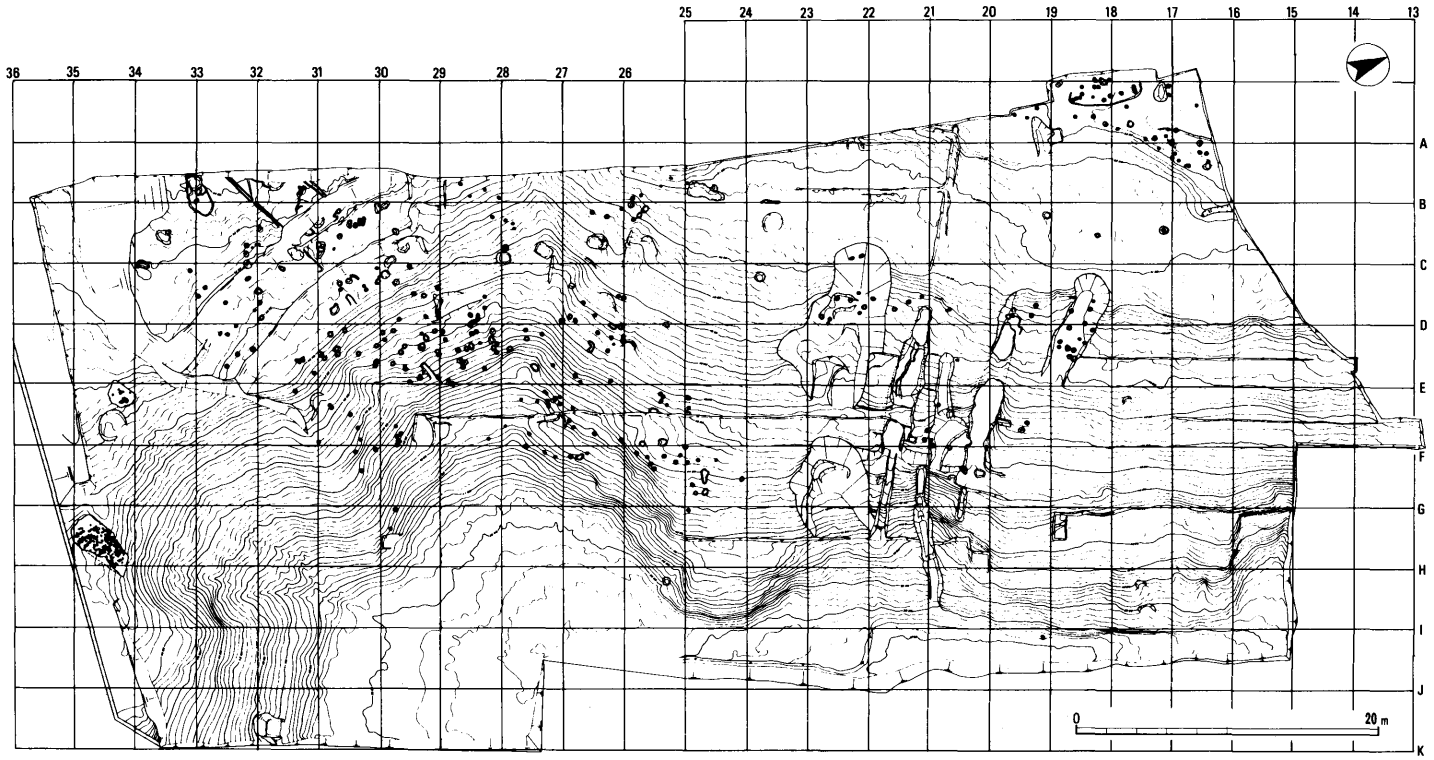
古墳の分布

外城田窯跡群の存在する浅間丘陵・玉城丘陵は、後期古墳の群集についても県下屈指の規模を誇る。（第6図）窯跡の存在は、この地域がこれら群集墳への埋納（供献）土器の生産地として機能していた可能性を窺わせるものであり、実際に明気窯跡群については、河田古墳群（B・C支群）及び明気古墳群への供給がそのヘラ記号により明らかとなっている。

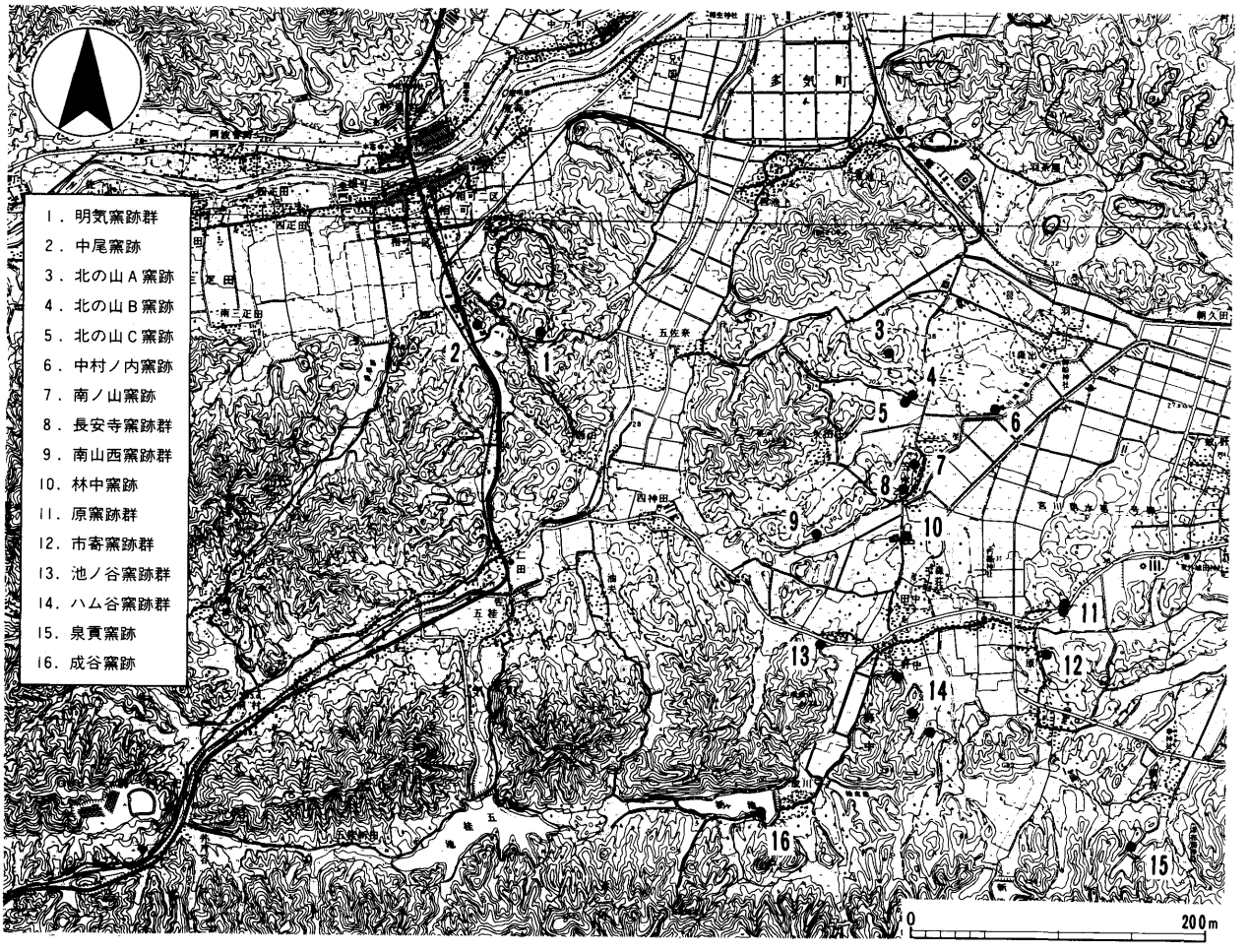
また丘陵上における古墳と窯の分布状況を対比すると、古墳群と窯跡が明瞭にその分布域を分けていることがわかる。玉城丘陵においては約250基存在する古墳の大半が、丘陵北部（JR参宮線以東）に位置しているのに対し、窯跡は丘陵南部に分布し、更に両者の混在は見られない。古墳と窯跡が接近する浅間丘陵についても、両者の分布は谷筋等により基本的に隔絶している。地質的に両者の立地は同じであり分布域の設定は意図的なものと推察し、その要素としては、

①集団における墓域と生産域の設定が行われた
②工人集団の作業圏（生活圏を含む可能性もある）の隔絶

が考えられよう。



第5図　地区割図（1:400）



第6図　窯跡群・古墳群等分布図（1:50,000）

2．遺構の分布概要

須恵器窯

明気窯跡群は、全５基の須恵器窯で構成されており、北行する尾根の東～南東側斜面において、主軸を谷中央に向けながら、幅約140m、標高44.5m～56.1m間に分布している。この斜面は、調査前における尾根頂部と谷水田との標高差が約18mあり、最大斜度は約30度を測る。また窯の構築位置は、斜面下の谷水田と比較して、最も低い１号窯前庭部が約７m、最も高い位置に構築されたと考えられる３号窯の前庭部とが約15mの標高差を持っている。

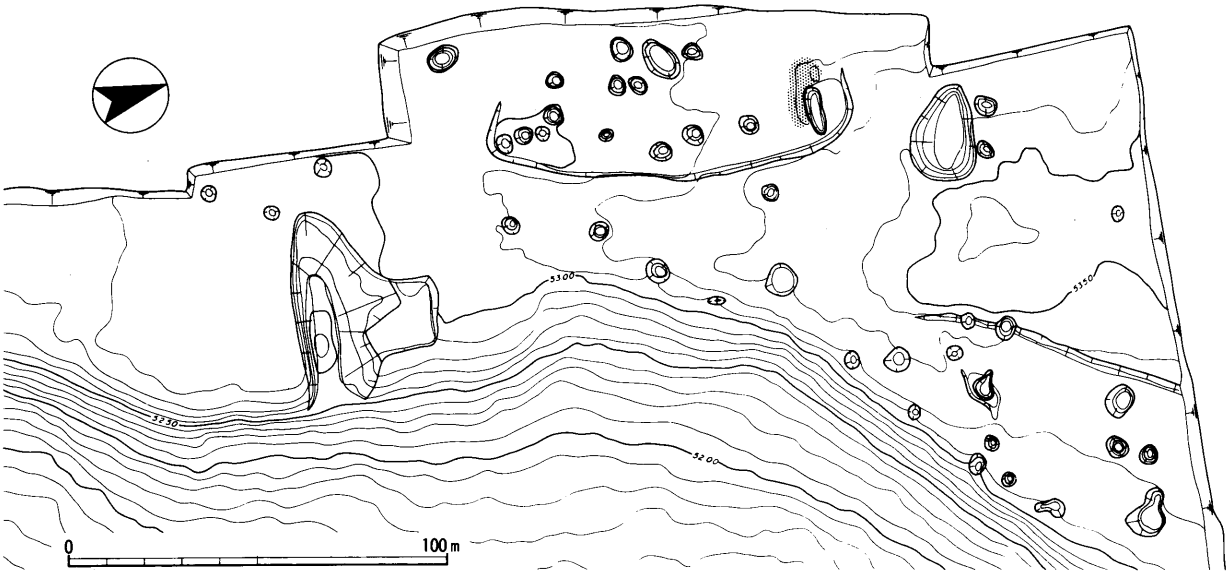
５基の窯は、同一の尾根及び斜面に存在しており後述するが時期的に大差は認められない。ただ斜面内に於ける微地形や窯体構築位置の違い等からグルーピングが可能である。グループの構成は調査区のほぼ中央に開析する浅い谷筋により、北側の１・２窯と南側の３・４・５号窯に大別できる。ただ３号窯については灰原のみの調査で窯体は調査区外に存在していると推測され、その全容は判然としない。しかし、明らかに窯体の位置が４・５号窯とは異なっており、３号窯を独立させるグループ構成も考える必要がある。調査区北側のグループ（１・２号窯）は、非常に接近した相互関係にあり、二基一対の操業を行っていたと考える。この観点にたてば、調査区南側の４・５号窯についても、ほぼ主軸を同方向に向けて、両者の主軸間が８m弱と接近している点から、ここにおいても二基一対の操業体制をしいていた可能性は大きいと言える。

落ち込み

調査区北側の１・２号窯を中心とするグループには、斜面を人為的に大きく切り込んだと考えられる落ち込み状の遺構が存在している。１・２号窯を挟むように位置しており、１号窯の北側に１基、２号窯の南側に２基がそれぞれ配置されている。

尾根上の遺構

また窯の分布する尾根の頂部で、竪穴住居が１棟検出された。出土遺物から窯の操業と密接な関係にある遺構と考えられ、工房あるいはそれに準じる遺構の可能性がある。



第７図　尾根上の遺構（1:100）

3．明気１号窯

遺　　構

(1) 窯体構造

前庭部　標高約44m付近に位置する前庭部は、著しく範囲が狭く、平坦面は焚口から約1.5m程度で急激な斜面へと移行している。面積としては約２㎡で、斜面下の水田面とは、約７mの標高差がある。

前庭部には、大小２個１対のPit（Pit５・６及びPit７・８）が２ヵ所で検出された。これらは窯体との距離に若干差があるものの、窯壁の延長線上に位置する点で共通している。Pit５は直径32cm、深さ27cmで、接続するPit６は直径20cm、深さ16cmを測る。Pit７は焚口から約90cmの距離をもち存在し、幅33cm、深さは31cmである。Pit８は10cmの距離をもってPit７の窯体側に位置し、直径21cm、深さ20cmを有する。これらのPitは壁面がほぼ直立する点で類似し、後述するPit１・２とは明らかに異なる。またPit５・７は、やや窯体方向に斜傾する穴である点が指摘できる。堆積土はいずれも灰原層と同じ黒褐色土層の単層で、須恵器片も出土している。

焚口　窯壁間は最大で1.62m、床面上で1.34mを測り、壁面は約0.52m残存する。壁面の傾斜は極僅かの外反する傾斜を持っているが、ほぼ直立していると言っても過言ではない。

焚口における壁面は、表面が明赤褐色（5YR5/8）に被熱しているものの硬化（酸化還元）には至っていない。

窯体の先端部、窯壁が屈曲し前庭部側に外反する部分に２ヵ所のピットが存在する。焚口より窯体に向かって左側のPit１は、直径40～50cm、深さ18～30cmを測り、歪な楕円形をしている。また壁を若干切り込む様に掘られており、壁面に接する何らかの設置物が立っていた可能性が窺われる。

Pit２は直径60～70cm、深さは40cmでやや不整形な楕円形をしている。Pit１に比べやや大きく、焚口幅のほぼ半分を占めるほどの規模を有する。またPit１が壁に接していたのに対し、Pit２は壁との間に10～15cm程度の間隔が存在する。

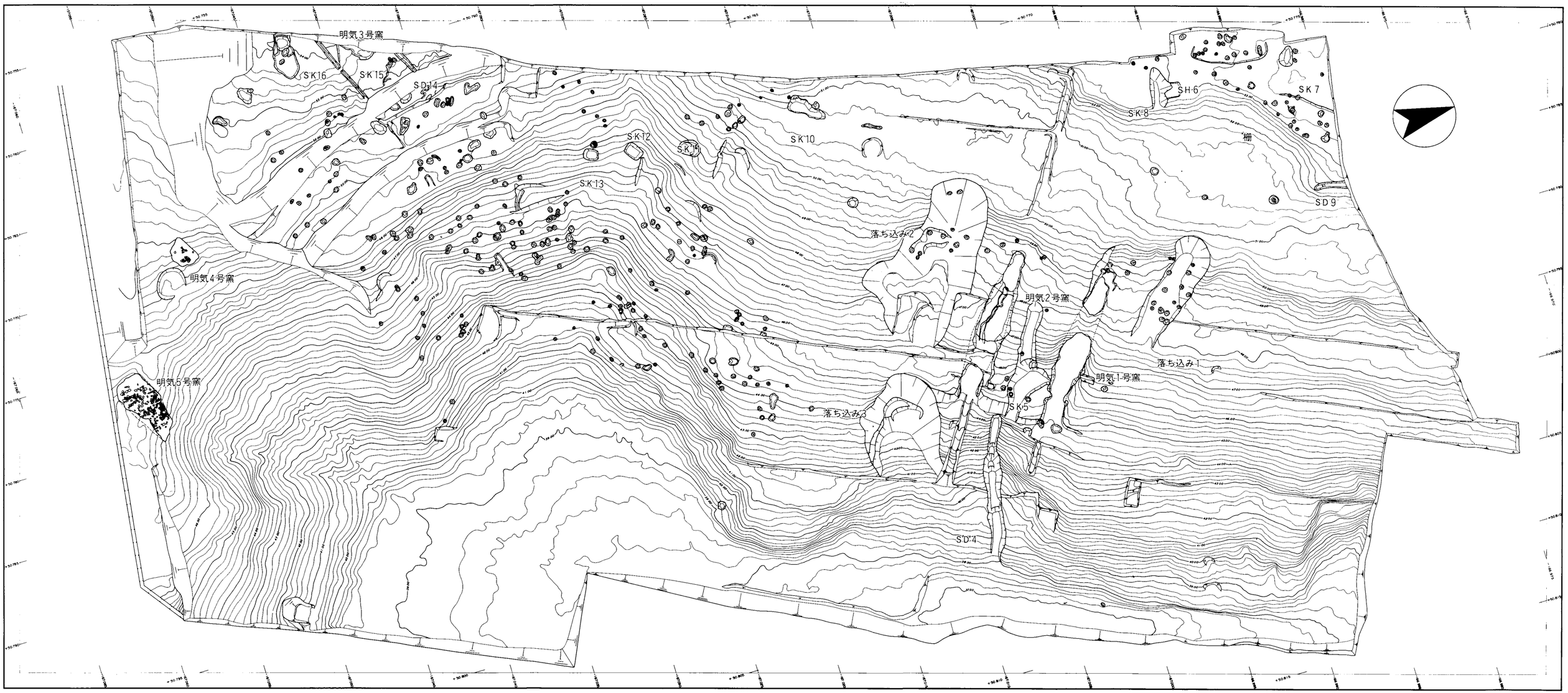
燃焼部　天井部は残存せず、燃焼部内にも天井の崩落焼土は認められなかった。窯壁の残りは良好で、床面から約60cmの立ち上がりを見せている。焚口部と同様に窯壁の角度はほぼ直立であり、被熱は酸化還元に達しているものの層としては薄い。また全面ではないが、部分的に藁入り粘土を施している箇所も認められた。焼土の層序は、窯体の内側より３層確認できるが、床面に近づくに従って衰微し、床面のレベルに至って終息している。

燃焼部と焼成部の境は、焚口よりほぼ一定の幅で構築されてきた窯体の壁間が著しく狭くなる部分にもとめられる。この窯体幅が狭まる位置の手前に左右一対のPitが存在する。焚口方向から見て左側のPit３は壁を半円形に切り込む形で掘られており、底は床面まで達していた。Pitの径は、最も幅の広い壁面部で50cm、壁面ラインから外側に25cm、深さは67cmである。Pitの底は直径約13cmを測り、逆円錐台形を呈している。

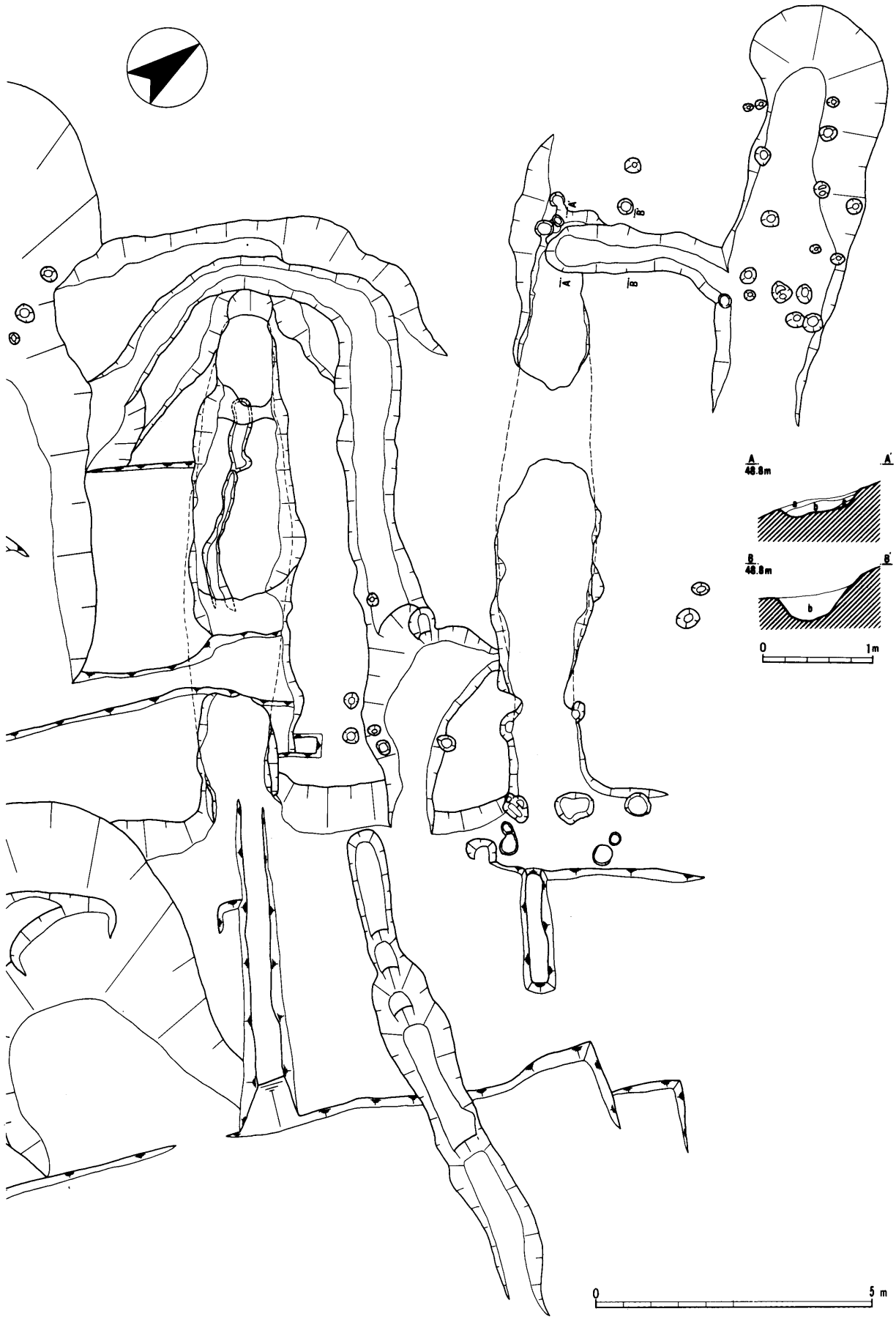
右側の壁に存在するPit４は、直径20～35cm、深さ77cmを測り、床面にまで達する底は20cmの直径を持つ。規模はPit３に比べ全体的に小さく、円柱形を呈するが、壁面への切り込みは深い。

またPit３・４について、両者ともPitの内面が比熱していない点で共通する。また壁を切り込み設置するPitの形態は、焚口部におけるPit１とも類似している。

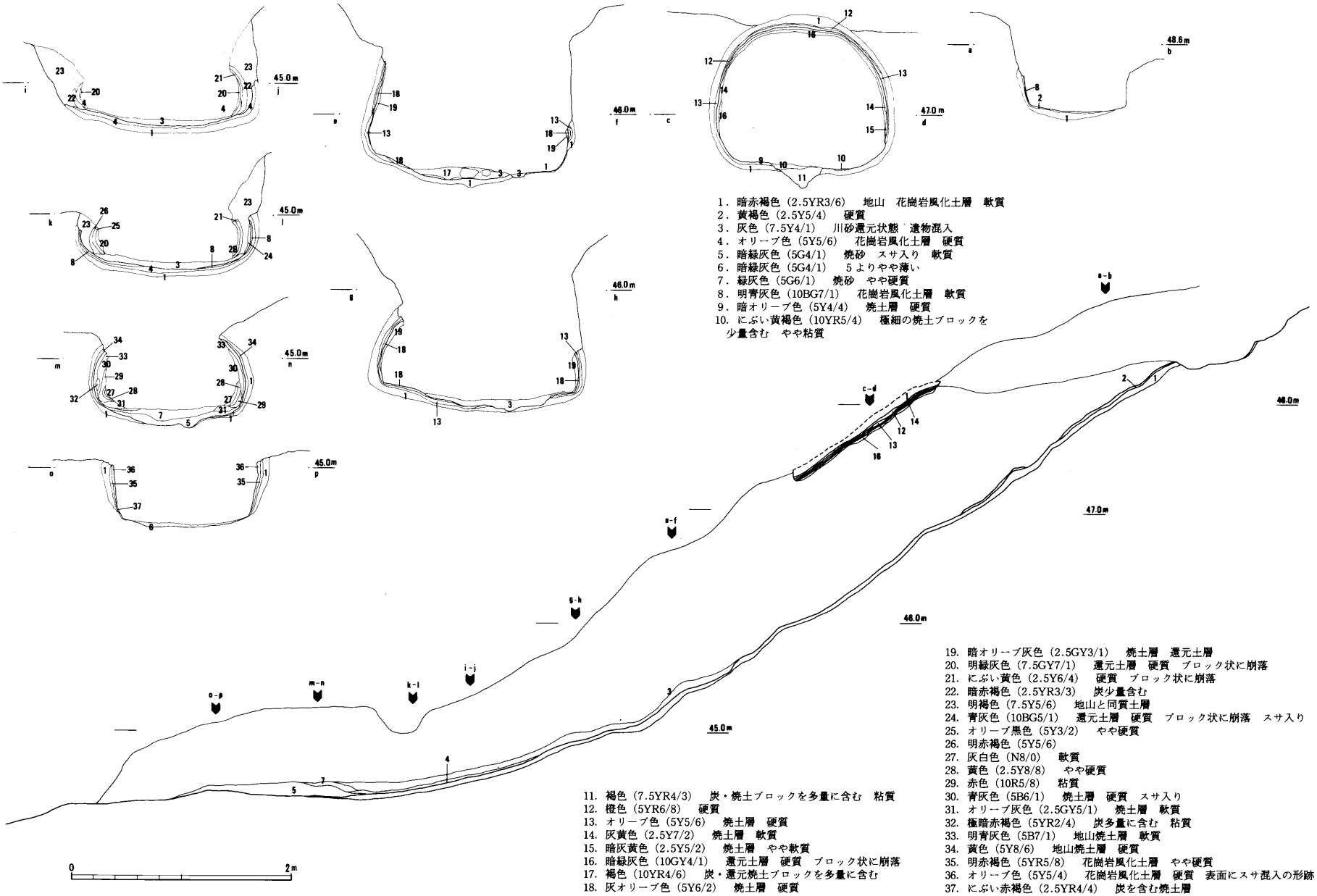
燃焼部内の窯体幅は、残存壁の上面（最大幅）で1.32m、床面においては1.16mである。床面には、Pit３・４付近から炭を含んだ緑灰色・暗緑灰色（5G6/1及び5G4/1）の砂が堆積し、焚口に近づくに従って、灰層（灰褐色 5YR4/2）が顕著になる。砂は酸化還元状態を経ているものの硬化はしていない。灰層も最大で５cmの炭化材や焼土ブロックを多量に含むが、被熱による硬化は認められない。燃焼部の構築は、地山（花崗岩風化土）を掘りくぼめるもので、床面位置は、後述する明気２号窯の燃焼部床面とほ



第8図　調査区平面図（1:200）



第9図　1・2号窯実測図（1:100）



1．暗赤褐色（2.5YR3/6）　地山　花崗岩風化土層　軟質
2．黄褐色（2.5Y5/4）　硬質
3．灰色（7.5Y4/1）　川砂還元状態　遺物混入
4．オリーブ色（5Y5/6）　花崗岩風化土層　硬質
5．暗緑灰色（5G4/1）　焼砂　スサ入り　軟質
6．暗緑灰色（5G4/1）　5よりやや薄い
7．緑灰色（5G6/1）　焼砂　やや硬質
8．明青灰色（10BG7/1）　花崗岩風化土層　軟質
9．暗オリーブ色（5Y4/4）　焼土層　硬質
10．にぶい黄褐色（10YR5/4）　極細の焼土ブロックを少量含む　やや粘質
11．褐色（7.5YR4/3）　炭・焼土ブロックを多量に含む　粘質
12．橙色（5YR6/8）　硬質
13．オリーブ色（5Y5/6）　焼土層　硬質
14．灰黄色（2.5Y7/2）　焼土層　軟質
15．暗灰黄色（2.5Y5/2）　焼土層　やや軟質
16．暗緑灰色（10GY4/1）　還元土層　硬質　ブロック状に崩落
17．褐色（10YR4/6）　炭・還元焼土ブロックを多量に含む
18．灰オリーブ色（5Y6/2）　焼土層　硬質
19．暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）　焼土層　還元土層
20．明緑灰色（7.5GY7/1）　還元土層　硬質　ブロック状に崩落
21．にぶい黄色（2.5Y6/4）　硬質　ブロック状に崩落
22．暗赤褐色（2.5YR3/3）　炭少量含む
23．明褐色（7.5Y5/6）　地山と同質土層
24．青灰色（10BG5/1）　還元土層　硬質　ブロック状に崩落　スサ入り
25．オリーブ黒色（5Y3/2）　やや硬質
26．明赤褐色（5Y5/6）
27．灰白色（N8/0）　軟質
28．黄色（2.5Y8/8）　やや硬質
29．赤色（10R5/8）　粘質
30．青灰色（5B6/1）　焼土層　硬質　スサ入り
31．オリーブ灰色（2.5GY5/1）　焼土層　軟質
32．極暗赤褐色（5YR2/4）　炭多量に含む　粘質
33．明青灰色（5B7/1）　地山焼土層　軟質
34．黄色（5Y8/6）　地山焼土層　硬質
35．明赤褐色（5YR5/8）　花崗岩風化土層　やや硬質
36．オリーブ色（5Y5/4）　花崗岩風化土層　硬質　表面にスサ混入の形跡
37．にぶい赤褐色（2.5YR4/4）　炭を含む焼土層

第10図　1号窯断面図（1:50）

ぼ同じ標高を有している。

第１次焼成部　窯体の截ち割り調査を実施した段階で、検出していた窯壁の外側にもう一面の窯壁が存在することが判った。この窯壁をもって形成されていた焼成部を、その操業順序をに基づき「第１次焼成部」として報告する。

焼成部の範囲は、燃焼部において窯壁の狭まりが認められる部位から始まり、後述する「窯体に直行する溝」までの約7.7m間を比定する。平面形態に見る窯体幅は一律ではなく、燃焼部から急激な広がりを見せる焼成部は、ほぼ中央で最大幅1.82mを測ったのち次第にその幅を狭め、煙道付近においては0.92mとなる。

床面は比較的平坦な範囲（傾斜10～20度）と急傾斜を有する部分（最大傾斜38度）に大別できる。平坦域は、酸化還元を経た砂の設置範囲とほぼ対応するとともに、遺物の分布範囲とも符合している。砂層は焼成部の先端から始まり、床面約4.7㎡において、やや中央部の堆積が厚いものの、均一的な広がりを見せる。砂量は約0.21㎥、テンバコにして約８箱分に相当する。砂層下は地山（花崗岩風化土）で被熱は基本的に酸化還元層（オリーブ 5Y5/6）・暗赤褐色層（2.5YR3/6）の２層におよぶ。ただ酸化還元層の広がりは、焼成部先端から２m弱が顕著であるものの、窯体中央部で次第に見られなくなり、暗赤褐色層の露呈部も存在する。

急傾斜域は、先述の砂の設置範囲より煙道側にあたり、残存する天井部もこの範囲に属する。床面には砂層は存在せず、被熱は酸化還元層（暗オリーブ 5Y4/4）・暗赤色層（10Y3/6）の層序を呈する。ただ天井残存部の床面については、被熱が著しく弱い。酸化還元が成されている床面は、窯壁の立ち上がり付近のみで、窯体中央では僅かに暗赤色（10Y3/6）を呈する被熱層が確認できる程度である。

燃焼部から煙道に構造が変化する付近は、一律の被熱層を有しており、床面も酸化還元状態（黄褐 2.5Y5/4）と化している。床面は地山を掘り込んだ状態をそのまま用いたと考えられるが、この付近においても砂は全く検出していない。

また特異な点としては、床面において、被熱を受けず不均整な半円形を呈する部分が存在することがあげられる。傾斜に対しほぼ水平に刳ぐり取られるこの床面は、直径15～30㎝、深さ５～15㎝を測る。

窯壁は地山（花崗岩風化土）の掘抜きにより形成されており、焼成部全体において酸化還元が認められる。藁入り粘土による補修も焼成部内全域で成されているものの、その厚みは薄く、最大でも５㎝程度である。窯壁の外側に対する熱伝導は、地山の還元化層（暗赤色 10R3/6）までで考えるならば約10㎝であり、床面よりも厚いものの、天井部に対しては凡そ３分の２程度である。

左右両窯壁は、床面から穏やかな弧を描きながら立ち上がり、截ち割り断面で「馬蹄形」を呈している。窯壁は焼成部の燃焼部側において著しく残存量が少ない。これは床面が酸化還元状態にある範囲とほぼ一致している。窯壁の残存する立ち上がりが比較的良好となるのは、焼成部口から２mほど煙道側に入った所からである。最大幅を測る箇所（第３截ち割り）において１m程度残存する窯壁は、床面より弧を描き立ち上がった後、直線的に延びる。この窯壁の傾斜からすると、天井はかなりの比高を持っていたと考えられる。天井残存部における窯体幅（最大）と天井高を比較した場合、その比率は５：４である。

窯壁は、煙道付近に至って床面から若干直立ぎみになる。残存高も20～30㎝と少なく、上部構造は判然としない。ただ第１截ち割りによると、地山（花崗岩風化土）の被熱層のうち、暗赤褐色（2.5YR3/6）を呈する酸化層が、曲線を描く様に内反しながら終息していることが判る。これは煙道付近においても地山をくり抜いた窯体構造であった可能性を示唆するものと言えよう。

窯体中央より煙道側において1.38m（水平距離）残存する天井は、35～38度の傾斜角をもち、床面と並行に存在する。天井は焼成部において大半を失っているものの、残存する窯壁の傾斜から考え、地山くり抜き式の構造を持っていたと思われる。またこの残存する天井には、花崗岩の岩脈が横断しており地下式による構築と断言できる。

第２次焼成部　前項の第１次焼成部内側に構築されたもので、残存する窯壁は高さ25～45㎝を測る。第１次焼成部において、窯壁が２層確認できる範囲

は、燃焼部との境から煙道側に約２ｍの範囲にとどまる。これは床面の酸化還元が著しい範囲と合致する。また床面については、第２次面を設定せず、第１次床面上から窯壁を構築している。これは先述の、床面における酸化還元層が、他の部位に比べ顕著である因子として位置付けられよう。

第１次窯壁と第２次窯壁との間隔は、10～20㎝程度存在し、焼土層のうち、最外層にあたる酸化層と第１次窯壁の酸化還元層との間には、５～８㎝の非被熱（不変色）層が存在する。明褐色（7.5Y5/6）を呈するこの層は、地山と酷似するが、やや軟質である点を留意しておく。またこの層中において遺物は検出されなかった。

煙道及び煙出し　地下式の構築方法をもって掘り抜かれた焼成部は、煙道付近にいたってその床面のレベルを表土近くに上げてくる。この付近の窯構造は判然とせず、煙出しにいたってはその構造を裏付けるものさえ皆無である。

ただ煙道付近には、窯体に対し直交するＳＤ17が存在し、また床面の酸化還元もこの溝までであることから、窯体としての上限をこの溝にもとめ、そこに何らかの煙出しが設けられていたと考えられる。

(2)　灰原

灰原は焼成部内から始まり、斜面下方へと延びるが、その大半は窯体主軸より北側で認められ東西４ｍ×南北６ｍ（水平距離）の広がりを持つ。また分布範囲は標高42mから45.2mにあたり、最上端部は、燃焼部窯壁の北側斜面に位置する。これは燃焼部床面と約70㎝の高低差を有する。

前庭部から主軸方向に延びる灰原層は、標高45.2ｍ付近でその姿を消し、斜面下方においても、ＳＤ４内において若干層位を確認した以外は検出できなかった。調査前の地形において、この付近はやや切り立った崖を呈しており、過去に灰原層も含め崩落した可能性が考えられる。

(3)　ＳＤ18と被熱面

ＳＤ18は全長3.10mで、溝の端は、窯体と落ち込み１に接続している。窯体と接する部分は幅0.83m、深さ0.05～0.20mで、溝の中ほど（Ｂ－Ｂ′）では幅0.8m、深さ0.23～0.44mをそれぞれ測る。溝は窯体主軸と直交（主軸に対し90度北偏）し、窯体より約1.8m付近で、やや谷方向に屈曲しながら落ち込み１に接合している。溝の堆積土は窯体に接する付近で３層（第９図）、Ｂ－Ｂ′間においては１層（第９図）認められた。窯体付近の３層は、上層から赤褐色（2.5YR4/6）・灰褐色（7.5YR5/2）・暗赤褐色（10R3/2）で構成されている。第２層の灰褐色（7.5YR5/2）土層において細粒の炭と若干の須恵器片が検出された他は遺物の出土はなく、第１・２層は酸化状態に被熱していた。溝の中ほどのＢ－Ｂ′間における堆積土は、先述の第２層（灰褐色・7.5YR5/2）のみで、炭と若干の須恵器片が出土した。

溝は、窯体と接する部分のうち煙出しと相対する面が被熱（にぶい赤橙・2.5YR4/6）し、酸化状態を呈する。しかし、これはほぼ窯体幅のみの様相で、溝の底面及び窯体側についてはその限りではない。

煙道付近において、窯体の左右の地形は 0.5mの標高差を持っている。これは地下式の窯体において煙出しを開口させるにあたり、煙出部の上方（西側）から北側の斜面を切り込んだことに起因すると考えられる。煙出付近より斜面上方に約２ｍ延びるこの切り込みは、ＳＤ18を取り巻くように被熱しており、酸化状態を呈する。酸化の程度は、窯体の主軸より南側（窯体に向かって左側）が著しい。またこの付近にはＰitが３ヶ所存在するが、いずれにおいても付近が酸化しているのに対し、内面は被熱していないことから、何らかの構造物が存在した可能性が考えられる。

(4)　落ち込み１

１号窯の北側に位置し、その開口方向を１号窯の窯体主軸とほぼ同じにする落ち込み１は、１・２号窯の斜面上方に広がる平坦面から、標高差2.8mの急斜面を深く切り込み造られている。全長は7.6m、最大幅は2.2mで、遺構内の最低レベルは、１号窯の残存する天井部とほぼ同じである。堆積土の層序は、斜面上方より進める包含層掘削の方法上、急斜面を切り込んだ部分について確認することができなかった。しかし、やや平坦化する標高49.5m付近からは、灰褐色土（7.5YR5/2）の堆積が認められ、細粒の炭・焼土ブロックと共に多量の須恵器が出土した。

また落ち込み１内の底及び法面には、14ヶ所のPitが存在する。直径18～40cm、深さ11～58cmで配置に規則性は認められない。なお堆積土は、溝・落ち込み１の堆積土と同じで、全てではないが、１号窯と同時期の須恵器片も出土している。

(5) ＳＫ５

１号窯焼成部の南側は、斜面が大きく刳られるように落ち込み、従って南側窯壁は著しく残存が少ない。この人為的な地形改変は、後述する２号窯に付属するＳＤ17を切り込む形で存在し、さらにＳＫ５を形成している。ＳＫ５の一端は焼成部において最も窯壁の残存が少ない箇所と接続し、ＳＫ５の底との比高は10cmに満たない。

堆積土は灰褐色（7.5YR4/2）の単層で炭と少量の焼土ブロックを含む。また同層からは多数の須恵器片が出土している。

遺　物

明気１号窯の遺物は、床面において認められたものは極少数で、大半は灰原出土のものである。遺物について床面と灰原を比較した場合、特に形式差等は認められないと判断し、一括して実測図の掲載を行った。個々の遺物出土位置は、出土遺物観察表を参照されたい。

また、杯類と壷・甕類に関しては、結語において分類方法の大観を行った。

杯蓋（１～48）

いわゆる古墳時代タイプの杯蓋である。明気１号窯において出土した杯蓋は、全てこのタイプであり、天井部に調整を一切施さない「ヘラ切り不調整」の特徴をもつ。

杯蓋Ａ１ａ類（１）

口径がやや大きめで、稜が残る。明気１号窯においては、最も古い様相を示す。口縁端部においても内側に向かい斜傾する面を持つ。口辺部における、内側に屈曲する特徴は、明気窯跡群の在地色と考えられる。天井部はヘラ切り不調整である。

杯蓋Ａ１ｂ類（２～８）

口径がやや大きめで、器高が低い、偏平な特徴を持つ。杯Ａ１ａ類で見た稜は姿を消す。口辺部は、内向する屈曲を見せ、口縁端部の処理は丸みを持つ

杯蓋Ａ１ｃ類（９～24）

口径は若干小さくなが、器高が高い特徴をもつ。口辺部の内向する屈曲も顕著で、なかには外面からの強い横撫でを施したものも見られる。

天井部の処理は、ヘラ切り不調整であるが、ヘラ切りの際、その工具のあてかたの違いによって生じたと考えられる突出が残る。内向する口辺部と共に明気１・２号窯の特徴と言える。

杯蓋Ａ１ｄ類（25～39）

基本的に杯蓋Ａ１ｃ類の様相を示すが、天井部は平坦な面を持ち、突出は顕著ではない。口辺部の内向する屈曲は依然大きい。

杯蓋Ａ１ｅ類（40）

天井部が平坦である特徴は持つものの、口径が小さく、口辺部端部の屈曲が見られない。

杯蓋Ａ２ａ類（41・42）

口辺部の屈曲がなく、天井部から口縁部にかけて段を持たない畿内的な特徴を示す杯Ａ２類の内、口径に対し器高の低い、偏平なものを指す。出土量は極少量である。

杯蓋Ａ２ｂ類（43・48）

偏平な杯蓋Ａ２ａ類に対し器高を持ち、より丸みを帯びたものを指す。Ａ１類に対し、法量の縮小化が見られる。

杯身（49～96）

古墳時代タイプの杯身である。杯蓋と同様に明気１号窯において出土した杯身は、全てこのタイプである。底部はヘラ切り後に一切調整を施さない「ヘラ切り不調整」である。杯蓋と同様に、底部の平坦化及び突出といった在地色が目立つ。

杯身体部の均一化しない厚みに対し、「立ち上がり」部は、シャープな作りを見せている。

杯身Ａ１ａ類（49～53）

口径が比較的大きく、偏平な作りをしている。杯蓋Ａ１ａ類とセット関係になる杯身と考えられ、明気窯跡群においては、古い様相を呈する。

杯身Ａ１ｂ類（54～59）

杯身Ａ１ａ類に対し、口径の縮小化が見られ、体

部から底部にかけて、やや丸みを持つ。底部はヘラ切り不調整である。

杯身Ａ１ｃ類（60～69）

底部が平坦化し、比較的器高を持つものを指す。

例外も存在するが、受部から立ち上がりにかけては、シャープなものが多い。

杯身Ａ１ｄ類（70～74）

口径に対し器高が低い、偏平なものである。立ち上がりがやや内向し、受部の形骸化が見られる。

杯身Ａ１ｅ類（75～86）

底部が偏平で、しかも突出する傾向にあるものを指す。これらは杯蓋Ａ１ｃ類と同様に、ヘラ切りの際に工具のあてる角度により生じたものと考える。明気１・２号窯にて顕著に見られる様相である。

杯身Ａ１ｆ類（87～89）

底部は平坦で、やや小型化する傾向にあるものである。

杯身Ａ２ａ類（90・91）

口縁部から底部にかけて厚みが均一で、全体的に丸みを持つ畿内的な様相を見せるものの内、特に口径が大きいものを示す。

杯身Ａ２ｂ類（90・91）

杯身Ａ２ａ類と同様に畿内的な様相を見せるもののうち、小型化したものを指す。

短頸壷蓋（97～102）　天井部にヘラ削りを施し全体的に丁寧な作りを見せる。（97）は「Ｎ」状のヘラ記号を持つ、（100）には「－」のヘラ記号が付される。また天井部だけを残すように、円形に打ち欠かれている。

椀（103～109）　体部に並行する２本の沈線を施す。底部を中心にヘラ削りによる調整がなされる（107）には「＋」状のヘラ記号がある。

杯（110）　本個体一点のみの出土である。底部はロクロ削りのち撫での調整が施されている。丁寧な作りから、椀類と同様に金属器の模倣を基本とするものと考えられる。

高杯（111～117）　高杯は、２段透かしのものが中心だが、既に透かしの形骸化は始まっており、透かしが工具による切り込みだけで表現されているもの（115）や透かしを施さないもの（116）も個体数は少ないが含まれている。（117）は土師質のもので、脚部は存在しない。

甕（118～122）　頸部の基部は細く、口縁部は大きくラッパ状に広がる。頸部は先端で外反し、その後口縁部に向かい内反する傾向がある。頸部先端の口辺部基部にみられる段は、それを有するものと無いものがある。（122）は、底部をヘラ削りし、「Ｎ」字状のヘラ記号を施す。

坩（123・124）　類例を見ない器種である。一見椀のようにも見えるが、口縁端部を僅かに外反させ、底部はヘラ削りを施す。

小型短頸壷（125・126）　口縁部は直立し、体部に２本の沈線を持つものもある。

捏鉢（127・128）　体部に２本の沈線が巡る。底部に細く穿孔（貫通してはいない）した（127）と２本の沈線以外にカキ目を施したものがある。

蓋（130）　用途は不明確であるが、中尾窯跡においても類似する出土例がある。

提瓶・平瓶（131・132）　提瓶は体部にカキ目はなく、退化した把手が僅かに残る。

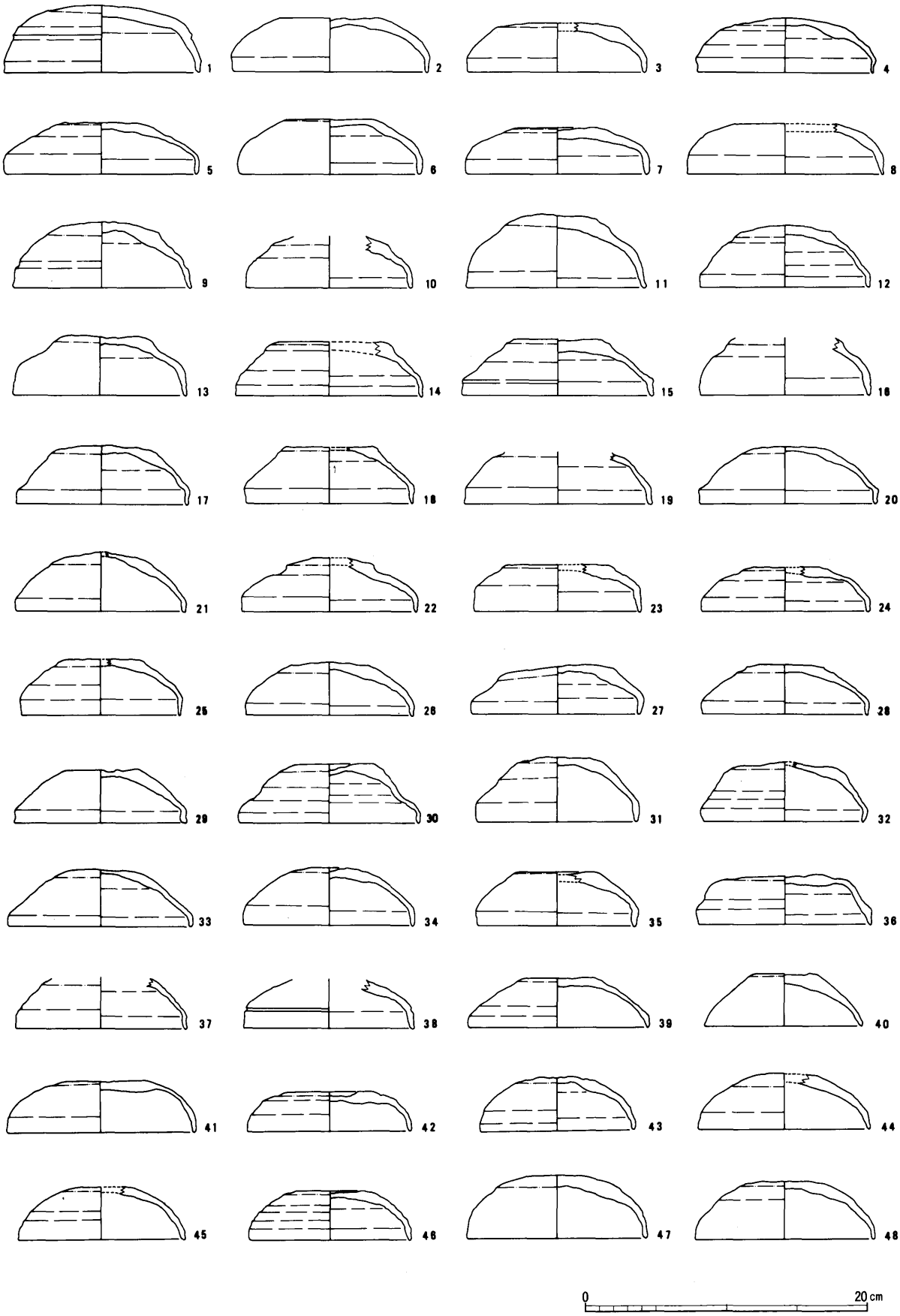
脚部（133～135）　方形の３方透かしを持つもの（135）と、端部を内面にて斜めに処理し、裾部に１～２本の段を設ける（133・134）がある。これらは（140）等の壷の脚となる可能性がある。

甕（136・137）　土師器であるが、灰原から出土している。体部外面を上下２段にわけ縦横両方向の撫でを施す。

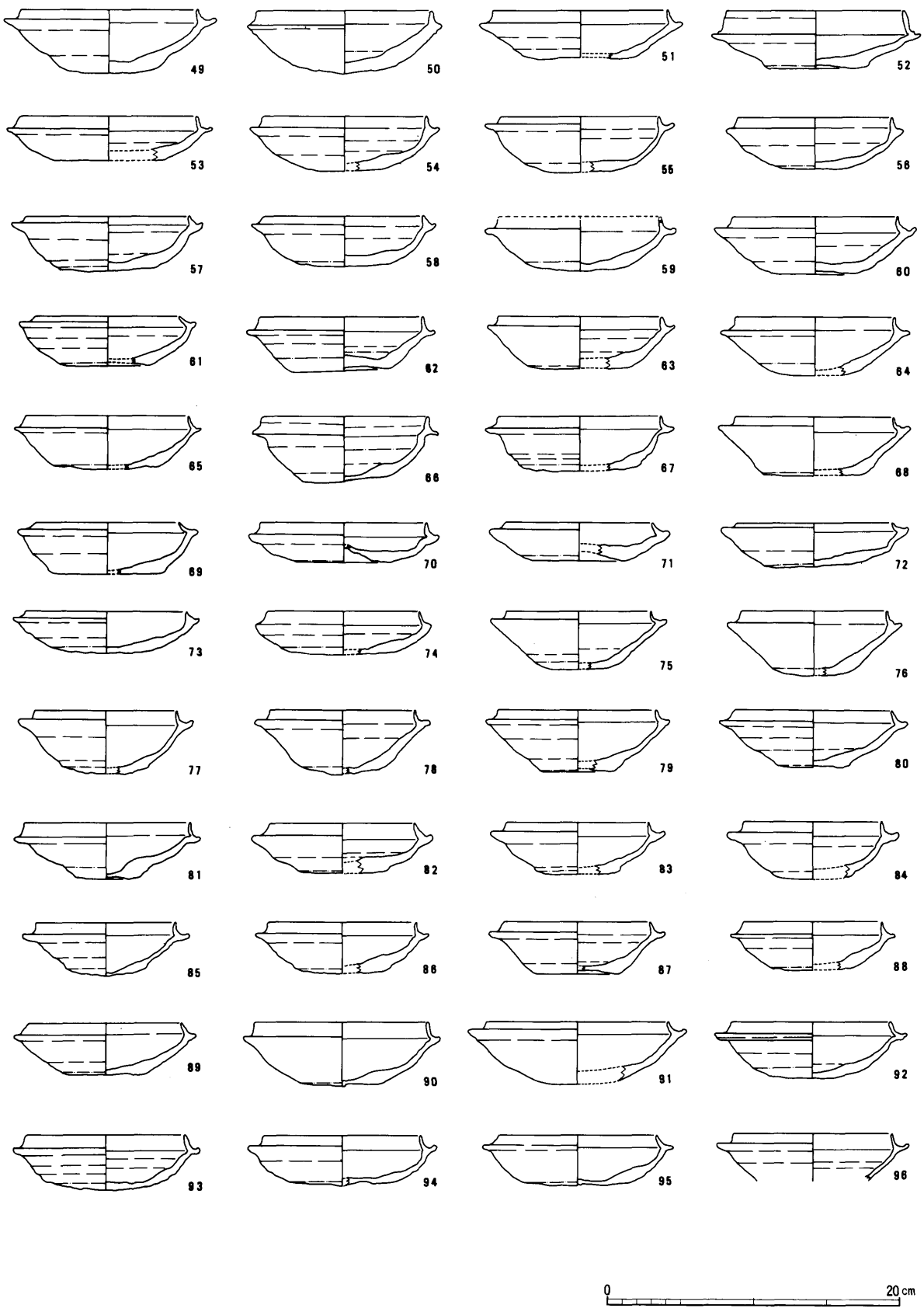
壷（138・140・141）　体部に２本の沈線を巡らせ、その間に工具による縦方向の圧痕を施す。（135）等の脚部が存在する可能性がある。

小型甕（142～151）　口縁部において、断面形が僅かに三角形状の突出を見せる（142～144）がある。また、幅をもち肥厚化した帯状の口縁部を持ち、内面または外面に強い横撫を施す（145～150）も見られる。（151）は、肥厚する口縁端部は見られなくなるが、断面形が長方形を呈する帯状の口縁部を意識した調整の残る（151）もある。

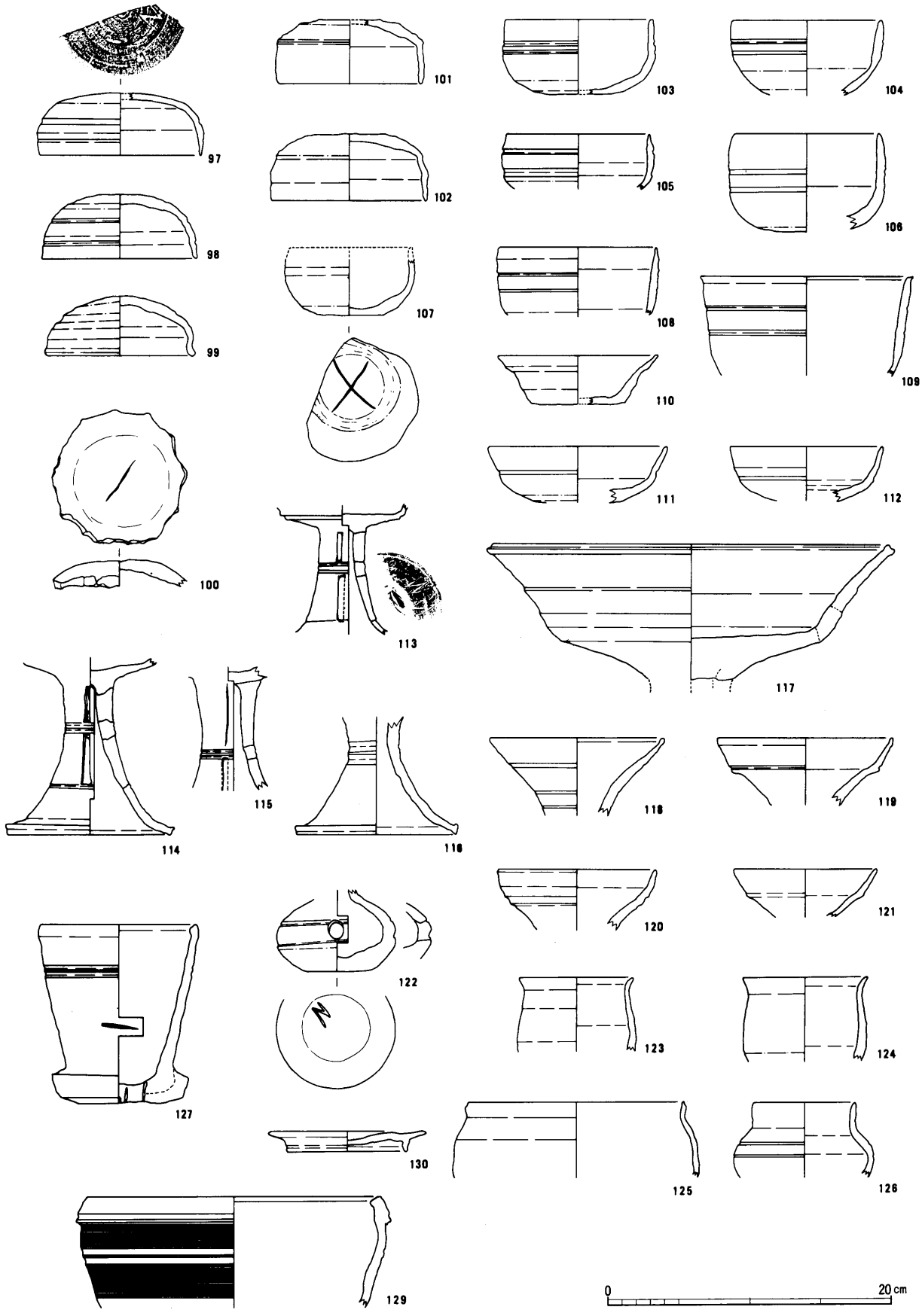
大型甕（152～158）　全般的に装飾過多な傾向が見られる。数本単位で区分された頸部には、波状文をはじめ、櫛状工具による縦位の施文がなされ、両者が重複して付けられるケースもある。



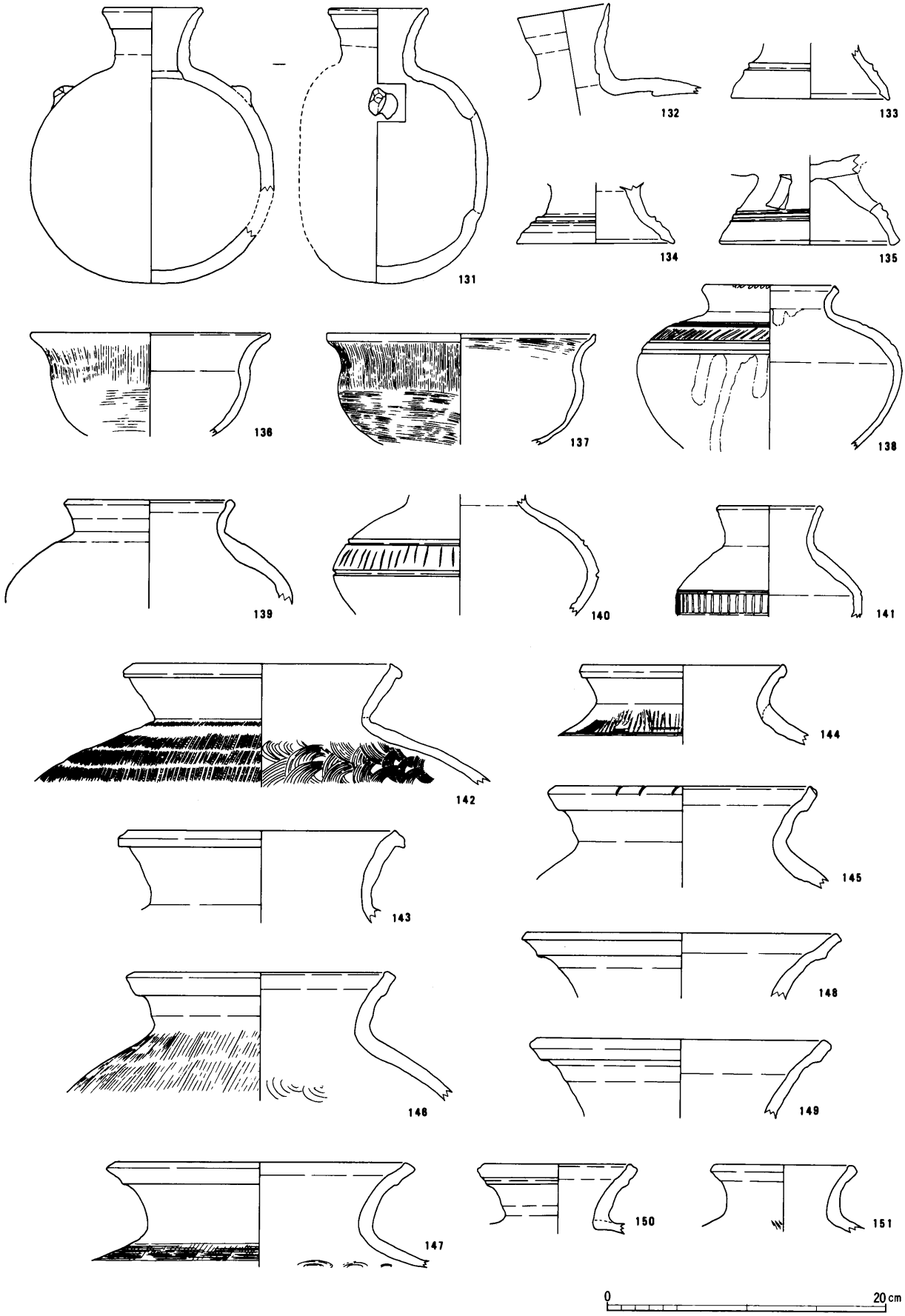
第11図　1号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



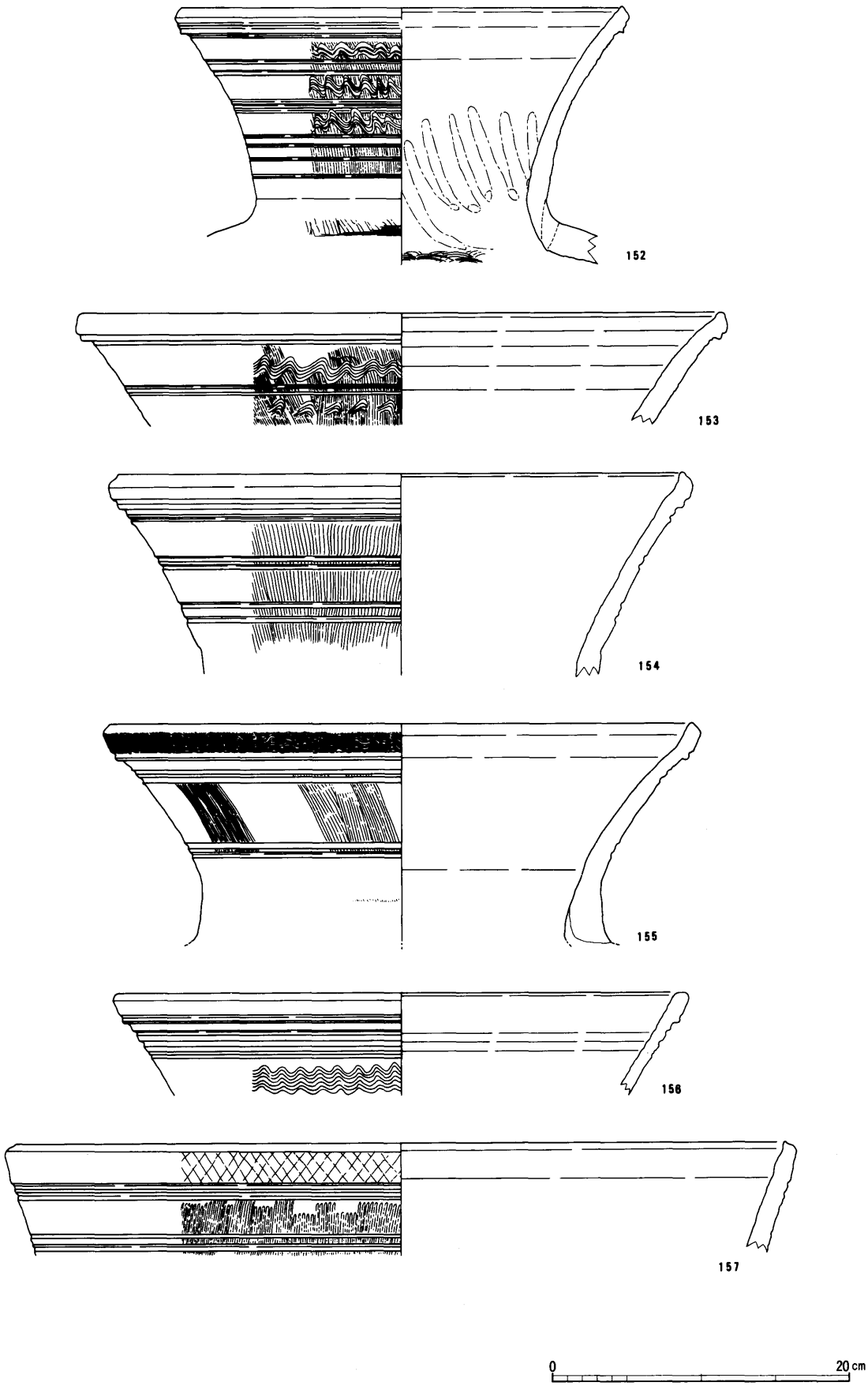
第12図　1号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



第13図　1号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



第14図　1号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



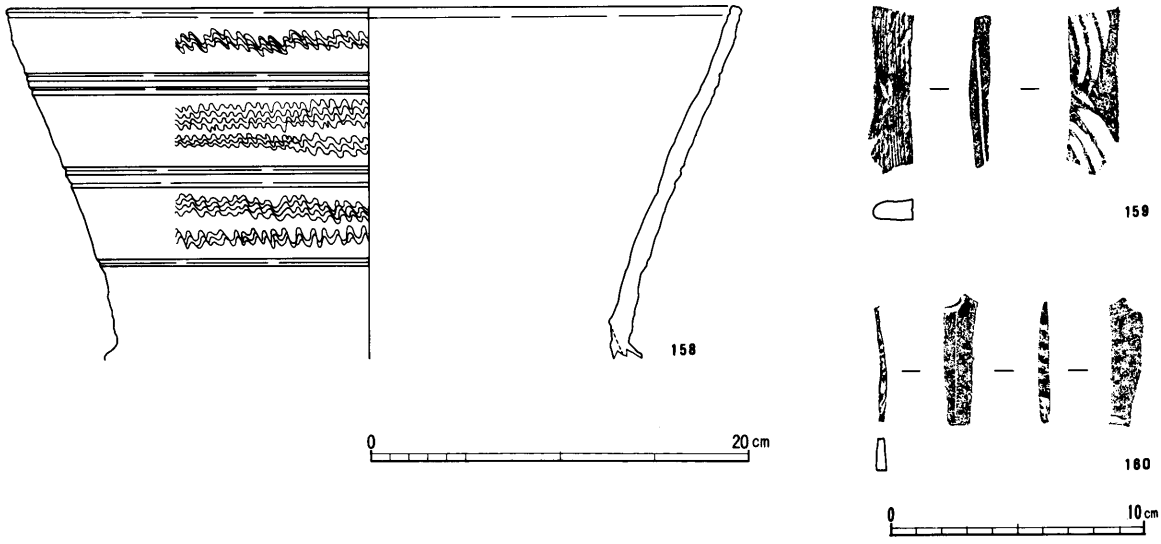
第15図　1号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）

（152・153）は、口縁部の断面形が、僅かに三角形状の形態を残す。また、沈線によって断面三角形状の凸線の表現も残る。

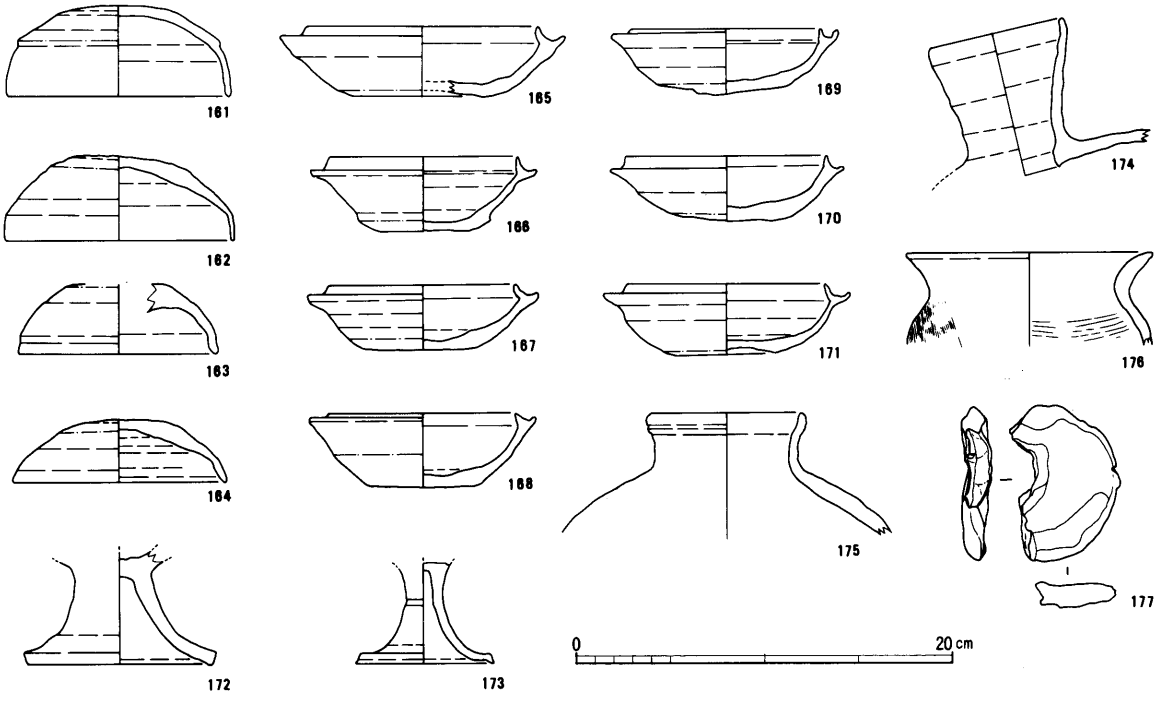
口縁部が肥厚化し、断面形が長方形を呈するもの（154～156）においても、断面三角形状の凸線は沈線によって表現されている。口縁端部内面には、横方向の強い撫でが認められる。

（157・158）については、口縁端部の肥厚する帯部は見られなくなり、強い横撫でによる、口縁端部の内・外反も認められない。但し、依然として装飾過多な傾向は存在し、弱い沈線で表現された口縁端部の帯部に斜格子文を施す（157）の例もある。

その他の遺物（159・160）　甕などにおいて、体部と頸部の接合の際、その直径の違いから生じる不要な部分をヘラで切り落としたものと考える。製品の中に入り須恵器化したと思われるが、甕の体部内面において釉着したものは、一例もなく若干疑問も残る。



第16図　1号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4　但し　159・160は 1:3）



第17図　1号窯　窯体内堆積土中出土遺物実測図（1:4）

4．明気2号窯

遺　　構

(1) 窯体構造

前庭部　標高44m付近に位置し、斜面を掘り込み形成する前庭部は、1号窯と同様に著しく狭い。焚口部から前庭部の斜面側端までは1.3mで、窯体主軸に対する横幅は、最も広い部分で1.4mである。

また前庭部から南東側は急斜面になっており、谷水田との標高差は7mを測る。

焚口　焚口における窯壁は、41～48cm残存し、床面から外側への傾斜を見せる。焚口幅は最大で1.4m、床面上で1.0mを測る。燃焼部から延びる窯壁は、焚口にて左右に大きく屈曲し、前庭部側に外反する。ただし被熱している範囲は、屈曲する手前までで、前庭部側はその範囲に含まれない。

被熱域は、左右の壁を比較した場合、その長さと度合いに若干の差が認められる。南壁は北壁に対し50cmほど長く、その部分は酸化状態を呈し、酸化還元には至っていない。

北壁については、燃焼部から著しい酸化還元を呈する壁が延びるが、焚口付近において急激な終息を見せる。この被熱域の先端には、極わずかであるが壁を切り込む痕跡が残っており、何らかの設置物が存在した可能性がある。また、この痕跡から前庭部にかけては、全く被熱しておらず、窯壁において酸化還元化する範囲が、酸化状態の部分を介さず、この痕跡を境として認められなくなる。

燃焼部　天井は残存しなかったが、燃焼部内には天井のものと考えられる崩落焼土が認められた。

窯壁は床面より0.7～1.0m残存し、南壁に比べ北壁の残存が良好である。構築当初における窯壁は、花崗岩風化土層（地山）のみで形成されており、窯体表面は酸化還元状態に達する。また酸化状態にある被熱層（暗赤色10R3/6）は、酸化還元面から最大で11cm壁中に及んでいる。この窯壁は僅かに孤を描き内反するものの、大局的には、「直立」を念頭においた構築がなされたと考えられる。

藁入り粘土により繰り返された補修は、窯体幅を狭めると同時に、窯壁を内反させる様相をも呈している。この補修は焚口先端部から認められ、徐々に内反の度合いを強くし、焚口から1.2m程で、残存する天井部の窯壁に移行する。厚みは約14cm（残存する部分）で、酸化還元の硬化の違いから、3ないし4回の補修数が認められる。

燃焼部の幅は、最大（補修粘土層は含まず）で1.6m、床面付近で1.3mを測る。

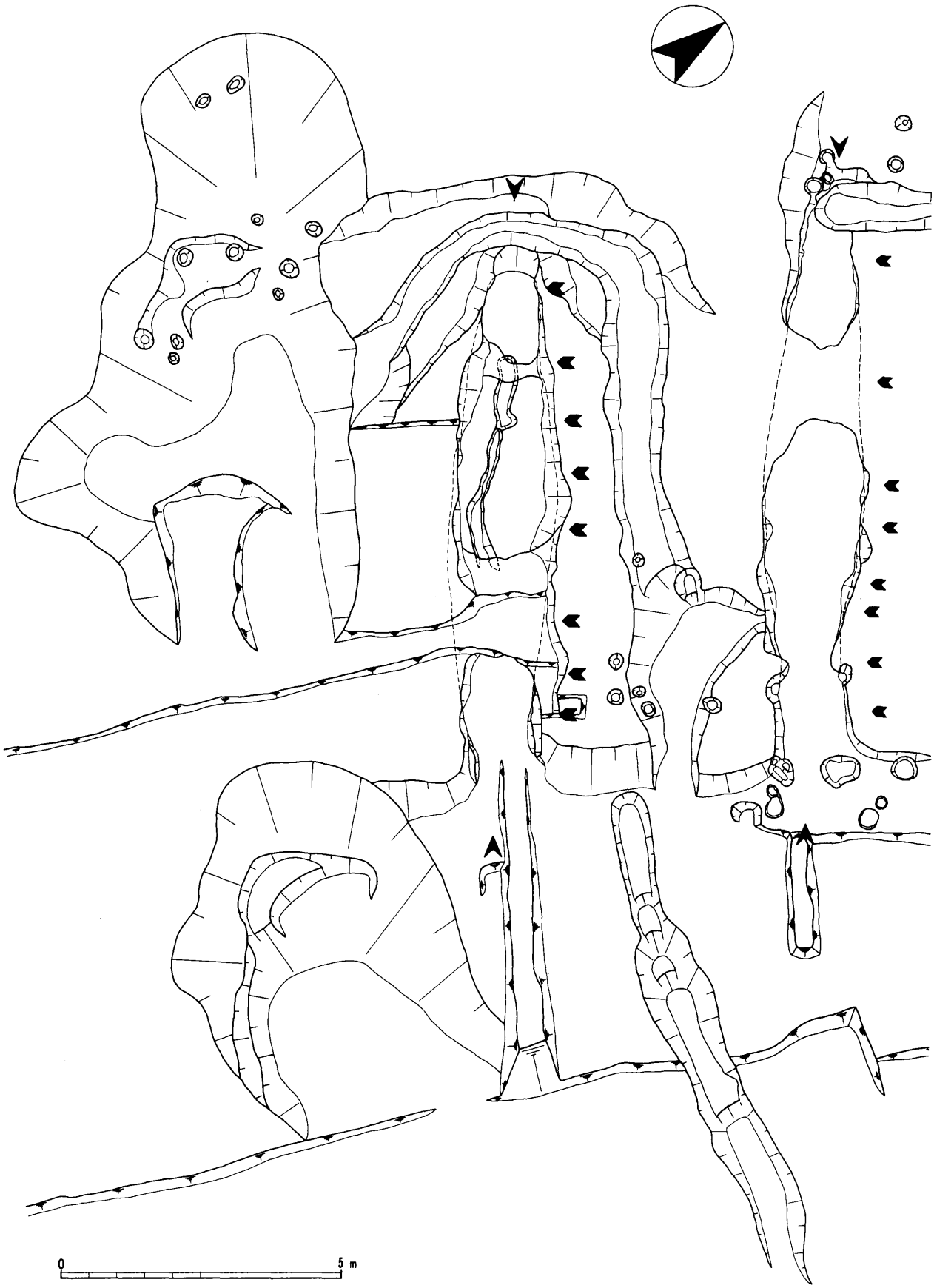
床面は地山により形成されているが、中央部を掘り込んだ浅い溝状の遺構が存在する。これは残存する天井部の燃焼部側端より徐々に始まり、焚口より約1m燃焼部側まで延びる。ここは操業中すでに埋まっていたと考えられ、堆積土により平坦化し、さらに被熱が認められ、層序は3層に大別が可能である。第1層は浅黄色（7.5Y7/3）を呈する砂層で、ほぼ酸化還元に達し、硬化している。第2層も還元状態に硬化する青灰色（10BG5/1）の砂層で、2cm以下の炭・焼土ブロックを多量に含んでいる。第3層は灰の堆積で、黒色（10YR2/1）の砂質土をベースに1cm以下の灰・焼土ブロックが多量に含まれている。

堆積土（第1～3層）の厚さは、最大で21cmを測る。堆積土により形成される床面は、焚口側で若干の盛り上がりが認められるものの、主軸及び主軸直行の両方において、ほぼ平坦な面を形成している。

各層より出土する遺物は、須恵器の小片が中心であるが、時期に大きな差は認められない。

第3層以下は地山（花崗岩風化土層）となるが、被熱する床面は、燃焼部においては認められない。ただ、天井残存部に近づくにつれ、床面の窯壁側で徐々に被熱層がその範囲を増す傾向が認められる。

天井残存部　焼成部のほぼ先端を形成していると考えられる天井部は、水平距離にして1.5m残存する。截ち割りで観察する窯体の断面形は、均整のとれたアールを描く。窯体に対し左斜上から右斜下に向けて花崗岩の岩脈が通過し、地山を穿って構築さ



第18図　2号窯実測図（1:100）

れた窯体構造が認められる。

焼土層は床面と同様に、酸化還元層・酸化層の順で被熱しているが、多量の粘土を用いた補修層が認められた。補修粘土層は、凡そ3層認められるが、酸化還元化は均一で、層位は明瞭なものではない。

補修粘土の張り付けは、左右両窯壁ともに、床面きわから始まり、徐々に肥厚化しながら天井部にいたる、「半月」状を呈し、構築当初の天井高（約1.2m）を0.76mにまで低くしている。

補修粘土と地山（花崗岩風化土）との間には、花崗岩の酸化還元層も認められ、補修以前に焼成（単に地山をくり抜いた状態での焼成）が行われたことが裏付けられる。

焼成部　燃焼部と焼成部を区画するものとして、明瞭なものは存在しない。ただ床面の被熱及び窯体の拡幅・高からおおよその位置は設定可能である。

燃焼部における浅い溝状遺構の底は、先述のとおり被熱していない。残存する地山被熱域の先端は、焚口より2.7mの地点に求めることができ、残存する天井部の燃焼部側先端とほぼ合致する。天井についても、この被熱域の先端付近から急激にその斜度を上げ、水平値に対し最大で34度の傾斜を持つ。同位置での床面傾斜は約10度である。従って、焼成部の先端（起点）は、床面における酸化還元層が出現（残存）し、幅・高ともに最も狭められた部分（天井部の斜面側付近）に求めることができよう。

焼成部において、窯体の幅が最も拡大するのは、焚口先端から4.5～5.5mの地点（第4～5截ち割り断面）で約1.7～1.8mの幅をもつ。天井は既に失われていたが、付近は窯体が最も深く掘り込まれる部位にあたり、遺構検出面から床面までの比高は2mを測る。また、窯体北壁は、南壁に比べ傾斜角が異なる傾向（第5截ち割り断面）が認められる。これは、南壁が弧を描きながら内反するのに対し、北壁の傾斜は直立に近く、不自然な様相を呈する。補修粘土についても、先述の天井残存部から北壁にかけて厚くのび、その広がりは上方についても認められた。左右窯壁の傾斜角の相違は、第5截ち割り付近のみの特徴で、他の箇所では、ほぼ対称的な曲線を描く。

焼成室内における焼成回数は、3回以上認められ最大5回を数える可能性もある。これは藁入り粘土の張り付けによる補修層の被熱差から判断する。

まずは、窯体構築直後の焼成（空焚きも含む）後、窯壁の傾斜角度を変えたとみられる補修が行われる。さらにその補修した窯壁を切断し、塗り込むように施された次層が存在する。これは完全に酸化還元化しているが、3層の分層が可能である。第4截ち割り断面で確認できるように、これらの粘土の張り付けは、単なる部分的な補修ではなく、窯体内堆積の縮小、或いは窯壁傾斜角の修正との見方ができる。

窯壁の傾斜角度の大幅な修正は、焼成部先端の天井残存部から始まるが、焚口から約6m付近にて終焉する。それ以後も藁入り粘土を用いた補修は若干見受けられたが、窯体中央付近のような厚いものではなかった。ほぼ窯体中央で最大幅を測った窯体幅は、その後、煙道に向けて徐々に幅を狭め、煙道手前において幅は0.85mにまで縮小する。焼成部の最末端における窯体の断面形（第1截ち割り）は、他とは異なり、窯壁があまり内反を見せない「逆馬蹄形」を呈する。既に天井部は失われているが、煙道にむけて特異な構造を有していたと考えられる。

また付近は、窯体の遺構検出面から0.8mの深さしか有しておらず、地山くり抜き構造が終わり、煙道部に移行する「半地下式」状態の構造であったことが窺われる。

焼成室の床面は川砂で覆われ、酸化還元化し青灰色（10BG5/1）を呈し、硬化する。砂の設置は、燃焼部から第2截ち割り付近（焚口先端から7.5m）まで認められる。砂は窯体中軸上で最も厚く、15cmを測る部分もある。床面はおよそ20度の傾斜をもつが、全般的に厚さは均一であり、特に斜面下方の砂量が多いというものでもない。これは還元化により砂が硬化し、動きが抑制されたとみることができよう。

焼成部の内、上方の3分の1については砂の設置はみとめられなかった。床面は地山の花崗岩風化土が酸化還元化し、硬化を見せていた。

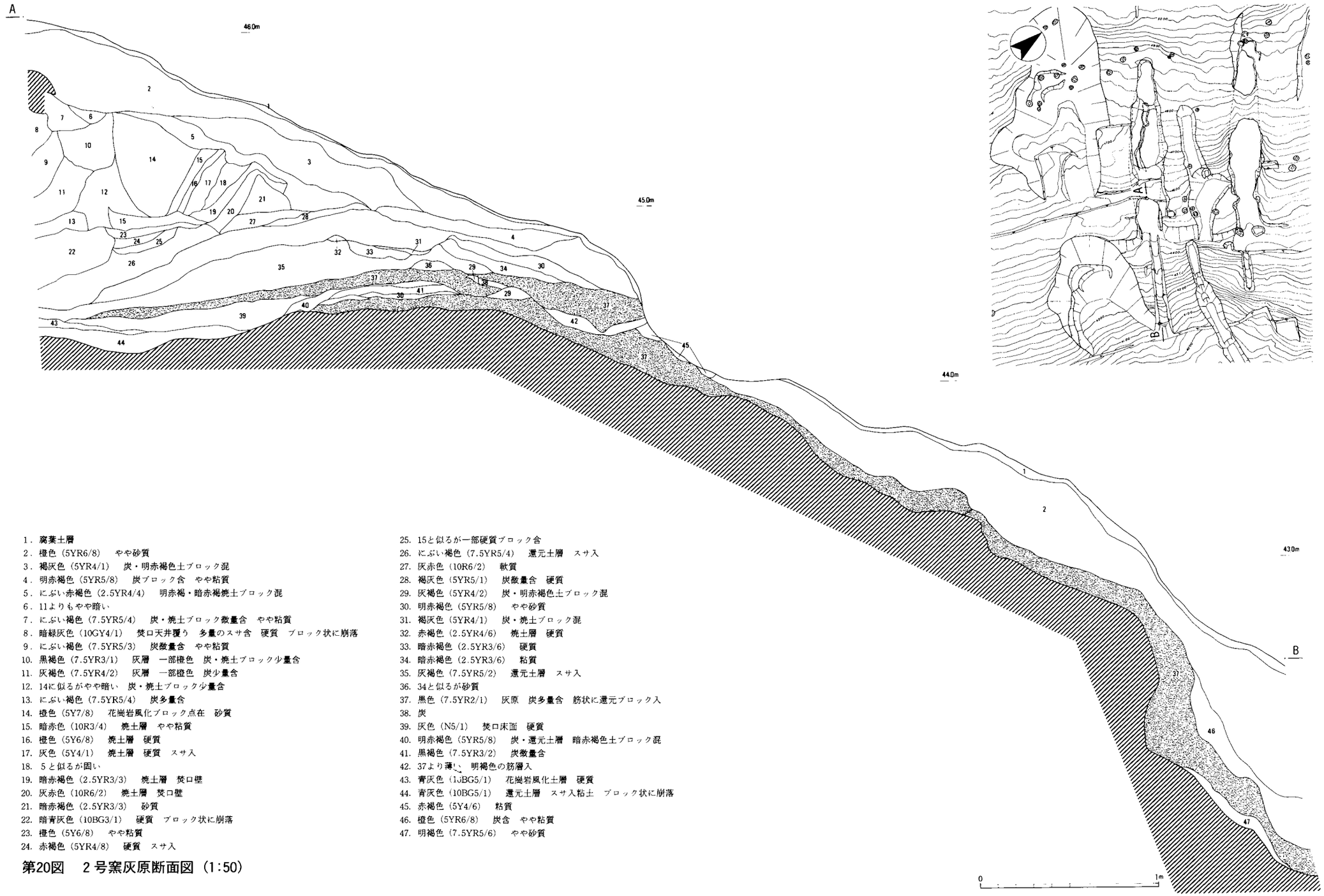
床面には硬化した砂を切るかたちで、「溝」が存在した。これは、窯体上方の砂の先端付近から始まり、残存する天井部下まで延びていた。雨水によるものと考えるのが妥当と思われるが、埋土が崩落し

第19図　2号窯断面図（1：50）

1．暗赤色（10R3/6）　地山　花崗岩風化土層　被熱層　やや硬質
2．オリーブ色（5Y5/4）　花崗岩風化土層　硬質
3．青灰色（10BG5/1）　砂　還元土層　炭・焼土ブロック多量含　やや硬質　遺物混
4．オリーブ灰色（2.5GY5/1）　砂還元土層　遺物混
5．浅黄色（7.5Y7/3）　砂　硬質
6．青灰色（10BG5/1）　還元土層　硬質
7．暗灰色（N3/0）　砂　炭・焼土ブロック多量含　やや硬質
8．黒色（10YR2/1）　灰層　炭・焼土ブロック多量含　軟質
9．明赤褐色（5YR5/6）　炭・焼土ブロック含　やや硬質
10．暗赤褐色（5YR2/4）　やや硬質　一部炭化物入
11．灰白色（10Y8/2）　花崗岩風化土層　焼土
12．暗青灰色（10BG4/1）　花崗岩風化土層の還元土　硬質
13．青灰色（5BG5/1）　花崗岩風化土層の還元土　硬質
14．灰色（10Y7/1）　還元土粘土
15．暗青灰色（10BG3/1）　還元土層　硬質　スサ入　ブロック状に崩落
16．灰白色（5Y7/2）　砂　還元土層　やや硬質　遺物混
17．灰白色（7.5Y7/1）　軟質　他質土の可能性も
18．暗オリーブ色（5Y4/2）　硬質
19．灰白色（N8/0）　花崗岩風化土層　軟質
20．暗灰色（N3/0）　還元土層　硬質　スサ入　指跡多数　ブロック状に崩落
21．暗青灰色（10BG4/1）　還元土層　スサ入　ブロック状に崩落
22．黒色（10YR2/1）　灰層　炭含
23．暗灰色（N3/0）　砂　粒状の炭・焼土ブロック多量含　やや硬質
24．灰色（7.5Y5/1）　還元土層　スサ入　ブロック状に崩落
25．灰オリーブ色（7.5Y4/2）　岩脈が還元前の状態で焼土化　硬質
26．岩脈の焼土層
27．緑灰色（10GY5/1）　地山　花崗岩風化土層　還元土　硬質
28．明緑灰色（7.5GY7/1）　地山　花崗岩風化土層　還元土　やや軟質
29．明赤褐色（5Y5/6）　炭・焼土ブロック含　やや粘質
30．にぶい赤褐色（5YR4/4）　炭・焼土ブロック含
31．青灰色（10BG5/1）　還元土層　スサ入粘土　ブロック状に崩落
32．暗青灰色（5BG4/1）　還元土層　スサ入粘土　ブロック状に崩落　補修回数の跡
33．黄褐色（10YR5/6）　スサ入粘土　やや軟質
34．にぶい赤褐色（5YR5/4）　軟質　粒状に崩落

A．明オリーブ灰色（5GY7/1）　還元土　硬質
B．暗オリーブ色（7.5Y4/3）　還元直前土　硬質
C．暗赤色（10R3/6）　地山　花崗岩風化土層
D．暗赤褐色（10R3/3）　炭・焼土ブロック含　やや砂質
E．橙色（5YR6/6）　やや粘質
F．暗赤褐色（10R3/3）　焼土層
G．極暗赤褐色（10R2/3）　焼土層　やや硬質
H．明赤褐色（5YR5/6）　焼土ブロック化　やや硬質
I．Cと似るが花崗岩風化土ではない
J．Hと似るがやや色薄い　軟質
K．FとHがブロック状に混在
L．にぶい赤褐色（2.5YR4/3）　炭・焼土ブロック含
M．Lよりやや濃い
N．橙色（7.5YR6/6）　混入物殆んどなし　やや粘質
O．にぶい赤褐色（2.5YR4/4）　炭・焼土ブロック含
P．明褐色（7.5YR5/8）　炭・焼土ブロック多量含　やや砂質
Q．橙色（7.5YR6/8）　炭・焼土ブロック多量含　粘質
R．赤褐色（2.5YR4/6）　焼土層　少量の炭と多量の焼土ブロック含
S．にぶい橙色（7.5YR6/3）　砂層　混入物なし

第19図に対応



1．腐葉土層
2．橙色（5YR6/8）　やや砂質
3．褐灰色（5YR4/1）　炭・明赤褐色土ブロック混
4．明赤褐色（5YR5/8）　炭ブロック含　やや粘質
5．にぶい赤褐色（2.5YR4/4）　明赤褐・暗赤褐焼土ブロック混
6．11よりもやや暗い
7．にぶい褐色（7.5YR5/4）　炭・焼土ブロック微量含　やや粘質
8．暗緑灰色（10GY4/1）　焚口天井覆う　多量のスサ含　硬質　ブロック状に崩落
9．にぶい褐色（7.5YR5/3）　炭微量含　やや粘質
10．黒褐色（7.5YR3/1）　灰層　一部橙色　炭・焼土ブロック少量含
11．灰褐色（7.5YR4/2）　灰層　一部橙色　炭少量含
12．14に似るがやや暗い　炭・焼土ブロック少量含
13．にぶい褐色（7.5YR5/4）　炭多量含
14．橙色（5Y7/8）　花崗岩風化ブロック点在　砂質
15．暗赤色（10R3/4）　焼土層　やや粘質
16．橙色（5Y6/8）　焼土層　硬質
17．灰色（5Y4/1）　焼土層　硬質　スサ入
18．5と似るが固い
19．暗赤褐色（2.5YR3/3）　焼土層　焚口壁
20．灰赤色（10R6/2）　焼土層　焚口壁
21．暗赤褐色（2.5YR3/3）　砂質
22．暗青灰色（10BG3/1）　硬質　ブロック状に崩落
23．橙色（5Y6/8）　やや粘質
24．赤褐色（5YR4/8）　硬質　スサ入
25．15と似るが一部硬質ブロック含
26．にぶい褐色（7.5YR5/4）　還元土層　スサ入
27．灰赤色（10R6/2）　軟質
28．褐灰色（5YR5/1）　炭微量含　硬質
29．灰褐色（5YR4/2）　炭・明赤褐色土ブロック混
30．明赤褐色（5YR5/8）　やや砂質
31．褐灰色（5YR4/1）　炭・焼土ブロック混
32．赤褐色（2.5YR4/6）　焼土層　硬質
33．暗赤褐色（2.5YR3/6）　硬質
34．暗赤褐色（2.5YR3/6）　粘質
35．灰褐色（7.5YR5/2）　還元土層　スサ入
36．34と似るが砂質
37．黒色（7.5YR2/1）　灰原　炭多量含　筋状に還元ブロック入
38．炭
39．灰色（N5/1）　焚口床面　硬質
40．明赤褐色（5YR5/8）　炭・還元土層　暗赤褐色土ブロック混
41．黒褐色（7.5YR3/2）　炭微量含
42．37より薄い　明褐色の筋層入
43．青灰色（10BG5/1）　花崗岩風化土層　硬質
44．青灰色（10BG5/1）　還元土層　スサ入粘土　ブロック状に崩落
45．赤褐色（5Y4/6）　粘質
46．橙色（5YR6/8）　炭含　やや粘質
47．明褐色（7.5YR5/6）　やや砂質

第20図　2号窯灰原断面図（1:50）

た酸化還元土（補修の藁入り粘土）であったこと、また溝内に遺物の流入が認められたことなどから、窯の廃絶後の早い時期で天井の崩落以前に形成されたと思われる。

煙道部

焼成部と煙道部を画するものは、何ら存在せず、煙道部付近の構造は不明である。ただ煙道部については、常に構造が変化していたと考えられる。これは、窯体を取り囲む溝の存在と密接な関係があったと考えられ、次項において述べるものとする。

窯体外周溝（ＳＤ17）

明気２号窯は、構築当初において、窯体を取り囲むように「逆Ｕ字形」の溝を配していた。この溝は幅0.5～1.2ｍ、深さ0.15～1.2ｍで、窯体北側が南側に比べ深く掘り込まれている。北側の溝先端は、１・２号窯間のＳＫ５につながっている。ＳＫ５と溝との落差は約１ｍである。

南側の溝は、北側に比べ浅い。先端は落ち込み２につながり、落ち込み２の最深部との比高は1.5ｍを測る。

溝は、窯体の主軸上で煙道と接していた。煙道末端の窯体床面と外周溝底部との比高は約0.3ｍで、溝の窯体側壁面とその相対する壁面が幅約0.7ｍにわたり被熱（酸化焔）していた。

また、溝には徐々に土が堆積し、しかも堆積土の上面が被熱（酸化焔）している。このような状況の繰り返しが４層認められる。溝内の堆積土の増加に伴い、窯体の床面も延び、最終段階においては水平距離にして約0.5ｍの延長をみている。この延長部の床面についても、焼成部上方の床面と同様に、酸化還元化しているが、堆積土が還元化した範囲については、色調に明瞭な違いが認められる。

堆積土は、純粋に堆積したと考えられる混入物のない層と、焼土ブロック及び炭化物を含む層が存在した。

遺物については、北及び南側の溝においては若干出土しているが、窯体主軸上の付近については出土していない。

遺　物

明気２号窯の遺物は、窯体床面・灰原ともに遺物は少量で、明気１号窯と同様、特に形式差は認められなかったため、一括して実測図を掲載し分類を行った。個々の遺物の特徴及び出土位置等は、出土遺物観察表を参照されたい。

杯蓋（178～205）

明気１号窯と２基一対の操業を行っていたと考えられる２号窯は、出土する遺物からも、ほぼ同時期に操業していたと考えられる。但し、明気１号窯において、最も古い様相を呈する杯蓋Ａ１ａが、この２号窯では出土していない。したがって、若干操業時期を１号窯よりも遅らせる見方も可能かも知れない。

杯蓋Ａ１ｂ類（178～180）

口径に対し器高が低く、偏平な特徴をもつ。個体数としては少量で、この傾向は１号窯でも同様である。

杯蓋Ａ１ｃ類（181～189）

器高がやや高くなり、口辺部の内向する屈曲も顕著で、外面からの強い横撫でが施される例もある。天井部の調整は、明気１号窯同様にヘラ切り不調整である。ヘラ切りの際、工具の当て方の違いにより生じたと考えられる底部の突出は、確かに存在するものの、１号窯ほど顕著ではない。

杯蓋Ａ１ｄ類（190～205）

天井部の突出は顕著ではないが、ヘラ切り不調整の平坦な面を持つ。口辺部の屈曲は依然として著しい。明気２号窯においては、最も出土例が多い。

杯身（206～225）

明気１号窯と同じように、出土する杯身は、全て古墳時代タイプのものである。底部にヘラ削りは全く認められず、全てヘラ切り不調整である。多少の例外もあるが、厚さが均一でない体部に比べ、「立ち上がり」部は作りがシャープである。

杯身Ａ１ａ類（206～208）

口径が比較的大きく、偏平な作りである。

杯身Ａ１ｂ類（209～213）

若干ではあるが、口径の縮小化が見られ、体部から底部にかけて、やや丸みを持つ。

杯身Ａ１ｃ類（214）

底部が平坦で、器高もやや高くなる。

杯身Ａ１ｄ類（215）

口径に対し、器高が低い、偏平なものである。明気１号窯同様に、このｄ類の立ち上がりは、短く、しかも内反す傾向が顕著であり、受部についても形骸化が見られる。

杯身Ａ１ｅ類（216～222）

杯身Ａ１ｄ類と同じように偏平な底部を持つが、突出する傾向が加わる。

杯身Ａ１ｆ類（223・224）

底部は平坦であるが、口径が小さいものを指す。

杯身Ａ２ｃ類（225）

口縁端部から底部までの厚みが均一で、全体的にまるみを持つ畿内的な様相をみせるものの内、小型化したものを指す。

高杯（226～233）　全て無蓋の高杯である。杯部は口縁端部から2/3ほどの部分で稜を持ち屈曲する。口径が15cmを上回るもの（226～230）と12cm程度のもの（231・232）がある。後者は、杯部に２本の沈線を施し、体部の屈曲も直立ぎみである。

高杯脚部（234）　脚部は中央付近で稜を持ち、やや外向きの広がりを帯びて終息する。裾端部は内側方向に斜傾し、内面にも弱い稜がある。

短頚壷蓋（235）　口辺部は残存しないが、天井部には回転ヘラ削りがなされ、「Ｎ」字状のヘラ記号が施される。

壷（236・237）　体部に２本の沈線を巡らせ、文様帯を作るが、櫛状工具による縦方向の圧痕が付く（236）と無文の（237）がある。

短頚壷（238）　小型の短頚壷で、頚部は直立し、口縁端部は内・外反せず丸くおさめられている。

小型無頚壷（239）　残存部が少なく、器形は判然としない。

提瓶（240）　体部にカキ目は施されていない。把手は形骸化が進んでいるが、先端が屈曲する点で古い様相を引いていると言える。口辺部外面には沈線が入り、内面には「－」のヘラ記号が付される。

小型甕（241）　口縁端部は、断面が三角形状を呈する形態を残し、外向きに斜傾する面を持つ。また、口縁端部の内面には強い横撫でが施される。

提瓶（242）　体部にはカキ目が施される。把手は形骸化し、両肩にボタン状の粘土の張り付けが存在するだけである。頚部には。接近する２本の沈線が巡る。

器種不明須恵器（243・244）　甕の体部片に見えるが、ヘラによって切断され、面取りを施されている。外面の叩きと内面の青海波文は、切断以前から存在していた。甕の製作途中において、器種の変更を行ったと考えられる。

窯体内堆積土　出土遺物（245～253）

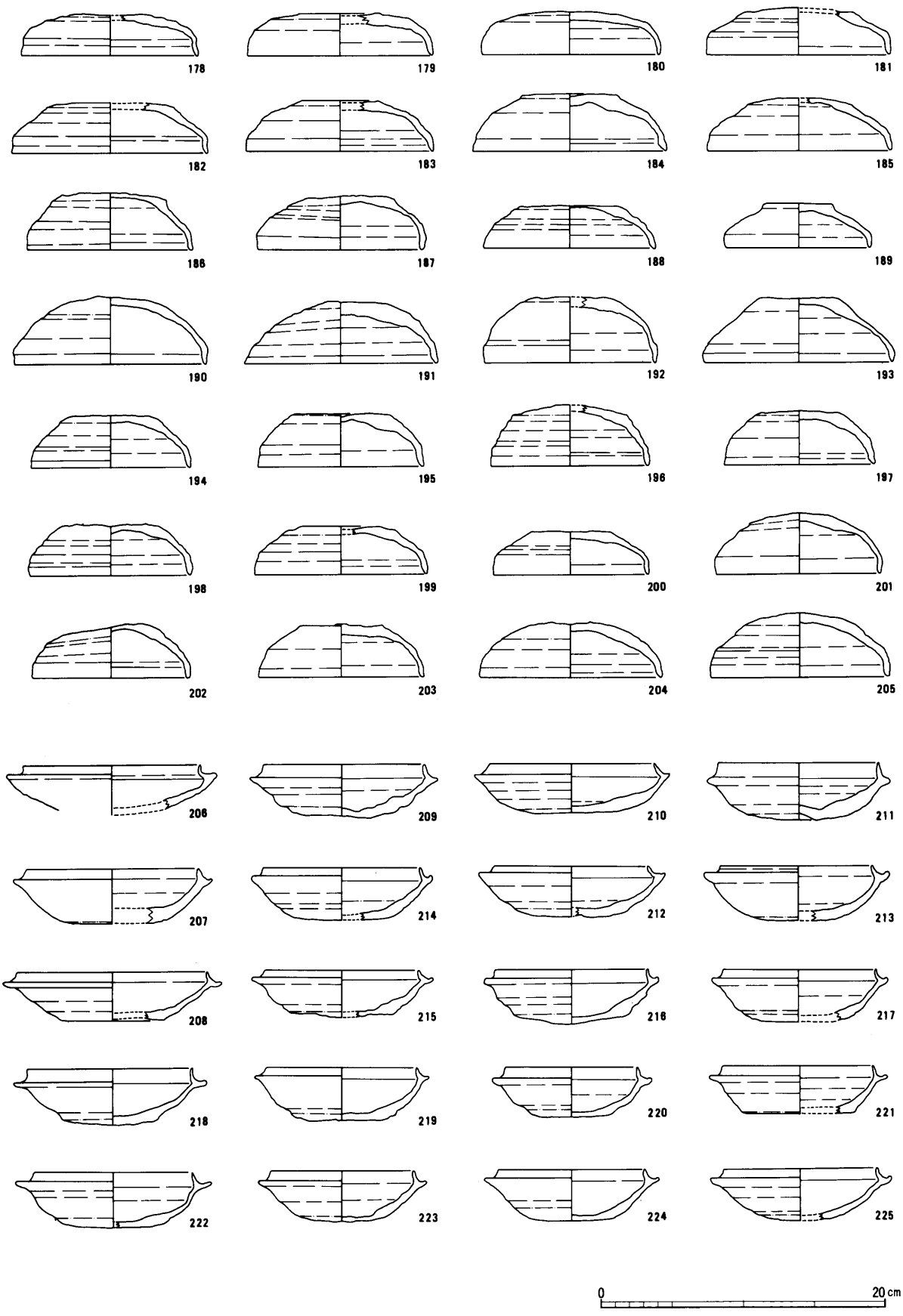
杯身（245～248）は、杯身Ａ１ｅ類の（245・247）をはじめ、杯身Ａ１ｃ類の（246）、また杯身Ａ１ｆ類の（248）がある。

椀（249）は、体部に沈線を１本のみ巡らせるもので、底部は丁寧な回転ヘラ削りによる調整がなされている。内面の調整は、ロクロ撫でによる。

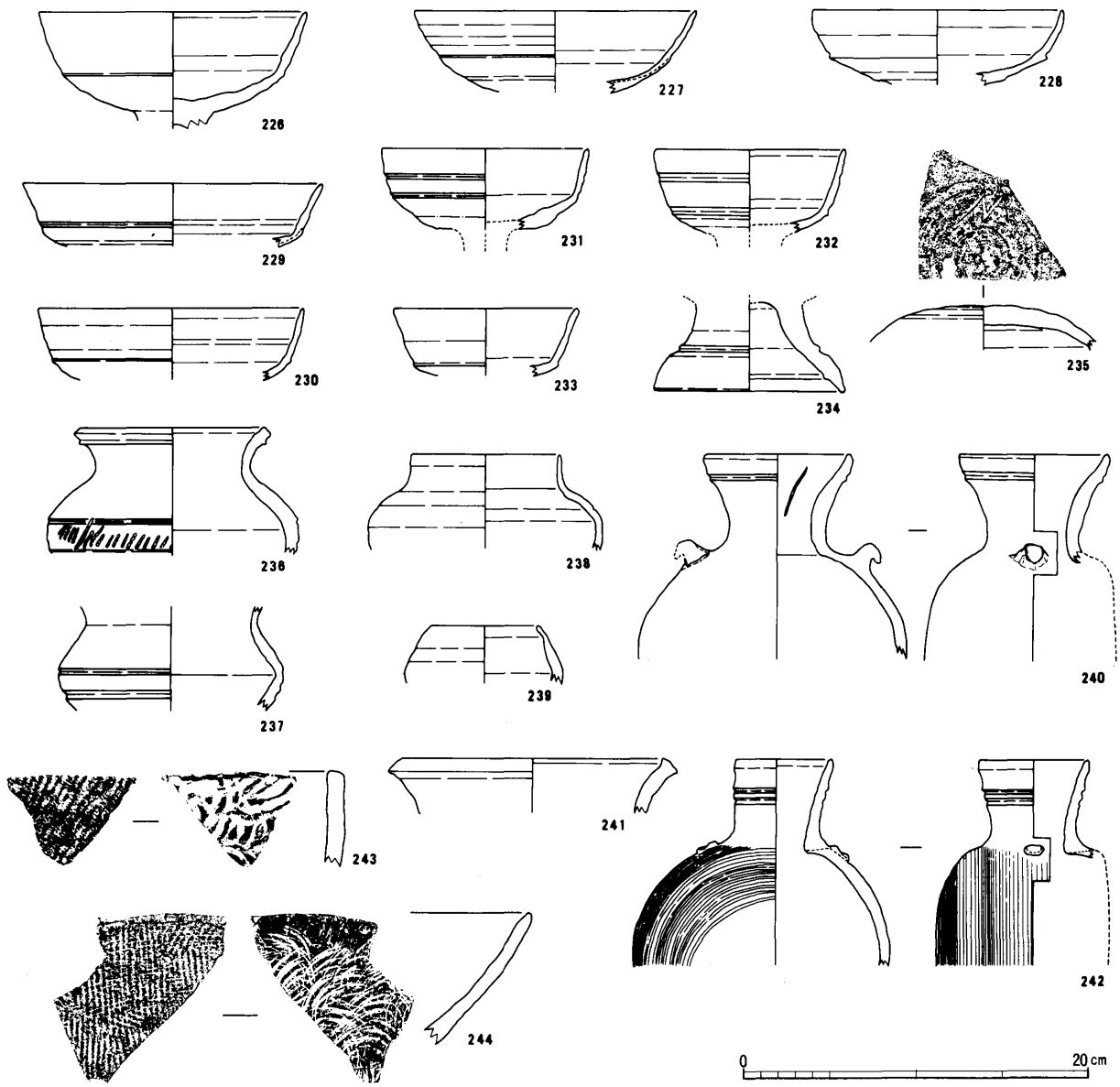
高杯（250）は、杯部の口縁端部から2/3程度の位置に沈線を持ち、そこから、やや直立ぎみに口辺部を立ち上がらせている。口径は13.5cmと、１・２号窯の高杯においては、小型のものに属する

甑（251）　体部は全体的に「下膨れ」の様相を呈し、一種独特の形態をなす。底部は撫でにより調整され、「Ｎ」字状のヘラ記号が付されている。体部には、２本の並行する沈線が巡り、その間に円形の孔を開けている。

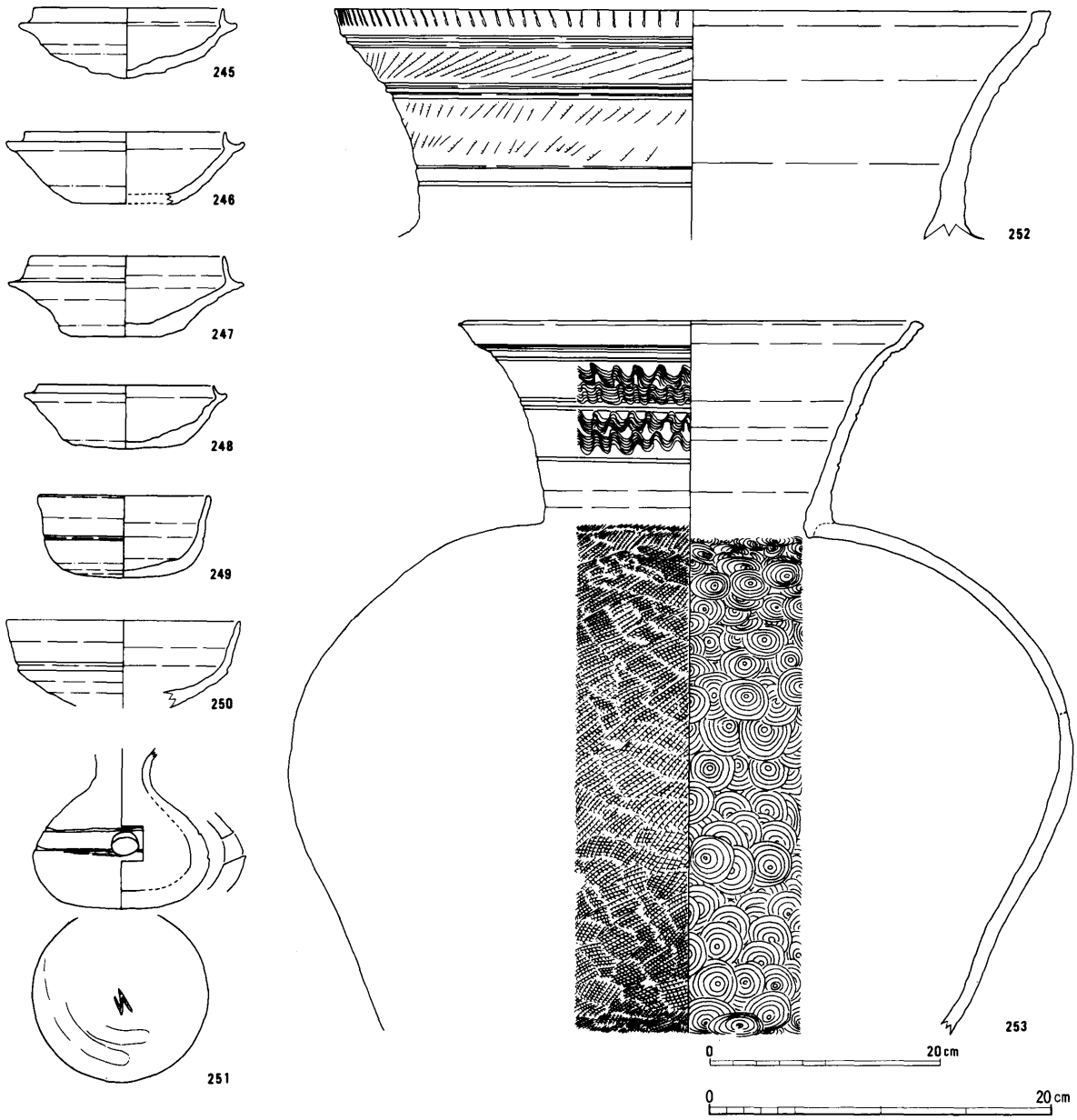
甕（252・256）　口縁端部の肥厚化はあまり顕著ではないが、断面形は長方形をなし、沈線による断面三角形の凸線の名残は依然として表現が残る。口縁部内面には強い横撫でが施されている。また、外面はには、文様帯が２本単位の沈線により区分されている。文様は、櫛状工具による斜方向の圧痕が付された（252）と、２本の波状文が巡る（253）がある。（253）は、２号窯の煙道付近に一括投棄されていたもので、出土位置から、窯体の廃絶後ある程度の年月を経て捨てられたものと考えられる。口径約40cm、体部最大径68cmで、今回の調査において最大の出土遺物である。



第21図　2号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



第22図　2号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



第23図　2号窯　窯体内堆積土中出土遺物実測図（1:4　但し　253は1:6）

5．明気３号窯

遺　　構

明気３号窯は、調査区外に存在し、今回は灰原のみの調査となった。窯体は標高56.1mの尾根頂部付近に立地すると考えられ、現況では桧の植林がなされている。この尾根頂部の西側は、すでに民間開発により、大きく土取りがなされているが、本調査区との間隔は11m程度しかない。民間開発側の断面に窯体及び灰原層等は認められず、窯体はこの11m間に存在しているものと考えられる。

灰　原

付近は植林地として土地利用がなされ、斜面を階段状にカットした土地が造られている。この造成により灰原は２ヵ所で大きく切断され、それは造成断面において確認できた。

３号窯灰原の発端は、調査区内において最も標高を有しており、標高は54mを測る。調査区西壁に見られる灰原断面は、約５mの幅を持ち、そこから斜面を下方に向かい扇状の広がりを見せていた。

灰原の範囲は、発端の５m幅を基準に斜面下方へ約30m、幅約17mの広がりをもつ。

基本層序は、表土下に明褐色土（花崗岩風化土・7.5YR5/8）が約0.5m堆積し、以下灰赤色軟粘質土、暗赤灰色土の灰原層、整地土層、旧表土と続く。

また灰原層は、斜面下方に向かうにしたがい、色調が薄くなっていく。基本的にこれは、くすんだ黄褐色軟粘質土とし、灰原と同等の扱いをした。

整地層

尾根頂部付近の比較的平坦な土地は、明褐色軟粘質土（7.5YR5/6）による整地がなされていた。この層は、炭や焼土ブロック（～４cm）の混在するもので、遺物も含まれていた。調査区西壁から広がりをもち、第２断面においては幅７m、厚さは0.7mある。第３断面においても、その存在は確認でき、９m幅に、厚さ0.2～0.4m認められた。頂部平坦面においては、この層を切り込む形でＳＤ14、ＳＫ15が検出されている。

遺　　物

明気３号窯は灰原のみの調査で、窯体内の遺物は一切検出していない。

また、灰原は２層に分層できたが、時期差が認められるものではなく異なる層位で出土した遺物が接合するケースが多々見られた。

杯身・杯蓋については、いわゆる古墳時代タイプのものと、蓋に返りをもつものとが共伴し、その変遷を考える上で有効な資料となった。明気３号窯における小型化した古墳時代タイプの杯身・杯蓋をＢ類、蓋に返りを持ち、杯身に立ち上がりを持たないものをＣ類として、以下分類を試みたい。

杯蓋Ｂ類（254～277）

杯蓋Ｂ１ａ類（254・255）

口径に対し器高が低く、偏平な形態を持つ。口辺部には強い屈曲が見える。天井部の調整は、ヘラ切り不調整で、内面はロクロ撫でが施されている。

杯蓋Ｂ１ｂ類（256～257）

やや器高が高く、天井部の平坦面が目立つ。また口辺部における著しい屈曲は、強い在地色を示している。天井部外面はヘラ切り不調整で、内面は不定方向の撫でによる調整がなされる。体部及び口縁部の調整はロクロ撫でによる。

杯蓋Ｂ２ａ類（258～267）

全体的に丸みを帯び、畿内的な様相を見せる。ただし、口辺部の屈曲については一部残存する。

杯蓋Ｂ２ｂ類（268～277）

全体的に丸みを帯び、体部の厚みも均一で、畿内的な様相を色濃く示している。口辺部の処理も屈曲することなく、なだらかに傾斜し、丸みをもって終息する。

杯身（278～291）

杯蓋Ｂ類とセット関係になる、小型化した杯身Ｂ

類が中心に出土している。しかし、前段階の杯身A１ｃ類（278・279）の共伴もあり、過渡期にある窯の多様性が窺われる。

杯身Ｂ１ａ類（280～284）

小型化が進み、受部の形骸化も著しい。立ち上がり部は、受部から僅かに出る程度で、摘まみのない「蓋」と言っても過言ではない程の作りである。しかし、底部はヘラ切り不調整で、杯身の範疇は越えられないようである。

杯身Ｂ１ｂ類（285～291）

受部の形骸化は頂点を極め、立ち上がり部は、受部と同じ高さしか立たず、中には、下回るものさえ存在する。

杯蓋Ｃ類（292～343）

杯蓋Ｃ類においては、返りがつば部よりも下方にのびるものをＩ類、返りがつば部よりも下方に出ないものをII類とし、更に、返りはつば部より下方に出るものの、平坦な天井部が80度程屈曲し、返り部に移行するIII類に分類した。また、ａ・ｂ・ｃを用い細部に関する分類をも試みた。

杯蓋Ｃ類は、全て天井部に回転ヘラ削りを施す。つば部付近には、横撫でが見られ、内面もロクロ撫での調整が行われている。

杯蓋ＣＩａ類（292～296）

体部の厚みは比較的均一で、やや丸みを帯びた傾斜をなす。

杯蓋ＣＩｂ類（297～307）

体部は厚く偏平である。つば部は、下方ではなく横方向へその先端を向ける。

杯蓋ＣＩｃ類（308～321）

杯蓋ＣＩｂ類と同様に、体部は厚く偏平であるがつば部は、下方向への傾斜をもって終息する。（308・309）は、摘まみが偏平なボタン状を呈し、他の擬宝珠状のものと異なる。セット関係になる器種に違いがある可能性も捨てきれない。

杯蓋ＣIIａ類（322～331）

杯蓋ＣII類の中で、比較的偏平なものを指す。

杯蓋ＣIIｂ類（332～336）

山笠状の体部を持つ。天井部からの傾斜は、つば部直前にやや角度を変え、つば部は横方向にその先端を向ける。

杯蓋ＣIIｃ類（337・338）

口径はやや小さく、山笠状を呈する。

杯蓋ＣIII類（339～343）

天井部には、回転ヘラ削りによる調整がなされ、屈曲した端部付近は、横方向の強い撫でにより調整されいる。つば部・返りともにシャープな作りを見せる。

杯身Ｃ類（344～359）

杯身ＣＩａ類（344～347）

口径が最も小さく、８cmを下回る。底部はヘラ切り不調整で、体部はロクロ撫で、底部内面は乱撫で・一定方向の撫でが認められる。

杯身ＣＩｂ類（348～354）

調整及び口縁端部の処理については、杯身ＣＩａ類と同様であるが、口径がやや大きく８cmを上回るものである。

杯身ＣＩｃ類（355～357）

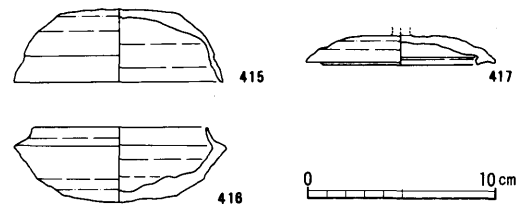
体部の傾斜がやや弱くなり、底部径に対し口径が広がりをみせる。

杯身ＣII類（358～359）

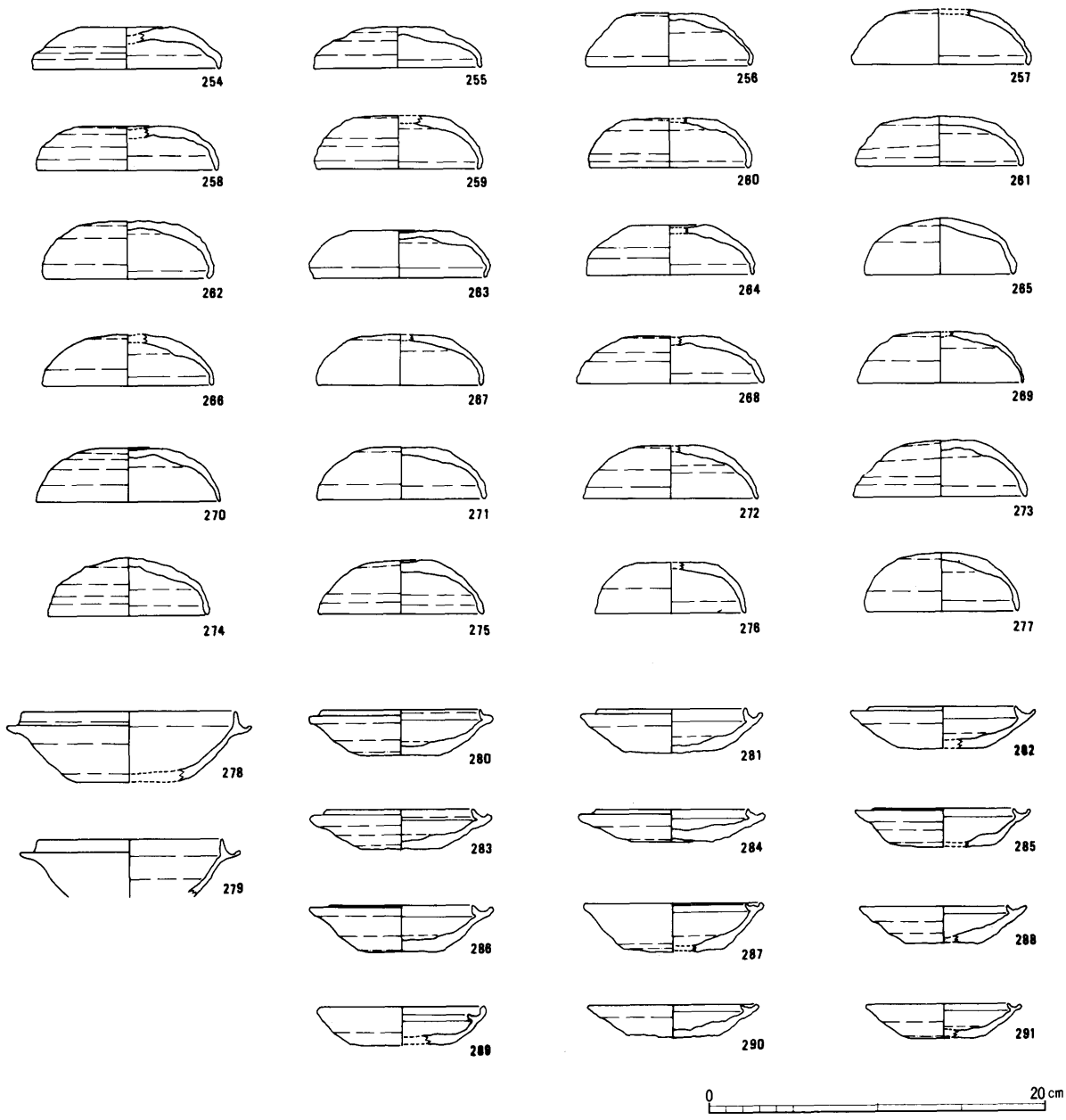
器形はやや偏平で、口縁端部が体部から直立して終息する特徴を持つ。

小型甕（380～390）

口縁部において、断面形が僅かに三角形状を呈する（380）がある。（383・384）において、古相を示す三角形状の断面は、その形を崩し、長方形を呈し始める。（381・382・385・386）は、口縁部の断面形が、長方形に肥厚化し、端部に帯部を形成する。（387）は、長方形の肥厚化した部分が見られなくなるものの、帯部は沈線によって形骸化しながらも残っている。（388・389・390）は、肥厚化した帯



第24図　３号窯整地層出土遺物実測図（1:4）



第25図　3号窯灰原出土遺物実測図（1:4）

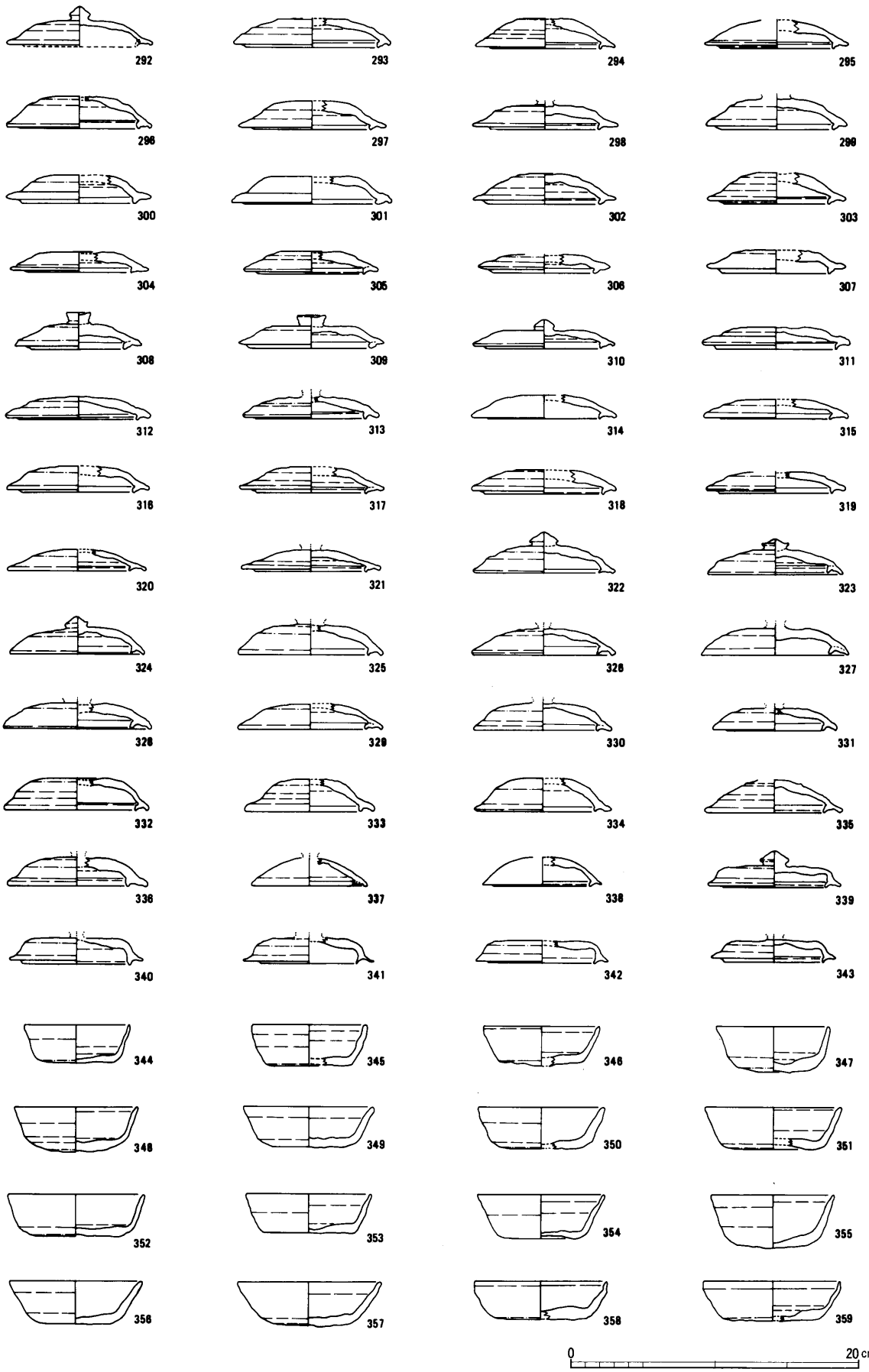
部が見られなくなると共に、頚部が大きく角度をもって屈曲する。

大型甕（391～400）

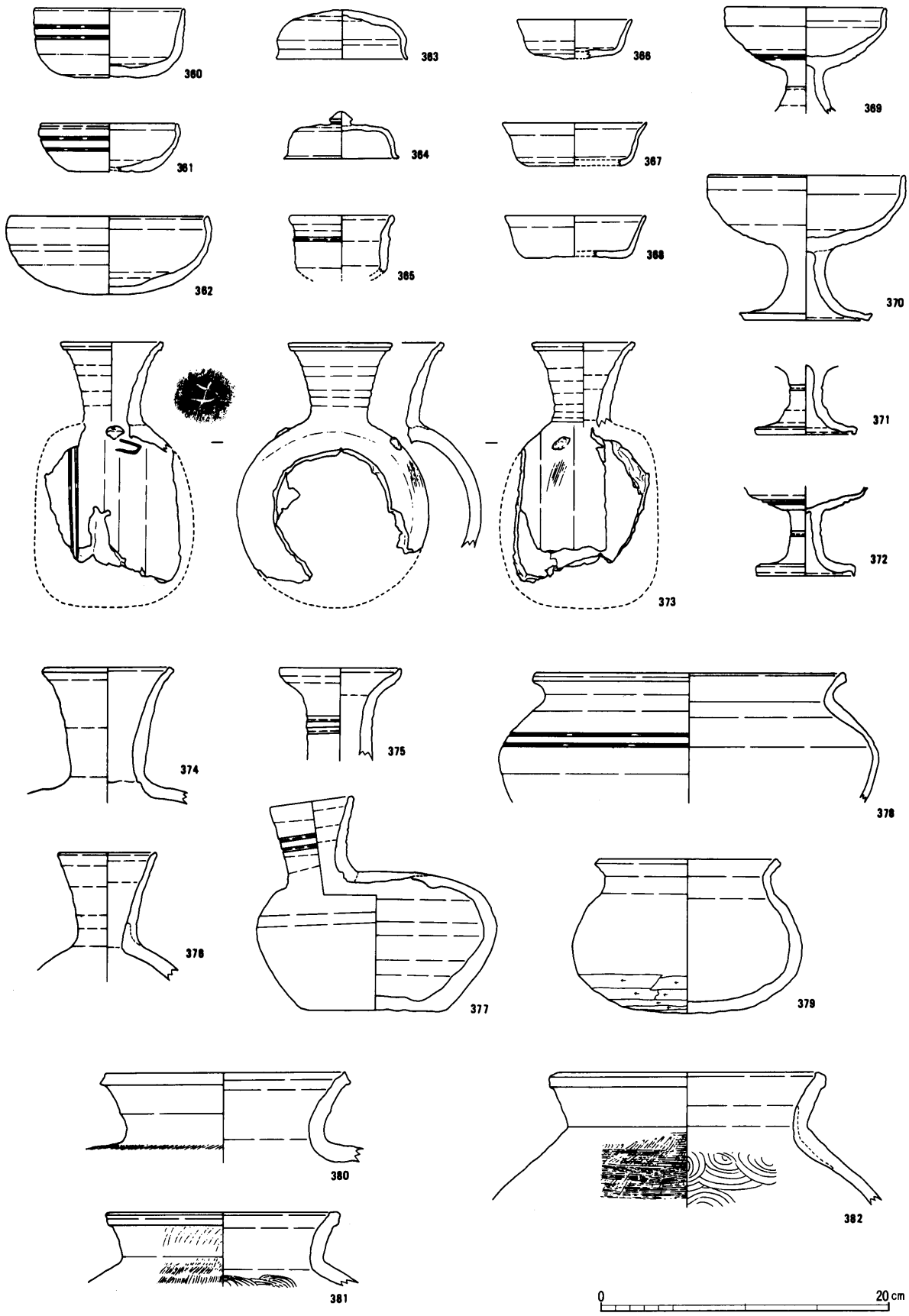
大型甕は、明気1・2号窯と同様に、装飾過多な傾向にあり、沈線により区分された頚部には、波状文をはじめ、櫛状工具による縦方向の施文が見られる。（391～393）断面が三角形状をなす口縁部は端部に強い撫で調整を施し、内面に凸線を作る。（394・395）は、三角形状をなす断面が、やや退化する傾向にある。（396）は、口縁部の断面形が長方形を呈し、肥厚化した帯部を作る。（397・398）は、口縁端部の肥厚部は顕著で無くなるが、端部内面に強い横撫でを施し、沈線で区画する無文帯を持つ。（399・400）口縁端部の肥厚部はなくなるが、端部外面に施された沈線にその名残を見ることができる。

その他の遺物

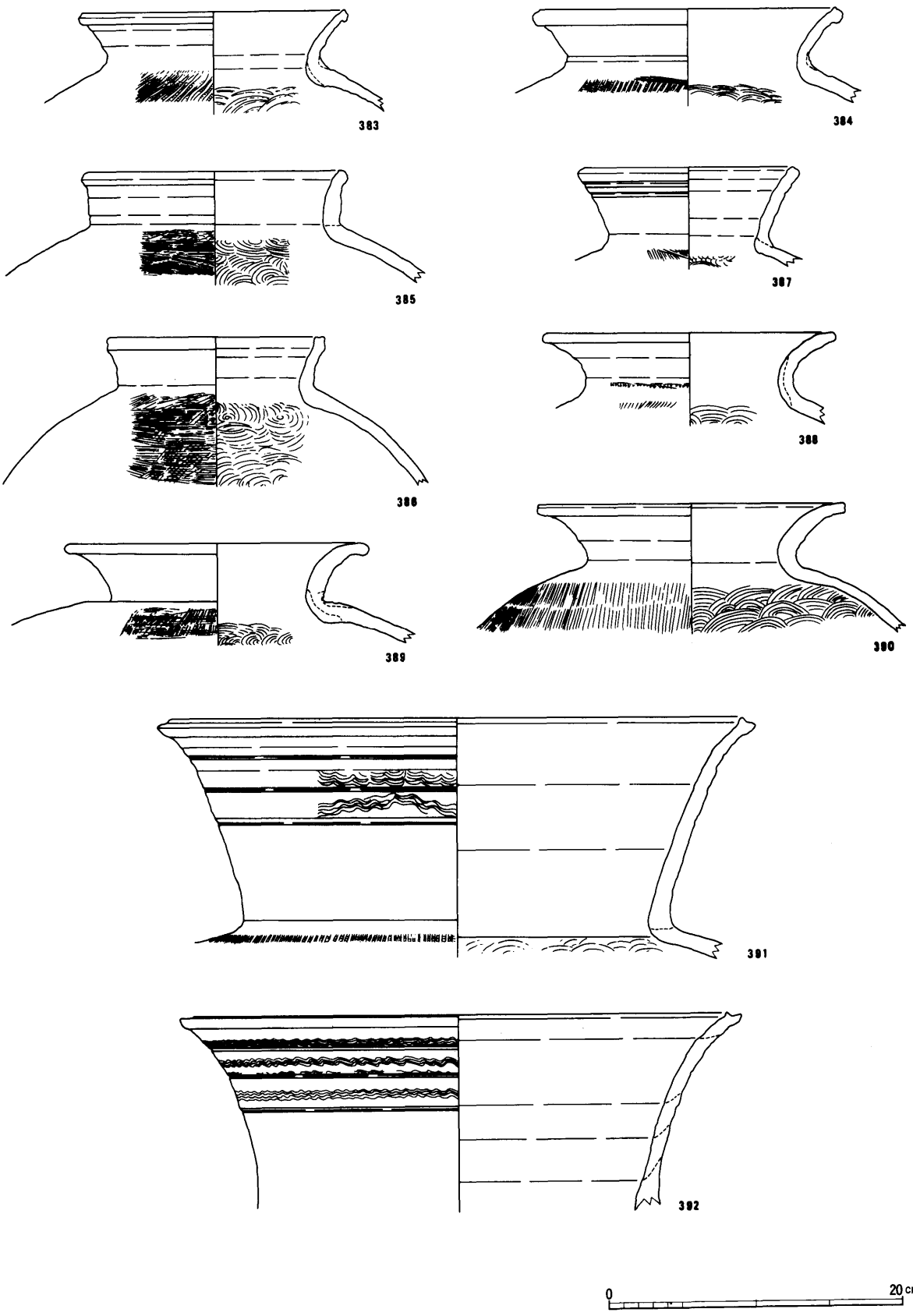
（406）は、内外面に叩きを施す。陶棺の可能性もある。（407）は甕の体部片であるが、粘土の接合部に青海波文を施し、粘土どうしの接着を促進している。（408～414）は甕の頚口切断片である。



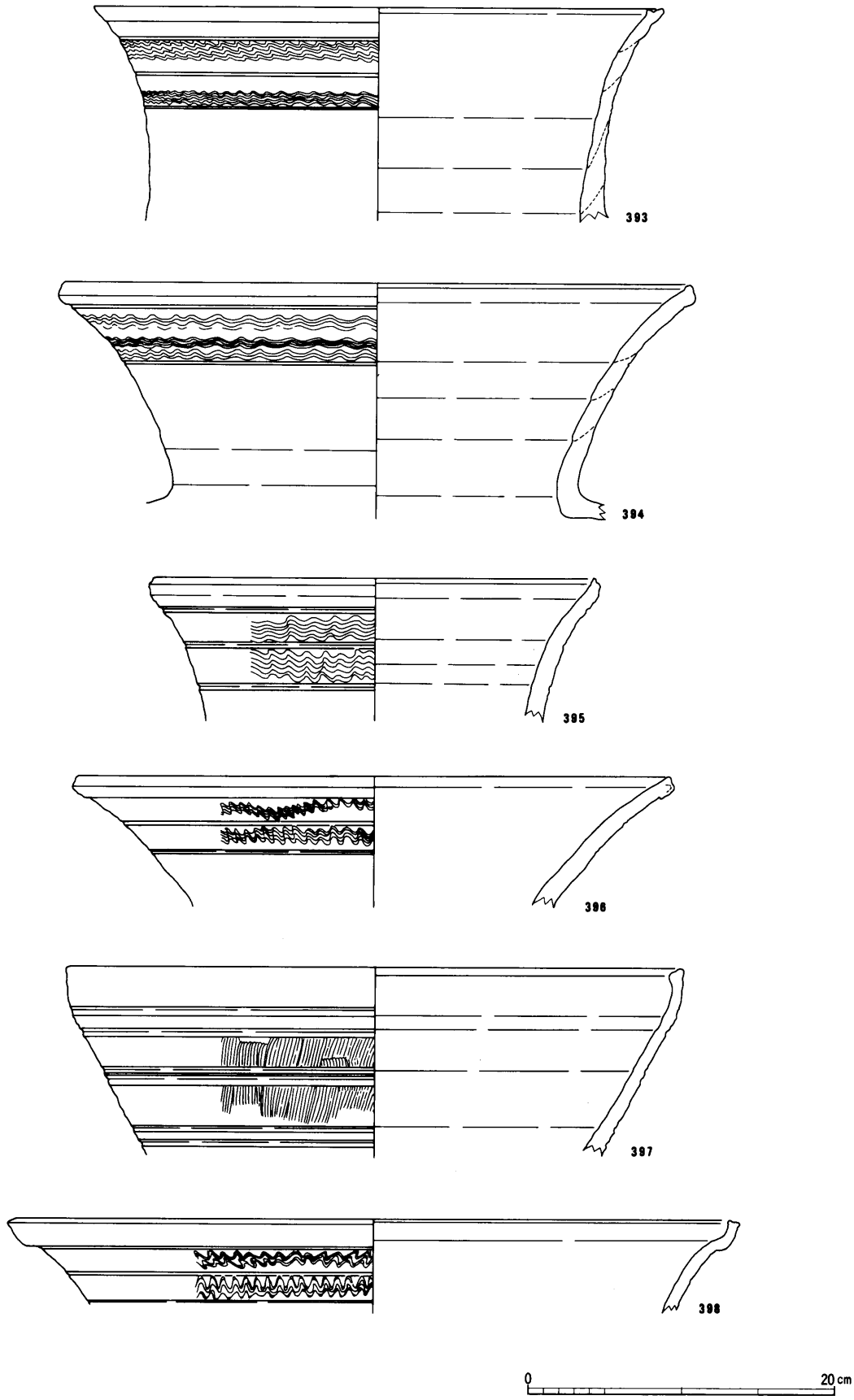
第26図　3号窯灰原出土遺物実測図（1:4）



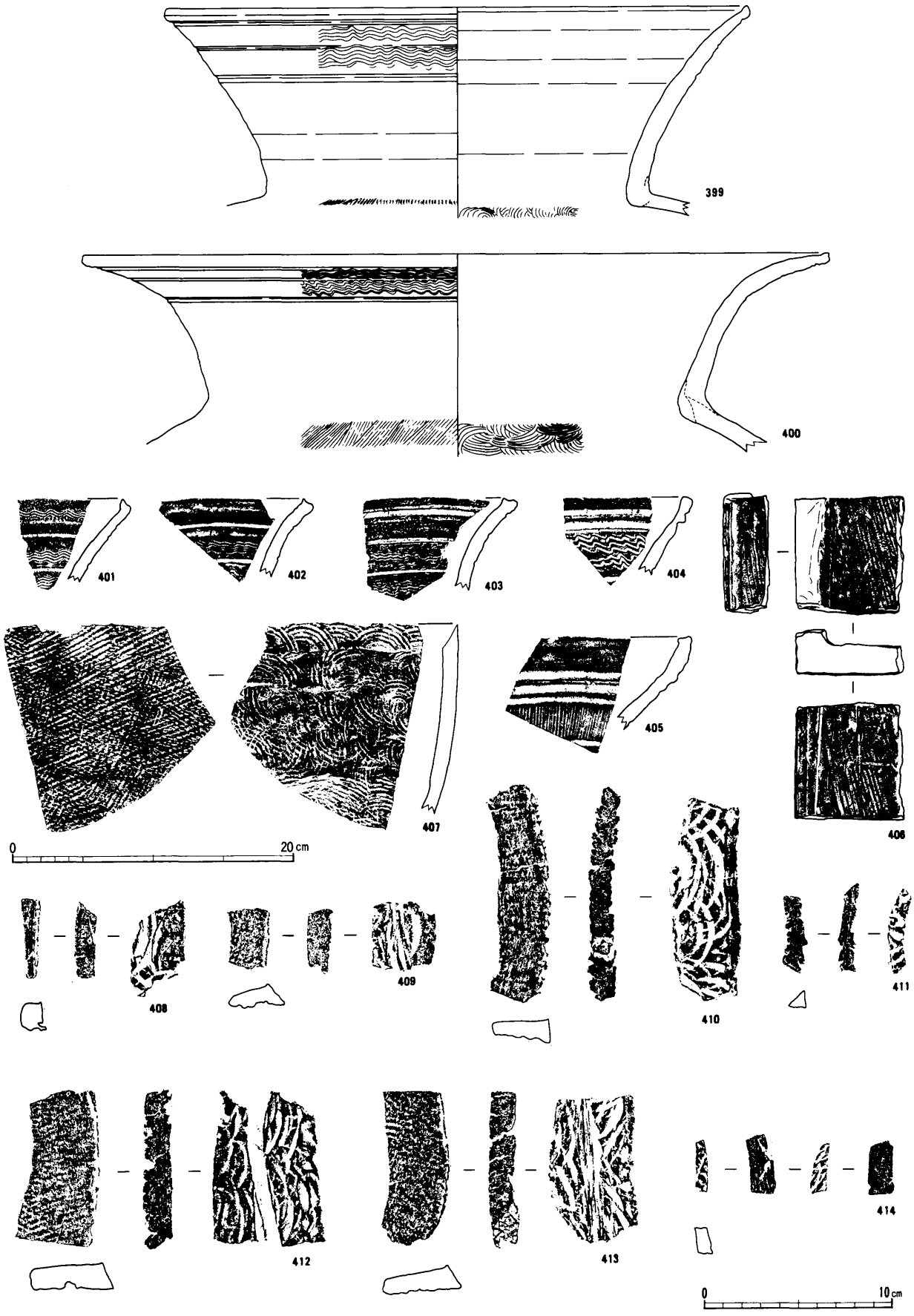
第27図　3号窯灰原出土遺物実測図（1:4）



第28図　3号窯灰原出土遺物実測図（1:4）



第29図　3号窯灰原出土遺物実測図（1:4）



第30図　3号窯灰原出土遺物実測図及び拓影（1:4　但し　408～414は1:3）

6．明気４号窯

遺　　構

明気３号窯灰原の南側、谷筋の最深部には最大幅10ｍ、標高差10ｍの窪地が斜面にそって存在する。これは、地滑りによって生じた地形変化に起因すると思われる。明気４号窯は、この地滑りによって全壊したと考えられ、わずかに焼成部床面を東西1.8ｍ、南北1.3ｍ残すのみとなっている。

残存する窯体は、１・２号窯同様、床面に川砂が敷かれている。砂中からは、甕体部片・杯身とともに、焼台に使用されたと思われる河原石（チャート系）が出土した。この事からも、残存する部分は焼成部と考えられる。

床面の傾斜角度は、水平値に対し約20度である。床面に敷かれた川砂は酸化還元状態にあるが、砂層下の地山（花崗岩風化土）の被熱程度は比較的弱く、硬化はあまり見られなかった。床面焼土層の層序は、第１層明青灰色砂（10BG7/1）、第２層黄色硬質土（5Y8/6）、第３層赤褐色軟質土（2.5YR5/8）で、第２・３層が地山に対応する。

床面北側には窯壁の立ち上がりの残存が５cm程度認められる。これは、第３層赤褐色軟質土が主であり、部分的に第２層黄色硬質土も認められた。

窯体の主軸方向はＮ60°Ｓで、残存する窯体の標高は49.6ｍである。

地滑りにて生じた窪地の下方は、水田として利用されていたが、窯体の残骸及び灰原の２次堆積は認められなかった。

遺　　物

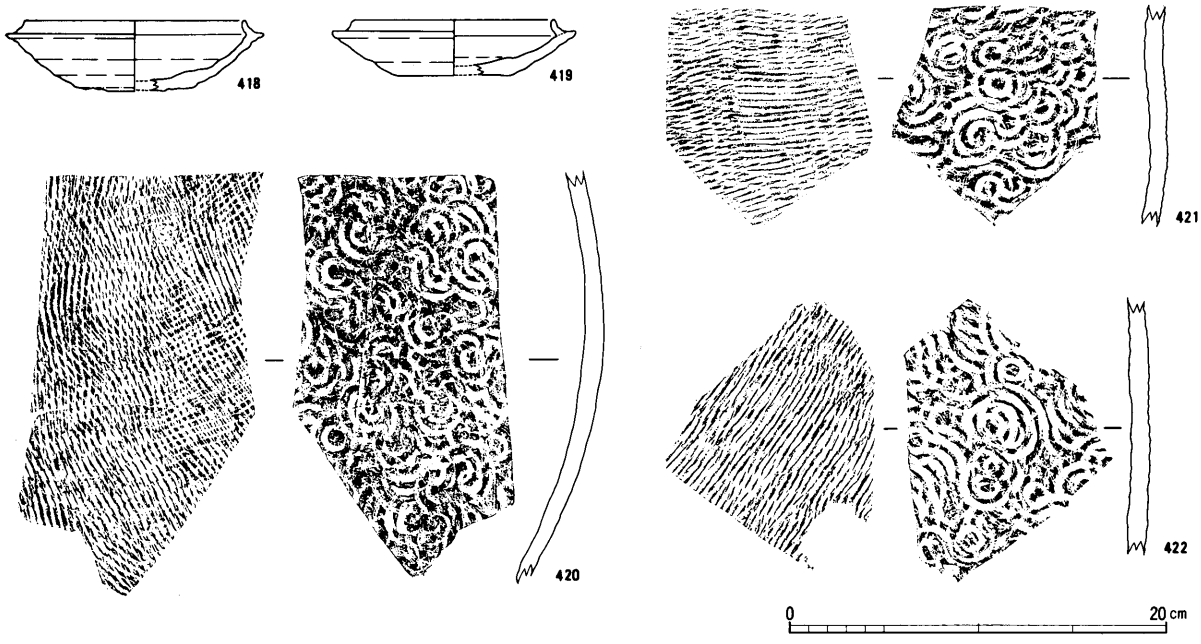
明気４号窯の遺物は、杯身が３点出土した他は、同一個体と思われる甕の体部片が少量ある。

杯身（418・419）

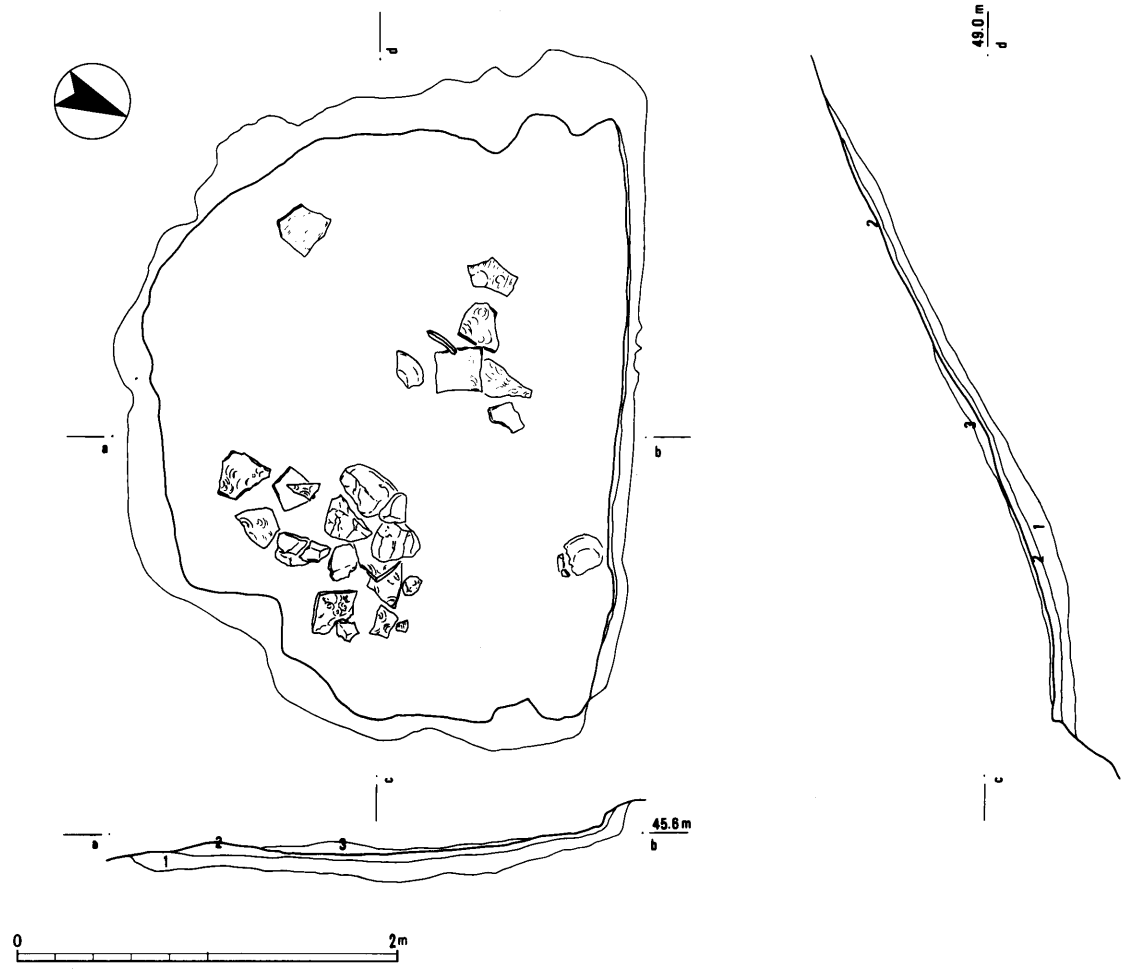
（418）は杯身Ａ１ｃ類に、（419）は杯身Ａ１ｄ類に分類できる。（419）の立ち上がりは、粘土の張り付けによる可能性がある。

甕体部片（420～422）

外面は平行叩きを、内面は青海波文を施す。その他、焼台として利用されたと考えられる被熱した河原石も出土している。



第31図　４号窯　窯体床面出土遺物実測図（1:4）



第32図　4号窯実測図（1:40）

7．明気5号窯

遺　　構

(1) 窯体構造

前庭部・焚口部

本調査区の南端、窯跡群の位置する谷筋の最深部に立地する。調査区南側の町道敷設工事に伴い、窯体の中央より煙道側半分が失われるとともに、道路と同レベルの削平も受けていた。また、明気4号窯に全壊をもたらせた地滑りは、明気5号窯の先端にも影響を及ぼし、前庭部・焚口を消失させている。

燃焼部

僅かではあるが存在が認められた燃焼部は、残存する窯体規模全長4.76mの内、谷側の0.75mを占めていた。幅は1.4mで、壁の立ち上がりは、南側が弧を描き内反するのに対し、北側は比較的直線を呈する。

燃焼部と、続く焼成部を画するものはないが、床面堆積土の差異により、概ねその範囲を把握することができる。燃焼部には黒色土（10YR1.7/1）の灰層を上層とし、以下暗灰黄色硬質土（2.5Y5/2）、灰オリーブ硬質土（7.5Y4/2）の被熱層、暗褐色焼土・炭ブロック混在土（10YR3/3）の堆積が認められた。被熱層は灰層が高温を受けて硬化したものと考えられ、酸化還元状態に近い。

焼成部

焼成部は残存する窯体の大半を占め、水平距離で3.95m、最大幅は2.14mである。床面は、燃焼部側でほぼ水平を呈するが、次第に斜度を強くし、最大20°の傾斜を持つ。

窯壁は最大で0.8m残存し、燃焼部に近い南壁で大きく弧を描き内反する部分が残る。被熱層は、窯体内側から順に暗オリーブ灰還元土（2.5GY3/1）、黄灰色硬質土（2.5Y6/1）、黄褐色硬質土（2.5Y5/6）、暗赤色軟質土（10YR5/6）の4層に分層できる。

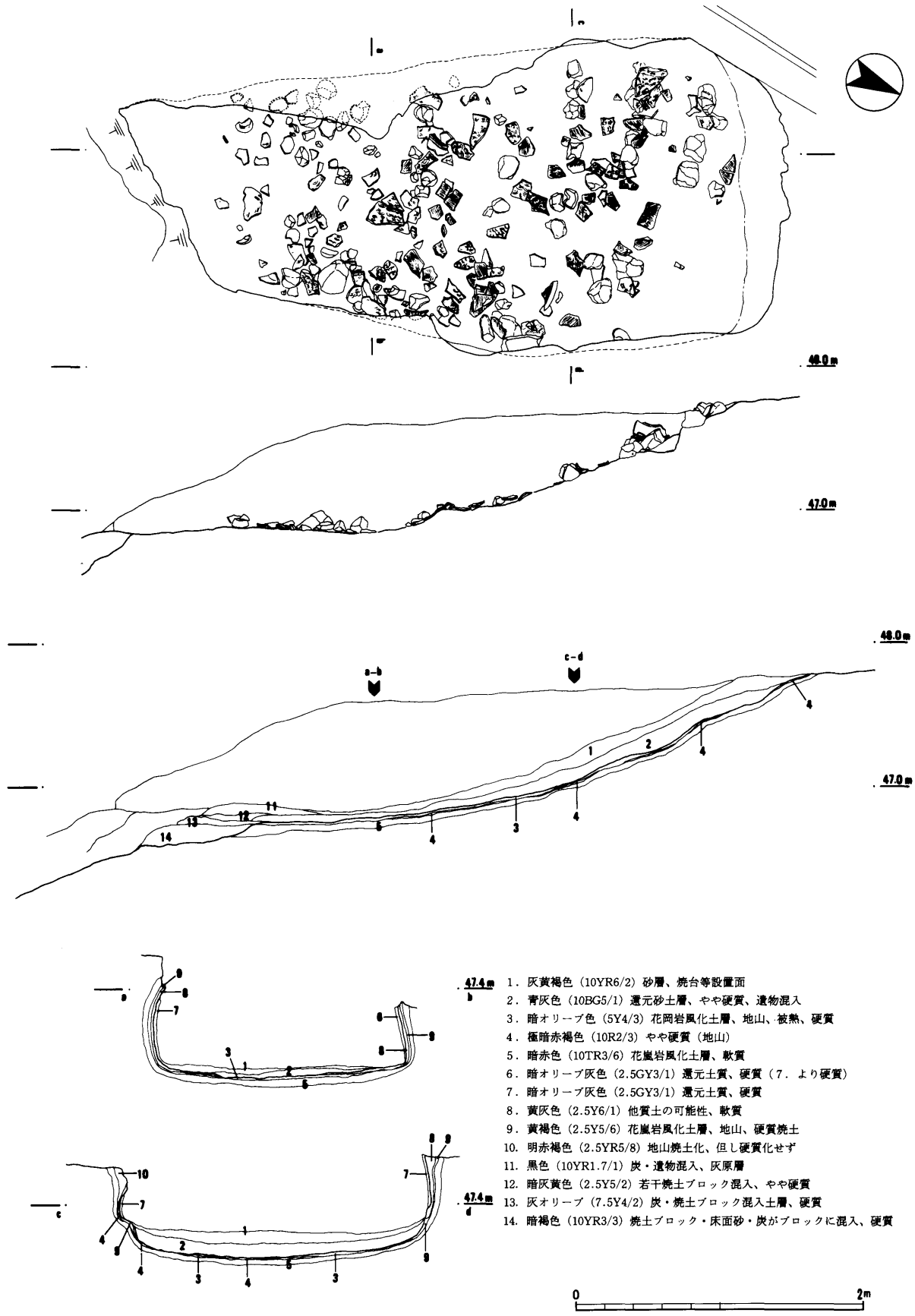
床面には川砂が厚く敷きつめられ、20cmに及ぶ箇所もあった。砂の敷設は水平面に対し斜面側が厚い特徴を持つ。床面の被熱層序は、灰黄褐色砂（10YR6/2）・青灰色砂（10BG5/1）の酸化還元層、暗オリーブ灰硬質土（5Y4/3）、暗赤色軟質土（10Y3/6）の酸化焔層からなる。砂層以下は地山（花崗岩風化土）である。

被熱第1層目の灰黄褐色砂（10YR6/2）層上には甕の体部片を中心に遺物の散乱が見られた。遺物の詳細については後述するとして、ここで焼き台（置き台）について触れておきたい。焼き台は、直径15～20cmの河原石や粘土塊で、ほぼ元位置を保った状態で検出された。これらは3個体程度で一つのまとまりを形成しており、その配置は窯体の主軸に対し直交する形で、少なくとも3～5グループが3列並んでいたと考えられる。また、こういった焼き台の中には、甕の体部片を利用し、焼成物の安定を図ったと思われるものもある。

(2) 灰原

前庭部・焚口部がともに消失していたように、灰原についても大半が地滑りにより姿を消していた。しかし、明気5号窯の残存する窯体から約7m東に離れた斜面には部分的に灰原の残存が認められた。

灰原は、灰褐色軟粘質土（5YR4/2）と黒褐色軟粘質土（5YR3/1）に分層できたが時期差は認められず相互の出土遺物が接合する場合が多々あった。灰原の分布範囲は西限を地滑り、北限を斜面下方として広がりを見せる。東側へは徐々に薄くなりながら延び、調査区外へと続く。また、南端は町道際に求められるが、これは明気5号窯の削平面とほぼ同レベルであり、焚口よりも灰原の方が比高を有したと考えられる。同様の例は、明気1号窯においても認められ興味深い。



第33図　5号窯実測図（1:40）

遺　　物

明気５号窯は、明気１・２号窯窯期の遺物と、３号窯並行期の遺物が共伴して出土している。

窯体床面出土遺物（423～431・460～463）

杯蓋（423・424）

口縁端部の屈曲に代表される、在地的な要素は残るものの、全体的な様相は畿内的な要素を充分に取り入れている。

杯身（425・426）

ともに立ち上がり部の形骸化は著しいが、口径の差は、伝統的な１・２号窯期の手法を残している。

小型杯（427）・椀（428・429）

小型杯はいわゆるミニチュア土器と考えられるもので、ロクロは使用していない。椀は両者ともに酸化還元はしておらず、赤褐色を呈する。（428）は精巧な作りしており、底部の調整は静止ヘラ削りである。

捏鉢（430・431）

ともに底部のみの残存で、焼成についても還元状態には至っていない。底部の外面は、特に調整もなく、小孔の穿孔も存在しない。

平瓶（460～463・464）

灰原出土の（464）のみにボタン状の粘土の張り付けが認められる。また、この平瓶のみヘラ削りが施されている。灰原層と窯体床面の時期差を考える上で興味深い。（460・461）には体部に２本の沈線が巡る。ほとんどのものが、焼成途中で破裂したらしく、破片となってから酸化還元したと判断できるものもあった。

灰原出土遺物（432～459）

古墳時代タイプの杯蓋と杯身（432～439）

畿内的な要素が感じられる点で共通する杯蓋であるが、明気１・２号窯期（434)のものと、３号窯期（432・433）のものが混在している。この傾向は杯身においても言え、明気１・２号窯期の（435～438）と明気３号窯期の（439）がそれである。

返りを持つ杯蓋と受部のない杯身（440～447）

天井部にカキ目を施す杯蓋は、返りを持つ杯蓋の中でも古い様相を示すと考えられ、生産する土器の変遷を考えるうえで有効な資料となった。

高杯（448～455）

（448～451）は杯部のみの出土で、稜をもって体部は角度を強め立ち上がる。口縁端部の処理は、シャープな作りの（448・449）と丸みを帯びて終息する（450・451）がある。高杯脚部は、明気１・２号窯期の長脚２段透かしは姿を消し、全て短脚のものとなる。但し、透かしを入れる伝統は根強く（455）においては、上下２段に入れる透かしを、90度ずらして施している。

小型短頚壷（456・457）

（456）は無文であるが、（457）は体部に２本の沈線を巡らし、その間に櫛状工具による縦方向の圧痕をつけている。

平瓶（458・459）

（458）は底部に、いわゆる「カメ板」の痕跡が残る。特に明気５号窯は、平瓶の出土が多かったが、痕跡が認められたのは、本遺物一点のみであった。

大型甕（465～470・472～474）

口縁部における断面形が長方形を呈し、口縁端部内面からの強い横撫でにより、やや外反する帯部が存在する（465・467・470・473・474）は、頚部を数本の沈線により区画し文様帯を作る。文様については、波状文の他に櫛状工具による縦方向の施文がある。

（466・469）は、口縁部断面形が長方形を呈し肥厚化した帯部には、凸線の名残が残る。

（468・472）肥厚化した口縁端部の帯部は姿を消し、口縁端部形成の手法は形骸化を見せる。しかし、口縁端部は２本の沈線にて区画され名残をとどめる。

小型甕（471）

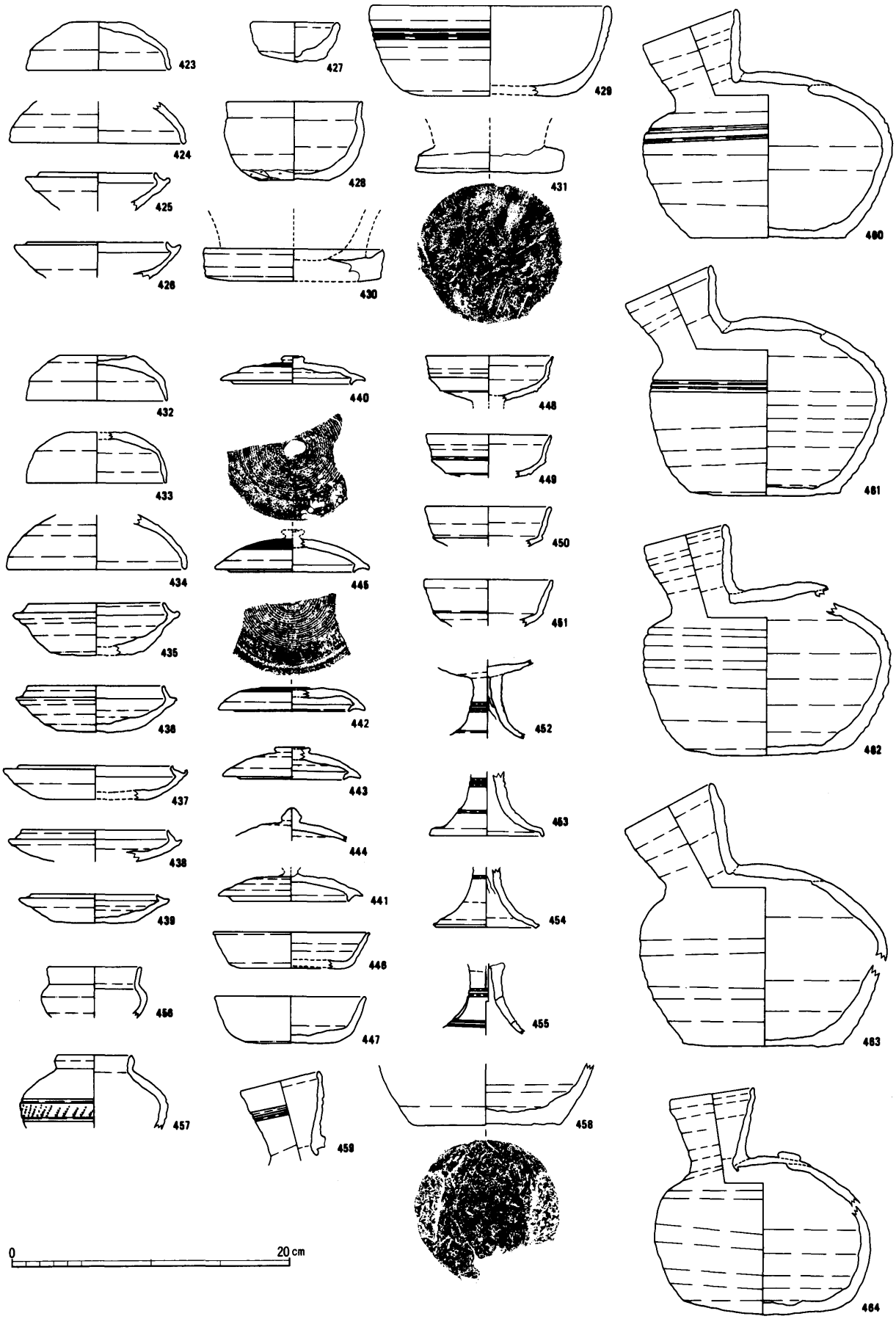
口縁端部の肥厚化や凸線の施入などの装飾性は一切無く、端部は丸く処理されている。

甕体部片（475～482）

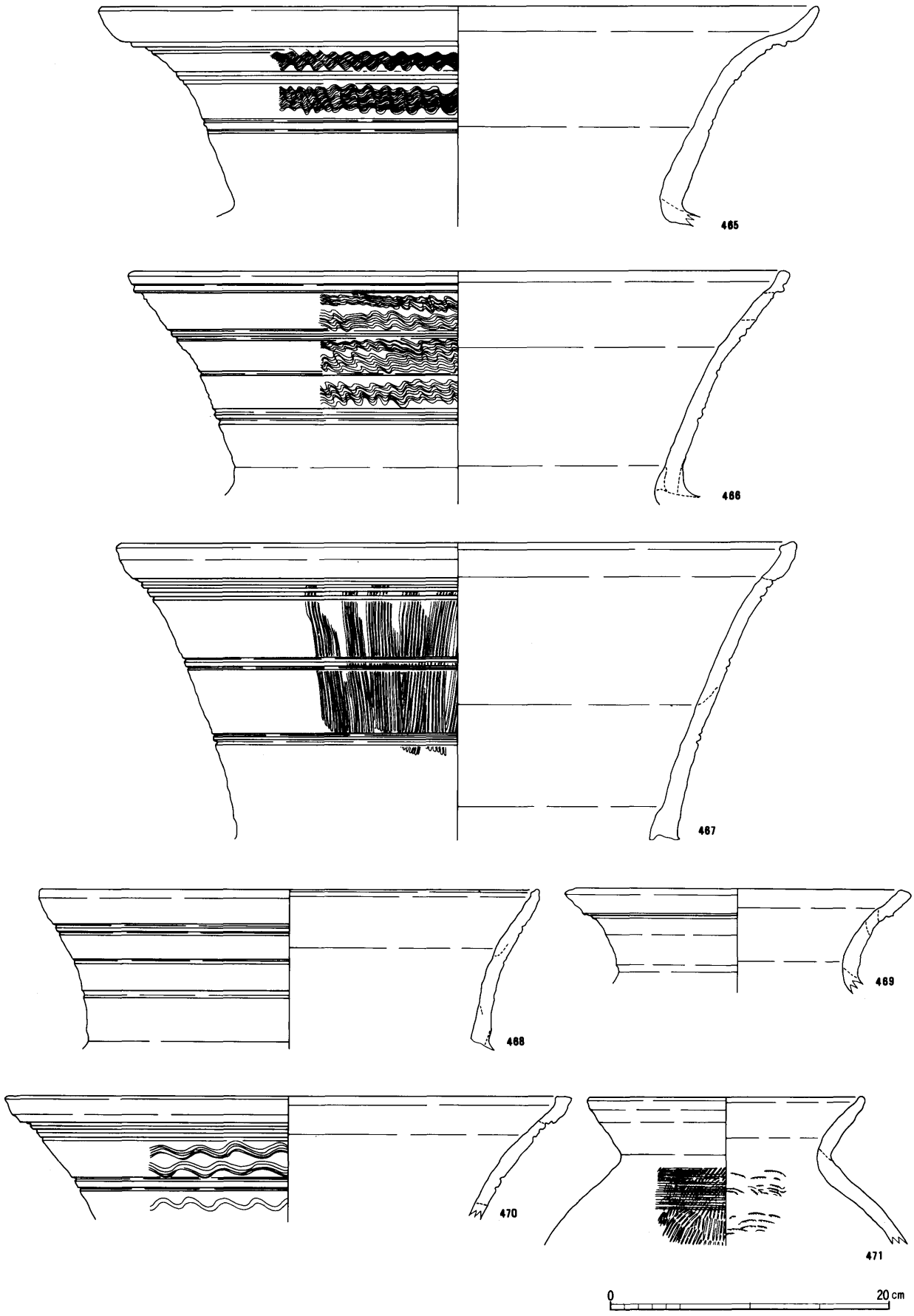
（475）は破断面に青海波文が施されているが、粘土の接着性を良くするために、接合箇所に打たれた青海波文が、ポジティブに反映されたものと解釈する。このケースは他にも多く見受けられた。体部片は、外面が並行叩き、内面は青海波文が施されている。

甕頚口切断片（483～495）

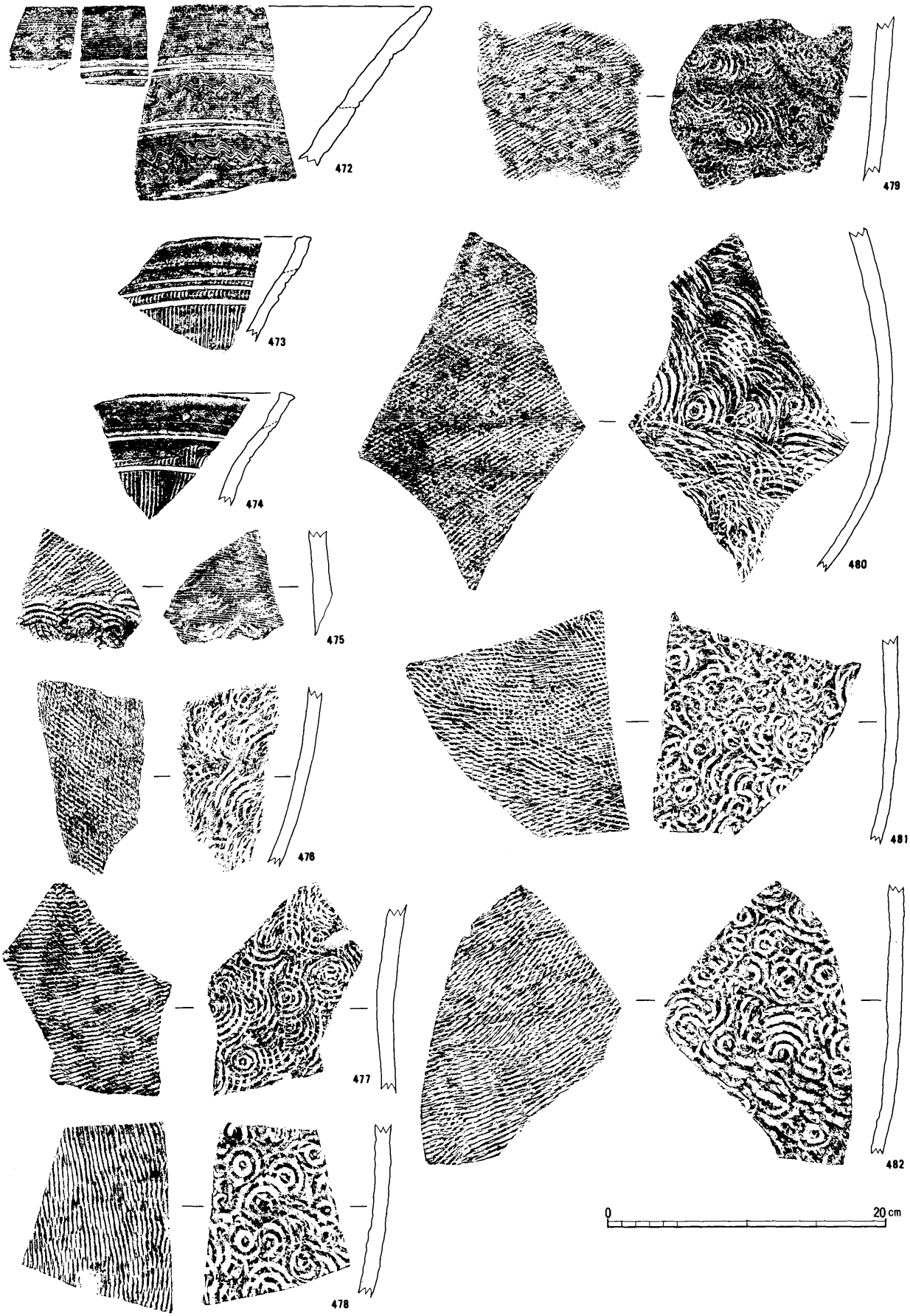
５号窯にて最も多く出土している。



第34図　5号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



第35図　5号窯　窯体床面及び灰原出土遺物実測図（1:4）



第36図　5号窯　窯体床面及び灰原出土遺物断面実測図・拓影（1:4）

第37図　5号窯　窯体床面及び灰原出土遺物断面実測図・拓影（1:3）

8．その他の遺構

(1) 尾根上の遺構群

窯体が構築された尾根の頂上部には、多くの遺構が存在する。これらは、総合的に見て工房跡の可能性を持つものである。

ＳＨ６　尾根頂部に存在するが、西側は土砂崩れにより原形を止めない。明瞭な南北辺が4.7m、床面に粘土を貼った痕跡はなく、検出面からの深さは0.1mである。北東隅に被熱（酸化焔）した部分が認められるが、竈の存在は断言できない。またこの付近からは、大甕の体部片が多数出土している。

床面には多数の柱穴が存在するが、セット関係にあるものは把握できなかった。また、ロクロピットも認められなかった。平面プランでは、１棟の竪穴住居しか確認できなかったが、ほぼ同位置での建て替えが行われた可能性は充分に考えられる。

ＳＫ７　ＳＨ６の北側に隣接して存在する。長軸は1.3m、深さは0.35mの楕円形で、２個のPitを伴う。埋土に多量の淡黄灰色粘土を含んでいたことから粘土ピットてある可能性が高い。また、この土坑からは、明気１・２号窯並行期の高杯（No.568）が出土している。

ＳＫ８　竪穴住居の立地する部分は、明気１・２号窯の上方に広がる平坦面より、1.2m程の比高を持つ。これは人為的なもので、平坦面を構築する際に生じた段と思われが、この段を切る形でＳＫ８が存在している。この遺構の性格は判然としないが、その位置から、尾根頂部と作業場を結ぶ階段として利用されていた可能性がある。また、後述するＳＤ９や柵と共に尾根頂部を区画するものであったとも考えられる。

ＳＤ９　調査区北端の傾斜面に位置する。尾根筋と同方向に延びるこの溝は、作業場と考えられる平坦面手前で途切れている。ＳＫ８と共に竪穴住居を含む尾根頂上域を区画する溝と思われる。

柵　先述の通り、尾根上の平坦面と竪穴住居を含む尾根頂上域には、比高1.2m程の段が存在している。この段の縁辺、ＳＫ８とＳＤ９を結ぶラインには、多数のピットが点在している。これらは、等間隔に並ぶものではないが、一種の柵列が存在したものと考えられる。

ＳＫ10　尾根上の平坦面南端に位置する。長軸2.4m、短軸1.0mの歪な長楕円形をなし、深さは0.5mである。性格は不明であるが、明気１・２号窯併行期の須恵器杯蓋（No.569）が出土している。

(2) 谷筋の土坑とピット群

ＳＫ11～13　明気１・２号窯と３・４・５号窯を画する弱い谷筋に存在する。他の土坑が楕円または歪な長楕円であるのに対し、比較的方形を意識したものとなっている。概ね長辺1.1m、短辺0.8m、深さは0.8mである。堆積土から須恵器片が出土しており窯の操業時期のものと思われる。

３号窯の東側斜面には200ヶ所近くのピットが存在する。これらの埋土は、灰原層と同質で須恵器片が出土するものが多かった。企画性を持った配列等は認められず、ＳＫ11～13と共に性格は判然としない。

(3) 明気３号窯に付属する遺構群

ＳＤ14　明気３号窯前庭部の整地層を掘り込み作られた幅0.35m、深さ0.15mの溝である。後世の開墾により先端は確認できないが、溝の方向が斜面の方向と一致するため、排水溝など、窯体に付随あるいは関係するものと考えられる。

ＳＫ15　ＳＤ14と同じく明気３号窯前庭部の整地層を掘り込む形で設けられている。検出した部分は極僅かで、大半は調査区外に存在するものと思われる。土坑の深さは0.1mと浅いが、埋土は暗赤灰色土（灰原層）で、焼土ブロック・炭を多量に含んでいた。この部分は、灰原の堆積が最も厚い箇所でもあり、窯体の中軸線上にあたると考えられる。

ＳＫ16　明気３号窯の前庭部南西に位置しており調査区外に延びている。規模は現状において、長軸2.8m、短軸1.5m、深さ0.4mである。底近くから甕の頸口部（No.570・571）が出土している。先述のＳＫ15を窯体の中軸と考えた場合、ＳＫ16は明気２号窯における外周溝と似た位置関係となる。従って土坑ではなく、溝である可能性も考えておく必要が

ある。

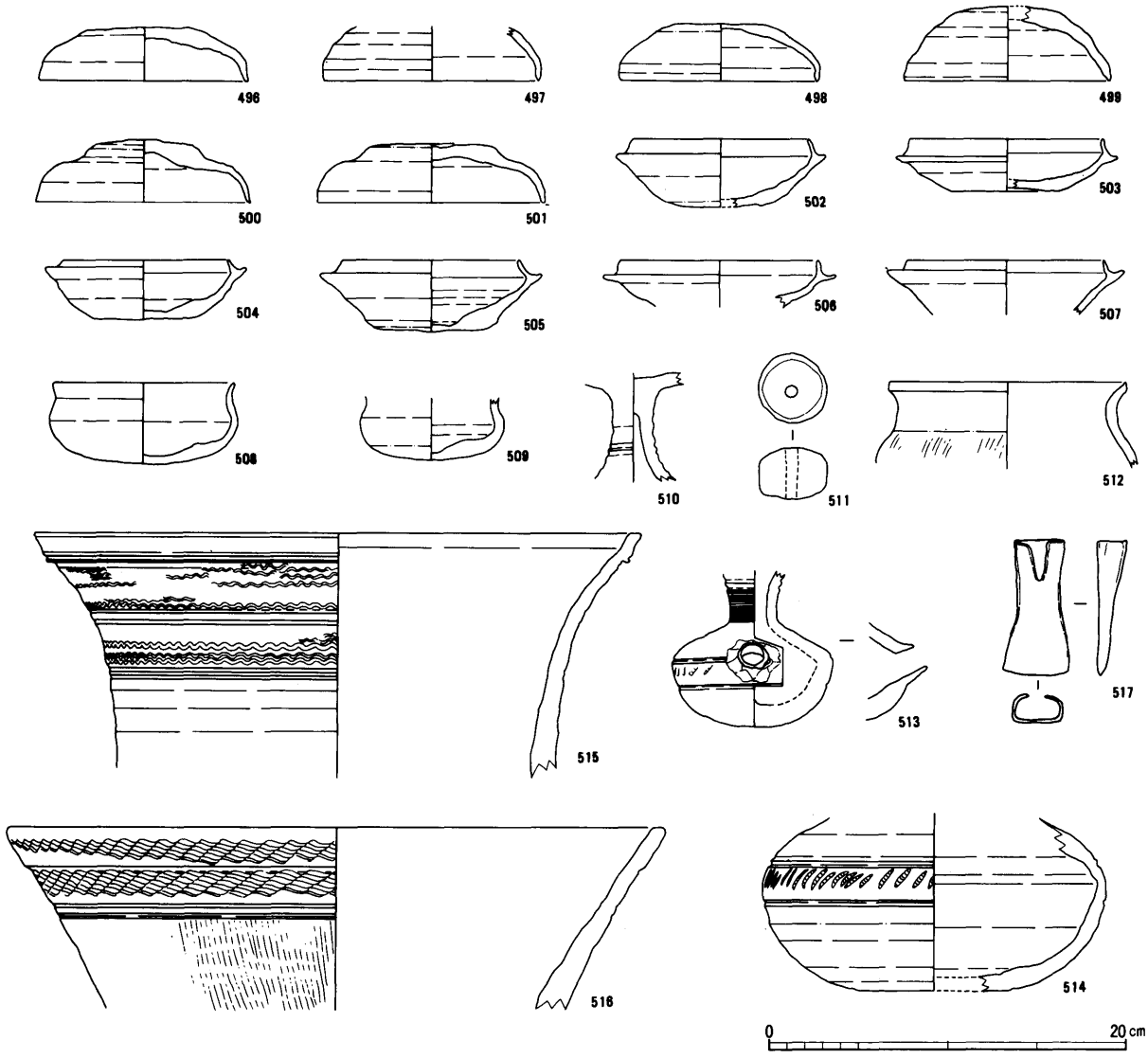
(4) 落ち込み１～３

落ち込み１については、すでに明気１号窯にて述べているので割愛する。落ち込み２・３は、明気２号窯の南側にあって、窯体と並行する窪地である。２号窯を取り囲む外周溝の先端がこの落ち込み２につながっている。

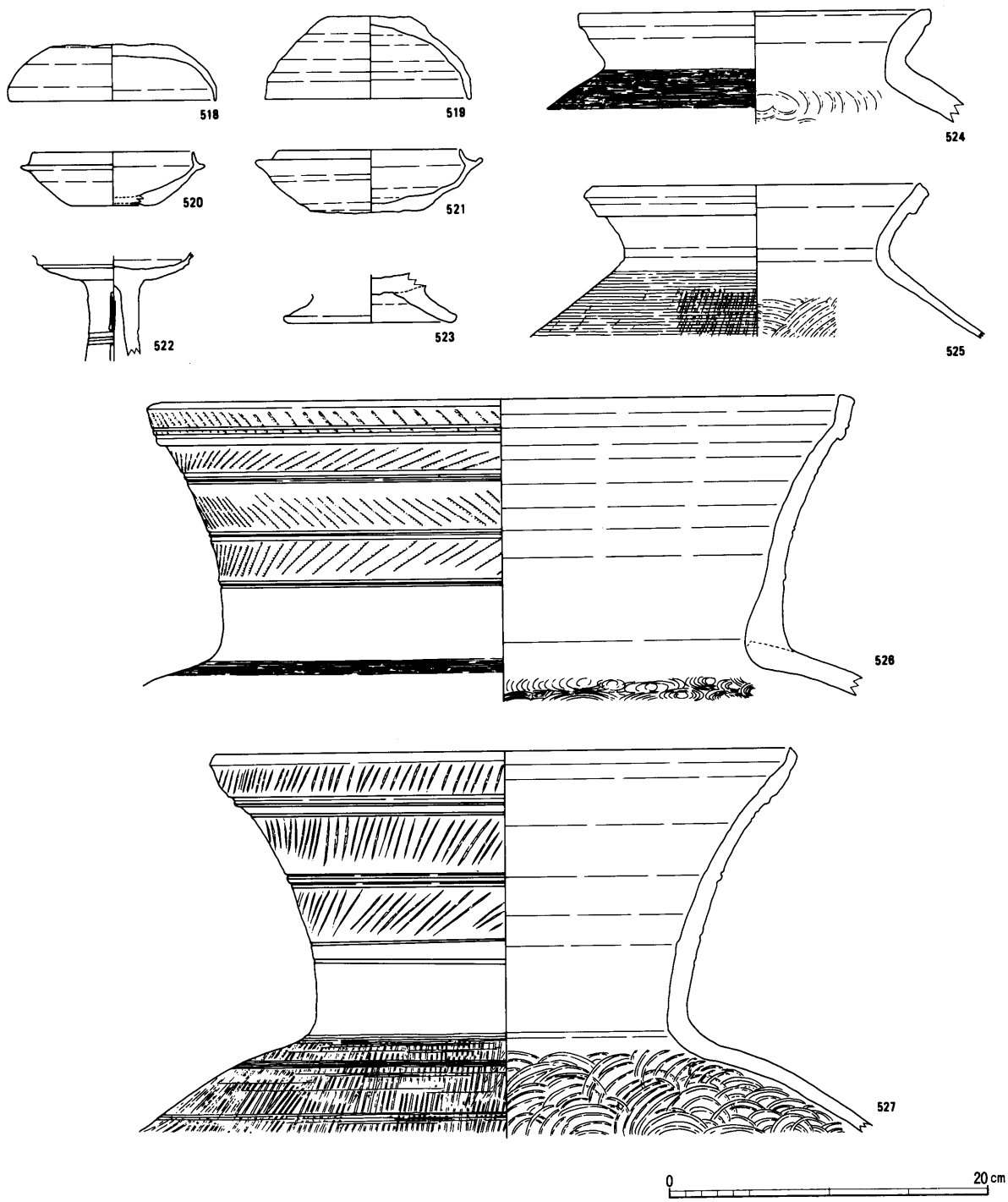
明気２号窯は、斜面の弱い「張り出し」の北側に構築されているが、落ち込み２・３の存在は、２号窯の南側に空間を造り、窯体を「張り出し」から独立させることに役立っている。斜面をつたって流れる雨水を、窯体を避けて下方へ流すためのものであった可能性がある。また並びはしないが、落ち込み１・２に見られる多くの点在するピットから、尾根上の作業場とを結ぶ足場が組まれていた可能性もある。いずれにしても、２号窯の立地と密接な関係を持って人為的に造られたものである点に誤りはないと思われる。

落ち込みからの出土遺物は、甕の体部片を中心とし多量に認められた。落ち込み３については、２号窯からの灰原の進入が主たる堆積層を成していた。

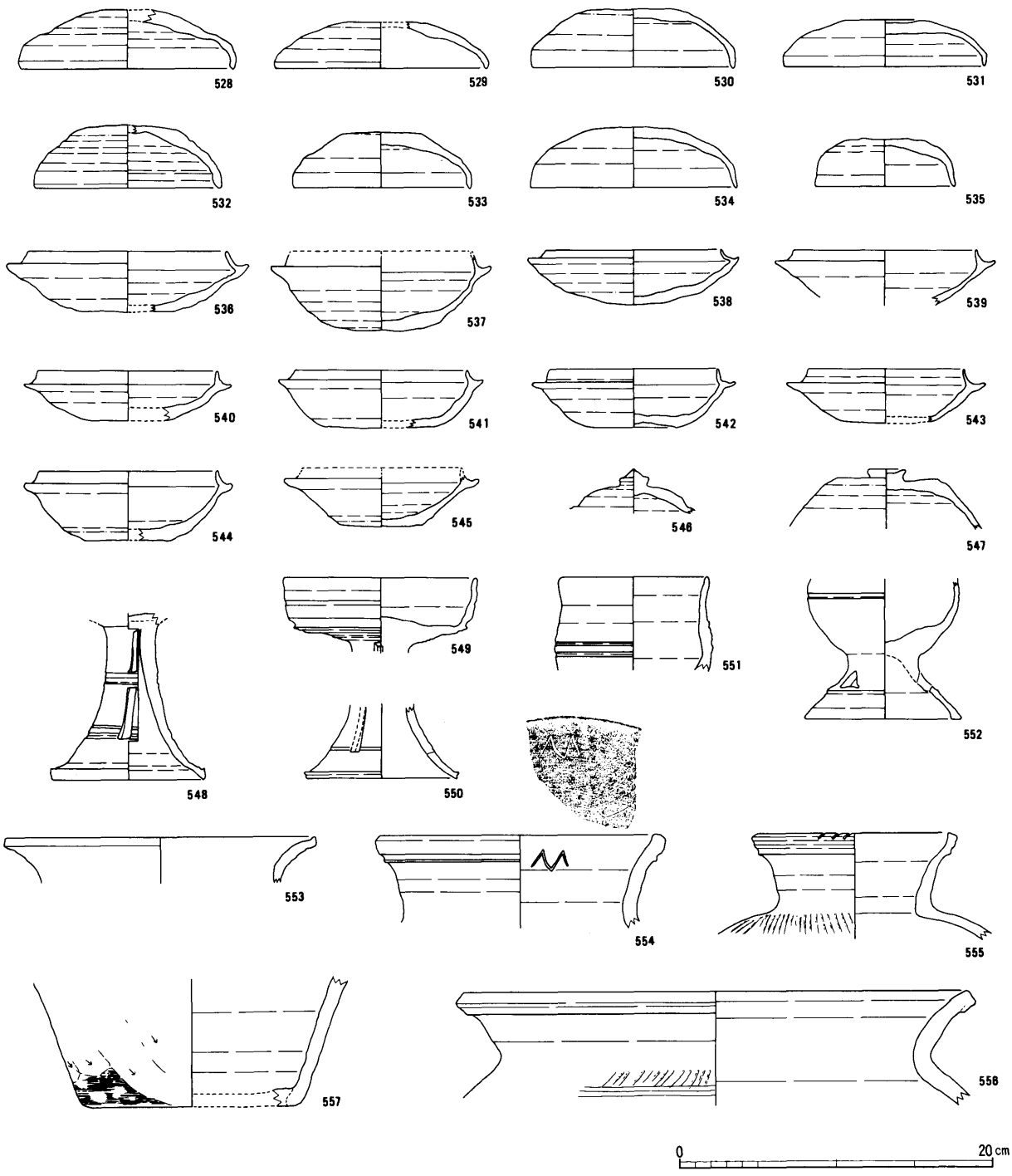
一方、落ち込み１・２についても、多量の遺物の出土を見た。しかし両者の位置は、焚口より高い位置にあり、窯出しに際する灰のかきだし等によって不良品が混入したものではない。堆積土に焼土ブロック・炭の混入は認められたが灰層は存在しなかった。従ってこの落ち込みは、窯出し後の製品を良品と不良品に選別したのち、不良品を投棄した場所との見方もできよう。



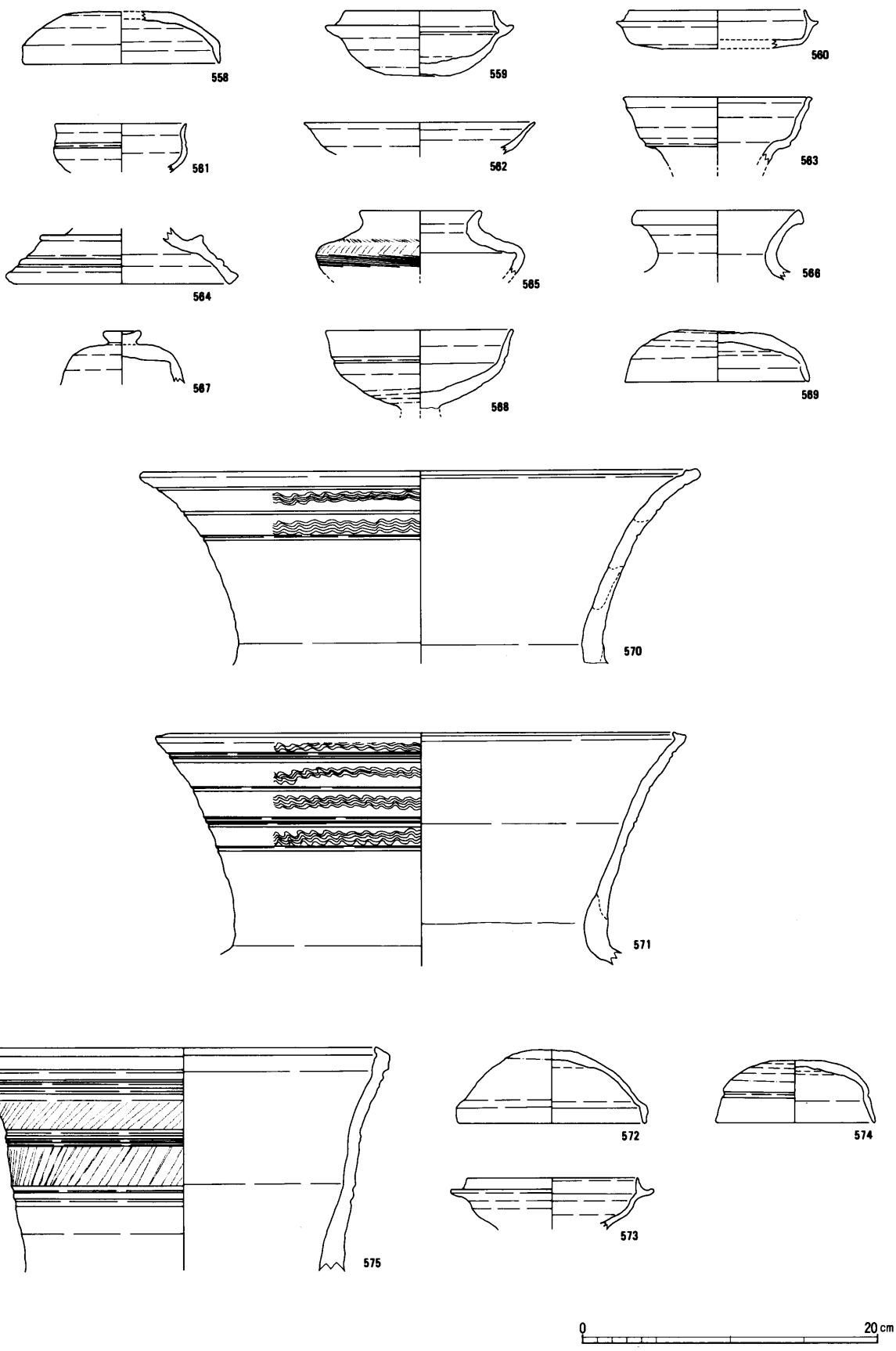
第38図　落ち込み１　出土遺物実測図（1:4）



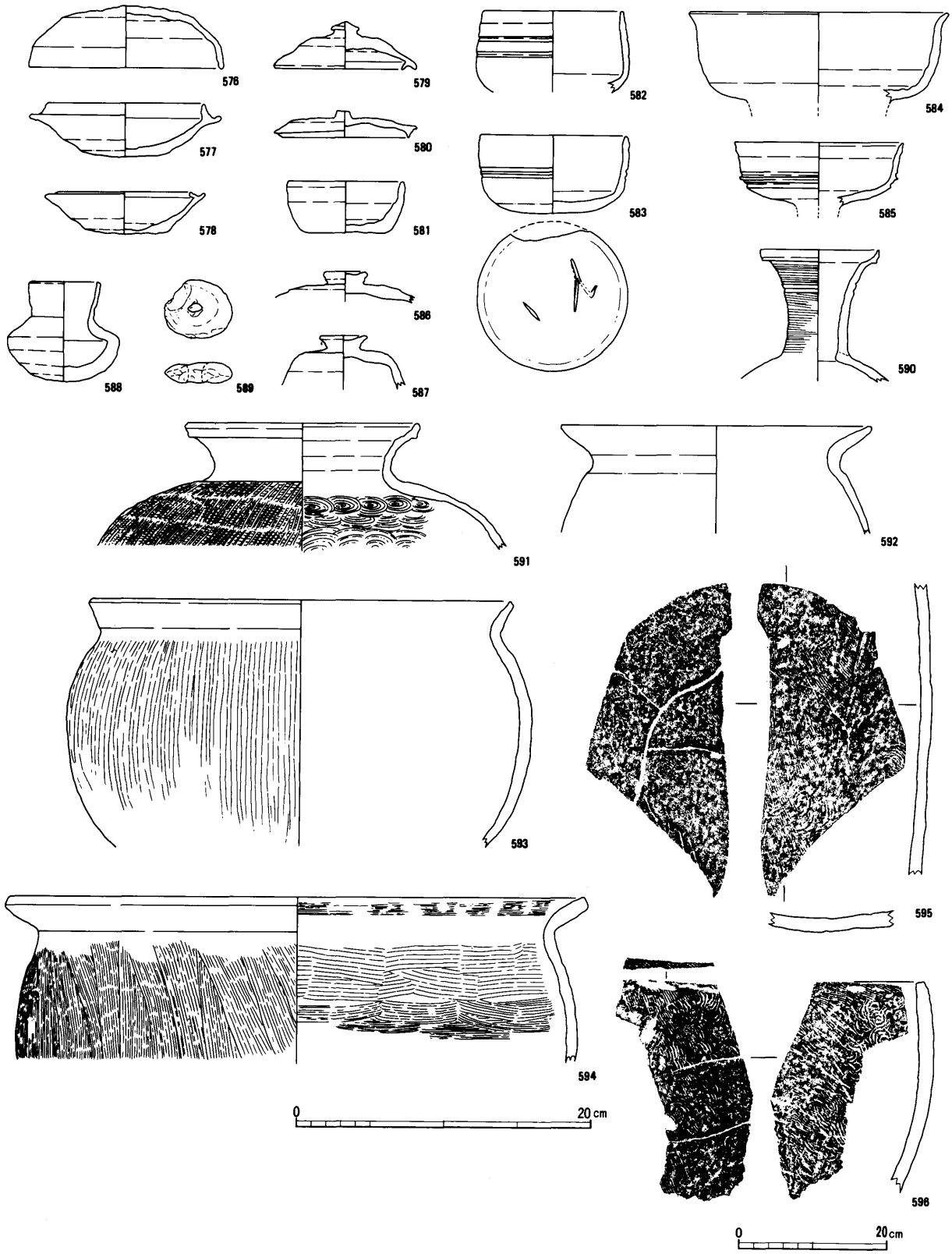
第39図　落ち込み２　出土遺物実測図（1:4）



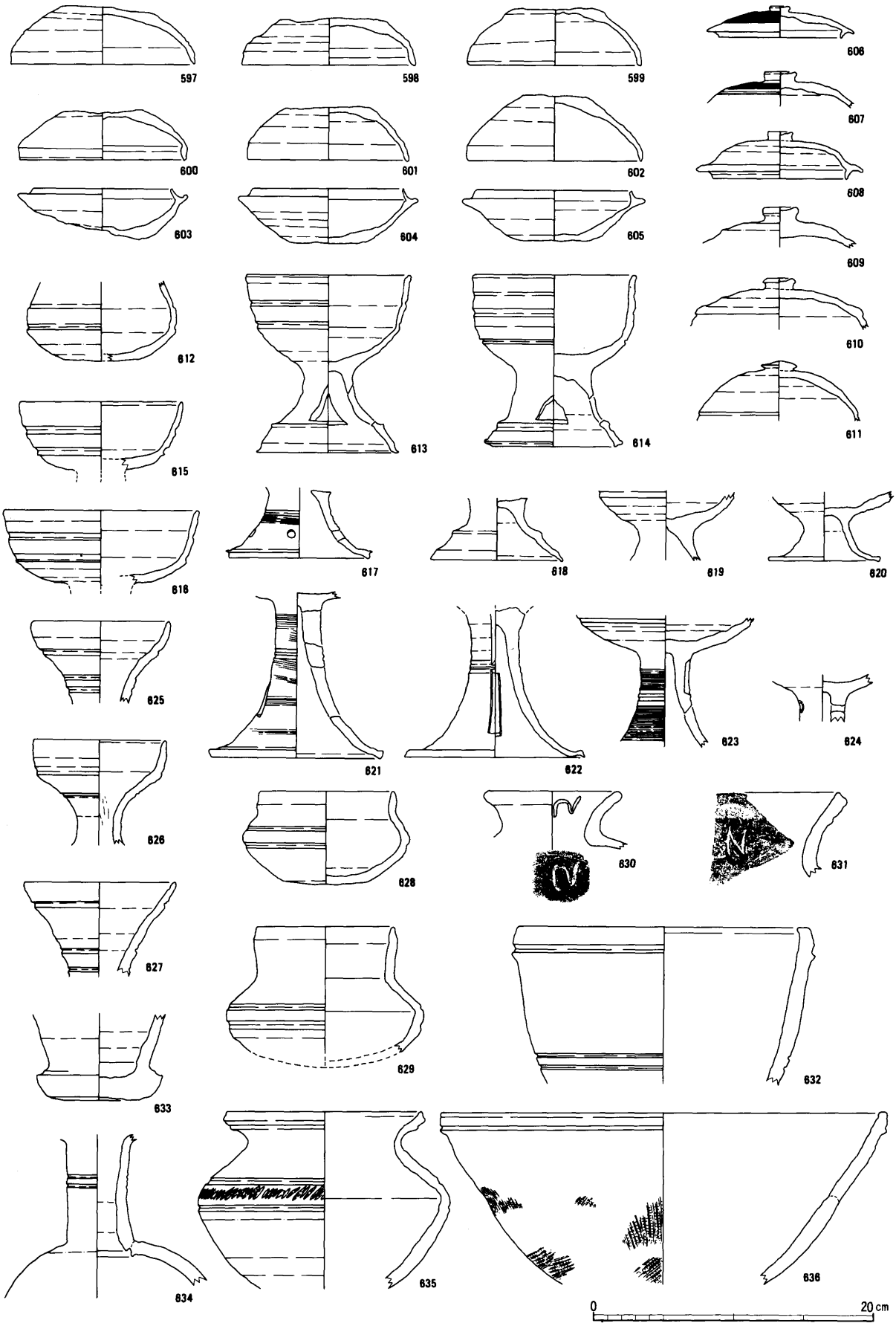
第40図　落ち込み３　出土遺物実測図（1:4）



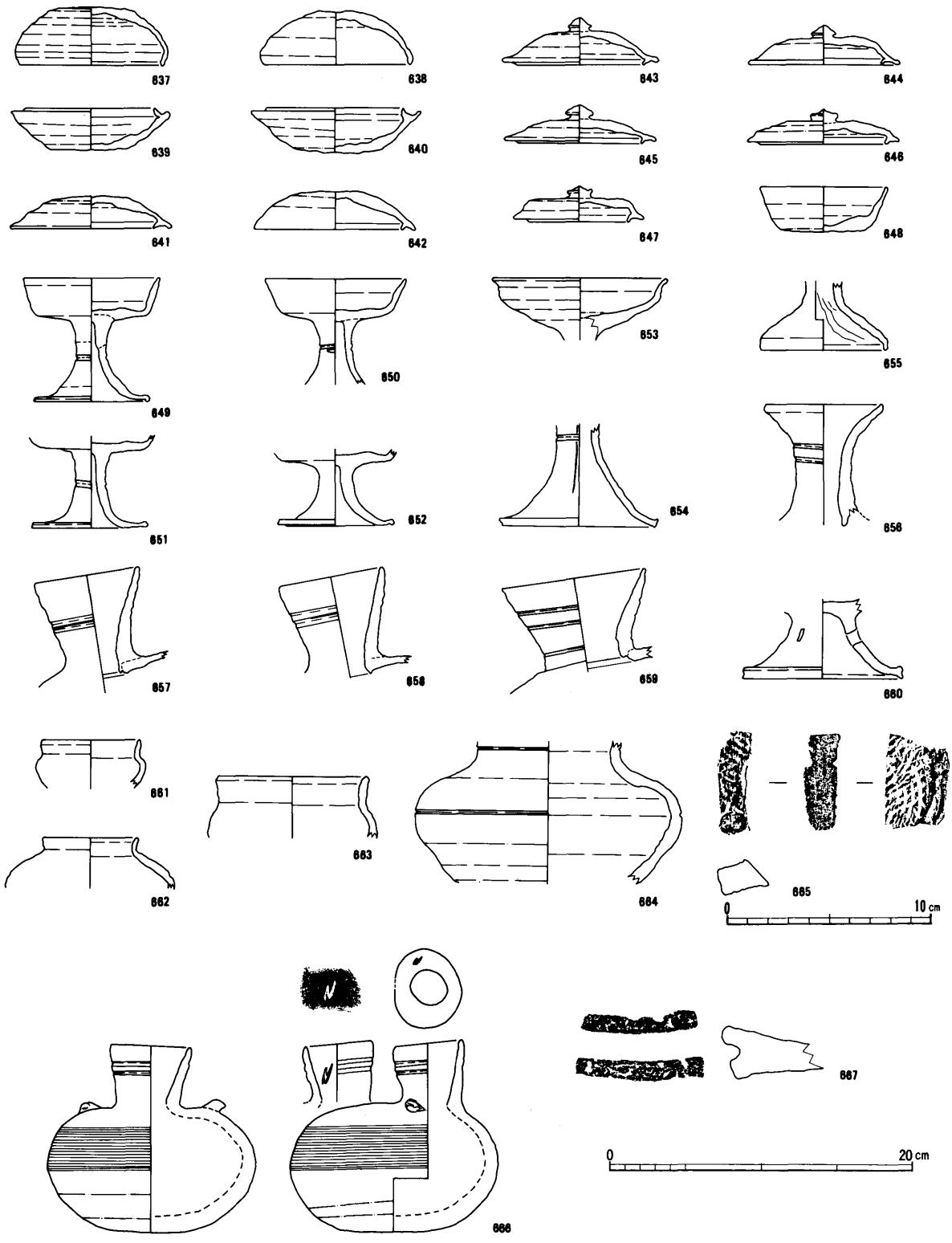
第41図　遺構出土遺物実測図（1:4）



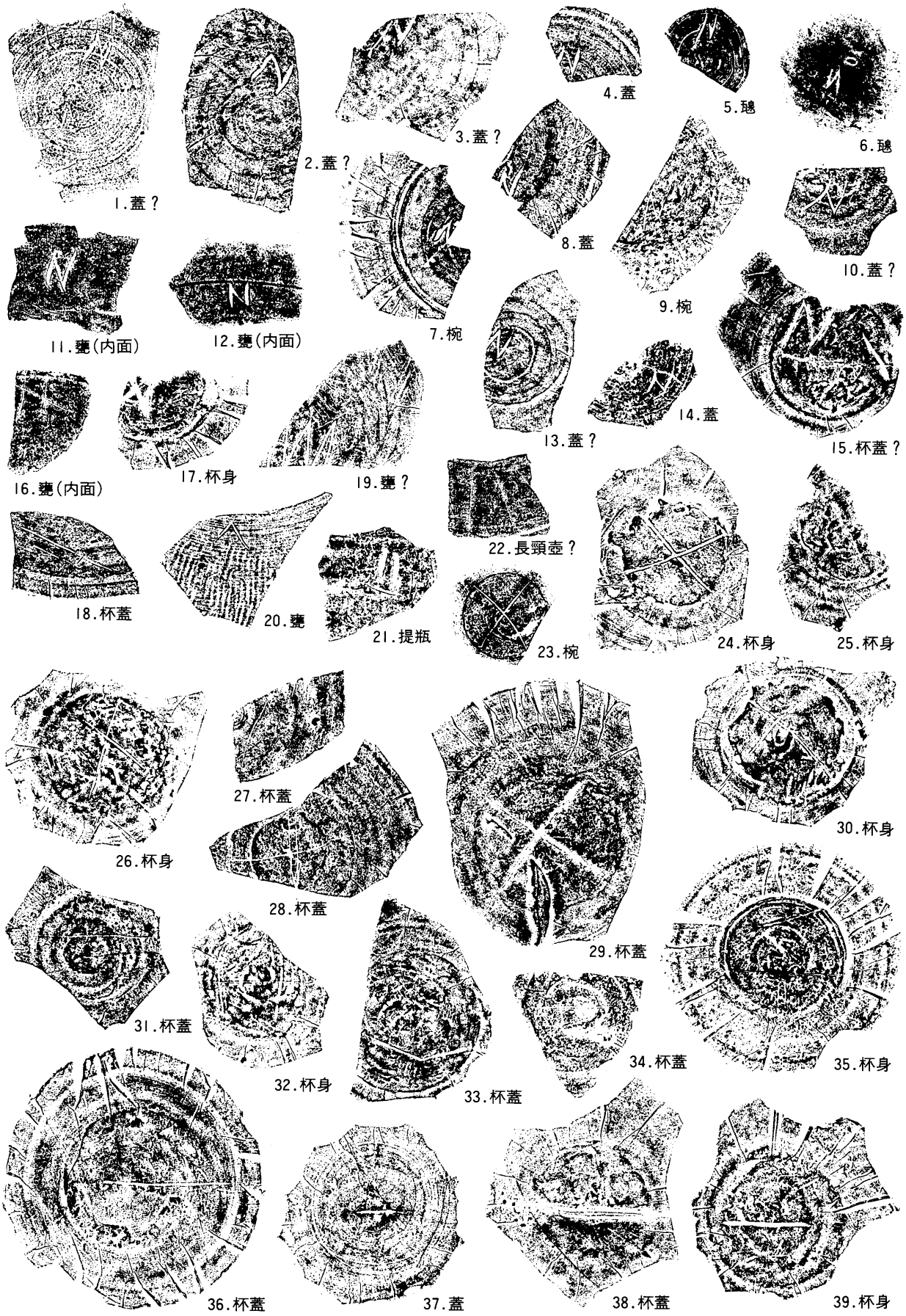
第42図　包含層（第１地区）出土遺物実測図（576～594は1:4,595・596は1:8）



第43図　包含層（第２地区）出土遺物実測図（1:4）



第44図　包含層（第３地区）出土遺物実測図（1:4　但し 665は1:3）


1.蓋？
2.蓋？
3.蓋？
4.蓋
5.甕
6.甕
7.椀
8.蓋
9.椀
10.蓋？
11.甕(内面)
12.甕(内面)
13.蓋？
14.蓋
15.杯蓋？
16.甕(内面)
17.杯身
19.甕？
18.杯蓋
20.甕
21.提瓶
22.長頸壺？
23.椀
24.杯身
25.杯身
26.杯身
27.杯蓋
28.杯蓋
29.杯蓋
30.杯身
31.杯蓋
32.杯身
33.杯蓋
34.杯蓋
35.杯身
36.杯蓋
37.蓋
38.杯蓋
39.杯身

第45図　ヘラ記号拓影

9．明気窯跡群の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、田中彰子

はじめに

土の中には、磁石になることができる磁性鉱物が数%含まれている。これらの鉱物は、鉄の酸化物、あるいは、鉄の代わりにチタンが少量置き代わったものの酸化物である。それらは、磁鉄鉱(Fe_3O_4)、赤鉄鉱（べんがら、Fe_2O_3）およびチタン磁鉄鉱（Fe_3O_4～Fe_2TiO_4）と呼ばれる鉱物である。これらの磁性鉱物を加熱すると、ある温度に達すると磁石になる性質（磁性）を失ってしまう。この温度をキューリー点という。この特性は可逆的なもので、キューリー点以上の高温で磁性を失った状態から、冷えて温度が下がってくると、キューリー点を通過した瞬間から、再び磁化を持ち、磁石になることができるようになる。このときに磁場が作用していると、その磁場の方向に磁化される。 このようにして獲得された磁化が熱残留磁化である。磁鉄鉱のキューリー点は578℃、赤鉄鉱のそれは670℃、チタン磁鉄鉱では、チタンの含有量によって異なるが、最高はチタン含有量なしの磁鉄鉱のキューリー点と同じで、チタンが増えるにつれて低くなる。通常は、540～560℃のものが多い。

窯跡や炉跡のような焼土遺構では、それらが使用されていた当時に作用していた地球磁場（地磁気）の中でキューリー点以上の高温から冷却されているので、その時の地磁気の方向の熱残留磁化をもつことになる。何度も焼成が繰り返し行われると、焼成の度ごとに、温度が上がれば前に獲得した残留磁化は消え、冷却の過程で新たに磁化し直しているので、最終焼成のときに獲得した残留磁化が後世に残ることになる。したがって、操業期間が非常に長い窯跡のような場合には、窯使用の最盛期ではなく、生産が衰えていても、その最終焼成のときの地磁気を記録しているのである。何度も修復され床が何枚も重なっているものでは、それぞれの床が焼かれ、温度がキューリー点近くまで上がった時の地磁気を記憶している。遺跡に残されているこのような焼土の残留磁化を測定すると、昔の地磁気をしることができる。色々な時代の遺跡焼土を調べると過去の地磁気の変動の様子が分かる。このような研究を考古地磁気学という。

三重県内の古窯の考古地磁気学的測定は、久居３号、池ノ谷２号、原５号の各窯跡（Kawai et al,、1965)、西大鐘、岡山１、４号の各窯跡（Hirooka、1971）、牧瓦窯跡群（広岡他、1989）、西ヶ谷古窯（広岡他、1992a)、泉貢窯跡（広岡他、1992b)などでなされている。

地磁気永年変化

地磁気（地球磁場）の方向は、場所ごとに少しずつ異なっていて、現在の日本を例にとると、伏角は、九州の南端で44°、九州北部から瀬戸内・関西・東海・関東南部にかけては48°、山形・宮城北部で52°、稚内では59°と緯度が高くなるにつれて深くなる。偏角はもっと複雑な分布をしているが、緯度が高くなるにつれて、西偏が大きくなる傾向がある。九州南端では西偏5.5°、九州北部から四国・紀伊半島・関東南部にかけて西偏6.5°、新潟北部・山形・宮城にかけてでは、西偏7.5°、稚内では西偏10°となっている。

このような空間的に異なる分布をしている地球磁場は、変化の速度は遅いが、時間的にも変化しているのである。数十年や百年くらいの期間をとると、結構大きな変化となる。このようなゆっくりした地磁気の変化を地磁気永年変化という。

日本で地磁気を継続的に観測し始めたのは明治16年で、そのときの東京の偏角は西偏4°03′であった（Imamiti、1956)。東京の少し北にある柿岡での現在の偏角は西偏6°50′であるから、百年で2.8°変化したことになる。偏角と伏角の両方の記録があるのは上記の観測記録が一番古いもので、それより前の時代には伏角の観測記録が無い。

地磁気の直接観測が始まるより前の時代について、遺跡焼土の残留磁化の測定などから考古地磁気学的に求められた地磁気の変動（永年変化）を考古地磁

気永年変化という。日本では、東海地方から九州北部に至る西南日本各地の遺跡の考古地磁気学的測定によって、過去2000年間の考古地磁気永年変化曲線が得られている（Hirooka、1971;広岡、1977)。この永年変化曲線が正しく日本の地磁気の変動を表しているとすると、遺跡焼土の磁化方向を測って、それが曲線の永年変化のどの時代の地磁気の方向を向いているか見ることによって、焼土が焼かれた年代を推定することができる。

試料の採取

考古地磁気測定の最大の目的は、焼土の残留磁化方向を正確に求めることであるから、試料としては、よく焼けて窯使用当時の地磁気の方向を忠実に記憶している部分を選ばなければならない。窯壁は最終焼成後に内側に倒れ込んでいる場合が多く、また、焚口や窯尻、煙道部などでは焼成中に磁場に歪みが生じるらしく、正しい過去の地磁気の記録でないことがある（Hirooka、1971)ので、窯中央部の中軸線沿いの床面から試料を採ることが肝要である。試料採取の詳細は、明和町北野遺跡の報告（広岡他、1994）に述べてあるので、それを参照頂ければ幸いである。

明気窯跡群での考古地磁気測定試料の採取は、発掘調査の進み具合に応じて1、2号窯と4、5号窯というふうに二度に分けて行った。

1号窯と2号窯では床が二重になっていたので、それぞれの床から試料を採取した。1号窯上層床から9個（試料番号SMI 41～49)、同下層床から9個（SMI 50～58)、2号窯上層床から9個（SMI 61～69)、同下層床から11個（SMI 70～80)、4号窯では23個（SMI 91～113)、5号窯では35個（SMI 121～155）の総計96個の定方位試料を採取した。

残留磁化の測定結果

残留磁化の測定は、リングコア型スピナー磁力計（夏原技研製　SMM-85型）を用いて行った。また、磁化の安定性を吟味し、不安定成分を除去するために全試料について50 0e（5 mT）の交流消磁を行った。残留磁化の測定方法、交流消磁、測定結果の統計処理法などについても、上記の報告（広岡他、1994）に詳しい説明がなされている。

個々の試料の残留磁化測定の結果（偏角、伏角、磁化強度）は第5～16表に示されている。1号窯上層床、同下層床、2号窯上層床、同下層床、4号窯、5号窯のそれぞれについての自然残留磁化（NRM）の測定結果は、第6、8、10、12、14、16表に、500e消磁後の磁化測定の結果は第7、9、11、13、15、17表にある。

フィッシャーの統計法（Fisher、1953）を用いて求めた各遺構ごとの平均偏角（D）、平均伏角（I）、フイッシャーの95%レベルの信頼角（α_{95}）、フイッシャーの精度係数（K）は、統計計算の際に用いた試料の個数（N）とともに第18表に示してある。これらが考古地磁気データとなる。この表から、1号窯の上・下層床、2号窯の上層床、および4号窯では、消磁をしたことによって、NRMのときより磁化方向のまとまりが悪くなっていることが分かる。これに対して、2号窯下層床と5号窯では、消磁によってまとまりが良くなっている。まとまりの良い方を考古地磁気データとして採用した。

考古地磁気推定年代

過去2000年間の西南日本の考古地磁気永年変化曲線（広岡、1977）に、第18表中の考古地磁気データとして採用した結果の平均偏角、平均伏角、α_{95}を記入したものが第46図である。それぞれの窯の平均磁化方向を示す黒丸が永年変化曲線のどの年代のところにあるかで年代の推定がなされ、α_{95}の円内に含まれる永年変化曲線の線分の長さが年代幅（誤差）を与える。1号窯上層床はα_{95}が大きいので年代幅も大きくなる。

この永年変化曲線が、昔の地磁気の方向を忠実に表しているという前提にたって、考古地磁気推定年代を求めると、

1号窯上層床	A.D.650年	＋ 80年
		－ 60年
1号窯下層床	A.D.645年	± 15年
2号窯上層床	A.D.630年	± 20年
2号窯下層床	A.D.595年	± 10年
4号窯	A.D.650年	± 10年
5号窯	A.D.655年	± 20年

となる。

〔引用文献〕

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere,Proc.Roy.Soc.London,A,vol.217,295-305.

Hirooka,K.(1971)Archaeomagnetic study for the past 2,000years in southwest Japan,Mem.Fac.Sci.,Kyoto Univ.,Ser.Geol.Mineral., vol.38,167-207.

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15,200-203.

広岡公夫、吉村勝之、味喜大介（1989）牧瓦窯跡群の考古地磁気測定、「近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告」、第1分冊、2、139-144.

広岡公夫、田中豊、森定尚（1991）北野遺跡土師器焼成坑群の考古地磁気測定、「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」、第2分冊、三重県埋蔵文化財調査報告 94－2、三重県埋蔵文化財センター、21－26.

広岡公夫、田中豊、森定尚（1992a）西ヶ谷古窯の考古地磁気測定、「西ヶ谷古窯跡群、一県道四日市鈴鹿環状線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」、四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅷ、四日市市遺跡調査会、41-44.

広岡公夫、田中豊、森定尚（1992b）泉貢窯跡の考古地磁気測定、「近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告」、第2分冊、三重県埋蔵文化財調査報告 101-2、三重県埋蔵文化財センター、43-46.

広岡公夫、黒原秀夫、田中彰子（1994）北野遺跡の考古地磁気測定、「北野遺跡」三重県埋蔵文化財センター（印刷中）

Imamiti, S. (1956) Secular variation of the magnetic declination,Mem.Kakioka Magnetic Observatory,vol.7,49－55.

Kawai,N.,K.Hirooka,S.Sasajima,K.Yaskawa,H.Ito and S.Kume (1965) Archaeomagnetic studies in southwestern Japen,Ann.Geophys.,t.21,574-578.

第6表　明気1号窯・上層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（×10^{-4} emu/g）
SMI 41	−7.7	63.7	30.6
42	−3.0	60.8	9.12
43	−12.4	52.6	25.2
44	−9.0	58.3	7.17
45	−17.2	54.6	8.14
＊ 46	107.9	−57.0	0.368
47	−23.6	56.0	7.86
＊ 48	−8.7	44.6	6.78
49	−15.0	60.2	7.87

＊：統計計算の際に除外したもの.

第7表　明気1号窯・上層床の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（×10^{-4} emu/g）
SMI 41	−5.7	63.1	29.0
42	−1.1	61.5	8.42
43	−11.9	52.0	24.6
44	−10.7	58.5	7.04
45	−17.0	53.6	7.87
＊ 46	119.0	−58.4	0.366
47	−25.4	55.9	7.78
＊ 48	−10.6	44.4	6.60
49	−15.0	60.7	7.93

＊：統計計算の際に除外したもの.

第8表　明気1号窯・下層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（×10^{-4} emu/g）
＊SMI 50	−6.2	59.6	2.05
51	−11.6	58.9	3.96
＊ 52	−21.7	62.1	11.9
53	−15.3	62.7	5.45
54	−15.5	60.0	8.68
55	−16.6	60.0	8.02
56	−15.3	59.1	8.01
57	−17.3	60.6	12.0
58	−16.3	59.9	7.01

＊：統計計算の際に除外したもの.

第9表　明気1号窯・下層床の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（×10^{-4} emu/g）
＊SMI 50	−6.5	59.3	1.93
51	−11.4	58.4	3.85
＊ 52	−22.5	62.3	11.7
53	−15.6	62.3	5.39
54	−15.7	60.1	8.64
55	−17.6	59.5	8.00
56	−14.9	59.5	7.99
57	−17.2	61.2	12.0
58	−16.3	60.3	6.92

＊：統計計算の際に除外したもの.

第10表　明気2号窯・上層床のNRMの磁化測定結果

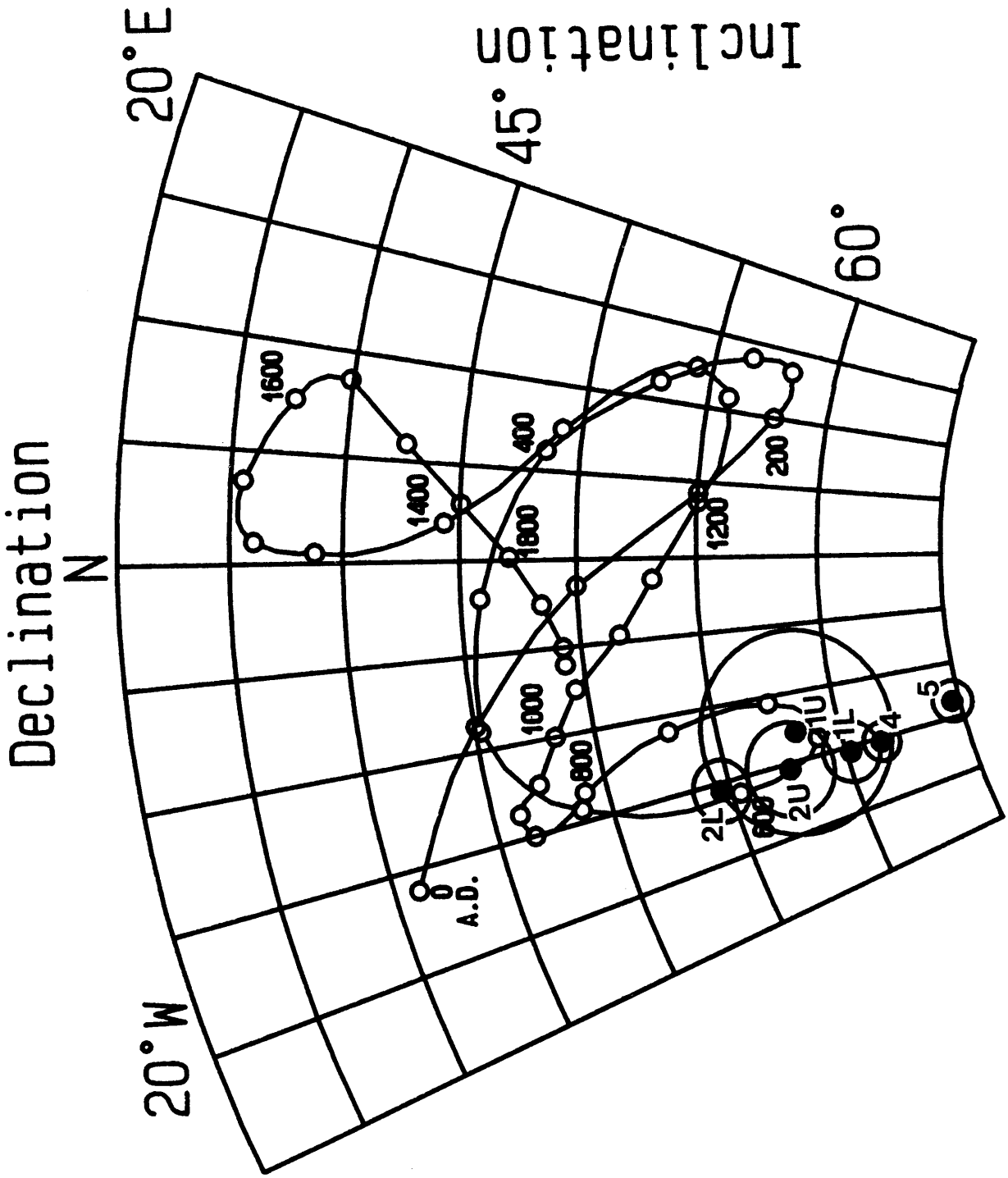
試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（×10^{-4} emu/g）
SMI 61	−19.0	58.9	5.09
＊ 62	−2.0	55.7	36.3
63	−21.0	57.2	4.59
64	−13.9	58.6	2.09
＊ 65	−13.5	47.1	1.12
66	−16.8	55.1	21.6
67	−10.2	58.0	2.98
68	−11.7	57.8	4.67
69	−15.3	57.1	5.24

＊：統計計算の際に除外したもの.

第11表　明気2号窯・上層床の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（×10^{-4} emu/g）
SMI 61	−19.2	58.1	4.94
＊ 62	−1.5	55.6	35.4
63	−20.4	57.0	4.49
64	−13.1	58.0	2.01
＊ 65	−14.4	45.8	1.05
66	−15.8	54.4	21.1
67	−9.0	56.9	2.84
68	−10.9	57.3	4.57
69	−15.6	58.9	5.04

＊：統計計算の際に除外したもの.



第46図　西南日本の考古地磁気永年変化（広岡、1977）と明気窯跡群の考古地磁気測定結果

1U：１号窯上層床、　1L：１号窯下層床、
2U：２号窯上層床、　2L：２号窯下層床、
4：　４号窯、　　5：　５号窯、
Declination：偏角、　Inclination：伏角.

第12表　明気2号窯・下層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
＊SMI 70	−6.4	50.4	2.54
＊ 71	−14.9	46.4	0.980
72	−14.4	54.7	4.08
＊ 73	−20.5	53.7	4.75
＊ 74	−4.6	48.6	8.52
75	−13.8	56.5	5.71
76	−16.0	54.4	5.71
77	−15.5	54.8	3.73
78	−14.0	52.4	6.70
79	−15.4	57.0	7.70
80	−14.4	54.2	6.31

＊：統計計算の際に除外したもの.

第13表　明気2号窯・下層床の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
＊SMI 70	−5.2	50.4	1.85
＊ 71	−12.5	46.4	0.792
72	−15.2	54.4	4.00
73	−19.9	53.7	4.69
＊ 74	−4.7	47.5	8.31
75	−13.9	56.4	5.75
76	−16.6	54.1	5.63
77	−14.7	54.6	3.59
78	−13.6	52.8	6.61
79	−15.9	56.5	7.55
80	−14.6	54.3	6.27

＊：統計計算の際に除外したもの.

第14表　明気4号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SIM 91	−19.6	62.1	2.20
＊ 92	−27.7	65.6	5.09
93	−16.9	61.9	2.23
94	−18.5	61.8	2.13
95	−17.4	62.1	1.98
96	−16.3	64.2	7.75
97	−15.0	59.2	3.56
98	−11.8	60.5	2.05
99	−11.4	64.4	6.76
100	−14.7	60.7	4.70
101	−16.1	58.5	2.97
102	−13.5	63.5	4.54
103	−11.4	61.9	4.36
104	−14.2	61.9	4.36
105	−13.1	59.7	3.33
106	−16.0	64.6	2.71
107	−15.5	61.7	3.18
108	−14.1	60.5	4.00
109	−15.2	59.9	1.83
110	−17.4	60.0	2.79
111	−16.8	60.8	1.90
112	−16.9	61.7	3.86
113	−15.6	61.3	2.48

＊：統計計算の際に除外したもの.

第15表　明気4号窯の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（$\times 10^{-4}$ emu/g）
SMI 91	−31.0	64.0	2.15
＊ 92	−44.6	66.2	5.00
93	−28.0	64.5	2.17
94	−30.9	63.9	2.06
95	−26.7	63.4	1.90
96	−23.2	65.9	7.56
97	−23.2	62.1	3.40
98	−19.6	63.4	1.99
99	−21.0	66.4	6.52
100	−20.6	63.4	4.56
101	−22.7	61.4	2.87
102	−25.4	65.3	4.13
103	−17.2	62.5	4.17
104	−20.0	62.6	4.09
105	−21.4	60.6	3.12
106	−21.2	66.6	2.58
107	−23.0	63.9	2.89
108	−18.9	61.3	3.83
109	−22.6	62.7	1.72
110	−25.1	64.0	2.56
111	−25.7	62.4	1.80
112	−20.9	64.7	3.68
113	−20.6	64.2	2.30

＊：統計計算の際に除外したもの.

第16表　明気5号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏　角（° E）	伏　角（°）	磁化強度（$\times 10^{-4}$ emu/g）
SMI 121	−15.9	59.4	2.30
122	−11.3	60.4	2.83
123	−10.9	58.8	2.45
124	−12.4	61.3	3.74
125	−16.1	59.8	3.45
126	−15.3	60.4	2.45
127	−15.0	65.5	2.73
128	−15.3	62.8	2.67
129	−10.9	62.4	3.82
130	−13.9	63.0	1.95
131	−19.4	60.4	4.56
132	−12.1	61.7	3.67
133	−14.0	62.5	4.32
134	−8.2	63.2	5.63
135	−6.9	62.8	4.88
136	−17.6	63.2	2.94
137	−21.5	65.2	2.02
138	−16.4	64.4	2.53
139	−15.3	65.8	4.67
140	−15.1	66.3	3.91
141	−14.6	65.9	4.72
142	−9.6	66.1	4.47
143	−10.7	66.0	29.7
144	−7.7	66.8	22.4
145	−8.5	66.1	17.8
146	−17.4	64.1	1.65
147	−13.0	63.1	2.29
148	−14.3	64.2	4.01
149	−12.0	64.1	2.39
150	−12.1	63.4	3.42
151	−11.5	64.5	4.01
152	−8.7	65.2	15.6
153	−7.4	66.7	10.9
154	−8.0	64.6	6.05
155	−12.0	68.3	10.9

第17表　明気5号窯の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏　角 (° E)	伏　角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SMI 121	−16.9	61.3	2.34
122	−12.9	61.5	2.76
123	−13.3	60.9	2.38
124	−12.7	62.2	3.74
125	−17.4	60.8	3.47
126	−15.8	61.6	2.49
127	−16.1	66.6	2.77
128	−14.8	63.8	2.68
129	−11.9	63.0	3.85
130	−16.9	63.8	1.97
131	−19.7	61.3	4.67
132	−13.1	63.0	3.73
133	−13.6	63.4	4.35
134	−8.4	64.1	5.63
135	−7.6	63.3	4.88
136	−21.1	64.9	2.96
137	−23.2	65.9	2.04
138	−16.6	66.2	2.57
139	−16.0	66.6	4.64
140	−14.6	67.2	3.91
141	−13.9	66.8	4.69
142	−9.6	67.1	4.47
143	−11.4	66.0	29.3
144	−8.3	66.8	22.3
145	−9.0	66.4	17.5
146	−18.1	66.0	1.64
147	−12.8	65.4	2.27
148	−13.2	66.2	3.96
149	−11.4	66.0	2.38
150	−10.3	64.8	3.38
151	−13.4	66.2	3.91
152	−8.3	64.9	15.5
153	−9.2	67.0	10.7
154	−9.7	65.0	6.03
155	−12.5	68.2	10.6

第18表　明気窯跡群の考古地磁気測定結果

窯跡名	N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
明気1号窯　上層床						
NRM	7	−12.9	58.2	3.93	236.9	13.7
(50 0e	7	−12.8	58.1	4.39	190.1	13.2)
明気1号窯　下層床						
NRM	7	−15.4	60.2	1.16	2692.1	7.59
(50 0e	7	−15.5	60.2	1.22	2448.0	7.54)
明気2号窯　上層床						
(NRM	7	−15.4	57.6	1.80	1124.4	6.61)
50 0e	7	−14.8	57.3	1.99	921.2	6.43
明気2号窯　下層床						
NRM	7	−14.8	54.9	1.19	2558.0	5.71)
(50 0e	8	−15.5	54.6	1.18	2191.1	5.51
明気4号窯						
NRM	22	−15.3	61.5	0.74	1748.7	3.44
(50 0e	22	−23.1	63.6	0.87	1264.9	3.28)
明気5号窯						
(NRM	35	−12.9	63.7	0.85	818.7	5.94)
50 0e	35	−13.5	64.7	0.80	925.5	5.90

N：試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、α_{95}：フィッシャーの信頼角、
K：フィッシャーの精度係数.
（ ）は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す.

10. 明気窯跡群および明気古墳群出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻　利一

1）はじめに

日本列島の土台を形成する岩石は花崗岩類である。全国各地の花崗岩類を分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を示すことが判明した。すべての元素は岩石中に単独では存在しない。化合物を作って存在する。岩石中の化合物のことを我々は鉱物と呼んでいる。岩石は鉱物の集合体である。

花崗岩類中の主成分鉱物は長石類、石英、雲母類、角閃石類である。当然、主成分元素KとCaはこれら主成分鉱物中に含有される。その主成分鉱物こそ、長石類である。長石類はいくつかの長石族から成り立っている。主な長石族はカリ長石、斜長石、正長石である。Kはカリ長石に、Caは斜長石に、そして、Naは主として正長石中に含まれるものと思われる。一方、微量元素RbとSrはどの鉱物中に含まれるかは直接、検出する方法はない。しかし、間接的に知る方法はある。それは主成分元素との相関性を知ることによって手掛かりが得られる。全国の花崗岩類について相関性を求めたところ、微量元素Rbは主成分元素Kと相関係数が0.8程度の、高い正の相関性をもつことがわかった。同様に、微量元素Srは主成分元素Caと良好な正の相関性をもつこともわかった。このことはRbはカリ長石中に、また、Srは斜長石中に存在することを示している。

このような関係は窯跡出土須恵器にもみられる。そして、須恵器窯の後背地が　花崗岩類で形成される場合には、ほとんどの場合、須恵器の化学特性は花崗岩類の化学特性によく対応する。このことは須恵器の素材粘土中に含まれるK、Ca、Rb、Sr、は一次岩石である花崗岩類中の長石類に由来することを示唆している。このような考え方から、K、Ca、Rb、Sr、を長石系因子と名付ける。他方、Fe、Mg、Ti、などは雲母、角閃石などの有色鉱物系因子と名付けられる。

筆者が窯跡出土須恵器の相互識別にK、Ca、Rb、Sr因子をセットにして使用するのは以上のような考え方があるからである。そして、実際、これら長石系因子は実に有効に、各地の窯跡出土須恵器の地域差を表示することが判明した。

このような地域差が整理されれば、古墳出土須恵器の元素分析のデータを窯跡に結び付けることによって、その産地を推定することができる。

以上が須恵器産地推定法の基本的な考え方である。

もう一つ、重要な問題がある。窯跡からは大量の須恵器片が出土するし、花崗岩類にいたっては一山全体、または、一つの半島全体が花崗岩類からなり立っている。当然、これらを全て、分析する訳にはいかない。それは不可能である。このような場合には、自然科学分野では確率論に基づく、抜きとり検査の考え方を持ち出す。すなわち、工場で生産した、全ての製品を破壊して検査する訳にはいかないので、一部の製品を抜きとって検査し、全体の製品の特性を推計する訳である。同様に、同一花崗岩帯の何ヶ所かから試料を採集して分析し、その岩帯の花崗岩の化学特性を推計するのである。また、一基の窯跡または一つの窯跡群から一定数量の試料片を採集して分析し、その窯跡または窯跡群から出土する須恵器の化学特性を推計するのである。

以上が古代土器の産地推定法に確率論が導入される理由である。

こうして、産地推定法は地球化学理論と確率論の組み合わせの上に成り立つことが理解できる。

本報告では明気窯群、中尾窯、根後2号窯、大仏八端1号窯出土須恵器の化学特性を明らかにし、その相互識別の結果を報告するとともに、その供給先とみられる明気古墳群、河田古墳群、上ノ垣外遺跡、さらには、昼河A－2号墳出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2）分析方法

従来どおり、須恵器小片の表面を研磨して、灰釉等の付着物を除去したのち、100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は高圧をかけてプレスし、内径20㎜、厚さ3～5㎜の錠剤試料にして蛍光X線分析を行っ

た。

窯間の相互識別には定性的にはRb－Sr分布図とK－Ca分布図を使用したが、定量的にはマハラノビスの汎距離の2乗値を計算し、2群間判別分析を適用した。また、古墳出土須恵器の産地推定にはHotellingのT^2検定を活用した。これらの統計計算にはパソコンが利用された。

3）分析結果

表18には窯跡出土須恵器の分析値が示されている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料JG－1による標準化値で表示されている。

はじめに、図47、48には明気1．2号窯の須恵器のRb－Sr分布図とK－Ca分布図を示す。よくまとまって分布しており、明気1号窯と明気2号窯の須恵器の相互識別は困難であることを示している。他方、図49、50には、明気4．5号窯の須恵器のRb－Sr分布図とK－Ca分布図を示してある。明気3号窯と明気4号窯の須恵器胎土も類似していることを示している。これらの図においては、両群の須恵器のほとんどを包含するようにして、明気1．2号群領域と明気4．5号群領域を示してある。これらの領域は定量的に領界を示している訳ではないが、領域を比較する上には十分役に立つ。図47～50を比較すると、明気1．2号窯の須恵器には明気4．5号窯の須恵器に比べて、K、Rb量がやや多く、Ca、Sr量も多いことがわかる。さらに重要な点はこれらの図から、明気1．2号窯は明気4．5号窯から、これらの因子を使って相互識別される可能性が示唆されている点である。そこで、両群間の2群間判別分析を試みた。その結果は図51に示されている。両軸にとったD^2（1）とD^2（4）はそれぞれ、明気1．2号群、明気4．5号群の重心からのマハラノビスの汎距離の2乗値である。各群の領界を決定するために、5％の危険率をかけたHotellingのT^2検定が行われた。その結果、明気1．2号群の領界はD^2（1）≦10であり、また、明気4．5号群の領界はD^2（4）≦10であることがわかる。実際、図51をみると、この領域にそれぞれ両群の試料のほとんどが分布していることがわかる。両群の試料が完全に分離するためには、互いに相手群が遠く離れることが必要である。仮に、この条件をD^2（相手群）＞10とおくと、D^2（1．2号群）≦10、D^2（4．5号群）＞10は理想的な明気1．2号群領域となり、D^2（4．5号群）≦10、D^2（1．2号群）＞10は理想的な明気4．5号群領域となる。実際に、このような理想的な分布する例もかなりあるが、多くの場合、一部の試料はD^2（A群）≦10、D^2（B群）≦10の重複領域に分布する。この領域はどういう意味をもつ領域であるかというと、2群間判別において、両群への帰属条件を満足する領域である。つまり、両群の試料の大半がこの領域に混在するということは、両群の化学特性が類似しており、相互識別が困難であることを意味する。実際に、同一窯群の中から、任意に2つの窯をとり出して2群間判別を行う場合、このような分布になる場合が多い。ところが、明気窯群では図51に示すように、一部の試料が重複領域に分布するだけで、大部分の試料はそれぞれ理想的1．2号群領域と理想的4．5号群領域に分かれて分布し、十分、相互識別ができることを示している。

図52には明気3号窯灰原から出土した須恵器のRb－Sr分布図を示す。かなりばらついて分布しており、そのうち半数は明気4．5号領域に分布する。図53にはK－Ca分布図を示す。この図でも一部は明気4．5号領域に分布するが、大部分はCa量が少なく、両領域をずれて分布する。このことから、明気3号窯の須恵器は明気1．2号群や明気4．5号群から相互識別できる可能性をもつことがわかる。

そこで、明気3号群と明気1．2号群の2群間判別の結果を図54に示す。明気3号群の須恵器試料の大部分は重複領域に分布するものの、相手の明気1．2号群の試料のほとんどが理想的な明気1．2号群領域に分布するため、両者の相互識別は十分可能であることがわかる。同様に、Rb－Sr、K－Caの両分布図から予想されるように、明気3号群と明気4．5号群の相互識別も不完全ではあるが、可能であることがわかった。

図55，60には中尾窯の須恵器のRb－Sr分布図，K－Ca分布図を示す。いずれも、かなりばらついて分布しているが、明気1．2号群領域や明気4．5号群領域には一部が分布するにすぎない。これら

の母集団とは部分的に相互識別は可能である。

図57、58には、根後2号窯の須恵器のRb－Sr、K－Ca分布図を示す。明気3号窯や中尾窯の須恵器に比べて、かなりまとまって分布している。そして、いずれの図においても、明気1．2号群領域や明気4．5号群領域から大部分の試料がずれて分布することがわかる。両群からの2群間判別の結果、十分相互識別されていることが判明した。

図59、60には大仏八端1号窯の須恵器のRb－Sr、K－Ca分布図を示す。この窯の試料の大半は明気1．2号群領域や明気4．5号群領域に重なって分布する。したがって、これら両群との相互識別は困難である。

大仏八端1号窯と根後2号窯の相互識別の例を図61に示しておく。重複領域に分布する試料は多いものの、相互識別はある程度はできることを示している。

以上にみてきたように、明気窯群周辺の窯跡出土須恵器の化学特性は必ずしも単純ではない。K、Ca、Rb、Sr，の4因子で明気1．2号群と明気4．5号群が、また、根後1号群と明気1．2号群，明気4．5号群が相互識別できたり、その他、根後1号群の須恵器にはNa量が少なく、Na因子で他の窯から相互識別できたり、また、明気4．5号群の須恵器にはFe量が多く、Fe因子でも明気1．2号群の須恵器とは異なったりする。このような化学特性の違いは後背地の地質の複雑さに起因するものと推測される。このことは窯ごとに素材粘土の採集地も異なることを示唆している。

後背地の地質が単純な地域の窯群の場合、同一窯群内の窯間の相互識別が困難であるのが普通である。猿投窯群や岐阜県各務原市の稲田山窯群などがその例である。それに比べて、明気窯群周辺では須恵器の化学特性は均一ではなく、相互識別ができる場合もあることを今回の分析データは示している。逆に、この特異性を活用すれば、古墳出土須恵器が明気窯群周辺のどの窯の製品であるかがわかることになる。次に、古墳出土須恵器の胎土分析の結果について説明する。

表19には、古墳出土須恵器の分析データをまとめてある。なお、この表には明気1．2号群、3号群、4．5号群からのマハラノビスの汎距離の二乗値も示されている。5％の危険率をかけたHotellingのT^2検定で母集団の領界はD^2（X）≦10（Xは母集団名）であるから、もし、古墳出土須恵器の中に、窯群、（X）で作られた須恵器が含まれておれば、当然D^2（X）≦10の条件を満足する。つまり、D^2（X）≦10は古墳出土須恵器にとって窯群、（X）への帰属条件ということになる。このように帰属条件は決められたものの、D^2（X）＝12～11の距離にある試料も（X）母集団への帰属を否定できないので、可能性はあるということで、（？）符号を付して産地推定しておいた。推定結果はRb－Sr分布図とK－Ca分布図で再確認してみた。

明気1号墳のNo1、2の試料は時期的にも対応する明気1．2号群と明気4．5号群には対応しない。このことは図62のRb－Sr分布図と図63のK－Ca分布図からも理解される。No1、2は産地不明となった。No2はCa、Fe、Naが少ない点を考慮に入れると、猿投窯群の製品である可能性が高い。No1は不明である。

明気3号墳のNo3の長頸壺には「N」というヘラ記号がある。このヘラ記号は明気1．2号窯群の須恵器の特徴のようである。予想どおり、D^2（明気1．2号群）＝6.5であり、明気1．2号群産と推定された。考古学的推定と胎土分析による産地推定が合致した例である。図62、63でも、No3は明気1．2号群領域に分布している。明気6号墳のNo5の試料も明気1．2号群の製品である可能性が高い。これに対して、明気6号墳の他の須恵器、No4、6、7、8、9、10は明気4．5号群産である可能性が高い。そのことは図62、63からも理解される。

河田C－18号墳のNo11、12の須恵器は明気1．2号群産と推定された。図64、65にRb－Sr分布図とK－Ca分布図を示してあるが、2点とも明気4．5号群領域よりも、明気1．2号群領域によく対応していることがわかる。

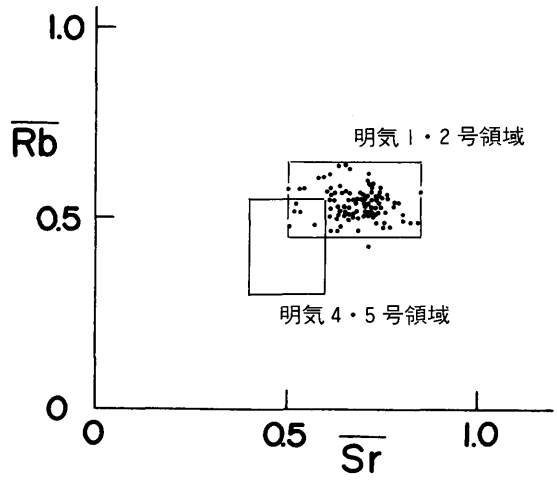
上ノ垣外遺跡出土須恵器のRb－Sr分布図を図66に、また、K－Ca分布図を図67に示す。No19、22、24の3点を除く他の試料はいずれも、明気1．2号群領域によく対応していることがわかる。表19でも、

No19、22、24の3点を除いてすべて、明気1．2号群への帰属条件を満足している。

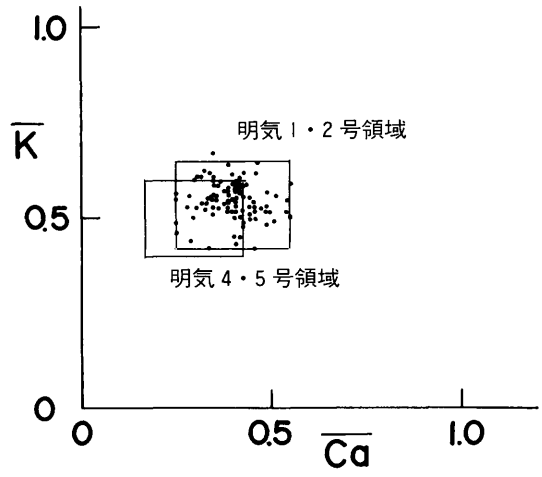
No19、24は表19では明気3号群と推定されている。Na因子でも、その方がよく合う。No22は明気窯群の製品ではない。猿投窯群産の可能性もあるが、Fe量が多く、この点で猿投群産の可能性についても疑問をもつ。産地不明としておく方が無難である。

このようにして、明気窯群周辺に在る古墳出土須恵器の多くは明気窯群の製品であることが胎土分析によっても立証された。しかし、外部地域からの搬入品とみられる須恵器も、ごく少数ではあるが存在することも確認された。さらに、ヘラ記号を目印とした考古学的な産地推定と胎土分析による産地推定がよく一致した結果を与えた点も、きわめて注目すべき点である。

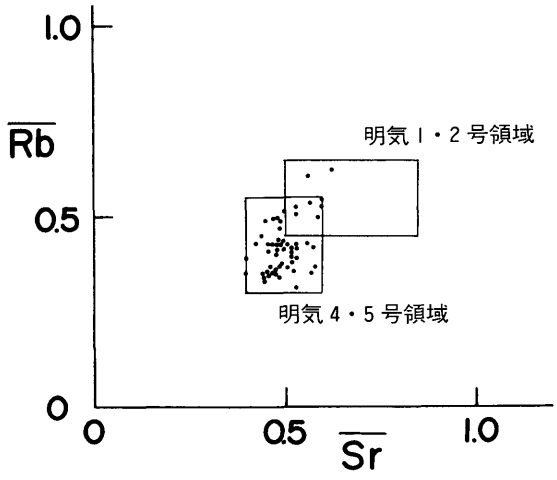
最後に、昼河古墳群出土須恵器のRb－Sr分布図を図68に、また、K－Ca分布図を図69に示す。明気窯群の領域に対応するものは少ないことがわかる。Ca、Sr量が少ない点で猿投群の須恵器に類似するが、Fe量が少し多い点で、逆に、猿投窯群産とするのに疑問が生じる。三河地域の須恵器はこれ程、Ca、Sr量は少なくないので、その可能性は少ない。やはり、目下のところ産地不明としておくほかない。



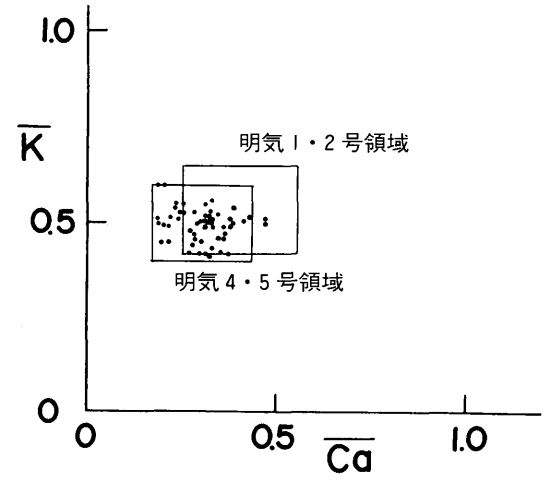
第47図　明気１・２号窯出土須恵器のRb–Sr分布図



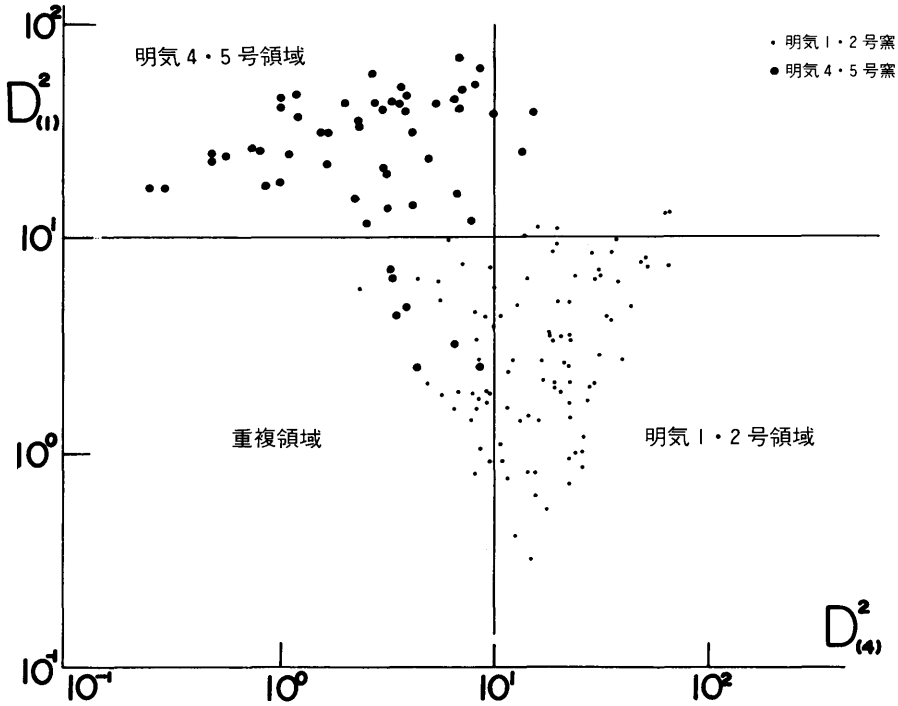
第48図　明気１・２号窯出土須恵器のK–Ca分布図



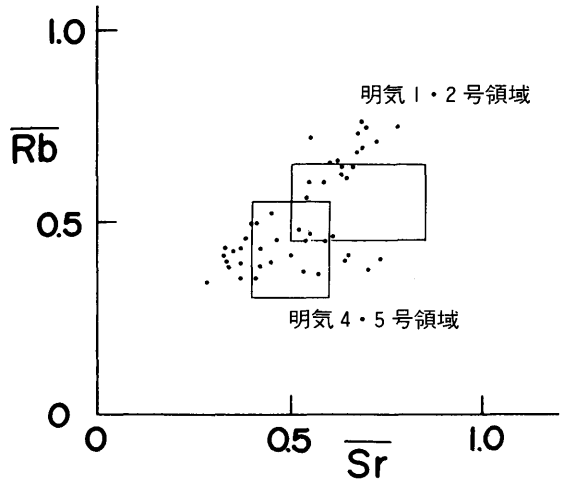
第49図　明気４・５号窯出土須恵器のRb–Sr分布図



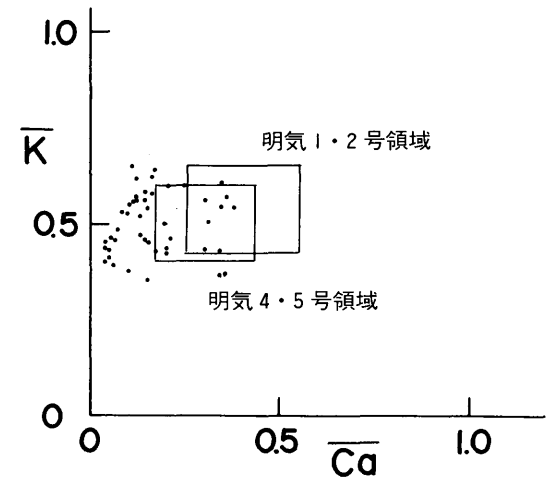
第50図　明気４・５号窯出土須恵器のK–Ca分布図



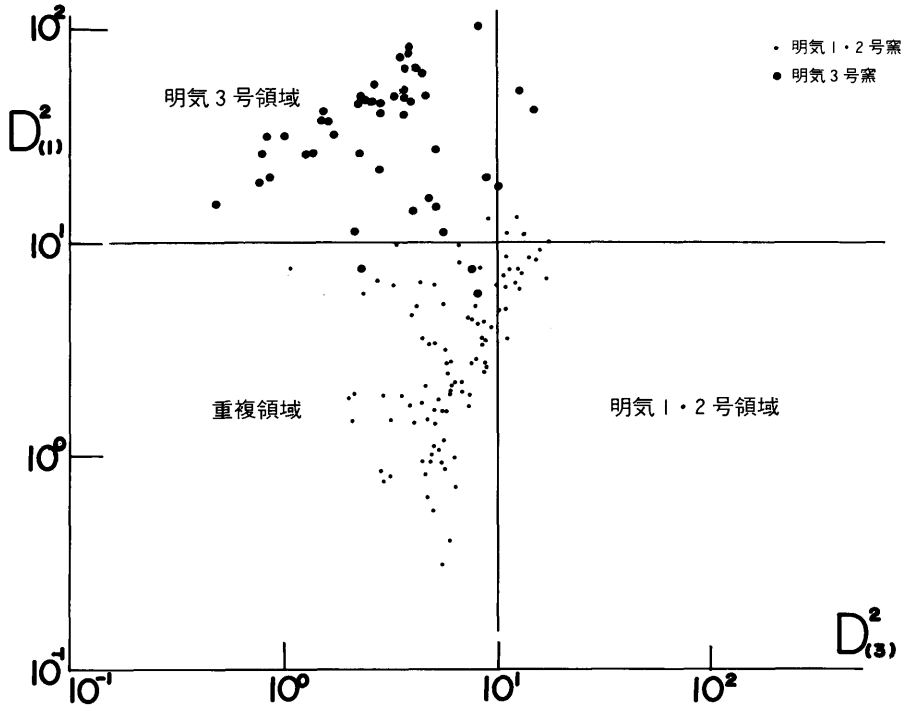
第51図　明気１・２号群と明気４・５号群との相互識別（K，Ca，Rb，Sr因子使用）



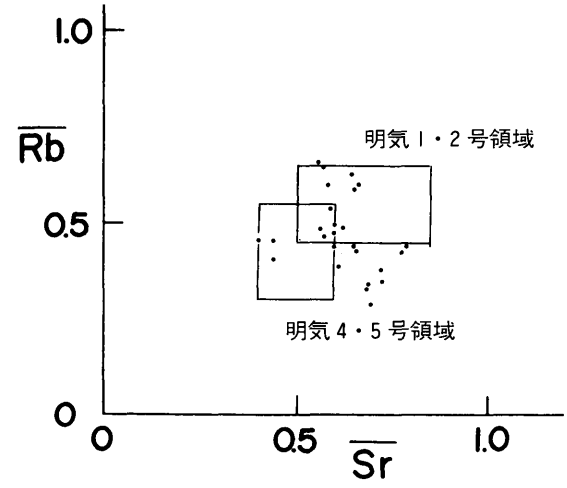
第52図　明気３号窯灰原出土須恵器のRb-Sr分布図



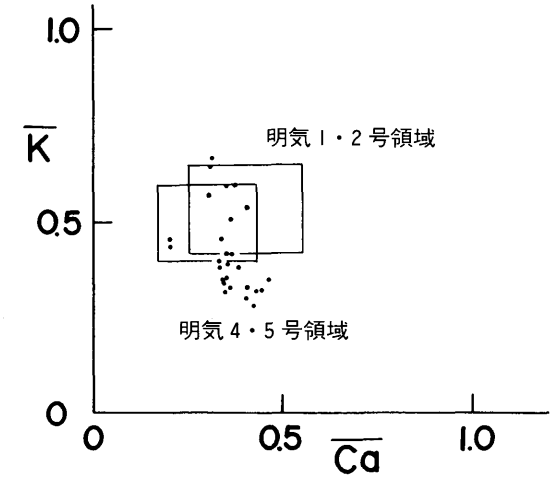
第53図　明気３号窯灰原出土須恵器のK-Ca分布図



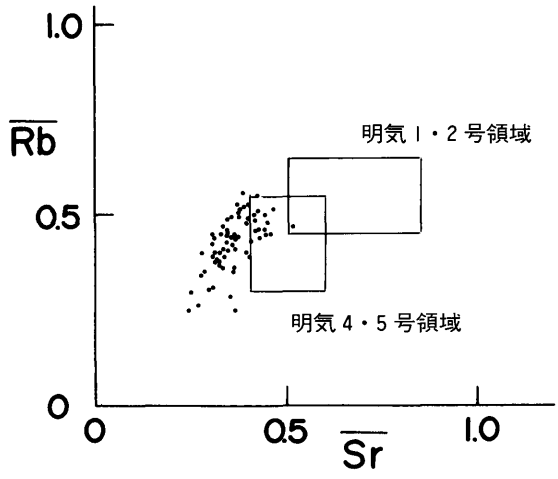
第54図　明気１・２号群と明気３号群との相互識別（K，Ca，Rb，Sr因子使用）



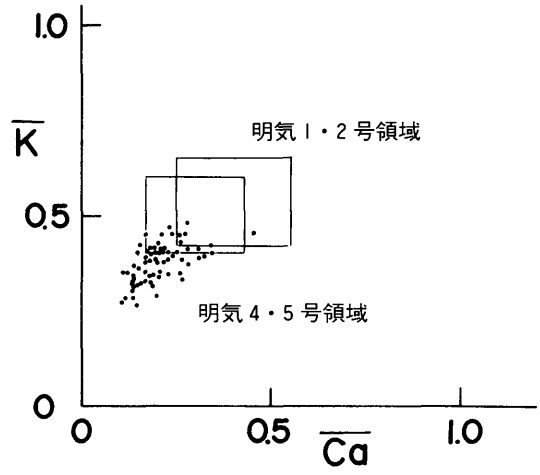
第55図　中尾窯出土須恵器のRb-Sr分布図



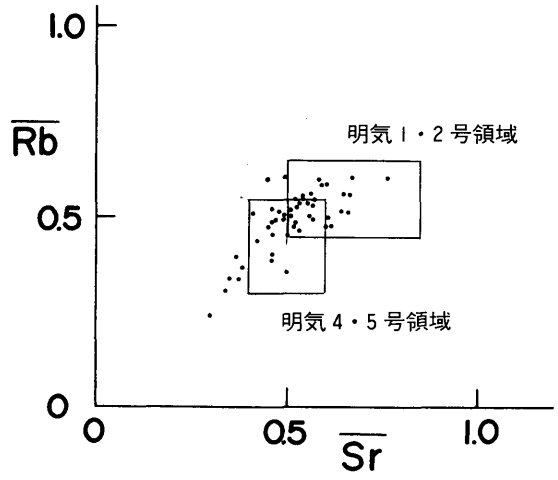
第56図　中尾窯出土須恵器のK-Ca分布図



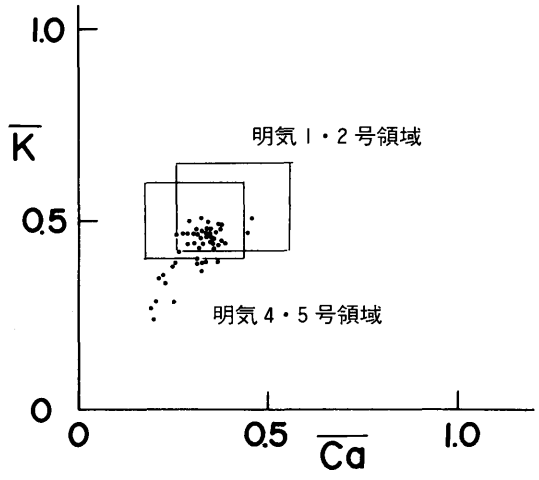
第57図　根後 2 号窯出土須恵器のRb–Sr分布図



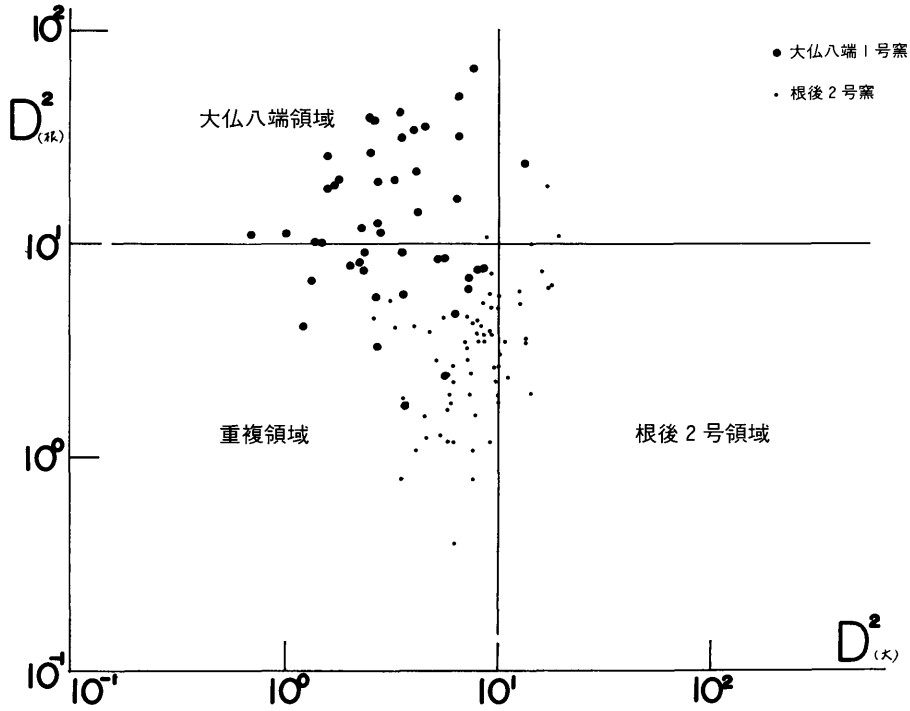
第58図　根後 2 号窯出土須恵器のK–Ca分布図



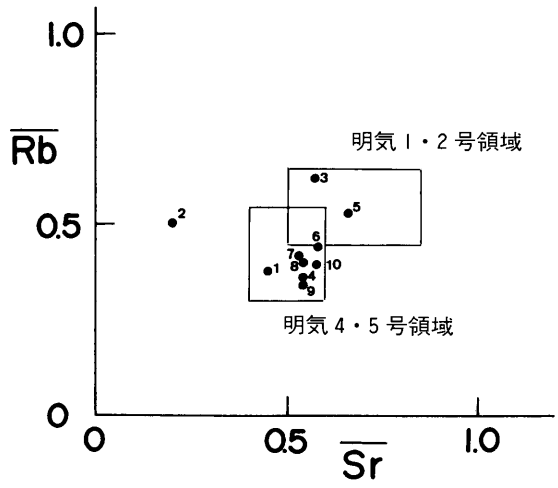
第59図　大仏八端 1 号窯出土須恵器のRb–Sr分布図



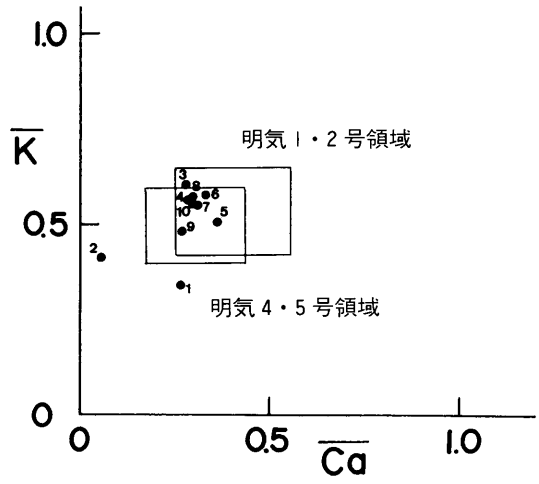
第60図　大仏八端 1 号窯出土須恵器のK–Ca分布図



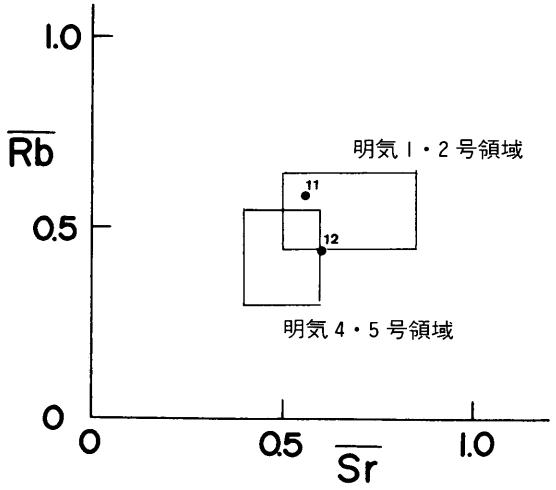
第61図　根後群と大仏八端群の相互識別（K，Ca，Rb，Sr因子使用）



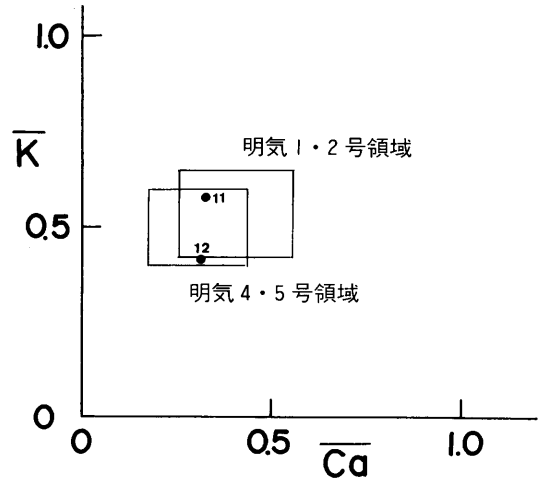
第62図　明気古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図



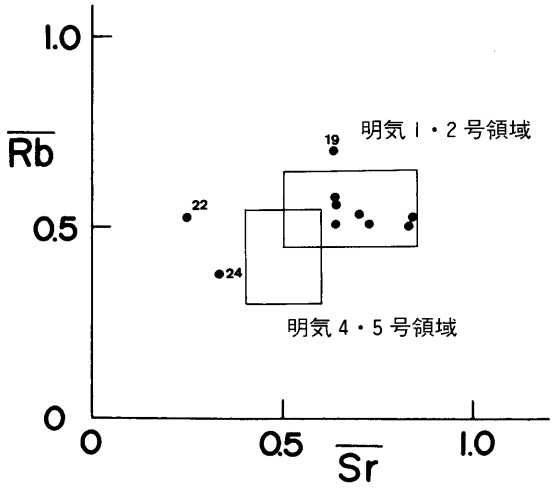
第63図　明気古墳群出土須恵器のK-Ca分布図



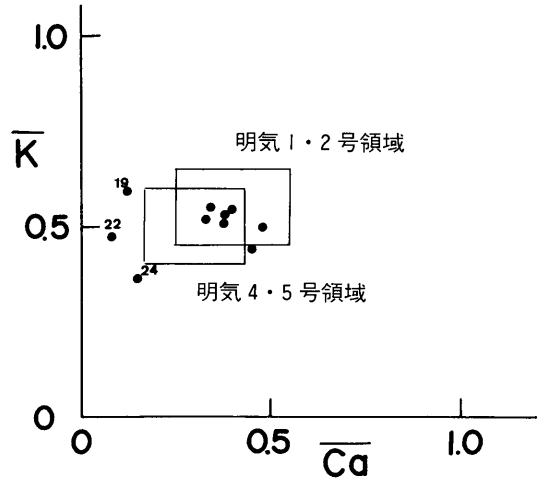
第64図　河田Ｃ－18号墳出土須恵器のRb-Sr分布図



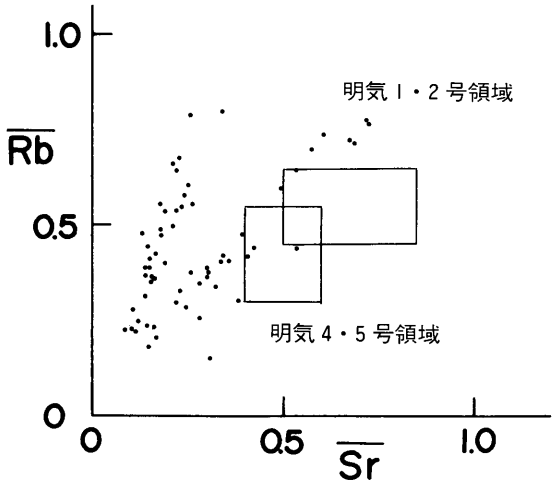
第65図　河田Ｃ－18号墳出土須恵器のK-Ca分布図



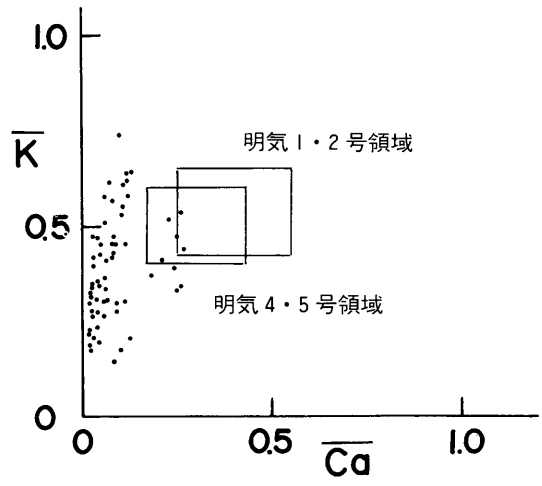
第66図　上ノ垣外遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図



第67図　上ノ垣外遺跡出土須恵器のK-Ca分布図



第68図　昼河古墳群墳出土須恵器のRb-Sr分布図



第69図　昼河古墳群墳出土須恵器のK-Ca分布図

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
中尾窯	5-2380	No.103	須恵器	0.301	0.403	1.71	0.335	0.691	0.191
〃	2381	104	〃	0.338	0.361	1.53	0.441	0.651	0.226
〃	2382	105	〃	0.506	0.355	1.61	0.596	0.579	0.298
〃	2383	106	〃	0.648	0.312	1.86	0.652	0.566	0.446
〃	2384	107	〃	0.320	0.426	1.66	0.384	0.721	0.200
〃	2385	108	〃	0.422	0.354	1.65	0.504	0.603	0.288
〃	2386	109	〃	0.328	0.404	1.67	0.350	0.730	0.204
〃	2387	110	〃	0.283	0.419	1.83	0.289	0.696	0.198
〃	2388	111	〃	0.317	0.352	1.62	0.392	0.611	0.201
〃	2389	112	〃	0.541	0.399	1.70	0.589	0.650	0.334
〃	2390	113	〃	0.354	0.458	1.54	0.440	0.792	0.239
〃	2391	114	〃	0.432	0.174	2.16	0.448	0.379	0.178
〃	2392	115	〃	0.321	0.438	1.80	0.335	0.692	0.204
〃	2393	116	〃	0.347	0.338	1.58	0.441	0.602	0.215
〃	2394	117	〃	0.418	0.362	1.60	0.539	0.588	0.267
〃	2395	118	〃	0.603	0.348	1.78	0.634	0.637	0.376
〃	2396	119	〃	0.397	0.327	1.48	0.486	0.564	0.202
〃	2397	120	〃	0.606	0.372	1.80	0.604	0.656	0.379
〃	2398	121	〃	0.388	0.354	1.57	0.476	0.599	0.251
〃	2399	122	〃	0.383	0.376	1.57	0.485	0.622	0.249
〃	2400	123	〃	0.339	0.267	2.46	0.336	0.386	0.061
〃	2401	124	〃	0.668	0.309	1.82	0.657	0.554	0.396
〃	2402	125	〃	0.383	0.333	1.68	0.474	0.567	0.177
〃	2403	126	〃	0.437	0.192	2.20	0.455	0.399	0.185
〃	2404	127	〃	0.465	0.338	2.19	0.411	0.439	0.267
〃	2405	128	〃	0.347	0.444	1.56	0.432	0.775	0.212
〃	2406	129	〃	0.350	0.345	1.66	0.426	0.555	0.198
〃	2407	130	〃	0.462	0.199	1.85	0.455	0.438	0.213
〃	2408	131	〃	0.469	0.232	2.18	0.501	0.467	0.266
〃	2409	132	〃	0.448	0.362	1.60	0.541	0.586	0.265

第19－1表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気1号	5-2280	No. 1	須恵器	0.532	0.485	1.96	0.539	0.794	0.430
〃	2281	2	〃	0.450	0.412	1.54	0.477	0.769	0.249
〃	2282	3	〃	0.479	0.492	1.71	0.492	0.842	0.392
〃	2283	4	〃	0.422	0.337	1.67	0.482	0.644	0.298
〃	2284	5	〃	0.598	0.406	2.22	0.630	0.662	0.385
〃	2285	6	〃	0.613	0.421	2.22	0.554	0.689	0.442
〃	2286	7	〃	0.533	0.354	2.25	0.524	0.637	0.391
〃	2287	8	〃	0.593	0.423	2.13	0.551	0.720	0.412
〃	2288	9	〃	0.408	0.170	2.16	0.459	0.374	0.155
〃	2289	10	〃	0.550	0.251	2.33	0.561	0.612	0.217
〃	2290	11	〃	0.641	0.385	1.97	0.616	0.708	0.442
〃	2291	12	〃	0.536	0.330	2.29	0.564	0.637	0.328
〃	2292	13	〃	0.525	0.276	2.16	0.575	0.500	0.270
〃	2293	14	〃	0.597	0.301	1.74	0.611	0.594	0.387
〃	2294	15	〃	0.592	0.435	2.03	0.561	0.734	0.469
〃	2295	16	〃	0.509	0.345	2.03	0.503	0.627	0.310
〃	2296	17	〃	0.618	0.344	1.94	0.623	0.613	0.332
〃	2297	18	〃	0.455	0.252	2.10	0.482	0.504	0.261
〃	2298	19	〃	0.442	0.291	2.05	0.518	0.527	0.240
〃	2299	20	〃	0.621	0.398	2.06	0.641	0.650	0.330
〃	2300	21	〃	0.586	0.345	2.40	0.555	0.606	0.395
〃	2301	22	〃	0.550	0.390	1.72	0.594	0.724	0.400
〃	2302	23	〃	0.604	0.346	2.28	0.554	0.621	0.427
〃	2303	24	〃	0.538	0.316	2.18	0.533	0.614	0.277
〃	2304	25	〃	0.528	0.333	2.18	0.527	0.632	0.337
〃	2305	26	〃	0.534	0.391	2.00	0.571	0.763	0.403
〃	2306	27	〃	0.569	0.386	2.05	0.571	0.686	0.372
〃	2307	28	〃	0.496	0.297	2.17	0.539	0.524	0.288
〃	2308	29	〃	0.532	0.307	2.31	0.493	0.574	0.317
〃	2309	30	〃	0.555	0.248	1.81	0.577	0.536	0.328
〃	2310	31	〃	0.449	0.416	1.50	0.494	0.817	0.291
〃	2311	32	〃	0.588	0.401	1.86	0.581	0.737	0.427
〃	2312	33	〃	0.560	0.429	1.62	0.540	0.776	0.248
〃	2313	34	〃	0.551	0.362	2.07	0.554	0.686	0.393
〃	2314	35	〃	0.611	0.306	1.95	0.583	0.609	0.417
〃	2315	36	〃	0.620	0.432	2.06	0.578	0.721	0.483
〃	2316	37	〃	0.677	0.346	2.56	0.569	0.602	0.424
〃	2317	38	〃	0.430	0.411	1.46	0.505	0.803	0.271
〃	2318	39	〃	0.562	0.355	1.84	0.531	0.650	0.394
〃	2319	40	〃	0.585	0.414	2.13	0.590	0.715	0.408
〃	2320	41	〃	0.560	0.293	2.11	0.581	0.528	0.287
〃	2321	42	〃	0.546	0.357	2.11	0.551	0.664	0.355
〃	2322	43	〃	0.517	0.397	2.45	0.472	0.606	0.233
〃	2323	44	〃	0.607	0.353	1.84	0.566	0.651	0.399
〃	2324	45	〃	0.557	0.345	2.21	0.536	0.584	0.332
〃	2325	46	〃	0.543	0.380	1.85	0.517	0.676	0.442
〃	2326	47	〃	0.491	0.250	2.16	0.517	0.523	0.290
〃	2327	48	〃	0.606	0.312	2.09	0.607	0.582	0.407
〃	2328	49	〃	0.602	0.410	2.15	0.538	0.699	0.439
〃	2329	50	〃	0.577	0.389	1.67	0.597	0.712	0.367

第19-2表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺　跡　名	分析番号	試料番号	種　類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気2号窯	2330	No. 51	須恵器	0.530	0.464	2.12	0.528	0.728	0.316
〃	2331	52	〃	0.492	0.429	1.87	0.519	0.702	0.225
〃	2332	53	〃	0.565	0.408	1.89	0.556	0.708	0.415
〃	2333	54	〃	0.566	0.393	1.93	0.553	0.697	0.371
〃	2334	55	〃	0.550	0.549	1.96	0.543	0.782	0.283
〃	2335	56	〃	0.494	0.509	1.90	0.521	0.723	0.224
〃	2336	57	〃	0.526	0.452	1.73	0.541	0.737	0.318
〃	2337	58	〃	0.562	0.447	1.90	0.548	0.731	0.392
〃	2338	59	〃	0.516	0.433	2.29	0.497	0.656	0.292
〃	2339	60	〃	0.498	0.432	1.91	0.512	0.708	0.228
〃	2340	61	〃	0.412	0.448	1.49	0.488	0.750	0.280
〃	2341	62	〃	0.588	0.559	1.73	0.571	0.846	0.302
〃	2342	63	〃	0.502	0.461	1.93	0.488	0.734	0.276
〃	2343	64	〃	0.580	0.414	2.32	0.511	0.652	0.381
〃	2344	65	〃	0.523	0.457	1.93	0.516	0.736	0.321
〃	2345	66	〃	0.557	0.412	1.93	0.545	0.668	0.336
〃	2346	67	〃	0.539	0.459	2.04	0.509	0.691	0.294
〃	2347	68	〃	0.501	0.447	1.85	0.510	0.724	0.268
〃	2348	69	〃	0.520	0.505	1.90	0.518	0.751	0.298
〃	2349	70	〃	0.601	0.369	1.94	0.565	0.659	0.366
〃	2350	71	〃	0.622	0.465	2.19	0.567	0.720	0.485
〃	2351	72	〃	0.528	0.371	2.12	0.526	0.604	0.219
〃	2352	73	〃	0.517	0.545	2.02	0.492	0.796	0.301
〃	2353	74	〃	0.523	0.486	2.02	0.524	0.712	0.281
〃	2354	75	〃	0.571	0.410	1.99	0.556	0.692	0.298
〃	2355	76	〃	0.509	0.434	2.22	0.504	0.678	0.303
〃	2356	77	〃	0.566	0.485	2.23	0.529	0.724	0.360
〃	2357	78	〃	0.565	0.385	2.28	0.522	0.641	0.386
〃	2358	79	〃	0.561	0.523	2.14	0.558	0.743	0.371
〃	2359	80	〃	0.554	0.337	1.61	0.573	0.620	0.349
〃	2360	81	〃	0.516	0.389	2.13	0.474	0.634	0.296
〃	2361	82	〃	0.500	0.434	1.75	0.535	0.738	0.331
〃	2362	83	〃	0.653	0.467	2.04	0.553	0.726	0.471
〃	2363	84	〃	0.496	0.411	1.88	0.470	0.685	0.328
〃	2364	85	〃	0.554	0.351	1.95	0.526	0.650	0.331
〃	2365	86	〃	0.537	0.406	1.87	0.514	0.658	0.337
〃	2366	87	〃	0.634	0.332	1.63	0.640	0.626	0.381
〃	2367	88	〃	0.499	0.391	1.72	0.510	0.671	0.188
〃	2368	89	〃	0.583	0.360	1.73	0.575	0.643	0.339
〃	2369	90	〃	0.481	0.431	1.89	0.510	0.717	0.268
〃	2370	91	〃	0.416	0.464	2.24	0.413	0.714	0.309
〃	2371	92	〃	0.533	0.484	2.06	0.520	0.701	0.283
〃	2372	93	〃	0.577	0.413	1.83	0.535	0.713	0.473
〃	2373	94	〃	0.503	0.557	2.39	0.493	0.754	0.269
〃	2374	95	〃	0.520	0.503	2.03	0.545	0.767	0.371
〃	2375	96	〃	0.547	0.394	2.27	0.523	0.639	0.292
〃	2376	97	〃	0.541	0.408	2.20	0.514	0.657	0.335
〃	2377	98	〃	0.589	0.526	2.17	0.574	0.741	0.372
〃	2378	99	焼　台	0.750	0.214	1.42	0.537	1.17	0.511
〃	2379	100	〃	0.812	2.60	2.35	0.639	1.25	0.593

第19-3表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺　跡　名	分析番号	試料番号	種　類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気3号窯灰原	6-632	No155	杯 フ タ	0.618	0.159	1.78	0.650	0.599	0.210
〃	633	156	〃	0.527	0.080	1.24	0.604	0.551	0.182
〃	634	157	〃	0.406	0.048	1.45	0.386	0.327	0.065
〃	635	158	〃	0.431	0.052	1.41	0.421	0.345	0.079
〃	636	159	〃	0.402	0.038	1.40	0.413	0.325	0.071
〃	637	150	〃	0.550	0.145	1.88	0.604	0.584	0.231
〃	638	161	〃	0.544	0.148	2.01	0.556	0.538	0.202
〃	639	162	〃	0.503	0.204	3.00	0.381	0.419	0.183
〃	640	163	〃	0.392	0.059	1.76	0.336	0.284	0.050
〃	641	164	坏　身	0.459	0.059	1.33	0.453	0.377	0.086
〃	642	165	〃	0.540	0.342	2.93	0.369	0.533	0.166
〃	643	166	〃	0.472	0.127	2.18	0.393	0.372	0.103
〃	645	167	〃	0.354	0.150	1.38	0.351	0.370	0.076
〃	646	168	〃	0.572	0.123	1.32	0.732	0.674	0.255
〃	645	169	〃	0.353	0.151	1.55	0.354	0.413	0.086
〃	647	170	〃	0.522	0.133	2.17	0.434	0.415	0.131
〃	648	171	〃	0.476	0.070	1.24	0.486	0.414	0.099
〃	649	172	〃	0.558	0.135	1.18	0.661	0.618	0.223
〃	650	173	坏 フ タ	0.424	0.204	1.16	0.409	0.498	0.128
〃	651	174	〃	0.432	0.038	1.46	0.430	0.332	0.063
〃	652	175	〃	0.433	0.177	1.22	0.451	0.460	0.135
〃	653	176	〃	0.600	0.245	1.34	0.705	0.716	0.234
〃	654	177	〃	0.455	0.213	1.24	0.471	0.548	0.152
〃	655	178	〃	0.194	0.116	2.02	0.168	0.267	0.042
〃	656	179	〃	0.579	0.161	1.93	0.717	0.554	0.215
〃	657	180	〃	0.430	0.198	1.31	0.392	0.451	0.074
〃	658	181	〃	0.362	0.343	1.31	0.402	0.636	0.182
〃	659	182	坏　身	0.533	0.096	1.62	0.517	0.454	0.155
〃	660	183	〃	0.325	0.304	1.43	0.357	0.574	0.151
〃	661	184	〃	0.659	0.107	1.03	0.737	0.162	0.189
〃	662	185	〃	0.360	0.349	1.35	0.414	0.648	0.182
〃	663	186	高　坏	0.555	0.113	1.98	0.680	0.671	0.281
〃	664	187	〃	0.602	0.195	1.87	0.620	0.632	0.254
〃	665	188	〃	0.640	0.169	1.25	0.761	0.676	0.235
〃	666	189	〃	0.433	0.338	1.87	0.452	0.589	0.176
〃	667	190	カ　メ	0.545	0.100	1.50	0.640	0.629	0.236
〃	668	191	〃	0.464	0.058	1.44	0.487	0.395	0.108
〃	669	192	〃	0.574	0.355	1.86	0.614	0.644	0.402
〃	670	193	〃	0.454	0.038	1.58	0.434	0.371	0.066
〃	671	194	〃	0.556	0.300	2.55	0.476	0.518	0.313
〃	672	195	〃	0.614	0.346	1.78	0.642	0.660	0.385
〃	673	196	〃	0.585	0.141	1.19	0.748	0.775	0.298
〃	674	197	〃	0.494	0.310	2.81	0.450	0.542	0.259
〃	675	198	〃	0.537	0.381	2.76	0.455	0.608	0.333
〃	676	199	〃	0.615	0.118	1.16	0.747	0.691	0.259
〃	677	200	フ　タ	0.568	0.121	1.56	0.694	0.677	0.265
〃	678	201	堤　瓶	0.350	0.520	2.08	0.395	0.735	0.224
〃	679	202	〃	0.329	0.470	1.94	0.371	0.695	0.244
〃	680	203	フ　タ	0.183	0.222	1.99	0.232	0.430	0.099
〃	681	204	横　瓶	0.369	0.102	1.25	0.377	0.342	0.064

第19－4表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺　跡　名	分析番号	試料番号	種　類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気4号窯床面	6-682	No205	坏　身	0.491	0.196	3.65	0.353	0.400	0.144
〃	683	206	〃	0.420	0.265	2.73	0.347	0.451	0.157
〃	684	207	〃	0.436	0.276	2.64	0.365	0.471	0.173
〃	685	208	杯フタ	0.506	0.177	2.81	0.426	0.511	0.148
〃	686	209	高　坏	0.548	0.230	2.16	0.432	0.561	0.221
〃	687	210	カ　メ	0.537	0.232	2.90	0.496	0.479	0.216
〃	288	211	〃	0.498	0.185	2.81	0.494	0.490	0.190
明気5号床面	689	212	擂　鉢	0.512	0.237	3.78	0.391	0.399	0.177
〃	690	213	カ　メ	0.532	0.284	2.14	0.530	0.528	0.335
〃	691	214	〃	0.486	0.210	2.86	0.467	0.492	0.207
〃	692	215	〃	0.522	0.311	2.60	0.495	0.593	0.286
〃	693	216	〃	0.457	0.283	2.57	0.428	0.461	0.239
〃	694	217	〃	0.558	0.329	2.61	0.525	0.600	0.287
〃	695	218	〃	0.505	0.466	3.43	0.371	0.578	0.259
〃	696	219	〃	0.508	0.308	2.65	0.442	0.501	0.285
〃	697	220	〃	0.501	0.294	2.83	0.423	0.475	0.292
〃	698	221	〃	0.498	0.326	3.04	0.414	0.481	0.295
〃	699	222	〃	0.491	0.313	2.45	0.429	0.518	0.271
〃	700	223	杯フタ	0.488	0.329	2.88	0.405	0.522	0.282
〃	701	224	〃	0.526	0.251	3.38	0.427	0.432	0.188
〃	702	225	〃	0.517	0.224	3.38	0.453	0.440	0.181
〃	703	226	〃	0.507	0.375	3.35	0.394	0.532	0.278
〃	704	227	〃	0.452	0.295	4.09	0.325	0.446	0.189
〃	705	228	杯　身	0.602	0.197	1.98	0.612	0.563	0.158
〃	706	229	平　瓶	0.626	0.873	3.42	0.429	0.916	0.279
〃	707	230	カ　メ	0.551	0.313	2.30	0.514	0.526	0.361
〃	708	231	〃	0.496	0.288	2.11	0.418	0.528	0.332
〃	709	232	〃	0.522	0.343	2.00	0.553	0.601	0.358
〃	710	233	〃	0.500	0.321	2.84	0.439	0.492	0.317
〃	711	234	〃	0.487	0.360	3.44	0.369	0.491	0.250
〃	712	235	〃	0.512	0.316	1.97	0.541	0.572	0.357
〃	713	236	〃	0.546	0.252	2.91	0.524	0.499	0.243
〃	714	237	〃	0.503	0.381	3.41	0.370	0.510	0.272
〃	715	238	〃	0.642	0.143	1.57	0.795	0.519	0.235
〃	716	239	〃	0.472	0.356	3.46	0.356	0.478	0.238
〃	717	240	堤　瓶	0.533	0.236	3.29	0.487	0.453	0.210
〃	718	241	坏　身	0.602	0.178	1.88	0.625	0.626	0.157
明気5号窯灰原	719	242	堤　瓶	0.497	0.473	3.54	0.354	0.568	0.337
〃	720	243	杯　身	0.526	0.320	3.40	0.404	0.475	0.268
〃	721	244	〃	0.520	0.426	4.39	0.341	0.486	0.286
〃	722	245	カ　メ	0.421	0.368	3.37	0.307	0.534	0.236
〃	723	246	〃	0.505	0.413	3.64	0.355	0.520	0.302
〃	724	247	〃	0.411	0.316	3.36	0.336	0.447	0.229
〃	725	248	〃	0.473	0.277	2.56	0.433	0.492	0.272
〃	726	249	〃	0.540	0.381	3.50	0.402	0.482	0.282
〃	727	250	〃	0.421	0.292	2.22	0.422	0.515	0.247
〃	728	251	〃	0.515	0.317	2.96	0.422	0.499	0.267
〃	729	252	〃	0.450	0.206	3.17	0.381	0.419	0.229
〃	730	253	〃	0.479	0.275	2.82	0.412	0.460	0.274
〃	731	254	〃	0.510	0.326	3.04	0.425	0.483	0.273

第19－5表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺　跡　名	分析番号	試料番号	種　類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気5号窯灰原	6-732	No.255	坏　身	0.445	0.189	1.42	0.429	0.468	0.090
〃	733	256	高　坏	0.498	0.382	3.44	0.391	0.533	0.278
〃	734	257	カ　メ	0.424	0.346	3.24	0.349	0.483	0.253
〃	735	258	〃	0.463	0.355	3.49	0.350	0.474	0.233
〃	736	259	〃	0.426	0.329	3.20	0.351	0.461	0.252
〃	737	260	〃	0.459	0.348	3.59	0.372	0.478	0.228
〃	738	261	〃	0.415	0.310	3.20	0.345	0.456	0.242
大仏八端1号窯	6-868	No.391	坏　身	0.396	0.323	1.82	0.482	0.609	0.191
〃	869	392	〃	0.394	0.360	1.74	0.474	0.533	0.359
〃	870	393	〃	0.292	0.250	2.86	0.310	0.342	0.179
〃	871	394	〃	0.291	0.196	1.49	0.395	0.365	0.097
〃	872	395	〃	0.477	0.308	1.26	0.553	0.566	0.209
〃	873	396	〃	0.465	0.307	1.52	0.593	0.594	0.194
〃	874	397	〃	0.441	0.353	2.18	0.494	0.521	0.253
〃	875	398	〃	0.460	0.316	1.99	0.479	0.451	0.401
〃	876	399	〃	0.471	0.339	2.35	0.503	0.486	0.294
〃	877	400	〃	0.274	0.185	1.70	0.342	0.373	0.086
〃	878	401	〃	0.486	0.374	1.73	0.496	0.565	0.261
〃	879	402	〃	0.441	0.376	1.87	0.524	0.658	0.218
〃	880	403	〃	0.472	0.332	1.53	0.588	0.604	0.217
〃	881	404	〃	0.422	0.261	1.51	0.519	0.479	0.154
〃	882	405	〃	0.443	0.302	1.53	0.571	0.558	0.199
〃	883	406	〃	0.477	0.341	1.97	0.536	0.531	0.269
〃	884	407	〃	0.449	0.345	2.05	0.483	0.612	0.202
〃	885	408	〃	0.497	0.285	1.80	0.606	0.485	0.169
〃	886	409	〃	0.477	0.342	2.03	0.511	0.514	0.268
〃	887	410	〃	0.505	0.449	1.41	0.609	0.761	0.203
〃	888	411	坏　身	0.470	0.303	1.66	0.509	0.558	0.211
〃	889	412	〃	0.484	0.370	1.88	0.549	0.539	0.345
〃	890	413	〃	0.509	0.316	2.32	0.534	0.456	0.281
〃	891	414	〃	0.474	0.326	1.64	0.597	0.580	0.237
〃	892	415	〃	0.244	0.198	2.71	0.250	0.296	0.149
〃	893	416	〃	0.392	0.246	1.39	0.500	0.472	0.136
〃	894	417	〃	0.386	0.308	1.68	0.499	0.605	0.190
〃	895	418	〃	0.469	0.444	2.03	0.518	0.642	0.396
〃	896	419	〃	0.361	0.221	1.63	0.444	0.418	0.112
〃	897	420	〃	0.450	0.366	1.93	0.541	0.549	0.268
〃	898	421	〃	0.501	0.335	2.01	0.542	0.525	0.217
〃	899	422	〃	0.439	0.361	1.33	0.612	0.674	0.232
〃	900	423	〃	0.468	0.269	2.14	0.605	0.454	0.141
〃	901	424	〃	0.457	0.331	2.00	0.492	0.522	0.254
〃	902	425	坏フタ	0.440	0.277	2.30	0.485	0.456	0.206
〃	903	426	〃	0.450	0.353	1.53	0.572	0.647	0.246
〃	904	427	〃	0.472	0.249	1.34	0.545	0.523	0.220
〃	905	428	カ　メ	0.368	0.322	1.66	0.391	0.464	0.385
〃	906	429	〃	0.342	0.220	1.84	0.368	0.376	0.320
〃	907	430	〃	0.428	0.351	1.80	0.456	0.495	0.432
〃	908	431	〃	0.393	0.330	1.92	0.458	0.464	0.305
〃	909	432	〃	0.444	0.317	2.21	0.358	0.498	0.205
〃	910	433	〃	0.346	0.207	1.85	0.341	0.353	0.285

第19－6表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺　跡　名	分析番号	試料番号	種　類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
大仏八端1号窯	6-911	No.434	カ　メ	0.377	0.241	2.37	0.518	0.410	0.144
〃	912	435	〃	0.403	0.310	1.75	0.404	0.463	0.338
〃	913	436	〃	0.471	0.358	1.48	0.570	0.656	0.234
〃	914	437	〃	0.467	0.281	1.61	0.540	0.565	0.150
〃	915	438	横瓶？	0.490	0.365	1.93	0.554	0.541	0.342
〃	916	439	カメ？	0.444	0.322	1.86	0.521	0.514	0.234
〃	917	440	短頸壺	0.448	0.335	2.21	0.511	0.494	0.288
根後2号窯	6-802	No.325	坏フタ？	0.386	0.284	3.08	0.476	0.393	0.115
〃	803	326	〃	0.337	0.229	3.09	0.449	0.358	0.092
〃	804	327	〃	0.267	0.105	2.94	0.249	0.244	0.038
〃	805	328	カ　メ	0.324	0.136	2.26	0.346	0.281	0.056
〃	806	329	坏フタ？	0.351	0.170	1.99	0.406	0.336	0.100
〃	807	330	〃　？	0.321	0.153	2.22	0.349	0.362	0.044
〃	808	331	〃　？	0.279	0.142	3.39	0.263	0.257	0.038
〃	809	332	〃	0.304	0.136	2.83	0.336	0.273	0.064
〃	810	333	〃	0.395	0.172	2.29	0.452	0.340	0.087
〃	811	334	〃	0.395	0.194	2.43	0.391	0.404	0.124
〃	812	335	坏　身	0.331	0.142	1.91	0.382	0.320	0.086
〃	813	336	〃	0.319	0.154	1.86	0.411	0.357	0.092
〃	814	337	〃	0.416	0.150	1.78	0.447	0.337	0.091
〃	815	338	〃	0.387	0.170	2.36	0.432	0.340	0.079
〃	816	339	〃	0.447	0.239	2.82	0.458	0.420	0.162
〃	817	340	〃	0.345	0.109	1.87	0.441	0.360	0.106
〃	818	341	〃	0.410	0.222	3.14	0.439	0.353	0.124
〃	819	342	〃	0.403	0.204	2.39	0.399	0.392	0.130
〃	820	343	〃	0.371	0.141	1.94	0.463	0.344	0.113
〃	821	344	〃	0.390	0.323	3.55	0.462	0.415	0.186
〃	822	345	高　坏	0.414	0.282	2.93	0.508	0.424	0.144
〃	823	346	〃	0.395	0.148	2.52	0.439	0.312	0.075
〃	824	347	〃	0.399	0.183	3.39	0.451	0.297	0.084
〃	825	348	カ　メ	0.405	0.215	3.02	0.505	0.367	0.106
〃	826	349	〃	0.380	0.226	2.03	0.450	0.440	0.137
〃	827	350	横　瓶	0.409	0.177	2.19	0.421	0.350	0.090
〃	828	351	カ　メ	0.377	0.215	3.00	0.487	0.344	0.098
〃	829	352	〃	0.351	0.214	3.12	0.438	0.364	0.094
〃	830	353	〃	0.424	0.259	2.84	0.525	0.392	0.116
〃	831	354	〃	0.375	0.197	3.31	0.348	0.360	0.102
〃	832	355	〃	0.452	0.174	2.47	0.495	0.348	0.105
〃	833	356	〃	0.424	0.204	2.71	0.434	0.404	0.142
〃	834	357	〃	0.403	0.216	1.94	0.462	0.435	0.160
〃	835	358	〃	0.392	0.244	2.92	0.498	0.374	0.111
〃	836	359	カ　メ	0.382	0.204	1.98	0.436	0.423	0.135
〃	837	360	〃	0.421	0.339	3.38	0.499	0.436	0.195
〃	838	361	坏フタ	0.387	0.277	2.89	0.499	0.407	0.112
〃	839	362	〃	0.338	0.211	3.41	0.363	0.329	0.088
〃	840	363	〃　？	0.310	0.188	3.54	0.387	0.305	0.060
〃	841	364	坏　身？	0.335	0.180	3.27	0.396	0.312	0.070
〃	842	365	坏フタ？	0.259	0.148	2.36	0.250	0.359	0.059
〃	843	366	〃　？	0.375	0.179	3.20	0.399	0.268	0.083
〃	844	367	〃　？	0.329	0.173	3.20	0.396	0.318	0.076

第19－7表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
根後2号窯	6-845	No.368	坏フタ？	0.471	0.234	2.78	0.557	0.377	0.113
〃	846	369	〃 ？	0.279	0.124	2.36	0.296	0.287	0.054
〃	847	370	〃 ？	0.324	0.184	2.88	0.392	0.334	0.069
〃	848	371	〃 ？	0.402	0.251	3.36	0.486	0.390	0.118
〃	849	372	〃 ？	0.347	0.124	2.14	0.371	0.321	0.086
〃	850	373	〃 ？	0.343	0.160	3.92	0.286	0.241	0.039
〃	851	374	坏身	0.290	0.199	3.38	0.383	0.309	0.084
〃	852	375	〃	0.445	0.275	2.25	0.534	0.390	0.130
〃	853	376	高坏	0.419	0.306	3.08	0.523	0.464	0.129
〃	854	377	〃	0.455	0.259	2.57	0.547	0.415	0.119
〃	855	378	カメ	0.452	0.207	2.51	0.526	0.365	0.101
〃	856	379	〃	0.479	0.277	3.09	0.513	0.366	0.132
〃	857	380	〃	0.452	0.449	2.79	0.471	0.516	0.159
〃	858	381	〃	0.376	0.165	2.58	0.429	0.304	0.091
〃	859	382	〃	0.305	0.135	1.97	0.376	0.313	0.122
〃	860	383	〃	0.390	0.314	3.51	0.486	0.409	0.161
〃	861	384	〃	0.403	0.337	3.94	0.479	0.440	0.185
〃	862	385	不明	0.344	0.137	1.80	0.409	0.333	0.110
〃	863	386	カメ	0.396	0.230	1.97	0.449	0.451	0.145
〃	864	387	〃	0.328	0.265	4.35	0.280	0.352	0.104
〃	865	388	〃 ？	0.363	0.150	2.90	0.308	0.301	0.051
〃	866	389	〃 ？	0.337	0.179	2.68	0.474	0.326	0.074
〃	867	390	〃	0.410	0.190	3.10	0.454	0.325	0.092

第19－8表　三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号・種類等			K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2 (明気1・2)	D^2 (明気3)	D^2 (明気4・5)	推定産地
明気1号墳	5-2410	棺外	坏身	No.1	0.343	0.264	2.44	0.381	0.446	0.144	32	8.2	21	不明
〃	2411	棺内	〃	No.2	0.418	0.051	1.91	0.495	0.199	0.076	54	47	77	不明
明気3号墳	5-2412	棺内	長頸壷	ヘラ記号有 No.3	0.613	0.275	1.63	0.627	0.565	0.399	6.5	9.5	11	明気1・2群
明気6号墳	5-2413	棺跡	坏フタ	No.4	0.559	0.291	2.80	0.365	0.543	0.270	65	23	12	明気4・5群(?)
〃	2414	棺外	高坏	5	0.508	0.362	1.65	0.527	0.656	0.361	0.91	2.6	12	明気群
〃	2415	棺跡	坏身	6	0.581	0.330	2.63	0.443	0.580	0.280	27	11	11	明気4・5群
〃	2416	〃	〃	7	0.562	0.296	2.70	0.420	0.532	0.277	34	9.9	8.0	〃
〃	2417	〃	〃	8	0.557	0.291	2.77	0.397	0.541	0.296	45	14	12	〃
〃	2418	〃	〃	9	0.480	0.259	2.43	0.361	0.537	0.293	47	11	12	〃
〃	2419	〃	〃	10	0.569	0.286	2.84	0.404	0.557	0.304	47	18	12	〃
河田C-18号墳	5-2420		坏身	11	0.581	0.321	2.04	0.588	0.558	0.397	4.5	12	9.9	明気1・2群
〃	2421		〃	12	0.411	0.313	1.78	0.442	0.605	0.277	10	1.9	19	〃
上ノ垣外	5-2422	No.16	須		0.441	0.451	1.46	0.497	0.828	0.312	10	10	70	明気群
〃	2423	17	〃		0.510	0.378	1.67	0.561	0.635	0.369	4.4	8.3	15	明気1・2群
〃	2424	19	〃		0.588	0.118	1.60	0.704	0.626	0.193	53	2.4	20	明気3群
〃	2425	21	〃		0.543	0.396	1.79	0.526	0.699	0.367	0.90	4.4	17	明気1・2群
〃	2426	22	〃		0.468	0.084	2.26	0.533	0.252	0.112	40	41	61	不明
〃	2427	23	〃		0.497	0.481	1.55	0.521	0.837	0.280	6.7	10	60	明気1・2群
〃	2428	24	〃		0.361	0.154	1.98	0.383	0.333	0.162	44	10	25	不明
〃	2429	25	〃		0.525	0.383	1.76	0.509	0.721	0.299	4.0	5.8	24	明気1・2群
〃	2430	26	〃		0.517	0.329	1.92	0.507	0.643	0.251	3.3	2.1	10	明気群
〃	2431	27	〃		0.548	0.344	1.77	0.573	0.640	0.367	1.7	4.1	9.9	〃

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
昼河A-2号墳	6-739	No. 262	杯フタ	0.639	0.134	1.35	0.770	0.717	0.284
〃	740	263	〃	0.423	0.052	3.28	0.478	0.130	0.074
〃	741	264	鉢	0.348	0.041	2.25	0.428	0.165	0.079
〃	742	265	短頸壷	0.465	0.080	3.19	0.410	0.359	0.224
〃	743	266	〃	0.298	0.067	1.89	0.302	0.382	0.160
〃	744	267	杯フタ	0.566	0.082	2.98	0.614	0.249	0.246
〃	745	268	杯身	0.511	0.059	3.29	0.484	0.181	0.176
〃	746	269	〃	0.446	0.094	2.35	0.423	0.405	0.180
〃	747	270	ハソウ	0.289	0.095	1.20	0.382	0.305	0.115
〃	748	271	坏身	0.415	0.082	2.18	0.442	0.527	0.170
〃	749	272	坏フタ	0.637	0.124	1.41	0.781	0.701	0.281
〃	750	273	坏身	0.453	0.047	2.41	0.539	0.194	0.091
〃	751	274	台付長頸壷	0.475	0.031	2.55	0.665	0.207	0.068
〃	752	275	坏身	0.608	0.111	1.46	0.722	0.681	0.286
〃	753	276	短頸壷	0.445	0.078	3.60	0.437	0.422	0.212
〃	754	277	坏身	0.454	0.115	1.74	0.577	0.235	0.074
昼河A-1号墳	755	278	無蓋高坏	0.412	0.065	3.45	0.538	0.217	0.094
〃	756	279	三連壷	0.345	0.028	3.42	0.394	0.153	0.051
〃	757	280	有蓋高坏蓋	0.173	0.107	3.15	0.210	0.171	0.048
〃	758	281	〃	0.385	0.030	1.91	0.478	0.387	0.050
〃	759	282	〃	0.141	0.091	3.44	0.183	0.148	0.057
〃	760	283	杯フタ	0.328	0.045	2.11	0.292	0.237	0.055

第20－1表　三重県内古墳等出土須恵器の分析データ

遺　跡　名	分析番号	試料番号	種　類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
昼河A－1号墳	6-761	284	坏　身	0.306	0.025	2.18	0.369	0.299	0.044
〃	762	285	有蓋高坏蓋	0.575	0.062	2.22	0.700	0.568	0.209
〃	763	286	〃	0.612	0.067	2.16	0.738	0.598	0.209
〃	764	287	高坏脚部	0.267	0.090	2.57	0.413	0.335	0.062
〃	765	288	台付長頸壷	0.302	0.116	1.53	0.416	0.338	0.102
昼河A－4号墳	766	289	坏　身	0.200	0.125	3.15	0.150	0.307	0.040
昼河B－5号墳	767	290	ハ　ソ　ウ	0.515	0.226	4.14	0.648	0.526	0.150
〃	768	291	坏　フ　タ	0.328	0.249	4.10	0.348	0.282	0.116
〃	769	292	坏　身	0.340	0.260	4.04	0.341	0.320	0.112
〃	770	293	〃	0.439	0.272	4.61	0.259	0.283	0.132
昼河B－7号墳	771	294	ハ　ソ　ウ	0.416	0.087	2.24	0.553	0.230	0.125
〃	772	295	坏　身	0.410	0.208	5.48	0.399	0.193	0.078
〃	773	296	坏　フ　タ	0.473	0.248	4.96	0.561	0.260	0.107
〃	774	297	〃	0.228	0.043	2.70	0.315	0.143	0.053
〃	775	298	坏　身	0.368	0.183	3.34	0.329	0.231	0.129
〃	776	299	坏　フ　タ	0.389	0.240	3.42	0.388	0.300	0.179
〃	777	300	坏　身	0.258	0.031	2.73	0.345	0.156	0.082
〃	778	301		0.273	0.034	2.75	0.359	0.157	0.083
昼河C－11号墳	779	302	台付長頸壷	0.580	0.122	1.13	0.726	0.673	0.249
昼河C－12号墳	780	303	横　瓶	0.620	0.115	1.68	0.800	0.335	0.213
〃	781	304	坏　身	0.198	0.035	2.35	0.250	0.132	0.043
〃	782	305	〃	0.211	0.020	2.26	0.225	0.114	0.020
〃	783	306	坏　フ　タ	0.328	0.065	2.04	0.376	0.263	0.068
〃	784	307	坏　身	0.266	0.044	2.37	0.234	0.113	0.062
〃	785	308	〃	0.301	0.071	2.08	0.300	0.221	0.080
〃	786	309	〃	0.469	0.043	2.50	0.556	0.176	0.101
昼河C－13号墳	787	310	高　坏	0.190	0.048	3.07	0.230	0.157	0.029
〃	788	311	坏　フ　タ	0.302	0.038	2.85	0.366	0.139	0.034
〃	789	312	短　頸　壷	0.286	0.021	2.22	0.410	0.149	0.037
昼河C－14号墳	790	313	横　瓶	0.737	0.095	1.84	0.789	0.247	0.241
〃	791	314	坏　フ　タ	0.539	0.105	2.37	0.679	0.219	0.246
〃	792	315	平　瓶	0.415	0.030	1.53	0.502	0.206	0.064
〃	793	316	坏　身	0.534	0.105	2.84	0.653	0.215	0.220
〃	794	317	〃	0.221	0.023	1.15	0.392	0.139	0.039
〃	795	318	坏　フ　タ	0.312	0.025	1.80	0.445	0.145	0.045
昼河C－15号墳	796	319	平　瓶	0.184	0.021	2.74	0.280	0.112	0.022
〃	797	320	坏　身	0.360	0.062	2.94	0.364	0.158	0.103
〃	798	321	〃	0.258	0.060	3.91	0.243	0.145	0.058
〃	799	322	細　頸　壷	0.342	0.031	1.56	0.493	0.175	0.054
〃	800	323	坏　身	0.166	0.025	2.45	0.234	0.098	0.028
昼河C－17号墳	801	324	カ　メ	0.535	0.261	1.50	0.595	0.494	0.415

第20－2表　三重県内古墳等出土須恵器の分析データ

11. 明気窯跡群および、その周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻　利一

1．はじめに

主成分元素K、Ca、を含有する主要造岩鉱物は長石類である。Kはカリ長石、Caは斜長石中に含有されていると考えられている。他方、岩石中に含まれる微量成分Rb、Srはそれぞれ、主成分元素K、Caと正の相関性をもつことが実験データから確かめられている。したがって、Rbは主成分元素Kとともにカリ長石中に、また、Srは主成分元素Caとともに斜長石中に存在するものと考えられる。微量元素Rb、Srの主成分元素K、Caに対する関係は粘土や土器についても成り立つことも実験データで示されている。したがって、岩石が風化して粘土を生成する段階でも、微量元素Rb、Srは主成分元素K、Caとともに挙動していることを示している。

一方、花崗岩類の分析データから、主成分元素のKと逆相関の関係をもっており、同様に微量元素RbとSrも逆相関の関係をもつことが示されている。このことはカリ長石と斜長石は逆相関状に分布していることを示す。カリ長石に対して、斜長石の風化が速いため、粘土ではこの関係は若干、くずれる。しかし、母岩の特性が消失するほどくずれることはない。

このようなことから、須恵器の素材粘土は花崗岩類などの岩石が山中でそのまま風化して生成した残留粘土であろうと推定されている。岩石の破削体が河川によって流され、海底で堆積した、所謂、漂積粘土ではないと考えられている。このような考え方を支持する根拠は母岩のもつ化学特性と、その岩体上にある窯跡から出土した須恵器の化学特性が類似することが上げられる。このことは同時に、須恵器の素材粘土は外部地域から運ばれるものではなく、在地産であることをも意味する。

以上のようなデータや考察から、K、Ca、Rb、Srの4因子がとくに有効に須恵器の地域差を示す理由が理解できる。

岩石中の主成分元素Naはソーダ長石中に存在すると考えられる。Naも地域差を示す因子ではあるが、ソーダ長石の風化が速く、粘土中に残存するNaの量は少ない。そのため、前記4因子ほど有効に地域差を示さない。

Feも岩石、粘土中の主成分元素であるが、単独の鉱物中に存在する訳ではない。黒雲母、角閃石、輝石などの鉱物中に共通して含まれる元素である。そのため、上記の4因子ほど有効に地域差を表示しない。

Siに至ってはすべての鉱物中に含まれている。このような元素は地域差を示さないので、土器の産地推定法の開発研究では役に立たない。

以上のことから、K、Ca、Rb、Srの4因子が須恵器の産地推定の研究によく使われる理由が理解される。本項でも、これらの4因子を中心にデータ解析を進める。

2．分析結果

今回分析した試料の分析値は表20にまとめられている。すべての分析値は岩石標準試料ＪＧ－１による標準化値で示されている。このような表示方法をとるのは、微量元素Rb、Srを主成分元素K、Caとほぼ同格にとり扱うためである。通常の表示法では微量元素をppmで、また、主成分元素を％で表示する。この場合、分析値を使って微量元素と主成分元素を比較することは困難である。化学特性からみて地域差を知る上には、「比較」ということは非常に重要である。分布図を作成するにしても、多変量解析を行うにしても、根底にあるのは化学特性（主成分元素も、微量元素も含めて）の比較である。したがって、主成分元素も微量元素もほぼ同格で比較できる表示方法をとることは重要である。そして、その場合には基準になる標準試料に如何なる試料を選択するかが非常に重要な問題となる。筆者はこの研究を始めた当初から、何のためらいもなく、最良の標準試料としてＪＧ－１を選択した。この選択がこの研究が今日に至るまで大きく前進してきた最大の理由である。

表20の分析値から分布図を作成し、データ解読した結果を以下に説明する。

図70には今回分析した明気窯出土須恵器のRb－Sr分布図を示す。前回分析したデータに基づいて明気１・２号窯領域と明気４・５号窯領域を示してあるこれらの領域は定性的にしか領界を示さないが、領域間の比較をする上には、直載的で見易いという点で威力を発揮する。明気１・２号窯と明気４・５号窯はそんなに離れてはいないが、前者は７世紀代初め後者は７世紀代中葉と操業年代は異なる。したがって、素材粘土の採掘場所は明らかに異なっている訳である。

明気窯群のうち、１号窯の製品の中には、「Ｎ」とか「－」などのヘラ記号をもつものが多数見つけられており、考古学的にも１号窯の製品であることを知る目印しになる。今回分析した試料は明気１号窯のものと、採集段階でわかるものと、その区別が不十分で明気窯群の試料として採集されたものもあるが、いずれも、明気１・２号窯領域に分布しており、明気１・２号窯の製品とみられる。４・５号窯の製品は含まれていない。また、今回分析した試料にはすべて、ヘラ記号があり、この点でも、分析データと一致する。

この結果は当然、Ｋ－Ca分布図でも一致するはずである。図71には今回分析した明気窯群の試料のＫ－Ca分布図を示す。いずれの試料も明気１・２号窯領域によく対応していることがわかる。

図72には、Na因子を比較してある。この図には前回分析した明気１・２号窯の試料と明気４・５号窯の試料の分析値を比較してある。明らかに、明気４・５号窯の製品にはNa量が少ない傾向があることを示している。Na因子でも両者の胎土は異なることがわかる。そして、今回分析した明気窯群の須恵器のNa量をみると、これまた、明らかに明気１・２号窯の領域に対応することがわかる。この結果、ヘラ記号をもつ須恵器胎土はすべて、明気１・２号窯の製品であることが胎土分析から言えそうである。なお、胎土分析では明気１・２号窯の製品の相互識別は困難である。同じ粘土を素材として使っていた可能性もある。

次に、明気窯群周辺の古墳等から出土した須恵器の分析結果について説明する。

図73にはRb－Sr分布図を示す。上ノ垣外遺跡出土の２点の須恵器のうち。No.151は明気１・２号窯領域に分布する。このことは図74に示すＫ－Ca分布図でも確認される。さらに、図72のNa因子でも確認される。したがって、No.151は明気１・２号窯の製品と推定される。No.151は「Ｎ」字のヘラ記号も持っており。考古学的にも胎土分析の結果が許容される他方、No.152は「Ｎ」字のヘラ記号をもつにもかかわらず、どの因子でも明気１・２号窯領域には対応しない。むしろ、明気４・５号窯の製品に近い化学特性をもつ。その産地は不明としておく。

同様にして、河田古墳群出土の須恵器のうち、No.486は全因子で明気１・２号窯領域に対応し、明気１・２号窯の製品と推定される。これに対して、「×」のヘラ記号をもつNo.484、485は明気１・２号窯の製品ではない。さらに注目すべき点は両方とも「×」のヘラ記号をもっているにもかかわらず、No.484とNo.485の胎土は異なる点である。No.484とNo.485はそれぞれ、別々の窯で焼成された須恵器である可能性が高い。このうち、No.484の胎土はぴったり一致する訳ではないが、明気４・５号窯の須恵器に近い化学特性をもつ。

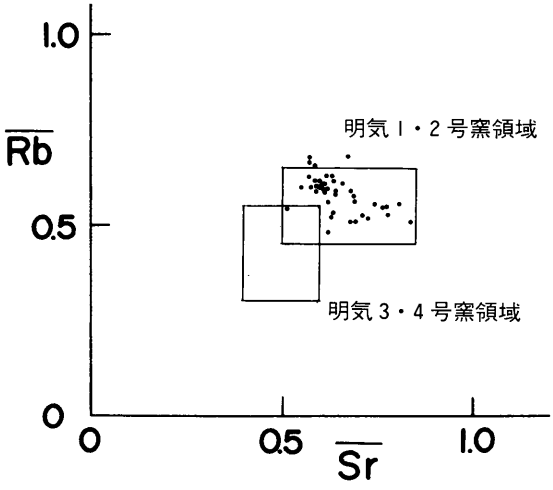
次に、多気中学校造成地から出土したNo.482(「Ｎ」ヘラ記号をもつ）とNo.483(「Ｖ」ヘラ記号をもつ）とは全因子明気１・２号窯領域に対応しており明気１・２号窯の製品であると推定される。

次に、大日山古墳群出土須恵器の分析データについて説明する。２号墳出土須恵器のRb－Sr分布図を図75に、Ｋ－Ca分布図を図76に示す。No.487は明気１・２号窯の製品と推定されるが、他の須恵器は明気１・２号窯の製品ではない。図75でこのうちの３点が明気４・５号窯領域に分布するが、Ｋ－Ca分布図では対応しない。したがって、これら６点の須恵器は明気４・５号窯の製品ともいえない。これら６点は同じ胎土をもつとみられ、上ノ垣外遺跡出土のNo.152の須恵器胎土もこれらと類似している。その産地は不明である。

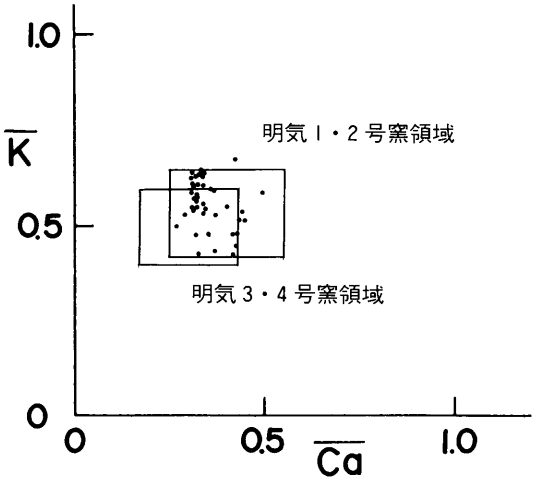
３号墳（大日山古墳群）出土須恵器のRb－Sr分布図は図77に、Ｋ－Ca分布図は図78に示されている。No.494は明気１・２号窯の製品、No.495は明気４・

5号窯の製品とみられる。No.494には「×」のヘラ記号がある。他の3点は明気窯群の製品ではなく、外部地域からの搬入品である可能性をもつ。

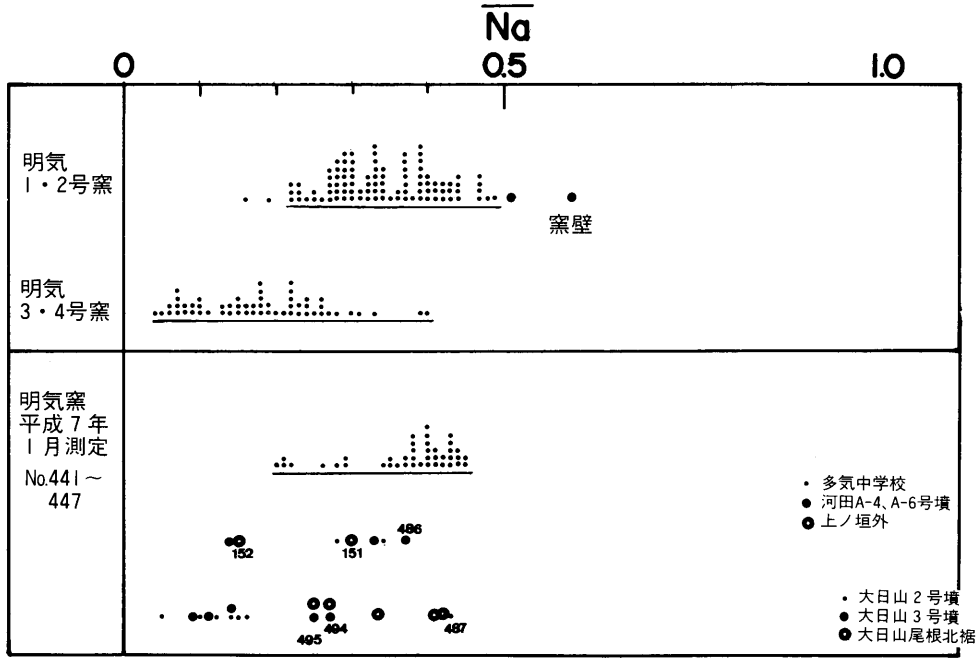
図79、80には大日山尾根北裾から出土した5点の須恵器のRb－Sr分布図とK－Ca分布図を示してあるこれらの分布図と図72のNa因子より、これら5点の試料は全因子で明気1・2号窯領域に対応しており明気1・2号窯の製品と推定される。



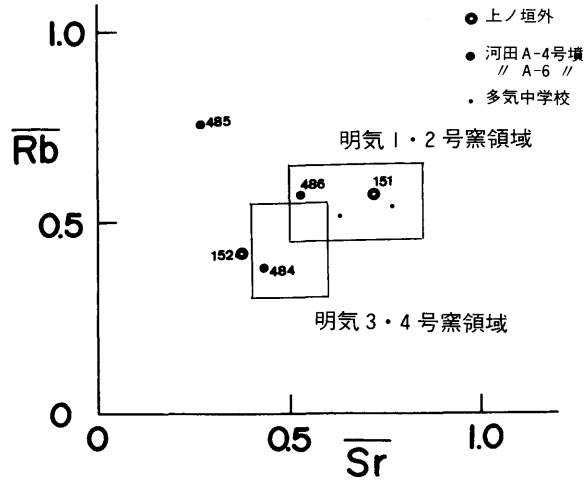
第70図　明気窯出土須恵器（No.441～481）の
Rb-Sr分布図　H7．1月測定



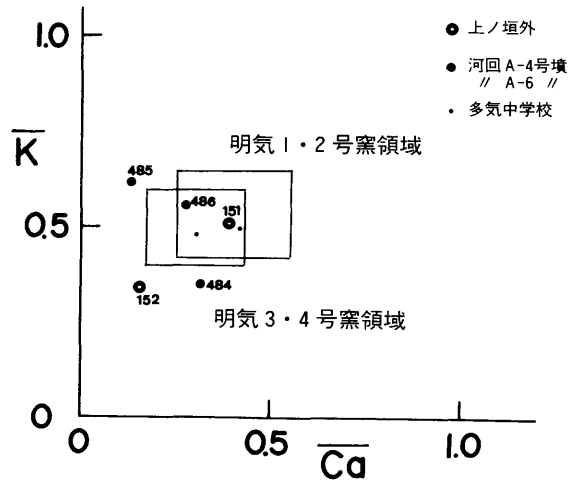
第71図　明気窯出土須恵器（No.441～481）の
K-Ca分布図　H7．1月測定



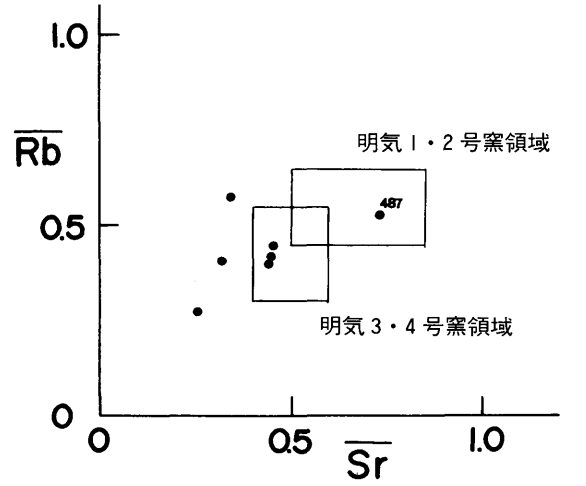
第72図　Na因子の比較



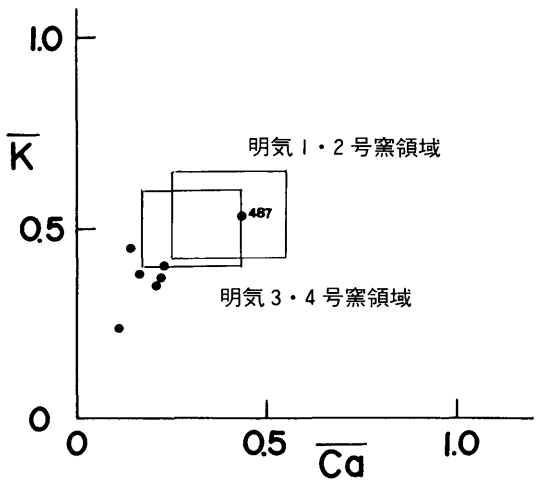
第73図　明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図



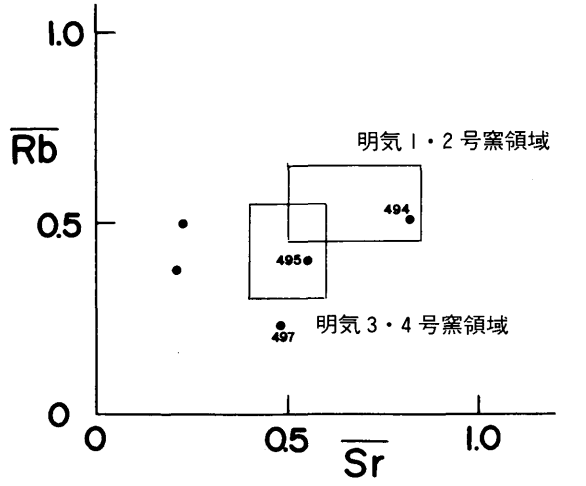
第74図　明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のK-Ca分布図



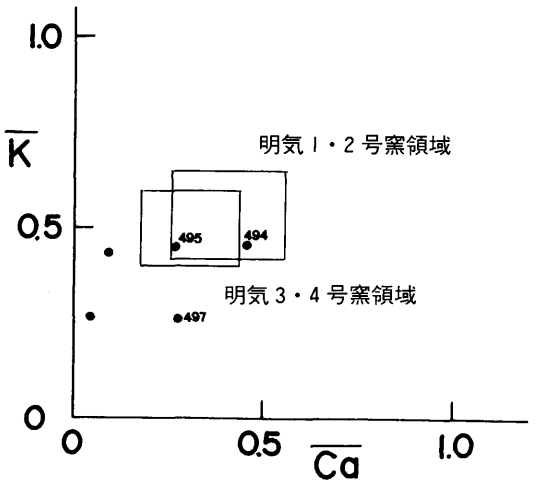
第75図　大日山2号墳出土須恵器のRb-Sr分布図



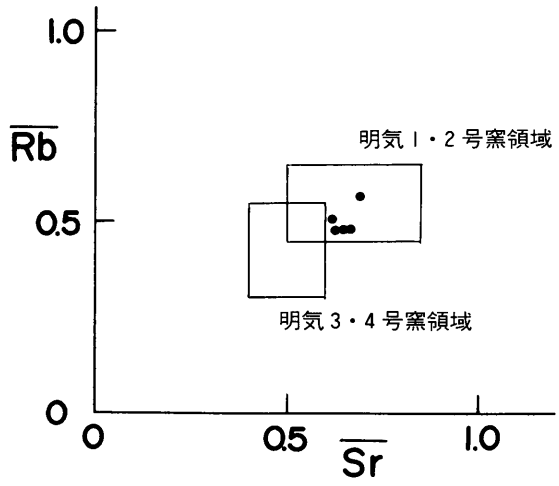
第76図　大日山2号墳出土須恵器のK-Ca分布図



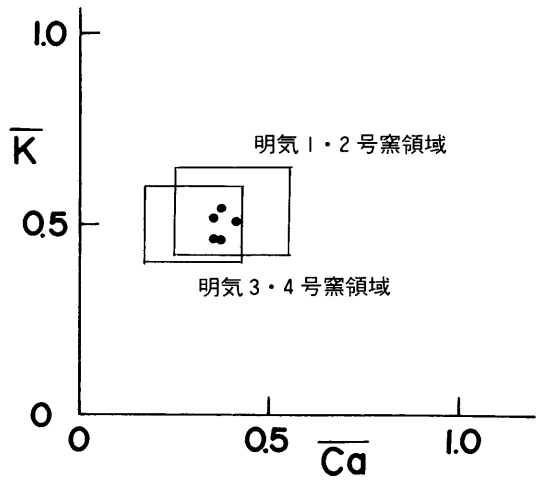
第77図　大日山3号墳出土須恵器のRb-Sr分布図



第78図　大日山3号墳出土須恵器のK-Ca分布図



第79図　大日山尾根北裾出土須恵器のRb-Sr分布図



第80図　大日山尾根北裾出土須恵器のK-Ca分布図

遺跡名	分析番号	試料番号	器種	ヘラ記号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
上ノ垣外	7-405	No. 151	蓋	「N」	0.512	0.386	1.79	0.570	0.718	0.296	再測定 No.24
〃	7-406	152	〃	「N」	0.340	0.153	2.05	0.418	0.315	0.146	再測定 No.25
明気1号窯	7-407	No. 441	蓋	「Ⅵ」	0.483	0.347	2.24	0.520	0.627	0.279	
明気窯群	7-408	442	〃	「N」	0.630	0.306	2.27	0.683	0.572	0.383	
〃	7-409	443	広口壺	「N」	0.562	0.339	2.08	0.615	0.604	0.380	
明気1号窯	7-410	444	坏フタ	「N」	0.592	0.493	1.98	0.564	0.808	0.412	
明気窯群	7-411	445	坏身	「N」	0.533	0.369	1.98	0.570	0.687	0.367	
〃	7-412	446	椀	「N」	0.524	0.453	1.89	0.547	0.767	0.379	
〃	7-413	447	坏身	「N」	0.608	0.343	1.86	0.614	0.660	0.431	
〃	7-414	448	〃	「N」	0.540	0.444	1.99	0.552	0.769	0.446	
〃	7-415	449	椀	「N」	0.517	0.430	1.79	0.562	0.738	0.425	
〃	7-416	450	坏フタ	「N」	0.479	0.317	1.88	0.481	0.621	0.379	
明気1号窯	7-417	451	坏身	「N」	0.496	0.272	1.99	0.546	0.511	0.289	
明気窯群	7-418	452	〃	「×」	0.580	0.323	1.88	0.587	0.641	0.437	
〃	7-419	453	坏フタ	「×」	0.645	0.340	2.25	0.615	0.635	0.425	
〃	7-420	454	〃	「×」	0.654	0.337	2.22	0.634	0.628	0.426	
〃	7-421	455	坏身	「×」	0.576	0.317	1.94	0.606	0.610	0.415	
〃	7-422	456	〃	「×」	0.425	0.424	1.57	0.529	0.784	0.258	
〃	7-423	457	〃	「×」	0.618	0.306	1.91	0.603	0.615	0.402	
〃	7-424	458	坏フタ	「×」	0.529	0.282	2.05	0.650	0.548	0.213	
〃	7-425	459	蓋	「×」	0.553	0.321	1.76	0.592	0.617	0.389	
〃	7-426	460	坏身	「×」	0.567	0.321	2.08	0.594	0.585	0.368	
〃	7-427	461	〃	「×」	0.560	0.396	1.80	0.573	0.694	0.435	
明気1号窯	7-428	462	坏フタ	「×」	0.546	0.321	2.00	0.563	0.621	0.346	
明気窯群	7-429	463	坏身	「×」	0.579	0.322	2.15	0.598	0.576	0.397	
〃	7-430	464	〃	「×」	0.586	0.313	1.88	0.602	0.604	0.423	
〃	7-431	465	坏フタ	「×」	0.636	0.341	2.37	0.595	0.607	0.446	
〃	7-432	466	〃	「×」	0.637	0.330	2.07	0.623	0.592	0.360	

表21－1　明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	器種	ヘラ記号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
明気1号窯	7-433	No. 467	坏	「－」	0.596	0.359	2.22	0.587	0.644	0.427	
〃	7-434	468	坏身	「－」	0.650	0.309	2.27	0.673	0.570	0.396	
明気窯群	7-435	469	坏フタ	「－」	0.476	0.431	1.81	0.528	0.710	0.204	
〃	7-436	470	〃	「－」	0.553	0.312	1.81	0.627	0.571	0.346	
〃	7-437	471	坏	「－」	0.446	0.425	1.49	0.511	0.837	0.293	
〃	7-438	472	坏身	「－」	0.610	0.308	1.80	0.634	0.615	0.413	
〃	7-439	473	〃	「－」	0.478	0.422	1.87	0.517	0.727	0.404	
〃	7-440	474	〃	「－」	0.435	0.374	1.70	0.514	0.687	0.215	
〃	7-441	475	坏フタ	「－」	0.545	0.337	1.76	0.609	0.609	0.336	
明気1号窯	7-442	476	坏身	「－」	0.676	0.418	2.50	0.687	0.668	0.407	
〃	7-443	477	坏フタ	「－」	0.427	0.355	1.74	0.511	0.682	0.207	
〃	7-444	478	〃	「－」	0.599	0.366	2.04	0.590	0.678	0.435	
明気窯群	7-445	479	坏身	「－」	0.540	0.343	2.24	0.527	0.635	0.384	
明気1号窯	7-446	480	坏フタ	「－」	0.609	0.334	2.06	0.599	0.587	0.400	
明気窯群	7-447	481	坏身	「－」	0.642	0.319	2.01	0.646	0.580	0.399	
多気中学校造成地	7-448	482	甕	「N」	0.478	0.229	1.75	0.523	0.631	0.275	
〃	7-449	483	高杯	「V」	0.502	0.408	1.66	0.541	0.768	0.342	
河田A－4号墳	7-450	484	坏身	「×」	0.349	0.306	3.34	0.378	0.429	0.138	
〃	7-451	485	甕	「×」	0.618	0.127	2.36	0.758	0.270	0.333	
河田A－6号墳	7-452	486	坏身		0.557	0.274	2.32	0.571	0.528	0.370	
大日山2号墳	7-453	487	〃		0.528	0.426	1.95	0.533	0.725	0.434	
〃	7-454	488	高坏		0.242	0.111	2.85	0.271	0.262	0.053	
〃	7-455	489	広口壷		0.380	0.165	2.49	0.408	0.323	0.099	
〃	7-456	490	甕		0.446	0.143	1.60	0.583	0.342	0.120	
〃	7-457	491	カメ		0.347	0.211	2.37	0.416	0.448	0.144	
〃	7-458	492	〃		0.398	0.232	2.50	0.449	0.457	0.162	
〃	7-459	493	〃		0.370	0.220	2.60	0.404	0.437	0.154	
大日山3号墳	7-460	494	坏身	「×」	0.450	0.447	1.54	0.509	0.821	0.272	
〃	7-461	495	広口壷		0.447	0.262	2.81	0.396	0.549	0.247	
〃	7-462	496	坏フタ		0.436	0.087	2.92	0.499	0.233	0.141	
〃	7-463	497	坏身		0.264	0.271	2.79	0.225	0.477	0.089	
〃	7-464	498	甕		0.274	0.043	2.74	0.384	0.212	0.113	
大日山尾根北裾	7-465	499	坏フタ		0.458	0.367	1.98	0.481	0.646	0.252	
〃	7-466	500	坏身		0.539	0.369	1.65	0.566	0.688	0.406	
〃	7-467	501	甕	「N」	0.463	0.366	2.09	0.475	0.640	0.266	
〃	7-468	502	壷		0.505	0.408	2.03	0.483	0.670	0.330	
〃	7-469	503	坏身	「－」	0.524	0.349	2.02	0.510	0.618	0.419	

表21－2　明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値

12. 結　　語

明気窯跡群は全５基から構成される窯跡群で、操業時期は７世紀初頭から中葉に至る半世紀程度と考えられる。

生産する土器の器種構成に偏りはなく、杯身・杯蓋を中心に多種多彩な器種が焼成されていた。供給先は、付近の古墳群が中心と考えられ、土器に付された特色のあるヘラ記号から、特定も可能である。

以下、窯体及び出土土器について、問題点を提議し、若干の考察を加えていくこととする。

１．窯体構造

(1) 焚口付近の Pit 群

明気１号窯においては、窯体の密閉作業に関する施設と考えられるPitが検出されている。これは前庭部において、焚口両壁の延長上に掘られている。

Pitの底には凹凸が認められ、その歪な円形を呈することなどから、「石」の設置が考えられる。これはある程度の高さを持った「立柱石」であったと考えられ、窯体密閉の際に基礎的な役割を果たした可能性がある。

また、燃焼部両壁には半円柱形・逆円錐台形のPit（壁面の切り込み）が存在する。ただし、切り込みの内面が被熱していない点からすると、焼土壁を切断してこのPitが設置されたか、或いは構築段階においてすでに何らかの設置物が存在した可能性がある。窯体構築段階において、すでに設置物が存在したのであれば、それは燃焼部という立地を考え「木製柱」とは考え難く、耐火性という観点から「石」と想定するのが妥当と思われる。また、操業途中において、焼土壁を切断し設置を行った可能性もあるが、この場合についてもやはり耐火性のない「木製柱」は適当ではないと考える。

ところで、この壁面のPitは燃焼部と焼成部とを区画する場所に存在している。また、このPitを境として窯体は縮小化がなされている。これらの点から考え、ある時期窯体は規模の縮小化がなされ、その中心的構造の変化は、焼成部幅の縮小化と焚口の移動にあった。その際、かつて焚口に立っていた閉塞の基礎となる「立柱石」は、燃焼部へと移動し、新たな焚口を形成したと考える。

焚口における「石」の設置例は、あまり報告がないが、多気郡多気町牧の牧１号瓦窯[①]に認められる。また、石の存在自体は不明であるが、四日市市の岡山１号窯[②]にて、明気１号窯と類似する箇所にPitが存在する。同報文において、このPitに対する詳細な記述はない。しかし、断面図によると深さは検出面より約0.7mと、かなり深いものであったことが窺われ、その関連性が注目される。

明気１号窯前庭部には、立柱石の痕跡の他に数個のPitが存在する。これらは立柱石のPitと同様に、灰原層と同質の埋土を有し、須恵器片も出土している。設置目的は判然としないが、これも窯体の密閉作業にかかわる可能性がある。三重県上野市の御墓山窯跡群においても、前庭部に小規模なPit群の存在が認められ[③]関連性が注目される。

焚口・前庭部におけるPit群の存在は、明気１号窯に関してのみ存在し、近接する明気２号窯については見られない。同時期で、しかもほぼ同規模を有する窯体において、構造上の差異が認められ、特筆すべき点の一つと言えよう。

(2) 窯体の形態と構築方法

窯体の形態は、急傾斜面を利用した「地山くり抜き式」で、窯体天井部の大半が地山を用いる「地下式」に該当する。

これは、残存する天井部に花崗岩の岩脈が通過している点から実証できる。また、天井部の崩落した部分についても、残存する窯壁の先端と遺構検出面との比高がかなり認められ、「半地下式」の窯体を構築するのは物理的に不可能といえる。

ただ、焚口及び煙道付近については、若干構造を異にし、「半地下式」を採用していたと思われる。これは、焼成後の「窯出し」作業時において、常に破壊される部分であったと言え、明気１・２号窯においては、焚口付近の窯壁が直立している点からも言及が可能である。煙道についても、遺構検出面と

さほど比高を有さずに、被熱した床面が存在することなどから、焼成及び窯出し時において、その都度構築・排除を繰り返した部分が存在したと考えられる。

明気窯跡群の西約400mに存在した中尾窯跡は、明気1・2号窯を若干逆上る時期の操業と考えられる。報文において言及はなされていないものの、窯体構造については「半地下式」であったと考えられる。中尾窯跡の立地は明気窯跡群同様に、丘陵斜面中腹である。また窯体の構築された地質も共通していることから、時期及び立地条件の類似する窯において、構造上大きな差異が存在する点は非常に興味深い。

明気3・4・5号窯については、調査区外もしくは半・全壊状態での検出となったため、構築方法については判然としない。ただ、明気3号窯は前庭部において、明気1・2号窯では見られなかった整地層（焼土ブロック及び炭化物混入）が存在する。これは、造り替えに際して撤去した天井部との見方もでき、従って「半地下式」であった可能性も充分に考えられる。明気5号窯は、天井部の削平を受けており、また整地層及び焼土ブロック等の混入が認められる堆積層の存在も認められなかった。わずかに残った窯壁から天井部への曲線部分についても、他質土による形成ではなく、地山そのものを用いていた。従って明気5号窯については地山くり抜きの「地下式」と位置づける。

後述するが、明気3・5号窯はその出土遺物からほぼ同時期の操業と思われる。同じ時期・土質の窯において、窯体の構築方法に根本的な違いが存在する可能性があり注目される。

(3) 窯体に付属する溝－外周溝－（SD17・18）

明気1・2号窯は、煙道から延びる溝を有している。この溝は窯によってその長さや深さ、そして延長方向に違いがあるものの、機能的には同様の役割を果たしていたと考えられる。

県内において、窯体に付属する溝を有する窯は、調査例が寡少である点も手伝い、非常に少ない。報文による紹介は、今回の明気1・2号窯の2例が初現となるが、過去の調査事例においてその存在を窺わせる遺構は既に検出されていた。四日市市岡山6号窯[4]がそれである。岡山6号窯は、煙道からさらに斜面上方に延びるの溝（長さ約3m・幅約0.4m）を持つ特異な窯であったが、その溝を切るかたちで窯体左側に延びると考えられる溝をも有していた。残念ながら緊急発掘であったため、溝の全容は明らかにはされなかったが、窯体主軸に対し直交するこの溝は、特に明気1号窯のタイプと類似すると言える。岡山6号窯の操業は、TK43平行期と報告されており、明気窯跡群の操業期をやや逆上る時期である。

同様の溝を持つ窯は、県外にて多数の事例が報告されているが、従来は、京都府の隼上り瓦窯[5]に代表されるような「排水溝」との解釈がなされてきた。

望月精司氏は、この溝について全国的な集成と詳細な研究を試みられ[6]、「送風・作業溝」との見解を示されている。これは、谷から吹き上げる風を煙道から送り込むことにより、窯体から煙道を通って外に排出される熱を封じこめ、酸化還元焼成を促進させる効果をねらったものとされた。また氏は、その送風溝について、煙道からの窯出しや煙道形成のための作業用通路も兼ねていたと考えられた。氏による「送風・作業溝」との認定基準は、①煙出しは奥壁を持たず、窯幅を狭めただけで開口、②煙出しの床面レベルと連続して溝が掘り込まれ、その溝は煙出し口と直交又はそれに近い形で連結、窯の主軸線上にある溝の壁は酸化色に被熱、③溝は煙出し口から丘陵斜面下方へとカーブしながら延びる、の3点である。

明気窯跡群の場合、1号窯についてはほぼその条件を満たしているといえる。しかし、2号窯に関しては、①・③及び②の溝壁の被熱について条件を満たしているものの、溝の底と煙出し床面とは比高があり、若干その形態に差異が存在している。残存する煙道部と溝の底とは、約20cmの差がある。これらの観点からすれば、明気2号窯の外周溝は、一種特異な形状をもつものとして位置づけておく必要があろう。

いずれにせよ、窯体主軸上において溝の壁面は確かに被熱している。焼土等を含まない、地山と同質土の堆積層と酸化焔層の互層は、最低でも4回以上

の焼成回数を物語っている。これは、溝が掘り返されることなく、焼成がくり返されたことにほかならず、「溝」が溝としての機能を低下させていくことにも特に差し支えなかったと言えよう。つまり、「溝」の存在は、窯体の構築当初は別とし、以後の操業にはあまり重要な位置を占めなかった可能性が考えられるのである。

2．窯体の立地

前項で述べた窯体構造をもつ窯跡群は、急斜面の中腹及び頂部に立地している。また、1・2号窯については、窯体の前庭部が狭く、斜面側は特に急傾を呈している。これは、谷から吹き上げる風を最大限に利用しようとした構築方法と考える。（現実に窯体内での調査は、吹き抜ける風とそれによる砂埃にしばしば悩まされた。）

また、窯跡の位置する丘陵は、幾つかの尾根筋とそこから派生する支派で構成されているが、現在付近の集落を結ぶ旧道は、これらの尾根上を通るものが多い。この傾向を窯の操業当時からのものと仮定すると、尾根頂部に立地する3号窯の存在や尾根上の竪穴住居、作業場的な平坦面など、一見すると不可解な遺構配置についても理解できそうである。

3．生産須恵器の供給地の推定

(1) 杯身・杯蓋の特徴にみる供給地

明気1・2号窯にて生産された杯身・杯蓋は、その調整技法において特徴的な様相を呈する。全般的に底部・天井部は、ヘラ切り後何ら調整を施さず、回転台から切り離したままで完成品として扱われている。いわゆる「ヘラ切り不調整」であるが、それらの内、多くのものに、底部及び天井部が突出するものが認められる。これは、ロクロ回転台からの切り離しの際に、ヘラを回転台と平行に入れることにより生じた厚みと考えられ、外面の突出に対し内面の傾斜が一律であることからも言及できよう。

ところで、このような特徴を持つ杯身・杯蓋は、周辺の古墳群出土の遺物に見ることができる。近接する明気古墳群の1・3・6号墳[7]他、多くは北東約3㎞の河田古墳群[8]において認められる。河田古墳群は、未調査部分も含め円墳及び方墳の約90基から構成されている。構築時期も6世紀末から7世紀前半期に集中しており、明気窯跡群の消長と期を同じくしている。

(2) ヘラ記号の存在とその消長

ヘラ記号は、全ての窯体及び灰原で認められているわけではなく、ほぼ明気1・2号窯に限定されるようである。明気1・2号窯と操業時期を同じくする明気4号窯は、ほぼ全壊し遺物も寡少であったため全容は摑めない。しかし、明気3号窯灰原や明気5号窯の窯体・灰原においては、数点の例外を除きヘラ記号の出土はほとんどなかった。また、包含層においても、明気1・2号窯と3・4・5号窯を画する弱い谷筋を境として、ヘラ記号の付された須恵器の出土が著しく減少した。このヘラ記号の有無は、窯体の操業時期とも合致している。つまり、擬宝珠つまみを有する、いわゆる杯身・杯蓋の逆転が生じる時期を経てヘラ記号が消滅しているのである。

(3) ヘラ記号の種類と特徴

① 杯身・杯蓋のヘラ記号

杯身・杯蓋におけるヘラ記号は、身と蓋に共通するもので、いずれかに固定され用いられたものではないようである。しかし、杯身・杯蓋に付されたヘラ記号は、そのほとんどが「－」「×」のいずれかであり、専ら杯身・杯蓋に用いられている。「－」「×」の記号は、一点の例外を除いて他は、底部及び天井部外面に施されている。明気1・2号窯期を中心とする出土遺物の内、個体として確認できる杯身・杯蓋は、包含層を含め419点出土している。そのうちヘラ記号を有するもののは全体の13.4％を占めている。

② 「N」字状のヘラ記号

「N」字状のヘラ記号は、甕・平瓶・横瓶・瞁・短頸壷蓋においてみられる。付される位置は、甕・平瓶・横瓶については頸部内面、瞁は底部外面、短頸壷蓋は天井部外面とほぼ所定の位置が定まっていたようである。甕・平瓶・横瓶におけるヘラ記号の例は、各1点ずつと非常に稀であるが、短頸壷蓋の場合は複数の例がみられ、頻度はやや多くなると言えそうである。

③　その他のヘラ記号

数量的には寡少であるが、「－」「×」「N」の他にもヘラ記号は存在する。高杯の「W」字状、甕の「M」・「V」字状をはじめ、提瓶の「U」・「｜」などがある。出土例が少なく言明はできないけれども、これらの記号は特定器種に偏在するものではないと考えられる。

出土地	記号						
明気1号窯	×	－	N	W			
明気2号窯	×	－	N				
明気3号窯	U	V					
明気4号窯							
明気5号窯							
落ち込み1～3	×	－	M				
包含層	×	－	N	＝			

記号	身・蓋	椀	高杯	鼈	甕	壺蓋	提瓶	平瓶	横瓶	
－	●					●	●			
×	●	●								
N				●	●	●		●	●	
W			●							
M					●					
V					●					
U							●			

第22表　出土地別、器種別ヘラ記号一覧

(3)　ヘラ記号にみる供給地

杯身・杯蓋において顕著に見られる「－」「×」をはじめ、甕や短頸壷蓋などに見られる「N」字状の記号は、近接する古墳群を中心に出土例が報告されている。

ヘラ記号の出土した遺跡は、明気窯跡群を中心に4㎞圏内の櫛田川右岸流域に点在している。

最も近接するのは、明気窯跡群を含む浅間丘陵上にある明気古墳群で、1号墳主体部から「N」を施した広口壷が出土している。また、同丘陵上の大日山古墳群[9]の所在する尾根裾からは「N」字状ヘラ記号を施した鼈が出土し、現在の多気中学校造成時に出土したと伝えられる須恵器[10]にも、「V」字状のヘラ記号を持つ高杯がある。河田古墳群[11]は、直線距離にして4㎞ほど下流にあたる、約100基からなる群集墳である。ここからも杯身・杯蓋の「－」「×」をはじめ、甕・横瓶などに「N」字状ヘラ記号が多数見られる。

また、「N」字状のヘラ記号は、古墳以外からも出土している。大日山古墳群を見上げる上ノ垣外遺跡の溝[12]から出土した鼈がそれである。

現在の所、杯身・杯蓋に限定される「－」「×」のヘラ記号をはじめ、「N」字状のものは、明気1・2号窯特有のものであり、他に例を見ない。従って、供給先はこのヘラ記号をもつ製品の出土をもってほぼ認定できよう。勿論、ヘラ記号をもって、供給地決定の根拠とすることに関しては、ヘラ記号の用途が不明確である以上、危険であるとに異論はない。しかし、三辻利一氏の蛍光X線による胎土分析により、消費地における特徴的なヘラ記号（杯身・杯蓋に限定される「－」「×」、及び「N」字状ヘラ記号）について、明気1・2号窯産の領域に含まれることが実証されている。

櫛田川流域の古墳群は、明気古墳群の立地する浅間丘陵を境として、上流にはほとんど存在しなくなる。これは窯跡についても同様であり、上流域においては、時期の異なる窯跡も知られていない。したがって、明気窯跡群からの供給は、櫛田川を遡ることはなく、当地から下流域と限定できそうである。

ただし今日までに、櫛田川左岸において、明気1・2号窯産のものと考えられる須恵器は出土していな

い。もっとも、調査例が寡少である点は、充分考慮しなければならないが、右岸の出土量に比べるとその違いは大きいのである。

その原因として考えられるのが、櫛田川を介して異なる「郡域」である。明気窯跡群の存在する櫛田川右岸は旧多気郡に、左岸は旧飯野郡に当たる。その様な観点からすれば、近年論じられている「一郡一窯」体制[13]が、当地でも存在した可能性があり注目される。

また、視点を東に転じると、ここにおいても地域を画するラインが見えてくる。明気窯跡群を含めた南伊勢地域の窯跡群は、地域を大観し「外城田窯跡群」と呼称されている。しかし、明気・中尾窯跡の一群と、池ノ谷[14]をはじめ原[15]・市寄窯跡群[16]とは、1㎞以上の隔絶がある。明気窯跡群が製品の搬出に相可川・櫛田川を用いたと考えるとき、後者は外城田川を利用していたとすべきである。外城田川は、旧多気郡と旧度会郡の郡界と考えられており、窯跡の群集に「郡域」が関与していた可能性がある。

4．出土遺物

全5基から構成される明気窯跡群は、出土遺物からおよそ2窯期に分けられる。明気1・2号窯及び4号窯が該当する窯期と明気3・5号窯の時期である。便宜上、前者をMGⅠ期、後者をMGⅡ期として以下の項目に従い述べるものとする。

(1) 器種構成と技法上の特徴

① MGⅠ期

いわゆる古墳時代タイプの杯身・杯蓋を中心に操業が行われていたと考えられるが、冒頭でも述べたとおり、器種に偏在はない。製品のバリエーションという点では、多種多様な須恵器生産が行われ、全国的な傾向と合致している。

杯蓋は、全体的に天井部が突出・平坦化する傾向が見られる。これは「ヘラ切り不調整」によるものと考えられる。また、蓋の稜は無く、端部がやや内向する傾向が強い。

杯身の「立ち上がり」は、かなり形骸化が進んでいるが、体部の粗雑な調整に比べ、シャープな作りを見せている。底部は、杯蓋の天井部同様に平坦な面を持つものが多く、また突出しているものも少なくない。杯身の場合も底部は「ヘラ切り不調整」で「ヘラ削り」による調整は皆無である。

また、「返り」を持つ杯蓋及び「立ち上がり」を持たない杯身の出現は未だない。

ただし、金属器の模倣と考えられる椀は多数出土している。この椀は、体部に2本の沈線をもつ。また台を持つものと、そうでないものが認められ、有台のものについては三方の「三角透かし」を施す点で共通している。

高杯は、無蓋のものが中心で、有蓋高杯は全く出土していない。脚は二段透かしを施すものが中心であるが、ヘラ状工具で切り込みを入れただけのものも含まれ、形骸化の一途をたどっていると言える。極少数であるが、「透かし」を持たない短脚の高杯も出現している。

壷・甕類は、バリエーションが多く、特に甕に関しては、かなり装飾過多と言える。

甕の場合、口縁端部に肥厚化した帯部を有す点は共通した特徴で、口縁から頚部を数条の沈線により区画し、文様帯を作っている。施される文様は、(a)波状文、(b)櫛状工具による縦方向の施文、(c)櫛状工具の先端部による斜め方向の圧痕などがあり、中には(b)を施したのち(a)の波状文を巡らすものもある。

② MGⅡ期

古墳時代タイプの杯身・杯蓋と「返り」を持つ杯蓋及び「立ち上がり」を持たない杯身が共伴する窯期である。MGⅠ期と同様に器種の偏在はなく、バリエーションに富んだ器種構成を持つ。

古墳時代タイプの杯身・杯蓋は、MGⅠ期の特徴である天井部・底部における「ヘラ切り不調整」を色濃く残し、また、口縁端部が内側に屈曲する点についても変化はない。

ただし、全体的に小ぶりになり、杯身に関しては「立ち上がり」の著しい退化が見られる。

また、さらに特徴的な点は、杯蓋のうち約半数が天井部を丸く仕上げ、口縁端部も屈曲せず丸くおさめる様相を示していることである。これはMGⅠ期においては、ほとんど見られなかった傾向で、在地色を上回る畿内色の大きな流入が窺われる。

「返り」を持つ杯蓋及び「立ち上がり」を持たない杯身は、かなり小型化している。全国的に見て小ぶりが主流な時期とは言え、極端であることは口径の平均値が示すところである（第83図参照）。

杯蓋の「摘まみ」については、いわゆる「擬宝珠」状のものと、有蓋高杯の蓋部摘まみに代表される偏平なものに大別できる。両者は付される蓋自体の特徴で分類した場合、混在することになる。しかし単なるバリエーションの差異ではなく、器種などの使用先が異なる可能性もある。

椀は、MGⅠ期同様に多数存在するが、加えて鉢の登場も見る。一方、皿は姿を消す。

高杯は小型化し短脚のものとなるが、短脚であるにも係わらず「透かし」を施す例も存在する。

甕は、装飾過多であり、沈線で区画された文様帯と波状文を中心とする施文は、MGⅠ期と特に変化はない。しかし、口縁端部の帯部は明瞭に残るものの肥厚化は顕著でなくなる。そういった傾向は、壷の口縁端部においても見受けられる。

(2) 操業の変遷と消長

明気窯跡群に近接する中尾窯跡は、出土する杯身・杯蓋に「ヘラ削り」が残るとの報告があり、明気1・2号窯よりやや遡る、6世紀末頃の操業[17]と考える。その後、明気1・2号窯がほぼ同時に操業を開始したと思われる。2基の窯間には、特に時期差を感じさせる特徴はなく、むしろ二基一対の操業体制であった可能性も強い。これをMGⅠ期とする。

明気5号窯は、MGⅠ期の特徴を持つ古墳時代タイプの杯身・杯蓋を有する反面、天井部に掻き目を施す「摘まみを持つ杯蓋」の生産も行っていた。

この共伴関係は、後述する明気3号窯より若干先行する操業を示唆するものとの見方もできる。しかし天井部に掻き目を施す蓋は2点のみの出土で、他の器種構成は明気3号窯と特に差異はない。したがって明気3・5号窯を、明気1・2号窯に続く時期と位置づけMGⅡ期とする。MGⅠ期は7世紀初頭頃、Ⅱ期は7世紀半ばまでと比定[18]する。

Ⅰ期の操業が停止した後も、尾根上の竪穴住居及び広場は、その作業場的な役割を担っていたと考えられる。なぜなら尾根上付近の包含層に限って、Ⅰ・Ⅱ期の遺物が混在し出土しているのである。これはⅠ・Ⅱ期を通じ、尾根上に窯業を介した人の往来があったことを示すものである。また明気2号窯は、廃絶したのち、窯体内への流入土が煙道付近にまで達した段階で、甕片の投棄を受けている。投棄された甕が、Ⅰ・Ⅱ期のいずれのものであるか判断するのは困難であるが、少なくとも操業を停止した窯体に土が堆積する年月の間、尾根上における生産活動は継続していたと言える。

明気窯跡群の発掘調査は、生産地と供給地が明確になった例として、大きな成果を得た。しかし、一方でヘラ記号の存在の意味や窯体を取り囲む溝の存在など、新たな問いかけも生まれてきた。

我々にとって、最も見慣れたものでありながら、最もその生産体制の知られていない土器。

――――今後調査・研究が進み、新たな成果が得られることを願って止みません。　　（宇河雅之）

註

① 田中喜久雄・川北秀実・野原宏司「牧瓦窯跡群」『近畿自動車道（久居～　勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　第一分冊2』三重県教育委員会　1989
② 山沢義貴『岡山古窯址群第1号窯』四日市市教育委員会　1966
③ 上野市教育委員会の笠井賢二氏に御教示頂いた。
④ 小玉道明・山沢義貴『岡山古窯址群発掘調査報告』四日市市教育委員会　1971
⑤ 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市教育委員会　1983
⑥ 望月精司「須恵器窯構造から見た7世紀の画期―特に南加賀古窯跡群の様相を中心として」『北陸古代土器研究』第3号　北陸古代土器研究会　1993
⑦ 多気町教育委員会の御厚意により実見させて頂いた。
⑧ 下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会　1986
⑨ 本報告　所収
⑩ 多気町教育委員会の御厚意により実見させて頂いた。
⑪ ⑧に同じ
⑫ 田村陽一「上ノ垣外遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告　第一分冊』三重県埋蔵文化財センター　1991
⑬ 宇野隆夫「一郡一窯体制について」『北陸古代土器研究』第4号　北陸古代土器研究会　1994
⑭ 三重県遺跡台帳
⑮ 山沢義貴「度会郡玉城町原6号・同7号発掘調査」『ふびと』22号　三重県大学歴史研究会　1964
⑯ 宇河雅之・瀬野弥知世・塚田幸子「市寄窯跡群出土の須恵器について」『Mie history』vol7　三重県歴史文化研究会　1994
⑰ ⑧に同じ
⑱ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966　及び、山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」『古代文化』第40巻第6号　1988　を参考にした。

遺物の分類

杯類分類

杯の分類は、各器種において、その器形の特徴別にA・B・C…と大別した。A・B類については、在地色の強い様相と畿内的な特徴を示すものに区別ができるため、それぞれ1・2との細分類をおこない、さらに細部形態の差異によってa・b・cの分類をした。

また、C類については器形の特徴の差異によってI・II・IIIの細分類をおこない、細部形態の差異によりa・b・cの分類を試みた。

A類　いわゆる古墳時代タイプの杯であり、蓋は返りを持たず、身に受部が存在するものを指す。いわゆる杯Hである。主として明気1・2・4号窯で生産されたもので、当窯跡群においては古い様相を呈する。

杯身・杯蓋ともにヘラ切りにより、ロクロ上からの切り離しを行っている。切り離し後の調整は、稀に若干の撫でを施すものや、粗い櫛状工具をあてた痕跡が認められるものもあるが、そのほとんどは、調整を行っていない。本報文においては、「ヘラ切り不調整」との表現を用いた。

また、口縁部の形態・天井部及び底部の様相・口径指数等の差異で、更なる分類を行った。

B類　A類と同様に蓋は返りを持たず、身に受部が存在するものをさすが、A類に比べ口径が著しく小さい。

杯身底部及び杯蓋天井部ともにロクロからの切り離し後は、ヘラ切り不調整である。

また、口縁部の形態・天井部及び底部の様相等の差異で、更なる分類を行った。

C類　杯身に受部がなく、杯蓋に返りをもつ。杯身・杯蓋ともに比較的小ぶりであり、粗雑な作りが目立つ。

蓋に付くつまみは、いわゆる宝珠形を呈するものが中心であるが、中には中窪みの偏平なつまみをもつものも認められた。

つまみを持つ蓋は、天井部にロクロ削りを施している。明気5号窯においては、天井部の調整にカキ目を用いているものも見受けられる。

杯身は、底部の調整がヘラ切り不調整のものが一般的である。個体数としては少ないが、ヘラ切り後に簡単なロクロ削りを施したものも存在する。

甕類分類

甕は、口径差によって大・小型に大別できる。口径が15～20cmのものを小型甕とし、30～50cmをはかるものを大型甕とした。甕の口径は頚部の高さに比例し、概して小型甕は、大型甕より頚部の外反が強い傾向を有する。

分類は、口縁端部の肥厚化の有無及びその中間的要素をもつものを対象とし、A・B・Cを用い行った。また、口縁端部をはじめとする細部形態の差異によってI・II・III…と分類し、更に調整の強さ等に基づきa・b・cの細分を行った。

大型甕

A類　口縁端部に強い横ナデが施され、断面三角形状の突出や、肥厚化した帯部を有するもの。

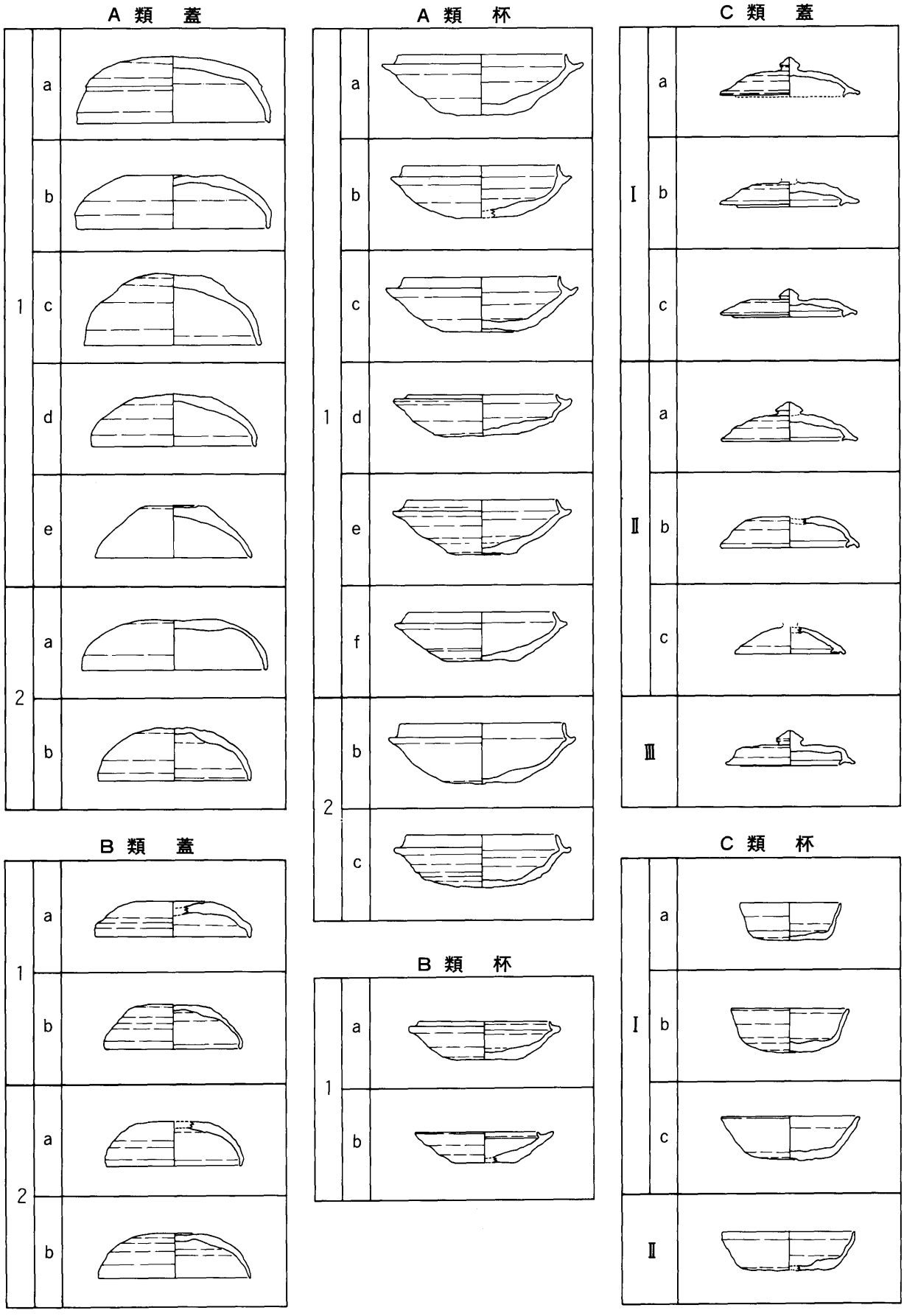
B類　口縁端部の肥厚化は顕著ではなくなるが、沈線で区画される無文帯が存在する。また、この無文帯を大きく外反させるものも見られる。

C類　口縁端部の肥厚化は見られなくなる。従来の肥厚化は、端部の沈線にその名残を見ることができる。

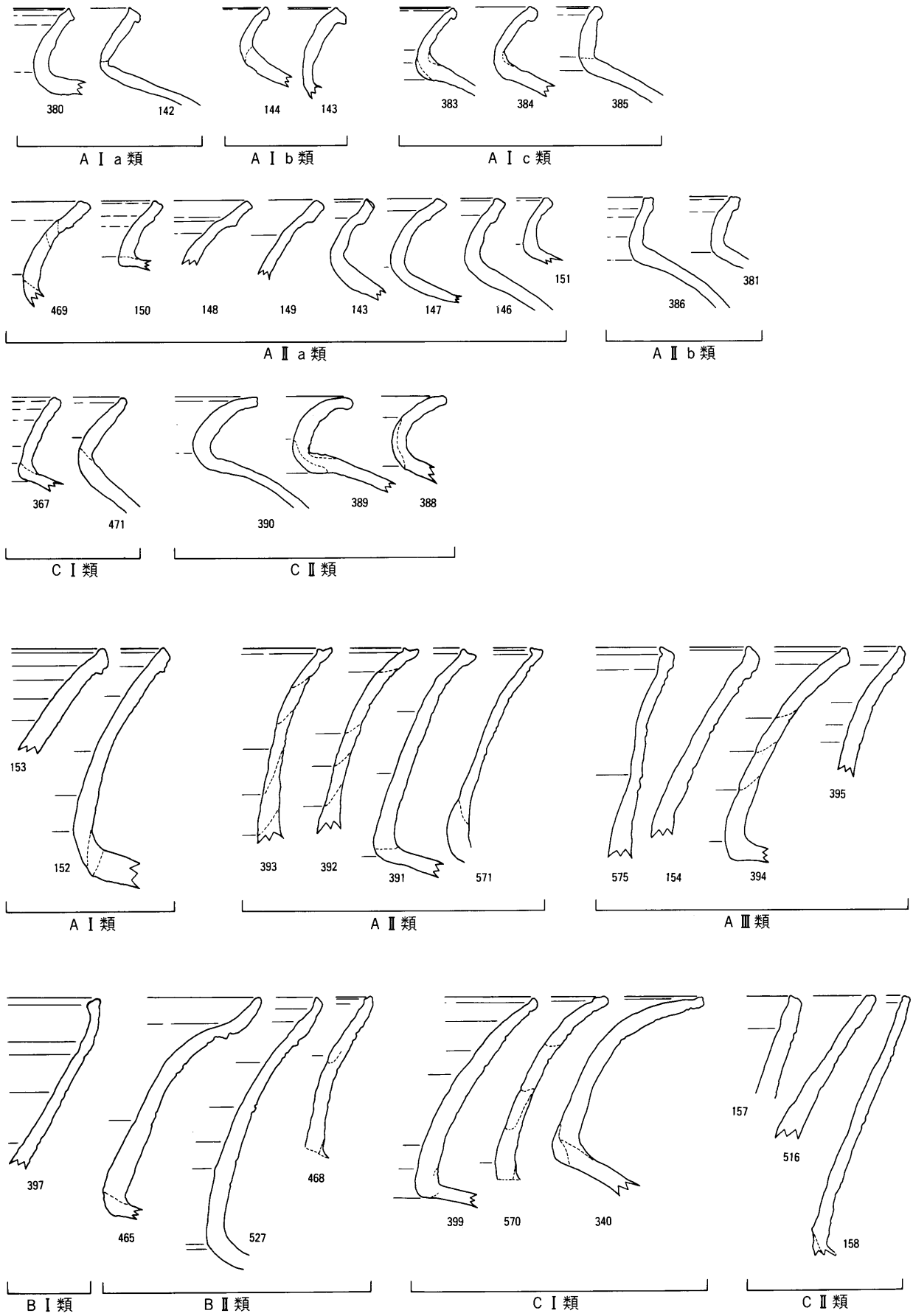
小型甕

A類　口縁端部の肥厚化（端部外側の下方向への突出も含む）が見られるもの。

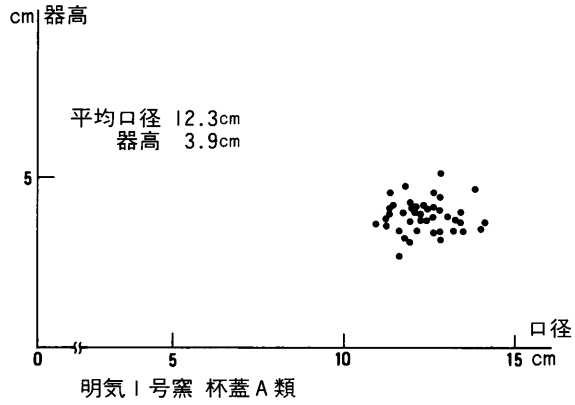
C類　肥厚化は見られず、端部の処理もやや丸みを帯びている。


A 類 蓋
1
a
b
c
d
e
2
a
b
A 類 杯
1
a
b
c
d
e
f
2
b
c
C 類 蓋
Ⅰ
a
b
c
Ⅱ
a
b
c
Ⅲ
B 類 蓋
1
a
b
2
a
b
B 類 杯
1
a
b
C 類 杯
Ⅰ
a
b
c
Ⅱ

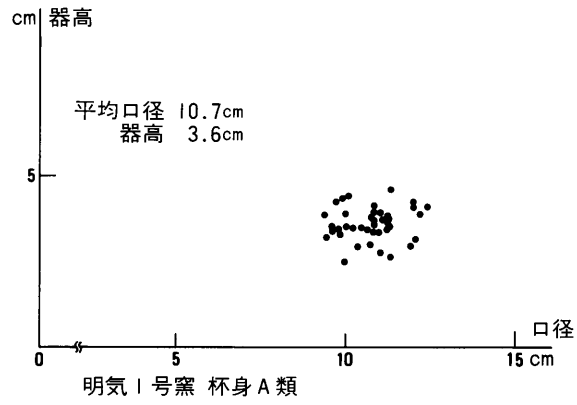
第81図　杯身・蓋分類図


380
142
144
143
383
384
385
A Ⅰ a 類
A Ⅰ b 類
A Ⅰ c 類
469
150
148
149
143
147
146
151
381
386
A Ⅱ a 類
A Ⅱ b 類
367
471
390
389
388
C Ⅰ 類
C Ⅱ 類
153
152
393
392
391
571
575
154
394
395
A Ⅰ 類
A Ⅱ 類
A Ⅲ 類
397
465
527
468
399
570
340
157
516
158
B Ⅰ 類
B Ⅱ 類
C Ⅰ 類
C Ⅱ 類

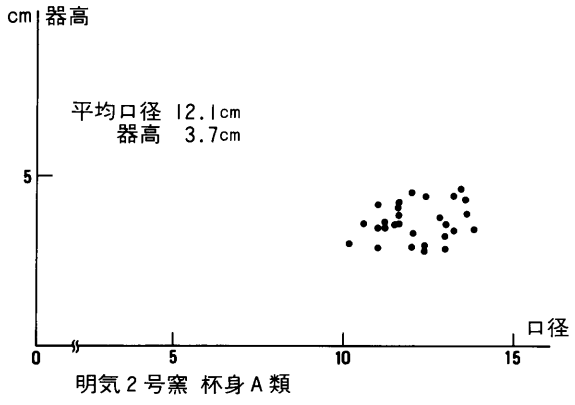
第82図　甕分類図



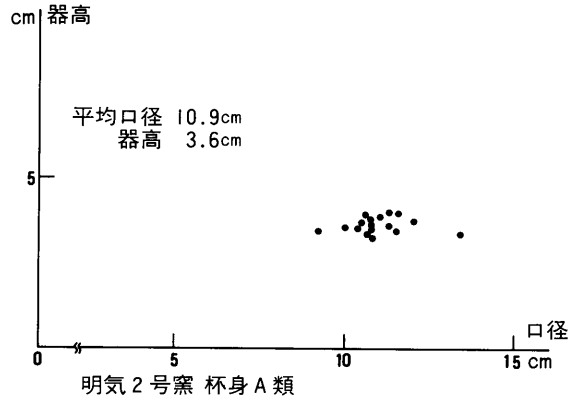
明気 I 号窯 杯蓋 A 類



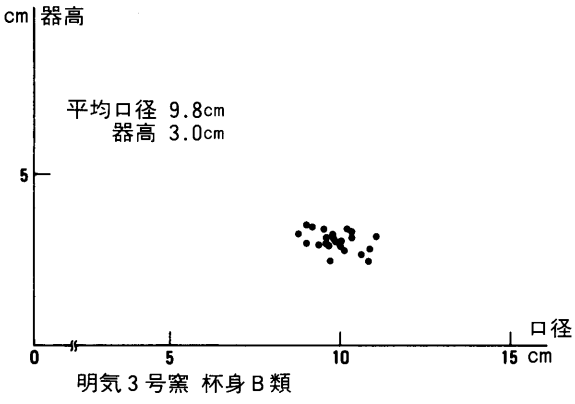
明気 I 号窯 杯身 A 類



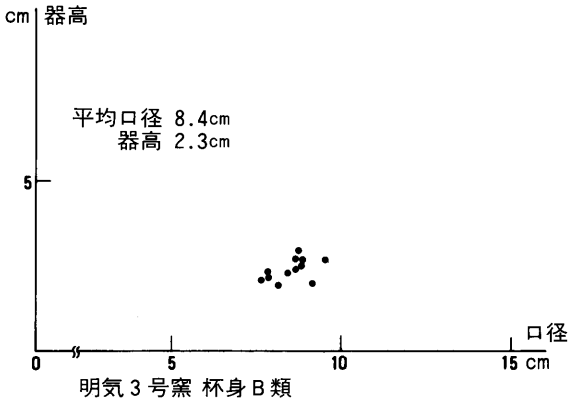
明気 2 号窯 杯身 A 類



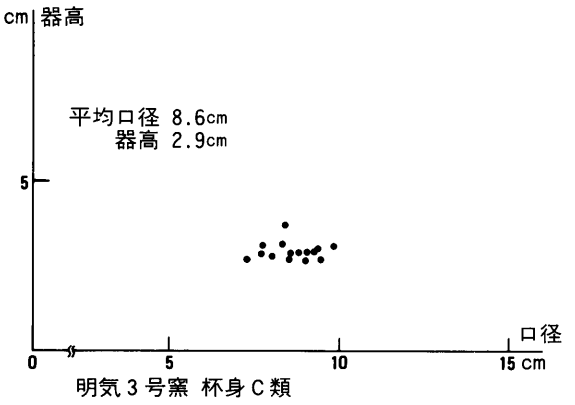
明気 2 号窯 杯身 A 類



明気 3 号窯 杯身 B 類



明気 3 号窯 杯身 B 類



明気 3 号窯 杯身 C 類

第83図　杯身・蓋法量分布図

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
1	001 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原(暗褐色)	口径:13.8 器高:4.7	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面不定方向のナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)青灰5PB5/1 (内)青灰5B6/1	細砂粒多含	良	口縁部:1/8 体部:1/8 天井部:1/4	天井部に別個体付着
2	001 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 E20 床面直上	口径:14.1 器高:3.8	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面剝離著しく調整不明瞭、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白5Y7/1 (内)灰白5Y7/1	微砂粒多含	不良	口縁部:1/4 体部:1/4 天井部:1/2	
3	001 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 E20 窯体内焚口床たちわりトレンチ	口径:12.6 器高:3.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外)浅黄橙10YR8/4 (内)浅黄橙10YR8/4	微砂粒少含	不良	口縁部:1/4 体部:1/4 天井部:1/2	天井部外面にクシ状工具痕あり
4	001 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原直上	口径:12.6 器高:3.9	天井部外面ヘラ切り未調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白N8/0 (内)灰白N8/0	微砂粒多含	良	口縁部:極一部 体部: 天井部:完存	
5	001 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原直下	口径:13.5 器高:3.5	天井部外面ヘラ切りのち若干のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰5Y6/1 (内)灰白5Y8/1	微砂粒多含	良	1/4	天井部外面にヘラ記号「+」
6	001 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒褐色土層	口径:13.0 器高:3.9	天井部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白2.5Y8/2 (内)灰白2.5Y8/2	微砂粒多含	やや不良	口縁部:1/4 天井部:1/2	
7	002 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 東灰原直上	口径:12.8 器高:3.25	天井部外面ヘラ切り不調整、天井部内面不定方向のナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰10Y5/1 (内)灰7.5Y6/1	微砂粒少含	良	口縁部:1/4 天井部:1/2	天井外面にヘラ記号「×」口縁歪み大
8	002 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原上面 褐色土層	口径:14.0 器高:3.55	体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰N7/0 (内)浅黄2.5Y7/3	微砂粒少含	良	口縁部:1/4	口縁歪み大 体部焼きぶくれ
9	002 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 E20 窯体床面直上?	口径:12.6 器高:4.6	天井外面ヘラ切り未調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外)明オリーブ灰 2.5GY7/1 (内)灰白N8/0	微砂粒多含	良	口縁部:1/6 天井部:完存	天井部外面に板痕あり
10	002 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 床面 No5	口径:10.8	天井部外面ヘラ切り未調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白7.5Y7/1 (内)灰白5Y8/1	微砂粒少含	不良	口縁部:1/2 天井部:1/8	
11	002 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 F20 焚口NS アゼ下 黒色土層上面	口径:12.8 器高:5.2	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面磨耗により調整不明瞭、体部・口縁部ロクロナデ	(外)淡黄2.5Y8/4 (内)橙7.5YR6/6	微砂粒多含	不良	口縁部:3/4 天井部:完存	天井部外面にヘラ記号「×」
12	003 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒褐色土層	口径:11.9 器高:4.35	天井部外面ロクロケズリ、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白2.5Y7/1 (内)灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部:1/4 天井部:完存	体部に歪みあり
13	003 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原直上	口径:12.3 器高:4.2	天井部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外)青灰5B6/1 (内)青灰5B6/1	砂粒少含	良	口縁部:1/2 天井部:完存	天井部外面に工具痕多く有り
14	003 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 G20 灰原 黒色土層	口径:13.2 器高:3.8	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰N6/0 (内)灰N6/0	微砂粒少含	良	1/8	
15	003 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原上面	口径:13.4 器高:4.0	天井部外 ヘラ切りのちナデ、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰10Y6/1 (内)灰10Y6/1	微砂粒多含	良	口縁部:1/4 天井部:完存	
16	003 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原	口径:12.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰N5/0 (内)灰白5Y7/2	細砂粒少含	良	口縁部:1/6 天井部:極一部	
17	003 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒色土層	口径:12.0 器高:4.1	天井部外面ヘラ切りのち若干のナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白N6/0 (内)灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部:2/3 天井部:完存	口縁部歪みあり
18	003 -07	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原 黒色土層	口径:11.7 器高:4.0	天井部外面ヘラ切りのち若干のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白N7/0 (内)灰白N6/0	細砂粒少含	良	1/3	
19	004 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 G20 灰原	口径:13.4	天井部外面ヘラ切りのち若干のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白5Y7/1 (内)灰白2.5Y8/2	微砂粒少含	良	口縁部:1/4 体部:ごく一部 天井部:ごく一部	体部外面に自然釉の塊付着
20	004 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原	口径:12.4 器高:4.1	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白N6/0 (内)灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部:1/4 天井部:1/3	体部外面に砂の塊付着
21	004 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 暗褐色土層	口径:12.1 器高:4.2	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰白10Y7/1 (内)灰白5Y8/1	微砂粒多含	やや不良	口縁部:1/4 天井部:1/2	体部内面に焼きぶくれ 天井外面に工具痕
22	004 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 E19 灰原上面	口径:12.4 器高:3.8	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰N6/0 (内)灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部:1/4 天井部:1/3	天井部外面に粘土塊付着
23	004 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 F20 焚口(センターアゼ中)	口径:11.7 器高:3.3	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)青灰5BG5/1 (内)灰黄2.5Y6/2	細砂粒少含	良	1/4	口縁部に少し歪みあり
24	004 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原	口径:11.9 器高:3.2	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外)灰N6/0 (内)灰5Y6/1	細砂粒多含	良	口縁部:1/8 天井部:1/6	

第23－1表 遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
25	004 -07	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 暗褐色土層	口径：11.3 器高：4.0	天井部外面ヘラ切り不調整、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒多含	良	1/3	天井外面工具痕あり
26	004 -08	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 床面 No.27	口径：11.8 器高：4.8	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 浅黄橙10YR8/3	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/4 天井部：1/2	
27	005 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 E20 床直	口径：13.2 器高：3.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 青灰5B5/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：3/4	天井部外面に板状工具痕あり
28	005 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原下層	口径：11.6 器高：3.5	天井部外面ヘラ切り不調整、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	1/4	口縁部の一部に歪みあり
29	005 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原、下層～灰原北暗褐色土層(地上上層)	口径：12.2 器高：3.8	天井部外面ヘラ切り不調整、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明オリーブ灰5GY7/1 (内) 明オリーブ灰5GY7/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 天井部：1/2	
30	005 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 暗褐色土層	口径：12.6 器高：4.2	天井部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/8 天井部：完存	
31	005 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原上面褐色土	口径：11.3 器高：4.6	天井部外面ヘラ切り不調整、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5BG6/1 (内) 青灰5BG6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 天井部：完存	口縁部の一部に歪みあり
32	005 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 G20 灰原 黒色土層	口径：11.4 器高：4.2	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/6 天井部：1/4	天井部外面に工具痕あり
33	005 -07	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 灰原直下	口径：12.8 器高：4.1	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰白5Y8/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：完存	
34	006 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 G20 灰原 暗褐色土層	口径：12.0 器高：4.05	天井部外面ヘラ切り不調整、天井部内面一方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：1/3	天井部外面にヘラ記号「—」か
35	006 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 H19 灰原	口径：11.2 器高：3.8	天井部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	良	口縁部：1/6 天井部：1/4	体部内面焼きぶくれ多い
36	006 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 G20 灰原 暗褐色土層	口径：12.1 器高：3.5	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	口縁部：ほぼ完存 天井部：1/2	天井部外面に自然釉付着
37	006 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒色土層	口径：12.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/6 体部：1/3 天井部：極一部	
38	006 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 F20 灰原 黒色土層	口径：12.1	天井部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 明緑灰7.5GY 7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：1/3	口縁部上部に沈線が一本入る
39	006 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 F19 物原 明褐色土層	口径：12.8 器高：3.5	天井部外面ヘラ切りのち若干のナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/3 天井部：1/2	口縁部内面に杯身の受部付着
40	006 -07	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒褐色土層	口径：11.2 器高：3.7	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N5/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：1/2	口縁部の一部に歪みあり
41	007 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒褐色土層	口径：13.4 器高：3.75	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/2 天井部：完存	天井部外面にヘラ記号「—」あり
42	007 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 灰原 黒色土層	口径：11.6 器高：2.8	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) 緑灰7.5GY6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/8 天井部：極一部	
43	007 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 G19 床面 No.4	口径：10.9 器高：3.7	天井部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 緑灰5G5/1 (内) 緑灰10G5/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 天井部：3/4	天井部外面にヘラ記号「—」
44	007 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原 東側NSアゼ 黒色土層 F20	口径：12.2	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明褐灰7.5YR 7/2 (内) 灰5Y6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/6 天井部：3/4	
45	007 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原 F19	口径：11.8 器高：3.7	天井部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰2.5GY6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：極一部	体部外面に別個体付着
46	007 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原上面 褐色土層	口径：11.6 器高：3.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰2.5Y6/2 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多含	良	1/4	
47	007 -07	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原下層 中央アゼ、褐色土層 G19	口径：12.8 器高：4.5	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	良	口縁部：極一部 天井部：1/2	天井部外面にヘラ記号「×」か
48	007 -08	須恵器 杯蓋	1号窯 暗褐色土層 F19～20	口径：11.3 器高：4.1	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5BG6/1 (内) 青灰5BG6/1	微砂粒多含	やや不良	口縁部：1/8 天井部：1/3	

第23－2表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
49	008 -01	須恵器 杯身	1号窯 灰原下層 G19	口径：12.0 受部径：14.0 器高：4.3	底部外面ヘラ切りのち若干のナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/3 底部：3/4	底部内面に焼きぶくれあり
50	008 -02	須恵器 杯身	1号窯 灰原上層 暗褐色土層 G20	口径：12.0 受部径：13.0 器高：4.2	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8 底部：1/4	底部外面にヘラ記号「—」か
51	008 -03	須恵器 杯身	1号窯 灰原 暗褐色土層 G19	口径：12.0 受部径：13.8 器高：3.2	底部外面ヘラ切りのちナデ、体部外面一部ヘラ削り、底部内面一方向ナデ 口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) オリーブ灰 2.5GY6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 底部：極一部	
52	008 -04	須恵器 杯身	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	口径：12.2 受部径：14.4 器高：3.9	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y4/1 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	口縁部：極一部 底部：1/4	受部に別個体の杯蓋の一部付着
53	008 -05	須恵器 杯身	1号窯 灰原直上	口径：11.9 受部径：13.8 器高：3.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/6 受部：1/4 底部：極一部	受部に別個体の杯蓋の一部付着
54	008 -06	須恵器 杯身	1号窯 灰原上層 暗褐色土層 G20	口径：11.2 受部径：13.0 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのち若干のナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/3	底部に焼き歪みあり
55	008 -07	須恵器 杯身	1号窯 灰原 暗褐色土層 G20	口径：10.8 受部径：12.9 器高：3.8	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含 (極少)	良	1/3	体部外面に自然釉付着
56	009 -01	須恵器 杯身	1号窯 物原 明褐色土層 F19	口径：10.6 受部径：12.2 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/6 受部：1/6 底部：1/3	底部外面に工具痕あり
57	009 -03	須恵器 杯身	1号窯 床面No.1 G19	口径：11.1 受部径：12.9 器高：3.75	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	ほぼ完存	底部外面にヘラ記号「—」
58	009 -03	須恵器 杯身	1号窯 灰原上面 F19	口径：10.9 受部径：12.6 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/5 底部：1/4	底部外面に工具痕あり
59	009 -04	須恵器 杯身	1号窯 灰原 暗褐色土層 G19	受部径：13.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒多含	やや不良	1/4	
60	009 -05	須恵器 杯身	1号窯 灰原 暗褐色土層 G20	口径：11.2 受部径：13.8 器高：3.9	底部外面ヘラ切りのち若干のナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒多含	良	口縁部：極一部 受部：極一部 底部：1/2	底部外面に自然釉付着
61	009 -06	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：9.8 受部径：12.0 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	やや不良	1/3	口縁部に焼き歪みあり
62	009 -07	須恵器 杯身	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	口径：11.2 受部径：12.9 器高：3.8	底部外面ヘラ切りのちナデ、体部外面一部ヘラケズリ、底部内面不定方向ナデ 口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/4 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：3/4 受部：3/4 底部：ほぼ完存	底部外面に別個体の一部付着
63	009 -08	須恵器 杯身	1号窯 灰原	口径：11.2 受部径：12.8 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/5 底部：1/3	底部外面に工具痕あり
64	010 -01	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G20	口径：11.0 受部径：13.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/6 底部：極一部	
65	010 -02	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：11.2 受部径：12.8	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 (内) 灰N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/8 底部：1/2	体部外面に自然釉付着
66	010 -03	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：11.3 受部径：12.7 器高：4.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄橙10YR8/3 (内) 灰白10YR7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/2 受部：ほぼ完存 底部：ほぼ完存	受部に別個体の杯蓋の一部付着
67	010 -04	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：11.2 受部径：12.9 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面自然釉付着により不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 (内) にぶい黄 2.5Y6/3	砂粒多含	やや不良	口縁部：1/6 底部：1/4	全体的に自然釉付着
68	010 -05	須恵器 杯身	1号窯 灰原 H19	口径：10.8 受部径：13.2	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒多含	良	1/4	
69	010 -06	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 F20	口径：9.6 受部径：12.4 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	不良	口縁部：1/3 底部：1/2	底部外面に工具痕あり
70	010 -07	須恵器 杯身	1号窯 灰原直上	口径：11.3 受部径：12.9 器高：2.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/3 底部：1/2	底部外面にヘラ記号「—」
71	010 -08	須恵器 杯身	1号窯 焚口 E20	口径：10.0 受部径：12.4 器高：2.6	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	1/2	口縁部と底部に歪みあり
72	010 -09	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 F20	口径：10.7 受部径：12.9 器高：3.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄橙10YR8/3 (内) 浅黄橙10YR8/3	微砂粒多含	不良	口縁部：ごく一部 受部：1/2 底部：ほぼ完存	口縁部に焼き歪みか切り込みか

第23－3表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
73	011 -01	須恵器 杯身	1号窯 アゼ土層断面No.12 E20	口径：11.0 受部径：12.8 器高：2.8	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：ごく一部 受部：ほとんど欠 底部：1/3	底部外面に工具痕あり
74	011 -02	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：10.4 受部径：12.0 器高：3.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：ほとんど欠 受部：1/4 底部：ごく一部	
75	011 -03	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：10.0 受部径：12.0 器高：3.95	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/6 受部：1/4 底部：1/4	
76	011 -04	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：10.0 受部径：11.9 器高：4.45	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面自然釉付着により不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	1/4	全体的に自然釉付着
77	011 -05	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 F19	口径：9.7 受部径：12.0 器高：4.3	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄 2.5Y6/3 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多含	不良	口縁部：ごく一部 受部：1/4 底部：1/3	体部外面に自然釉付着
78	011 -06	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒褐色土層 G19	口径：9.9 受部径：11.7 器高：4.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y6/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	1/4	底部外面に工具痕あり
79	001 -07	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：10.8 受部径：12.6 器高：4.2	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 暗オリーブ灰 2.5Y4/1 (内) オリーブ灰 2.5Y5/1	微砂粒多含	良	1/4	口縁部の一部に歪みあり
80	011 -08	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：12.8 器高：3.9	底部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1～7/1 (内) 灰7.5Y6/1～7/1	微砂粒少含	良	1/2	
81	011 -09	須恵器 杯身	1号窯 灰原 H19	口径：11.2 受部径：12.6 器高：3.8	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄5Y7/3 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	やや不良	口縁部：ごく一部 受部：1/4 底部：1/4	受部に別個体の杯蓋の一部付着
82	011 -10	須恵器 杯身	1号窯 窯体内床焼土(花崗岩フウカ土)面上の砂の中(トレンチのたちわり)E20	口径：9.8 受部径：12.4 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y6/1 (内) 灰白5Y6/1	微砂粒多含	やや不良	1/4	受部外面にキザミ？あり
83	012 -01	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：9.8 受部径：12.0 器高：3.5	底部外面ヘラ切り不調整 底部外面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄橙10YR8/3 (内) 灰N7/0	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/6 底部：1/4	体部外面に自然釉付着
84	012 -02	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 F19	口径：9.4 受部径：11.8	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR6/3 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 底部：ごく一部	体部外面に自然釉付着
85	012 -03	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒褐色土層 G19	口径：9.6 受部径：11.4 器高：3.6	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	不良	口縁部：1/6 底部：1/3	受部外面に自然釉付着
86	012 -04	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 F19	口径：10.2 受部径：11.9	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒多含	不良	1/4	底部内面に焼きぶくれあり
87	012 -05	須恵器 杯身	1号窯 灰原 暗褐色土層 G19	口径：10.0 受部径：12.0 器高：3.55	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰色10BG5/1 (内) 青灰色10BG5/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/8 底部：1/2	底部外面に工具痕あり
88	012 -06	須恵器 杯身	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	口径：9.4 受部径：11.3	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 底部：ごく一部	
89	012 -07	須恵器 杯身	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	口径：10.4 受部径：12.4 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 底部：1/2	底部外面に工具痕あり
90	012 -08	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：12.0 受部径：13.5 器高：4.3	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 明黄褐2.5Y7/6	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 受部：1/3 底部：3/4	底部内面に焼きぶくれあり
91	012 -09	須恵器 杯身	1号窯 灰原 暗褐色土層 G20	口径：12.4 受部径：14.9	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒少含	良	1/4	体部外面に自然釉付着
92	012 -10	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：13.2 器高：3.8	底部外面ヘラ切りのちナデ、体部外面の一部ヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	微砂粒少含	良	口縁部：ごく一部 受部：1/2 底部：3/4	
93	013 -01	須恵器 杯身	1号窯 暗褐色土層 G19	口径：10.8 受部径：12.9 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 淡黄5Y8/3	細砂粒多含	良	完存	
94	013 -02	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：13.0 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 (内) 黄灰2.5Y6/1	微砂粗多含	良	1/4	体部外面に打ちかき痕あり
95	013 -03	須恵器 杯身	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：13.0 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面自然釉付着により調整不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) オリーブ黄5Y 6/4	細砂粒多含	良	1/2	底部内面に自然釉付着
96	013 -04	須恵器 杯身	1号窯 灰原 F19	口径：10.9 受部径：13.2	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄5Y7/3 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 受部：1/3 底部：ごく一部	体部外面に自然釉付着

第23－4表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
97	013 -05	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：11.3 器高：4.4	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	1/3	天井部外面にヘラ記号「N」あり
98	013 -06	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原 黒色土層 F19	口径：10.9 器高：4.5	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/6 天井部：1/4	天井部外面にヘラ記号?「N」か?
99	013 -07	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原下層～灰原北 F19	口径：10.1 器高：4.3	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 浅黄橙7.5YR 8/3	細砂粒多含	良	口縁部：2/3 天井部：ほぼ完存	
100	013 -08	須恵器 蓋	1号窯 床直 E20		天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面一方向ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	口縁部：全欠 天井部：完存	天井部外面にヘラ記号「一」
101	014 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原 黒褐色土層 G19	口径：10.0 器高：4.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	1/6	
102	014 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 灰原(東)直上	口径：10.9 器高：4.7	天井部外面ロクロヘラ削りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部：こく一部 天井部：1/2	天井部内面に焼きぶくれあり
103	014 -03	須恵器 椀	1号窯 暗褐色土層 G20	口径：10.3 器高：5.3	底部外面静止ヘラ削り 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) にぶい黄橙 10YR7/4	微砂粒多含	良	1/8	
104	014 -04	須恵器 椀	1号窯 灰原 暗褐色土層 G19	口径：10.8	底部内面不定方向ナデ 体部外面ロクロヘラケズリ 口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/2	底部外面にヘラ記号「一」か
105	014 -05	須恵器 椀	1号窯 灰原 G19	口径：10.0	底部外面ロクロヘラ削り 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5BG5/1 (内) 青灰5BG5/1	微砂粒多含	良	1/6	口縁部に歪みあり
106	014 -06	須恵器 椀	1号窯 灰原 暗褐色土層 G20	口径：10.4	底部外面ロクロヘラ削り(一部のちナデ) 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白2.5Y8/2	微砂粒少含	良	口縁部：1/4	底部内面に焼きぶくれ多い
107	014 -07	須恵器 椀	1号窯 灰原 F20		底部外面ロクロヘラ削り 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白10YR8/2	微砂粒多含	良	底部：4/5	底部外面にヘラ記号「×」あり
108	015 -01	須恵器 椀	1号窯 物原 明褐色土層 F19	口径：11.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) にぶい黄 2.5Y6/3	微砂粒多含	良	1/8	
109	015 -02	須恵器 椀	1号窯 灰原上層 F19	口径：15.0	体部外面ロクロ削り 口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/4	
110	015 -03	須恵器 杯	1号窯 灰原 黒色土層 F20	口径：11.2 器高：3.4	底部外面ロクロ削りのちナデ 底部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	微砂粒多含	やや不良	口縁部：こく一部 底部：1/4	
111	015 -04	須恵器 高杯	1号窯 床面直上 E20	口径：12.6	底部外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒多含	やや不良	1/3	剝離激しく調整不明瞭
112	015 -05	須恵器 高杯	1号窯 灰原 黒色土層 F19	口径：10.6	底部外面ロクロ削りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	1/4	
113	015 -06	須恵器 高杯	1号窯 灰原 黒色土層 G19	杯部底径： 8.0	脚部ロクロナデ 杯部の底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白2.5Y7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	杯部：2/3	杯部外面にヘラ記号「N」あり
114	015 -07	須恵器 高杯	1号窯 トレンチ G19	裾径：12.1	脚部ロクロナデ 杯部の底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多含	良	杯部：1/4 脚部：3/4	二段スカシ(上)は完通せず
115	016 -01	須恵器 高杯	1号窯 灰原 G19		脚部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	良	基部：完存	
116	016 -02	須恵器 高杯	1号窯 灰原直上 F19	裾径：11.3	脚部ロクロナデ	(外) 灰N7/0 (内) 灰N7/0	微砂粒多含	不良	底部：ほぼ完存	
117	016 -03	須恵器 高杯	1号窯 物原 明褐色土層 F19	口径：28.0	底部内面ナデ 底部外面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 浅黄2.5Y7/3	微砂粒多含	不良	口縁部：1/4 底部：ほぼ完存	焼成不良のため表面の風化激しい
118	016 -04	須恵器 甕	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：12.3	口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/3	
119	016 -05	須恵器 甕	1号窯 灰原 黒色土層 F20	口径：12.4	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/6	
120	016 -06	須恵器 甕	1号窯 灰原 黒色土層 G19	口径：11.1	口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/2	

第23－5表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
121	016 -07	須恵器 甕	1号窯 床面直上 E20	口径：10.1	口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 浅黄2.5Y7/3	微砂粒少含	良	口縁部：2/3	
122	016 -08	須恵器 甕	1号窯 灰原直上 F19	体部最大径： 8.4	底部・体部外面ロクロヘラケズリ 体部内面ロクロナデ	(外) 暗オリーブ灰 2.5GY4/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	体部：完存 底部：完存	底部外面にヘラ記号「N」あり
123	016 -09	須恵器 鉢 か	1号窯 灰原 F19	口径：8.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y6/2	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/8	全体的に自然釉付着
124	017 -01	須恵器 鉢 か	1号窯 灰原北斜面(包) G18	口径：8.8	体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/4	口縁部外面に自然釉付着
125	017 -02	須恵器 短頸壺	1号窯 灰原 灰褐色土層 F19	口径：15.2	体部外面カキ目調整 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口縁部：1/10	
126	017 -03	須恵器 短頸壺	1号窯 灰原 黒色土層	口径：7.2	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	良	1/4	
127	017 -04	須恵器 捏 鉢	1号窯 灰原 G19	口径：10.8 底径：8.6 器高：12.6	体部・口縁部ロクロナデ、底部外面ヘラ切りのちナデ、一部ロクロヘラ削り 底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	1/2	体部外面にヘラ記号「—」
128										
129	017 -05	須恵器 鉢	1号窯 灰原 黒褐色土層 G19	口径：20.7	体部外面カキ目調整 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰5BG7/1 (内) 明青灰5BG7/1	微砂粒少含	良	1/2	
130	017 -06	須恵器 蓋	1号窯 灰原 センターアゼ南	口径：8.5 器高：1.4	天井部外面ロクロヘラ削り、天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒少含	良	1/4	
131	018 -01	須恵器 提 瓶	1号窯 灰原 黒褐色土層 G19	口径：7.0 器高：19.7	口縁部・体部外面・底部ロクロナデ 体部(肩部)内面ロクロヘラケズリ 体部(胴部)内面指押しで調整	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	不良	体部：2/3	胴部形成後に穿孔、口辺部取付
132	018 -02	須恵器 平 瓶	1号窯 灰原直上 F19	口径：6.7	口縁部ロクロナデ 体部外面カキ目調整 体部内面不定方向ナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	体部(肩部)：1/4	頸部外面にヘラ記号「丨」
133	018 -03	須恵器 高 杯	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	裾径：11.4	脚部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	良	1/4	脚部外面に自然釉付着
134	018 -04	須恵器 高 杯	1号窯 黒色土東側NSアゼ F19	裾径：11.4	脚部ロクロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) 灰5Y6/1	微砂粒多含	良	1/2	
135	018 -05	須恵器 高 杯	1号窯 灰原上面 褐色土 F19	裾径：12.7	脚部ロクロナデ 杯部(底部)内面不定方向ナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多含	良	裾部：3/4 杯部：2/3	三方スカシ
136	019 -01	土師器 鍋	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	口径：17.0	口縁部ヨコナデ 体部外面(上部)タテ方向ハケ目、(下部)ヨコ方向ハケ目	(外) 明黄褐10YR7/6 (内) 明黄褐10YR7/6	微砂粒多含	良	1/8	全体的に磨耗激しく不明瞭
137	019 -02	土師器 鍋	1号窯 灰原直上 F19	口径：19.2	口縁部ヨコナデ 体部外面(上部)タテ方向ハケ目、(下部)ヨコ方向ハケ目	(外) にぶい黄橙 10YR7/4 (内) にぶい黄橙 10YR7/4	微砂粒多含	良	1/8	全体的に磨耗激しく不明瞭
138	019 -03	須恵器 短頸壺	1号窯 暗褐色土層 G20	口径：9.2	口縁部・体部(上部)ロクロナデ 体部(下部)外面ロクロヘラ削り	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	やや不良	1/3	体部外面に釉垂れ痕と杯身付着
139	019 -04	須恵器 短頸壺	1号窯 灰原 黒褐色土層 G19	口径：11.6	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 淡黄2.5Y8/3	微砂粒多含	良	1/6	体部外面に別個体付着
140	019 -05	須恵器 短頸壺	1号窯 灰原上面 F19	体部最大径： 19.0	体部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	1/2	体部外面にクシによる刺突文あり
141	020 -01	須恵器 短頸壺	1号窯 灰原上面 褐色土層 F19	口径：7.0	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 体部：1/2	頸部に歪み・釉の固まりあり
142	020 -02	須恵器 甕	1号窯 灰原直上 F19	口径：18.2	口頸部ロクロナデ 体部外面平行タタキのち帯状スリ消シ 体部内面青海波タタキ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒多含	良	口頸部：3/4 体部：1/2	口縁部に歪み、工具痕あり
143	020 -03	須恵器 甕	1号窯 灰原 黒色土層	口径：19.0	口頸部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 浅黄2.5Y7/3	微砂粒少含	やや不良	口頸部：1/2	口頸部に焼きぶくれ多い
144	020 -04	須恵器 甕	1号窯 床面No.4 G19	口径：14.4	口頸部ロクロナデ 体部外面平行タタキのち帯状スリ消シ 体部内面青海波タタキ	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 (内) 淡黄2.5Y8/3	微砂粒多含	不良	口頸部：1/4 体部：1/3	体部内面に剝離痕あり

第23－6表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
145	021 -01	須恵器 甕	1号窯 灰原下層 G19	口径：18.0	口頸部・体部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰白5Y8/2	微砂粒多含	不良	1/6	口縁部外面にヘラキザミあり
146	021 -02	須恵器 甕	1号窯 灰原下層 G19	口径：18.3	口頸部ロクロナデ 体部外面平行タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 淡黄2.5Y8/3	微砂粒多含	不良	1/2	全体的に磨耗激しく調整不明瞭
147	021 -03	須恵器 甕	1号窯 (東)灰原直上	口径：20.8	口頸部外面ハケ状工具による調整、口頸部内面ロクロナデ、体部外面平行タタキ及びカキ目調整、体部内面青海波タタキのち帯状スリ消シ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR8/1	微砂粒多含	やや不良	1/4	全体的に自然釉付着
148	021 -04	須恵器 甕	1号窯 灰原上面 F19	口径：22.3	口頸部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) オリーブ灰 2.5GY6/1	微砂粒多含	良	1/8	
149	021 -05	須恵器 甕	1号窯 灰原上面	口径：20.4	口頸部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰黄2.5Y7/2	砂粒少含	良	1/6	
150	022 -01	須恵器 横瓶	1号窯 灰原下層 F19	口径：10.4	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR8/1	微砂粒少含	良	1/4	
151	022 -02	須恵器 横瓶	1号窯 灰原　暗褐色土層 G20	口径：9.6	口頸部ロクロナデ 体部外面平行タタキ	(外) 灰白10YR7/0 (内) 灰白10YR7/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/2 体部：ごく一部	全体的に自然釉付着
152	022 -03	須恵器 甕	1号窯 床面No.18	口径：29.65	口縁部・口頸部内面ロクロナデ 口頸部外面カキ目調整、基部外面平行タタキのち帯状スリ消シ、基部内面青海波タタキ	(外) 浅黄橙10YR8/3 (内) にぶい黄橙 10YR7/3	細砂粒多含	やや不良	口頸部：1/4 基部：1/6	口頸部内面に釉垂れ痕多くあり
153	023 -01	須恵器 甕	1号窯 灰原	口径：43.2	口縁部・口頸部内面ロクロナデ 口頸部外面カキ目調整	(外) 灰N5/0 (内) 灰5Y5/1	細砂粒多含	良	口頸部：1/10	
154	023 -02	須恵器 甕	1号窯 灰原　黒褐色土層 G19	口径：38.0	口縁部・口頸部内面ロクロナデ 口頸部外面カキ目調整	(外) 浅黄橙10YR8/3 (内) 浅黄橙10YR8/3	細砂粒少含	やや不良	1/3	
155	024 -01	須恵器 甕	1号窯 灰原下層　褐色土層 G19	口径：49.3	口頸部内面ロクロナデ 口頸部外面(上部)カキ目調整、(下部)ナデ	(外) 灰N4/1 (内) 灰N4/1	微砂粒多含	良	1/2	口頸部内面焼きぶくれ少しあり
156	024 -02	須恵器 甕	1号窯 窯体内堆積土中 E19	口径：38.2	口頸部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰7.5Y5/1	微砂粒少含	やや不良	1/10	
157	025 -01	須恵器 甕	1号窯 灰原　黒褐色土層 F19	口径：52.2	口頸部内面ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰黄2.5Y6/2	微砂粒多含	良	1/6	口頸部に焼きぶくれあり
158	025 -02	須恵器 甕	1号窯 床面No.10・18・19・20・23 G19	口径：38.2	口頸部内面ロクロナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N5/0	微砂粒多含	良	口縁部：ほぼ欠 基部：1/4	口頸部内面に打ち欠き痕多くあり
159	025 -03	須恵器	1号窯 灰原 F20		外面ナデ 内面青海波タタキ	灰白N7/0	微砂粒多含	良		
160	025 -04	須恵器	1号窯 灰原直上 F19		外面ヘラキザミ 内面青海波タタキ	灰白N7/0	細砂粒多含	良		
161	026 -01	須恵器 杯蓋	1号窯 埋土 E19	口径：11.8 器高：4.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面自然釉付着により調整不明瞭 口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) にぶい黄2.5Y 6/4	微砂粒多含	良	1/3	天井部外面にヘラ記号「—」あり
162	026 -02	須恵器 杯蓋	1号窯 窯体埋土 E20	口径：12.2 器高：4.55	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：ごく一部 天井部：ほぼ完存	
163	026 -03	須恵器 杯蓋	1号窯 焚口堆積土中センター アゼ北ヘリ　F20	口径：10.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒多含	良	1/4	
164	026 -04	須恵器 杯蓋	1号窯 窯体内堆積土中 E20	口径：11.2 器高：3.4	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一部ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄褐10YR6/2 (内) 灰5Y5/1	砂粒少含	良	口縁部：1/3 天井部：3/4	
165	026 -05	須恵器 杯身	1号窯 土層断面No.⑤より出土 E20	口径：12.2 受部径：15.0 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒少含	やや不良	1/4	口縁部に歪みあり
166	026 -06	須恵器 杯身	1号窯 埋土 E19	口径：10.0 受部径：12.0 器高：4.0	底部外面ヘラ削りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/6 底部：1/4	
167	026 -07	須恵器 杯身	1号窯 埋土 E20	口径：10.0 受部径：12.2 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ、一部ロクロヘラ削りか 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白2.5Y8/2	微砂粒多含	不良	2/3	焼成不良のため磨耗激しい
168	026 -08	須恵器 杯身	1号窯 窯体内堆積土中 (天井有り部下)E19～ 20	口径：10.0 受部径：12.0 器高：3.9	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄橙7.5YR 8/3 (内) 浅黄橙7.5YR 8/3	微砂粒少含	不良	1/2	底部外面にヘラ記号「//」かと黒斑あり

第23－7表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
169	027-01	須恵器 杯身	1号窯 埋土 E20	口径：10.1 受部径：12.1 器高：3.5	底部外面ヘラ切り未調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	微砂粒少含	良	2/3	底部外面にワラ痕残る
170	027-02	須恵器 杯身	1号窯 窯体埋土 E20	口径：10.5 受部径：12.4 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/2 底部：ほぼ完存	底部内面に焼きぶくれ多くあり
171	027-03	須恵器 杯身	1号窯 窯体内堆積土中 (天井有り部下)E19～20	口径：10.6 受部径：13.0 器高：3.8	底部外面ヘラ切り未調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒少含	良	1/4	底部歪み大
172	027-04	須恵器 高杯	1号窯 埋土 E19	裾径：9.8	脚部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	1/3	裾部内面に別個体付着
173	027-05	須恵器 高杯	1号窯 窯体内堆積土中 (天井有り部下)	裾径：7.3	脚部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	3/4	
174	027-06	須恵器 平瓶	1号窯 埋土 E20	口径：7.2	口頸部ロクロナデ 肩部内面オサエのちナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 肩部：1/5	
175	027-07	須恵器 壺	1号窯 土層断面No.⑪ E19	口径：8.0	口縁部・体部外面ロクロナデ 体部内面ヘラ状工具によるナデか	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰白5Y8/2	微砂粒多含	不良	1/4	
176	027-08	土師器 甕	1号窯 窯体堆積土中 下層(床面近く)窯体センターアゼ E20	口径：13.1	口縁部ヨコナデ 体部外面タテ方向ハケ目 体部内面ヨコ方向ハケ目	(外) 浅黄橙10YR8/4 (内) 浅黄橙10YR8/4	微砂粒多含	良	1/6	
177	027-09	土師器 窯道具カ	1号窯 煙道口堆積土中 D19	最大径：8.2	未調整	(外) 浅黄橙7.5YR 8/4 (内) 浅黄橙7.5YR 8/4	微砂粒少含	良	1/2	
178	028-01	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.15 D21	口径：12.4 器高：2.9	天井部ヘラ切り不調整 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/4	
179	028-02	須恵器 杯蓋	2号窯 窯体内床面直上 D21	口径：13.0 器高：2.95	天井部ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/6	
180	028-03	須恵器 杯蓋	2号窯 堆積土中燃焼室床近く E21	口径：12.4 器高：3.0	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/3	
181	028-04	須恵器 杯蓋	2号窯 床直砂上 No.34	口径：13.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂粒多含	良	2/3	口縁部に釉垂れ痕あり
182	028-05	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.10 E21	口径：13.8 器高：3.5	天井部外面ヘラ切りのち若干ナデ 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/4	
183	028-06	須恵器 杯蓋	2号窯 床面砂中裁ち割り	口径：13.2 器高：3.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	1/4	
184	028-07	須恵器 杯蓋	2号窯 崩落焼土中 (青灰色土層)ほぼ床面 D21	口径：13.6 器高：4.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰5Y5/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 天井部：ほぼ完存	天井部外面に工具痕、口縁部に歪み
185	028-08	須恵器 杯蓋	2号窯 焚口部床面焼土・炭ブロック中	口径：13.0 器高：3.7	天井部外面自然釉付着により調整不明瞭 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	細砂粒多含	良	口縁部：ごく一部 天井部：1/4	体部内面に焼きぶくれあり
186	028-09	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.6 E21	口径：11.6 器高：4.0	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	砂粒多含	良	ほぼ完存	
187	028-10	須恵器 杯蓋	2号窯 窯体内床面 E21	口径：11.5 器高：3.7	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：1/2	
188	028-11	須恵器 杯蓋	2号窯 灰原焚口東アゼ取外し	口径：12.0 器高：3.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面自然釉付着により調整不明瞭 口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 淡黄2.5Y8/4	砂粒多含	良	1/4	口縁部に焼き歪み小あり
189	028-12	須恵器 杯蓋	2号窯 焚口上部 黒灰色土層焼土混り土 E21	口径：10.1 器高：3.1	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/6	天井部外面自然釉付着
190	029-01	須恵器 杯蓋	2号窯 窯体床面砂中	口径：13.4 器高：4.7	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/2	天井部内面に砂うすく付着
191	029-02	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.2 E21	口径：13.6 器高：4.4	天井部外面ヘラ切り不調整、一部ロクロヘラケズリ、天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：ほぼ完存	砂の固まりが釉着
192	029-03	須恵器 杯蓋	2号窯 堆積土中(燃焼部)床近く E21	口径：12.0 器高：4.6	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白10YR7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/3 天井部：1/2	天井部外面にヘラ記号「一」か

第23－8表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
193	029 -04	須恵器 杯蓋	2号窯 東 灰原最上灰層中寄り	口径：13.2 器高：4.5	天井部外面ヘラ切りのち若干ナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒少含	不良	1/3	
194	029 -05	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.4 E21	口径：11.2 器高：3.7	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：1/2	天井部外面に工具痕か
195	029 -06	須恵器 杯蓋	2号窯 床面砂中裁ち割り	口径：11.6 器高：3.7	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	細砂粒多含	良	1/3	
196	029 -07	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.13 D21	口径：11.0 器高：4.25	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/4	天井部外面に自然釉付着
197	029 -08	須恵器 杯蓋	2号窯 焚口堆積土(床に近い) E21	口径：10.6 器高：3.7	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	2/3	
198	029 -09	須恵器 杯蓋	2号窯 焚口 黒色土層 E20	口径：11.2 器高：3.6	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰7.5YR5/1 (内) 褐灰7.5YR6/1	微砂粒多含	やや不良	1/3	
199	029 -10	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂) No.31 E21	口径：12.0 器高：3.4	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰10YR5/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/3	天井部外面に自然釉付着
200	029 -11	須恵器 杯蓋	2号窯 窯体内 No.2 D21	口径：11.0 器高：3.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 天井部：1/4	天井部外面自然釉付着
201	030 -01	須恵器 杯蓋	2号窯 灰原 センターアゼ南 F21	口径：11.6 器高：4.3	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：完形	
202	030 -02	須恵器 杯蓋	2号窯 灰原トレンチ黒色土層 F21	口径：11.0 器高：3.55	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 赤灰7.5R5/1	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/2 天井部：完形	
203	030 -03	須恵器 杯蓋	2号窯 灰原 F21	口径：11.6 器高：3.7	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰N7/0	砂粒多含	良	口縁部：ほぼ欠 天井部：1/2	天井部外面に釉の固まり付着
204	030 -04	須恵器 杯蓋	2号窯 床面(砂)No.8 E21	口径：12.8 器高：3.9	天井部外面自然釉付着のため調整不明瞭、天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	やや不良	1/6	天井部外面に焼きぶくれあり
205	030 -05	須恵器 杯蓋	2号窯 焚口黒色土層 E20	口径：12.4 器高：4.5	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一方向ナデか 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄褐10YR6/2 (内) 灰黄褐10YR6/2	細砂粒多含	良	1/2	体部両面に自然釉付着
206	030 -06	須恵器 杯身	2号窯 床面砂中タチ割り	口径：12.5 受部径：14.8	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 褐灰7.5YR5/1 (内) 褐灰7.5YR6/1	細砂粒多含	良	1/6	
207	030 -07	須恵器 杯身	2号窯 東側斜面(包)灰原 F21	口径：12.0 受部径：14.0 器高：3.8	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/8 底部：1/4	底部外面に自然釉付着
208	030 -08	須恵器 杯身	2号窯 灰原 F21	口径：13.4 受部径：15.4 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰N6/0	砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：ごく一部	
209	030 -09	須恵器 杯身	2号窯 床面(砂)No.17 D21	口径：11.3 受部径：13.2 器高：3.6	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多含	やや不良	3/4	体部外面に焼きぶくれ多くあり
210	030 -10	須恵器 杯身	2号窯 黒灰色土層 焚口上部 焼土混り土 E21	口径：11.5 受部径：13.8 器高：3.5	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面自然釉付着により調整不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/2	
211	030 -11	須恵器 杯身	2号窯 床面砂中(タチ割り)	口径：11.3 受部径：12.9 器高：4.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰5YR6/1 (内) 褐灰5YR6/1	細砂粒多含	良	1/2	天井部に焼きぶくれとひずみあり
212	030 -12	須恵器 杯身	2号窯 灰原 F21	口径：10.8 受部径：13.0 器高：3.6	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰7.5YR6/1 (内) にぶい橙7.5YR 7/3	微砂粒少含	良	1/3	天井部外面に工具痕あり
213	031 -01	須恵器 杯身	2号窯 灰原 E21	口径：10.6 受部径：12.8 器高：3.9	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) オリーブ灰 2.5GY5/1	微砂粒多含	良	口縁部：ごく一部 受部：1/4 底部：1/4	
214	031 -02	須恵器 杯身	2号窯 床面直上 D21	口径：10.8 受部径：12.7 器高：3.6	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5PB6/1 (内) 青灰5PB6/1	微砂粒少含	良	1/2	
215	031 -03	須恵器 杯身	2号窯 焚口部床面(焼土ブロック層中)	口径：10.8 受部径：12.6 器高：3.3	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	細砂粒多含	良	1/3	受部の一部に砂の固まりがつまっている
216	031 -04	須恵器 杯身	2号窯 床面No.18 D21	口径：10.8 受部径：12.3 器高：3.85	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	1/2	

第23－9表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
217	031 -05	須恵器 杯身	2号窯 床面直上 E21	口径：10.8 受部径：12.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/4	
218	031 -06	須恵器 杯身	2号窯 焚口床面直上 E21	口径：11.6 受部径：13.5 器高：4.0	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰10YR6/1 (内) 褐灰10YR6/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/6 底部：完存	体部に焼き歪みによる亀裂あり
219	031 -07	須恵器 杯身	2号窯 燃焼部⑥	口径：10.5 受部径：12.2 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面自然釉付着により調整不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰黄褐10YR6/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 底部：完存	底部に砂の固まり釉着
220	031 -08	須恵器 杯身	2号窯 焚口上部 黒灰色土層 焼土混り土 E21	口径：9.2 受部径：11.3 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	1/4	
221	031 -09	須恵器 杯身	2号窯 灰原東アゼとりはずし	口径：10.7 受部径：12.6 器高：3.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	1/4	口縁部・受部の先端部はほとんど欠
222	031 -10	須恵器 杯身	2号窯 窯体床面砂中	口径：11.0 受部径：13.4 器高：3.9	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) オリーブ灰 2.5GY6/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/6 底部：1/4	
223	031 -11	須恵器 杯身	2号窯 窯体床面砂中	口径：10.0 受部径：11.8 器高：3.6	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 底部：1/2	体部外面に自然釉付着
224	031 -12	須恵器 杯身	2号窯 窯体床面砂中 (天井残存下)	口径：10.4 受部径：12.3 器高：3.6	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒多含	良	1/2	
225	031 -13	須恵器 杯身	2号窯 窯体内No.1 D21	口径：10.8 受部径：12.8	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/3 底部：1/2	口縁部・体部に焼き歪みあり
226	032 -01	須恵器 高杯	2号窯 床直(砂)No.30 E21	口径：15.4	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白2.5YR7/1	微砂粒少含	良	3/4	
227	032 -02	須恵器 高杯	2号窯 灰原 E21～F21	口径：16.2	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白N7/1 (内) 灰N6/1	微砂粒少含	良	1/6	
228	032 -03	須恵器 高杯	2号窯 灰原 F21	口径：14.5	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部内面不定方向ナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/8	
229	032 -04	須恵器 高杯	2号窯 灰原 センターアゼ北側 F21	口径：17.2	杯部の口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/10	
230	032 -05	須恵器 高杯	2号窯 灰原 センターアゼ南	口径：15.3	杯部の口縁部・体部ロクロナデ	(外) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 (内) 灰白2.5GY8/1	微砂粒多含	良	1/4	
231	032 -06	須恵器 高杯	2号窯 焚口床直上 F21	口径：12.0	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部内面ナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：ごく一部 底部：1/3	全体的に自然釉付着 砂釉着
232	032 -07	須恵器 高杯	2号窯 トレンチ内アゼ灰層 (灰原先端) G22	口径：11.0	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロヘラ削りか 底部内面ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒多含	やや不良	1/3	
233	032 -08	須恵器 高杯	2号窯 焚口(床直上) E21	口径：10.6	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロヘラ削りか 底部内面ナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/2	内面に自然釉付着
234	032 -09	須恵器 高杯	2号窯 灰原上方 F21	裾径：11.2	裾部内・外面共にロクロナデ	(外) にぶい黄2.5Y 6/3 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒多含	良	1/4	二方スカシあり
235	032 -10	須恵器 蓋	2号窯 灰原上方 F21		天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向ナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰黄褐10YR6/2	細砂粒多含	やや不良	天井部：3/4 体部：ごく一部	天井部外面にヘラ記号「N」
236	033 -01	須恵器 短頸壺	2号窯 灰原 F21	口径：10.6	口縁部・外面ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/2 体部：1/8	体部外部外面に自然釉付着
237	033 -02	須恵器 短頸壺	2号窯 東側斜面(包) F21	体部最大径：13.0	体部内・外面ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒多含	良	1/3	体部外面に釉垂れ痕と砂の固まり付着
238	033 -03	須恵器 短頸壺	2号窯 灰原 センターアゼ北側 F21	口径：8.7	口縁部・体部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 (内) 浅黄橙10YR8/3	微砂粒多含	良	1/6	外面全体に自然釉付着
239	033 -04	須恵器 椀か	2号窯 灰原 センターアゼ北側	口径：6.2	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少含	良	1/3	
240	033 -05	須恵器 提瓶	2号窯 床直 とりあげNo.32 E21	口径：8.4	口縁部・体部内面ロクロナデ 体部外面カキ目調整痕一部に残る	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：完存 体部：2/3	口縁部内面にヘラ記号「／」か

第23－10表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
241	033 -06	須恵器 短頸壺	2号窯 床面 とりあげNo.20 D21	口径：15.2	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒多含	やや不良	1/3	
242	033 -07	須恵器 提瓶	2号窯 東灰原トレンチ(東西) 灰原層直上 F21	口径：5.5	口縁部・体部内面ロクロナデ 体部外面カキ目調整	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒少含	良	1/2	
243	034 -01	須恵器	2号窯 東側斜面(包) 灰原 F21		外面叩きのち横ナデ 口縁端部ケズリ 内面青海波タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良		
244	034 -02	須恵器	2号窯 東側斜面(包) 灰原 F21		外面平行タタキ 口縁端部ケズリ 内面青海波タタキ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 紫灰5RP5/1	細砂粒少含	良		
245	034 -03	須恵器 杯身	2号窯 崩落焼土中(青灰色土層) ほぼ床面D21	口径：10.8 受部径：12.7 器高：4.05	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 底部：ほぼ完存	底部外面に壺口縁部付着(重ね焼き)
246	034 -04	須恵器 杯身	2号窯 焚口1層アゼにかかった杯身片 F21	口径：11.7 受部径：13.9	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒多含	良	1/4	
247	034 -05	須恵器 杯身	2号窯 窯体内埋土 E21	口径：11.2 受部径：13.7 器高：4.75	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 受部：1/2 底部：完存	体部外面に自然釉付着
248	034 -06	須恵器 杯身	2号窯 15層 焚口アゼ中 F21	口径：10.2 受部径：11.8 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 内面全体自然釉付着のため調整不明瞭	(外) 灰N6/0 (内) にぶい黄橙 10YR6/4	細砂粒多含	良	ほぼ完存	内面全体に砂の固まり厚く付着
249	034 -07	須恵器 椀	2号窯 窯体内堆積土中 D21	口径：10.0 器高：4.8	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロヘラ削り 底部内面一定方向ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	ほぼ完存	体部外面に部分的に自然釉付着
250	034 -08	須恵器 高杯	2号窯 窯体内堆積土中	口径：13.5	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 褐灰10YR6/1 (内) 褐灰10YR6/1	微砂粒少含	良	1/2	
251	034 -09	須恵器 甑	2号窯 窯体内堆積土中 (上層) E21	体部最大径：10.2	体部ロクロナデ 底部外面不定方向ナデと板状工具による調整か	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒多含	良	完存	底部外面にヘラ記号「N」あり
252	035 -01	須恵器 甕	2号窯 窯体内埋土中央アゼ南側崩落天井上層 D21～22	口径：42.0	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒多含	良	1/8	口頸部外面に櫛状工具による刺突
253	036 -01	須恵器 甕	2号窯 包(斜面)・埋土・落ちこみ C21	口径：39.4	口頸部ロクロナデ 体部外面平行タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 灰N4/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	3/4	
254	037 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：10.8 器高：2.5	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰10Y4/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/2残	天井部に別個体付着
255	037 -02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰土層 B32	口径：9.7 器高：2.45	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 天井部：ほぼ完存	
256	037 -03	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス C31	口径：9.8 器高：3.2	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部外面・口縁部ロクロナデ、体部内面不定方向のナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 天井部：ほぼ完存	天井部に別個体の一部が釉着
257	037 -04	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 溝・埋土 A30	口径：10.3 器高：3.3	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/2残 体部：1/2残 天井部：1/3残	
258	037 -05	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：10.6 器高：2.65	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白10Y7/1	砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/6残 天井部：1/4残	口縁部～体部外面の一部に自然釉
259	037 -06	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.6 器高：3.15	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰10Y6/1	砂粒少含	良	口縁部：1/12残 体部：1/4残 天井部：ほとんど欠	
260	037 -07	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス C31	口径：9.4 器高：2.95	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	砂粒少含	良	1/4残	
261	037 -08	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B30	口径：9.7 器高：2.95	天井部外面ヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	砂粒少含	良	ほぼ完存	
262	037 -09	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.5 器高：3.4	天井部外面ヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	1/2残	外面に薄く自然釉点在
263	037 -10	須恵器 杯蓋	3号窯 タニ埋土 くすんだ黄褐色土層 D27	口径：10.1 器高：2.8	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒少含	良	1/2残	
264	037 -11	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス B30	口径：10.0 器高：2.95	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/4残	

第23－11表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
265	037 -12	須恵器 杯蓋	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：8.8 器高：3.3	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/4残	天井部に別個体の口縁部が釉着
266	037 -13	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.9 器高：3.05	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰10Y6/1	細砂粒少含	良	1/8残	
267	037 -14	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：9.6 器高：3.0	天井部外面ヘラケズリのち不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 天井部：1/2残	
268	038 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰 第2段テラス C31	口径：10.9 器高：2.8	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	良	1/8残	
269	038 -02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：10.0 器高：3.0	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/4残	
270	038 -03	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原 灰赤色土層	口径：11.0 器高：3.2	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/2残 天井部：1/2残	
271	038 -04	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス　B29	口径：9.8 器高：3.1	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部：1/2残 体部：1/2残 天井部：完存	外面に自然釉点在
272	038 -05	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原 暗赤灰色土層　B32	口径：10.3 器高：3.15	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 褐灰10YR6/1	砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/8残 天井部：1/4残	外面は全面に自然釉をかぶる
273	038 -06	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：10.2 器高：3.4	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部：3/4残 体部：3/4残 天井部：完存	
274	038 -07	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.2 器高：3.45	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/6 (内) 灰白N7/6	砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/4残 天井部：完存	外面に薄く自然釉点在
275	038 -08	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.6 器高：3.15	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少含	良	口縁部：1/2残 体部：3/4残 天井部：完存	
276	038 -09	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A31	口径：9.0 器高：3.0	天井部外面ヘラケズリのち不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒多含	良	1/4残	
277	038 -10	須恵器 杯蓋	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：9.0 器高：3.5	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明褐灰7.5YR 7/1 (内) 灰白7.5YR8/1	微砂粒少含	良	口縁部・体部：ごく一部のみ残 天井部：完存	
278	038 -11	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：12.6 受部径：14.5 器高：4.2	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部・受部・体部：1/4残 底部はごく一部のみ残	
279	038 -12	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス　C31	口径：11.0 受部径：13.1	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 受部：1/4残 体部：1/4残	
280	039 -01	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.5 受部径：10.9 器高：2.7	底部外面ヘラケズリ 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰10Y5/1 (内) 青灰5B6/1	砂粒少含	良	口縁部・受部：1/8残 体部・底部：ほぼ完存	外面の大部分に自然釉
281	039 -02	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：8.8 受部径：10.7 器高：2.65	底部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 灰白10Y7/1	微砂粒多含 細砂粒多含	良	ほぼ完存	受部に粘土のカスが付着
282	039 -03	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス　C31	口径：8.8 受部径：11.0 器高：2.5	底部外面不定方向のナデ 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/3残	
283	039 -04	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A31	口径：8.65 受部径：10.8 器高：2.4	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少含	良	1/4残	
284	039 -05	須恵器 杯身	3号窯 灰原 暗赤灰色土層　B32	口径：9.1 受部径：10.85 器高：1.95	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	3/8残	外面の大部分に自然釉付着
285	039 -06	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：8.4 受部径：10.4 器高：2.3	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N5/0	砂粒少含	良	口縁部：1/16残 受部：1/4残 体部・底部：1/4残	
286	039 -07	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B30	口径：8.6 受部径：11.0 器高：2.7	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰N6/0	砂粒少含	やや不良	口縁部・受部・体部：1/2残 底部：2/3残	外面に自然釉点在
287	039 -08	須恵器 杯身	3号窯 灰原 C・D30	口径：8.7 受部径：10.4 器高：2.95	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 黄灰2.5Y6/1	砂粒少含	良	口縁部・受部・体部：1/6残 底部：1/3残	外面に自然釉付着
288	039 -09	須恵器 杯身	3号窯 灰原直上、暗赤灰色土層の上　A30	口径：7.8 受部径：10.0 器高：2.2	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部・受部・体部：1/8残 底部：ごく一部のみ残	

第23－12表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
289	039 -10	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：7.8 受部径：10.0 器高：2.25	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N5/0	砂粒少含	良	口縁部：1/6残 受部：1/12残 体部・底部：1/6残	
290	039 -11	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A30	口径：8.1 受部径：9.9 器高：1.91	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 黄灰2.5Y6/1	細砂粒多含 砂粒少含	良	ほぼ完存	外面に自然釉点在
291	039 -12	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰土層 第2段テラス C31	口径：7.6 受部径：9.1 器高：2.1	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部・受部：1/6残 体部：1/4残 底部：1/3残	
292	040 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 暗赤灰色土層 灰原 B32	口径：10.0 つまみ径:1.4 つまみ高:1.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	1/12残	
293	040 -02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：10.8 かえり径：9.2 器高：2.0	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 暗灰N3/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり・体部：1/4残 天井部：1/2残	
294	040 -03	須恵器 杯蓋	3号窯 暗赤灰色土層 A30	口径：9.65 かえり径：7.6 器高：2.1	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり：1/12残 体部・天井部：1/6残	内外面全体に自然釉点在
295	040 -04	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・赤灰色土層 A31	口径：10.0 かえり径：7.8	天井部～体部外面ロクロヘラケズリ 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y8/1	砂粒少含	やや不良	口縁部・かえり・体部：1/6残	焼きぶくれあり
296	040 -05	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：10.0 かえり径：8.2 器高：2.2	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 黄灰2.5Y6/1	砂粒少含	良	1/6残	外面に自然釉点在
297	040 -06	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層(トレンチ) A32	口径：10.2 かえり径：8.0 器高：2.0	天井部外面一定方向のナデ 天井部内面体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 明青灰5BG7/1	砂粒少含	良	1/2残	
298	040 -07	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原断面 C30・D30	口径：10.0 かえり径：7.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒少含 黒い粒混在	良	1/3残	
299	040 -08	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原(トレンチ)灰赤色土層 A32	口径：9.7 かえり径：7.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	砂粒少含	良	1/2残	
300	040 -09	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：10.0 かえり径：7.7	天井部外面ロクロヘラケズリ 体部口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	砂粒少含	不良	口縁部・かえり・体部：1/4残	外面に自然釉点在
301	040 -10	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：11.0 かえり径：9.1 器高：1.9	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり・体部：1/4残 天井部：1/3残	歪みあり 外面に自然釉点在
302	040 -11	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 焚口端部	口径：9.8 かえり径：7.5 器高：2.1	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	不良	1/6残	
303	040 -12	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原直上、暗赤灰色土層の上 A30	口径：9.6 かえり径：7.2 器高：2.15	天井部～体部上方外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/6残	
304	040 -13	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.5 かえり径：7.2 器高：1.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面・体部内面不定方向のナデ 体部外面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/1 (内) 灰白N8/1	砂粒少含	良	1/2残	
305	040 -14	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.2 かえり径：7.3 器高：1.55	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面・体部内面不定方向のナデ 体部外面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	砂粒多含	良	1/3残	外面に自然釉点在
306	040 -15	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 焚口先端部	口径：9.1 かえり径：7.0 器高：1.3	天井部外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	砂粒少含	不良	2/3残	焼けぶくれあり
307	041 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 トレンチ A32	口径：9.6 かえり径：7.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	不良	口縁部・かえり・体部：1/4残	
308	041 -02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：8.7 つまみ径：1.65 かえり径：6.4 器高：2.6 つまみ高：0.9	天井部外面ロクロヘラケズリのち不定方向のナデ 天井部内面乱ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	砂粒少含	やや不良	1/2残	内面に黒斑あり
309	041 -03	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：10.0 つまみ径：2.0 かえり径：8.3 器高：2.3 つまみ高：0.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少含	不良	口縁部・かえり：1/18残 体部・天井部：1/8残	
310	041 -04	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.8 つまみ径：1.4 かえり径：7.9 器高：2.0 つまみ高：0.75	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	良	1/3残	擬宝珠つまみに自然釉がかかる
311	041 -05	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B30	口径：10.2 かえり径：8.25 器高：1.55	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/6	砂粒少含	良	1/4残	
312	041 -06	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：10.0 かえり径：8.2 器高：1.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	1/4残	

第23－13表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
313	041 −07	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.4 かえり径：7.5	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	1/6残	
314	041 −08	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 B32	口径：10.0 かえり径：7.8 器高：1.65	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり・体部：1/4残 天井部：1/3残	外面に1.5cmの粘土塊あり
315	041 −09	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第二段テラス C31	口径：10.0 かえり径：7.6 器高：1.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	不良	口縁部・かえり・体部：1/4残 天井部：1/8残	
316	041 −10	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A31	口径：9.8 かえり径：7.7 器高：1.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y8/1 (内) 灰白7.5Y8/1	砂粒少含	不良	1/3残	
317	041 −11	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第二段テラス C31	口径：10.0 かえり径：7.5 器高：1.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰黄2.5Y6/2	砂粒少含	やや不良	1/6残	
318	041 −12	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・東南アゼ A31	口径：10.0 かえり径：8.1 器高：1.65	天井部・体部上方外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり・体部：1/4残	
319	041 −13	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.6 かえり径：7.8 器高：1.5	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白10Y8/1	砂粒少含	良	1/8残	
320	041 −14	須恵器 杯蓋	3号窯 灰赤色土層 直上 A31	口径：9.6 かえり径：7.4 器高：1.5	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白10Y8/1	砂粒少含	良	口縁部：1/16残 かえり・体部・天井部：1/8残	
321	041 −15	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・淡黄褐・褐色土層 B32	口径：9.6 かえり径：7.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒少含	不良	1/6残	
322	042 −01	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.8 つまみ径：2.0 かえり径：7.6 器高：2.85 つまみ高：1.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部：1/8残 かえり・体部：1/6残 天井部：1/3残	
323	042 −02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B30	口径：9.2 つまみ径：1.8 かえり径：7.2 器高：2.5 つまみ高：0.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y8/1 (内) 灰白7.5Y7/1	砂粒少含	やや不良	1/3残	
324	042 −03	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.2 つまみ径：1.6 かえり径：7.4 器高：2.65 つまみ高：0.75	天井部・体部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	ほぼ完存	
325	042 −04	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 D30	口径：10.0 かえり径：8.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	1/2残	
326	042 −05	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第二段テラス B29	口径：10.0 かえり径：7.4	天井部・体部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 黄灰2.5Y6/1	砂粒少含	良	口縁部・かえり・体部：1/2残 天井部：ほぼ完存	外面全体に薄く自然釉あり
327	042 −06	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：10.2 かえり径：7.5	天井部外面ロクロヘラケズリ、内面不定方向のナデ、体部外面ロクロヘラケズリ 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	やや不良	1/2残	
328	042 −07	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤褐色土層 (下層)	口径：10.2 かえり径：7.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	やや不良	1/2残	
329	042 −08	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：10.0 かえり径：7.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y8/1 (内) 灰7.5Y6/1	砂粒少含	やや不良	1/3残	
330	042 −09	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A31	口径：9.6 かえり径：7.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	やや不良	1/6残	
331	042 −10	須恵器 杯蓋	3号窯 灰赤色土層・直上 A31	口径：8.6 かえり径：6.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰白10Y8/1	砂粒少含	やや不良	口縁部・かえり・体部：1/4残 天井部：1/3残	
332	042 −11	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第二段テラス C31	口径：10.0 かえり径：8.2 器高：2.2	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部・かえり：1/6残 体部・天井部：1/4残	外面全体に自然釉をかぶる
333	042 −12	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 溝中より A31	口径：9.0 かえり径：7.0 器高：2.2	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	1/6残	外面の大部分に自然釉をかぶる
334	042 −13	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.4 かえり径：7.2 器高：2.25	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	不良	1/8残	焼けぶくれあり
335	042 −14	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 トレンチ A32	口径：9.5 かえり径：6.9 器高：2.25	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	良	1/8残	外面に自然釉点在
336	042 −15	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第二段テラス C31	口径：9.7 かえり径：7.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰白7.5Y7/1	砂粒少含	良	1/4残	

第23−14表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
337	043 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第二段テラス B29	口径：8.0 かえり径： 6.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白10Y7/1	砂粒少含	良	1/3残	
338	043 -02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：8.2 かえり径： 6.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	1/2残	
339	043 -03	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤褐色土層 B31	口径：9.2 つまみ径：2.0 かえり径：7.2 器高：2.5 つまみ高：1.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 灰白5Y8/2	砂粒少含	良	口縁部・かえり： 1/6残 体部：1/6残 天井部：1/4残	
340	043 -04	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.2 かえり径： 7.2	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒少含	良	1/3残	
341	043 -05	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A30	口径：9.0 かえり径： 6.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含 砂粒少含	良	口縁部・かえり： 1/12残 体部：1/12残 天井部：1/2残	焼きぶくれあり
342	043 -06	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 トレンチ A32	口径：9.1 かえり径： 7.3	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 灰白5Y7/2	砂粒少含	不良	口縁部・かえり： 1/4残 体部：1/4残 天井部：1/6残	
343	043 -07	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A30	口径：8.6 かえり径： 6.8	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 浅黄2.5Y7/3	砂粒少含	良	1/2残	
344	043 -08	須恵器 杯身	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：7.3 器高：2.7	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部外面ロクロナデ後一方向ナデ、体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	不良	1/2残	
345	043 -09	須恵器 杯身	3号窯 灰原・灰赤色土層 焚口端部	口径：7.7 器高：2.85	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰白5GY8/1	砂粒少含	やや不良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 底部：1/8残	底部外面にヘラ記号「—」か
346	043 -10	須恵器 杯身	3号窯 灰原・灰赤色土層 B32	口径：8.0 器高：2.8	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0N	砂粒少含	良	口縁部：1/2残 体部：1/2残 底部：1/4残	
347	043 -11	須恵器 杯身	3号窯 タニ埋土 E26	口径：7.7 器高：3.15	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/2残 体部：3/4残 底部：3/4残	
348	043 -12	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B30・31	口径：8.3 器高：3.2	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 底部：1/2残	
349	043 -13	須恵器 杯身	3号窯 灰原・東西アゼ A31	口径：8.8 器高：2.9	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	不良	1/8残	
350	043 -14	須恵器 杯身	3号窯 灰原・東西アゼ A31	口径：8.6 器高：2.9	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多含 細砂粒少含	やや不良	口縁部：5/8残 体部：5/8残 底部：1/2残	
351	043 -15	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 焚口先端部	口径：9.2 器高：2.95	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 底部：1/8残	
352	044 -01	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B30・31	口径：9.3 器高：2.95	底部外面一定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/12残 体部：1/12残 底部：1/4残	
353	044 -02	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：8.5 器高：2.7	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 黄灰2.5Y5/1	砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/4残 底部：1/3残	
354	044 -03	須恵器 杯身	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：8.6 器高：2.9	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口縁部：1/3残 体部：1/3残 底部：ほぼ完存	
355	044 -04	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A31	口径：8.4 器高：3.7	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒少含 細砂粒少含	やや不良	1/3残	
356	044 -05	須恵器 杯身	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.1 器高：2.95	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5Y8/2	砂粒少含	不良	1/3残	
357	044 -06	須恵器 杯身	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：9.8 器高：3.1	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5YR7/2 (内) 灰黄2.5YR7/2	細砂粒少含 砂粒少含	やや不良	口縁部：1/3残 体部：1/3残 底部：ほぼ完存	
358	044 -07	須恵器 杯身	3号窯 灰原 C・D30	口径：9.0 器高：2.65	底部外面不定方向のナデ 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	細粒少含	良	1/8残	
359	044 -08	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：9.4 器高：2.7	底部外面不定方向のナデ 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) にぶい黄橙 10YR7/2	砂粒少含	良	1/4残	
360	044 -09	須恵器 椀	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 C29	口径：10.2 器高：4.8	底部外面ロクロヘラケズリ 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y6/2 (内) 灰黄2.5Y6/2	砂粒多含	良	口縁部：1/8残 体部：1/4残 底部：1/4残	

第23－15　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
361	044 -10	須恵器 椀	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 A31	口径：9.4 器高：3.35	底部外面一定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/6残 底部：1/4残	
362	044 -11	須恵器 椀	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：13.6 器高：5.4	底部外面ロクロヘラケズリ 底部内面一定方向のナデ 体部外面下方ロクロヘラケズリ、体部外面上方・内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 底部：1/2残	
363	045 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・灰赤色土層 (暗赤灰色土層直上) B32	口径：9.0 器高：3.4	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒多含	良	ほぼ完存(口縁部若干欠ける)	
364	045 -02	須恵器 杯蓋	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：7.9 つまみ高:1.0 器高：3.3 つまみ径:1.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒少含	良	3/4残	
365	045 -03	須恵器 椀か	3号窯 灰原・灰赤色土層 A31	口径：7.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/3残	
366	045 -04	須恵器 杯身	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：8.0	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少含	良	1/4残	
367	045 -05	須恵器 杯身	3号窯 灰原・灰赤色土層 B32	口径：10.0 器高：3.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰オリーブ 5Y6/2 (内) 灰白5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/3残 体部：1/3残	内外面に自然釉あり
368	045 -06	須恵器 杯身	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：9.7 器高：2.9	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/8残 底部：1/3残	
369	045 -07	須恵器 高杯	3号窯 くすんだ黄褐 E30	口径：11.0	杯部口縁部・体部外面・口縁部ロクロナデ 体部内面・底部内面不定方向のナデ 脚部外面ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	細砂粒少含	不良	杯部口縁部:1/3残 杯部体部：1/3残 杯部底部：ほぼ完存	脚部内面に絞り痕あり
370	045 -08	須恵器 高杯	3号窯 タニ埋土・くすんだ黄褐色 土層 D27	口径：13.6 裾径：8.6 器高：10.05	杯部底部・体部・口縁部ロクロナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	細砂粒多含	良	杯部口縁部体部：1/3残 底部：ほぼ完存 脚部：1/2残	
371	045 -09	須恵器 高杯	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	裾径：6.7	脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少含	良	脚部：3/4残	外面全体に自然釉、裾部内面にワラのような植物付着
372	045 -10	須恵器 高杯	3号窯 灰原層 北端 整地層上層	裾径：6.7	杯部底部外面ロクロナデ、内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒多含 砂粒少含	良	杯部：底部のみ残 脚部：完存	外面及び裾部内面に自然釉かぶる
373	046 -01	須恵器 提瓶	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：6.8 体部最大径：13.4	口頸部・体部ロクロナデ 体部外面の側面に一部カキメあり	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1N	砂粒少含	不良	口頸部：1/2残 体部側面：1/2残	外面に自然釉あり、肩部にヘラ記号「コ」あり
374	047 -01	須恵器 提瓶	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：8.6	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口頸部のみほぼ完存(ただし口縁部を一部欠く)	
375	047 -02	須恵器 提瓶	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：8.3	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口頸部：2/3残	外面に自然釉あり
376	047 -03	須恵器 提瓶	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：6.6	口頸部ロクロナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口頸部：1/4残 肩部：ごく一部のみ残	口頸部内面に自然釉あり
377	047 -04	須恵器 平瓶	3号窯 灰原・淡黄褐色(褐色斑)土層 B32	口径：5.6 体部最大径：16.6 器高：14.8	口頸部ロクロナデ 体部内外面上面不定方向のナデ 体部内外面下位ロクロナデ 底部内外面不定方向のナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	砂粒少含	やや不良	ほぼ完存	口頸部と体部の接合部分の破断面に穴あり
378	047 -05	須恵器 短頸壺	3号窯 落ち込み3 F22	口径：21.6 体部最大径：26.5	口縁部ロクロナデ 体部外面上・中位ロクロナデ 体部外面下位ロクロヘラケズリ 体部内面ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	やや不良	口縁部・体部：ごくわずかに残	
379	048 -01	須恵器 短頸壺	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：12.3 体部最大径：15.9 器高：10.7	口縁部ロクロナデ、体部外面上・中位ロクロナデ、体部下位ロクロヘラケズリ、底部外面ロクロヘラケズリ、底部内面不定方向のナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	不良	口縁部：1/8残 体部：1/2残 底部：1/2残	
380	048 -02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D30	口径：16.5	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒多含	良	口頸部：1/3残	
381	048 -03	須恵器 甕	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32	口径：15.8	口頸部ロクロナデ 肩部外面平行タタキ後カキメ 肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	砂粒少含	不良	口頸部：1/6残	
382	048 -04	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐 E30	口径：18.0	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ後カキメ、内面青海波タタキ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒多含	良	口頸部：1/4残 肩部：わずかに残	外面に自然釉かぶる
383	049 -01	須恵器 甕	3号窯 タニ埋土・くすんだ黄褐色土層、D27	口径：17.7	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はりつけ後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰黄2.5Y7/2	砂粒少含	良	口頸部：1/2残 肩部：一部のみ残	
384	049 -02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：20.2	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキのちヨコナデ、内面青海波タタキ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	砂粒少含	良	口頸部：1/6残	

第23－16 遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
385	049 -03	須恵器 甕	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31	口径：17.1	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ後カキメ、内面青海波タタキ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	砂粒少含	良	口頸部：1/2残 肩部：一部のみ残	
386	049 -04	須恵器 甕	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラス C31	口径：14.3	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ後カキメ、内面青海波タタキ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	口頸部：1/8残 肩部：1/8残	外面に自然釉付着
387	050 -01	須恵器 甕	3号窯 灰原・くすんだ黄褐色土層 第2段テラス D32	口径：14.2	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口頸部：1/2残	
388	050 -02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：19.4	口頸部ロクロナデ、頸部外面にタタキの工具痕あり、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ、肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 明青灰10BG7/1	砂粒少含	良	口頸部：1/4残	口頸部外面、肩部内面に自然釉あり
389	050 -03	須恵器 甕	3号窯 灰原・くすんだ黄褐色土層 第2段テラス D32	口径：20.0	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰褐7.5YR5/2 (内) にぶい黄橙 10R6/3	砂粒少含	やや不良	口頸部：1/2残 肩部：1/4残	
390	050 -04	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D30	口径：21.0	口頸部ロクロナデ 頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ内面青海波タタキ	(外) 浅黄橙10YR8/4 (内) にぶい黄橙 10YR7/4	微砂粒多含	良	口頸部：1/2残 肩部：1/4残	
391	051 -01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：38.6	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白2.5GY8/1 (内) 灰白2.5GY8/1	砂粒少含	良	口頸部：1/8残 (ただし口縁端部はごく一部のみ残)	
392	051 -02	須恵器 甕	3号窯 地山直上・くすんだ黄褐色土層 D29	口径：38.0	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口頸部：1/8残	
393	052 -01	須恵器 甕	3号窯 地山直上・くすんだ黄褐色土層 D29	口径：37.0	口頸部ロクロナデ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y8/2	砂粒少含	良	口頸部：1/8残	
394	053 -01	須恵器 甕	3号窯 Pit 18 D29	口径：40.8	口頸部ロクロナデ 頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ	(外) 赤10R5/6 (内) 赤灰10R5/1	砂粒少含	不良	口頸部：1/4残	
395	054 -01	須恵器 甕	3号窯 灰原・くすんだ黄褐色土層 第2段テラス D32	口径：28.6	口頸部ロクロナデ	(外) 暗オリーブ灰 2.5GY3/1 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒少含	やや不良	口頸部：1/6残	
396	054 -02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 E29	口径：38.5	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR7/1	細砂粒多含	良	口頸部：1/12残 (ただし口縁端部は1/6残)	外面に自然釉付着
397	055 -01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：40.0	口頸部ロクロナデ後外面にカキメ	(外) 青灰5B5/1 (内) 青灰5BG6/1	砂粒少含	良	口頸部：1/18残 (ただし口縁端部は1/6残)	
398	055 -02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：47.0	口頸部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/2	砂粒少含	良	口縁端部：1/18残	
399	056 -01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：41.4	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	やや不良	口頸部：1/4残	
400	057 -01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：53.6	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青海波タタキ	(外) 灰褐7.5YR5/2 (内) 灰褐7.5YR5/2	砂粒少含	やや不良	口頸部：1/8残	
401	058 -01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 C29		口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	口縁小片	
402	058 -02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 C29		口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁小片	
403	058 -03	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 C29		口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白10Y5/1	砂粒少含	良	口縁小片	
404	058 -04	須恵器 甕	3号窯 タニ埋土・くすんだ黄褐色土層 D27		口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 青灰5B6/1	砂粒少含	良	口縁小片	
405	058 -05	須恵器 甕	3号窯 タニ埋土・くすんだ黄褐色土層 F27		口縁部ロクロナデ後外面にカキメ	(外) 緑灰10GY5/1 (内) 緑灰10GY5/1	細砂粒少含	良	口縁小片	
406	058 -06	須恵器 陶棺	3号窯 タニ埋土（谷底） G28		全面タタキ目、青海波タタキ	(表) 灰N6/0 (裏) 明オリーブ灰 2.5GY7/1	微砂粒少含	良	一部のみ	
407	059 -01	須恵器 甕	3号窯 タニ埋土・くすんだ黄褐色土層 D27		体部外面格子タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	体部小片	
408	060 -01	須恵器	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B32		外面ナデ 内面青海波タタキ	明青灰10BG7/1	細砂粒少含	良		

第23－17表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
409	060 -02	須恵器	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 第2段テラスB29		外面タタキ目 内面青海波タタキ	灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良		
410	060 -03	須恵器	3号窯 タニ埋土・くすんだ黄褐 D27		外面タタキ目 内面青海波タタキ	灰白7.5Y7/1	砂粒少含	良		
411	060 -04	須恵器	3号窯 整地層排土中		内面青海波タタキ	黄灰2.5Y6/1	微砂粒少含	良		
412	060 -05	須恵器	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29		外面タタキ目 内面青海波タタキ	灰白N8/0	微砂粒少含	不良		
413	060 -06	須恵器	3号窯 灰原・暗赤灰色土層 B31		外面タタキ目 内面青海波タタキ	灰白10Y7/1	細砂粒少含	良		
414	060 -07	須恵器	3号窯 くすんだ黄褐色土層 E29		外面タタキ目 内面青海波タタキ	灰7.5Y6/1	微砂粒少含	良		
415	061 -01	須恵器 杯蓋	3号窯 整地層	口径：11.0 器高：3.85	天井部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N5/0	砂粒少含	良	口縁部：1/5残 体部：1/5残 底部：ほぼ完存	
416	061 -02	須恵器 杯身	3号窯 整地層	口径：9.2 受部径：11.2 器高：4.0	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N8/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒少含	良	1/2残	
417	061 -03	須恵器 杯蓋	3号窯 整地層	口径：10.0 かえり径： 8.2	天井部外面ロクロヘラミガキ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 明青灰10BG7/1	砂粒多含	良	1/2残	
418	062 -01	須恵器 杯身	4号窯 窯体床面 E34	口径：11.5 受部径：13.5 器高：3.8	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒少含	不良	口縁部、受部： 1/4残 底部：1/3残	
419	062 -02	須恵器 杯身	4号窯 窯体床面 E34	口径：10.5 受部径：12.8 器高：3.0	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒少含	不良	口縁部、受部、体部:1/2残 底部:3/8残	
420	062 -03	須恵器 甕	4号窯 窯体床面 E34		体部外面格子タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	体部小片	
421	063 -01	須恵器 甕	4号窯 窯体床面 E34		体部外面平行タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	体部小片	
422	063 -02	須恵器 甕	4号窯 窯体床面 E34		体部外面平行タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N6/0	粒砂少含	良	体部小片	
423	064 -01	須恵器 杯蓋	5号窯 窯体床面、砂中(下層) G No.1	口径：10.0 器高：3.5	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 緑黒5G1.7/1 (内) 暗青灰5BG4/1	細砂粒少含	良	1/6残	
424	064 -02	須恵器 杯蓋	5号窯 窯体床面、砂中(下層) G No.1	口経：12.3	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 緑灰10GY6/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/4残 受部：1/4残 体部：1/8残	
425	064 -03	須恵器 杯身	5号窯 窯体床面、砂中(下層) G No.1	口経：8.2 受部経：10.3	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5BG6/1 (内) 青灰5BG6/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/6残 受部：1/6残 体部：1/6残	
426	064 -04	須恵器 杯身	5号窯 窯体床面、焼土層直上 (砂下層底) G No.2	口径：10.0 受部経：12.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N4/1 (内) 灰白10Y8/1	微砂粒少含	不良	口縁部：1/2残 受部：1/2残 体部：1/2残	
427	064 -05	須恵器 小型杯	5号窯 窯体床面、黒色(灰)色土層 G No.5	口径：6.0 器高：2.85	底部外面不定方向のナデ 底部内面、体部・口縁部ヨコナデ	(外) 暗赤褐5YR3/2 (内) 赤灰2.5YR4/1	細砂粒少含	良	ほぼ完存	
428	064 -06	須恵器 椀	5号窯 窯体床面 G34	口径：9.6 器高：5.7	底部外面静止ヘラケズリ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にぶい橙5YR 7/4 (内) にぶい橙5YR 7/4	細砂粒少含	不良	1/2残	
429	064 -07	須恵器 椀	5号窯 窯体床面 G34	口径：17.0 器高：6.5	底部外面静止ヘラケズリ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 橙2.5YR7/6 (内) にぶい橙5YR 7/4	細砂粒少含	不良	口縁部：3/8残 体部：3/8残 底部：1/3残	全体に薄くスス付着
430	064 -08	須恵器 捏鉢	5号窯 窯体床面、砂中上層 G No.4	底径：12.5	底部外面不定方向のナデ 底部側面ロクロナデ	(外) 淡橙5YR8/3 (内) にぶい橙5YR 6/4	細砂粒少含	不良	底部：1/3残	
431	064 -09	須恵器 捏鉢	5号窯 窯体床面、砂中上層 G No.3	底径：10.5	底部外面不定方向のナデ 底部側面ロクロナデ	(外) にぶい橙5YR 7/4 (内) にぶい橙5YR 7/4	細砂粒少含	不良	底部のみほぼ完存	
432	065 -01	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・灰褐色土層 I 31	口径：10.0 器高：3.2	天井部外面ヘラ切り後一定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N4/0	細砂粒少含	良	口縁部： ごく一部のみ残 体部、天井部： 1/2残	外面全体に自然釉付着

第23－18表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
433	065 -02	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33	口径：9.9 器高：3.65	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5BG6/1 (内) 5BG6/1	細砂粒少含	良	1/6残	
434	065 -03	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・灰褐色土層 崩壊ブロック等 H31	口径：12.8	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/6残	
435	065 -04	須恵器 杯身	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 32	口径：9.7 受部径：11.9 器高：3.8	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 暗灰黄2.5Y5/2 (内) 灰白5Y6/1	細砂粒少含	やや不良	1/4残	
436	065 -05	須恵器 杯身	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33	口径：9.8 受部径：11.5 器高：3.35	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/3残 受部・体部： 1/2残 底部ほぼ完存	
437	065 -06	須恵器 杯身	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 32	口径：11.0 受部径：13.0 器高：2.5	底部ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/3残 受部・体部：1/3残 底部： ごく一部のみ残	
438	065 -07	須恵器 杯身	5号窯 灰原・灰褐色土層先端 I 30	口径：10.4 受部径：12.2	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8残 受部：1/8残 体部：1/8残	
439	065 -08	須恵器 杯身	5号窯 SK1 B32	口径：9.0 受部径：10.6 器高：2.1	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	1/5残	
440	065 -09	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原、黒褐色土層 I 33	口径：10.4 つまみ径：1.65 かえり径：8.4 器高：20 つまみ高：0.5	天井部外面カキメ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰オリーブ5Y 5/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部・かえり： 1/12残 体部：1/4残 天井部：1/4残	外面に自然釉付着
441	065 -10	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33	口径：10.3 かえり径： 8.3	天井部外面ロクロヘラケズリ後カキメ 天井部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部・かえり： 1/3残 体部：1/3残 天井部：1/2残	つまみ部分意図的に取った形跡あり
442	066 -01	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・町道きわ I 34～H34.	口径：10.5 かえり径： 8.4 器高：1.8	天井部外面カキメ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	1/4残	
443	066 -02	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・灰褐色土層 5号崩落焼土ブロック H32	口径：10.0 つまみ径：2.6 かえり径：7.6 つまみ高：0.4 器高：2.25	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部・かえり： 1/4残 体部・天井部：1/4残 つまみ：1/3残	
444	066 -03	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33	つまみ径： 1.4 つまみ高： 0.9	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	天井部：1/4残 つまみ完存	外面に自然釉付着
445	066 -04	須恵器 杯蓋	5号窯 灰原・灰褐色土層 5号崩壊の層か H32	口径：11.0 かえり径： 8.8	天井部外面カキメ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 暗青灰5BG4/1 (内) 暗オリーブ灰 5GY4/1	細砂粒少含	良	口縁部・かえり： 1/4残 体部：1/4残 天井部：1/2残	内面に自然釉付着
446	066 -05	須恵器 杯身	5号窯 灰原・灰褐色土層 J 31	口径：11.1 器高：2.6	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 底部内面不定方向ヘナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/8残 底部： ごく一部のみ残	
447	066 -06	須恵器 杯身	5号窯 灰原・灰褐色土層 崩壊ブロック等 H31	口径：10.8 器高：3.4	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面、体部、口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/12残 体部：1/12残 底部：1/4残	
448	066 -07	須恵器 高杯	5号窯 灰原・灰褐色土層 5号崩壊の層か H32	口径：9.2	杯部底部外面ヘラケズリ 杯部底部内面不定方向のナデ 体部外面ヘラケズリ、体部内面、口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	杯部のみ：1/4残	
449	066 -08	須恵器 高杯	5号窯 灰原・灰褐色土層 I 34	口径：9.0	杯部底部外面ロクロナデ 杯部底部内面一定方向のナデ 杯部体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰5B5/1 (内) 青灰5B5/1	微砂粒少含	良	杯部口縁部:1/4残 杯部体部：1/4残 杯部底部： 一部のみ残	
450	066 -09	須恵器 高杯	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 32	口径：9.0	杯部底部外面ヘラケズリ 杯部底部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰10BG5/1 (内) 明青灰10BG7/1	細砂粒少含	良	杯部口縁部:1/8残 杯部体部：1/8残 杯部底部： 一部のみ残	
451	066 -10	須恵器 高杯	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33	口径：9.0	杯部底部外面ヘラケズリ 杯部底部内面不定方向のナデ 杯部体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰10BG5/1 (内) 暗青灰10BG4/1	微砂粒少含	良	杯部口縁部:1/8残 杯部体部：1/8残 杯部底部： 一部のみ残	
452	067 -01	須恵器 高杯	5号窯 灰原・灰褐色土層 崩壊ブロック等 H31		杯部底部外面ロクロナデ 杯部底部内面不定方向のナデ 脚部外面ロクロナデ	(外) 青灰5BG6/1 (内) 明青灰10BG7/1	細砂粒多含	良	杯部底部：1/3残 柱状部：完存	脚部内面に絞り痕あり
453	067 -02	須恵器 高杯	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33	裾径：8.0	脚部内外面ロクロナデ	(外) 青灰10BG5/1 (内) 青灰10BG6/1	細砂粒少含	良	脚部：5/8残	脚部内面に絞り痕あり
454	067 -03	須恵器 高杯	5号窯 灰原・灰褐色土層 5号崩壊した層か H 32	裾径：7.1	脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少含	良	脚部：1/2残	外面に自然釉 脚部内面絞り痕
455	067 -04	須恵器 高杯	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	脚部：1/2残	二段すかし 脚部内面に絞り痕
456	067 -05	須恵器 短頸壺	5号窯 灰原・灰褐色土層 5号崩壊焼土ぶろっく H32	口径：6.6	口縁部・体部内外面上方ロクロナデ 体部外面下方ヘラケズリ 体部内面下方不定方向のナデ	(外) 緑灰10GY5/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/2残 体部：1/2残	

第23－19表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
457	067-06	須恵器 短頸壺	5号窯 灰原・灰褐色土層 J31	口径：5.2	口縁部、肩部、体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/4残 肩部：1/4残 体部： ごく一部のみ残	
458	067-07	須恵器 平瓶	5号窯 灰原・灰褐色土層 I31	底径：10.4	底部外面不定方向のナデ、所々にタタキがみられる。 底部内面不定方向のナデ 体部下方ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 青灰5B5/1	細砂粒多含	良	底部完存	
459	067-08	須恵器 平瓶	5号窯 灰原・黒褐色土層 I33	口径：5.7	口頸部ロクロナデ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	口頸部完存	
460	068-01	須恵器 平瓶	5号窯 窯体床面 G34	口径：7.0 体部最大径：17.9 器高：16.5	口頸部ロクロナデ、体部上面不定方向のナデ、体部中位より下ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、底部内面不定方向のナデ	(外) 灰白7.5Y8/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	ほぼ完存	焼成時に爆発した歪みあり
461	068-02	須恵器 平瓶	5号窯 窯体床面 G34	口径：6.65 体部最大径：17.1 器高：16.4	口頸部ロクロナデ、体部上面不定方向のナデ、体部中位より下ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面不定方向のナデ	(外) にぶい橙5YR6/4 (内) にぶい赤褐2.5YR5/4	細砂粒少含	不良	ほぼ完存	
462	068-03	須恵器 平瓶	5号窯 窯体床面 G34	口径：5.9 体部最大径：17.7 器高：16.7	口頸部ロクロナデ、体部上面不定方向のナデ、体部中位より下ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面不定方向のナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N4/0	細砂粒少含	不良	ほぼ完存	焼成時に爆発した歪みあり
463	069-01	須恵器 平瓶	5号窯 窯体床面 G34	口径：6.95 体部最大径：17.7 器高：19.0	口頸部ロクロナデ、体部上面不定方向のナデ、体部中位より下ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面不定方向のナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	不良	ほぼ完存	体部下位に重痕あり 爆発した歪みあり
464	069-02	須恵器 平瓶	5号窯 灰原・灰褐色土層 I34	口径：5.95 体部最大径：15.6 器高：16.3	口頸部ロクロナデ、体部上位～中位ハケ状工具による調整、体部下位ヘラケズリ、体部内面ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面不定方向のナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	ほぼ完存	
465	070-01	須恵器 甕	5号窯 窯体床面 G34	口径：51.6	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の合部粘土はり付け後ナデ、体部内面青海波タタキ	(外) 黒褐7.5YR2/2 (内) にぶい赤7.5R 4/4	細砂粒少含	やや不良	口頸部：1/4残	
466	071-01	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J31	口径：47.0	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 青灰5BG6/1	細砂粒少含	やや不良	口頸部：1/12残	
467	072-01	須恵器 甕	5号窯 灰原・黒褐色土層 I32	口径：48.6	口頸部外面上位、内面ロクロナデ 口頸部外面下位不定方向のナデ	(外) 暗青灰10BG1/3 (内) 青灰10BG1/5	微砂粒少含	良	口頸部：1/3残	体部のタタキ目が接合部断面に残る
468	073-01	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J31	口径：35.6	口頸部ロクロナデ、頸部と体部の接合部粘土はり付け後ナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	口頸部：1/5残	全体に自然釉
469	073-02	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 I32	口径：23.4	口頸部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 緑灰5G1/5	細砂粒少含	良	口頸部：1/3残	
470	074-01	須恵器 甕	5号窯 灰原・黒褐色土層 I32	口径：40.8	口頸部ロクロナデ	(外) 暗緑灰10G1/3 (内) 暗緑灰10G1/4	細砂粒多含	良	口頸部の一部のみ残	全体に自然釉
471	074-02	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 I33	口径：17.8	口頸部内面ロクロナデ、外面ハケ状工具による調整、体部外面平行タタキ後ヨコナデ 内面青海波タタキ後ヨコナデ	(外) にぶい黄2.5Y 6/3 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	やや不良	口縁部：1/4残 頸部：1/3残 肩部：1/8残	
472	075-01	須恵器 甕	5号窯 灰原・黒褐色土層 I32		口頸部内面ロクロナデ、外面ハケ状工具による調整	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部小片	
473	075-02	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J31		口縁部ロクロナデ	(外) 暗灰N3/0 (内) 灰N5/0	砂粒少含	良	口縁部小片	
474	075-03	須恵器 甕	5号窯 灰原、先端 I30		口縁部ロクロナデ	(外) 暗灰N3/0 (内) 灰N4/0	細砂粒多含	良	口縁部小片	
475	075-04	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J31		体部外面平行タタキ、内面青海波タタキ後カキメ	(外) 青灰10BG6/1 (内) 明青灰5BG7/1	微砂粒少含	良	体部小片	
476	076-01	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		体部外面格子目タタキ、内面青海波タタキ	(外) 暗青灰5B4/1 (内) 紫灰5P6/1	細砂粒少含	良	体部小片	
477	076-02	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J31		体部外面平行タタキ、内面青海波タタキ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	体部小片	
478	077-01	須恵器 甕	5号窯 窯体床面砂中 燃焼室付近		体部外面平行タタキ、内面青海波タタキ	(外) 灰褐5YR4/2 (内) にぶい赤褐 2.5YR5/3	微砂粒少含	良	体部小片	
479	077-02	須恵器 甕	5号窯 灰原・黒褐色土層 I33		体部外面平行タタキ、内面青海波タタキ	(外) 緑灰7.5GY6/1 (内) 緑灰7.5GY6/1	細砂粒少含	良	体部小片	
480	078-01	須恵器 甕	5号窯 窯体床面 G34		体部外面タタキ、内面青海波タタキ	(外) 灰オリーブ5Y 6/2 (内) にぶい赤褐 7.5R5/5	細砂粒少含	良	体部小片	

第23－20表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
481	079 -01	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J 33		体部外面タタキ、内面青海波タタキ	(外) 灰褐5YR5/2 (内) にぶい橙5YR 6/3	微砂粒少含	不良	体部小片	
482	080 -01	須恵器 甕	5号窯 灰原・灰褐色土層 J 33		体部外面タタキ、内部青海波タタキ	(外) 灰褐5YR5/2 (内) にぶい橙5YR 6/3	微砂粒少含	不良	体部小片	
483	081 -01	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 J 33		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	暗青灰10BG4/1	微砂粒少含	良		
484	081 -02	須恵器	5号窯 Pit 1 J 33		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	暗青灰10GY4/1	細砂粒少含	良		
485	081 -03	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 I 32		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	灰N5/0	微砂粒少含	良		
486	081 -04	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	青灰5GB6/1	微砂粒少含	良		
487	081 -05	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	青灰5BG5/1	微砂粒少含	良		
488	081 -06	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	灰N5/0	微砂粒少含	良		
489	082 -01	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 J 32		外面 タタキ目 内面 指オサエ	灰白N7/0	微砂粒少含	良		
490	082 -02	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		外面 ナデ 内面 ナデ	オリーブ灰2.5GY 5/1	微砂粒少含	良		
491	082 -03	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 I 34		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	青灰10BG6/1	細砂粒少含	良		
492	082 -04	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青海波タタキ	青灰10BG6/1	微砂粒少含	良		
493	082 -05	須恵器	5号窯 灰原・黒褐色土層 I 33		外面 タタキ 内面 青海波タタキ	灰N6/0	微砂粒少含	良		
494	082 -06	須恵器	5号窯 灰原・町宮キワ H34～I 34		内面 青海波タタキ	青灰5BG6/1	微砂粒少含	良		
495	082 -07	須恵器	5号窯 灰原・灰褐色土層 H32		内面 青海波タタキ	青灰5BG5/1	細砂粒少含	良		
496	083 -01	須恵器 杯 蓋	落ち込み1 C18	口径：11.6 器高：3.0	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	ほぼ完存	天井部外面にヘラ記号「—」
497	083 -02	須恵器 杯 蓋	落ち込み1 C18	口径：12.2	体部、口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/5残	
498	083 -03	須恵器 杯 蓋	落ち込み1 D18	口径：11.6 器高：3.2	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒少含	やや不良	1/4残	
499	083 -04	須恵器 杯 蓋	落ち込み1 C18	口径：11.6	天井部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明褐灰7.5YR 7/1 (内) 明褐灰7.5YR 7/1	細砂粒少含	良	1/4残	外面に別個体の口縁部付着
500	083 -05	須恵器 杯 蓋	落ち込み1 C18	口径：12.0 器高：3.5	天井部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 天井部：完存	
501	083 -06	須恵器 杯 蓋	落ち込み1 C18	口径：12.8 器高：3.3	天井部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	やや不良	口縁部：1/12残 体部：1/8残 天井部：完存	
502	083 -07	須恵器 杯 身	落ち込み1 C18	口径：10.0 器高：11.8 器高：3.8	天井部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	口縁部、受部：1/3残 体部：1/3残 底部：1/4残	
503	083 -08	須恵器 杯 身	落ち込み1 C18	口径：10.8 受部径：12.4 器高：2.9	底部外面ヘラ切り後ハケ状工具による調整、内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/2 (内) 黄灰2.5Y6/1	細砂粒少含	良	1/8残	
504	083 -09	須恵器 杯 身	落ち込み1 D18	口径：9.3 受部径：11.1 器高：3.3	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N7/0 (内) 灰N7/0	微砂粒少含	良	口縁部、受部：ごく一部のみ残 体部：1/12残 底部：完存	

第23－21表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
505	083 -10	須恵器 杯身	落ち込み1 D18	口径：9.5 受部径：12.0 器高：3.9	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ 底部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰オリーブ5Y 6/2	微砂粒少含	良	口縁部、受部：1/2残 体部：1/2残 底部：ほぼ完存	受部に若干付着粘土あり
506	083 -11	須恵器 杯身	落ち込み1 D18	口径：11.0 受部径：13.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/4残 受部：1/4残 体部：1/4残	受部に別個体の一部が付着
507	083 -12	須恵器 杯身	落ち込み1 C18	口径：11.0 受部径：13.4	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/8残 受部：1/8残 体部：1/8残	
508	084 -01	須恵器 壺	落ち込み1 D18	口径：10.0 器高：4.5	底部外面ナデ、底部内面不定方向のナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.4YR8/1 (内) 灰白7.5YR8/1	微砂粒少含	不良	口縁部：1/4残 体部：1/2残 底部：1/2残	
509	084 -02	須恵器 壺	落ち込み1 C18	体部最大径：8.0	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	体部：1/6残 底部：1/6残	底部外面にヘラ記号「×」か
510	084 -03	須恵器 高杯	落ち込み1 C18		脚部ロクロナデ	(外) 暗青灰5BG4/1 (内) 明青灰5BG7/1	細砂粒多含	良	脚部：1/2残	
511	084 -04	土師器 紡錘車	落ち込み1 斜面谷状落ち込み 淡黄褐色土層 C18	直径：3.9 厚さ：2.9 孔径：0.7 重量:37.50g	未調整	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 淡黄2.5Y8/3	微砂粒少含	良	完存	
512	084 -05	土師器 短頸壺	落ち込み1 C18	口径：13.4	口縁部ヨコナデ 体部外面ハケメ 体部内面一定方向のナデ	(外) にぶい橙5YR 7/4 (内) 橙7.5YR7/6	微砂粒少含	良	口縁部：2/3残	
513	084 -06	須恵器 甕	落ち込み1 C18	体部最大径：9.0	頸部外面ロクロナデ・内面ヨコナデ 体部外面不定方向のナデ 底部外面不定方向のナデ、内面工具によるロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒多含	良	頸部：1/4残 体部：完存	体部外面中位にヘラキザミあり注口を貼付ける
514	084 -07	須恵器 壺	落ち込み1 C18	体部最大径：19.3	体部外面上位～中位ロクロナデ、体部外面下位ヘラケズリ、体部内面ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、底部内面不定方向のナデ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 青灰10BG6/1	細砂粒多含 砂粒少含	良	体部：1/4残 底部：1/3残	体部外面中位にヘラキザミあり
515	085 -01	須恵器 甕	落ち込み1 C18	口径：34.0	口頸部内外面ロクロナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰黄2.5Y6/2	細砂粒多含 砂粒少含	良	口頸部：1/3残	体部外面に波状紋あり
516	085 -02	須恵器 甕	落ち込み1 C18	口径：37.0	口頸部外面上位ロクロナデ、下位カキメ 口頸部内面ロクロナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰5Y5/1	細砂粒多含	良	口頸部破片	口頸部外面上位に波状紋あり
517	085 -03	鉄斧	落ち込み1 C18	長さ：7.6 幅：3.65 厚さ：1.65						
518	086 -01	須恵器 杯蓋	落ち込み2 D22	口径：12.8 器高：3.6	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面ロクロナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：ごく一部のみ残 体部：1/4残 天井部：1/2残	天井部に粘土付着
519	086 -02	須恵器 杯蓋	落ち込み2 C22	口径：12.7 器高：5.2	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白10Y7/1	微砂粒多含	良	口縁部：2/3残 体部：2/3残 天井部：完存	
520	086 -03	須恵器 杯身	落ち込み2 D22	口径：10.0 受部径：11.4 器高：3.4	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰5BG7/1 (内) 明青灰10BG7/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/6残 受部・体部:1/6残 底部はごく一部のみ残	
521	086 -04	須恵器 杯身	落ち込み2 C22	口径：11.3 受部径：14.0 器高：3.9	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y7/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/2残 受部・体部：1/2残 底部：完存	受部に杯蓋口縁部付着
522	086 -05	須恵器 高杯	落ち込み2 D22		杯部底部外面ロクロナデ、内部不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒少含	良	杯部底部：1/2残 脚部：ごく一部のみ残	杯部底部内面に自然釉（浅黄5Y7/4）
523	086 -06	須恵器 台付壺	落ち込み2 D22	底径：10.0	脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 青灰10BG6/1	微砂粒少含	良	脚部：4/5残	外面に自然釉をかぶる
524	086 -07	須恵器 甕	落ち込み2 D22	口径：22.2	口頸部ロクロナデ 肩部外面平行タタキのちカキメ 肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白7.5Y7/2 (内) 灰白10Y7/1	微砂粒多含	不良	口頸部：1/6残 肩部：ごく一部のみ残	口頸部内外面と肩部外面に自然釉をかぶる
525	086 -08	須恵器 甕	落ち込み2 D22	口径：21.6	口頸部ロクロナデ 肩部外面平行タタキのちカキメ 肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白NY7/0	微砂粒少含	良	口頸部：1/3残 肩部：ごく一部のみ残	
526	087 -01	須恵器 甕	落ち込み2 D22	口径：43.0	口頸部内外面ロクロナデ 肩部外面平行タタキのちカキメ 肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口頸部：ほぼ完存	口頸部外面にクシ状工具による刺突紋
527	088 -01	須恵器 甕	落ち込み2 D22	口径：36.3	口頸部内外面ロクロナデ 肩部外面平行タタキのちカキメ 肩部内面青海波タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含 砂粒少含	良	口頸部：完存	口頸部外面にクシ状工具による刺突紋
528	089 -01	須恵器 杯蓋	落ち込み3 G22	口径：13.8	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/3	体部外面に打ち欠き痕あり

第23－22表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
529	089 -02	須恵器 杯蓋	落ち込み3 F22	口径：13.4 器高：3.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 明緑灰10GY7/1	微砂粒少含	良	1/3	
530	089 -03	須恵器 杯蓋	落ち込み3 G22	口径：13.0 器高：3.75	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/8 天井部：1/4	
531	089 -04	須恵器 杯蓋	落ち込み3 G22	口径：13.0 器高：3.0	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：1/5	
532	089 -05	須恵器 杯蓋	落ち込み3 F22	口径：11.8 器高：4.0	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 天井部：1/2	
533	089 -06	須恵器 杯蓋	落ち込み3 F22	口径：11.2 器高：3.6	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 浅黄2.5Y8/3	微砂粒少含	良	1/6	体部内面に焼きがくれあり
534	089 -07	須恵器 杯蓋	落ち込み3 G22	口径：13.2 器高：3.9	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井端部カキ目調整、天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/8 天井部：3/4	天井部外面にヘラ記号「×」あり
535	089 -08	須恵器 杯蓋	落ち込み3 F22	口径：9.0 器高：3.0	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/8 天井部：1/3	天井部外面にヘラ記号「—」か
536	090 -01	須恵器 杯身	落ち込み3 G22	口径：12.6 受部径：15.4 器高：3.8	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰オリーブ5Y 6/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/3	体部外面にヘラ記号？「—」あり
537	090 -02	須恵器 杯身	落ち込み3 F22	受部径：14.0	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 青灰5B6/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/6 底部：ほぼ完存	口縁部に焼き歪みあり
538	090 -03	須恵器 杯身	落ち込み3 G22	口径：11.2 受部径：13.4 器高：3.5	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/2	天井部外面にヘラ記号「×」あり
539	090 -04	須恵器 杯身	落ち込み3 G22	口径：11.8 受部径：14.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 灰白N8/0	微砂粒多含	良	1/4	体部外面に自然釉付着
540	090 -05	須恵器 杯身	落ち込み3 G22	口径：11.4 受部径：13.2 器高：3.2	底部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/4	体部内面に焼きぶくれあり
541	090 -06	須恵器 杯身	落ち込み3 F22	口径：11.0 受部径：13.0 器高：3.7	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	やや不良	1/4	
542	090 -07	須恵器 杯身	落ち込み3 F22	口径：10.7 受部径：13.0 器高：3.7	底部外面ヘラ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/4	天井部、体部外面に櫛状工具痕あり
543	090 -08	須恵器 杯身	落ち込み3 G22	口径：10.0 受部径：12.7	体部内面の一部不定方向ナデ 体部外面、口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/4	
544	090 -09	須恵器 杯身	落ち込み3 F2	口径：11.4 受部径：13.2 器高：4.4	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒少含	やや不良	口縁部：ごく一部 底部：1/2	底部外面に焼きぶくれ自然釉付着
545	090 -10	須恵器 杯身	落ち込み3 F22	受部径：12.4	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多含	良	1/8	
546	091 -01	須恵器 杯蓋	落ち込み3 F22	つまみ径：1.9 つまみ高：1.0	天井部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	天井部：2/3	断面は面を作るように意図的に欠か
547	091 -02	須恵器 蓋	落ち込み3 F22	つまみ径：2.4 つまみ高：0.7	天井部外面ロクロナデ、天井部外面端部ロクロヘラケズリ、天井部内面不定方向ナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y8/1 (内) 灰白7.5Y8/1	微砂粒少含	良	1/4	
548	091 -03	須恵器 高杯	落ち込み3 南壁面（灰褐色土） F22	裾径：9.9	脚部ロクロナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	裾部：3/4 柱状部：完存	二方スカシ
549	091 -04	須恵器 高杯	落ち込み3 F22	口径：12.2	杯部外面ロクロナデ 杯部内面自然釉付着のため調整不明瞭	(外) 灰N5/0 (内) 明黄褐2.5Y6/6	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 底部：ほぼ完存	二方スカシ
550	091 -05	須恵器 高杯	落ち込み3 F22	裾径：9.6	脚部ロクロナデ	(外) 灰白10Y8/1 (内) 淡黄2.5Y8/3	微砂粒多含	良	1/3	三方スカシか
551	091 -06	須恵器 椀	落ちこみ3 F22	口径：9.3	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/1 (内) にぶい黄橙 10YR7/3	微砂粒少含	良	口縁部：ほぼ欠 体部：1/3	体部外面に釉垂れ痕あり
552	091 -07	須恵器 台付椀	落ちこみ3 F22	底径：10.1	杯部外面ロクロナデ、杯部内面自然釉付着	(外) 暗オリーブ5Y 4/3 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	杯部：1/3 裾部：4/5	三方スカシ 裾部に別個体の杯身付着

第23－23表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
553	091 -08	土師器 壺	落ちこみ3 F22	口径：19.3	口縁部ヨコナデ	(外) 浅黄橙10YR8/4 (内) 浅黄橙10YR8/4	微砂粒少含	良	1/8	
554	092 -01	須恵器 壺	落ちこみ3 D22	口径：18.6	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒少含	良	1/8	口縁部内面にヘラ記号「ΛΛ」あり
555	092 -02	須恵器 壺	落ちこみ3 D22	口径：13.2	口縁部ロクロナデ 体部外面平行タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 淡黄2.5Y8/3	細砂粒多含	良	1/4	口縁端部にヘラキザミ3ヶ所あり
556	092 -03	須恵器 甕	落ちこみ3 F22	口径：33.4	口縁部ロクロナデ 体部外面平行タタキのちカキ目調整 体部内面ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/20	口縁部内面に焼きぶくれあり
557	092 -04	須恵器 甑	落ちこみ3 F22		体部外面カキ目調整のちケズリ 体部内面不定方向ナデ 底部外面ナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 明青灰5B6/1	細砂粒多含	良	1/6	
558	093 -01	須恵器 杯 蓋	包、SD4上層 H21	口径：13.0 器高：3.6	天井部外面ヘラ切りのちナデ、天井部外面端部ロクロヘラ削り、天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒少含	良	1/4	
559	093 -02	須恵器 杯 身	SD4 G21	口径：10.2 受部径：12.7 器高：4.4	底部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 底部：完存	受部に別個体の杯蓋付着
560	093 -03	須恵器 杯 身	SD4 H21	口径：12.0 受部径：13.6	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	1/4	
561	093 -04	須恵器 短頸壺	SD4 H20	口径：8.8	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/4	
562	093 -05	須恵器 皿	SD4 H20	口径：15.6	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/6	
563	093 -06	須恵器 椀	SD4 G20～21	口径：12.8	口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) 灰5Y5/1	微砂粒少含	良	1/3	
564	093 -07	須恵器 台付椀	SD4 H20	底径：14.5	脚部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/4	
565	093 -08	須恵器 短頸壺	SD4 G20～21	口径：8.3	口縁部ロクロナデ、体部外面(上部)カキ目調整、(下部)ヘラ削り 体部内面ロクロナデ	(外) 褐灰10YR6/1 (内) 青灰5PB6/1	細砂粒少含	良	1/2	体部外面に刺突文あり
566	093 -09	須恵器 壺	SD4 F20	口径：11.0	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/1 (内) 浅黄橙10YR8/3	細砂粒多含	良	1/4	
567	093 -10	須恵器 蓋	SH6 ア17	つまみ径：2.6 つまみ高：0.9	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面一方向ナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白2.5GY8/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	1/2	天井部外面に自然釉付着
568	094 -01	須恵器 高 杯	SK7 ア17	口径：12.5	口縁部ロクロナデ、底部外面ロクロヘラ削り、脚部との接合部付近ナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少含	不良	口縁部：1/4 底部：完存	
569	094 -02	須恵器 杯 蓋	SK10 A24	口径：12.5 器高：3.4	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	ほぼ完存	
570	094 -03	須恵器 甕	SK16 A32～33	口径：37.6	口頸部ロクロナデ 基部粘土による補修	(外) 淡黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y8/1	砂粒少含	やや不良	4/5	口頸部外面に波状文
571	095 -01	須恵器 甕	SK16(No.1・4) A32～33	口径：34.4	口頸部ロクロナデ、口頸部内面の下位部分ナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	1/2	口頸部外面に波状文
572	095 -02	須恵器 杯 蓋	2号窯 排煙・排水溝 D20	口径：13.0 器高：4.8	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白5Y8/1	細砂粒多含	良	ほぼ完存	
573	095 -03	須恵器 杯 身	2号窯 排煙・排水溝 C20	口径：11.6 器高：13.8	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	2/3	
574	095 -04	須恵器 蓋	2号窯 排煙・排水溝 D20	口径：10.9 器高：4.2	天井部外面ロクロヘラ削り 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：3/4 天井部：完存	
575	096 -01	須恵器 甕	2号窯 排煙・排水溝 D20	口径：26.0	口頸部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 浅黄橙7.5YR 8/4	砂粒多含	やや不良	1/6	口頸部外面に刺突文 内面に自然釉
576	097 -01	須恵器 杯 蓋	包含層(第1地区) A16	口径：13.0 器高：4.2	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/2	

第23－24表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
577	097 -02	須恵器 杯身	包含層(第1地区) B18	口径：10.6 受部径：13.0 器高：3.6	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄橙7.5YR 8/4 (内) 灰白7.5YR8/2	細砂粒多含	良	1/4	底部内面に焼きぶくれあり
578	097 -03	須恵器 杯身	包含層(第1地区) B16	口径：8.8 受部径：10.8 器高：2.9	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	砂粒少含	良	ほぼ完存	
579	097 -04	須恵器 杯蓋	包含層(第1地区) B19	口径：9.6 つまみ径：1.8 かえり径：7.7 器高：3.2 つまみ高：1.0	天井部中央外面ナデ、天井部端部外面ロクロヘラ削り 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰オリーブ 7.5Y4/2 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 天井部：2/3	天井部外面に自然釉付着
580	097 -05	須恵器 杯蓋	包含層(第1地区) ア16	口径：9.6 かえり径：8.6	天井部中央外面ナデ、天井部端部外面ロクロヘラ削り 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 青灰5PB6/1	細砂粒少含	良	ほぼ完存	つまみ頂部切断 歪み大
581	097 -06	須恵器 杯	包含層(第1地区) B25	口径：7.6 器高：3.5	底部外面ナデか 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 青灰5PB6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/2 底部：完存	底部外面に砂の固まり付着
582	097 -07	須恵器 椀	包含層(第1地区) B17	口径：9.6	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/6	
583	097 -08	須恵器 椀	包含層(第1地区) B25	口径：9.8 器高：5.35	底部外面静止ヘラ削り 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰5B7/1 (内) 明青灰5B7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/4 体部：1/2 底部：完存	底部外面にヘラ記号
584	098 -01	須恵器 高杯	包含層(第1地区) B20	口径：17.6	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) にぶい黄橙 10YR7/4	細砂粒多含	やや不良	1/8	
585	098 -02	須恵器 高杯	包含層(第1地区) B16	口径：11.5	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロヘラ削り 底部内面不定方向ナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 青灰5B6/1	砂粒少量	良	1/2	
586	098 -03	須恵器 蓋	包含層(第1地区) ア16	つまみ径：3.0 つまみ高：0.8	天井部中央外面ロクロナデ、天井部端部外面ロクロヘラ削り、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	2/3	天井部内面に焼きぶくれ多くあり
587	098 -04	須恵器 蓋	包含層(第1地区) 地山直上 B17	つまみ径：3.2 つまみ高：0.9	天井部外面ロクロナデ 天井部内面一方向ナデ	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰10YR7/2	微砂粒少含	やや不良	1/4	天井部外面に自然釉付着
588	098 -05	須恵器 短頸壺	包含層(第1地区) 焼土付近含 ア17	口径：4.8 器高：6.8	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面静止ヘラ削り	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 体部：完存 底部：完存	口縁部に歪み大
589	098 -06	須恵器 無道具か	包含層(第1地区) ア16	最大径：4.55	未調整	灰白5Y8/2	細砂粒多含	やや不良	ほぼ完存	
590	098 -07	須恵器 提瓶	包含層(第1地区) イ16	口径：8.1	口頸部外面カキ目調整 口頸部内面ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 明黄褐10YR7/6	細砂粒多含	良	ほぼ完存	体部片他に有り
591	098 -08	須恵器 壺	包含層(第1地区) 焼土付近含 ア17	口径：16.0	口縁部ロクロナデ 体部外面格子タタキ 体部内面青海波タタキ	(外) 青灰5B5/1 (内) 青灰5B6/1	微砂粒多含	良	2/3	
592	099 -01	土師器 甕	包含層(第1地区) イ16	口径：21.0	口縁部ヨコナデ 体部ナデか	(外) 黄橙10YR8/6 (内) 黄橙10YR8/6	微砂粒少含	良	1/8	
593	099 -02	土師器 甕	包含層(第1地区) A16	口径：28.7	口縁部ヨコナデ 体部外面タテ方面ハケ目調整のちナデか 体部内面ナデ	(外) 浅黄橙10YR8/3 (内) 浅黄橙10YR8/3	微砂粒少含	不良	1/7	
594	100 -01	土師器 甕	包含層(第1地区) B25	口径：39.0	口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ヨコ方向ハケ目調整のちナデ、体部外面タテ方向ハケ目調整、体部内面ヨコ方向ハケ目調整	(外) 浅黄橙10YR8/4 (内) 橙5YR7/8	微砂粒少含	不良	1/10	
595	101 -01	須恵器	包含層(第1地区) B16		体部外面磨耗のため調整不明瞭 体部内面平行タタキ・青海波タタキのちスリケシか	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	不良		体部内面にクシ状工具痕あり
596	102 -01	須恵器	包含層(第1地区) B16		口縁端部タタキのちナデ 体部平行タタキ・青海波タタキのちスリケシか	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	不良		
597	103 -01	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) D20	口径：13.0 器高：4.2	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：完存	
598	103 -02	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) D20	口径：12.4 器高：3.35	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 体部：3/4 天井部：完存	天井部外面に砂の固まり付着
599	103 -03	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) D20	口径：12.1 器高：4.1	天井部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 明青灰10BG7/1	細砂粒多含	やや不良	ほぼ完存	
600	103 -04	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) D20	口径：11.6 器高：3.85	天井部外面ヘラ切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 緑灰10GY6/1 (内) 緑灰10GY6/1	細砂粒多含	良	ほぼ完存	

第23－25表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
601	103 -05	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) D20	口径：11.4 器高：3.9	天井部外面ヘラ切りのちクシ状工具による調整のちナデ、天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰10BG5/1 (内) 青灰10BG5/1	砂粒少含	良	ほぼ完存	天井部外面にヘラ記号「—」
602	103 -06	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) D20	口径：12.3 器高：4.7	天井部外面ヘラ切り不調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 (内) 灰オリーブ 7.5Y6/2	微砂粒多含	良	ほぼ完存	口縁部に歪みあり
603	103 -07	須恵器 杯身	包含層(第2地区) D20	口径：9.7 受部径：12.0 器高：3.0	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 緑灰5G6/1 (内) 緑灰5G6/1	細砂粒多含	良	3/4	歪み大
604	103 -08	須恵器 杯身	包含層(第2地区) D20	口径：10.8 受部径：12.8 器高：4.0	底部外面ヘラ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰オリーブ 2.5GY6/1 (内) 灰オリーブ 2.5GY6/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 体部：完存 底部：完存	
605	103 -09	須恵器 杯身	包含層(第2地区) D20	口径：11.1 受部径：12.9 器高：3.6	底部外面ヘラ切りのちナデか 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 青灰10BG6/1 (内) 明褐灰5YR7/1	微砂粒多含	やや不良	ほぼ完存	
606	104 -01	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) くすんだ黄褐 G23	口径：10.5 つまみ径：1.5 かえり径：8.75 器高：2.25 つまみ高：0.4	天井部外面カキ目調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	やや不良	2/3	天井部外面に自然釉付着
607	104 -02	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) 中央アゼ G19～H19	つまみ径： 2.4 つまみ高： 0.7	天井部中央部外面はり付けナデ、天井部端部外面カキ目調整、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒少含	不良	2/3	
608	104 -03	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) C25	口径：12.0 つまみ径：1.8 かえり径：9.5 つまみ高：0.65 器高：3.35	天井部中央部外面はり付けナデ、天井部端部外面ロクロヘラ削り、天井部内面不定方向ナデ、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N4/0	細砂粒多含	良	1/2	
609	104 -04	須恵器 杯蓋	試掘トレンチ (第2地区) G22	つまみ径： 2.6 つまみ高： 1.0	天井部中央部外面はりつけナデ、天井部端部外面ロクロヘラ削り、天井部内面不定方向ナデ、体部ロクロ	(外) にぶい橙7.5YR 6/4 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/4	外面全体に自然釉付着
610	104 -05	須恵器 杯蓋	包含層(第2地区) H24	つまみ径： 2.4 つまみ高： 0.8	天井部中央部外面ナデ、天井部端部外面ロクロヘラ削り、天井部内面不定方向ナデ、体部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/6	
611	104 -06	須恵器 杯蓋	試掘トレンチ(第2地区) G18	つまみ径： 2.5 つまみ高： 0.7	天井部中央部外面ナデ、天井部端部外面・体部端部外面ロクロヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	つまみ部：1/2 体部：1/8	
612	104 -07	須恵器 椀	包含層(第2地区) G23	体部最大径： 10.6	体部ロクロナデ 底部外面ヘラケズリ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒多含	良	1/3	
613	104 -08	須恵器 台付椀	包含層斜面 (第2地区) F18	口径：11.5 底径：10.0 器高：12.75	椀部口縁部・体部ロクロナデ、底部内面不定方向ナデ、台部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	やや不良	椀部：1/2 台部：2/3	台部に二方向の三角透し有り
614	104 -09	須恵器 台付椀	包含層(第2地区) ア19	口径：11.4 底径：9.8 器高：12.3	椀部口縁部・体部ロクロナデ、底部内面不定方向ナデ、台部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	椀部：1/3 台部：1/4	台部に二方向の三角透し有り
615	105 -01	須恵器 高杯	包含層(第2地区) F23	口径：11.6	口縁部・底部外面ロクロナデ 底部内面自然釉付着のため調整不明瞭	(外) 灰白N7/0 (内) オリーブ黄5Y 6/3	微砂粒多含	やや不良	1/2	体部外面に釉の固まり付着
616	105 -02	須恵器 高杯	包含層(第2地区) E20	口径：13.8	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロヘラ削り、底部内面ナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多含	良	1/6	
617	105 -03	須恵器 高杯	包含層(第2地区) G23	裾径：10.4	脚部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	微砂粒少含	良	1/4	脚部に三方向の円形透しあり
618	105 -04	須恵器 台付椀	トレンチ(第2地区) I 19	底径：9.5	脚部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	1/2	
619	105 -05	須恵器 高杯	包含層(第2地区) E20		杯部底部内面不定方向ナデ、体部外面ロクロヘラ削り、脚部外面はりつけナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	杯部：2/3 脚部(基部)：1/3	
620	105 -06	須恵器 高杯	試掘トレンチ (第2地区) G19	裾径：7.9	杯部底部外面ロクロヘラ削り、底部内面不定方向ナデ、脚部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒多含	良	杯部：1/3 脚部：1/4	
621	105 -07	須恵器 高杯	包含層(第2地区) H24	裾径：12.3	杯部底部外面ロクロナデ、脚部体部外面カキ目調整、体部内面ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多含	良	1/2	脚部に二方向の二段透しあり
622	105 -08	須恵器 高杯	包含層(第2地区) F18	裾径：12.8	脚部ロクロナデ	(外) 褐灰10YR4/1 (内) 褐灰10YR4/1	微砂粒多含	やや不良	1/4	上段の二方透しは貫通せず
623	106 -01	須恵器 高杯	包含層(第2地区) E19		杯部体部外面ロクロナデ、底部外面ロクロヘラ削り、脚部外面カキ目調整	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/3	上段の二方透しは貫通せず
624	106 -02	須恵器 高杯	包含層斜面 (第2地区) C19		杯部・脚部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	杯部：1/6	脚部に二方向の円形透しあり

第23－26表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
625	106 -03	須恵器 甕	トレンチ(第2地区) G19	口径：9.8	口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/4	
626	106 -04	須恵器 甕	トレンチ(第2地区) G19	口径：9.2	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/12 頸部：完存	頸部内面に絞り痕あり
627	106 -05	須恵器 甕	包含層(第2地区) H24	口径：10.8	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 灰白5Y7/2	微砂粒少含	良	1/5	
628	106 -06	須恵器 短頸壺	包含層(第2地区) E18	口径：9.5 器高：6.6	口縁部ロクロナデ、底部外面ロクロヘラ削り、底部内面ロクロナデ	(外) オリーブ灰5GY 6/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	やや不良	口縁部：1/10 体部：1/2 底部：1/2	体部外面に自然釉付着
629	106 -07	須恵器 短頸壺	包含層　上層(赤褐) (第2地区) D24	口径：9.6	口縁部ロクロナデ、底部外面ロクロヘラ削り、底部内面ロクロナデ	(外) 暗灰N3/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：4/5 体部：1/2	口縁端部は重ね焼きのためかほぼ欠
630	107 -01	須恵器 横瓶か	包含層(第2地区) H24	口径：9.2	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/2 基部：完存	口縁部内面にヘラ記号「N」あり
631	107 -02	須恵器 鉢　か	包含層(第2地区) F18		口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5GY8/1 (内) 灰白2.5GY8/1	微砂粒多含	不良		口縁部内面にヘラ記号「N」あり
632	107 -03	須恵器 鉢	包含層(第2地区) H24	口径：20.9	口縁部ロクロナデ、体部外面カキ目調整 体部・底部内面不定方向ナデ、底部外面削り	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	1/6	
633	107 -04	須恵器 捏　鉢	試掘トレンチ (第2地区) G19		体部ロクロナデ 底部外面ロクロヘラ削り、内面不定方向ナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒多含	良	体部：1/4 底部：1/2	
634	107 -05	須恵器 長頸壺	新県道側斜面断面中 表土下20cm(第2地区) C13		頸部ロクロナデ 基部外面接合部ナデ、基部内面接合部痕 体部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	やや不良	頸部：完存 体部：1/4	頸部外面に自然釉付着
635	108 -01	須恵器 短頸壺	試掘トレンチ (第2地区) E21	口径：14.4	口縁部・体部(上部)ロクロナデ 体部(下部)・底部外面ロクロヘラ削り 体部(下部)・底部内面ロクロナデ	(外) 浅黄5Y7/4 (内) 灰白N8/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/10 体部：1/4 底部：1/4	口縁部内面に砂と釉の固まり付着
636	108 -02	須恵器 鉢　か	試掘トレンチ (第2地区) E21	口径：32.0	口縁部ヨコナデ 体部外面タタキ、体部内面調整不明瞭	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白2.5Y8/2	微砂粒少含	不良	1/5	全体的に磨耗激しい
637	109 -01	須恵器 杯　蓋	第2段テラス第一層 (第3地区) B29	口径：9.3 器高：3.85	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/10 体部：1/2 天井部：1/2	
638	109 -02	須恵器 杯　蓋	包含層(第3地区) C27	口径：10.0 器高：3.6	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多含	良	口縁部：2/3 体部：完存 天井部：完存	
639	109 -03	須恵器 杯　身	包含層(第3地区) B28	口径：8.5 受部径：10.3 器高：2.8	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/6 受部：1/6 底部：3/4	体部外面に自然釉剝落痕あり
640	109 -04	須恵器 杯　身	タニ埋土(第3地区) E33	口径：8.8 受部径：11.1 器高：3.0	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：完存 受部：3/4 底部：完存	
641	109 -05	須恵器 杯　蓋	包含層(第3地区) C28	口径：10.6 かえり径： 8.25 器高：2.15	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/2	体部外面に重ね焼き痕自然釉付着
642	109 -06	須恵器 杯　蓋	包含層(第3地区) C28	口径：10.5 かえり径： 8.8 器高：2.5	天井部外面ヘラ切り不調整 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 明青灰5B7/1 (内) 明青灰5B7/1	細砂粒多含	良	2/3	天井部・体部外面に自然釉付着
643	109 -07	須恵器 杯　蓋	第2段テラス第一層 開墾置土(第3地区) B30	口径：10.3 つまみ径：1.5 かえり径：8.3 器高：3.1 つまみ高：0.95	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰2.5Y6/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	1/4	
644	109 -08	須恵器 杯　蓋	V字谷埋土 開墾置土(第3地区) F32	口径：10.0 つまみ径：1.6 かえり径：7.6 器高：2.6 つまみ高：0.8	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 体部：1/2 天井部：完存	
645	109 -09	須恵器 杯　蓋	V字谷埋土 開墾置土(第3地区) F32	口径：10.0 つまみ径：1.8 かえり径：8.2 器高：2.5 つまみ高：0.9	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多含	やや不良	1/4	焼成不良のため天井部内面にひび割れ
646	109 -10	須恵器 杯　蓋	第2段テラス第1層 開墾置土(第3地区) C31	口径：10.0 つまみ径：1.8 かえり径：8.2 器高：2.3 つまみ高：0.9	天井部・体部外面ロクロヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 体部：1/3 天井部：3/4	体部外面に自然釉付着
647	109 -11	須恵器 杯　蓋	第2段テラス第1層 (第3地区) B29	口径：8.6 つまみ径：1.6 かえり径：6.5 器高：2.3 つまみ高：0.8	天井部外面ロクロヘラ削り 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 黒褐7.5YR3/1	微砂粒多含	良	1/4	体部外面に自然釉付着
648	109 -12	須恵器 杯　身	包含層 (第3地区) B27	口径：8.4 器高：3.0	底部外面ヘラ切り不調整 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) 灰5Y5/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 体部：1/3 底部：1/2	底部外面にヘラ記号「一」か

第23－27表　遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
649	110 -01	須恵器 高杯	タニ埋土 (第3地区) E28	口径：8.8 裾径：7.4 器高：8.2	杯部・脚部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	杯部：1/2 脚部：完存 裾部：1/3	全体的に自然釉付着
650	110 -02	須恵器 高杯	包含層 (第3地区) C28	口径：9.1	杯部口縁部・体部ロクロナデ 杯部底部外面ナデ、底部内面ロクロナデ 脚部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	杯部口縁部：1/4 体部：1/2 底部：完存	杯部の一部に自然釉付着
651	110 -03	須恵器 高杯	第2段テラス第1層 開墾置土(第3地区) B30	裾径：7.35	杯部底部外面ヘラケズリ、内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	杯部底部：1/2残 脚部完存	外面の一部に自然釉あり
652	110 -04	須恵器 高杯	トレンチ(第3地区) E27	裾径：7.6	杯部底部外面ヘラケズリ、内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	杯部底部：2/3残 脚部：3/4残	
653	110 -05	須恵器 高杯	第2段テラス第1層 (第3地区) C31	口径：11.4	杯部底部外面ロクロナデ、内面一方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) 緑灰10GY6/1	微砂粒少含	良	杯部：1/4残	
654	110 -06	須恵器 高杯	包含層(第3地区) C26	裾径：10.4	脚部内外面ロクロナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 青灰5B6/1	微砂粒少含	良	脚部：2/3残	ナイフ状工具による2段2方スカシ(貫通せず)
655	110 -07	須恵器 高杯	V字谷埋土 開墾置土(第3地区) F32	裾径：8.2	脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	脚部： 裾部のみほぼ完存	
656	110 -08	須恵器 提瓶	タニ底部(第3地区) G27	口径：7.6	口頸部内外面ロクロナデ	(外) 褐灰10YR5/1 (内) 赤灰2.5YR5/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/4残 頸部：ほぼ完存	
657	110 -09	須恵器 平瓶	試掘トレンチ (第3地区) E28	口径：6.9	口頸部内外面ロクロナデ 体部上面外面不定方向のナデ 体部上面内面ロクロナデ	(外) 青灰5B6/1 (内) 青灰5B6/1	微砂粒多含	良	口頸部：3/4残 体部上面： ごく一部のみ残	口頸部内外面に自然釉付着
658	111 -01	須恵器 平瓶	試掘トレンチ (第3地区) E29	口径：7.0	口頸部内外面ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒多含 細砂粒少含	良	口頸部：ほぼ完存	口頸部内面に自然釉付着
659	111 -02	須恵器 平瓶	第2段テラス第1層 開墾置土(第3地区) D32	口径：9.4	口頸部内外面ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白2.5Y8/2	微砂粒多含	良	口縁部： ごく一部のみ残 頸部：ほぼ完存	口頸部外面に自然釉付着
660	111 -03	須恵器 高杯	開墾谷埋土 (第3地区) E33	裾径：10.35	杯部底部内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	脚部：1/2残	3方スカシ脚部外面に自然釉付着
661	111 -04	須恵器 短頸壺	V字谷埋土 (第3地区) G31	口径：6.4	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒多含 細砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/3残	
662	111 -05	須恵器 短頸壺	第2段テラス第1層 開墾置土(第3地区) C31	口径：6.2	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y8/2 (内) 黄灰2.5Y6/1	微砂粒少含	良	口縁部： ごく一部のみ残 体部上位：1/4残	
663	111 -06	須恵器 短頸壺	第2段テラス第1層 開墾置土(第3地区) B30	口径：9.6	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部： ごく一部のみ残	
664	111 -07	須恵器 短頸壺	包含層(第3地区) F24	体部最大径： 17.5	体部外面上位ロクロナデ、下位ヘラケズリ 体部内面ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒多含 細砂粒少含	良	体部：1/4残	焼きぶくれあり
665	111 -08	須恵器	V字谷埋土 灰原層際(第3地区) H33		外面タタキ目 内面青海波タタキ	明青灰5B7/1	微砂粒少含 砂粒少含	良		
666	112 -01	須恵器 平瓶	包含層(第2地区) 明褐色土層 F23	口径：5.3 器高：12.4	口縁部ロクロナデ 体部上位外面カキ目調整 体部下位ロクロヘラケズリ後ナデ	(外) 灰N6/1 (内) 灰N6/1	細砂粒多含	良	完存	口縁内面にヘラ記号「N」あり
667	112 -02	軒平瓦	包含層(第1地区) B16		凹面：布目痕 凸面：縄叩痕	(外) 淡黄5Y8/3 (内) 灰白7.5Y8/1	微砂粒少含	不良		

第23－28表　遺物観察表

調査後全景（垂直撮影）

PL. 2

調査前近景（南から１・２号窯付近）

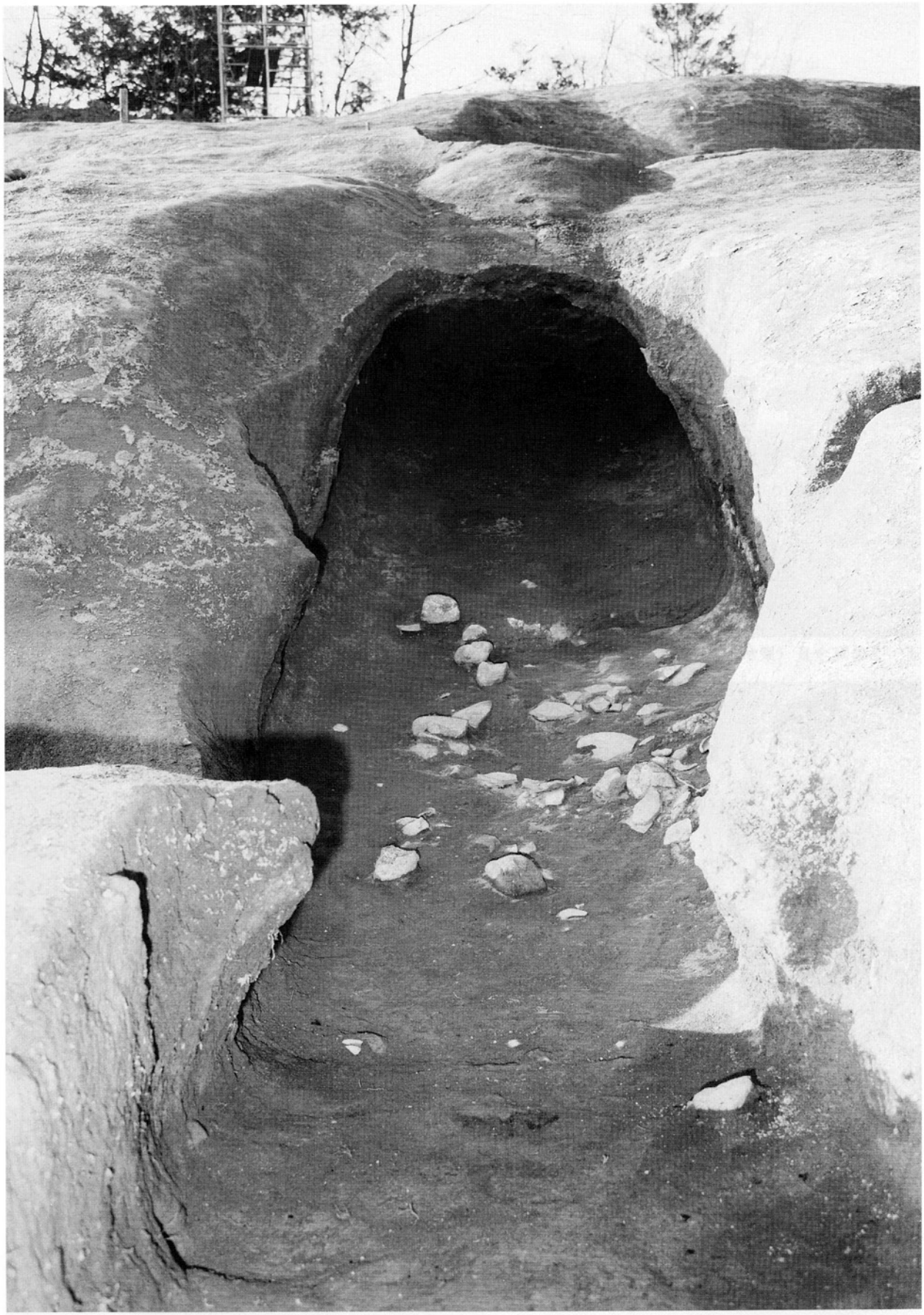
調査前全景（北東から）

3～5号窯調査前全景（南東から）

調査後遠景（南上空から）

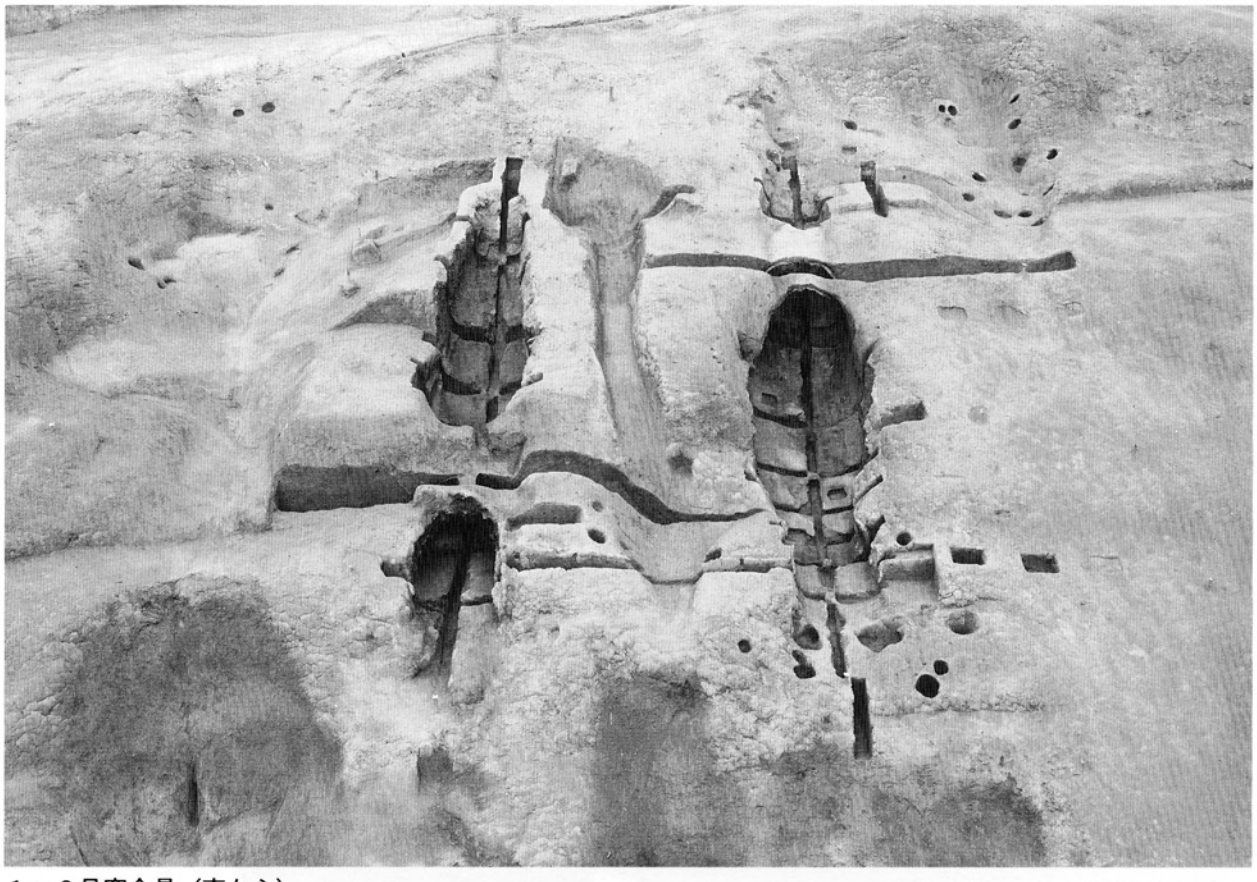
PL. 4

1・2号窯全景（東から）



1号窯（東から）

PL. 6



1・2号窯全景（東から）

1号窯焼成室遺物出土状況（東から）

1号窯焼成部堆積土層断面（東から）

1号窯焚口（西から）

PL. 8

1号窯煙道付近と溝（西から）

1号窯燃焼部北側壁のピット

1号窯焼成部断面（東から）

1号窯断ち割り状況（東から）

PL. 10

1号窯焼成部天井部断面（南東から）

1号窯焼成部床面～北側壁断面（南東から）

2号窯全景（東から）

2号窯焚口部埋積土断面（東から）

PL. 12

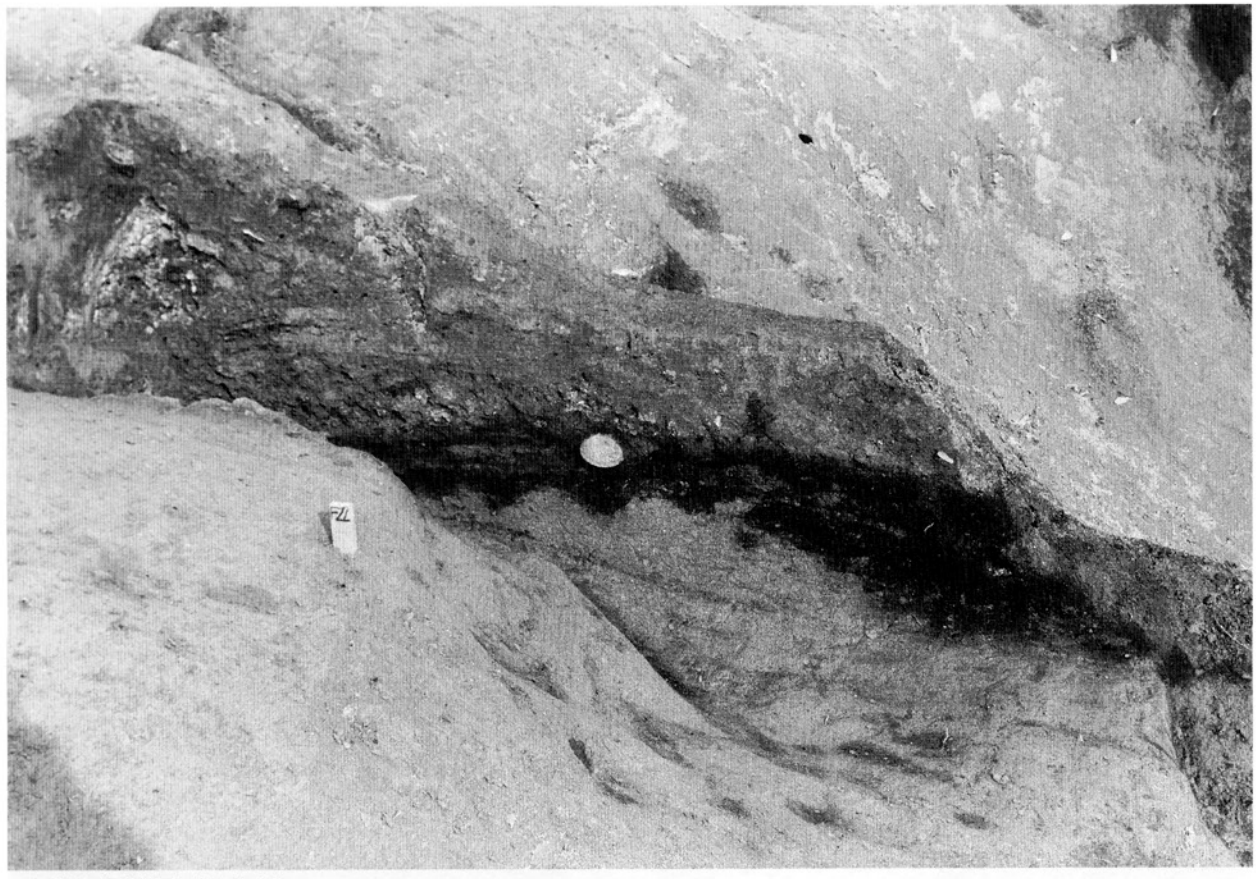
2号窯焼成部遺物出土状況（東から）

2号窯（西から）

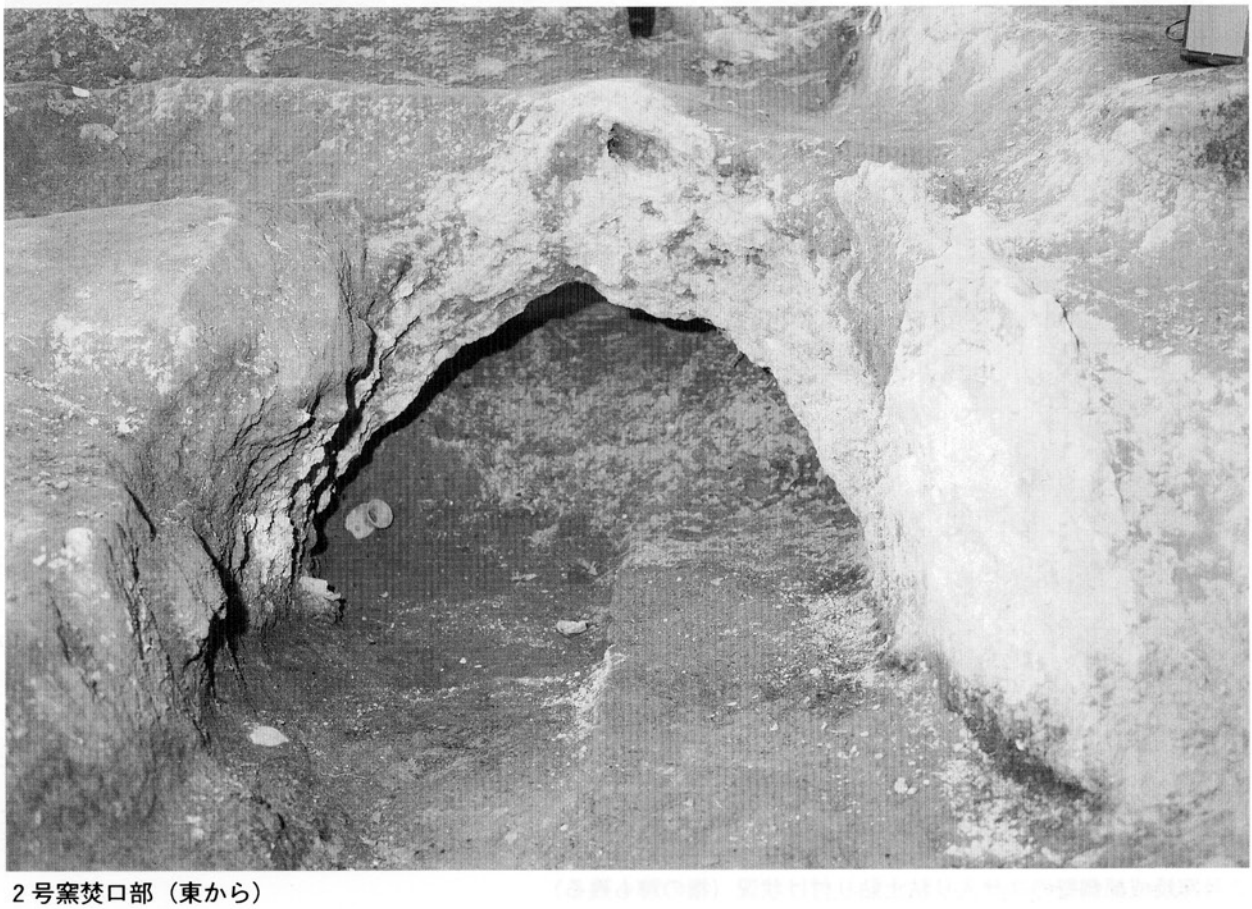
PL. 14

2号窯焼成部上部遺物（253）出土状況（西から）

2号窯焼成部遺物出土状況（西南から）



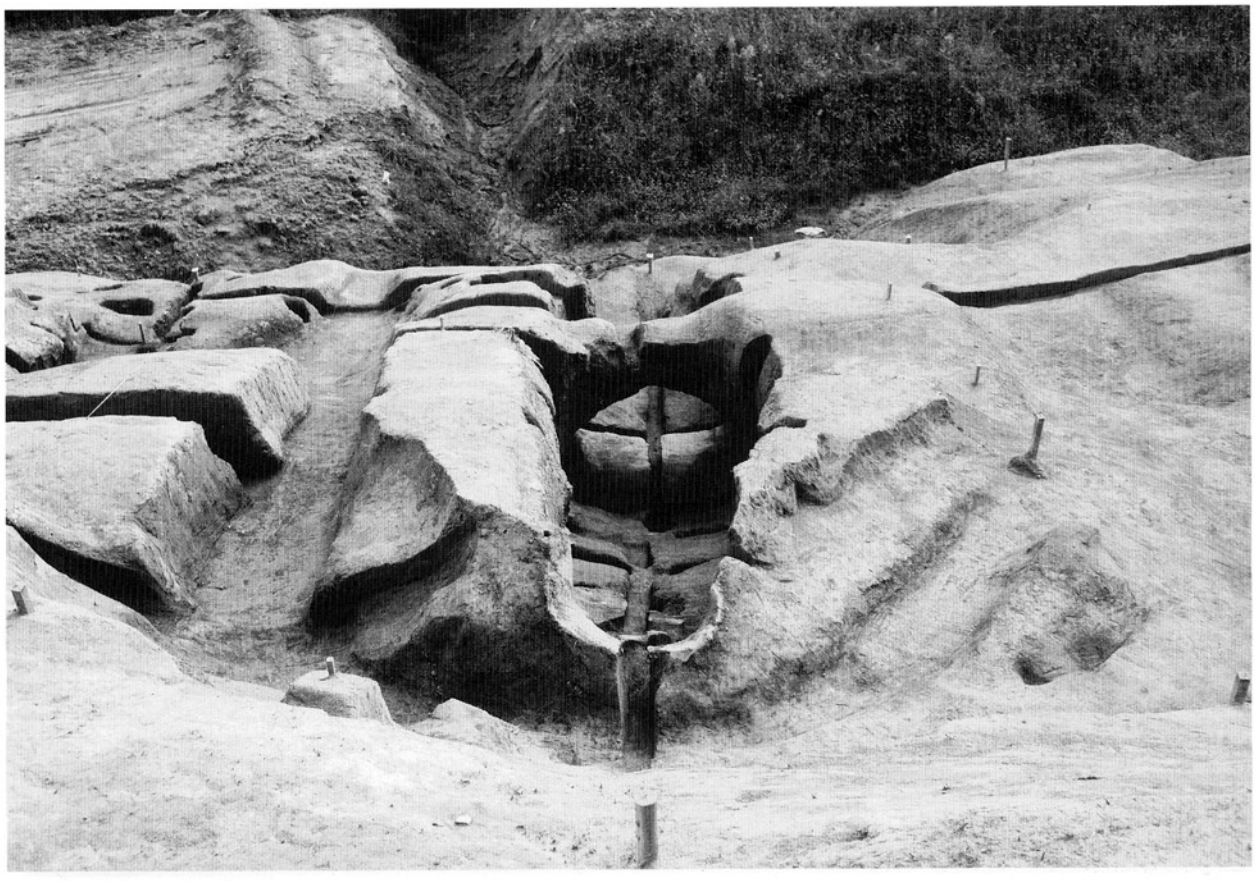
2号窯灰原断面（南から）



2号窯焚口部（東から）

PL. 16

2号窯焼成部側壁のスサ入り粘土貼り付け状況（指の跡も残る）



2号窯と溝（西から）

同上断面（北東から）

PL. 18

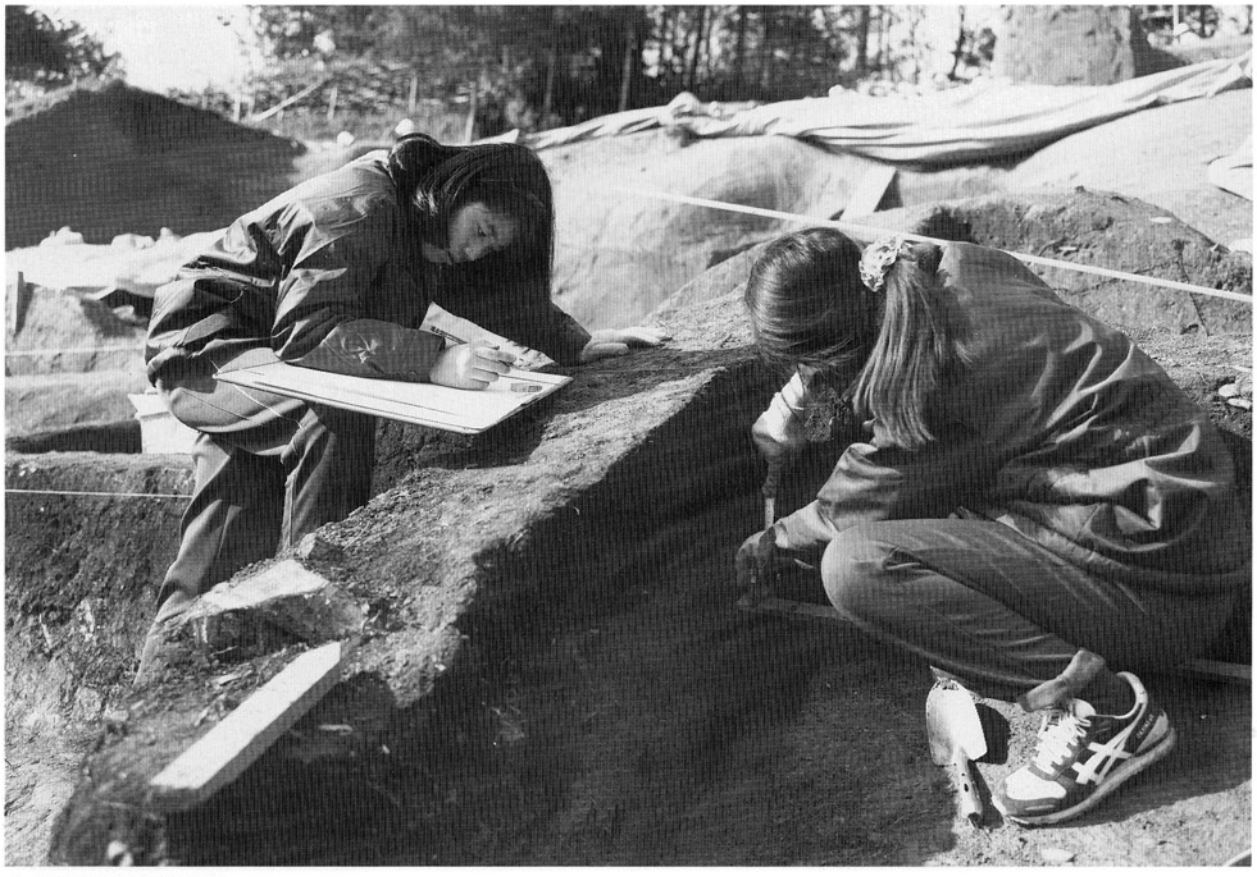
2号窯煙道付近の溝と断面（南から）

2号窯燃焼部断面（東から）

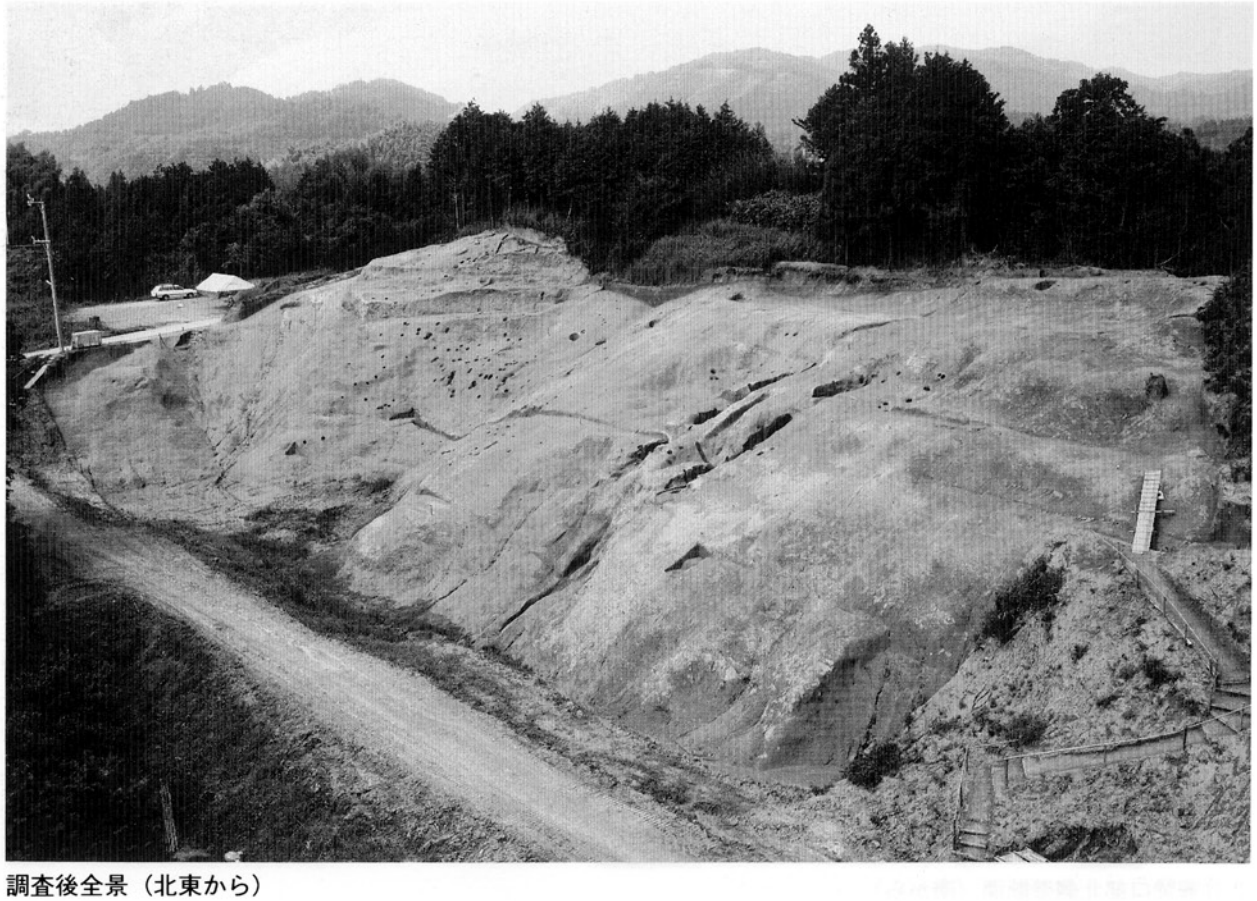
1・2号窯灰原調査風景（南西から）

2号窯焚口部北側壁断面（南から）

PL. 20



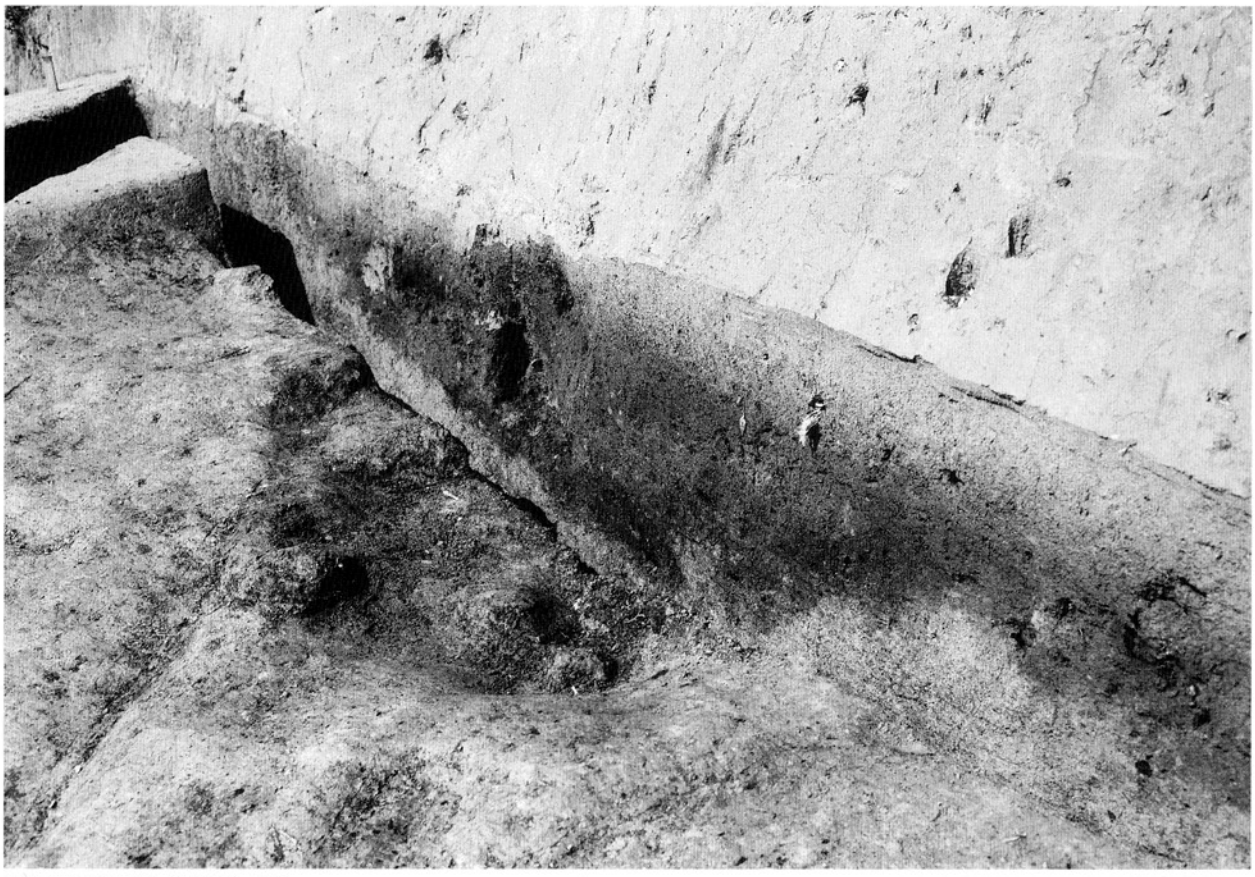
1号窯灰原調査風景



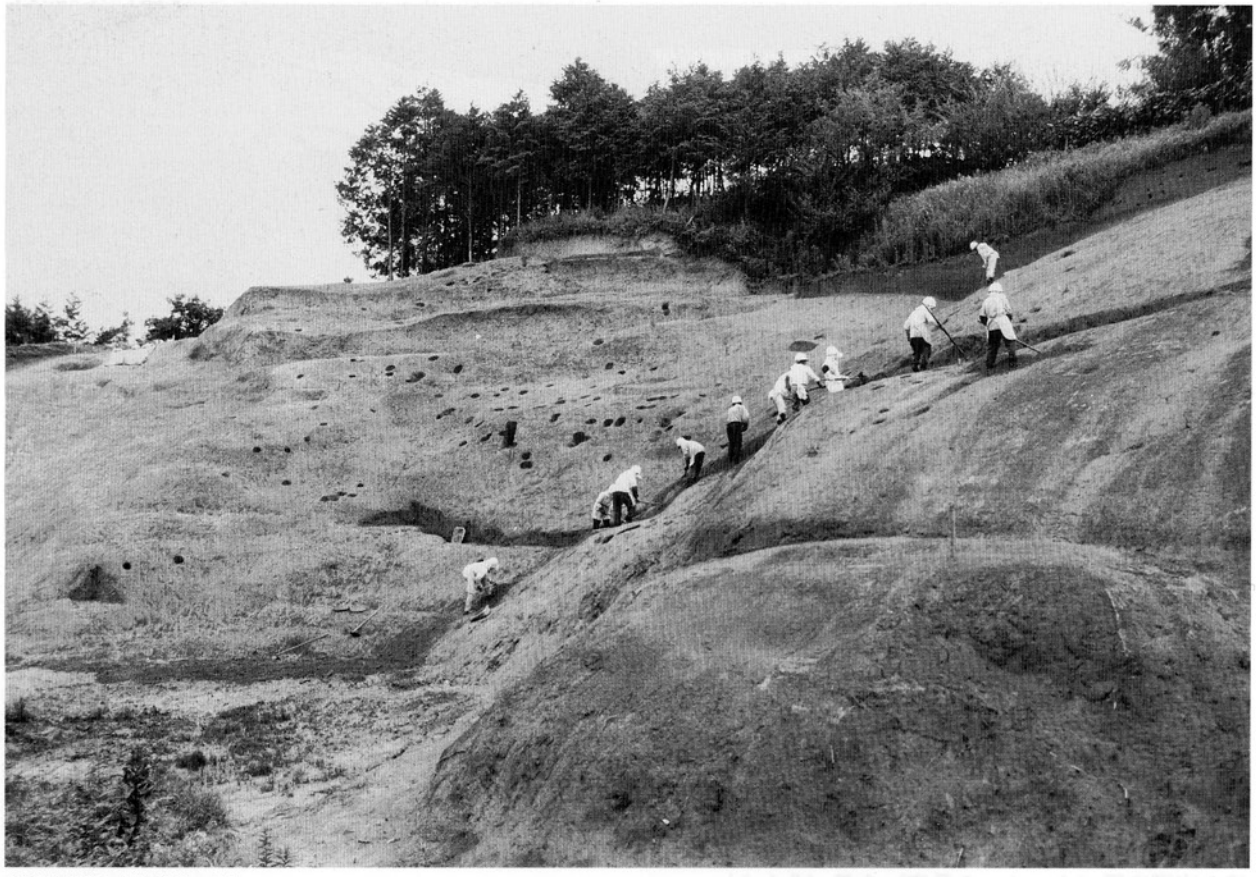
調査後全景（北東から）

3号窯灰原検出状況（南東から）

第2次調査区（3・4・5号窯）全景（北から）



3号窯前庭部（北東から）



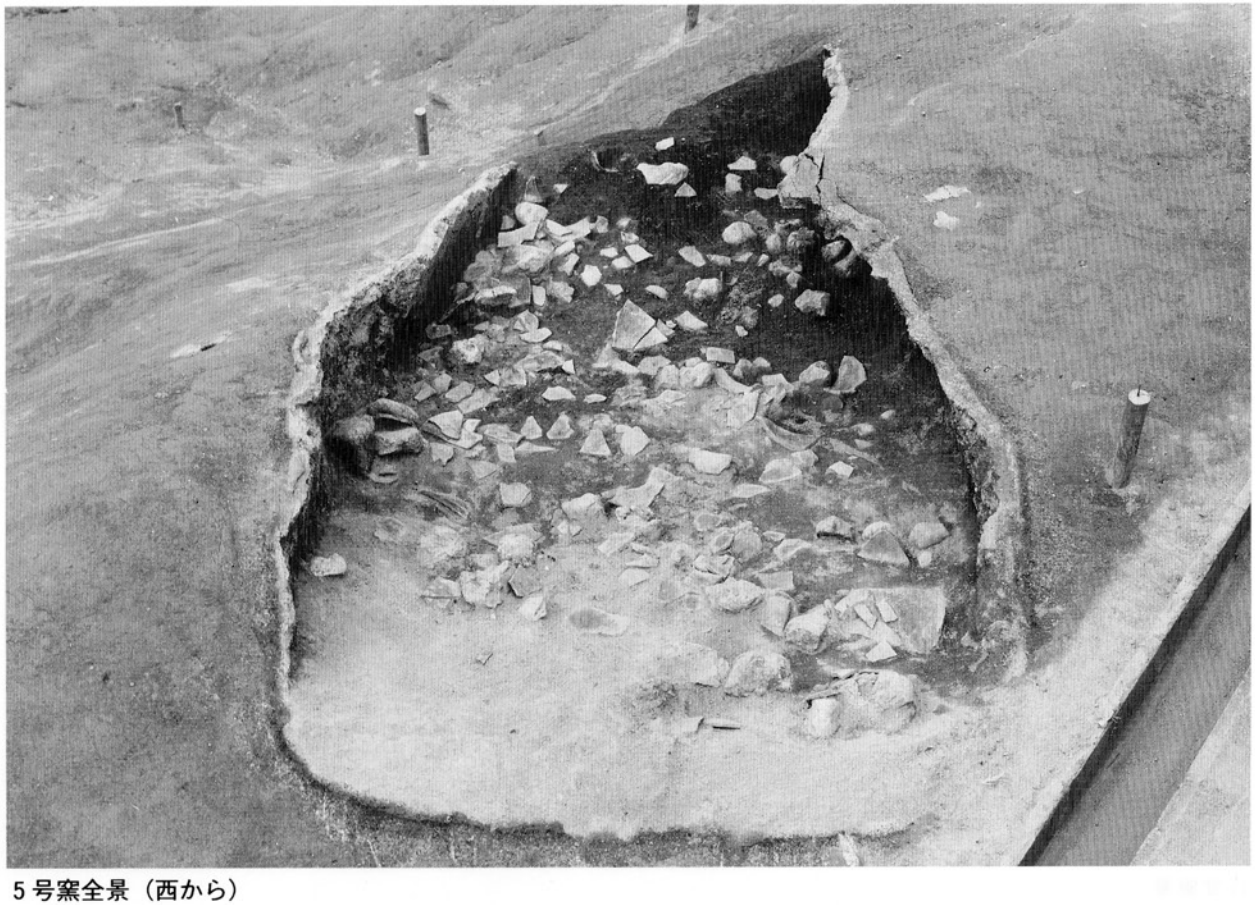
作業風景（北東から）

4号窯全景（南東から）

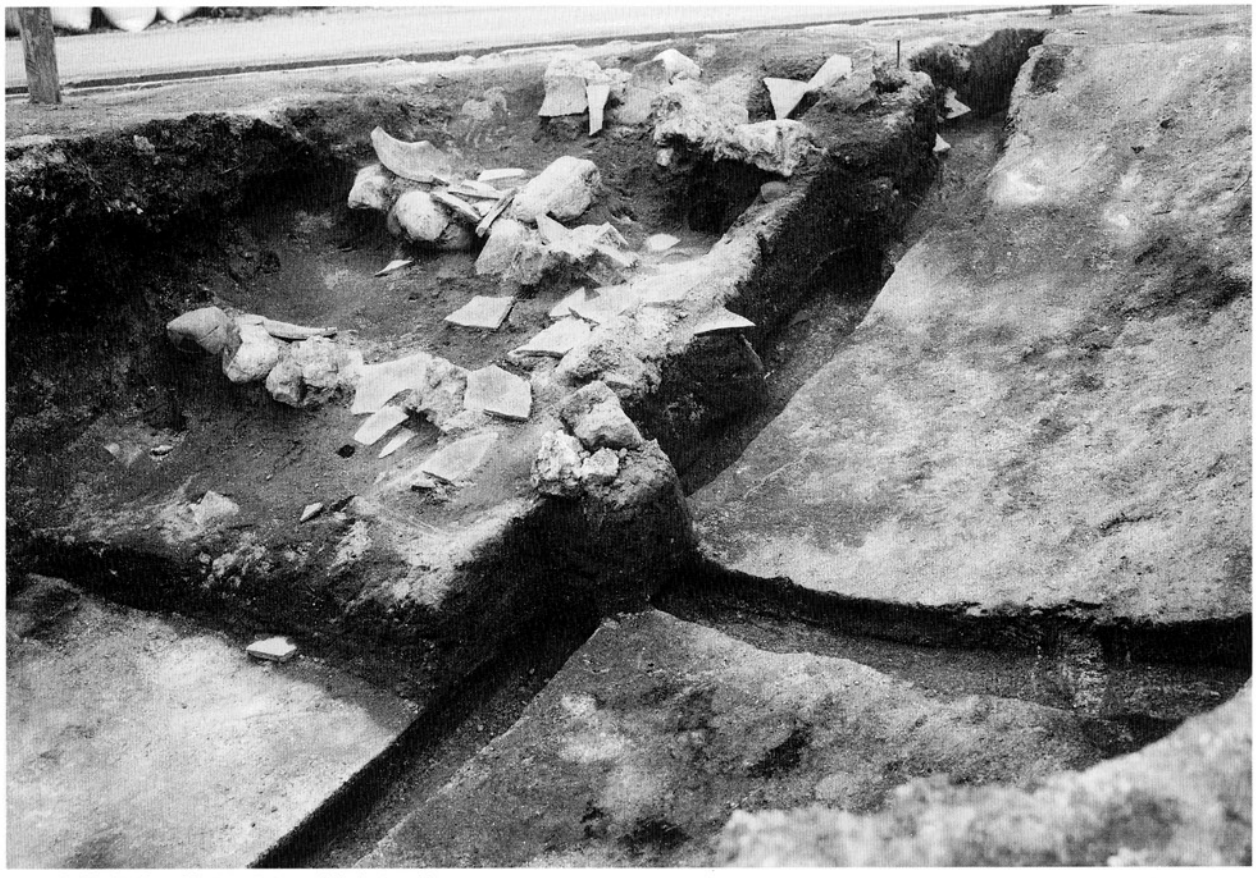
作業風景

PL. 24

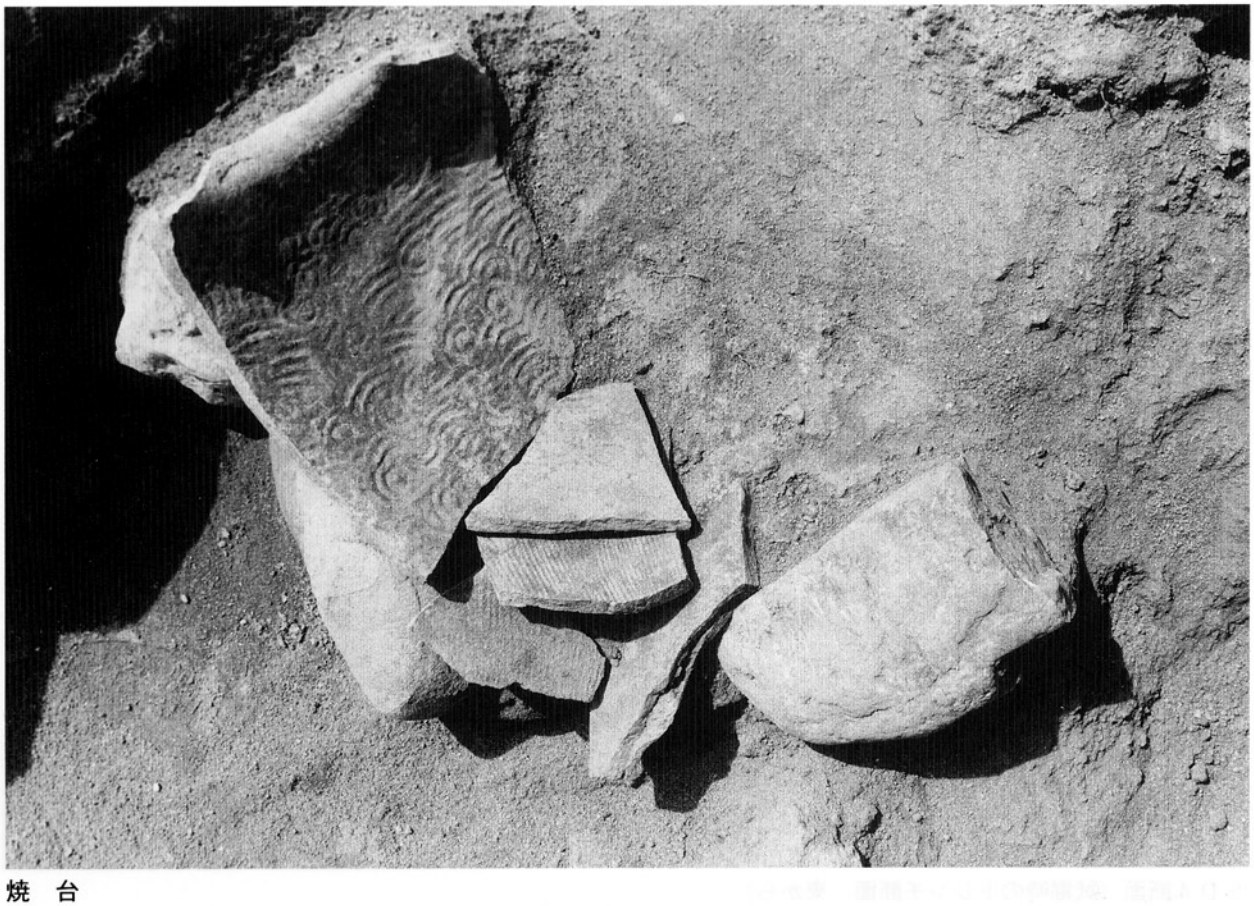
5号窯全景（東から）



5号窯全景（西から）

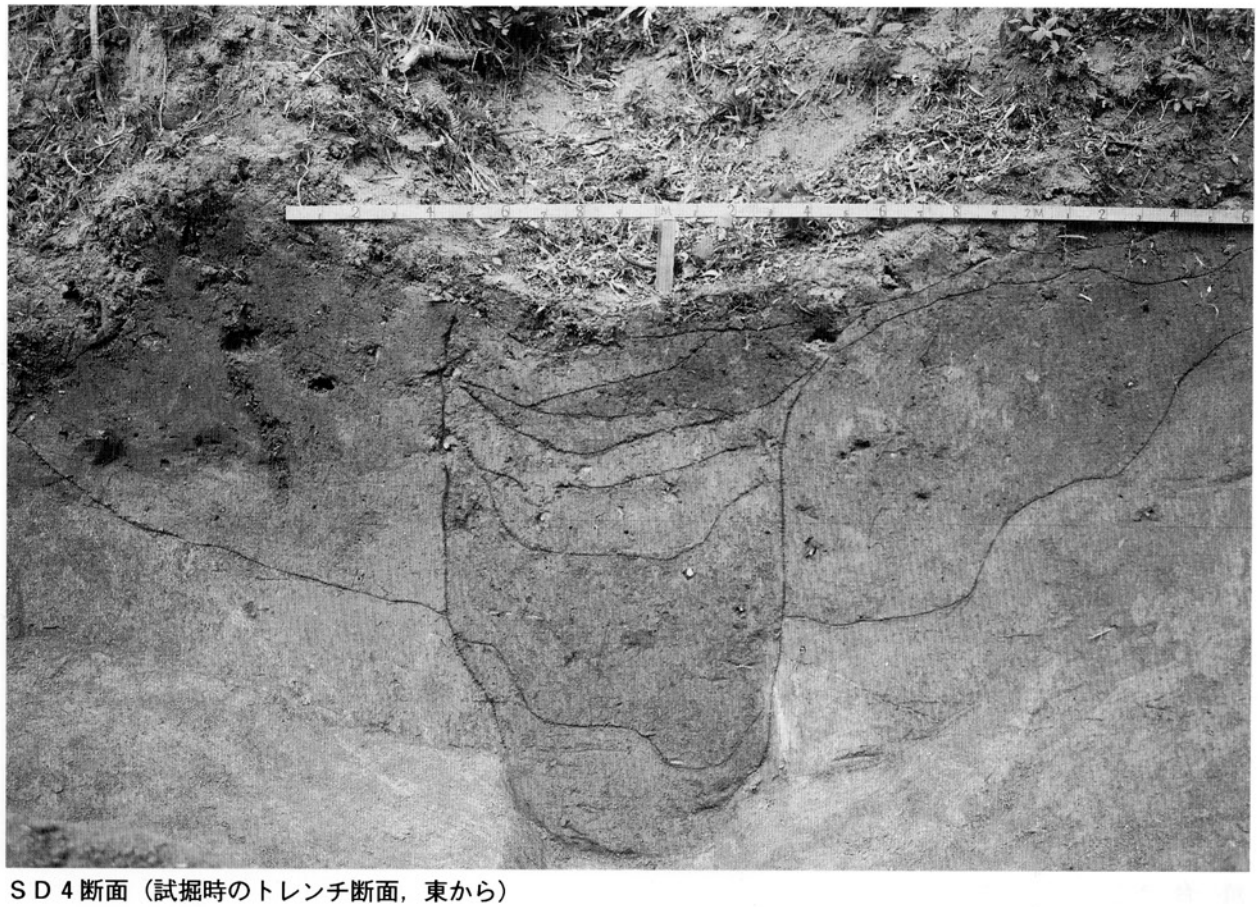


5号窯焼成室　焼台と断面（北東から）



焼　台

ＳＫ16（北から）



ＳＤ４断面（試掘時のトレンチ断面，東から）

SH6．SK7（南から）

SK7（南から）

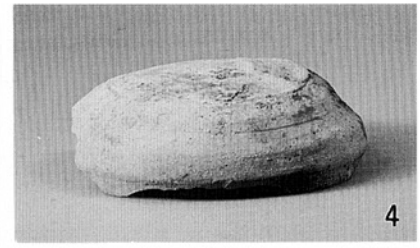
PL. 28

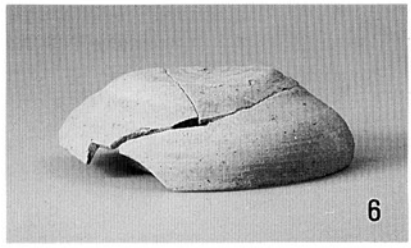
1・2号窯間地山直上の遺物出土状況

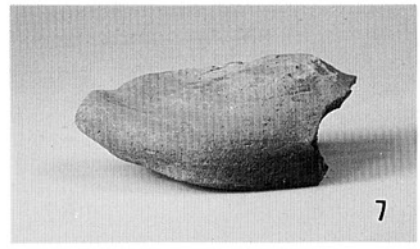
熱残留磁気測定サンプリング作業（5号窯）

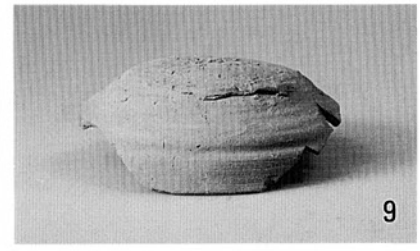
1

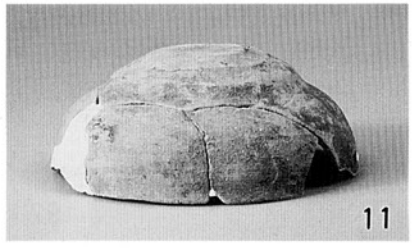
2

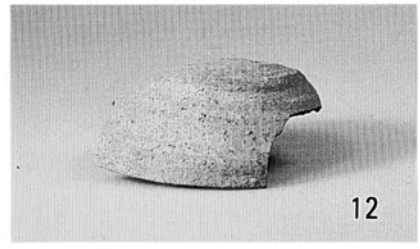

4

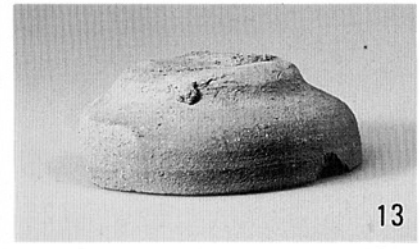

6

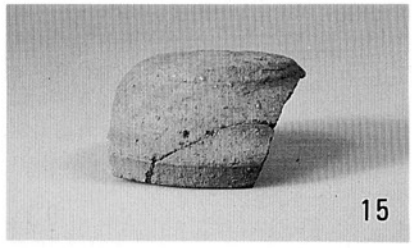

7

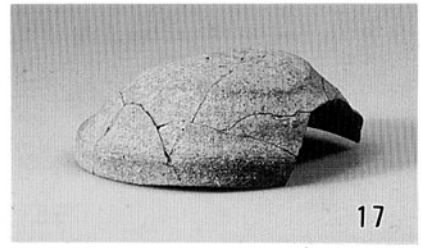

9

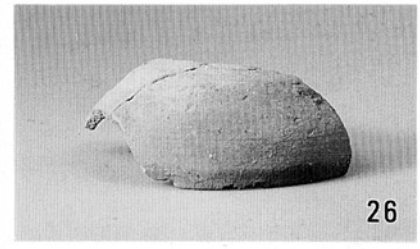

11

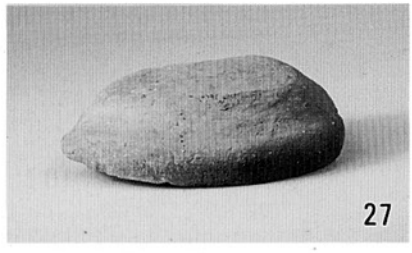

12

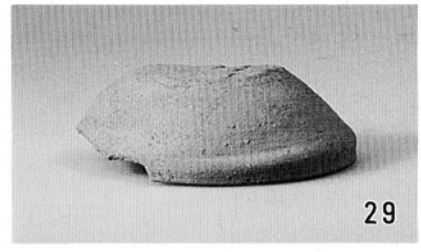

13

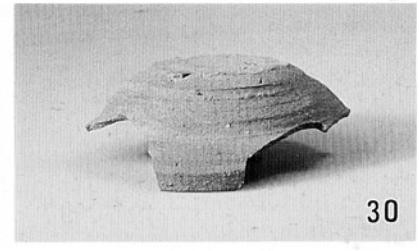

15

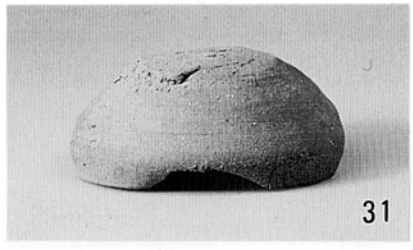

17

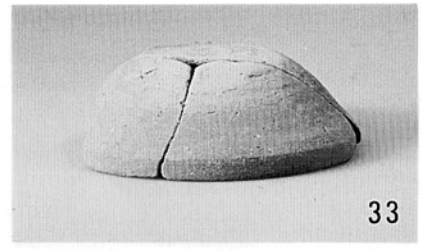

26

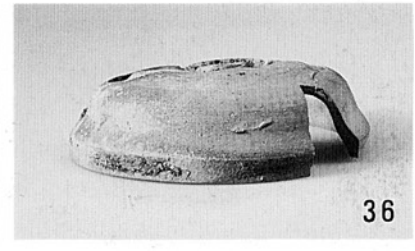

27

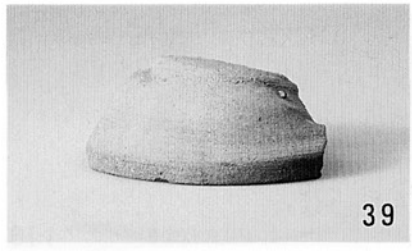

29

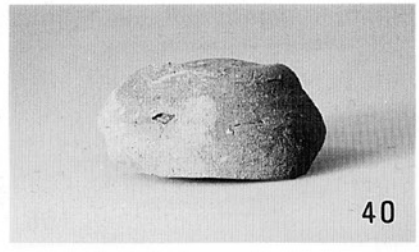

30

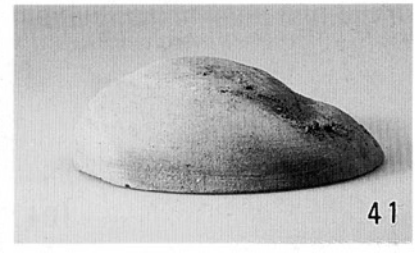

31


33


36

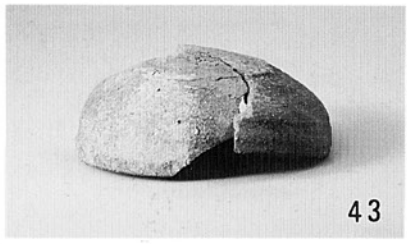

39

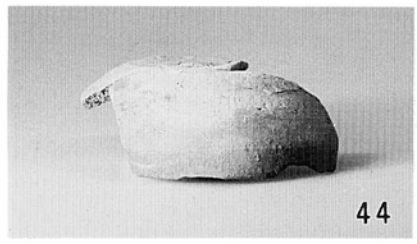

40

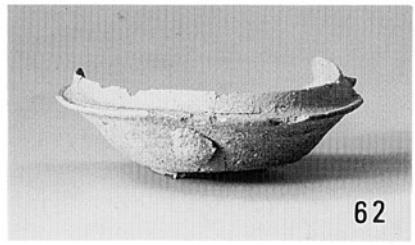

41

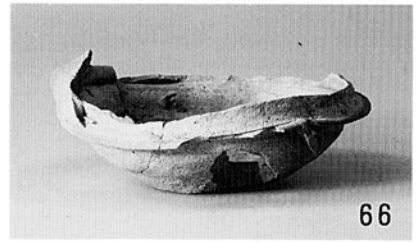
出土遺物

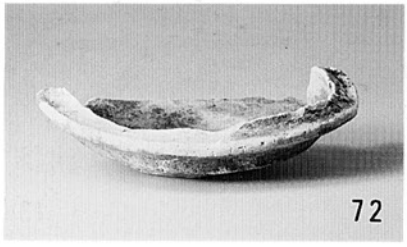
PL. 30

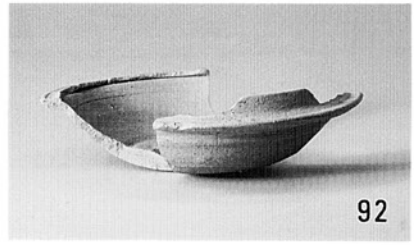


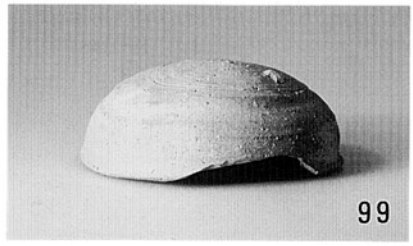


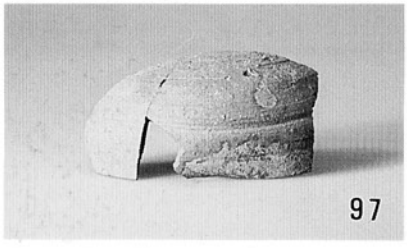


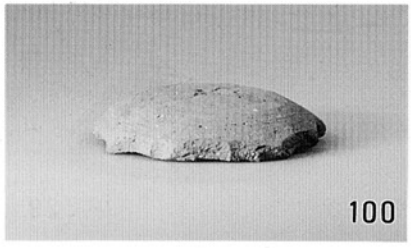


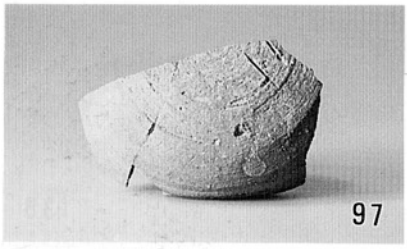


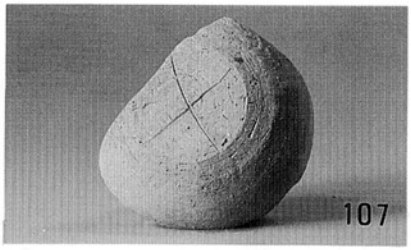


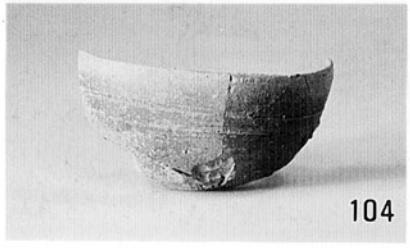


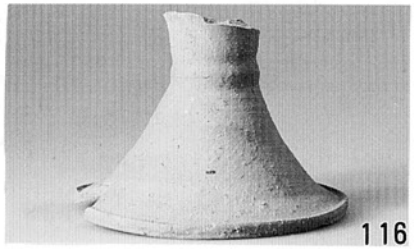






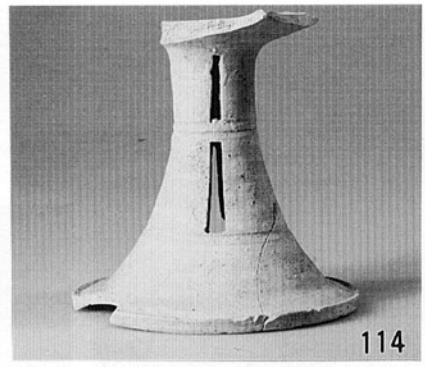




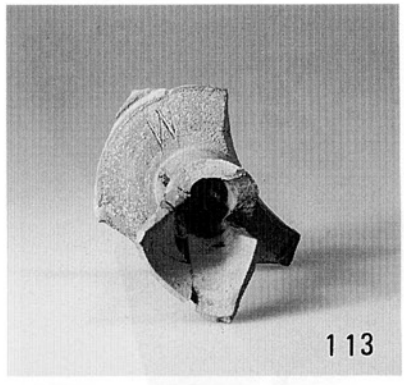


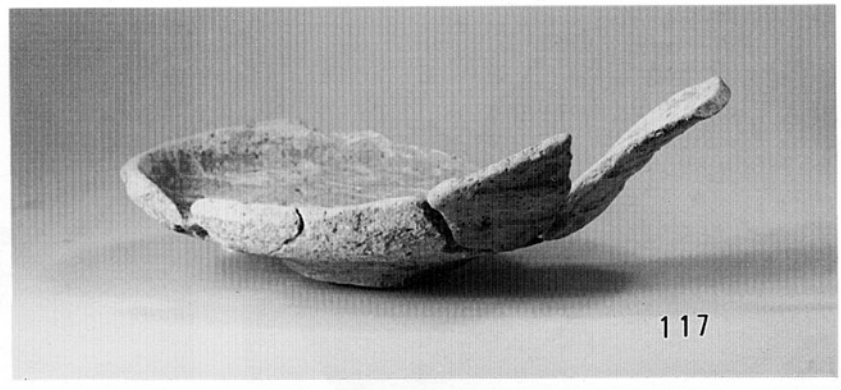
出土遺物

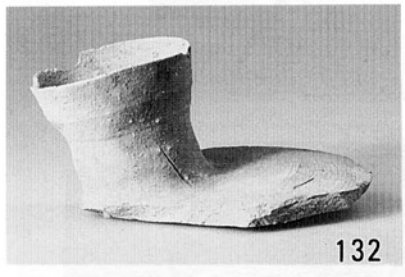
113

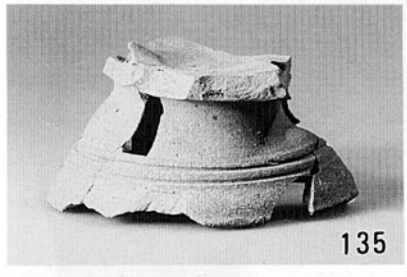

114

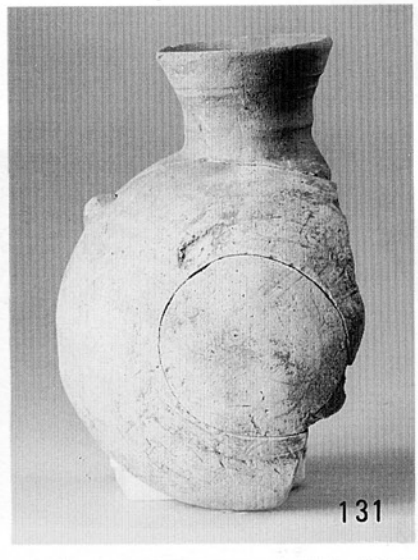
127


113


117

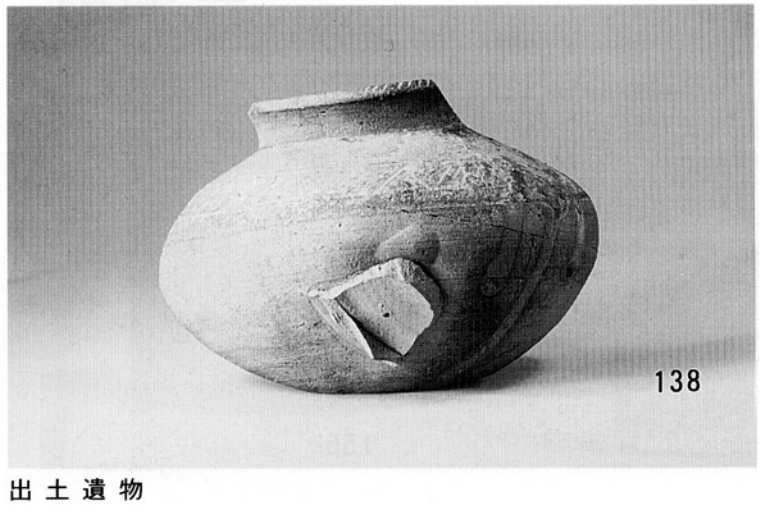

132

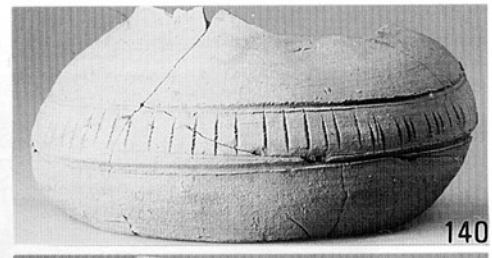

135

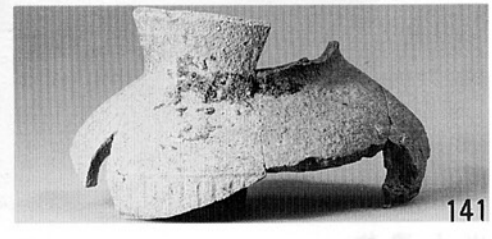

131

122

122

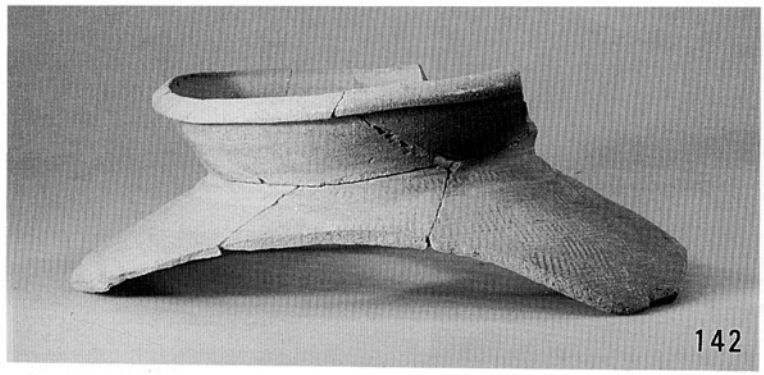

138

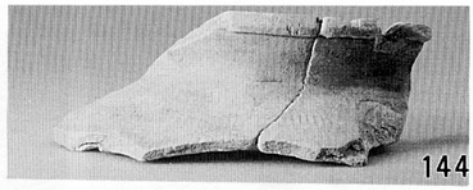

140


141

出土遺物

PL. 32


142

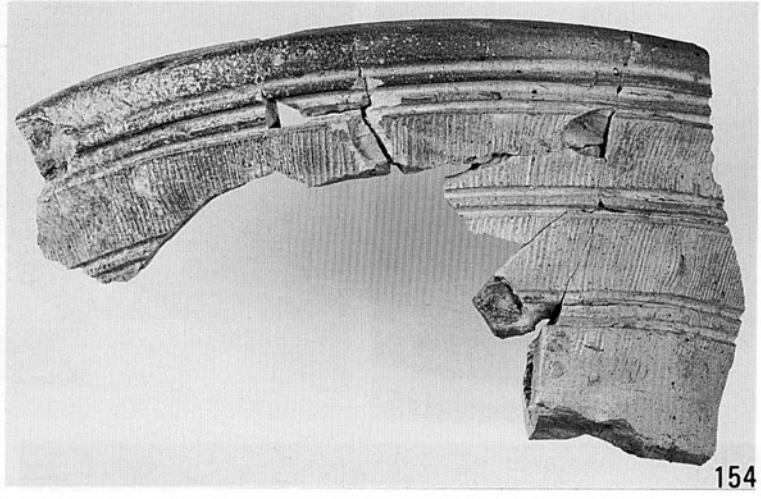

144

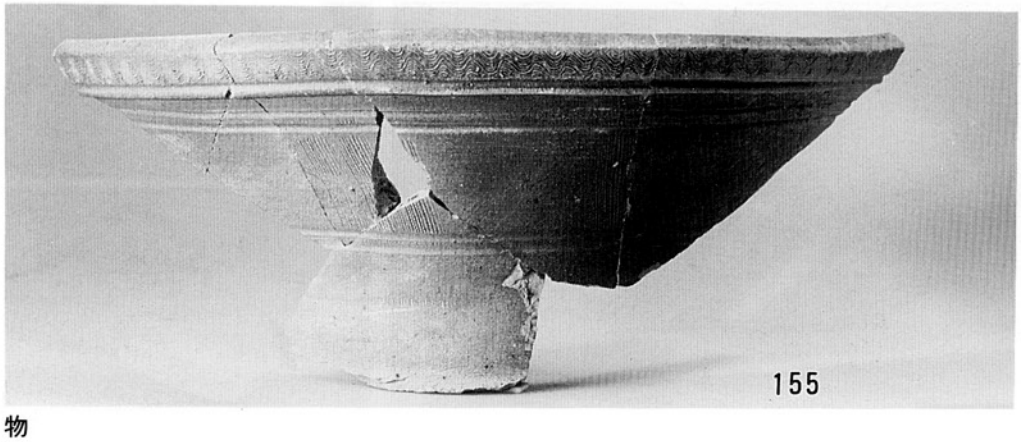
150

152

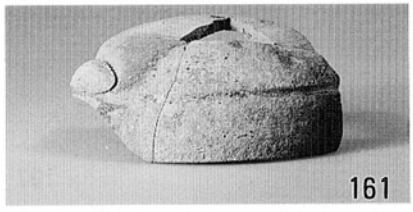
158

153

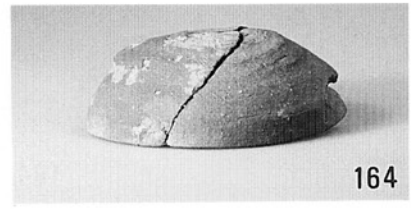

154

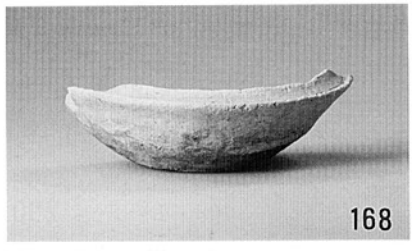

155

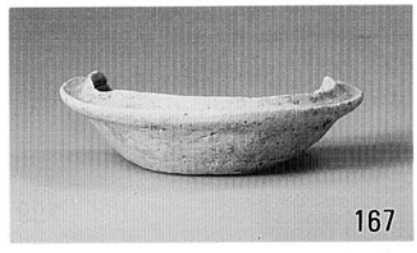
出土遺物

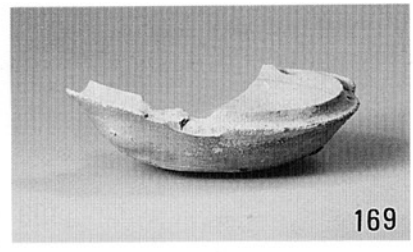

161

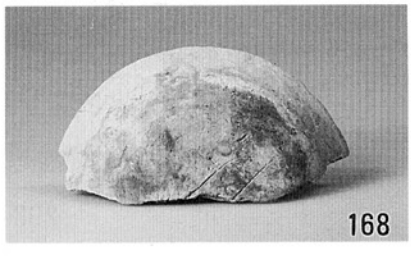
162

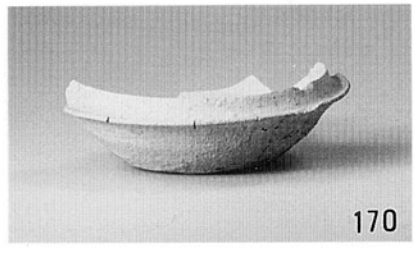

164


168


167

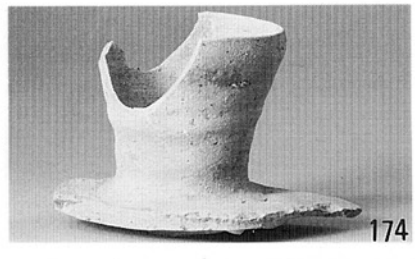

169

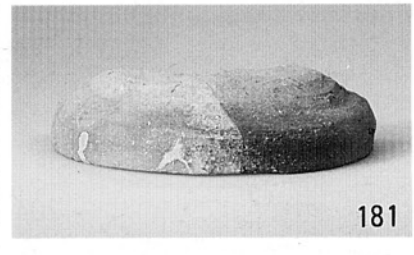

168

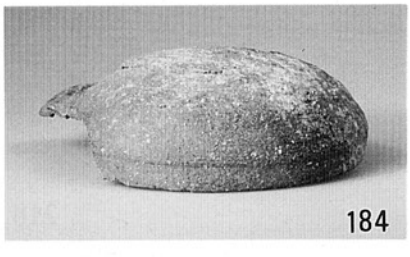

170

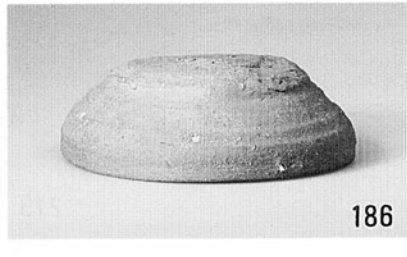
172

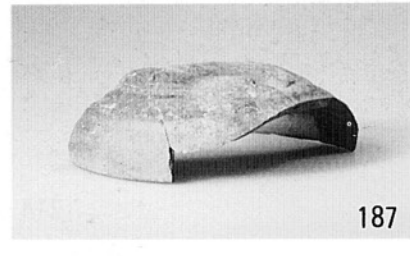
173


174

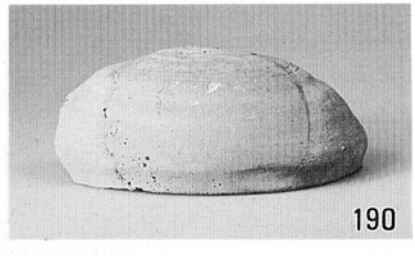

181

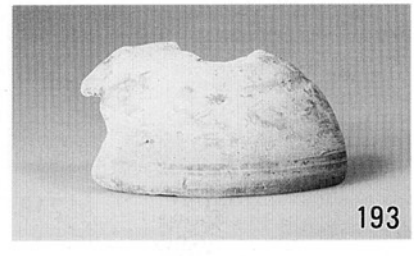

184


186

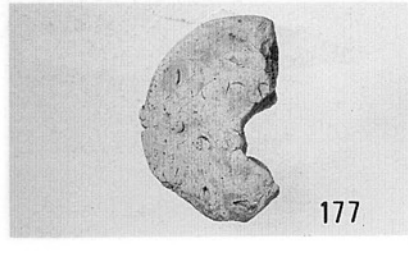

187

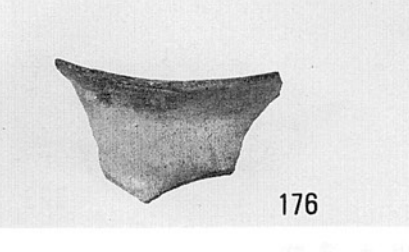
192


190

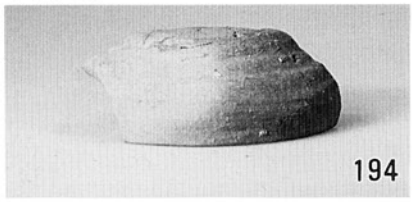

193

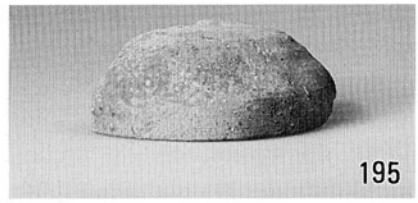
192

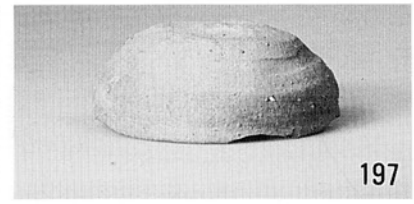

177


176

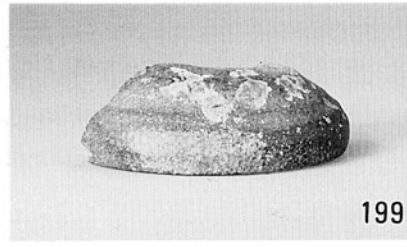
出土遺物

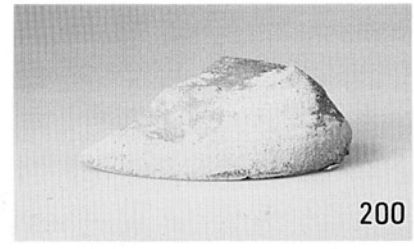

194

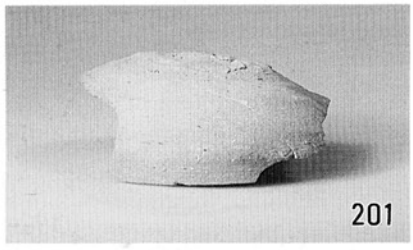

195

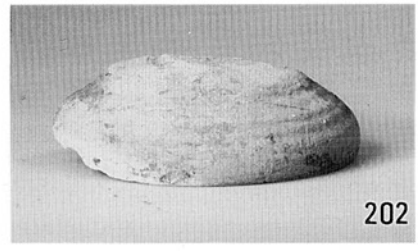

197

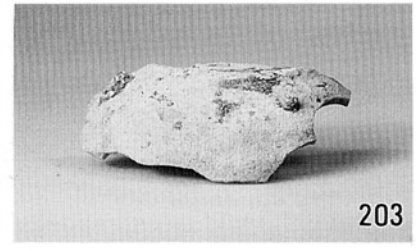
198

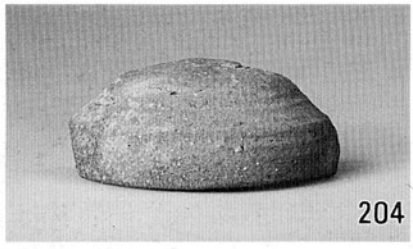

199


200


201

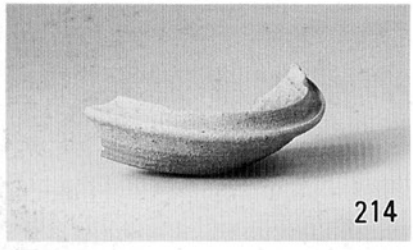

202


203


204

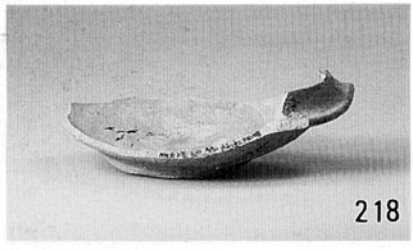
209

211


214

215

216


218

219

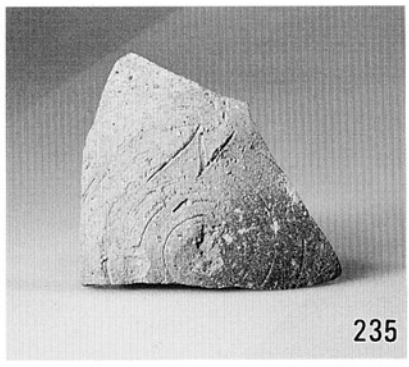
222

223

226

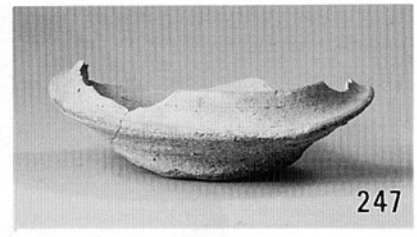
232

出土遺物

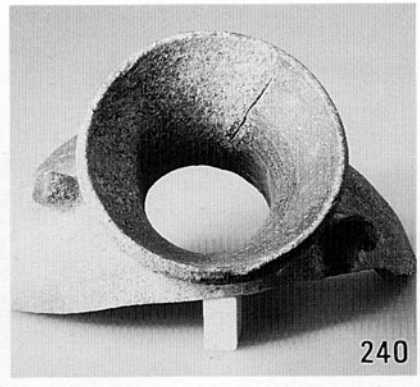

235

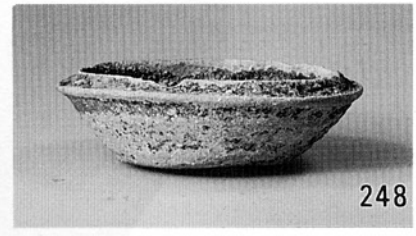
240

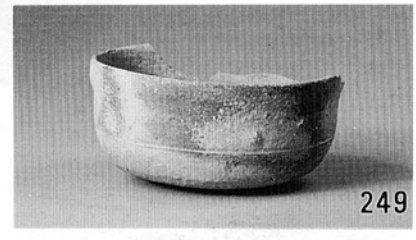
245

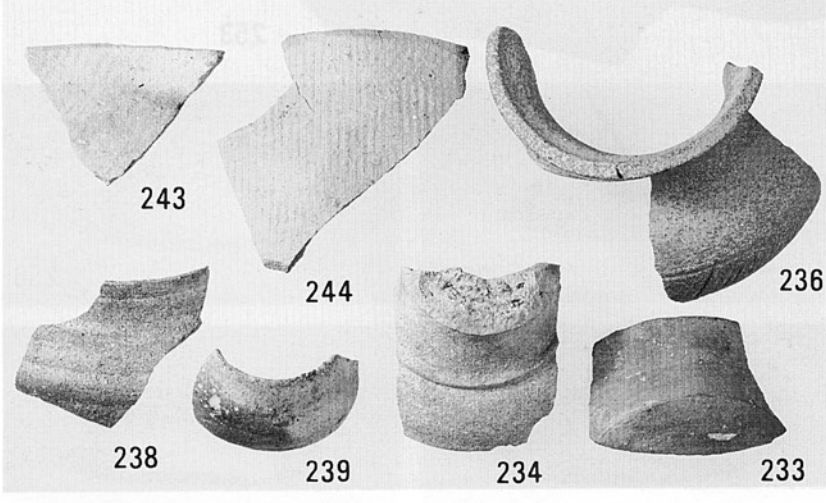

247

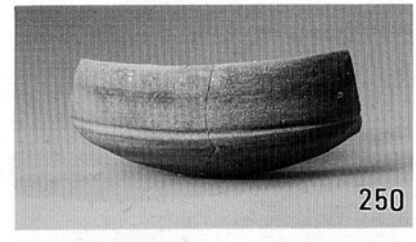
242

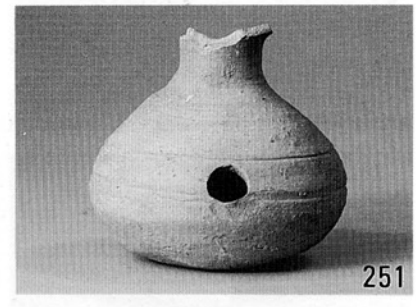

240

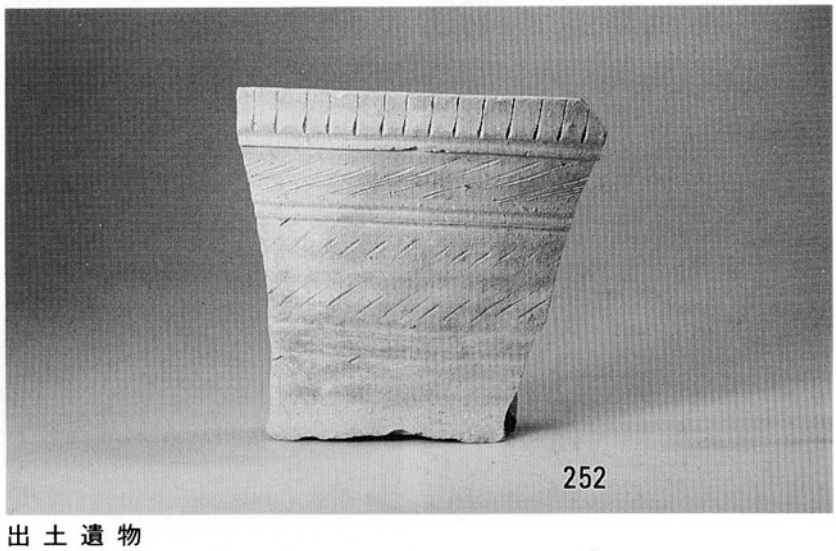

248

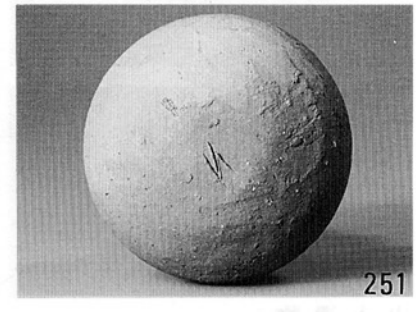

249


243
244
236
238
239
234
233


250


251

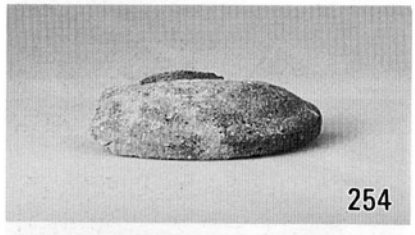

252


251

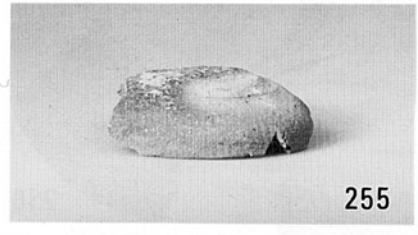
出土遺物

PL. 36

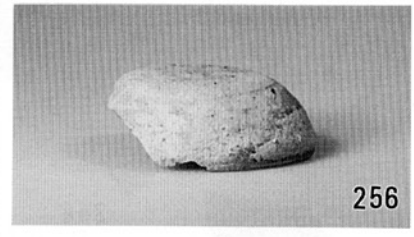
253



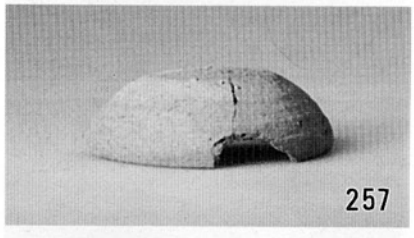
254



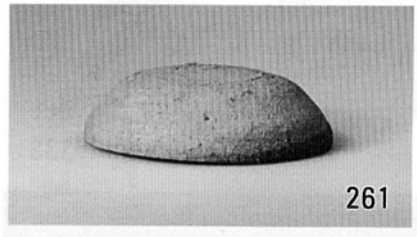
255



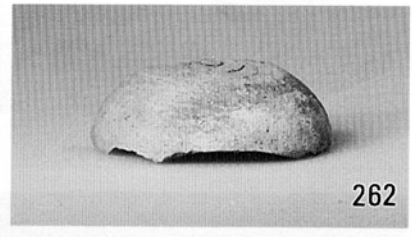
256



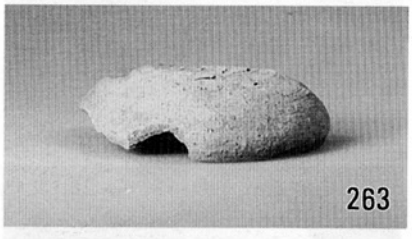
257



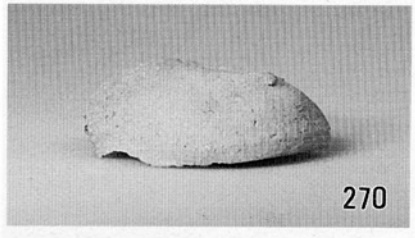
261



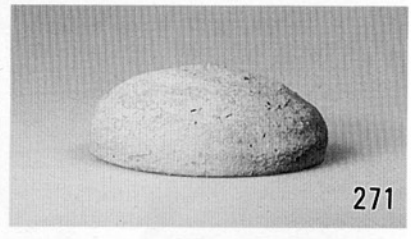
262



263

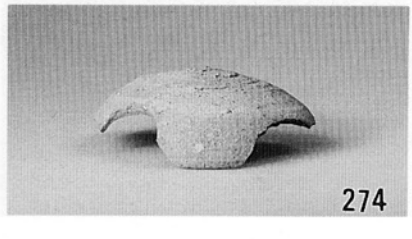


270

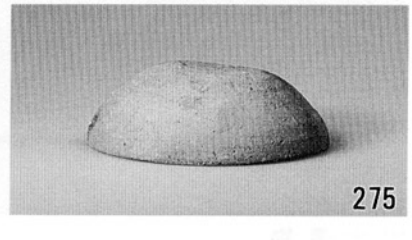


271

273

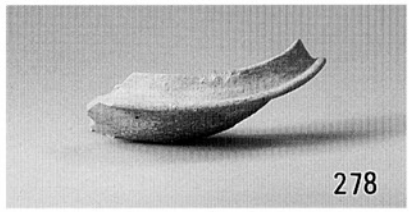


274

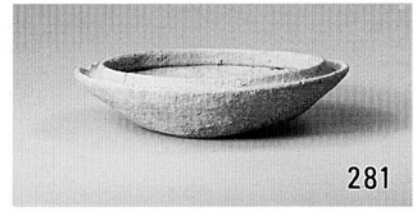


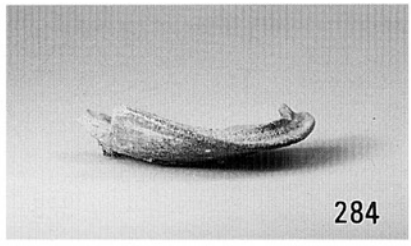
275

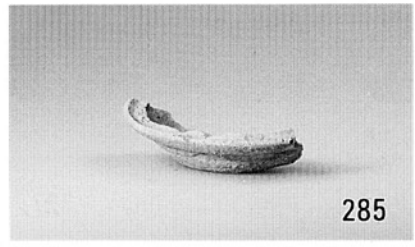
出土遺物


278

280

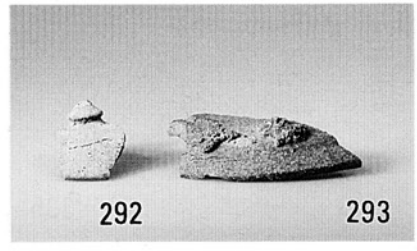

281

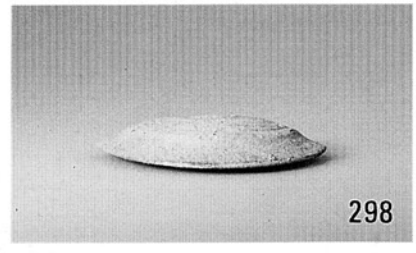

284

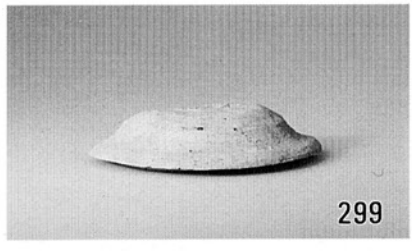

285

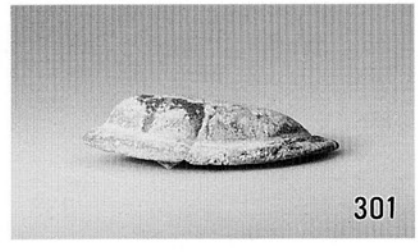
286

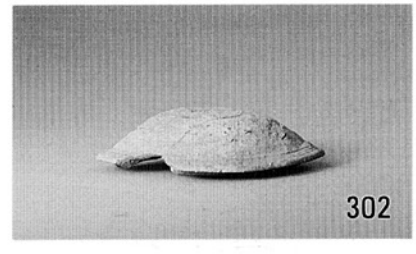
290

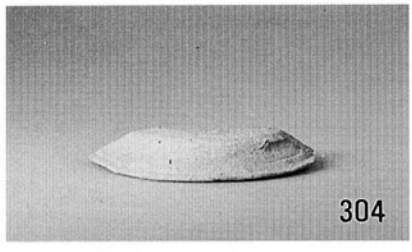

292 293

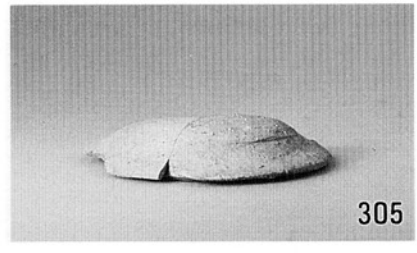

298

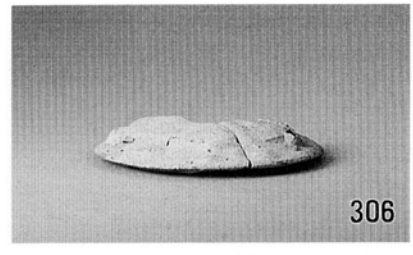

299

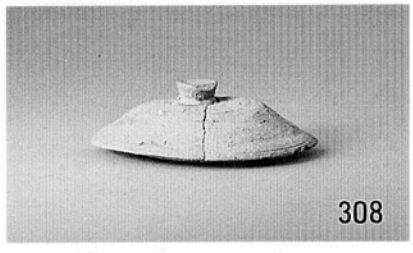

301

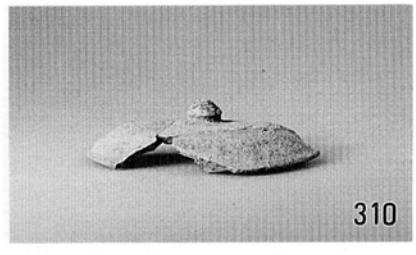

302

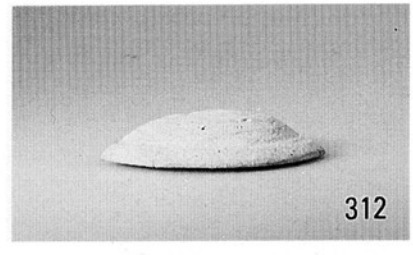

304

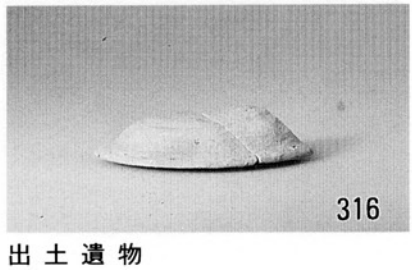

305

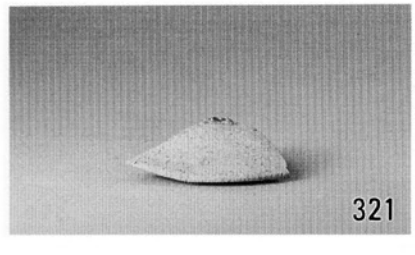

306

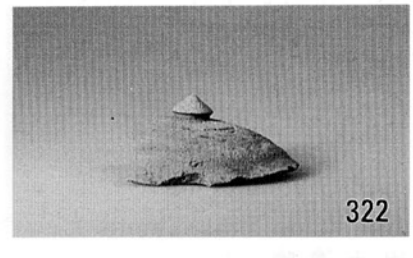

308


310


312

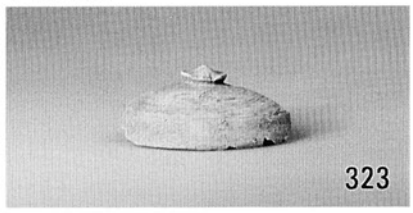

316

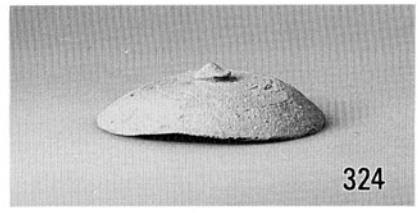

321

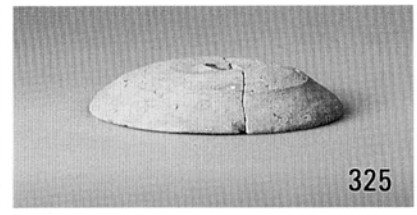

322

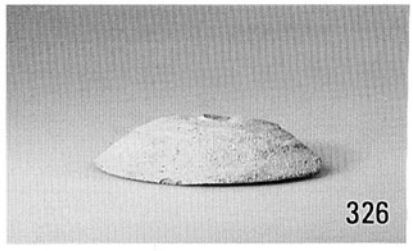
出土遺物

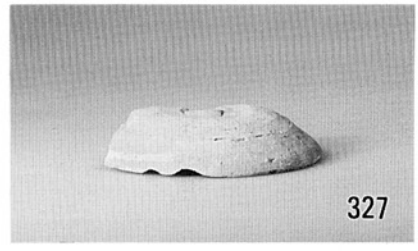
PL. 38

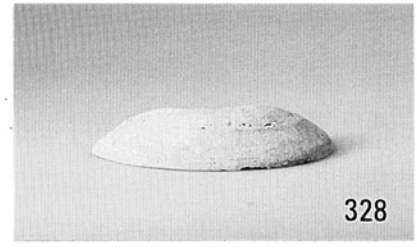

323

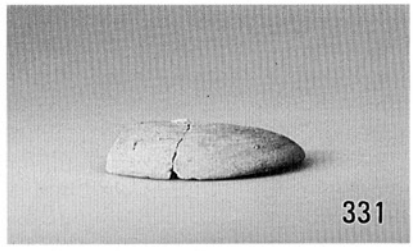

324

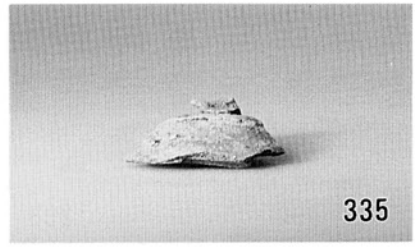

325

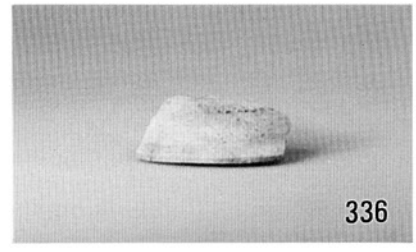

326

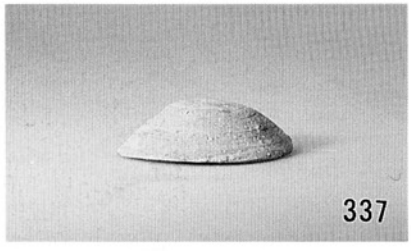

327

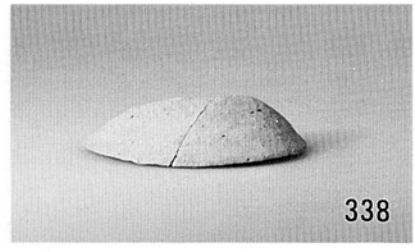

328

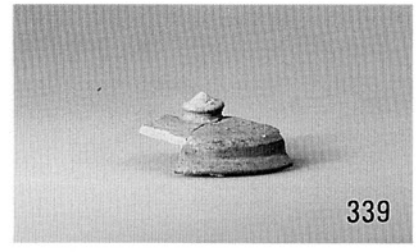

331

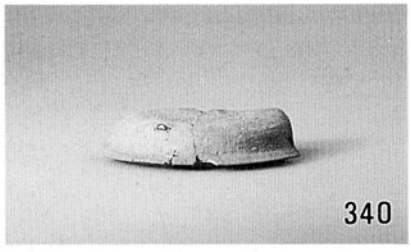

335

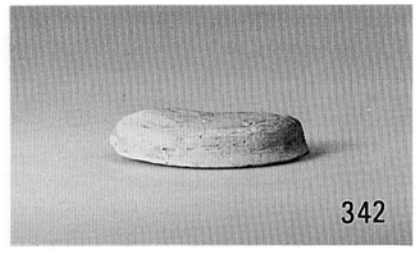

336

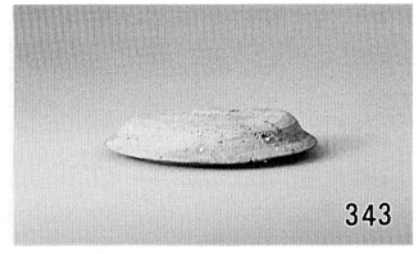

337

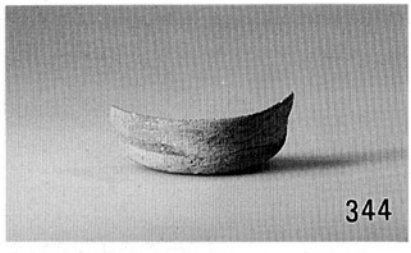

338

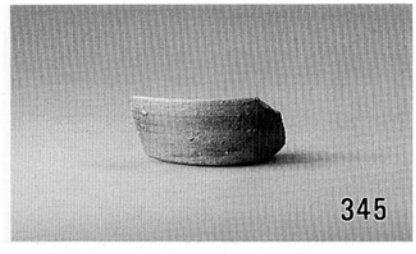

339

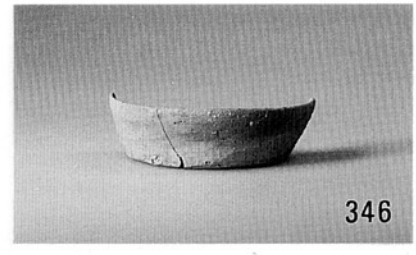

340


342

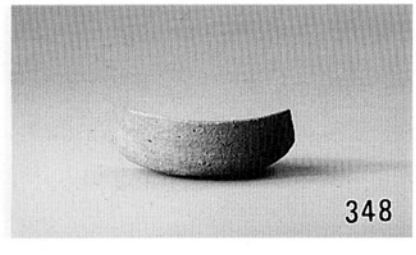

343

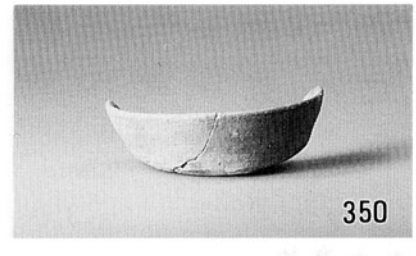

344


345

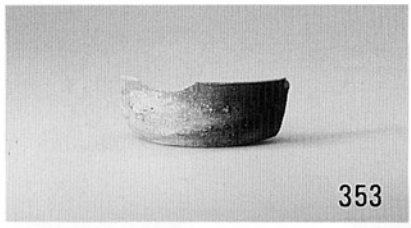

346

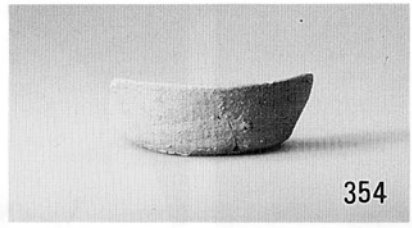
347

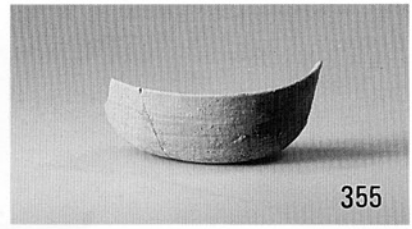

348


350

出土遺物


353

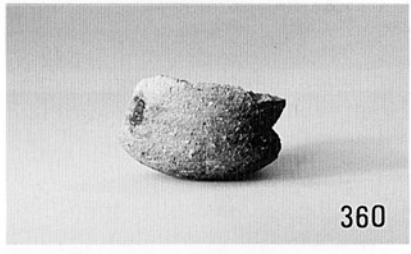

354


355

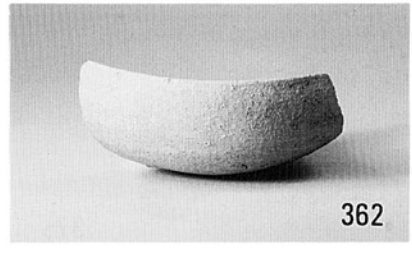
356

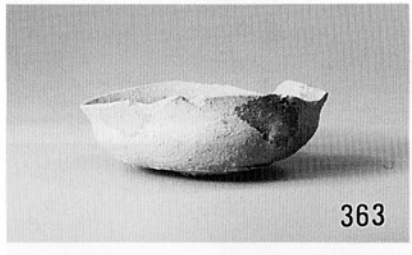
357

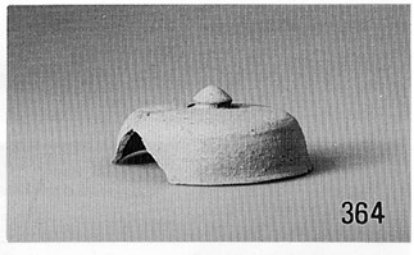
359


360

361


362

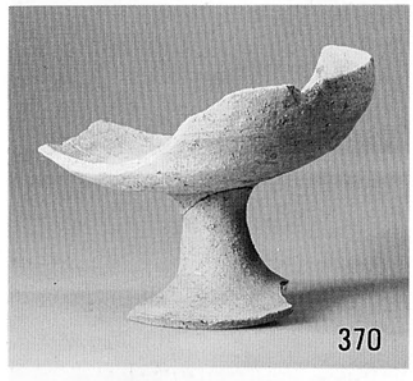

363

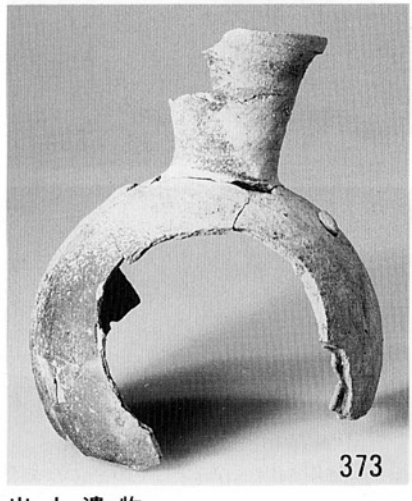

364

369

371

372

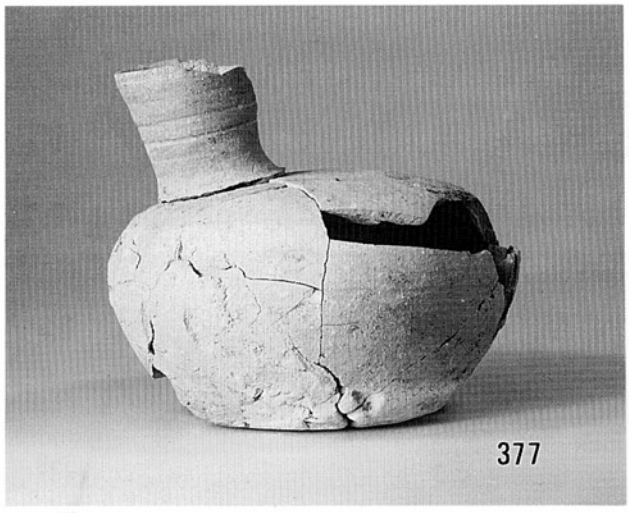

370


373

373

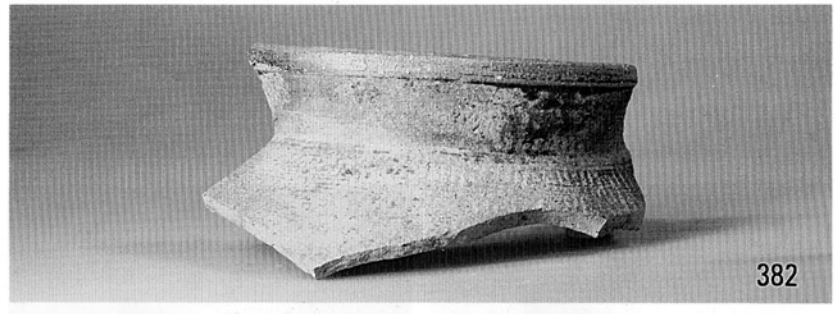
374

出土遺物

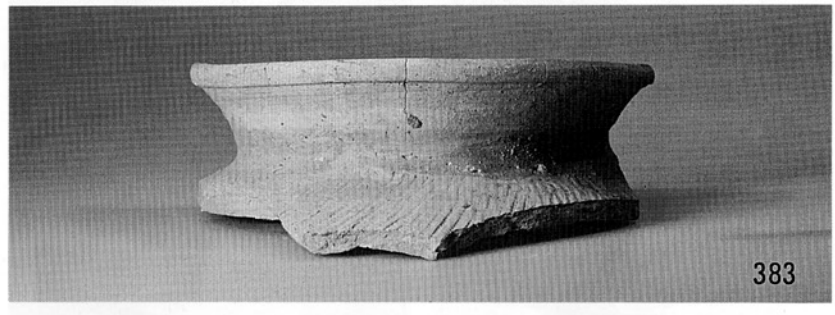

377

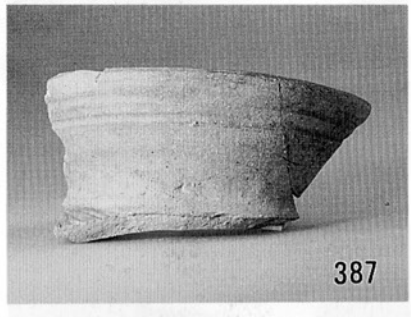
377

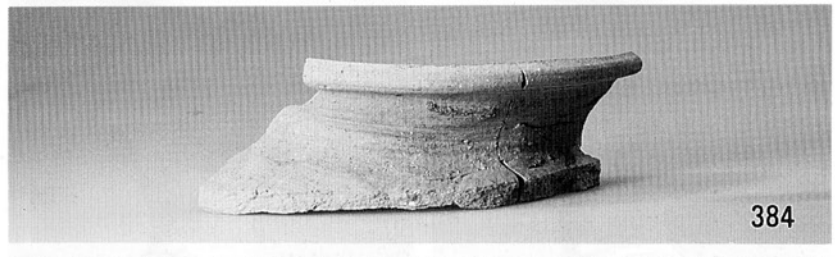
375


382

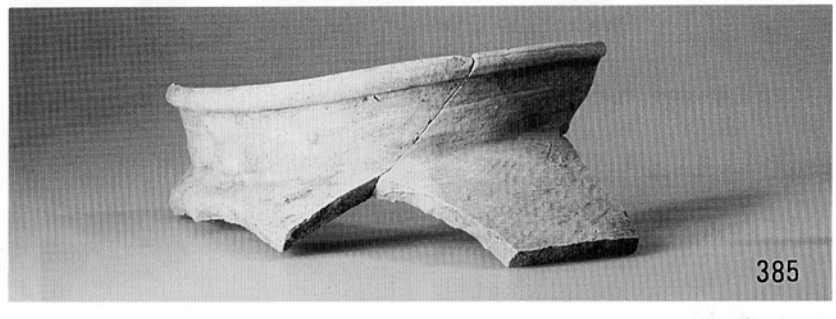
376


383

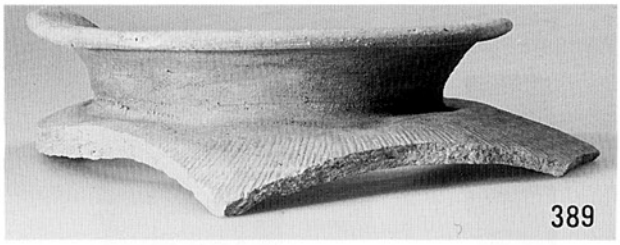

387

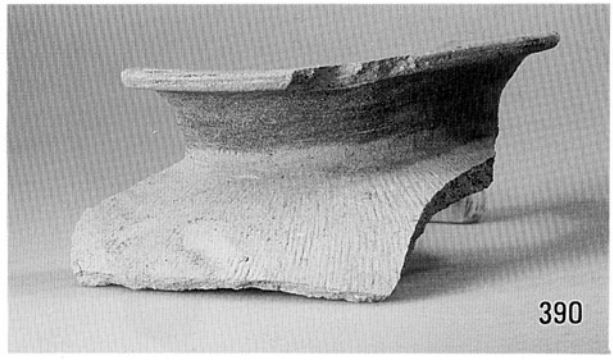

384

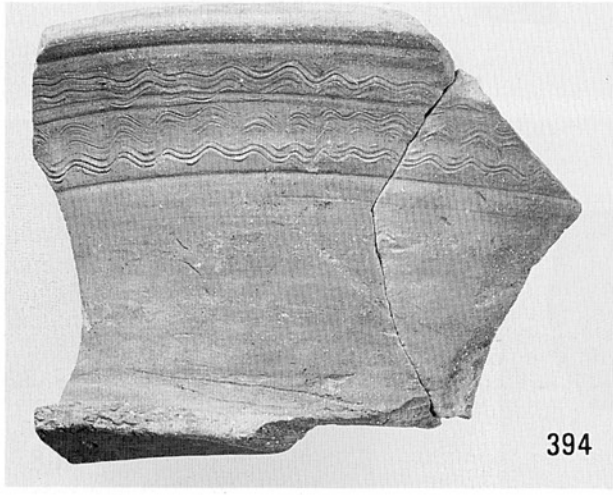
388

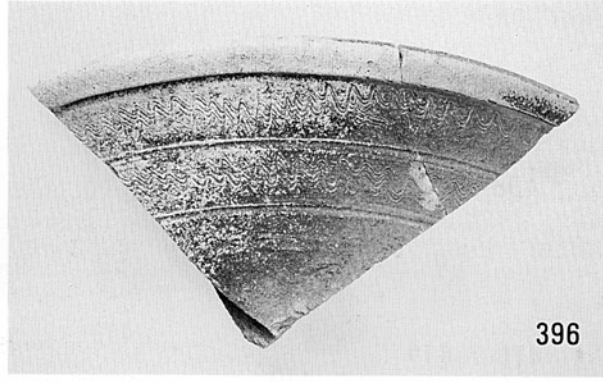

385

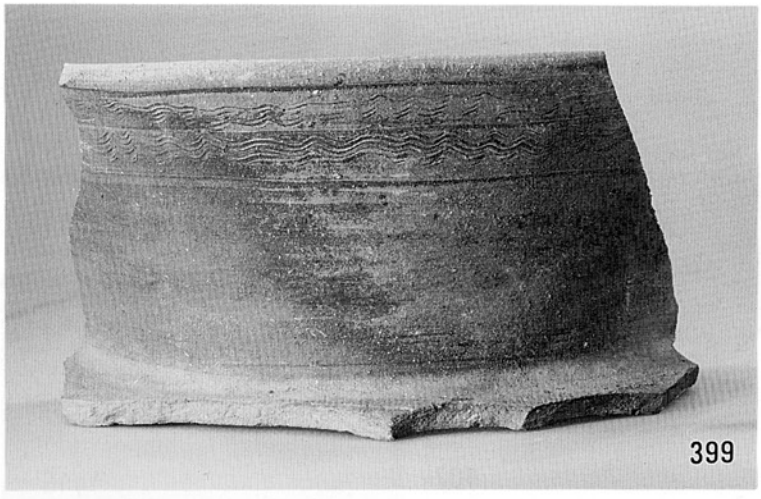
出土遺物

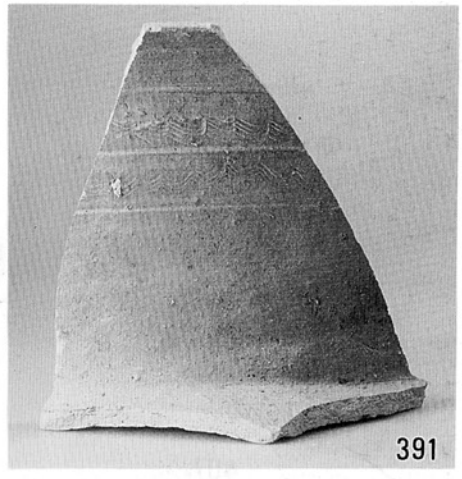

389

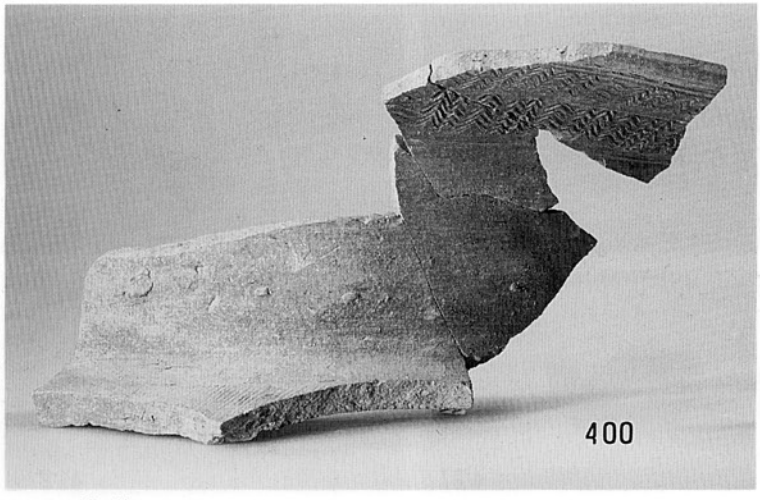

390

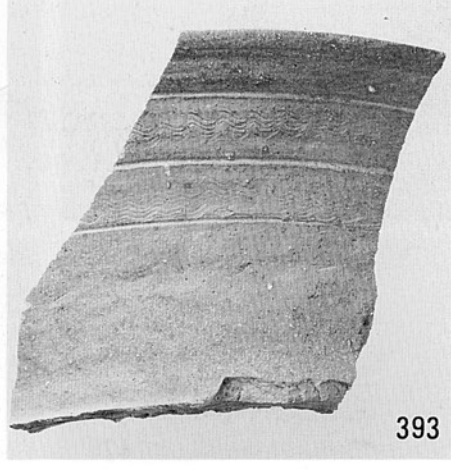

394


396


399

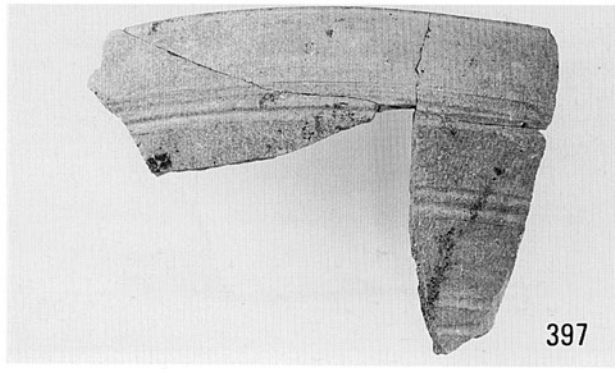

391


400

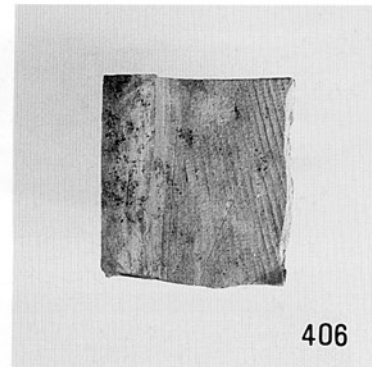

393

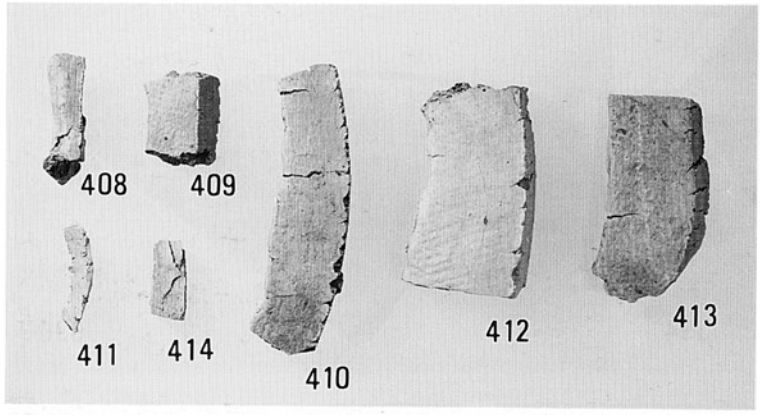
出土遺物

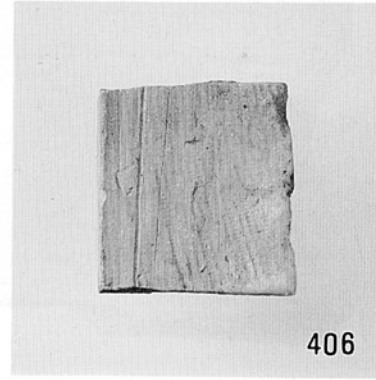
PL. 42

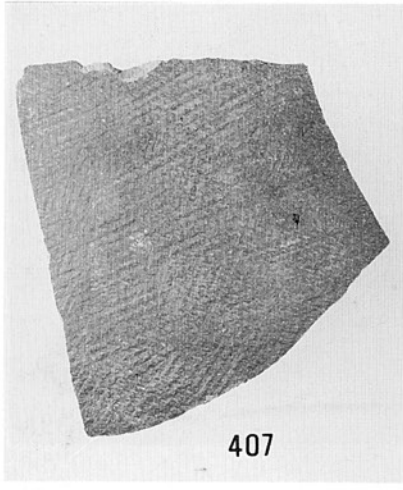

397

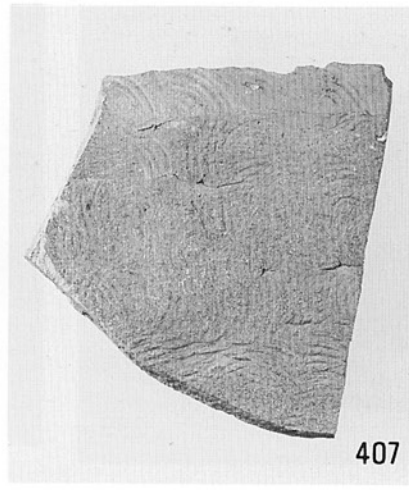
406

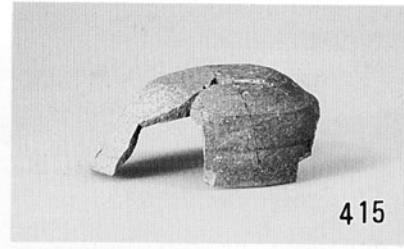

406


408 409 411 414 410 412 413

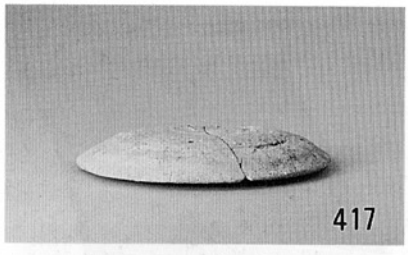

406


407

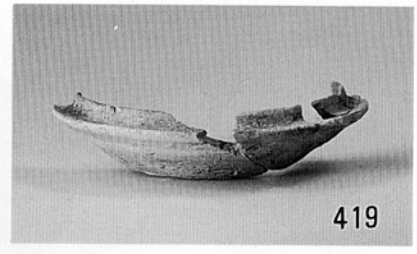

407

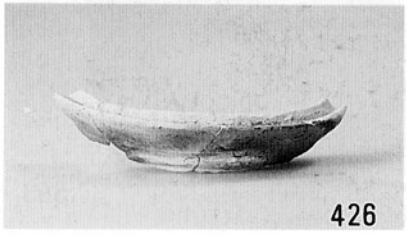

415

416


417

418

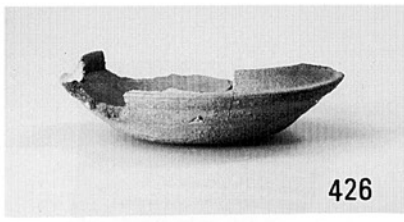

419

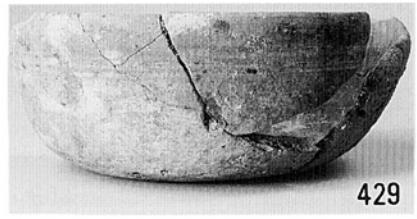

426

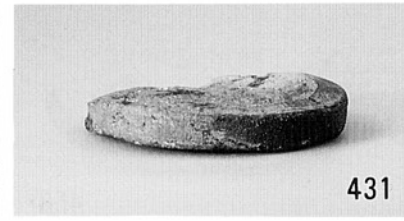
427

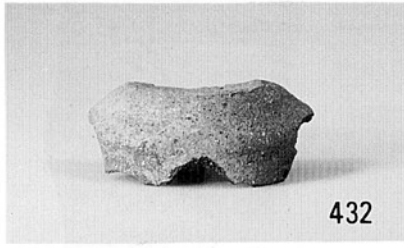
428

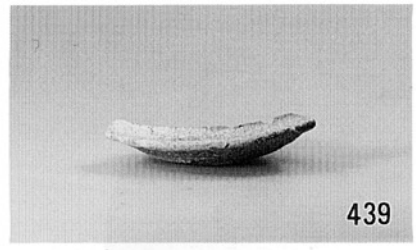
出土遺物

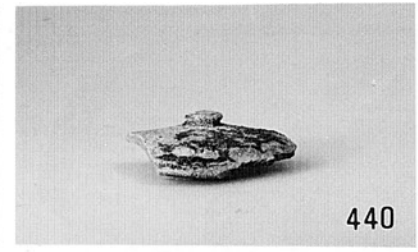

426


429

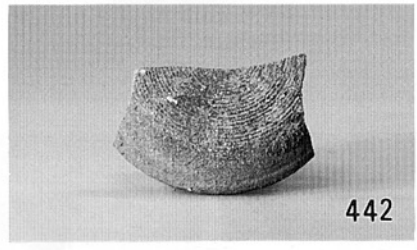

431

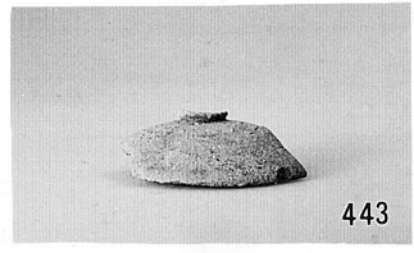

432

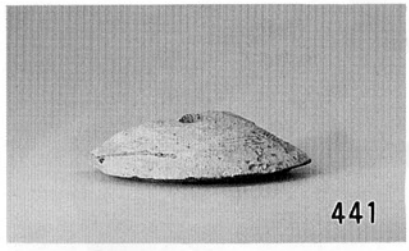

439

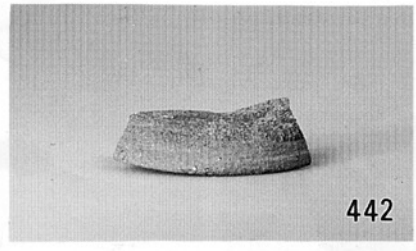

440

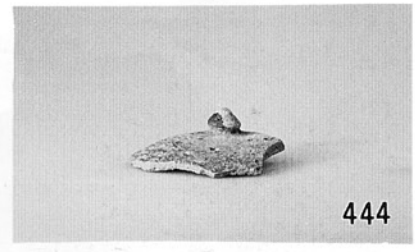
441

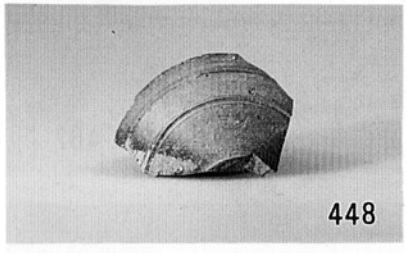

442


443


441


442


444

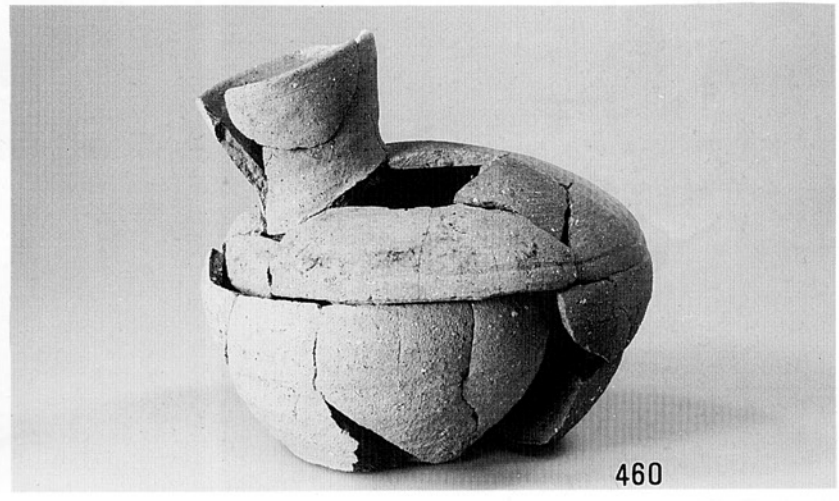

448

452

453

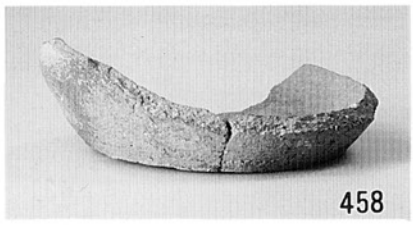
454

457


460

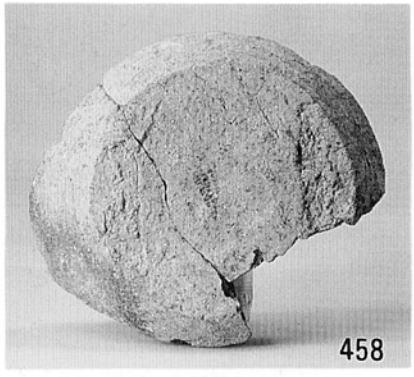
出土遺物

PL. 44


458

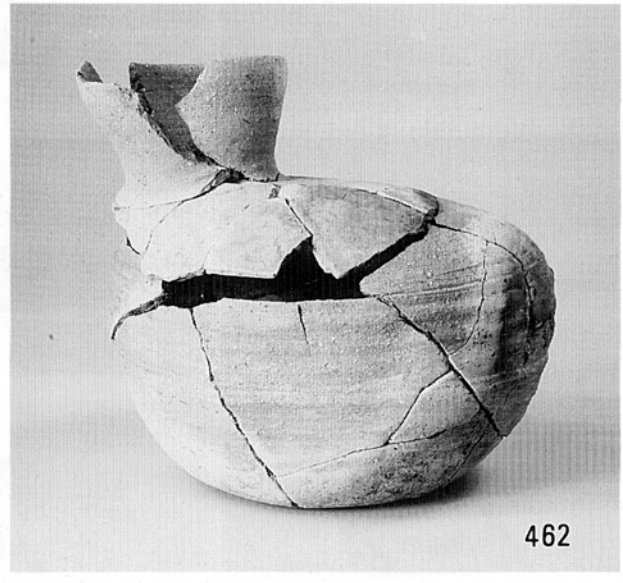
459

466

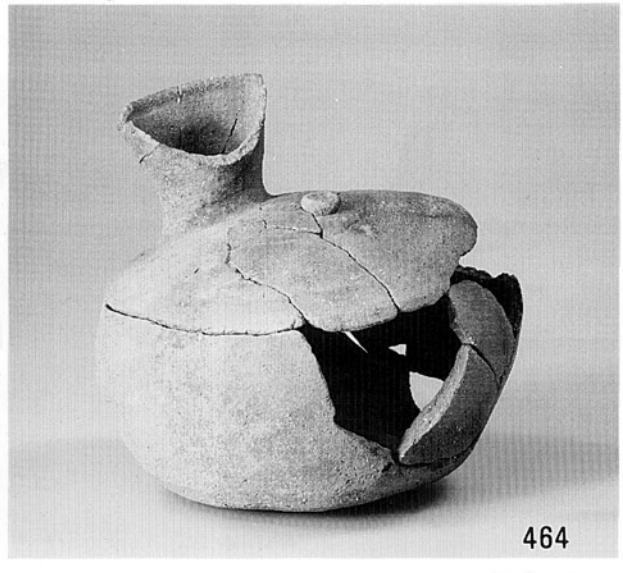

458

459

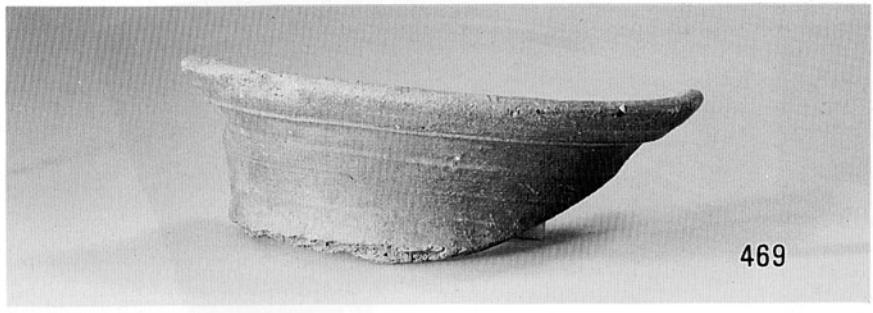
461

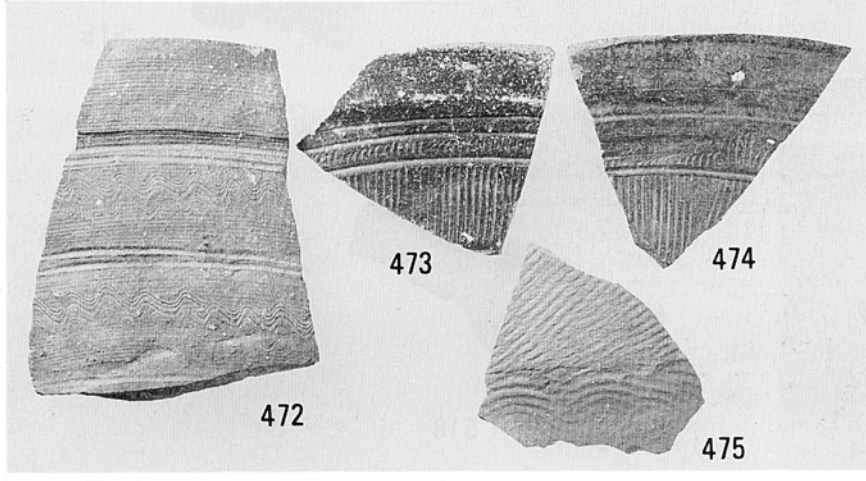

462

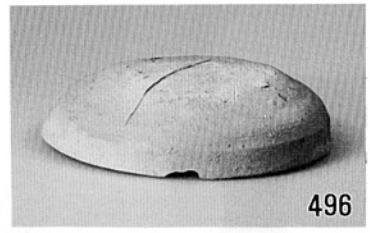
463

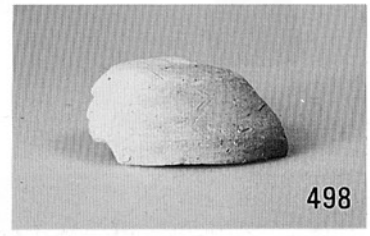

464

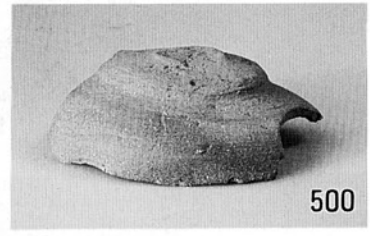
出土遺物

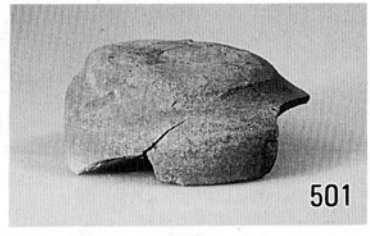


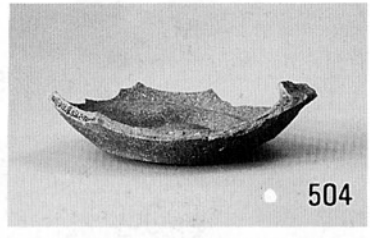




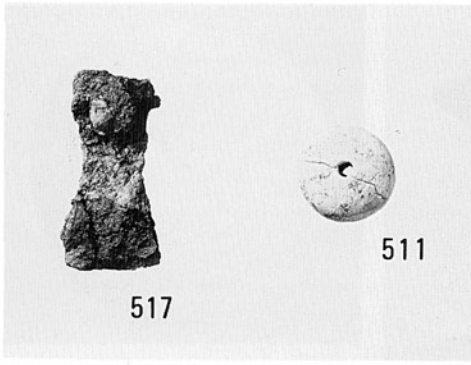


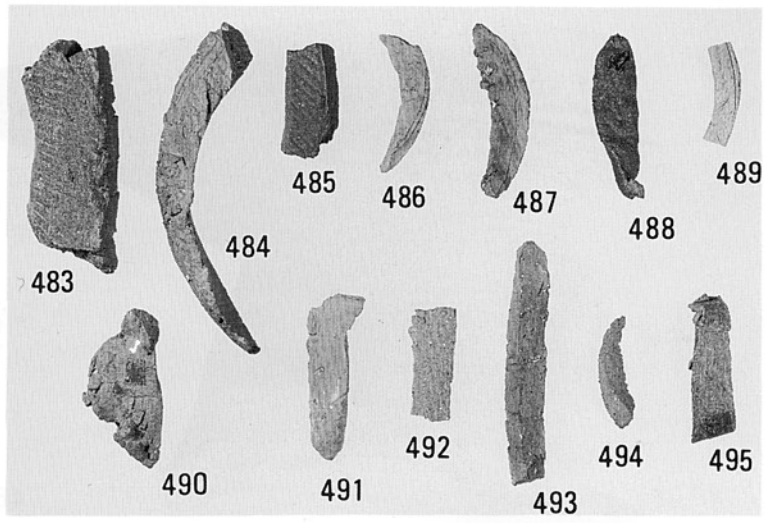


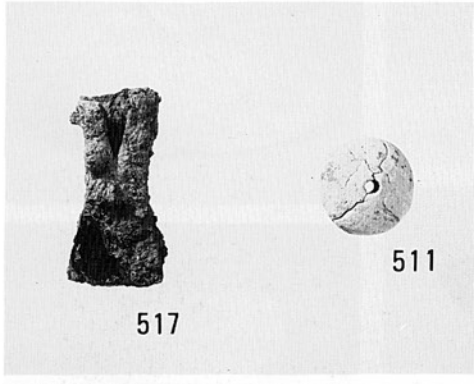




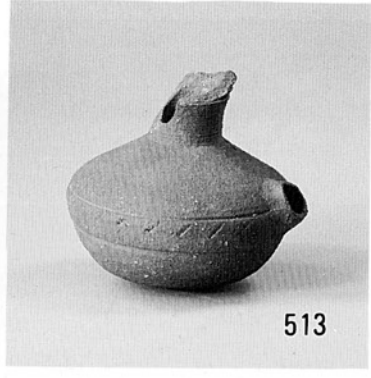
出土遺物

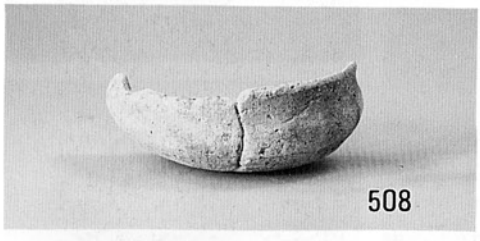

511
517

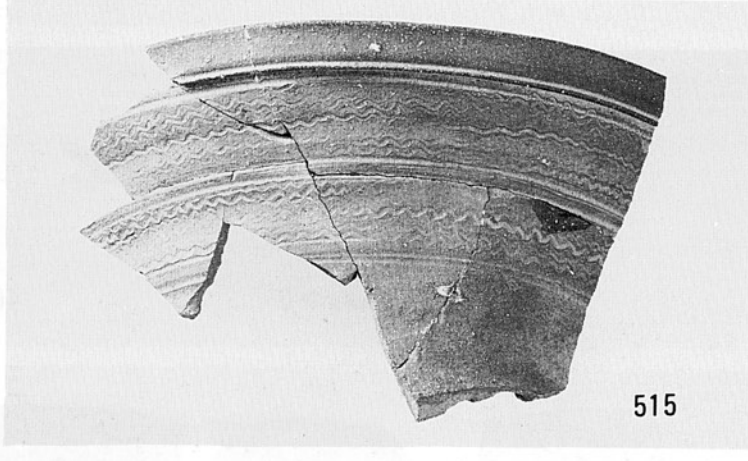

483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495

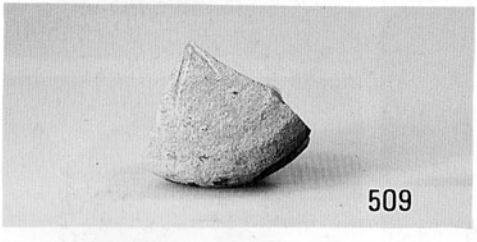

511
517

513


513

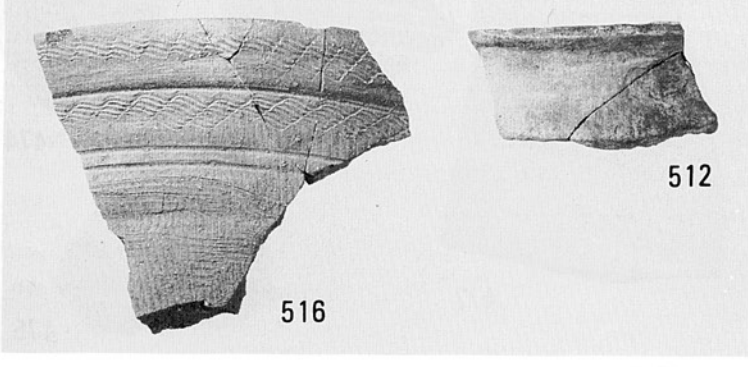

508


515

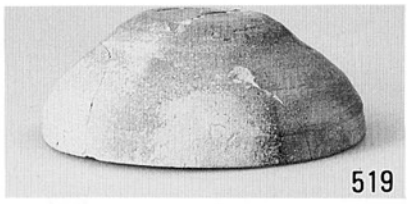

509

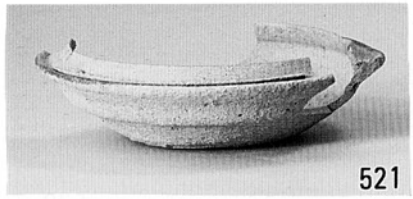
509

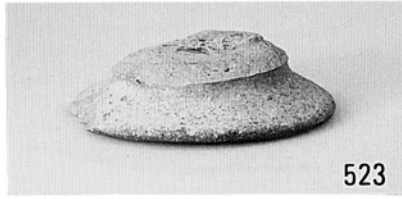
514

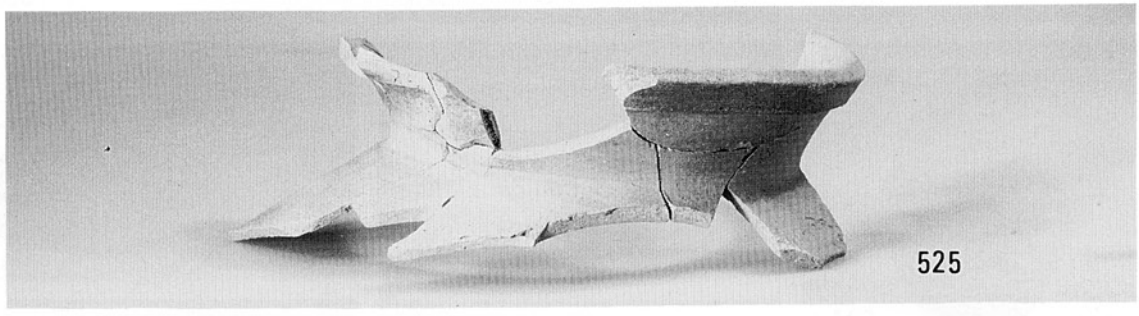

512
516

出土遺物


519


521


523

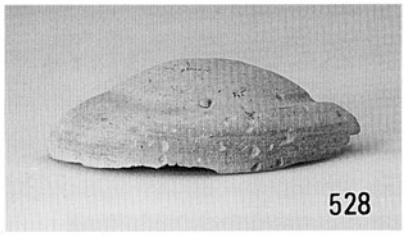

525

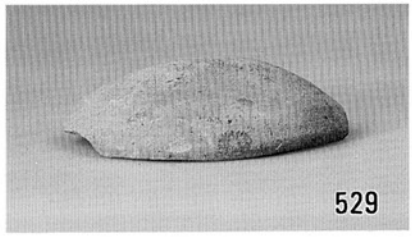
527

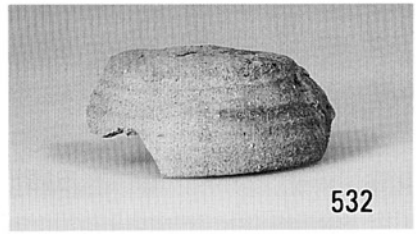
526

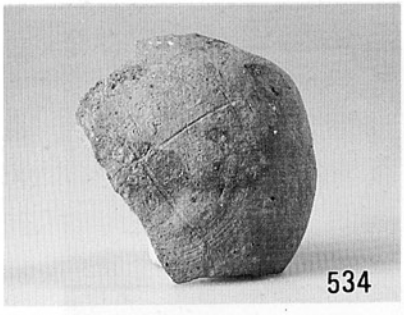
出土遺物

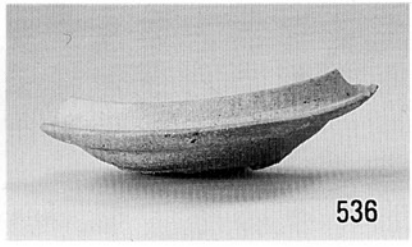
PL. 48

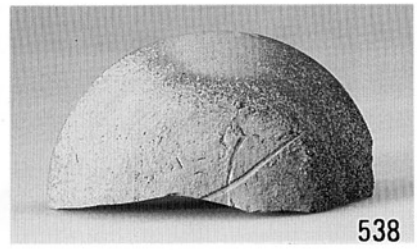

528

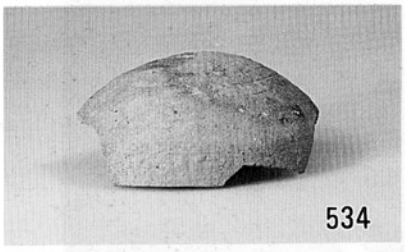

529

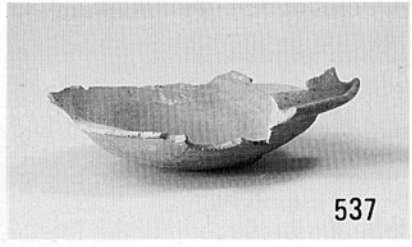

532

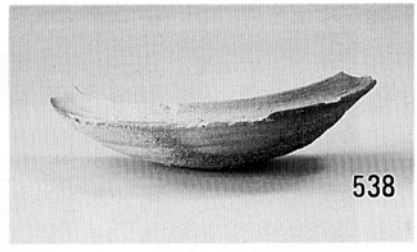

534


536

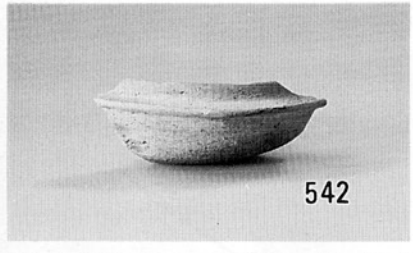

538

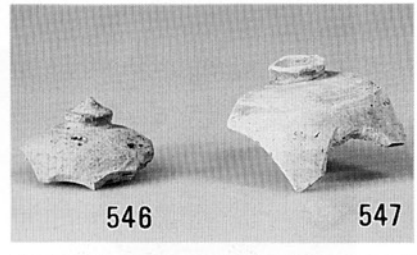

534

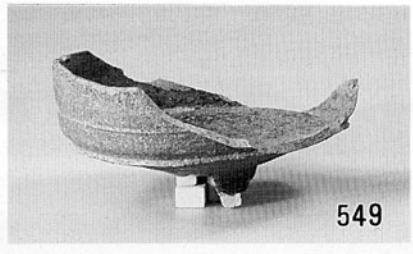

537

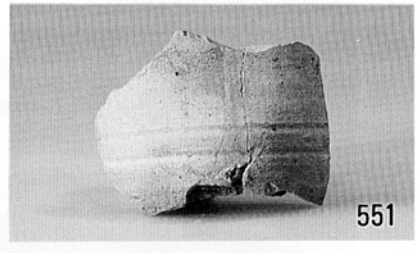

538

548

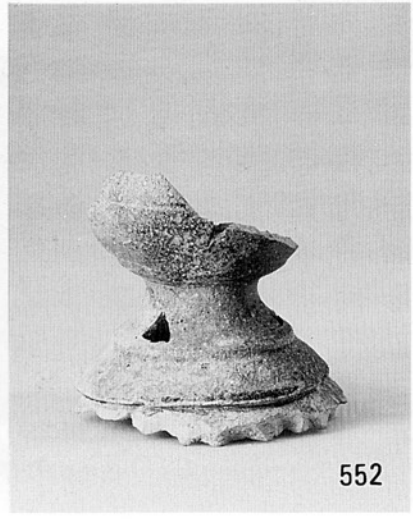

542

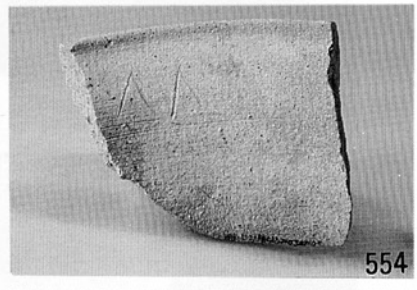

546 547

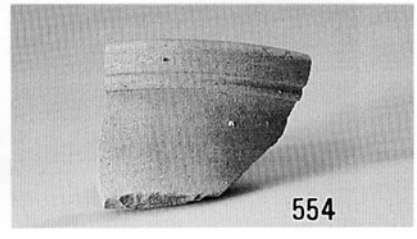

549


551

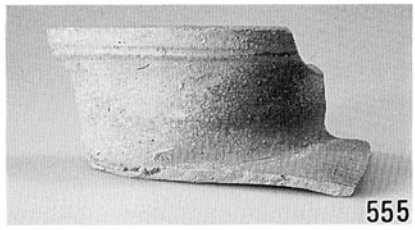
552

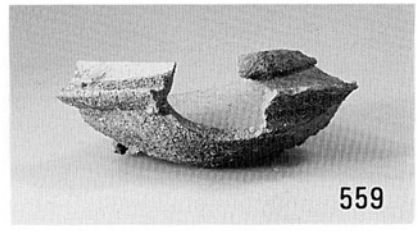

552

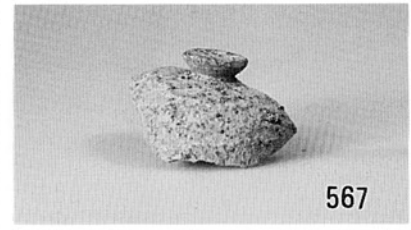

554


554

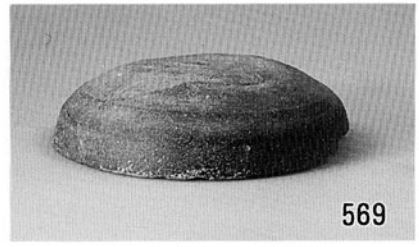
出土遺物

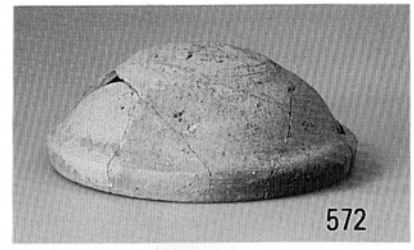

555

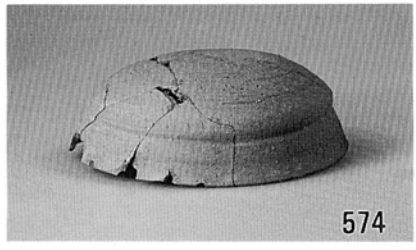

559


567

568


569

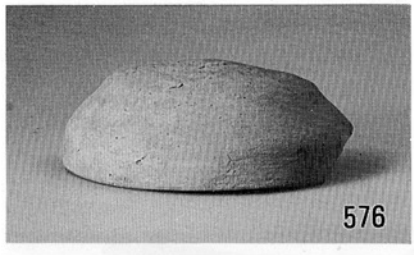

572


574

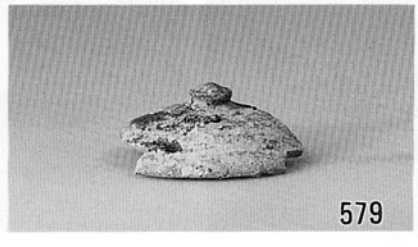
570

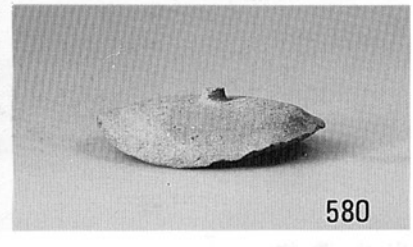
575

571


576

578

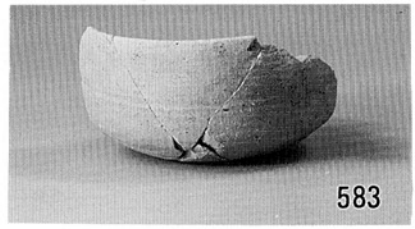

579

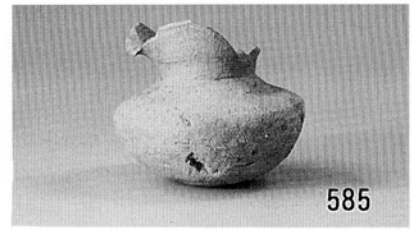

580

出土遺物

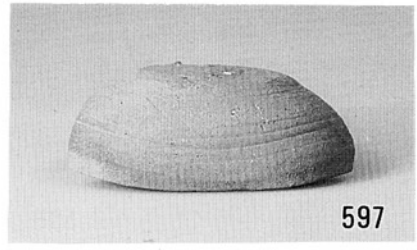
PL. 50

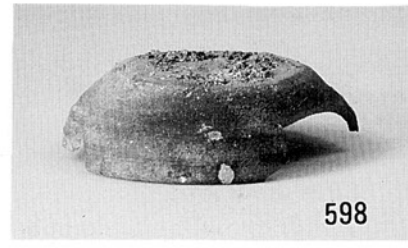
581

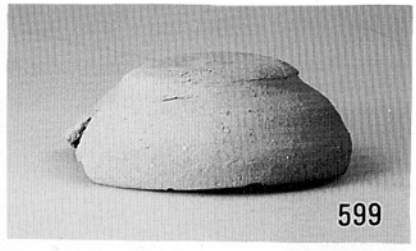

583

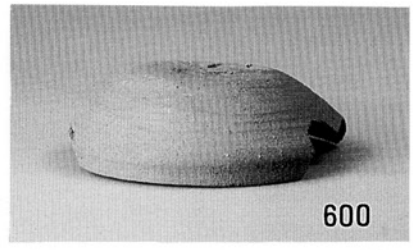

585

590

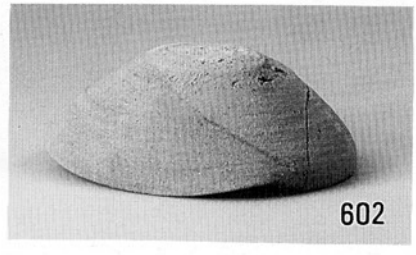

597

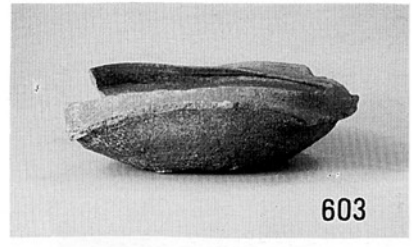

598

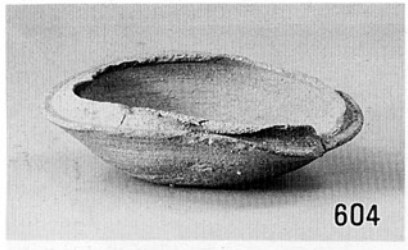

599


600

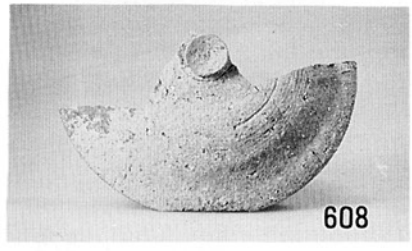
601

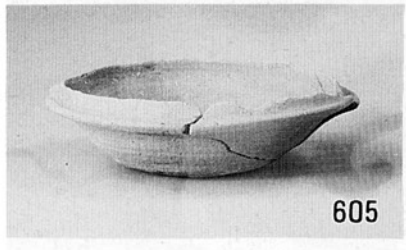

602

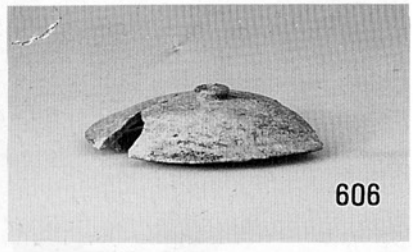

603

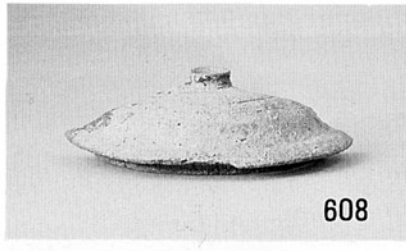

604

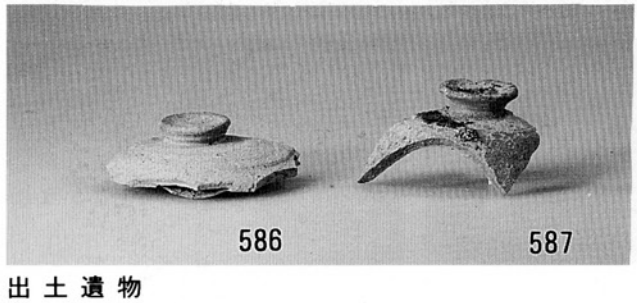
606

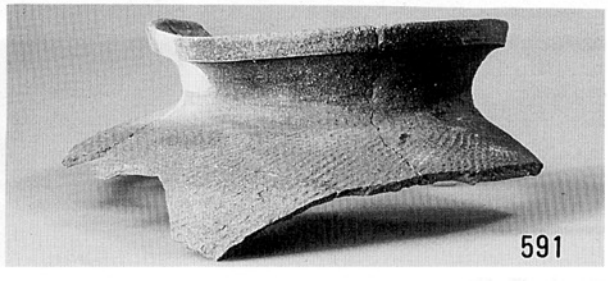

608


605


606


608

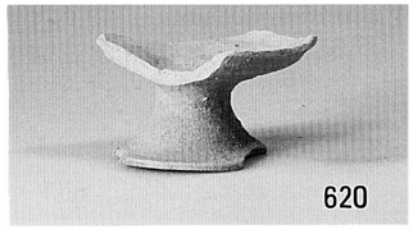

586 587


591

出土遺物

612

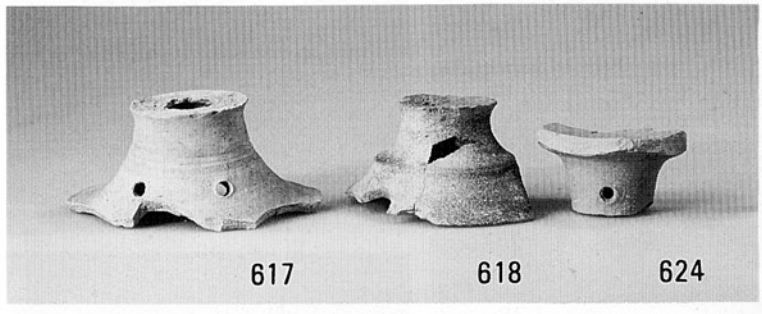
615


620

613

614

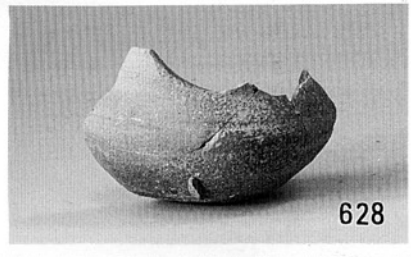
621


617 618 624

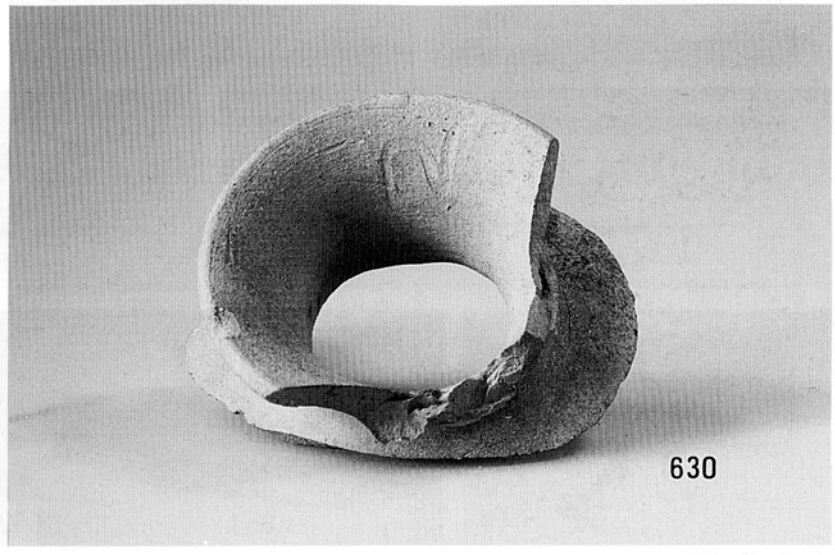
629

622

626

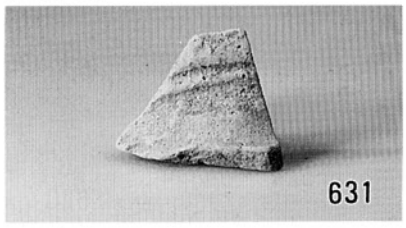

628

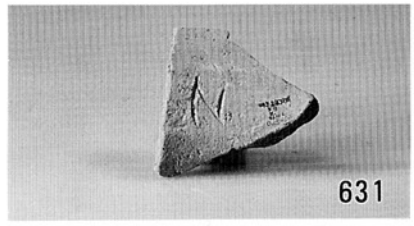
634


630

出土遺物

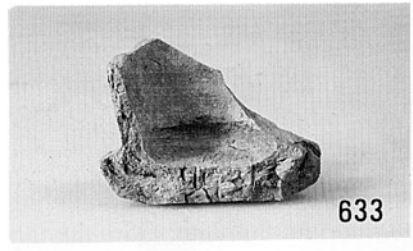
PL. 52

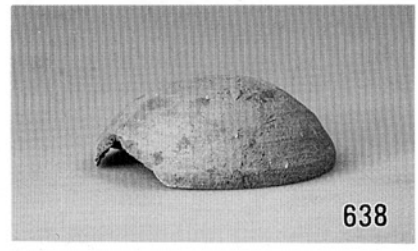

631

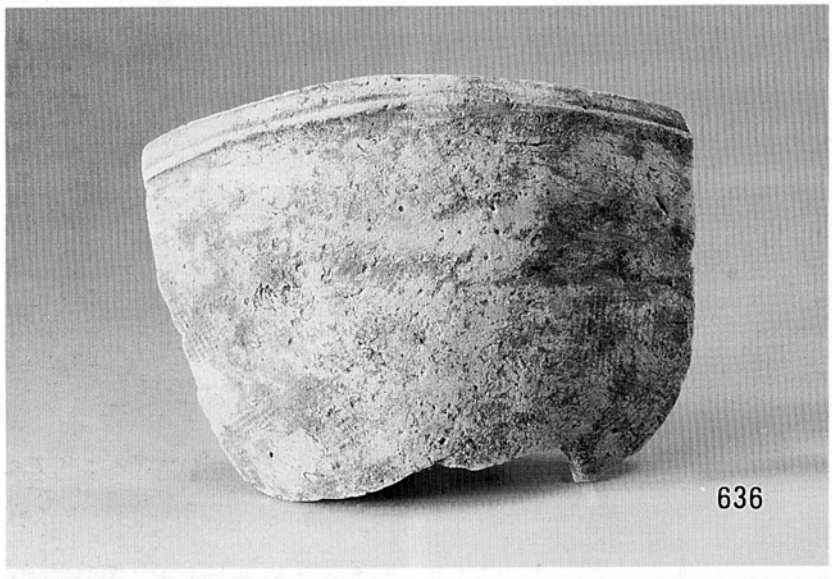

631

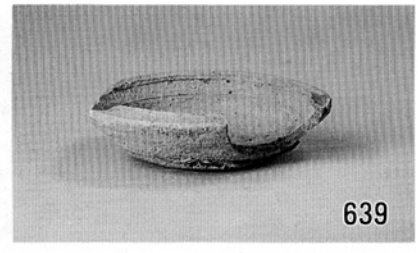
635

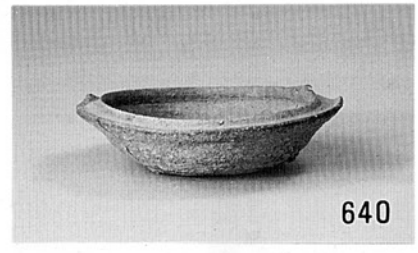
633


633

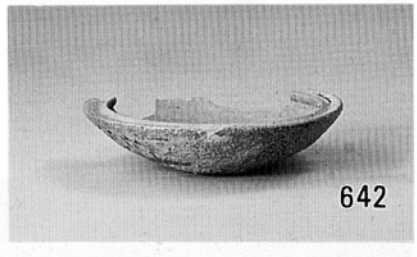

638

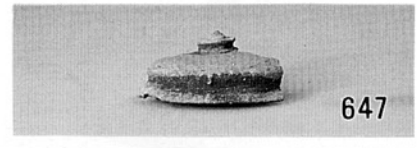

636

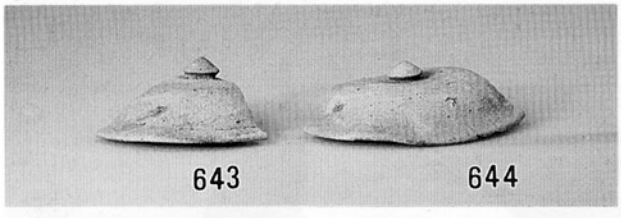

639

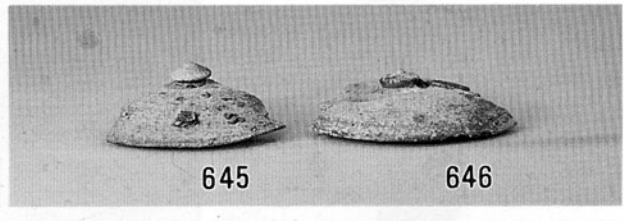

640

641

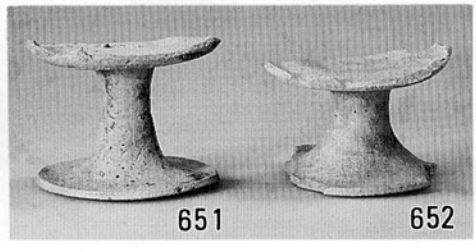

642


647


643 644

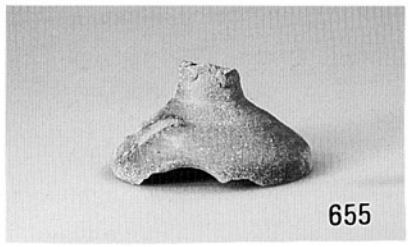

645 646

649

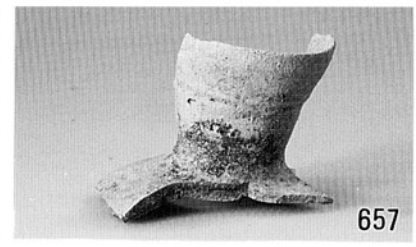

651 652

654

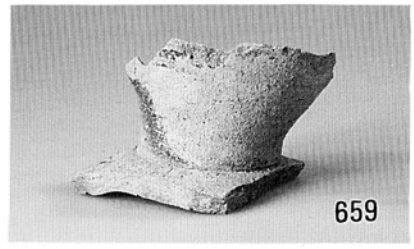
出土遺物


655

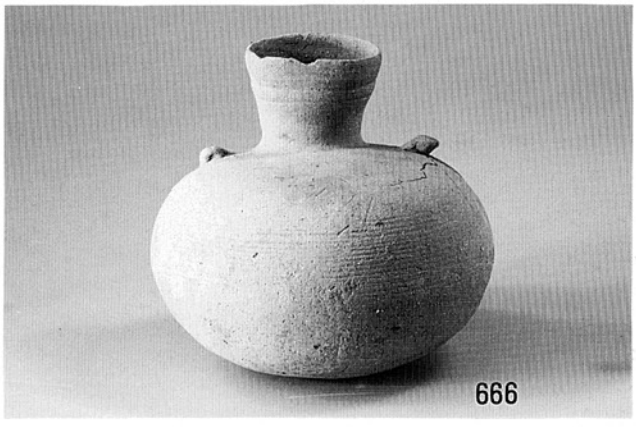
656

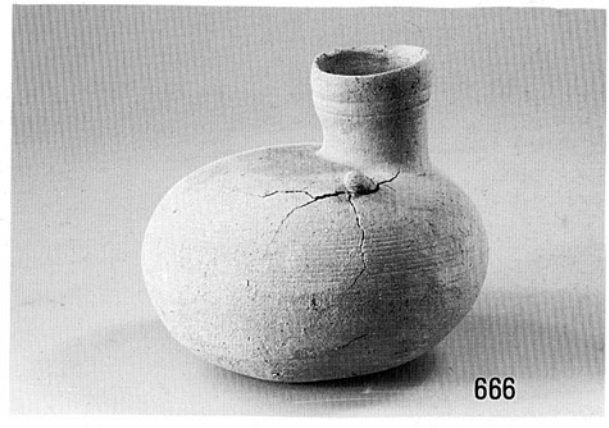

657

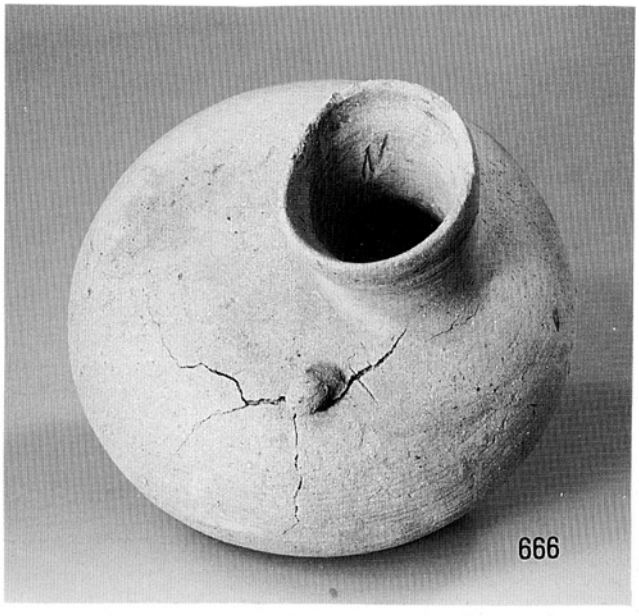
658

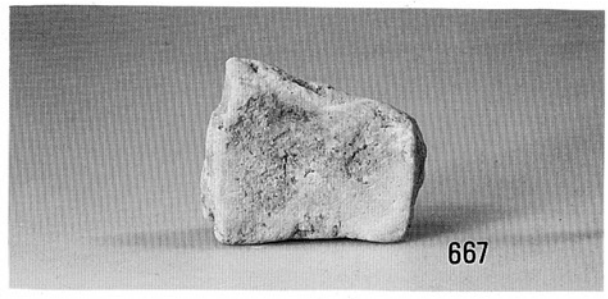

659

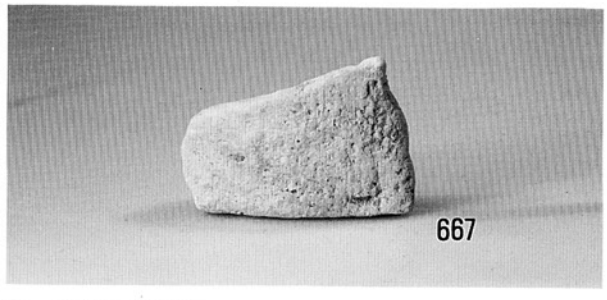
660

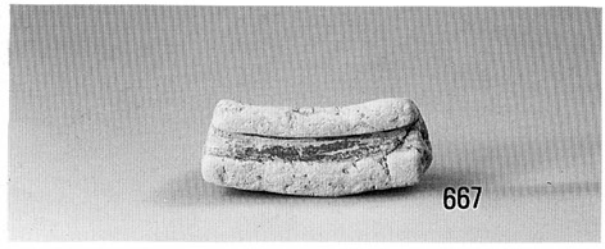

666


666


666


667


667


667

出土遺物

Ⅳ．大日山古墳群

1．周辺の古墳

櫛田川と佐奈川に挟まれ、国道42号線とＪＲ線の通る谷部で南端を区切る丘陵地は、幅の狭い尾根と谷がアメーバ状に入り組んでいる。尾根頂部は標高50～60ｍほどで、周囲の水田との比高が約30ｍである。櫛田川と佐奈川が形成する肥沃な低地からはよく目立つ丘陵地といえる。

この丘陵地、特に櫛田川を見下ろす側には、古墳が点々と造営されている。まず、丘陵地最北端部に黒田山古墳群が所在する。８基の古墳があったともされる[1]が、蜜柑園として開墾されたときいくつか消滅したようである。現在は、直径20ｍ前後の円墳４基をはじめ、推定墳も含めて15基が確認できる。

黒田山の南、宮ノ谷池を挟んだ丘陵上には、宮ノ谷古墳群が知られる。遺跡台帳には６基の円墳の存在が記されているが、地図にはっきりと落とされていないため所在地点については不明確である。実際の踏査では、直下に櫛田川右岸の自然堤防を臨む丘陵西端部の頂に所在する円墳と、丘陵西裾部に所在する半壊した小円墳らしき高まりが見受けられた。なお、前者の周囲には、50cmほどの段をもったテラス状の地形が３カ所ほど見られ、それらが古墳である可能性も否定できない。

宮ノ谷の丘陵と細い尾根で南につながる字名「石山（いしのやま）」の丘陵は現在かなりの範囲蜜柑園となっているが、そこに直径10～18ｍの円墳が６基かたまっている[2]。開墾時にも多量の土器が出土したとのことであるから[3]、もともとは10基近くの古墳の存在が想定される。

石山の尾根の南は、工業団地と住宅団地の造成のため、現在はもともとの丘陵地形は見る影もないが、その工事に先立ち1991年から２年間、多気町教育委員会により発掘調査がなされている。その成果によると、６世紀前半から７世紀前半ごろまでの古墳が17基確認されている[4]。

石塚谷古墳は標高63ｍの丘陵頂部にあり、櫛田川方向（西側）に対しても佐奈川方向（東側）に対しても眺望のきく場所につくられた古墳である。直径30ｍのやや楕円に近い墳丘ということであるが、その規模は、後期の古墳としては多気町内でも最大級である。棺跡が３基検出されているが、そのうちの中心的な棺からは、多数の須恵器に加え轡・雲珠などの馬具、銀象眼を施した大刀などが出土している。この丘陵地で調査された古墳のなかでは、規模でも副葬品の質の点でもトップの古墳といえよう。

この石塚谷古墳の西側の尾根上に大日山古墳群が存在し、さらに幅50ｍほどの谷をへだてて南～西側の丘陵には、明気古墳群、立岡山古墳群の形成を見る。明気古墳群は大きくＡ群とＢ群に分けられるということである。Ａ群は、丘陵頂部に６世紀後半代のやや規模の大きな古墳を築き、同じ尾根もしくはすぐ隣に６世紀末から７世紀初ぐらいの小円墳を配するという在り方をする。明気１号墳の裾にある６号墳や、８号墳の所在する尾根の下方にある７号墳などは、すくなくとも調査時点では墳丘といえるような盛土を持たないものであった。Ｂ群は、一辺10ｍほどの方墳が４基集中しているものであるが、そのうちの３基は表土除去までその存在が全くわからなかったという外観で、また、副葬品も検出されていない。なお、このＢ群のすぐ西側は多気中学校の運動場となっているが、その造成時に出土したとされる須恵器が多気町教育委員会に保管されている。おそらく古墳が何基か存在していたのであろう。さらに興味深いことには、保管されている須恵器の中に、明気窯跡群の出土遺物に多数見られる「Ｎ」字のヘラ記号をつけた蓋体部が存在するのである。同様の土器は、後述するように、今回の大日山古墳群の調査時にも発見されている。

立岡山古墳群は、明気古墳群（Ａ群）の西側の独

立した丘陵に造営されている。6号墳とされている円墳は、6世紀前半に比定される須恵器有蓋高杯や鉄鉗などが出土している。この丘陵地では一番古い古墳となる。

佐奈川に面する丘陵地の東側では、2基よりなる倉懸古墳群が存在する。水田との比高が10mにも満たない低い場所に築かれた古墳であるが、2号墳は径20mの円墳で、頂部表土直下で木棺直葬の埋葬施設が検出されている。

さて、以上のような古墳群に囲まれるようにして所在する大日山古墳群であるが、櫛田川方向に突き出る細い尾根がその造営地となる。尾根最頂部の東側は、工業団地の造成に関わって削平されたが、その際木棺直葬の古墳主体部がみつかり、須恵器や鉄刀などの副葬品が多気町教育委員会に保管された。主体部の位置は、頂部から南に少し下った所で、盛土などの高まりが全く見られなかった場所である。この主体部が大日山1号墳である。出土した須恵器は、陶邑編年II－4段階[5]ぐらいに相当する。

大日山1号墳から西へ160mほどの尾根先端部に、今回調査した2～4号墳が所在する。頂部の標高は53mで、北方の水田との比高は30mほどである。北側斜面は45%ほどの勾配だが、南斜面は垂直に近い感がある。また、西から北方向にかけては櫛田川両岸の低位段丘や氾濫平野がよく眺められるが、南側は明気古墳群のある尾根が見えるに過ぎない。今回の調査古墳は、櫛田川の方向を意識して作られたものということができよう。

大日山の尾根端部は荒蒔地区の土取り場となっており、つい最近まで地元の人達が土を採取していた。「相可町史」[6]には、その場所にかつて古墳があり、頭椎大刀鍔等が出土したという内容の記述がみられるが、残念ながら現在では、そのような遺物の所在等については不明である。

〔註〕

① 遺跡台帳（昭和37年記入）による。

② 6基のうちマウンドのはっきりしたものは4基である。『多気町史　通史』（多気町教育委員会　1992）には、この石山の尾根にある古墳4基についても、宮ノ谷古墳群としてくくっている。遺跡台帳にある宮ノ谷古墳群も、もしかするとこの尾根までその範囲にいれているのかもしれない。しかし、字名の違い、立地尾根の違いなどから、新たに「石山古墳群」を設定する方が望ましいと考えるので、段落を分けて記述した。

③ 土地所有者（西村隆志氏）の話による。

④ 以下、工業団地・住宅団地造成にかかわり発掘調査された「石塚谷古墳」「明気古墳群」「立岡山古墳群」「倉懸古墳群」については、『三重県埋蔵文化財センター年報3』1992、『同　4』1993（三重県埋蔵文化財センター発行）と多気町教育委員会発行の現地説明会資料「多気町　遺跡ニュース」1992による。

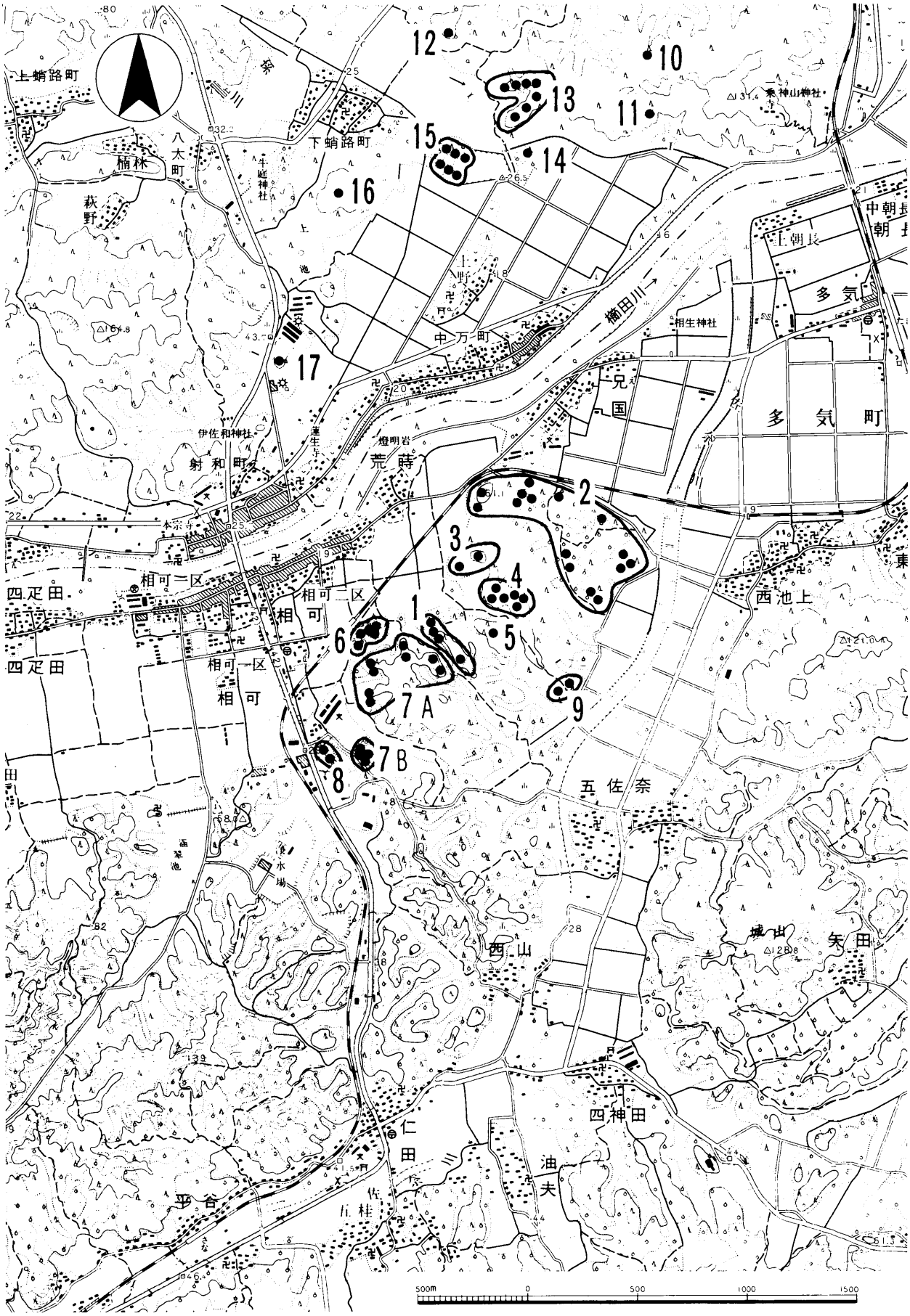
⑤ 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III』大阪府教育委員会　1978

⑥ 大西源一『相可町史』相可町教育委員会　1954

番号	名　称	様　相
1	大日山古墳群	1～4号。1号は木棺直葬の埋葬施設が発見され、鉄刀、須恵器が出土。
2	黒田山古墳群	1～15号。密柑園造成による削平あり。径20m前後のマウンドも残る。
3	宮ノ谷古墳群	1・2号。丘陵頂部に径20mの1号。2号は尾根裾に近い場所で中世墓かも？
4	石山古墳群	1～6号。密柑園のため半壊墳2基。東の2基はマウンド低く自然地形かも？
5 *	石塚谷古墳	直径30m。木棺跡3基（墓壙は2）。銀象眼大刀など豊富な副葬品（6c後半）。
6 *	立岡山古墳群	1～4号・6号。6号発掘調査径16、木棺跡、鉄鉗・器台片・有蓋高杯（6c前半）。
7A *	明気古墳群A	1～8号。円墳。木棺直葬（1・2・4～6・8号）。須恵器・馬具・耳環・玉類。
7B *	明気古墳群B	12～15号。方墳。12号は2基の木棺跡、炭化棺材が残る。
8	中尾古墳群	1・2号。円墳。1号径14.5m。2号径19m。
9 *	倉懸古墳群	1・2号。円墳。1号中央に大きな盗掘坑。2号木棺跡2基、須恵器・鉄刀。
10	長谷古墳	円墳、径15.5、横穴式石室・玄室長4m・幅1.2m・片袖・南に開口。
11	弁天窟古墳	横穴式石室が南に開口、現状で石室全長8.4m、玄室長4.8m・幅2.4m、片袖。
12	片田古墳	痕跡墳、須恵器片と埴輪片が付近から採取されている。
13	中万大谷古墳群	1～7号墳。円or楕円。径12～25m。3号墳横穴式石室、盗坑。
14	射原垣内古墳	円墳、径18m、盗掘坑。
15	尾だけ古墳群	1～7号墳。密柑園造成のための削平をうけている。5号墳から須恵器杯身出土。
16	岡山古墳	円墳、径11.3m、頂部に盗掘坑。
17 *	朱中古墳	痕跡墳。樽形瑕片・円筒埴輪片。

第24表　大日山古墳群周辺の古墳

＊は発掘調査がなされたもの



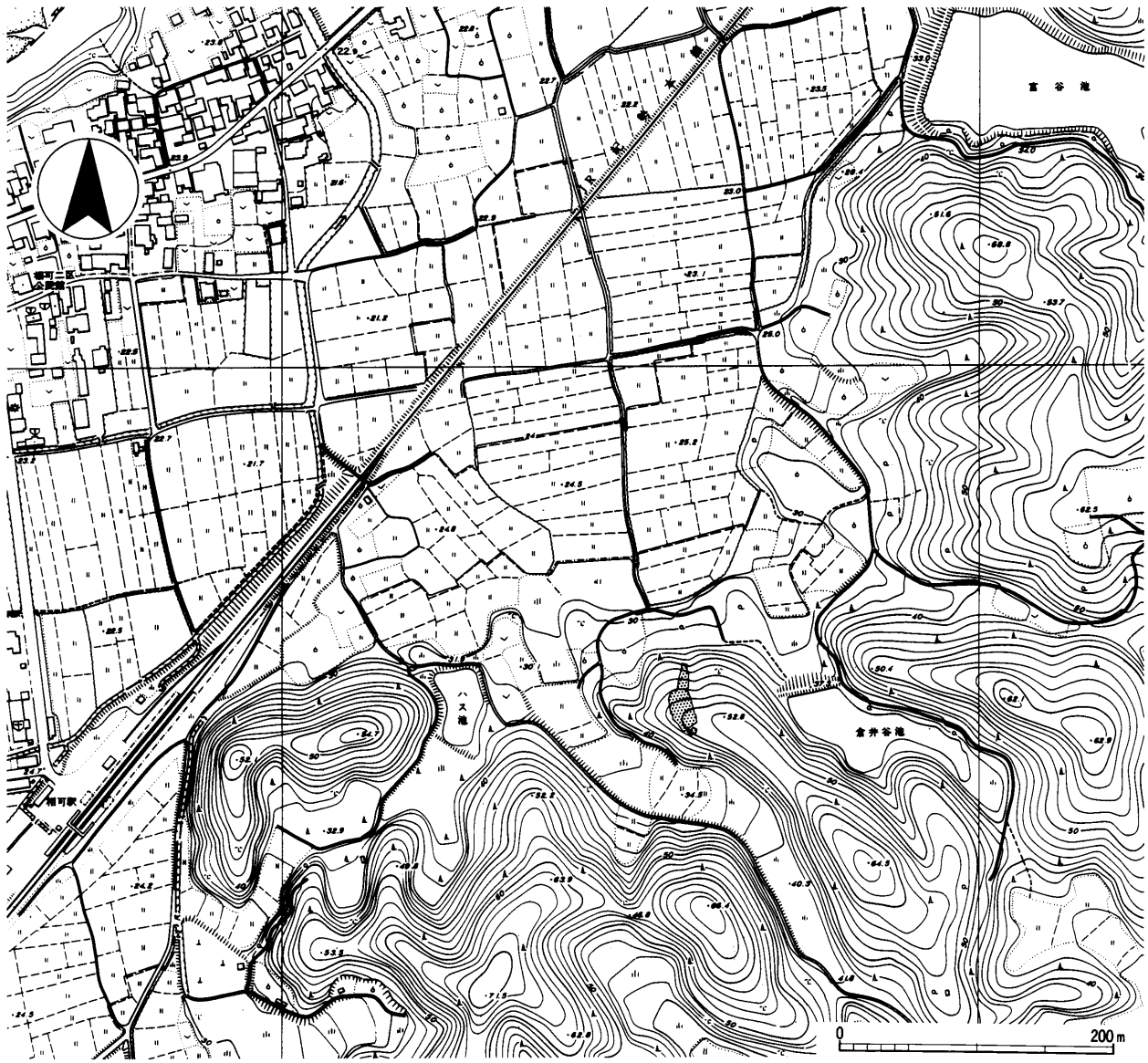
第84図　大日山古墳群周辺の古墳（１：25,000）

2．2　号　墳

（1）　調査前の様相

幅20ｍほどの尾根の背幅いっぱいに、高さ２ｍほどの高まりが見られた。その周囲には平坦に近い部分があり、従って、高まりは相対的に強調されていた。立木の伐開後、尾根北方の水田部から尾根筋を見渡すと、瘤状の盛り上がりとしてよく目立つ存在であった。また、高まりの裾は円形にめぐっていた。見るからに人為的な地形の改変を感じさせる状況であり、また、周辺で発掘調査された古墳（明気８号墳等）の調査前の様相ともよく似ていることから、古墳と判断した。

地形測量図からは、標高50ｍの等高線を基底線とする直径20ｍの円墳とすることができよう。ただし、墳丘の北半、すなわち櫛田川を見下ろす側は、尾根腹部の斜面にも整形のあとがみられ、基底部も49ｍの等高線付近まで下がる。反対に南側は、基底線がはっきりしないまま、切り立った尾根斜面となる。盗掘坑のような窪みは見当たらなかった。



第85図　遺跡地形図（１：5,000）

（2） 調 査 結 果

1）墳丘・関連施設

盛土

墳丘中央付近では、表土から80cm下がったところで旧表土が確認された。その間、赤味を帯びた土が盛られている。明瞭に分層される訳ではないが、含まれる岩粒の流れから大きく３層に分けられる。いずれの層も赤味を帯びた橙色土が混じる。

墳丘北斜面では、斜面に沿って全体に、表土の下部20cm程の厚さで橙色土の混じった層がある。頂部付近からの流下土かと思われる。その下は、黄褐色土の中に５～10cm大の山石や岩が含まれる層が見られる。

墳丘南半部のあまり傾斜のない所では、盛土が見られない部分が広い。

なお、この盛土が古墳時代のものであるという決定的な要因はみつからなかった。

旧表土と溝状遺構

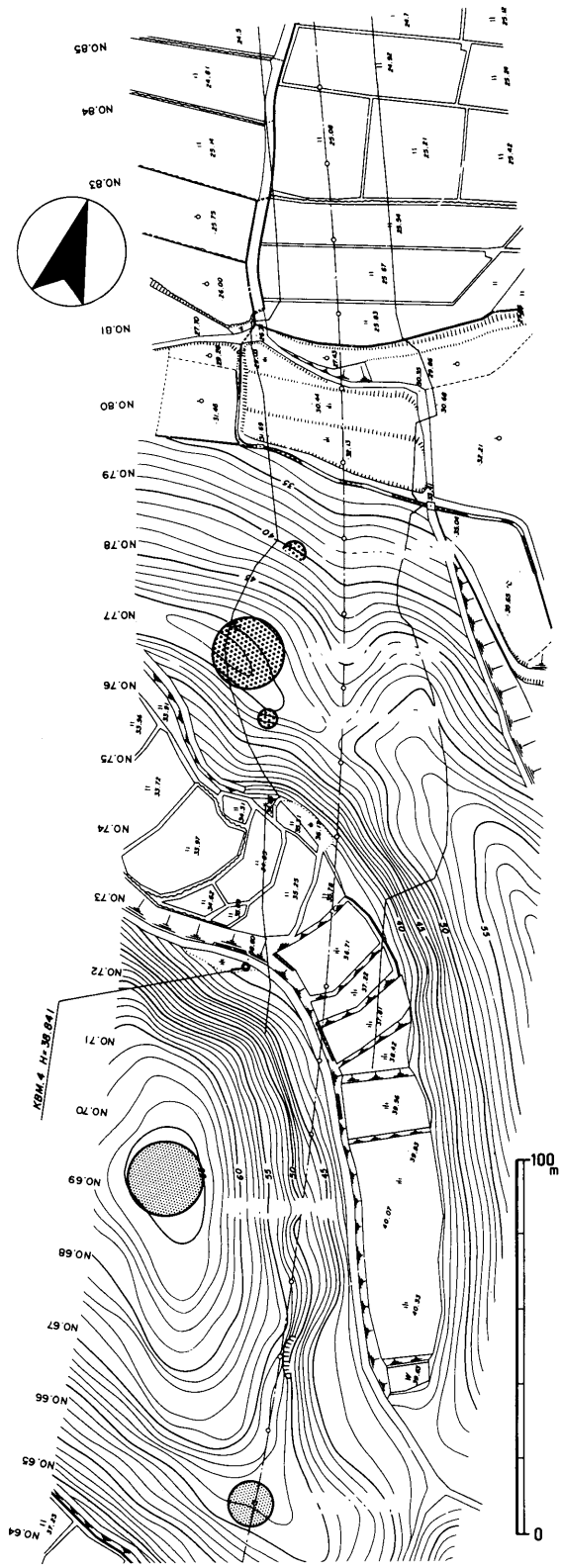
黒褐色の旧表土は、盛土の下で半径４ｍほどの広がりをもって残っていると推測される。その外側は、溝状、もしくは崖状に、人為的に削られていることが、断ち割り断面から読み取れる。墳丘南東区では、それが墳丘基底線と同心円状に巡る溝として検出された。この溝は、地山を弧状に抉る、幅1.2～1.7ｍ、深さ10～30cmほどの浅いものである。旧表土と同じ褐色土が内側に溜まっており、地表面になっていた時期が一定期間あったようである。盛土と思われる赤褐色土で埋まっていた。

旧表土下の土層

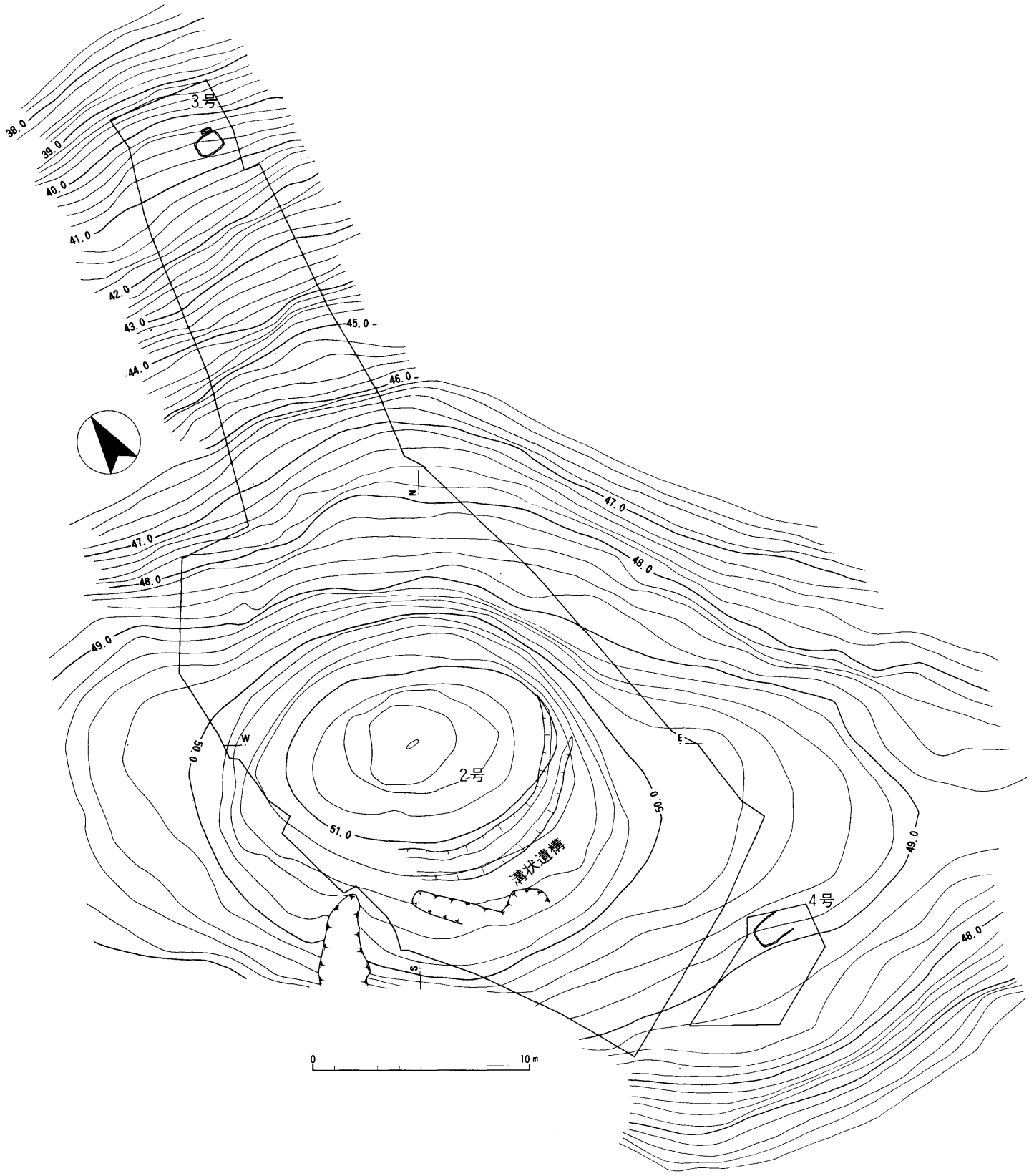
旧表土からはっきりした地山の土までに、水平に重なる３層が見られた。真中の層には、土師質の土器微細片（古式土師器か弥生土器なのか不明）が含まれていた。

2）埋葬施設

検出されなかった。はっきり地山とわかる層まで墳丘を掘り下げても、地山を掘り込むトレンチを入れても、墓坑の掘り形、棺跡、副葬品等は確認されなかった。

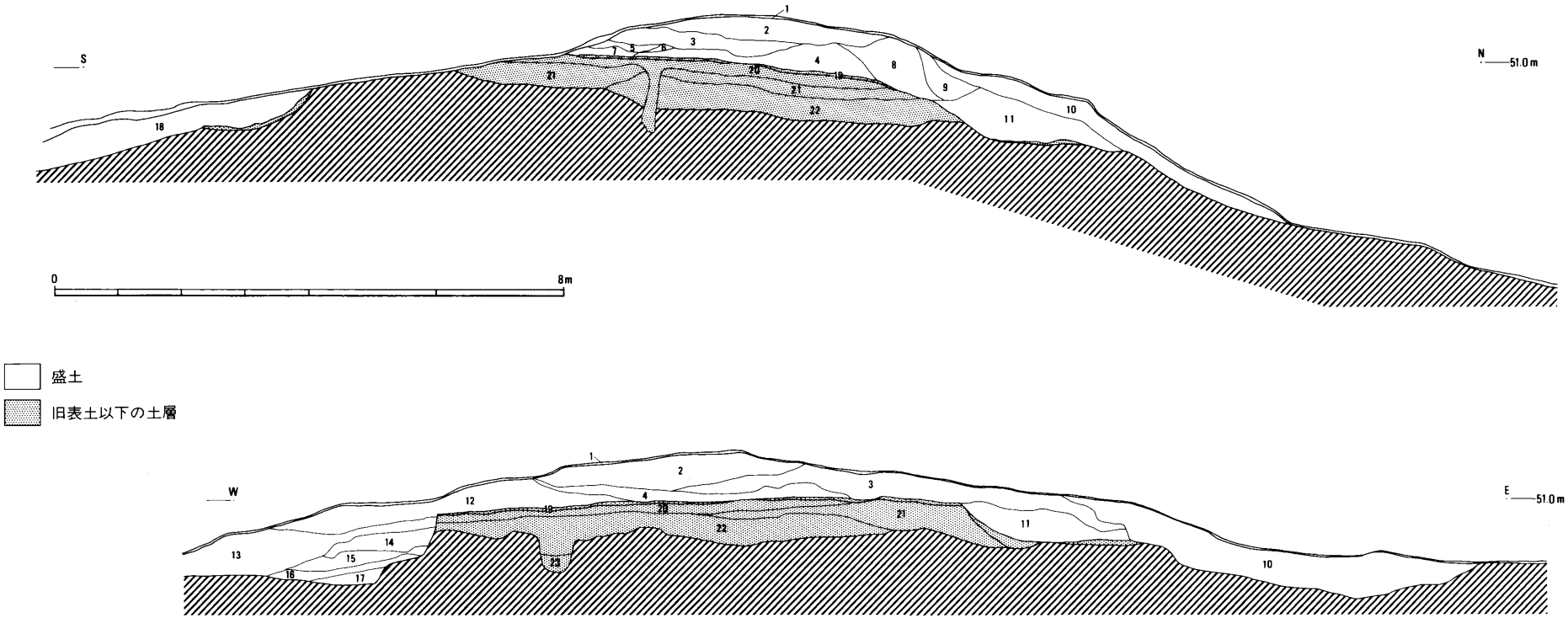


第86図　古墳分布図（１：2,000）



第87図　調査区地形測量図（1：250）

第88図　2号墳墳丘断面図（1：100）



1　表土（腐葉土）

2　7.5YR7/8黄橙色土（70%）＋2.5YR6/8橙色・やや粘質の10cm大のブロック状の土（30%）

3　7.5YR7/8黄橙色土（90%）＋2.5YR6/8橙色土（10%）

4　7.5YR7/8黄橙色土（60%）＋2.5YR6/8橙色土（40%）

5　2.5YR7/6橙色・やや粘質土

6　7.5YR7/8黄橙色土（50%）＋2.5YR7/6橙色土（50%）

7　7.5YR7/8黄橙色土（90%強）＋2.5YR6/8橙色土（10%弱）

8　10YR7/6明黄褐色土，焼土ブロック・炭化物混じる。

9　5YR7/6橙色土、5～8cm大の石混じる。

10　10YR7/8黄橙色土（50%）＋10YR6/8明黄褐色土（50%）

11　10YR6/8明黄褐色土、5～10cm大の石多く含む。

12　10YR7/6明黄褐色土（80%）＋5YR7/6橙色土（20%）

13　10YR6/8明黄褐色土，橙色土が微量混じる。

14　10YR6/8明黄褐色土（60%）＋2.5YR6/8橙色土（40%），炭化物・5cm弱の岩粒混じる。

15　10YR5/6黄褐色土，炭化物が少量混じる。

16　5YR5/8明赤褐色土

17　5YR5/8明赤褐色土（80%）＋2.5Y6/8橙色土（20%）

18　5YR6/8橙色土

19　10YR3/1黒褐色土，やや粘質土〔旧表土〕

20　10YR6/6明黄褐色土

21　7.5YR6/8橙色土，3～10cm大の石・岩かなり混じる。

22　7.5YR6/8橙色土

23　10YR6/6明黄褐

3）遺物

埋葬施設が検出されなかったため、まとまった出土はなかったが、墳丘裾や墳丘斜面の表土直下から破片となった土器が出土した。土師器の甕（8）1個体分以外は須恵器である。ただ、盛土内からは、割れ口も表面もかなり磨耗し、器種も時期もはっきりしない土師質の土器細片が数点出土している。

墳丘東裾部、まさしく基底線の部分で、高杯・壷・腺片・甕（2～5・8）などが、壊れた状態ではあったがやや集中した状態で出土した。そして北西の墳丘斜面では、杯身片（1）や大甕片が散在状態で出土した。大甕片は20点ほど出土し、接合はできないものの、調整方法・文様・胎土・焼成の類似性から同一個体と思われる。

後に図示した土器のほかに、透かし部分が看取できる高杯脚部片や、キザミで飾った壷の肩部片などが出土した。

須恵器

杯身（1）　口径11cm、受部径13.1cmの復元径である。1cmほどの立上がりはほぼ垂直に立ち、内面では体部との境に沈線状のくぼみをつくる。受部に、重ねて焼いた蓋の細片が付着する。

有蓋高杯（2）　受部付近は小片のみの出土で、下部と直接は接合できなかったが、出土地点、胎土、焼成等から同一個体であると判断し、図上で復元接合した。杯部は底部が広くやや偏平な感を受ける。受部は直線的に外上方に伸びる。底部外面はヘラケズリし、脚部との接合部もきれいにナデているが、内面には接合部に窪みを残す。脚部は徐々に外湾の度合いを増しながら下り、端部手前で下方に少し折れ外面に稜をつくる。

壷（3）　口縁部は欠損しているが、広口壷と思われる。底部に直径7cmの円盤を置き、その周りに粘土をつぎたして体部をつくる。底部はやや丸みを帯びる。

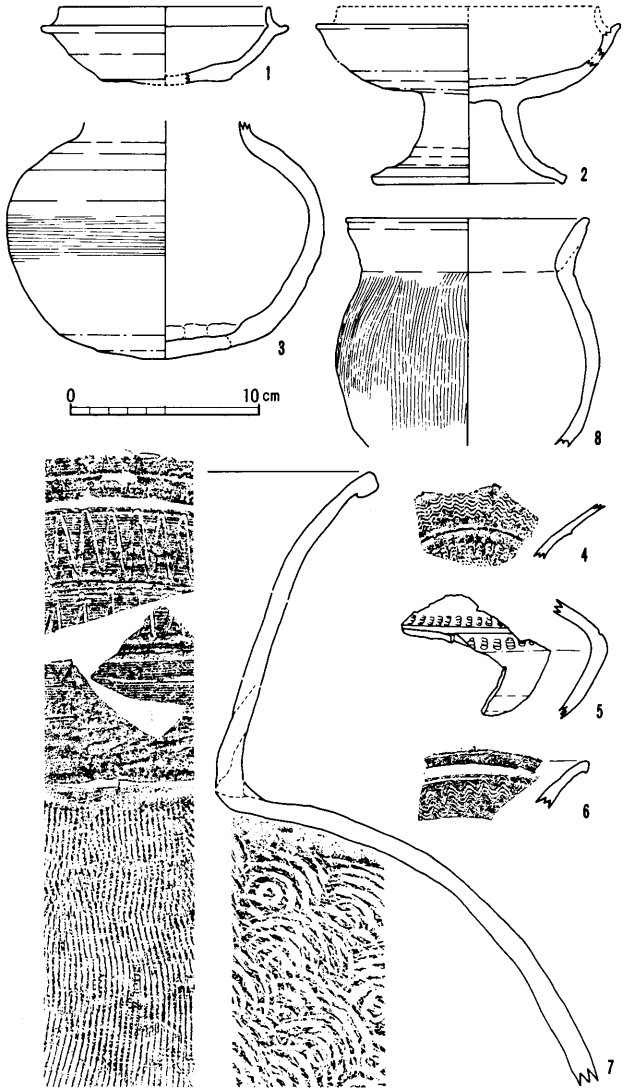
腺（4・5）　（4）は口頸部の上方、大きく開く部分であろう。稜線の上方で6本1条の波状文、下方でも波長の短い波状文を施す。（5）は、体部片で、肩部に1本の沈線をまわし、その上下に櫛状の刺突で刻んだ模様を巡らす。（4）と（5）は、胎土や焼成の類似性から、同一個体の可能性もある。

広口壷（6）　口縁だけの出土である。端部はやや丸くヨコナデし外に曲面をつくる。波状文は9本を単位とする。

甕（7）　実際には接合しないが、口縁～肩部にあたる4片を図面上で繋ぎ合わせた。やや外反して開く口縁は、端部を折り返し肥厚部分をつくる。頚部外面は、やや粗いカキメ調整の上に、2段に波状文を施す。

土師器

甕（8）　ゆるくカーブする体部に鈍い角度で外に開く口縁がつく。口縁外面端部には沈線状の凹みを持つ。



第89図　2号墳出土遺物実測図・拓影（1：4）

3．3　号　墳

（1）　調査前の様相

2号墳の北斜面を8ｍほど下った所で、周囲の傾斜面に比べてやや平坦で、微妙にテラス状を呈する地形が見られた。地形測量図では標高40～42ｍの等高線の間になる。しかし、植林のための地形整形とも、単なる自然地形ともとれるもので、外見ではその正体は判断できなかった。むしろ、周囲で古墳の存在が知られていなかったなら、自然地形と判断してしまうような地形であったといえよう。

テラス面にトレンチを入れてみたところ、表土から20cm弱の深さで須恵器広口壷の口縁が見えはじめたので、古墳として調査した。

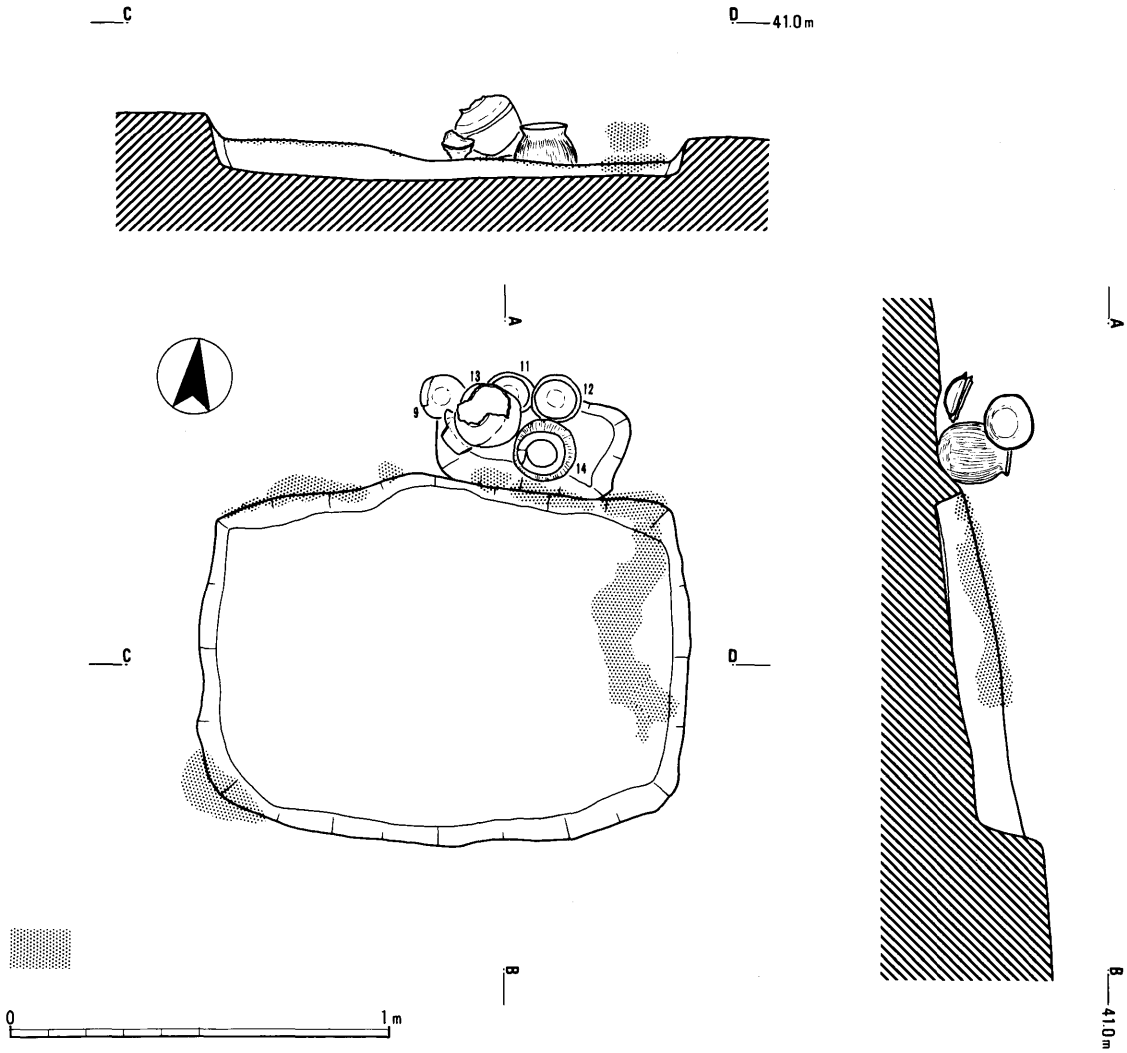
（2）　調　査　結　果

1）墳丘・関連施設

墳丘といえるべき盛土は確認できなかった。周溝等も検出されなかった。

2）埋葬施設

表土から40cmほどの深さで、1.3×1.0ｍの東西にやや細長い方形の墓壙が検出された。埋土は周囲の



第90図　3号墳主体部実測図（1：20）

地山の土とほとんど区別できなかったが、オリーブ灰色の粘土が見られ、それを手掛かりにした墓壙の検出方法であった。結果的に、粘土は墓壙の東辺と北辺によく残り、南西のコーナーにも薄くみられた。

墓壙内から遺物は出土しなかったが、北辺のすぐ外側に、副葬品の土器が固めて置かれていた。土器の下の土は周囲に比べやや柔らかく、その柔らかい部分を掘削すると浅い窪みとなる。

3）遺物

墓壙際の土器群は、須恵器5個体（9～13）と土師器1個体（14）がかたまって検出されたものである。須恵器杯蓋（10）を仰向けにし、その上に杯身（12）を重ねて、もうひとつの杯身（11）と接して置かれる。5cmほど間をおき、杯蓋（10）が仰向けにおかれ、（14）の土師器甕が、杯身（12）と墓壙のあいだに据えられていた。広口壷（13）は蓋杯列の上に5cmほどの厚さの土層を隔て、傾いた状態で検出された。口縁から肩部にかけて1/3ほど割れ、その破片とともに、いわゆる浮いた状態であった。

3号墳関連の遺物なのか、上から流れてきたものなのかは不明であるが、腐葉土直下で、須恵器杯蓋・身片と瑯片が出土した。

＜埋葬施設関連の出土＞

須恵器

杯蓋・身（9～12）　口径が12cm前後で、ヘラケズリ調整が見られず、天井部・底部外面が未調整のものである。

身は器高に対する立上がりの割合が小さい。（12）には焼け歪みがみられ、底部外面に「×」のヘラ記号がつけられている。

広口壷（13）　焼きが甘く、表面の劣化が激しい。表面調整もはっきりしないが、体部にはカキ目のあとがわずかに見取れる。口縁端部は、くの字の面を持ち、その直下には工具をあてて作り出した稜がまわる。体部と底部の境には、ヘラケズリが2周ほどなされている。

土師器

甕（14）　最大径16.2cmの体部に、およそ45°の角度で外に開く口縁部がつく。口縁端部は、ヨコナデされた際の指の当たり方により、上方にツンと尖った感じになる。

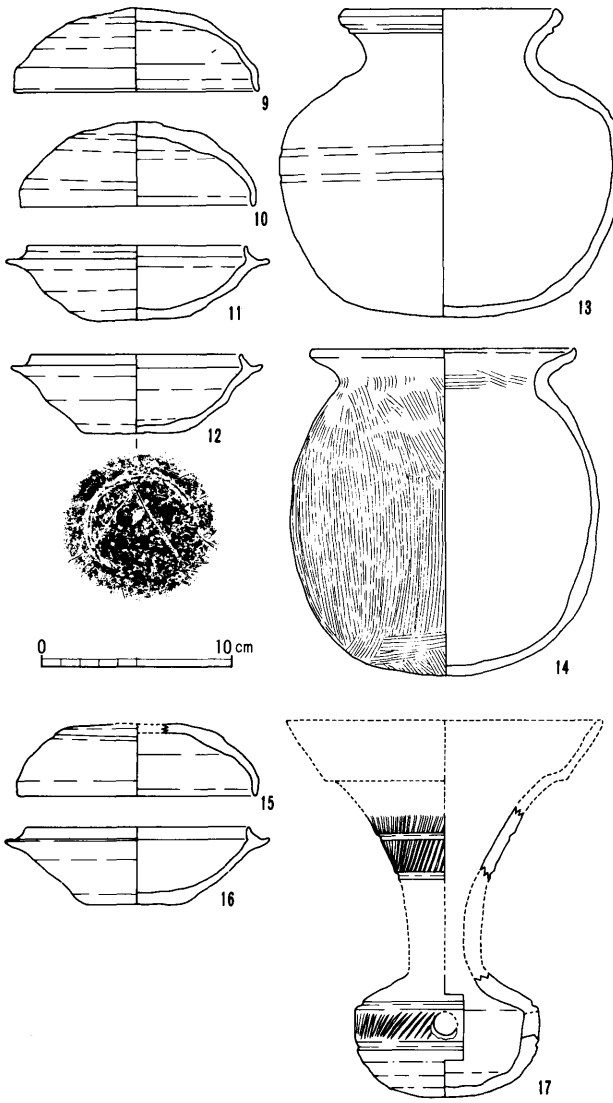
体部は、6本／cmのハケメで調整される。

＜表土直下出土＞

須恵器

蓋杯（15・16）　基本的に埋葬施設出土のものと同様である。（15）は天井部外面が軽く撫でられ、（10）などに比べ天井部の突出感がおさえられてはいるが、体部と天井部の境付近に沈線が施されたように窪みが生じている。

瑯(17)　体部と頸部の破片である。胎土や焼成、文様などから同一個体と判断した。体部下半はヘラケズリされ、上半には注口を挟んで2本の沈線がひかれ、その間はヘラで細かく刻まれる。



第91図　3号墳出土遺物実測図・拓影（1：4）

4．4　号　墳

（1）　調査前の様相

2号墳の南東裾に、見た目にかなり平坦なスペースがみられた。調査前の地形測量図では48.6mから49.0mの等高線の間になる。当初、2号墳の盛土を得るために削平されたとも考えた場所である。念の為、幅1mのトレンチを十字にいれたところ、須恵器の蓋が検出され、トレンチの幅を広げるかたちで調査を続けた。ただ、最初のトレンチの深さが、遺物検出面より深かったため、結果として、墓壙の検出に支障を来してしまった。

（2）　調　査　結　果

1）墳丘・関連施設

墳丘、周溝とも確認できなかった。

2）埋葬施設

木棺を直葬したと思われる墓壙が検出された。幅1.2mの東西に長い隅丸長方形のプランである。中心軸は座標の東西軸に対して約6°振る。西端から1.7mほどしか検出できず全長は不明であるが、東端はすくなくとも須恵器杯蓋が4個体検出された場所よりも東にあったと思われ、それならば、2.7mほどの長さを推定できる。深さは、墓壙の中心軸付近で、検出面から10cmほどである。

須恵器杯蓋が4個体検出された周辺は、トレンチを設定した部分で、前述の如くその掘削が少し深すぎたため、遺物の乗る面が周囲より盛り上がった状態になってしまった。棺跡は検出できなかった。

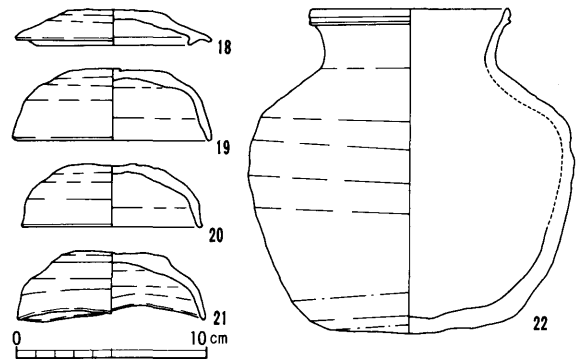
3）遺物

墓壙西端から40cm内側に須恵器壷（22）が正立し、そこから1.6m東に離れ須恵器杯蓋（18～21）が伏せた状態で4個体置かれていた。杯蓋群の位置に遺体の頭部があったと推測する事もでき、棺が墓壙の軸に沿って納められたとすると、壷（22）は、棺外もしくは棺上の副葬品ということができよう。

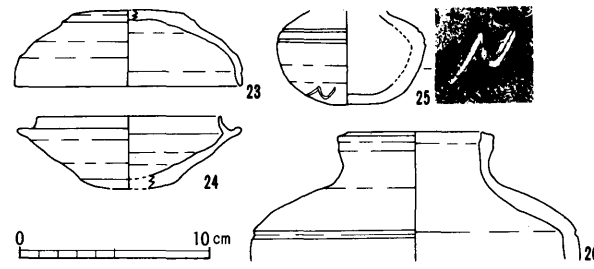
須恵器

杯蓋（18～21）　　口径10cmほどの小型のものである。（18）は、たちあがりとも言える部位があり、つまみもなく、器形としてはむしろ身とすべきかもしれないし、（19）も天井部内面の平らな様子から、身と言えなくもない。体部は、回転ナデで調整されるが、天井部外面は、ロクロから切り離した後ほとんど調整はしていない。外面の天井部と体部の境に特徴的な段が生じ、外観では天井部が盛り上がったように見える。（21）は口縁部が大きく歪んでいる。

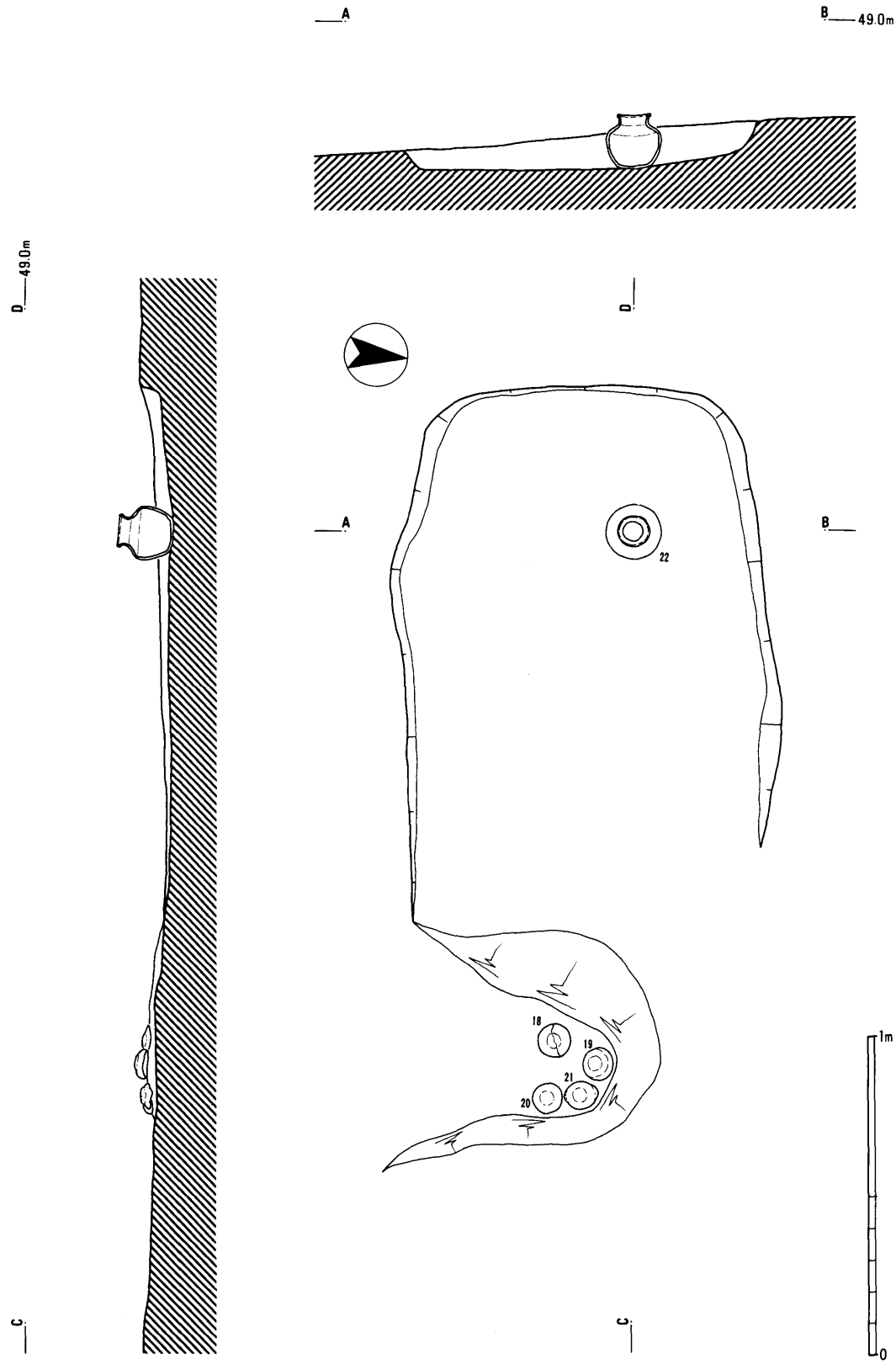
広口壷（22）　　平底に近く、体部もどちらかというと直線的に広がる。頸部、口縁部には焼き歪みがみられ、本来のプロポーションが少し崩れているにはせよ、上方に開くかたちをとる。底部と体部の境の部分に、狭い範囲でヘラケズリがみられる。



第92図　4号墳出土遺物実測図（1：4）



第93図　尾根北斜面採集遺物実測図・拓影（1：4）



第94図　4号墳主体部実測図（1：20）

尾根北斜面の表採遺物について

調査区の東側は、水路を通すため、すでに重機による尾根の横断掘削がなされていた。その工事された場所に、須恵器片が散布していたので採集した。数はそれほど多くはなかったが、割れ口は新しいものばかりで、もしかすると完形の土器であったのかもしれない。3号墳と同様、尾根中腹につくられ、現在ではほとんど自然地形と変わりのないような外観の古墳が、工事された部分に存在していたのかもしれない。

須恵器

杯蓋・身（23・24）　（23）は口径12cm、そして（24）は受部径11.8cmの復元である。体部は回転ナデ、天井部・底部の外面は未調整、内面は不定方向ナデという調整方法で、天井部・底部が突出したように見える外観である。

甕（25）　甕体部と思われるが、注口が開けられていない。肩部に2本の沈線をまわし、下方の沈線部で最大径7.9cmを有する。底部近くに「N」のヘラ記号が施される。

壷（26）　肩部より上方の破片である。口縁は垂直に立ち上がり次第に肥厚する。端部は凹みを持つ面を成し、内面端部にも凹みがまわる。

5．結　語

盛土を持ち、外見上古墳であると判断できた2号墳に埋葬施設が見当たらず、平坦部ともいえるような地形の場所で埋葬施設が検出されるという結果になった。

2号墳の盛土が「古墳」としての盛土かどうか、決定的な証拠は得られなかった。しかし、地形改変のありかたが、すぐ南の尾根頂部で調査された明気8号墳によく似ていること、遺物に古墳時代より新しいものが見当たらず、それらの出土が表土直下からであったことなどから、「古墳」としての盛土の可能性はかなり高いといえよう。

3号墳のようなテラス状の在り方は、近くでは河田古墳群などにその類例[1]がある。しかし、河田古墳群では周溝による墓としての区画を設けているのに対し、本墳では周溝は掘られていない。

4号墳のようにほとんど平坦とも見える場所に埋葬主体があるというのもやや奇異な感じを受ける。最低でも棺を覆うだけの盛土はあったと思われる。

2号墳について

さて、2号墳に埋葬施設が見当たらなかったことについて、少し考えてみたい。この事については、様々な理由が考えられる。まず、根本的に、2号墳が古墳ではなかったのではないかということ（①）。次に、埋葬施設が浅い所に作られたため、すでに盛土の一部と共に流れ崩れてしまったのではないかということ（②）。第3に、墳丘は一応準備したものの、埋葬はしなかったのではないかということ（③）。等々である。

①については、前述のように、かなりの確率で古墳（のための盛土）であると考えて差し支えないものと思われる。

②についても、埋葬施設がよほど斜面に近い所にない限り、遺物もろとも跡形もなくなくなるとは考えにくい。もっとも、盗掘によってかなりの深さまで掘られてしまったというのならば話はまた別であるが・・・。

諸々の状況から、③の考えがまだ一番妥当性を帯びると思われるが、あくまで主観の域であり、また、なんとも証明のしようがないところである。

仮に2号墳が、埋葬施設を作らず、遺体を埋葬をしなかった古墳であるとすると、被葬者となるべき人物がまだ生きているうちに墳丘だけは確保していたという、いわゆる“寿墓”という可能性が強い。そして、本来埋葬される予定であったのが、なんらかの事情で埋葬されず“空墓”となったということ

になる。「大半の古墳が生前に築造された[②]」という考えもあるが、完成までにかなり時間のかかる大型古墳だけではなく、このような、盛土部分が１ｍ弱で径20ｍの円墳でも生前に築造しておくのであろうか。古墳の造営が極めて政治的な側面をもっているのならば、むしろ権力を行使しているときにこそ、墳丘をつくること、そしてそれを視覚的に示しておくこと、自己の墓の場所を確保しておくことなどに比較的重要な意味があったのかもしれない。

出土須恵器について

３号墳埋葬施設出土の須恵器蓋杯は、明気１・２号窯出土の蓋杯に、４号墳出土の蓋杯は、明気３号窯出土のものと、外見上次の点で類似する。

① 口径（10cm前後）。

② 底部（天井部）外面が突出したように盛り上がる。

③ つまみがないので「身」とすべきなのか、容積がほとんどないので「蓋」とすべきなのか決めかねるものがある。（18）のこと。

④ ヘラ記号。「×」。

（表採の中には「N」のヘラ記号もあり。）

また、３号墳埋葬施設出土のヘラ記号を有する杯身(12)は、胎土分析の結果[③]をみると、Ｒｂ－Ｓｒ分布もＫ－Ｃａ分布も明気１・２号窯の領域に入っている。この１点だけの分析結果で結論を急ぐことは危険ではあるが、それでもやはり、これらの須恵器が、明気窯産のものである確率を高める要因の一つであるといえよう。

さてそれでは、これら須恵器の時期についてであるが、当然のことながら明気窯と同時期ということになる。すなわち、３号墳の須恵器は陶邑偏年[④]（中村浩）のII－６に相当し、４号墳の須恵器は同じくIII－１に相当するものである。

また、２号墳墳丘の須恵器片もII－６併行といえよう。

（西村修久）

〔註〕

① 吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』多気町教育委員会 1974
下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会 1986

② 茂木雅博「古墳時代寿陵の研究」雄山閣出版 1994

③ 本書P101～ 三辻利一「明気窯跡群およびその周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」参照

④ 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978 等

大日山２号墳

No.	器種	出土場所	法量(cm)	調整・技法の様相	胎土	焼成	色調	残在状況	備考	実測ナンバー
1	須恵・杯身	墳丘斜面表土直下	(口径 12.0) (受部径 13.2) 高 4.1	・体部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデ ・底部 外：ヘラ切り 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向不明	やや粗 ただし、1㎜以上の砂粒は含まれていない。	堅	N６灰	口縁～体部75% 底部中央は欠損	・内面に1㎜弱の黒斑がまばらにあり。	001-1
2	須恵・ 有蓋高杯	墳丘裾部表土直下	(受部径 16.2) (脚～受部高 8.4) 脚径 10.4	・杯部 外：上半回転ナデ 下半ヘラケズリ 内：不定方向ナデ ・脚部 回転ナデ ・ロクロ右回転	密 1㎜前後の砂粒多い。	軟 特に杯部は生焼け。	N４灰 7.5R4/1暗赤灰の部分もあり。	杯部 体部50% ただし、受部付近は2×3㎝ほどの一片しかない。 脚部 端部が2/3欠。		001-2
3	須恵・壺	墳丘裾部表土直下	(体部径 16.8)	・肩部に軽いカキ目 ・底部の外周に軽いヘラケズリ	やや粗 0.5～1㎜の砂粒多い。	やや軟	5BG2/1青黒、その反対側は10Y6/1灰	体部50%のみ存	・底に円形の粘土板。	001-3
4	須恵・甕	墳丘裾部表土直下	—	・外：回転ナデのち波状文(６本1条)	やや粗 1㎜前後の砂粒含む。石英粒含。	堅	N５灰	口頸上方部のみ	・同一個体と思われる破片他に有り。	002-2
5	須恵・甕	墳丘裾部表土直下	(体部径 9.4)						・No.4の甕片と同一個体の可能性有り。	003-1
6	須恵・甕	墳丘裾部表土直下	(口径14ほどか？)	・外：回転ナデのち波状文(９本1条)	密 0.5～1㎜ほどの砂粒含む。	堅	10Y5/1灰	口縁部のみ 6×3.5㎝片		003-2
7	須恵・甕	墳丘裾部及び斜面の表土直下。 ただし、頸基部片は、３号墳にあたる場所の表土直下。	(頸基部 径34)	・体部 外：タタキ 内：タタキ ・頸基部 接合のためのナデ ・頸～口縁端部 外：カキ目 カキ目のち波状文 内：軽いカキ目	密 1㎜前後の白色砂粒少し含む。	堅	N４灰	体部(肩部のみ) 20% 頸部片は10㎝ほどの破片	・実際に接合点はないが、同一個体であるとおもわれる４片を図面上で接合した。	002-1
8	土師・甕	墳丘裾部表土直下	(口径 12.8)	・口縁部 ヨコナデ ・体部 外：ハケ目６本/㎝ 内：ナデ？	やや粗 1㎜ほどの砂粒少し含む。	良	2.5YR5/8 明赤褐	口縁～体部40% 底部欠損	・表面風化、器面荒れている。	001-4

大日山３号墳

No.	器種	出土場所	法量(cm)	調整・技法の様相	胎土	焼成	色調	残在状況	備考	実測ナンバー
9	須恵・杯蓋	主体部	口径 12.7 高 4.5	・体部 回転ナデ ・天井部 外：軽いナデ 内：不定方向ナデ ・ロクロ右回転	密 1㎜大の砂粒やや目立つ。	軟	7.5Y7/1灰白	完形		005-1
10	須恵・杯蓋	〃	口径 12.2 高 4.5	・天井部外面未調整 それ以外回転ナデ ・ロクロ左回転	密 1～2㎜の白色砂粒含む。	堅	外：5PB3/1 暗青灰 内：5N灰	完形		005-4
11	須恵・杯身	〃	口径 11.5 受部径 14.0 高 4.0	・体部 回転ナデ ・底部 外：未調整 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向不明	やや粗 1㎜強の長石粒少し含まれる。	堅	7.5Y6/1灰	受部端15%のみ欠損。	・表面全体に針先ほどの黒斑有り。 ・受部より下方の外面、自然釉がかかった痕跡。	005-2
12	須恵・杯身	〃	口径 11.5～10.9 受部径 14.0～13.2 高 4.4～3.9	・体部 回転ナデ ・底部 外：未調整 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向不明	やや粗	堅	外：N６灰 内：10Y6/1灰	口縁端部及び受部15%のみ欠損。	・焼けひずみややあり。 法量は最大～最小。 ・受部上面及び内面に自然釉痕跡。 ・底部外面にヘラ記号。	005-3
13	須恵・広口壺	〃	口径 11.2 体部径 18.3 高 16.3	・表面劣化はげしくはっきりしないが、 体部にカキ目 底部外周にヘラケズリ	密	軟	10Y8/1灰白	口縁端部50%	・器面かなり荒れている。	004-1
14	土師・甕	〃	口径 13.8 体部径 16.2 高 17.4	・体部 外：ハケ目６本/㎝ 内：ナデ ・口縁部 ヨコナデ ・口縁基部内面にも横方向にハケ目	密	良	10YR7/6 明黄褐	完形 ただし、体部上半に楕円状の表面剥離があり、その一部は3×1㎝ほどの不整形な穴となっている。	・表面の剥離は人為的なものなのか、自然のものなのか不明。	004-2

第25－１表　遺物観察表

No.	器　種	出土場所	法量(cm)	調整・技法の様相	胎　土	焼　成	色　調	残存状況	備　考	実測ナンバー
15	須恵・杯蓋	表土直下	口径 12.6 高　3.7	体部　回転ナデ 天井部　外：未調整 内：不定方向ナデ	密 2㎜ほどの砂粒も少し見られるものの、全体として含まれる砂粒は少ない。	やや軟	N 7 灰白	口縁部は70% 天井部50%		006-2
16	須恵・杯身	表土直下	(口径　11.8) (受部径 14.1) (高　4.1)	体部　回転ナデ 底部　未調整	密 1㎜弱の石英等の砂粒含む。	軟	5 G Y 8/1 灰白	体部20% 底部のみ100%	実際には接合できないが、同一個体と思われる口縁部と底部の破片を図面上で接合復元した。	006-1
17	須恵・甕	表土直下	体部径 9.8	体部　回転ナデ 外面底部はヘラケズリ 外面中央にキザミ文帯 口頸部上部 外面　回転ナデ 内面　クシ描き文状の沈線	密 1㎜以下の砂粒少量含む。	やや軟	5 Y 6/1 灰	体部40% 口頸部20%		006-3

大日山４号墳

No.	器　種	出土場所	法量(cm)	調整・技法の様相	胎　土	焼　成	色　調	残存状況	備　考	実測ナンバー
18	須恵・杯蓋	主体部　東半	口径 8.0 高　1.9	・体部　回転ナデ ・天井部外面　未調整 ・ロクロ回転方向不明	やや粗 1㎜大の砂粒多数含む。	堅	5 B G 4/1 暗青灰	完形	・天井部につまみなし、身とすべきか？	007-4
19	須恵・杯蓋	〃	口径 10.2 高　3.8	・体部　回転ナデ ・天井部　外：未調整 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向右	やや粗 1㎜大の砂粒多数含む。	堅	10G 5/1 緑灰	完形		007-3
20	須恵・杯蓋	〃	口径 9.4	・体部　回転ナデ ・天井部　外：未調整 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向不明	やや粗 1～2㎜の砂粒多数含む。	堅	10 B G 5/1 青灰	完形	・天井部外面に工具痕	007-2
21	須恵・杯蓋	〃	(口径　9.8) (高　3.5)	・体部　回転ナデ ・天井部　外：未調整 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向右	やや粗 1～2㎜の砂粒多数含む。	堅	5 B G 6/1 青灰	完形	・口縁ひずみ大 ・天井部外面に工具痕	007-1
22	須恵・広口壷	主体部　西半	口径 10.3 高　17.3	・口縁から体部にかけて回転ナデ ・底部外面未調整 ・底部外周軽いヘラケズリ ・ロクロ回転方向右	やや粗 1㎜大の白色砂粒多数含む。	堅	N 6　灰 自然釉 10G2/1緑黒	完形	・口縁ややひずみ	007-5

尾根北斜面　表採

No.	器　種	出土場所	法量(cm)	調整・技法の様相	胎　土	焼　成	色　調	残存状況	備　考	実測ナンバー
23	須恵・杯蓋	尾根裾部	(口径 11.8) 高　4.0	・体部　回転ナデ ・天井部　外：軽いナデ 内：不定方向ナデ ・ロクロ回転方向不明	やや粗	堅	外：N 6 灰 内：N 7 灰白	口縁部10% 天井部50%	・天井外面に工具痕	008-4
24	須恵・杯身	〃	(口径　9.6) (受部径 11.8) 高　3.8	・体部　回転ナデ ・底部　外：未調整 内：不定方向ナデ	やや粗 1㎜大の砂粒少し含む。	堅	N 8 灰白	15%		008-1
25	須恵・甕	〃	頸基部径 4.4 体部径　7.8	・回転ナデ ・底部付近はナデ	やや粗 0.5㎜大の砂粒少し含む。	堅	10 Y R 8/2 灰白	体部のみ完形	・甕とはしたものの、注口は穿たれていない。 ・底部近くにヘラ記号「N」。	008-2
26	須恵・短頸壷	〃	口径　7.0 肩部径 17.0	・回転ナデ	やや粗 1㎜弱の砂粒含む。	堅	N 8 灰白	口縁部30% 肩部40%		008-3

第25－２表　遺物観察表

調査前遠景（上ノ垣外遺跡から）

調査前遠景（北から）

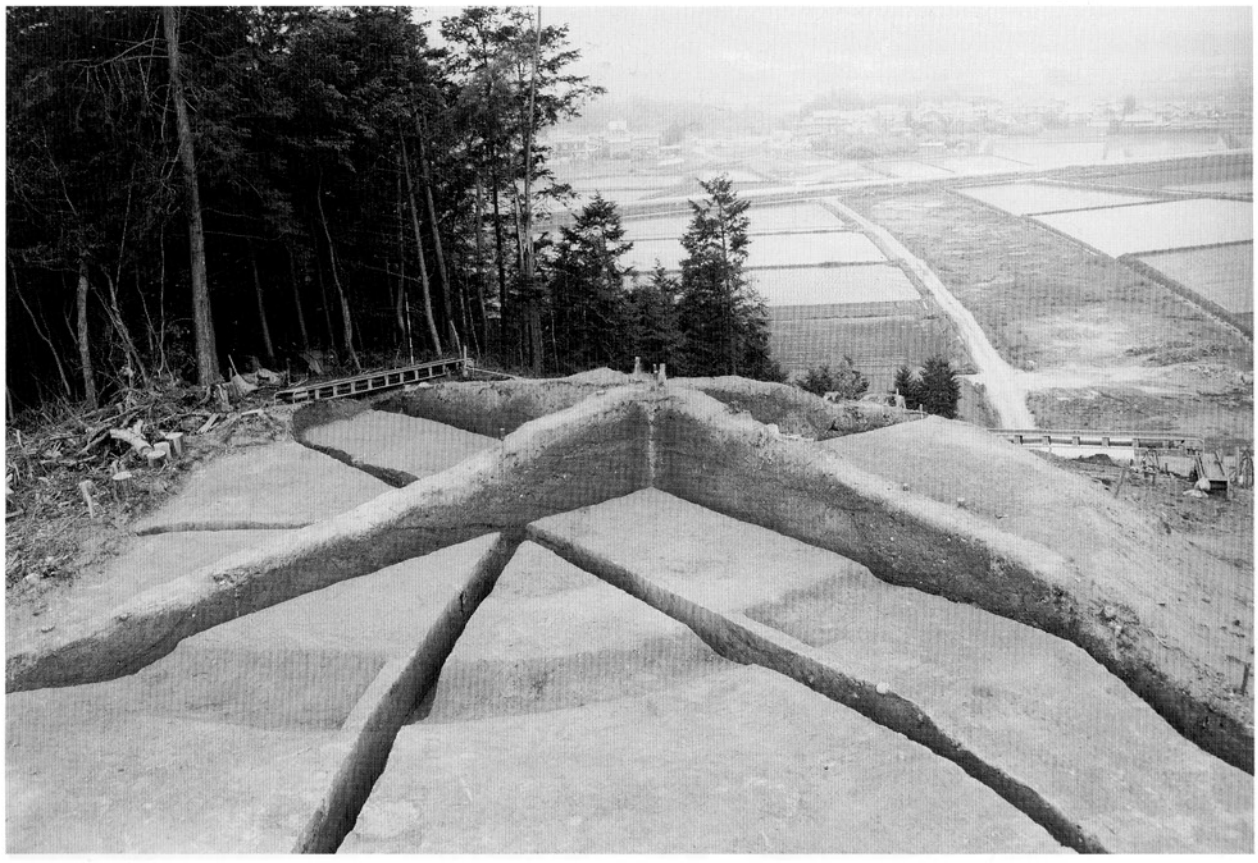
PL.2

調査前近景（北から）

調査前近景（南東から）

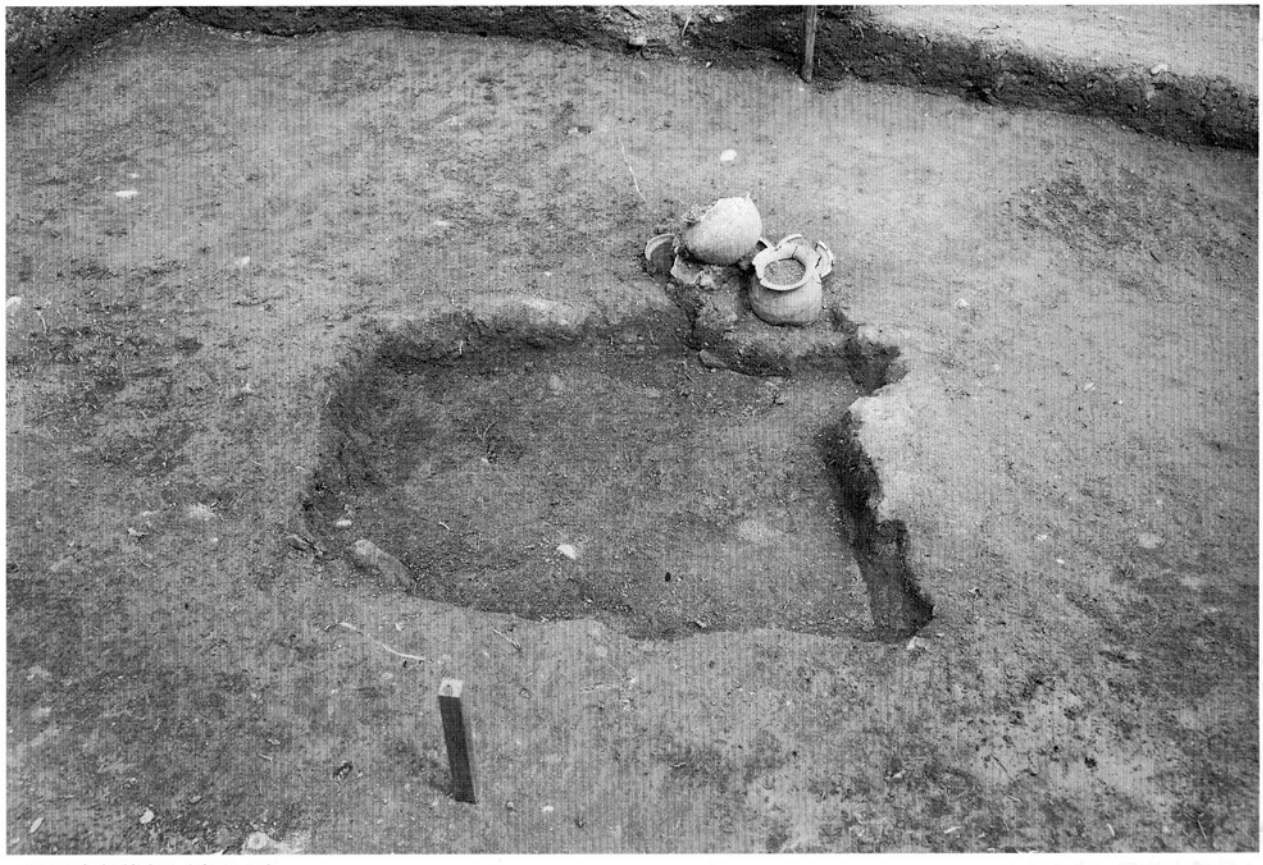
調査後遠景（南上空から）

調査後全景（北東上空から）



2号墳（南東から）

2号墳墳丘盛土断面と溝状遺構（南から）

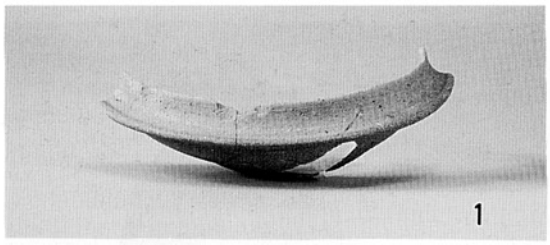


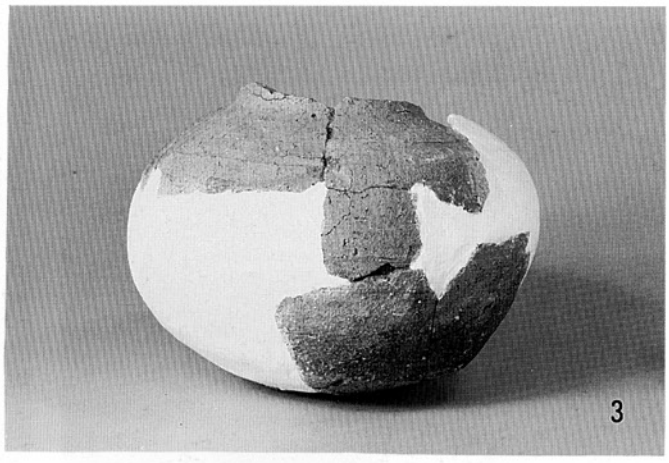
3号墳主体部（南から）

3号墳主体部（北から）

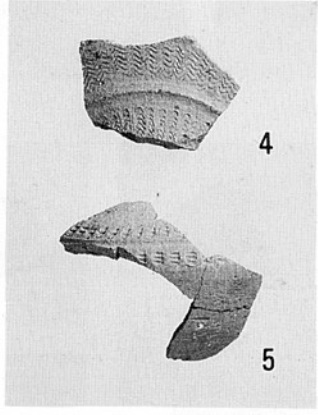
4号墳主体部（北から）

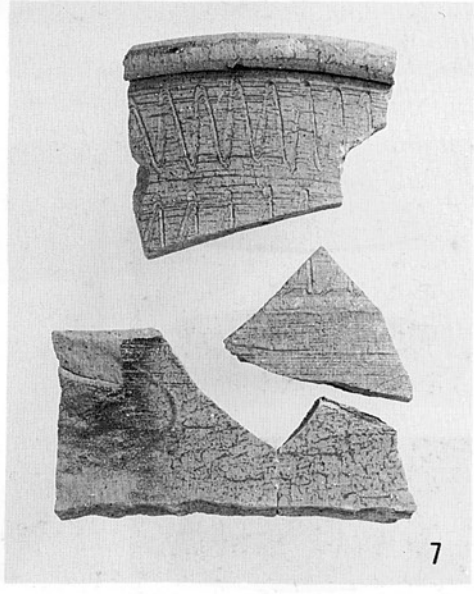
4号墳主体部（東から）

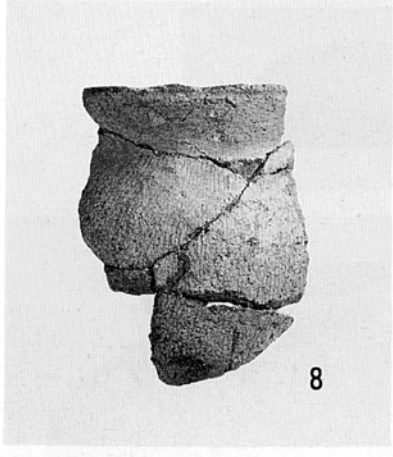

1

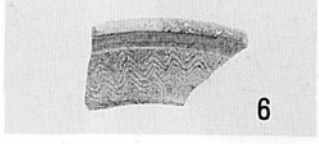

3

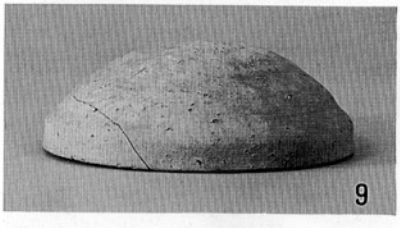
2

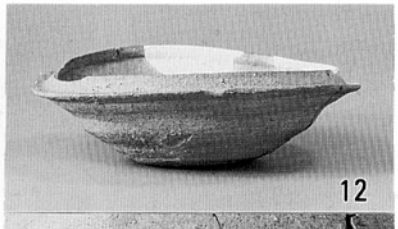

4
5

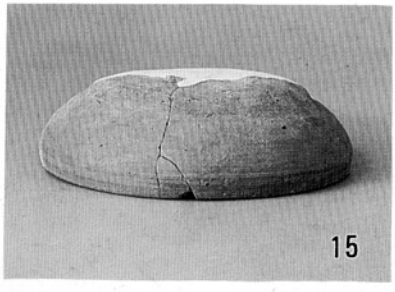

7


8

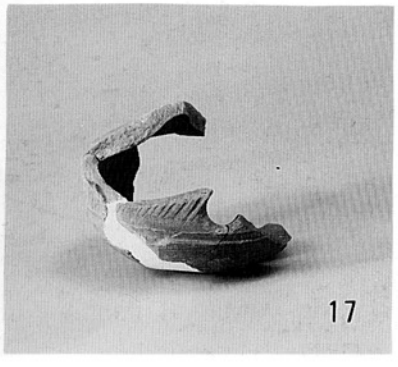

6


9


12

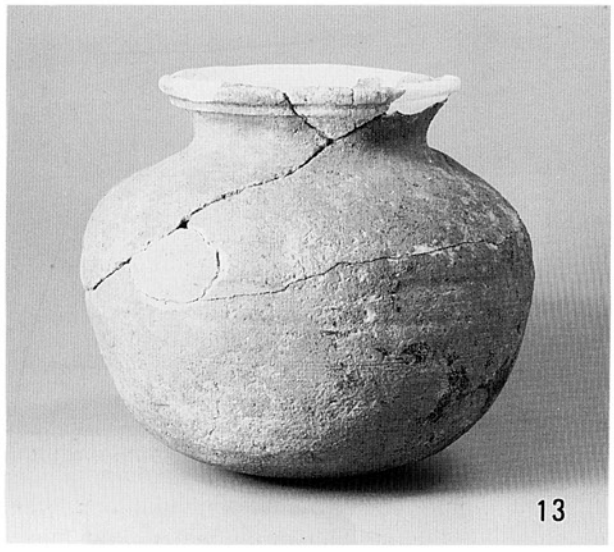

15

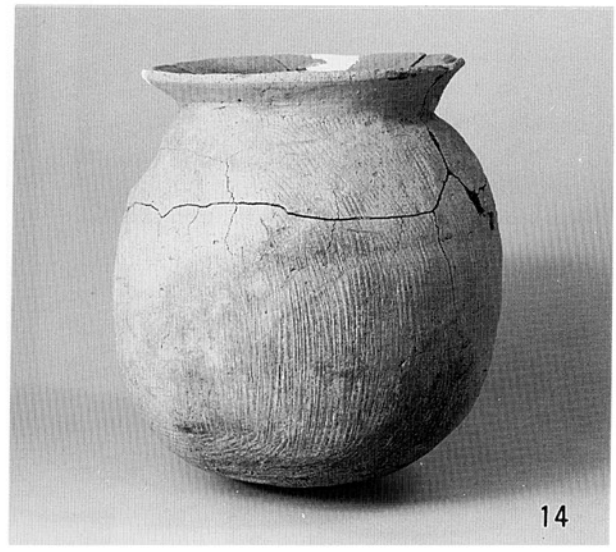
10

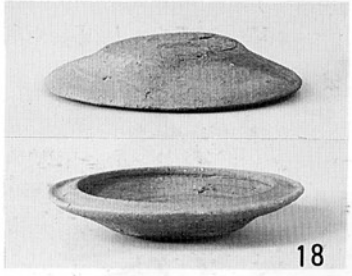

17

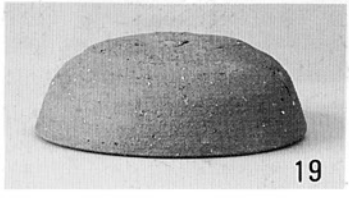
11

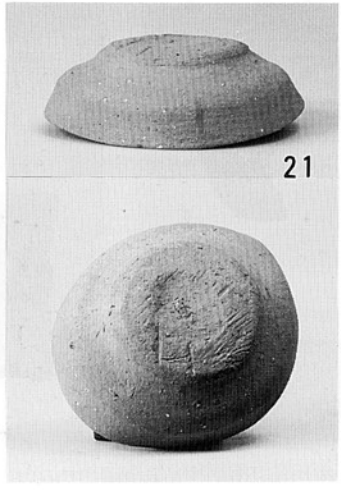
出土遺物

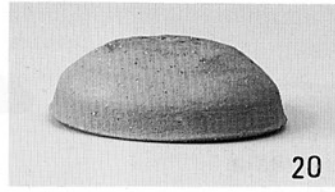

13

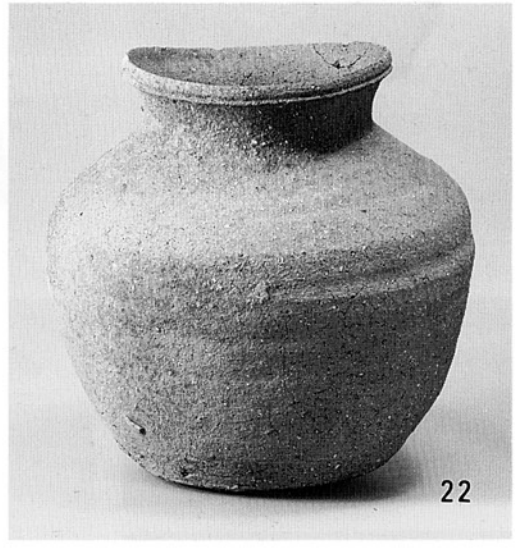

14

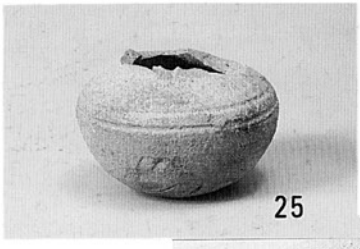

18

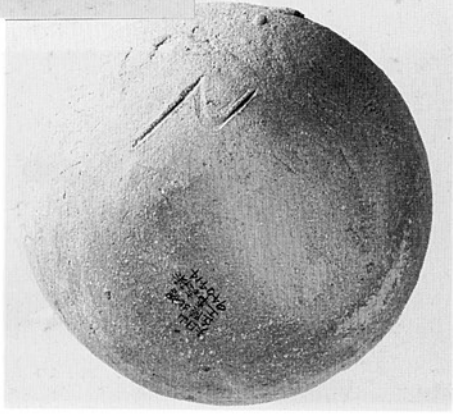

19


21


20


22


25



26

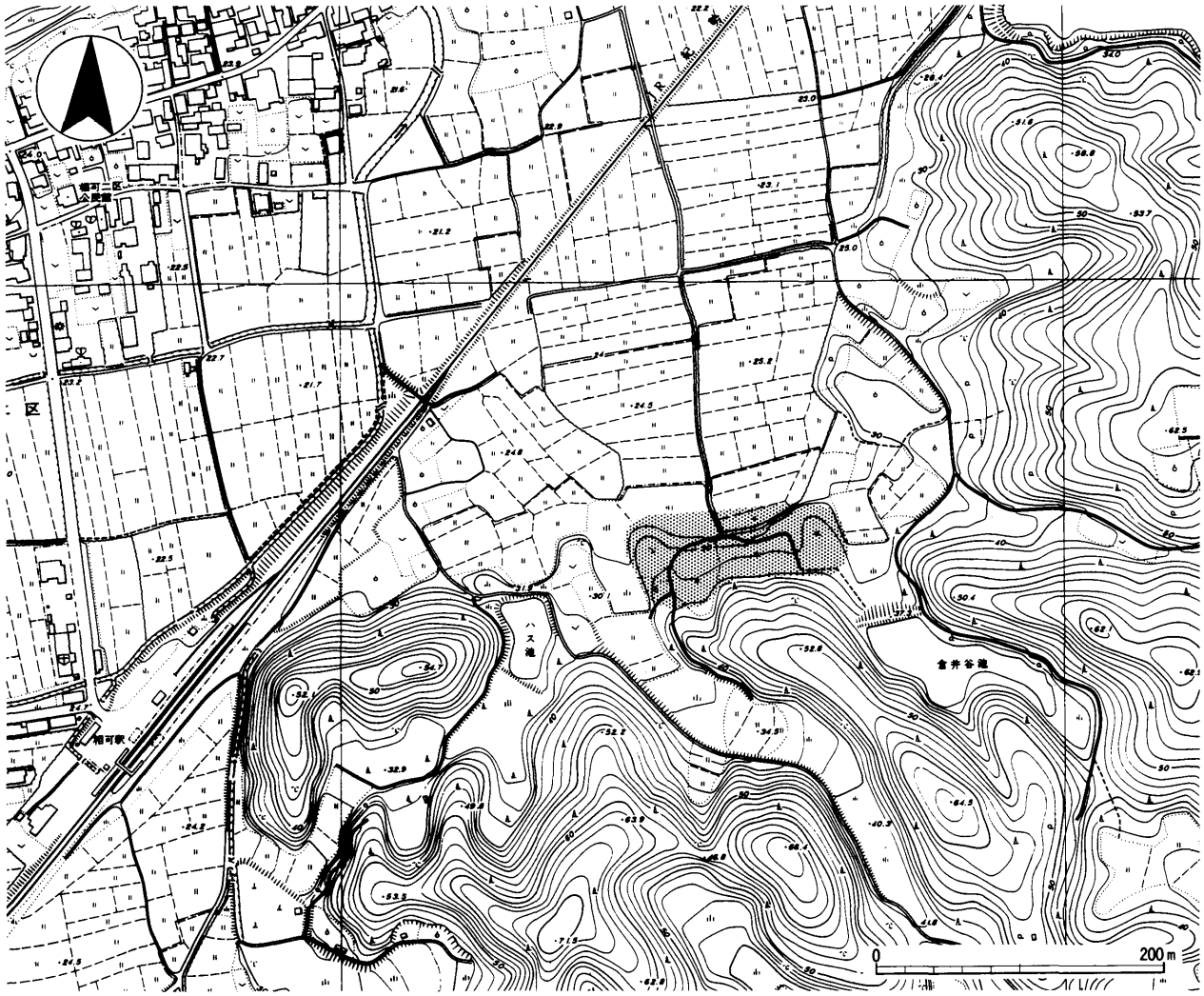
V. 甘糟遺跡

1. はじめに

甘糟遺跡は倉井谷池の西側丘陵の北裾に広がる、標高30～34mの中位段丘面と、その下位の標高25～26mの低位面にあたる水田部分に立地し、行政区画上は多気郡多気町大字相可字甘糟に属する。

1991（平成３）８月26日～10月14日まで、北に隣接する巣護遺跡（旧称多気郡条里遺構）とともに、試掘調査を実施した。その結果、少量の遺物が出土したものの、遺構は確認できなかった。特に中位段丘面上は、以前は水田に、現況では果樹園として利用されており、遺構は開墾時に撹乱・削平されたものと考えられ、本調査には至らなかった。

なお、本遺跡と同時に試掘調査を実施した多気郡条里遺構については、明確な条里遺構が確認できなかったことから、遺跡名としては遺構・遺物が確認できて本調査の実施対象地となった地区の小字名をとって、巣護遺跡と改めた。地形的には甘糟遺跡の低位部分と巣護遺跡とは明確に区分はできないが、本報告では本調査を実施した巣護遺跡を除き、それ以南の字荒木に属する部分についても、便宜上甘糟遺跡の範囲に加えて扱うことにした。①



第95図　遺跡地形図（１：5,000）

第96図　調査区位置図（1：2,000）

2．遺　　構

試掘調査は4ｍ×4ｍのグリッドおよび、幅2ｍのトレンチ①を設定して行った。

（1）中位段丘面部［G1～G5］

5カ所のグリッドを設定した。基本的な層序は上から第1層；淡褐灰色土（表土）、第2層；淡灰色土（床土）、第3層；褐色ないし暗黄灰色粘質土、第4層；淡黄灰礫混ないし橙灰色粘質土（地山）であった。

第1層上面から地山面までの層厚は30～35cmで、地山は北へ向かってゆるやかに傾斜し、高度を下げていく。

G1からG5では、調査前の現況ですでに平坦面と段が見られ、開墾時にかなり削平がなされたものと思われ、遺構は全く検出されなかった。

また、遺物については表土から若干の縄文土器や土師器、陶器などが出土した。

（2）低位段丘面部［G6～G9、T1～T8］

G6～G9およびT1～T4は字甘糟、T5～T8は字荒木に属する。現況は水田で、最近まで条里制地割りが残存していた。

T1南端の26ｍからT6北端の23ｍまで、南から北へ向かってゆるやかに傾斜している。

基本的な層序は、上から第1層；淡褐灰色土（表土）、第2層；橙灰ないし黄灰色土（床土）、第3層；淡褐灰色砂質土（遺物包含層）、第4層；褐灰色粘質土（遺物包含層）、第5層；暗青灰色粘土（地山）となり、第1層上面から地山面までの層厚は60～80cmであった。遺物は第3層と第4層に含まれており、その層厚は約30～40cmであった。

この地域は、旧河川あるいは沼状地形に土砂が永年にわたって全面的に堆積したと考えられる状況であった。条里遺構と考えられる溝や畦畔などの遺構は確認できなかった。しかし、遺物については、古墳時代から中・近世にかけての土器片や木製品などが出土した。これらの遺物は、流れ込みのような様相は呈しておらず、付近に遺跡の中心部があるものと思われる。

3．遺　　物

今回の試掘調査で出土した遺物のうち、以下に主なものについて述べる。

1．土器

A．縄文時代の遺物

深鉢（1・2）　G2から出土。破片数にして10片ほどあるが、すべて磨耗が著しい。1は口縁部の破片で、やや内弯する口縁部が若干肥厚する。口縁部外面は無文帯で、その下に横走沈線による文様帯が見られる。沈線間には櫛描条線が充塡されるようであるが、磨耗のため詳細は不明である。2は体部片で、1と同一個体の可能性もある。縦位に垂下する二段のJ字文の二段目の付け根部と考えられる。1に比べ沈線間の間隔が狭い。沈線間に充塡される文様については不明である。後期初頭の中津式に比定される。当遺跡の背後に広がる丘陵で行われた多気ニュータウン造成地内の発掘調査[2]や、当遺跡北方約400mに位置する上ノ垣外遺跡[3]でも、やはり中津式の土器が出土しており、関連が考えられる。

B．古墳時代の遺物

土師器台付甕（3）　同一個体と思われる破片が10片ほどまとまって出土したものである。脚台部を欠くがほぼ器形が推定できるものである。頸部内面から外側へ折れた立ち上がり部に外接して口縁部が付けられる。端部は面をもち、水平よりやや外側へ下がる。肩部が張らない体部は、最大径付近よりやや上部で“く”字状のハケメが施される。

須恵器杯身（5）　口縁部の細片である。口縁端部を欠くが、立ち上がり部が内傾しさほど高くないものである。

須恵器器種不明（6）　G7からの出土。口縁部の約3分の1が残る。内傾する体部からほぼ垂直に口縁部が立ち上がり、高さ1cmほどでそのままおさまる。また、口縁部の立ち上がり部の内側から水平方向に向かって、蓋の受け部のような鍔がまわる。

胎土は非常に細かく緻密で、焼成は良好、全体に薄手である。内外面とも回転ナデ、体部はきちんとナデたというよりは、むしろ水ビキのままに近い。口縁部から肩部にかけての外面に自然釉がかかる。類例をみないので、あるいはこの時代のものかどうか不詳であるが、ここではとりあえず古墳時代としておきたい。

このほか、前期に属すると考えられる土師器壺の底部（4）などがある。

C．平安時代の遺物

黒色土器椀（7）　内面のみをいぶした黒色土器A類の椀。内面に横方向のややあらいミガキが見られる。

土師器甕（8・9・10）　いずれも小片。（8）には焼成前に内側から開けられた穿孔が見られる。いずれも平安時代後期～末期のものであろう。

製塩土器（11）　細片のため口径の復元さえできないものである。他に1片ある。

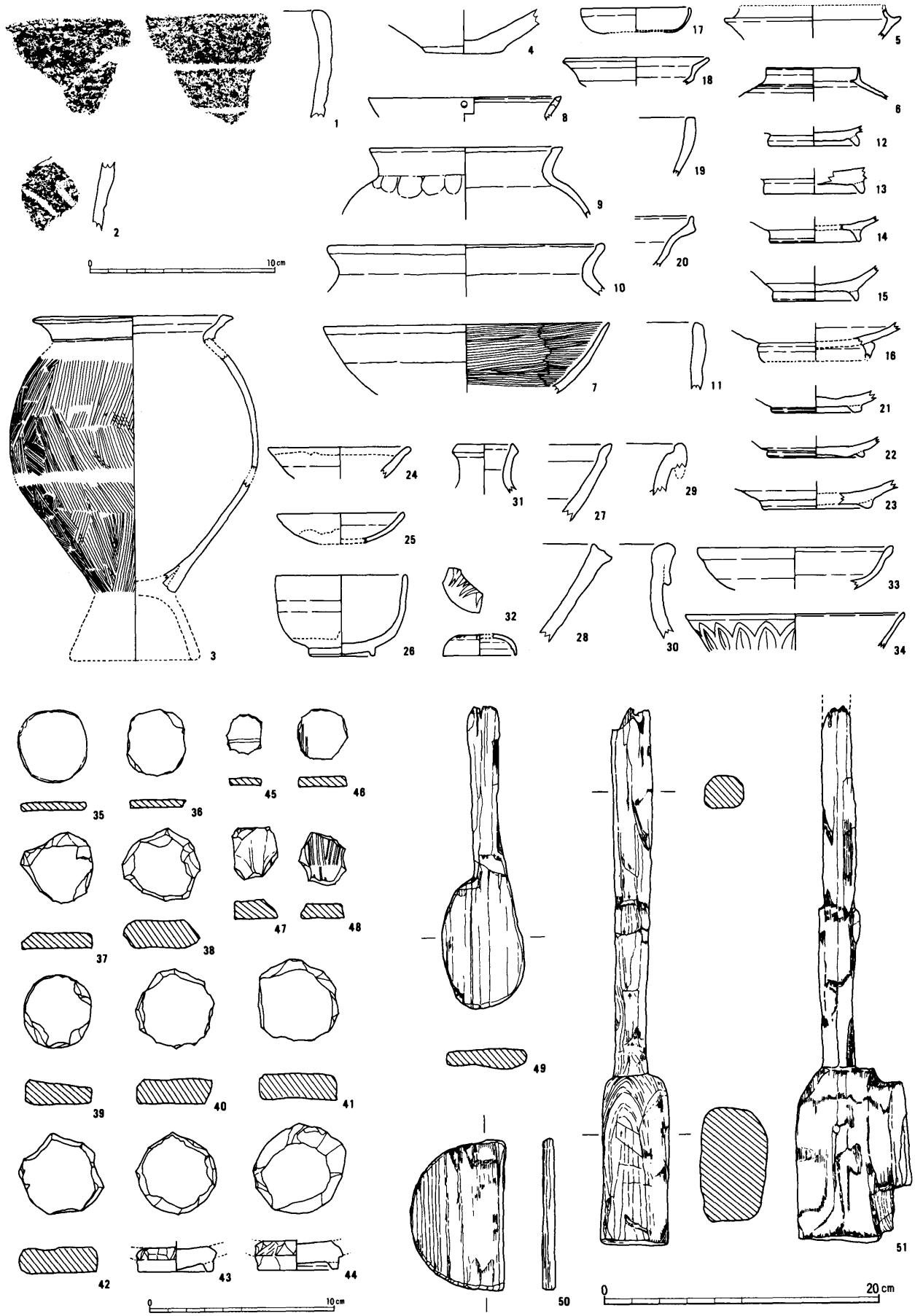
灰釉陶器（12～16）　出土点数は少なくないがすべて小片。椀が多く底部の一部を図示した。高台は内弯気味に外側へ開き三日月高台になるものが多く見られる。黒笹90号～折戸53号窯式期[4]に相当するものであろう。

D．鎌倉時代以降の遺物

鎌倉時代以降の遺物には、時代的にも器種などにも雑多なものであるため、ここではすべて一括して扱った。

山茶椀の出土数は少なく、（21～23）の内（22）は灰釉陶器の可能性がある。縁釉小皿（24）、鉄釉小皿（25）も小片である。（26）は鉄釉椀、（27）はこね鉢、（28）は常滑産のすり鉢、（29・30）は常滑産の甕である。このほか、淡い緑黄色の施釉された瓶子（31）、合子の蓋（32）、青磁皿（33）や椀（34）などがある。

また、量的に多いのが加工円盤である。ここに図示した14点（35～44）のほかに、未製品と思われるものも数点ある。（35・36）は土師器の鍋の体部片を転用したもので、（35）は全周をていねいに磨いている。また（36）には表面にハケメが見られる。（37）は、平安時代の灰釉陶器の甕の体部片を転用加工したものであるが、未製品である。（38～42・47）は常滑産甕の体部片の加工品。特に（39）は円



第97図　出土遺物実測図（１：４、ただし１．２．35～44は１：３）

形に加工した後、全周をていねいに研磨している。他のものは、荒割りもしくはよりていねいに調整を加えたもので、研磨は行っていない。（47）は未製品。（43・44）は天目茶椀の底部を転用したもの。（45）は淡黄緑色の施釉陶器の体部片の転用。（46・48）はすり鉢の体部片の転用品である。

その他、木製品として杓子（49）、桶底（50）、杵（51）などが出土した。

なお、この木製品の樹種を同定[5]した結果、49の杓子と50の桶底はヒノキ属に、51の杵はコウヤマキに同定された。

杵は形態の違いに関係なく、堅い材質をもつカシの仲間やシイノキ属などの広葉樹を利用する例が多く、本遺跡でのコウヤマキは同定例が少ないようである。

4．結　　語

甘糟遺跡は大日山古墳群の築かれた相可南東方の低丘陵北裾部に立地する。地形的には中位段丘面に相当する。

櫛田川中流域には広く段丘地形が展開するが、下流域に移り変わろうとする相可付近では、その規模も小さくなり、当遺跡の立地する段丘面も非常に狭小なものである。

試掘調査の結果、柑橘類の畑地化などの開墾のため、すでに削平されたり、撹乱を受けたりして遺構は確認できず、本調査には至らなかった。

しかし、遺物については段丘面上の試掘坑や、その下の低位面に設けた試掘坑からも種々の遺物が出土した。そして、北に続く巣護遺跡へと切れ目なく続いていく様相を呈していた。

ただし前述のように、中位段丘面はごく狭い範囲であるため、集落の立地する余地はなく、別のところに遺跡の中心を考えたい。

（田村陽一）

【註】

① 本書で使用したトレンチ番号のうちＴ４は試掘調査及び概報では５の、またＴ５は同じく21の番号を与えている。

② 未発表資料であるが、多気町教育委員会の御好意で実見させていただいた。

③ 三重県埋蔵文化財センター『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター　1994

④ 楢崎彰一『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(1)』愛知県教育委員会　1980

⑤ パリノ・サーヴェイの分析による。

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-01	縄文土器 深鉢	試掘 G2 表土	—	—	—	口縁部内外面ミガキ？沈線間は条線？	良 砂粒多く含む	良	外 7.5YR7/6 橙 内 5YR7/6 橙	小片	磨滅著しい
2	001-02	縄文土器 深鉢	試掘 G2 表土	—	—	—	内・外面ナデ 沈線	良 砂粒多く含む	良	外 10YR4/6 褐 内 5YR5/8 明赤褐	細片	No.1と同一個体
3	004-03	土師器・台付甕	試掘T6①内 表土～砂層	(14.6)	—	—	口縁端部やや外下方に開き、頸部に段。ハケメ	良 砂粒を含む	良	外 10YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/4 浅黄橙	口縁部、体部30%	
4	007-02	土師器・壺	試掘 T3 表土～灰粘底付近	(5.6) 底径	—	—	ナデ	精良 砂粒を含む	良	外 7.5YR7/4 にぶい橙 内 7.5YR4/2 灰褐	底部40%	
5	002-02	須恵器・杯身	表土	(10.4)	—	—	ロクロナデ	やや粗	良	外 2.5GY6/1 オリーブ灰 内 N7/1 白灰	体部20%	口縁部欠損
6	002-01	須恵器・器種？	試掘 G7 表土	(6.7)	—	—	ロクロミズビキ ロクロナデ	精良	良	外 N5 灰 内 N4 灰	口縁部30%	
7	004-02	黒色土器・椀	試掘T5③	(20.8)	—	—	ナデ、内面ヘラミガキ 内面のみ黒色化	精良	良	外 10YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/3 浅黄橙	口縁部30%	
8	007-03	土師器・甕	試掘T2西側 表採	(14.0)	—	—	ヨコナデ、焼成前穿孔	良 砂粒を含む	良	外 10YR8/3 浅黄橙 内 2.5Y8/4 淡黄	口縁部20%	
9	004-01	土師器・甕	試掘T7⑥ 表土～黄砂	(14.1)	—	—	ヨコナデ、ユビオサエ	並 砂粒を含む	良	外 10YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/3 浅黄橙	口縁部30%	
10	005-01	土師器・甕	試掘T6⑤内 表土～黄砂	(19.8)	—	—	ヨコナデ	良 砂粒を含む	良	外 7.5YR8/6 浅黄橙 内 7.5YR8/2 灰白	口縁部30%	
11	006-04	製塩土器	試掘 T2 表採	6.4 底径	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	ロクロ回転方向は不明
12	006-07	灰釉陶器	試掘T21①内 表土～	6.4 底径	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	ロクロ回転方向は不明
13	006-08	灰釉陶器	試掘T21①内 表土～	(7.3) 底径	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部30%	ロクロ回転方向は不明
14	005-03	灰釉陶器	試掘T6①内 表土～砂層	(6.4) 底径	—	—	ロクロナデ 体部内面 施釉	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部40%	ロクロ回転方向は不明
15	005-04	灰釉陶器	試掘T6②内 表土～砂層	6.3 底径	—	—	ロクロナデ 底部外面糸切り痕	良	良	外 7.5YR8/2 灰白 内 7.5YR8/2 灰白	底部100%	ロクロ回転方向は不明
16	005-06	灰釉陶器	試掘T6②内 表土～砂層	(7.6) 底径	—	—	ロクロナデ 底部～体部外面施釉	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部25%	ロクロ回転方向は不明
17	003-02	土師器・小皿	試掘 G9 表土及び床土	(8.0)	—	—	ユビオサエナデ	精良	良	外 7.5YR8/3 浅黄橙 内 7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部30%	
18	003-01	土師器・落とし蓋	試掘 G9 表土及び床土	(10.8)	—	—	ヨコナデ	精良	良	外 7.5YR8/4 浅黄橙 内 7.5YR8/1 灰白	口縁部10%	
19	007-01	土師器・鉢？	試掘 T3 表土～灰粘底付近	(28.2)	—	—	ヨコナデ	精良	良	外 7.5YR8/8 黄橙 内 7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部30%	器面の磨耗のため詳細不明
20	002-06	土師器・鍋	試掘 G9 表土及び床土	—	—	—	ヨコナデ	良	良	外 7.5YR6/6 橙 内 7.5YR6/6 橙	口縁部10%	外面に付煤
21	002-04	山茶椀	試掘G6付近 トレンチ1 表採	6.6 底径	—	—	ロクロナデ、底部外面に糸切り痕	良	良	外 2.5Y7/1 灰白 内 2.5R7/1 灰白	底部100%	ロクロ回転方向は不明
22	002-05	山茶椀	試掘 表採	(7.0) 底径	—	—	ロクロナデ、底部外面に糸切り痕	良	良	外 2.5YR7/1 灰白 内 2.5YR7/1 灰白	底部80%	ロクロ回転方向は不明
23	003-04	山茶椀	試掘 表採	(8.0) 底径	—	—	ロクロナデ、底部外面に糸切り痕	良	良	外 2.5R8/2 灰白 内 2.5Y8/1 灰白	底部40%	ロクロ回転方向は不明
24	002-08	緑釉小皿	試掘 表採	(10.2)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外面に施釉(灰釉)	良	良	外 7.5YR8/2 灰白 内 7.5YR7/1 明褐灰	口縁部20%	ロクロ回転方向は不明
25	003-03	鉄釉小皿	試掘 表採	(9.2)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外面に施釉(鉄釉)	良	良	外 5YR4/4 にぶい赤褐 内 5YR3/4 暗赤褐	口縁部15%	ロクロ回転方向は不明
26	003-06	鉄釉椀	試掘 T1内 表採	(8.6)	—	—	ロクロナデ、削り出し高台、内外面施釉(鉄釉)	良	良	外 N4 灰 内 7.5GY 明緑灰	口縁部～底部50%	ロクロ回転方向は不明

第26－1表 遺物観察表

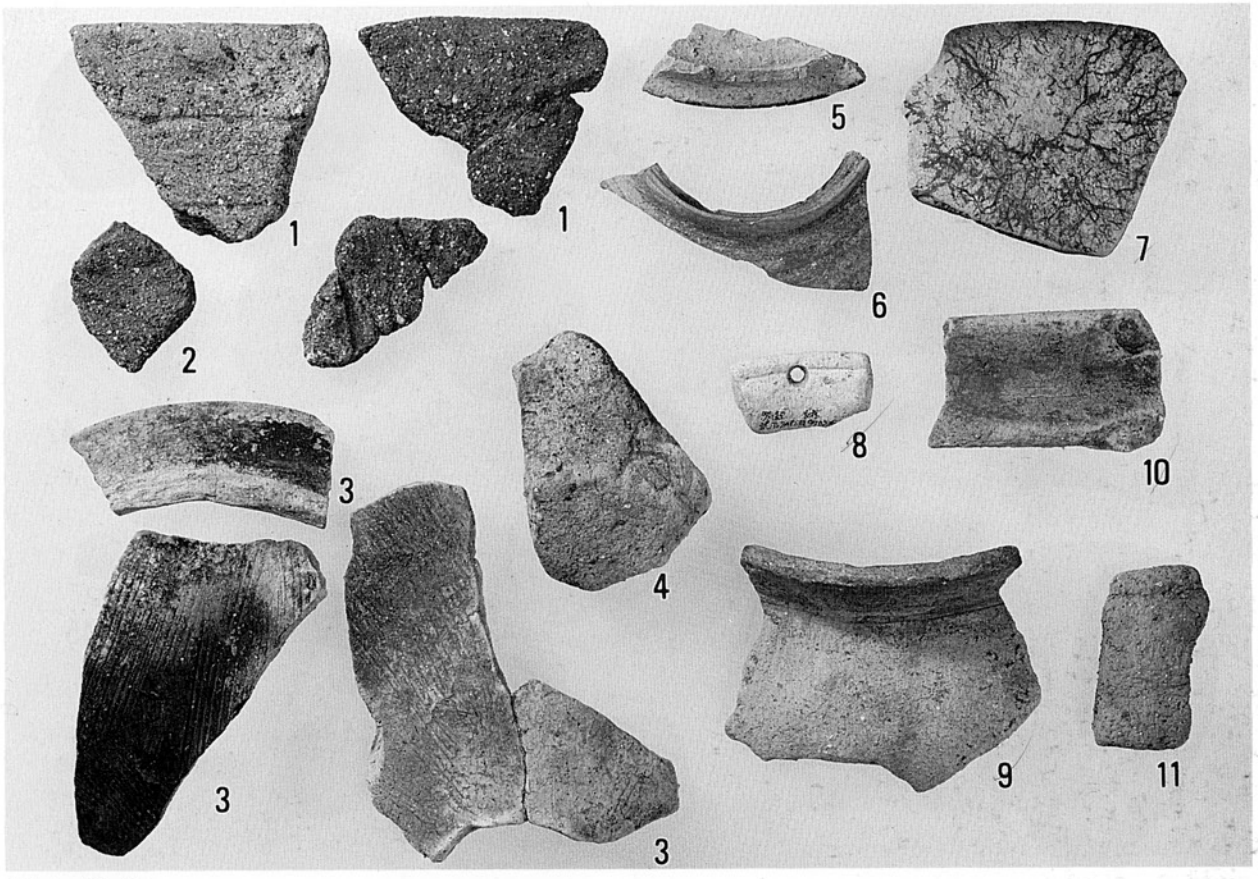
No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
27	005-05	こね鉢	試掘 T6 表採	(38.8)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 灰白 内 N3 暗灰	口縁部30%	ロクロ回転右回り
28	006-01	すり鉢	試掘T6③ 表土～砂層	—	—	—	ロクロナデ	良 砂粒を含む	良	外 10YR6/4 にぶい赤橙 内 10YR6/3 にぶい赤橙	口縁部小片	
29	006-02	甕	試掘T21①内 表土～	—	—	—	ナデ	良 砂粒を含む	良	外 N8 灰白 内 N7 灰白	口縁部細片	常滑産
30	006-03	甕	試掘T7②内 表土～砂層	—	—	—	ナデ	良 砂粒を含む	良	外 N7 灰白 内 N7 灰白	口縁部細片	常滑産
31	003-05	瓶子	表採	—	—	—	口縁部内外面施釉	良	良	外 7.5GY7/1 明オリーブ灰 内 2.5GY7/1 明オリーブ灰	口縁部40%	
32	005-02	合子蓋	試掘T3 表土～灰粘底	(5.4)	—	—	ロクロナデ 口縁部内外面施釉	良	良	外 7.5Y8/1 灰白 内 2.5GY7/1 灰白	口縁部30%	
33	003-07	青磁皿	試掘T6①内 表土～砂層	(14.2)	—	—	ロクロナデ 口縁部内外面施釉	良	良	外 5GY7/1 灰白 内 2.5GY8/1 灰白	口縁部30%	
34	002-03	青磁椀	表採	(15.9)	—	—	ロクロナデ 口縁部内外面施釉	良	良	外 10G7/1 明緑灰 内 10G7/1 明緑灰	口縁部25%	
35	002-07	加工円盤	試掘G6付近 表採	3.9 縦	3.8 横	0.4 厚	全周研磨	良 砂粒を含む	良	外 5YR6/8 橙 内 5YR7/6 橙		土師器鍋の体部片転用
36	008-01	加工円盤	試掘T5③	3.6 縦	3.1 横	0.4 厚		並	良	外 10YR8/2 灰白 内 10YR8/3 浅黄橙		土師器鍋の体部片転用
37	008-05	加工円盤	試掘T7②内 表採	3.8 縦	3.9 横	0.8 厚		並	良	外 7.5GY7/1 灰白 内 N7 灰白		灰釉陶器の体部片転用、未製品
38	008-09	加工円盤	試掘T3 表土～	4.0 縦	4.3 横	1.4 厚		並 砂粒を含む	良	外 10R6/6 赤橙 内 10R6/6 赤橙		常滑産大甕の大部片転用
39	008-07	加工円盤	試掘T1 表土～	3.9 縦	3.8 横	1.3 厚	全周研磨	良 砂粒を含む	良	外 7.5YR8/4 浅黄橙 内 7.5YR8/2 灰白		常滑産大甕の大部片転用
40	008-06	加工円盤	試掘T7④ 表土～砂層	4.2 縦	4.2 横	1.4 厚		並	良	外 7.5R4/1 暗赤灰 内 7.5R4/6 赤		常滑産大甕の大部片転用
41	008-04	加工円盤	試掘T7② 表土～砂層	4.4 縦	4.4 横	1.5 厚		並	良	外 2.5YR5/1 赤灰 内 2.5YR6/6 橙		常滑産大甕の大部片転用
42	008-10	加工円盤	試掘T1 表土～	4.4 縦	4.6 横	1.4 厚		並	良	外 2.5YR6/3 にぶい橙 内 2.5YR6/3 にぶい橙		常滑産大甕の大部片転用
43	008-08	加工円盤	試掘T2 表土～砂層	4.4 底径	—	1.4 高		良	良	外 N7 灰白 内 N7 灰白		天目茶椀の底部転用
44	008-02	加工円盤	試掘T1 表土～	4.4 底径	—	1.6 高		並	良	外 N8 灰白 内 N7 灰白		天目茶椀の底部転用
45	007-05	加工円盤	試掘T2 表採	2.1 縦	1.9 横	0.4 厚		並	良	外 7.5Y6/1 灰 内 7.5Y6/1 灰		施釉陶器片の転用
46	007-04	加工円盤	試掘T1 表土～	2.7 縦	2.7 横	0.5 厚		並	良	外 2.5Y7/2 灰黄 内 2.5Y7/2 灰黄		すり鉢の体部片の転用
47	008-03	加工円盤	試掘T5③	2.8 縦	2.4 横	1.0 厚		並	良	外 2.5YR7/4 淡赤橙 内 2.5YR6/4 にぶい橙		常滑産大甕の体部片転用、未製品
48	007-06	加工円盤	試掘T2 表採	2.8 縦	2.6 横	0.8 厚		並	良	外 10YR8/2 灰白 内 10YR8/2 灰白		すり鉢の体部片の転用
49	009-01	木製品 杓子	試掘G9	(21.9) 縦	6.0 横	1.5 厚						ヒノキ属の樹種を使用
50	009-02	木製品 桶底	試掘T5①	10.8 縦	(6.8) 横	0.9 厚						ヒノキ属の樹種を使用
51	009-03	木製品 杵	試掘T1	(39.0) 縦	8.0×4.0 杵部	2.5×2.9 柄部						コウヤマキ製

第26－2表 遺物観察表

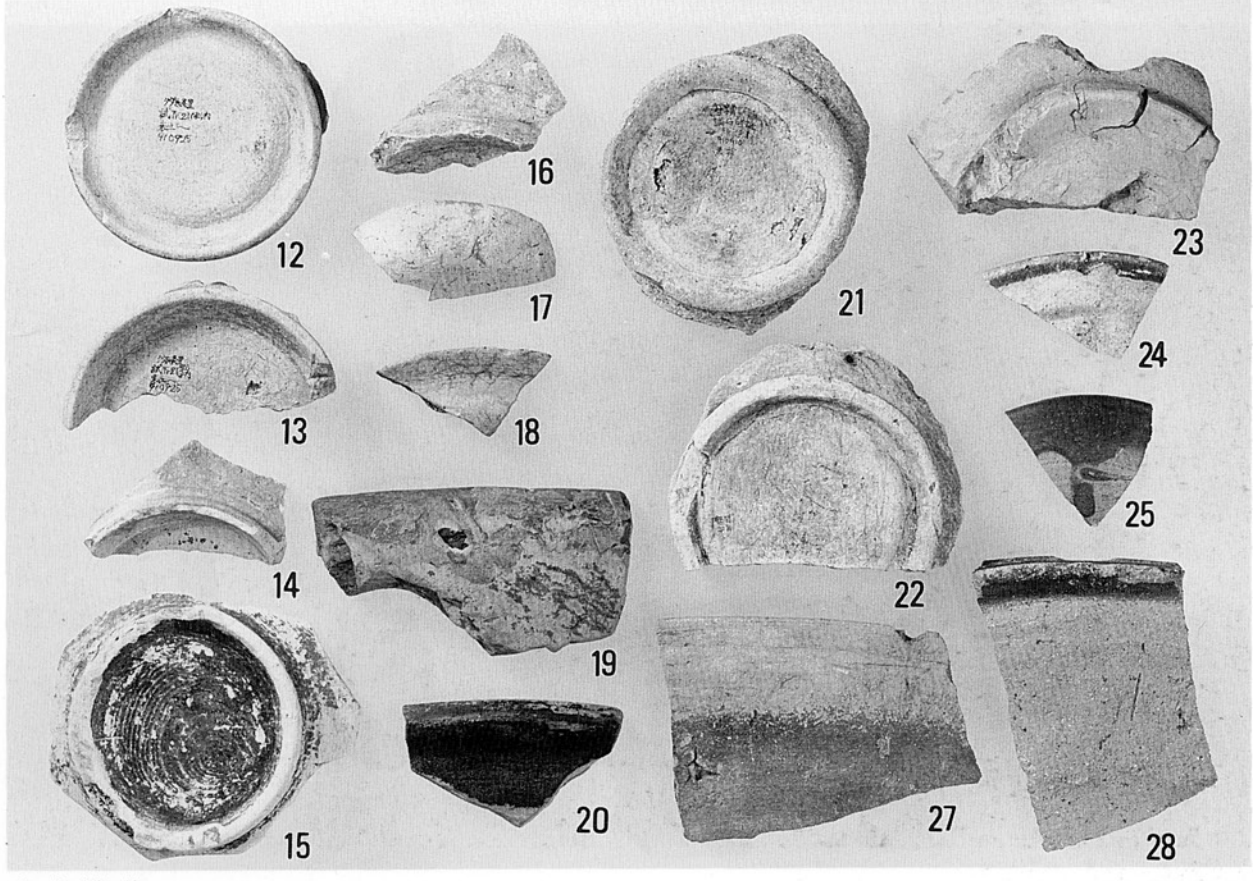
PL.1

遺跡近景（東から）

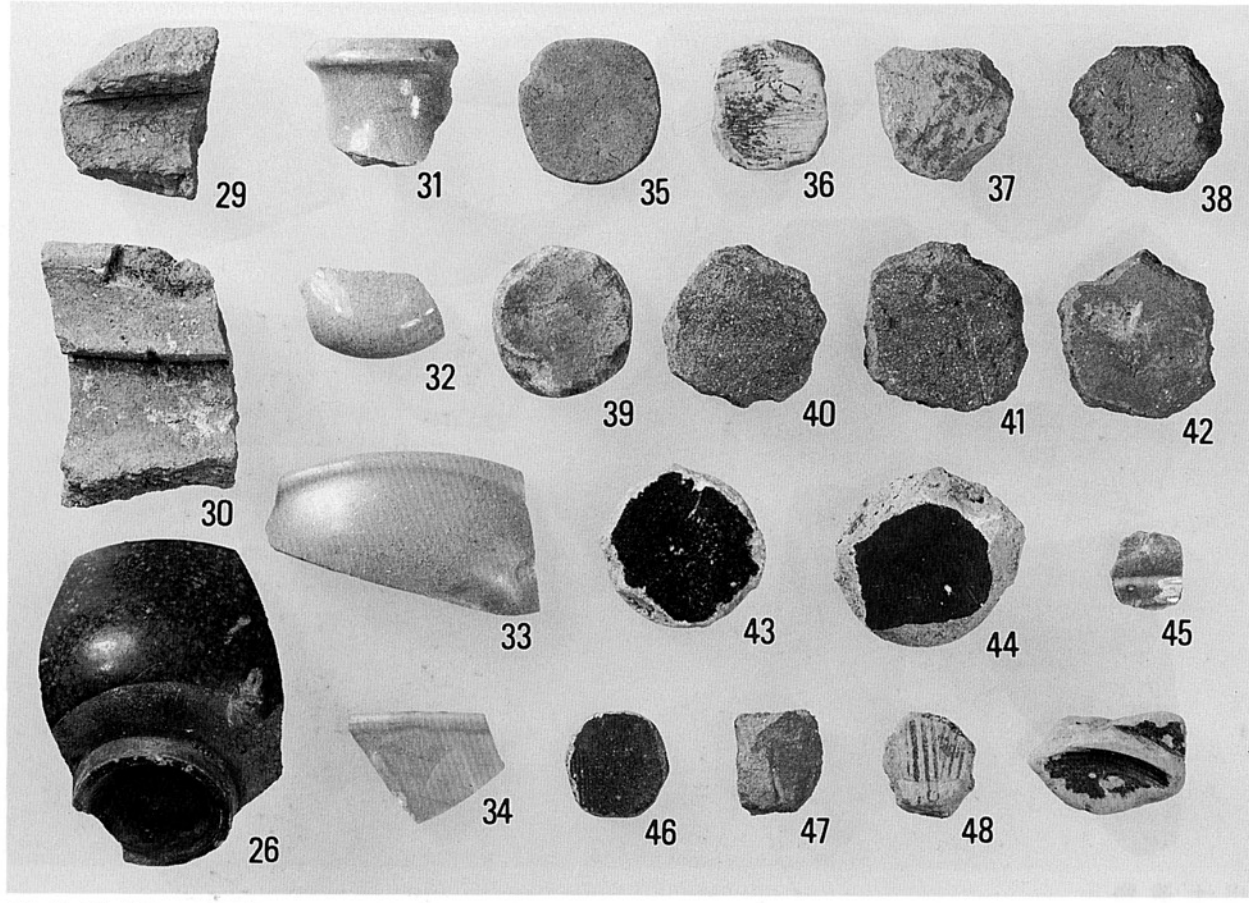
低位段丘部近景（南から）



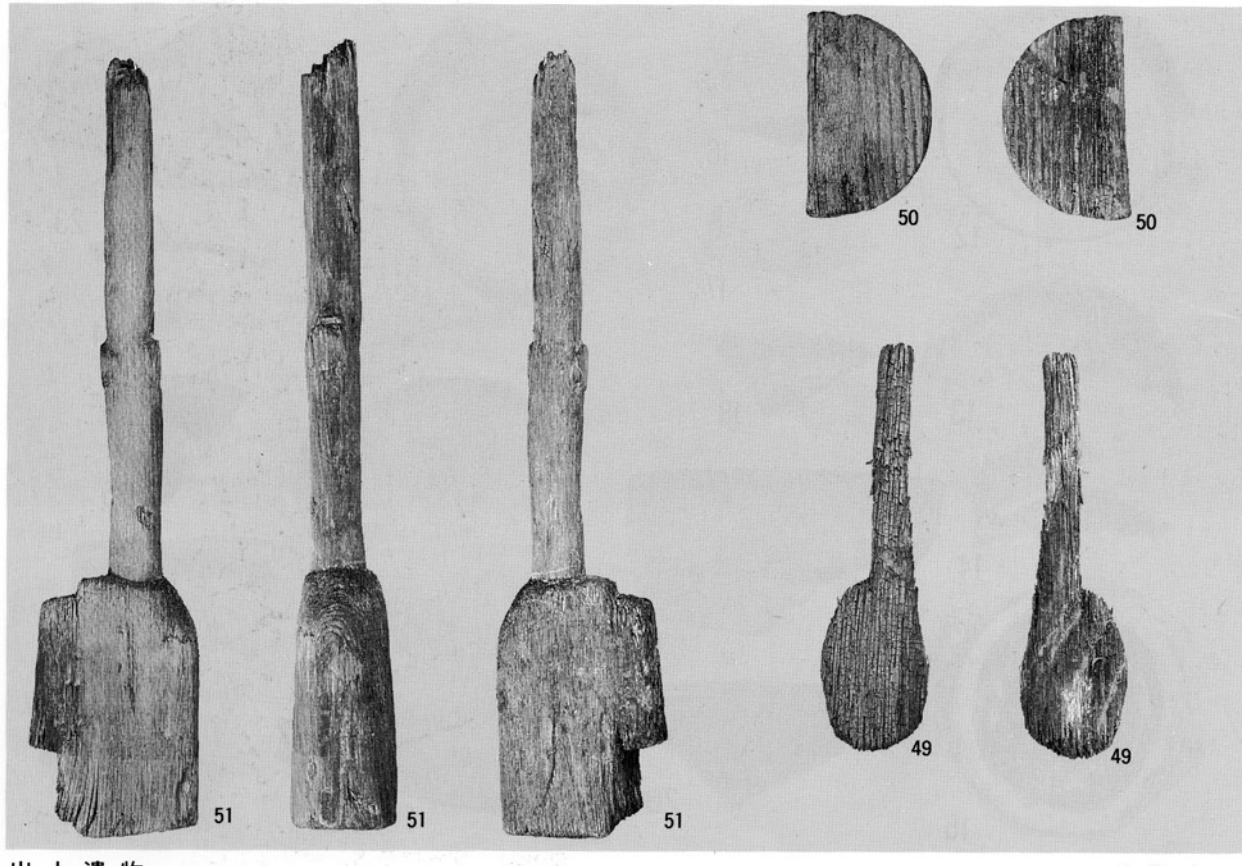
出土遺物



出土遺物


29
31
35
36
37
38
32
39
40
41
42
30
33
43
44
45
26
34
46
47
48

出土遺物


50
50
51
51
51
49
49

出土遺物

Ⅵ. 巣護遺跡

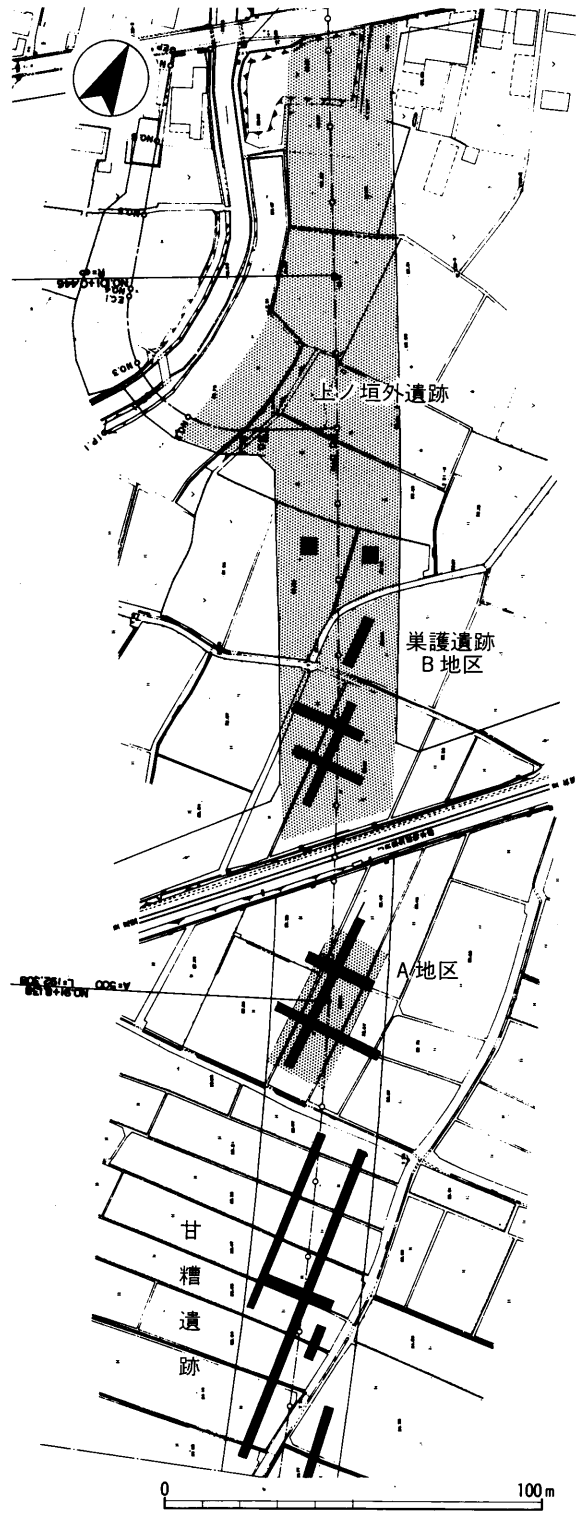
1. はじめに

巣護遺跡は甘糟遺跡の北に隣接する水田地帯に位置し、行政的には多気町荒蒔字巣護に属している。分布調査時に多数の遺物が散布していることと、古代条里制の名残である土地割りが残っていたことから、既述の甘糟遺跡地も含めた範囲を、とりあえず多気郡条里遺構と名付け、調査対象遺跡として取り扱うこととした。

1991（平成３）年８月26日～10月14日まで、甘糟遺跡とともに試掘調査を実施した。この時には、バイパス用地外の水田耕作にからんで、坪境となる畦畔にほとんどトレンチが設定できず、条里に関係する遺構の確認が十分なされなかった。結局、試掘調査では条里に関する遺構が検出されず、中世の遺物がまとまって出土した２カ所について、本調査を実施することになった。本調査の対象となったのは、ＪＲ紀勢本線の線路をはさんで南北にわかれ、線路の南側をＡ地区、北側をＢ地区とよぶことにした。

なお、Ｂ地区は北で上ノ垣外遺跡に隣接しているため、遺跡範囲についてどう区分するかが問題となった。上ノ垣外遺跡は、周囲より若干高い自然堤防上に立地しており、地形的にはまとまりが認められたため、この高い部分を上ノ垣外遺跡とし、字上ノ垣外に属しながら、地形的に異なる南端の水田部は巣護遺跡としていた。しかし、発掘調査の結果からは、この部分にも上ノ垣外遺跡の遺跡範囲が及んでいることが明らかとなった。そのため、当初は巣護遺跡として取り扱っていた水田部分も上ノ垣外遺跡に含めることにした。したがって、上ノ垣外と巣護の字境を走る農道を両遺跡の境とすることにした。

周囲の農業用排水の関係から、Ｂ地区の一部については1992（平成３）年度末に、本調査に先行して急遽調査（約150㎡）を実施した。　（田村陽一）



第98図　調査区位置図（１：2,000）

2．調査の結果

1．A地区

（1）遺構

A地区はJR紀勢本線南側に位置する。調査前の現況は、後背湿地と呼ばれる低湿地に広がる水田であった。基本的な層序は上から第1層（表土）灰褐色土に黄褐色土混入、第2層（床土）黄灰色土に黄褐色土混入、第3層黄橙色土に黄灰色土混入、第4層（包含層）黄灰色粘質土、第5層（検出面）黒褐色土に自然木や葉・枝など混入、第6層淡黄色砂、第7層青灰色粘土となり、地表から約2.1～2.6mで礫層にいたる。

調査の結果、条里制に関連するような遺構、およびその他の遺構は確認できなかった。調査区北東の隅で自然木や葉・枝などが腐敗せずに堆積した窪地が確認された。その規模は7.1×2.0m、深さ約20cmほどであった。遺物は出土しなかったため、時期などは不明である。

（2）遺物

試掘調査も含めて整理箱に7箱ほど出土した。遺構は検出できなかったため、すべて包含層からの出土である。以下順次報告する。

A．縄文時代の遺物（2～4）

双口壷（2）　双口の異形土器である。底部は欠損するため不明であるが、壷状の胴部に立ち上がるふたつの筒状の口縁部を有する。胴部内面には粘土紐の接合痕が観察できる。器表面は刻みとヘラ描き沈線で文様が描かれている。

口縁端部外面には表裏で方向を変えて、連続的なヘラ刻みによる短沈線を描く。その下に筒状の口縁部の対向する内側部分から始まって、ほぼ全周して終わる長楕円区画沈線文を施す。この区画文の中には3本の並行沈線を充填している。

頸部にも並行斜沈線を施して、複合鋸歯文状にしているようであるが、磨滅が激しく詳細は不明である。また、口縁部のつけ根部分にあたる胴部上半にも、はしご状の沈線文が見られる。

体部上半にはやはり、並行沈線によって長楕円区画が描かれ、その中を複合鋸歯文で埋めている。胴部下半には施文されない。

器壁は薄く仕上げられて、ていねいなヘラミガキが施された精製土器である。胎土は精良で、1～2mmの石英や長石粒を含んでいる。焼成は良である。

深鉢（3・4）　3は波状口縁の深鉢片と考えられ、北白川上層式期に、4は磨滅のため器面が荒れて文様が全く見えないが、器形からして一乗寺K式～元住吉山式にあたると思われる。

B．弥生時代の遺物（5～9）

壷型土器（5～8）　5は壷の口縁部で、円形浮文が施されている。6～8は底部のみの残存で、風化が激しい。

台付甕（9）　台付甕の脚部で底部に穿孔が施されている。内外面にはハケ目を施す。

C．古墳時代の遺物（10）

土師器高杯（10）　杯上部はヨコナデされ、下部は絞りぎみにユビオサエされる。古墳時代後期のものと思われる。

D．飛鳥・奈良時代の遺物（11～14）

土師器杯（13）　平底の底部より屈曲して立ち上がる口縁部をもつもので、風化が激しい。

土師器皿（14）　平底の底部より強く屈曲して立ち上がる口縁部をもち、底部内面に暗文を施す。

須恵器杯（11）　口径11.3cm，推定高3.5cm。口縁部が外反する。

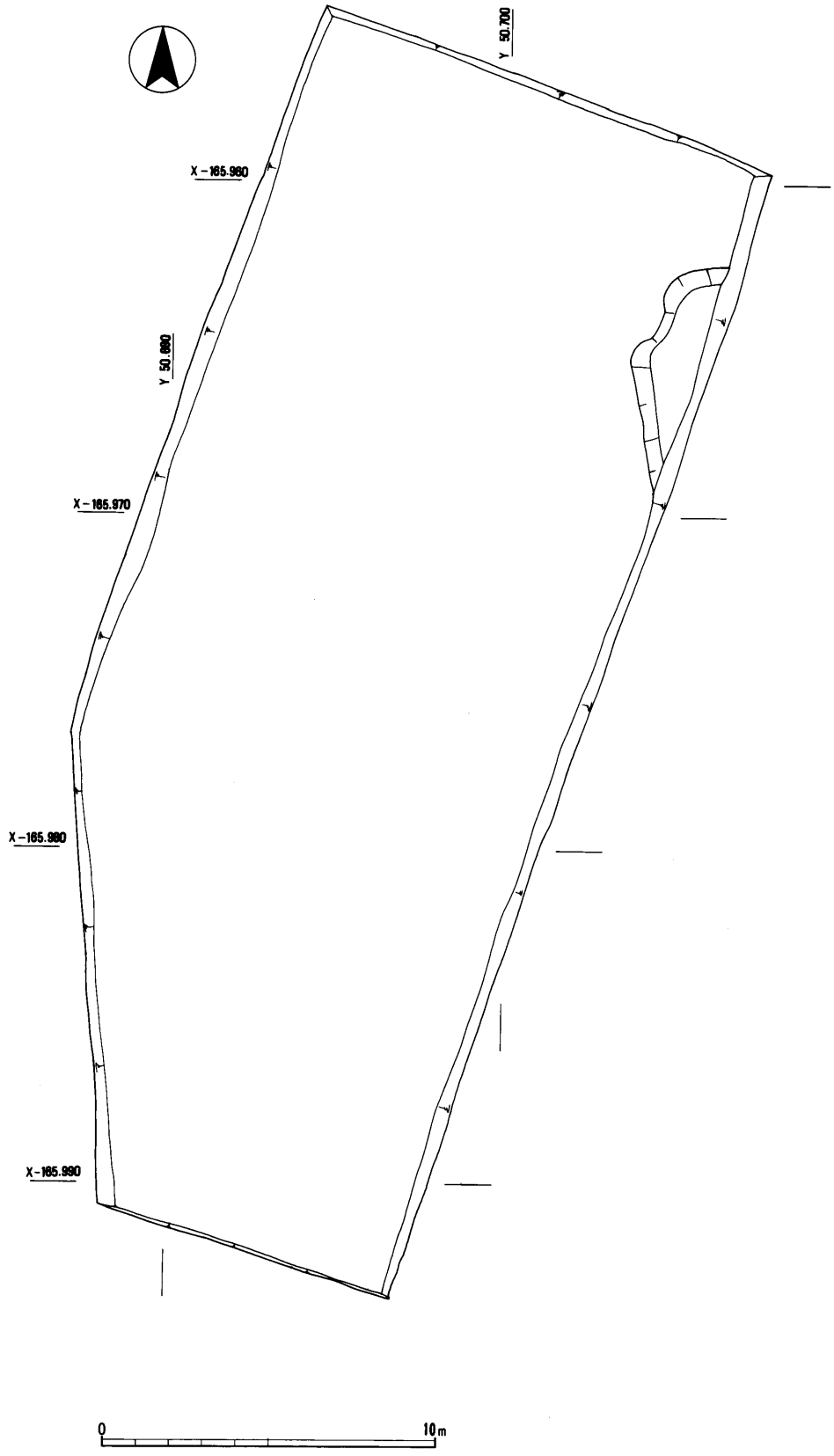
須恵器壷（12）　短頸壷の口縁部である。

E．平安時代～鎌倉時代の遺物（15～25）

石帯（1）　長さ4.3cm、幅2.7cm，厚さ0.7cmをはかる流紋岩製の丸鞆である。半円形を呈し、下部に長方形の穿孔をもたず、裏面に装着用の孔が2孔1対で3ケ所あけられている。重量は16.3g。

土師器皿（30）　ロクロ製土師器の皿で、平安時代後期のものと思われる。

土師器甕（15～18）　いずれもく字形に外反する口縁からなり、端部を内側に折り返すものである。



第99図　A地区平面図（1 ：200）

平安時代後期のものと思われる。

灰釉陶器椀（19～25）　20・22は三ケ月高台で、その他は幅広の丸い高台で、平安時代中期のものと思われる。

F．鎌倉時代以降の遺物（27～31）

山茶椀（29）　底部外面に墨書が見られる。

山皿（27・28）　27は口縁部外面に面をもち、厚手である。28は低い高台がつき、口縁端部がやや外反する。

常滑産甕（32）　口縁部が折り返され、赤褐色を呈し緻密で、焼成は堅緻である。

天目茶椀（31）　青灰色の素地に茶褐色の釉が厚くかかった口縁部片である。

G．その他の遺物（33～42）

その他、土錘（33）、砥石（41）、刀子（42）、加工円盤（34～39）などがある。

土錘（33）　胴部がふくらみをもつ紡錘状のもので、長さ3.3cm、幅1.3cm、孔径0.45cmをはかる。

砥石（38）　上面と下面に使用痕が認められる。

刀子（39）　錆による腐食がすすんでいるため詳細は不明。ほぼ中央部でくの字状に曲がっており、右側には幅0.7cmの窪みが見られる。

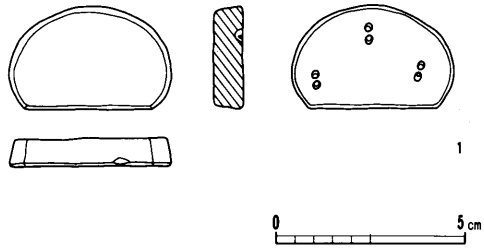
加工円盤（31～36）　34は2本の沈線のある陶器椀の体部を利用しており、他は陶器甕の体部を利用して円形に加工している。

（3）小結

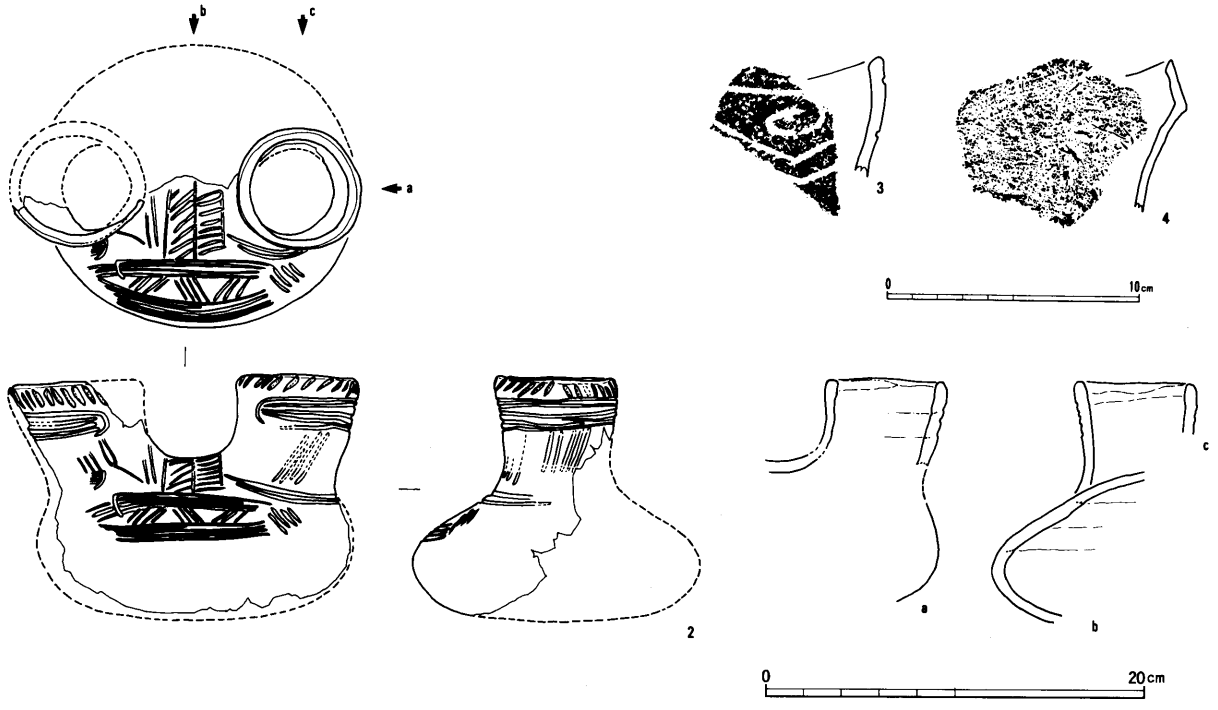
A地区では自然木や葉・枝などが腐敗せずに堆積していた窪地が検出されたが、遺構は発見できなかった。出土した遺物は包含層からではあるが、双口壷や石帯、緑釉陶器片などの特殊遺物が出土している。遺物の残存状況からは、簡単に流れ込みとは断定できない。調査区の近辺へと視点の拡大を図る必要があろう。

出土遺物は縄文時代後期の土器をはじめとして、古墳時代・奈良時代・平安時代の土器、中・近世の遺物まで混じるが、平安時代中期から後期が遺物の中心時期であろう。

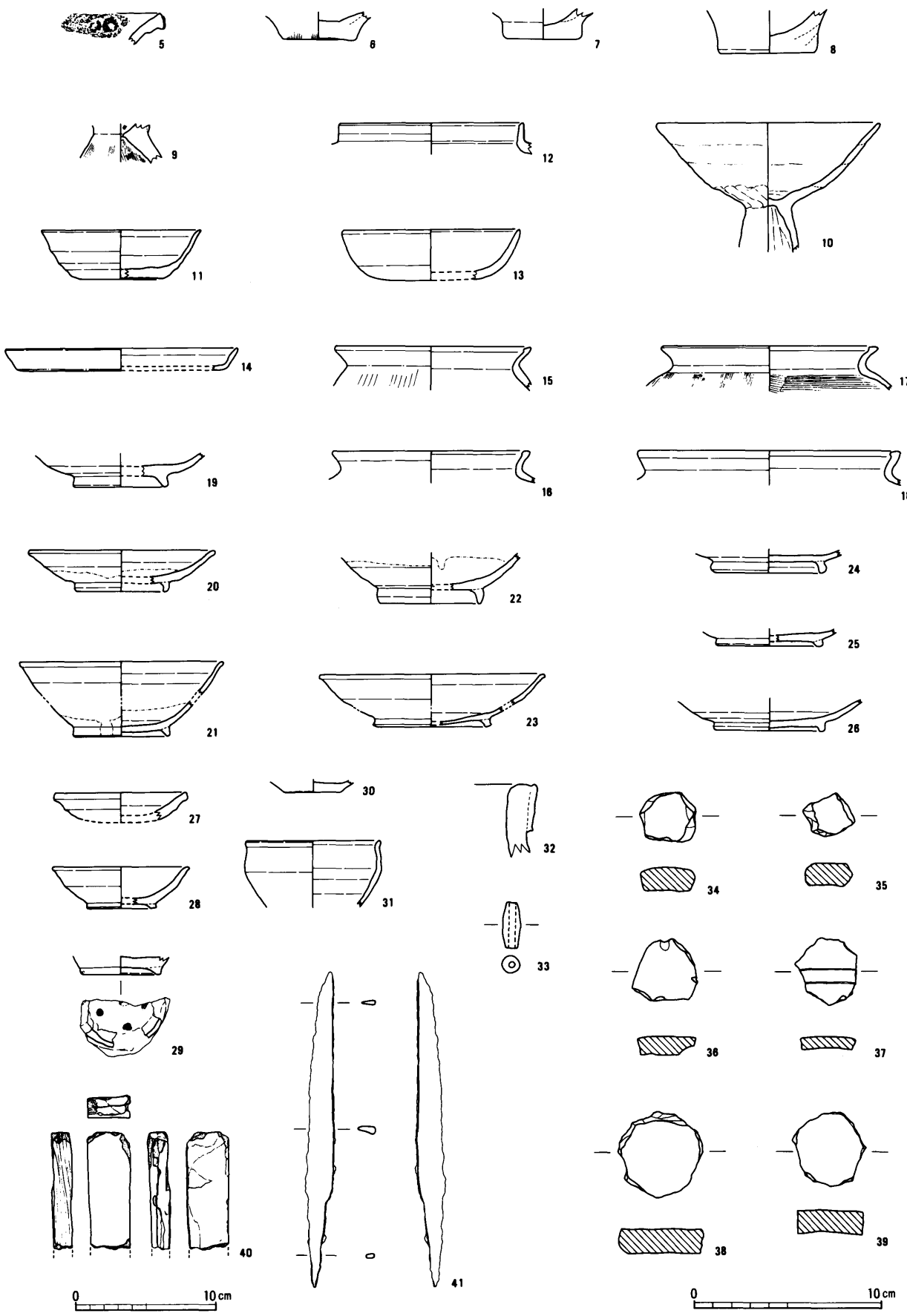
（東　良樹）



第100図　A地区出土遺物実測図（1：2）



第101図　A地区出土縄文土器実測図・拓影（2は1：4．3・4は1：3）



第102図　A地区出土遺物実測図・拓影（1 ： 4、ただし34～39は1 ： 3）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	1-1	石製品 石帯		—	—	長さ 4.3 幅 2.3 厚さ 0.7		—	—		完形	
2	2-1	縄文土器 双口壷	試掘トレンチ No19 包	右 6.2 左 (6.7)	(残部 12.7)			並 0.5～1㎜大の砂粒多く含む。	不良			
3	3-5	縄文土器 深鉢	試掘トレンチ No19 包				・内面ナデ ・外面は、風化激しく、調整等不明。	並 1～3㎜大の砂粒多く含む。	不良		口縁部のみ5×6㎝大の小片。	
4	4-5	縄文土器 深鉢	M69区 包					並 1㎜以上の砂粒見当たらず。	良	外 灰黄褐(10YR5/2) 内 にぶい黄橙(10YR7/3)	6×3㎝大の小片。	北白河上層Ⅲ朝
5	3-7	弥生土器 壷	試掘トレンチ No10				・口縁部内・外面ヨコナデ。 ・口縁部外面に円形浮文。	並	良	外 浅黄橙(10YR8/4) 内 橙(5YR7/6)	口縁部 3×4㎝の小片。	
6	3-2	弥生土器 壷	試掘トレンチ No19			底部径 5.5	・内・外面ナデ ・底部外面…指オサエ	密 1㎜大の砂粒を多く含む。	良	浅黄橙(10YR8/3)	底部のみ 100%	
7	3-1	弥生土器 壷	試掘トレンチ No19			底部径 5.1	・内・外面ナデ	密 1～3㎜大の砂粒多く含む。	不良	外 黄橙(10YR6/8) 内 黒橙(10YR3/1)	底部のみ 100%	
8	3-6	弥生土器 壷	試掘トレンチ No19			底部径 6.4	・内・外面ナデ	密 1㎜大の砂粒多く含む。	不良	外 橙(5YR8/6) 内 浅黄橙(7.5YR8/6)	底部のみ 25%	
9	5-9	弥生土器 台付甕	試掘トレンチ No19			台基部径	・内・外面ハケ目	並	良	外 灰白(2.5Y8/2) 内 灰黄(2.5Y6/2)	台部の基部のみ50%	
10	1-5	古式土師器 高杯	Q69区 包	16		杯部高	・杯部ヨコナデ ただし、底部外面は指オサエ、内面はナデ。	並	良	外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 にぶい黄橙(10YR6/4)	・杯部45% ・脚部30%	
11	5-10	須恵器 杯身	試掘トレンチ No19 表採	11.3	3.5		・体部 内・外面ロクロナデ ・底部 内：一定方向ナデ 外：ヘラ切り後軽いナデ	並 0.5～1㎜大の白色砂粒含む。	良	灰白(N7)	20%	・ロクロ回転…時計まわり
12	4-1	灰釉陶器 短頸壷	試掘トレンチ No10	13.2			・ロクロナデ	並	良	灰白(N8)	口縁部のみ 10%	・外面に灰釉
13	6-5	土師器 杯	M68 包	12.7	3.6		・内：ナデ ・外：指オサエのちナデ ・口縁部 ヨコナデ	並	良	浅黄(2.5Y8/3)	15%	
14	6-6	土師器 Ⅲ	Q68 包	16.5	1.6		・口縁部ヨコナデ ・底部ナデ	並	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	口縁部のみ 10%	
15	3-4	土師器 甕	試掘トレンチ No10	13.9			・口縁部ヨコナデ ・体部 外 ハケ目	並	良	黄橙(10YR7/8)	口縁部のみ 10%	・表面風化剝離
16	6-2	土師器 甕	N70 包	14.1			表面風化激しく、はっきりした観察はできないが、 ・体部内面に、かすかにハケ目。	並	良	淡黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ 10%	
17	4-2	土師器 甕	M72 包	15.4			・口縁部 ヨコナデ ・体部 内：横方向のハケ目 外：縦方向のハケ目(6本/cm)	並	良	口縁部及び体部外面 明黄褐(2.5Y7/6) 体部内面 黒褐(2.5Y3/1)	口縁部のみ 10%	
18	6-8	土師器 甕	Q68区 包	18.7			・口縁部ヨコナデ、内面にはハケ目か？	並	良	外 褐灰(10YR4/1) 内 にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部のみ10%	・外面にスス付着。
19	1-3	灰釉陶器 椀	Q69区 包			高台径 6.8	・体部 ロクロナデ ・底部 内：同心円状のナデ 外：糸切り痕あり	密 砂粒はほとんど見られず	良	灰白(7.5Y7/1)	底部のみ 40%	・底部内面磨耗 ・底部内面に黒色のシミ
20	6-3	灰釉陶器 Ⅲ	P70区 包	13.2	3.0		・ロクロナデ	密	良	灰白(2.5Y7/1) 釉の色 オリーブ黄(5Y6/4)	40%	・灰釉つけがけ
21	5-11	灰釉陶器 椀	試掘トレンチ No10	14.4？	5.5？	高台径 7.0	・ロクロナデ	密	良	淡黄(5Y8/3)	底部のみ 50%	・灰釉つけがけ
22	4-4	灰釉陶器 椀	P69区 包			高台径 7.1		並	良	灰白(N8) 釉の色 オリーブ(5Y5/4)	底部付近 30%	
23	7-2	灰釉陶器 椀	M73区 包	16.1？	3.8？	高台径 7.5	・ロクロナデ	密	良	淡黄(5Y8/4)	底部50% 口縁部10%	
24	5-12	灰釉陶器 椀	試掘トレンチ No19			高台径 7.5	・ロクロナデ	並	良	灰白(N8)	底部のみ 30%	
25	6-9	灰釉陶器 椀	(排土)			高台径 7.2	・ロクロナデ	密	良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ 40%	・底部内面磨耗
26	7-1	灰釉陶器 Ⅲ？	M73区 包			高台径 7.6	・ロクロナデ	密	良	灰白(N8)	底部50%	・底部外面 墨書 ・体部内面灰釉剝離みられる。

第27－1表　A地区出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
27	4-3	小皿	P69区 包	9.5			・ロクロナデ	やや粗	良	灰白(2.5Y8/1)	口縁部のみ 10%	
28	6-7	小椀	N70区 包	9.7	3.0		・ロクロナデ ・底部糸切りか？	やや粗	良	灰白(10YR7/1)	20%	・口縁内面に釉のついたあと有り。
29	3-3	山茶椀	試掘トレンチ No.19			高台径 5.3	・ロクロナデ ・底部 回転糸切り	やや粗 0.5～1㎜の白色砂粒含。	良	灰白(2.5GY8/1)	底部のみ	・底部外面に黒点状の墨書。 ・高台の貼り付けは雑。 ・高台にかすかに擦痕。
30	1-2	土師器 皿	Q69 包			底部径 3.9	・ロクロナデ ・底部 回転糸切り	やや粗 0.5～1㎜大の砂粒多く含。	良	淡黄橙(7.5YR8/4)	底部のみ 100%	・ロクロ製土師器
31	6-4	陶器 天目茶椀	M69区 包	9.6			・ロクロ成形 ・鉄釉	並	良	素地 灰白(N8) 釉 黒褐(10YR2/3)	15%	
32	4-6	陶器 大甕(常滑)	試掘トレンチ No.19				・口縁部ヨコナデ	並	良	外：明赤灰(10R7/1) 内：灰白(N8)	口縁のみ 6×5㎝の小片	
33	5-8	土錘	試掘トレンチ No.19			長 3.3 最大径 1.3		並	良	橙(2.5YR7/6)	完形	
34	5-3	加工円盤	試掘トレンチ No.19	縦 2.6	横 3.0	厚 1.3		並 0.5㎜弱の白色砂粒多く含む。	良	橙(5YR7/8)		・中世陶器(甕？)を材料とする。 ・磨耗激しい。
35	5-5	加工円盤	試掘トレンチ No.19 表採	縦 2.2	横 2.9	厚 1.2	どちらかというと、四角形に打ち欠き。	並 2×3㎜のガラス質の砂粒含む。	良	外 灰赤(7.5R4/2) 内 にぶい赤褐 (7.5R5/3)		・中世陶器(甕？)を材料とする。
36	5-2	加工円盤	試掘トレンチ No.19	縦 3.3	横 3.5	厚 1.0		並	良	灰白(N8)		・須恵器(甕)を材料とする。
37	5-4	加工円盤	試掘トレンチ No.19	縦 3.6	横 3.3	厚 0.6		並	良	素地 灰白(2.5Y8/2) 釉 黄(5Y7/6)		・近世施釉陶器を材料とする。
38	5-6	加工円盤	試掘トレンチ No.19	縦 4.6	横 4.5	厚 1.3	かなり円形に近い打ち欠き。	並	良	外 にぶい赤褐 (7.5R5/3) 内 明褐灰(10R4/1)		・中世陶器(甕)を材料とする。
39	5-1	加工円盤	試掘トレンチ No.10	縦 4.0	横 4.0	厚 1.2	かなり円形に近い打ち欠き。	並	良	暗赤灰(5R4/1)		・中世陶器(甕？)を材料とする。
40	1-4	砥石	M69区 包	残存長 8.4	幅 3.0	厚 1.4						・表裏とも使用痕。
41	1-6	刀子	Q69区 包	全長 13.5	刀身長 7.2	刀部最大幅 1.9						・刀部片面にくぼみあり。 ・錆のため目釘穴等不明。

第27－2表　A地区出土遺物観察表

番号	名称	法量(cm) 長	幅	厚	色調	時期	遺跡名	遺構	所在地	文献
1	丸鞆	4.3	2.6	0.5～0.55	濃緑色	平安	斎宮跡第54次	包含層	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡 発掘調査概報
2	丸鞆	3.6	2.3	0.5～0.6	黒灰色	平安	斎宮跡	不明	多気郡明和町	斎宮跡発掘資料選
3	丸鞆	3.5	2.3	0.5		平安	斎宮跡第23次	SB1155	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1979 史跡斎宮跡 発掘調査概報
4	丸鞆	3.3	2.5	0.5～0.6	白色	奈良末～平安初	斎宮跡第51次	SK3130	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1983 史跡斎宮跡 発掘調査概報
5	丸鞆	4.7	2.8	0.75	黒色	平安	斎宮跡第38次	包含層	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1981 史跡斎宮跡 発掘調査概報
6	丸鞆	4.5	3.0	0.6	黒色	平安	茶山遺跡	表採	鈴鹿市高岡町字茶山	皇学館大学資料編纂所報「史料」第27号
7	丸鞆	4.3	2.6	0.8	白色	平安	落川原遺跡	J6区	四日市市西坂部	昭和47年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告
8	丸鞆	4.3	2.6	0.5	黒色	平安	寺田山遺跡	表採	鈴鹿市高岡町字寺田山	皇学館大学資料編纂所報「史料」第27号
9	丸鞆	4.1	2.6	0.68	黒色	平安	前山遺跡	表採	四日市市尾平町	
10	丸鞆	3.9	2.65	0.7	白色	平安	斎宮跡第8—10次	Pit	多気郡明和町	斎宮跡発掘資料選
11	丸鞆	3.4	2.3	0.55	灰色	平安	斎宮跡第23次	SB1155	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1979 史跡斎宮跡 発掘調査概報
12	丸鞆	3.6	2.25	0.6	水色	平安	斎宮跡第56次	包含層	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡 発掘調査概報
13	巡方	4.25	4.2	0.73	黒色	平安前	六大B遺跡	包含層	津市大里窪田町	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ
14	巡方	4.2	3.9	0.65	黄緑色		斎宮跡	表採	多気郡明和町	斎宮跡発掘資料選
15	巡方	3.9	3.9	0.8	青黒色		南山遺跡	包含層	松阪市土古路町	南山遺跡発掘調査概報Ⅰ
16	巡方	3.7	3.5	0.6		平安	西の宮遺跡	包含層	四日市市中川原	西の宮遺跡—分譲マンション建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書—
17	巡方	3.4	3.4	0.6	黒色	平安	斎宮跡第8—8次	包含層	多気郡明和町	斎宮跡発掘資料選
18	巡方	3.2	3.1	0.58	黒色	平安前	高向C遺跡	包含層	度会郡御園村	南勢バイパス埋蔵文化財調査報告
19	巡方	(2.8)	(2.8)	0.5			斎宮跡第82次	包含層	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1990 史跡斎宮跡 発掘調査概報
20	巡方、	2.7	1.3	0.7	黒色		大洞山総合遺跡	表採	一志郡美杉村八知	奥義次氏の採集資料
21	蛇尾	7.0	4.4	0.75～0.8	黒色	平安前	斎宮跡第52次	SE3260	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1983 史跡斎宮跡 発掘調査概報
22	蛇尾	6.2以上	3.7	0.7	黒色	平安	斎宮跡第32次	包含層	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1980 史跡斎宮跡 発掘調査概報
23	丸鞆	3.3	2.5	0.55	黄緑色	平安	斎宮跡第90次	P I	多気郡明和町	三重県斎宮跡調査事務所年報1992 史跡斎宮跡 発掘調査概報
24	蛇尾	3.5以上	3.2	0.7	白色	平安	斎宮跡第98次	包含層	多気郡明和町	＊斎宮歴史博物館調査研究課により御教示頂いた
25	丸鞆	4.3	2.7	0.7	黄緑色	平安？	巣護遺跡	包含層	多気郡多気町	今回出土

第28表　三重県出土の石帯一覧

2．B地区

1．遺構

B地区はＪＲ紀勢本線北側に位置する。字境の農道付近を中心として平安時代以降の井戸や溝などを検出したが、概して遺構は希薄であった。

（1）．平安時代の遺構

ＳＤ11　調査区北部を北東から南西にはしる浅い溝である。西端部でＳＥ17に合すると考えられるが、ＳＤ10に切られて不明。幅60～70cm、深さ７～10cmである。土師器杯・甕・把手付甕、須恵器甕・長頸瓶、サヌカイト製剝片が出土した。平安時代中期ないし後期と考えられる。

ＳＤ16　東でＳＤ11に、西でＳＤ10に切られ全長４mほどが確認できた。幅40～70cm、深さ10cmの浅い溝である。土師器杯・甕、須恵器甕が出土。

（2）．平安時代～鎌倉時代の遺構

ＳＥ17　調査区北半のほぼ中央部で検出。直径2.5mほどのほぼ円形の井戸である。東側に半月状の浅い平坦地がある。深さは80cm、底面で湧水に達する。石積みの痕跡はなく、底面でも井戸枠のような施設は認められなかった。また、底面での完形もしくはほぼ完形の遺物の出土はなく、埋土から土師器皿・甕、須恵器甕、山茶椀、山皿、白磁、瓦片が出土した。

（3）．鎌倉時代の遺構

ＳＤ５　調査区西端近くをほぼ南北に走る、幅25～30cm、深さ５～７cmの浅い溝である。同時期のＳＤ６と重複するが、ＳＤ６よりも新しい。平安時代末期の土師器甕片が微量出土した。

ＳＤ６　調査区を東北から南にかけてゆるやかにＳ字状をなしてはしる農道がある。この農道にほぼ重複している。農道が利用されている都合上完掘できなかった部分で、溝の東肩のみ検出された。深さは15cmまで確認できた。土師器皿・甕・鍋、ロクロ製土師器、須恵器大甕、灰釉陶器、山茶椀、渥美産甕や布目瓦などが出土した。

ＳＤ９　調査区中央部で検出。幅70cm、深さ10～15cm、全長14mほどで、ゆるくカーブしながらＳＥ17へつながる。土師器小皿・杯・台付椀・甕・長胴甕・鍋、須恵器甕・長頸瓶、山茶椀、山皿、こね鉢、布目瓦、製塩土器、鉄滓などが出土した。

ＳＤ10　ＳＤ11・16に平行したり重複したりしてのびる浅い溝である。やはりＳＥ17に関連するが、この溝はＳＤ11・16を切っている。土師器杯・甕・長胴甕、須恵器甕、墨書山茶椀、瓦片が出土した。

ＳＥ18　ＳＥ17の北約3.5mに位置する素掘りの井戸である。平面形は東西2.2m、南北3.0mの楕円形で、ほぼ垂直に深さ1.1mまで掘り込まれている。底面で井戸枠などの施設は認められず、また、遺物も出土しなかった。埋土のオリーブ灰色粘土より土師器皿・杯、山茶椀、木片が微量出土した。

（4）．室町時代の遺構

ＳＤ12　調査区北半で、ＳＤ11などと直交するかたちで検出された溝の痕跡である。かなりの削平を受けているものと思われる。幅30～50cm、深さ４～８cmほどで、長さも２m程検出されたにすぎない。土師器甕・鍋、瓦質土器片などが出土した。

（5）．時期不明の遺構

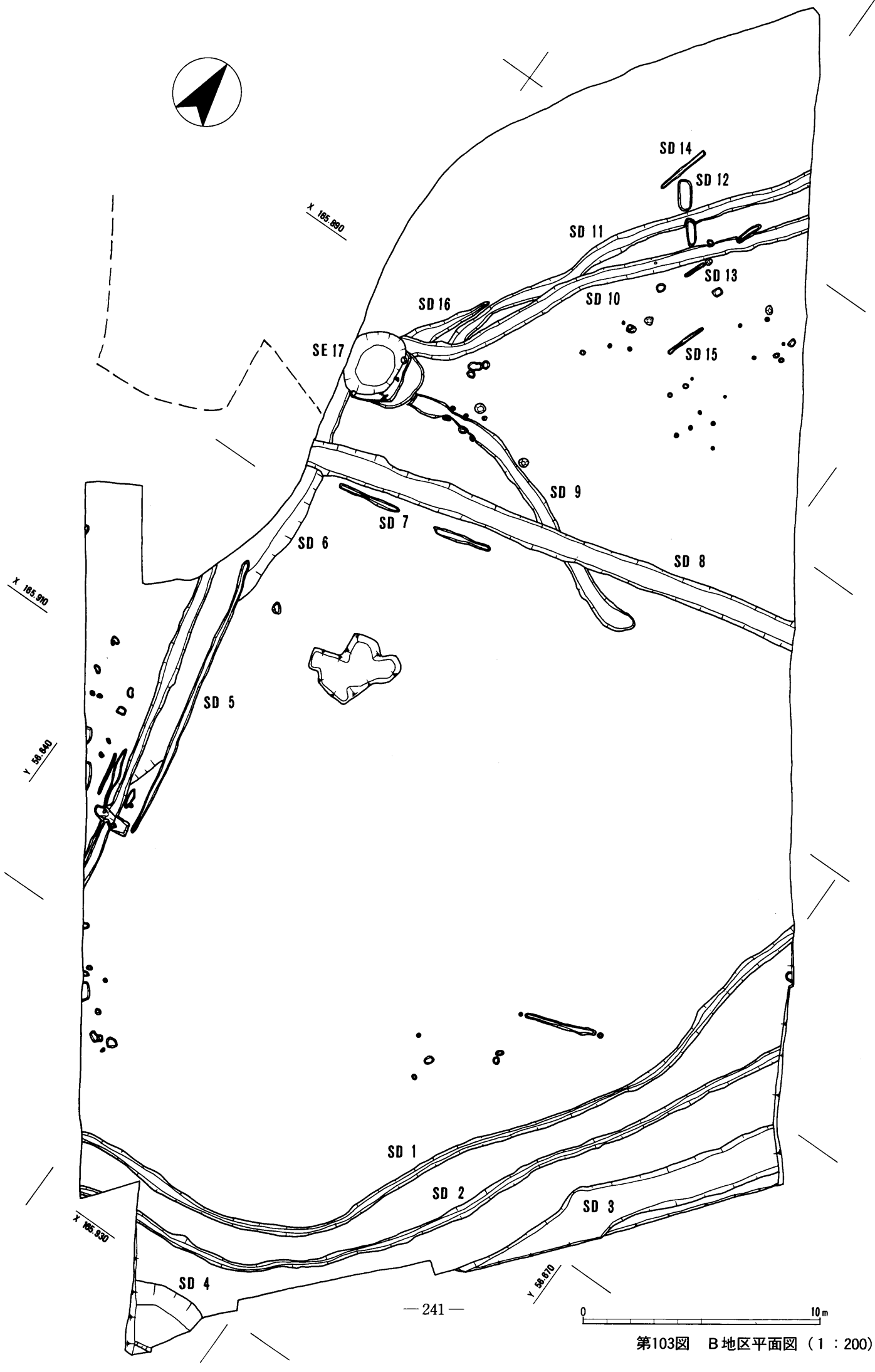
ＳＤ１・２　調査区の南端で検出した二本のほぼ平行する溝である。それぞれの溝は幅30～40cm、深さ約10cm、二本の溝の芯々距離は1.6～2.4mである。必ずしも両者は平行に走るわけではないが、芯々距離ほぼ1.8mの幅を有することから。道路の側溝と考えられよう。方位的にはゆるくカーブを描くため一定ではないが、調査区南端でほぼ東西方向である。ＳＤ１からは土師器皿と思われる細片が微量出土しただけで、ＳＤ２から遺物は出土しなかったが、中世のものであろう。

ＳＤ３　ＳＤ１・２の東約２mで、ＳＤ１・２に平行するように検出された浅い溝である。幅1.6～２m，深さ30～40cmで底面は平坦。出土遺物なし。

ＳＤ４　調査区の南端でごく一部を検出。幅2.3m，深さ80cm。断面の形状が異なるがＳＤ３と関連するものかもしれない。出土遺物はない。

ＳＤ７　調査区のほぼ中央を東西にはしる畦畔境の暗渠排水溝ＳＤ８と平行して検出された。ほとんどが削平されていると思われ、現状では幅30cm、深さ４cmほどと、痕跡的にしか残っていない。出土遺物はないが、埋土の色や状態などがＳＤ５とよく似ており、条里の畦畔に伴う溝の可能性もある。

ＳＤ８　既述したが調査区中央をほぼ東西にはしる



第103図　B地区平面図（1：200）

暗渠排水である。ごく最近まで溝は使用されていたものであるが、条里制地割りの畦畔にあたり、その起源は古いものであろうと考えられる。

ＳＤ13・14・15　調査区北半で検出。削平のため痕跡的に残る。３本ともほぼ方位を南北にそろえる。出土遺物はない。

２．遺物

試掘調査も含めて整理箱に30箱ほど出土したが、遺構からの出土は少ない。以下順次報告する。

（１）．遺構出土の遺物

ＳＤ11出土遺物

土師器甕（９）　頸部から「く」字状に外反する口縁部は、端部で丸みをもって内折する。体部外面は煤が付着するが、縦位の粗いハケメが施される。

ＳＥ17出土遺物

山茶椀（５）　底部のみの破片であるが、内面にはびっしりと炭化物が付着している。その厚さは1.5㎜ほどである。わずかに残る体部には釉だれが認められる。高台はしっかりしたものだが、かなりつぶれも見られる。第２層から出土。

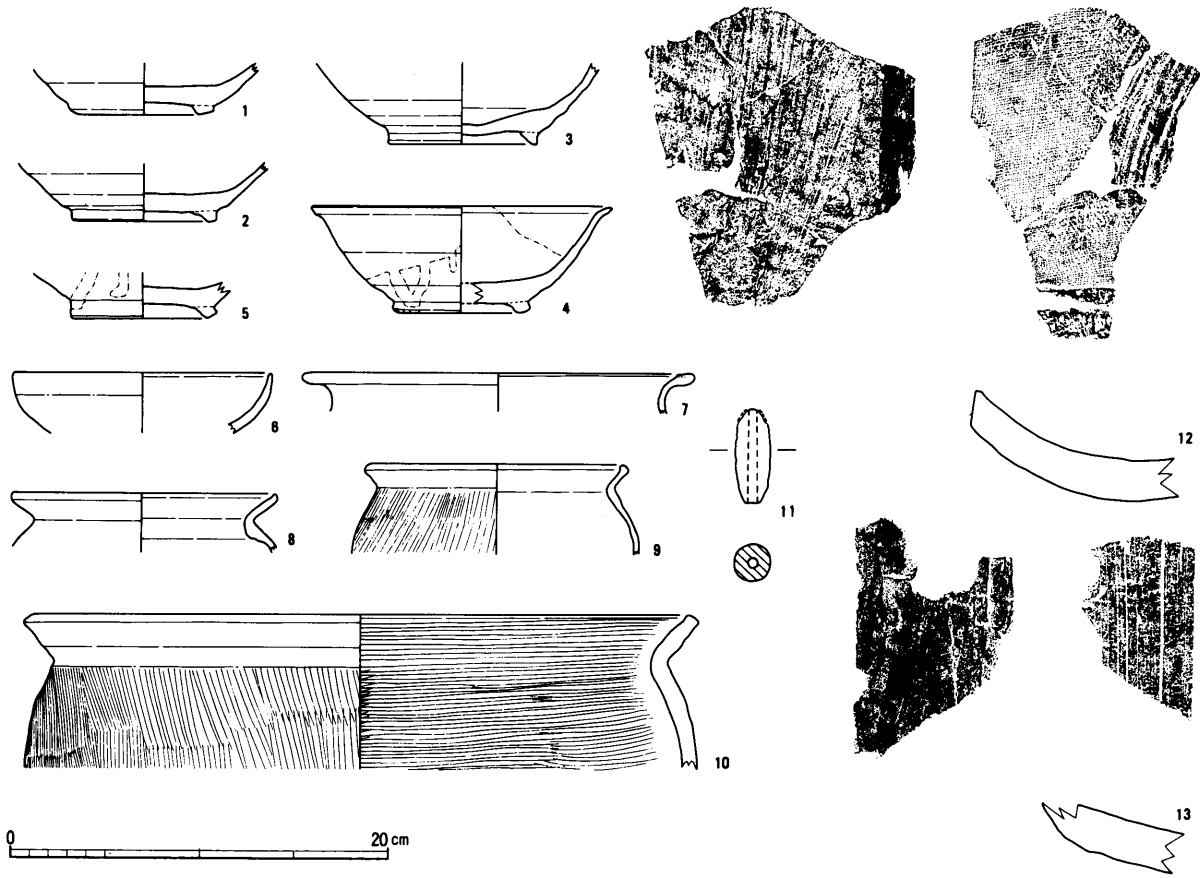
平瓦（13）　同じく第２層から出土の小片。凸面および端面はヘラケズリ、凹面もヘラケズリ調整で擦痕が残る。焼成は良である。他の12や70・71などより新しく中世ころのものと思われる。

ＳＤ６出土遺物

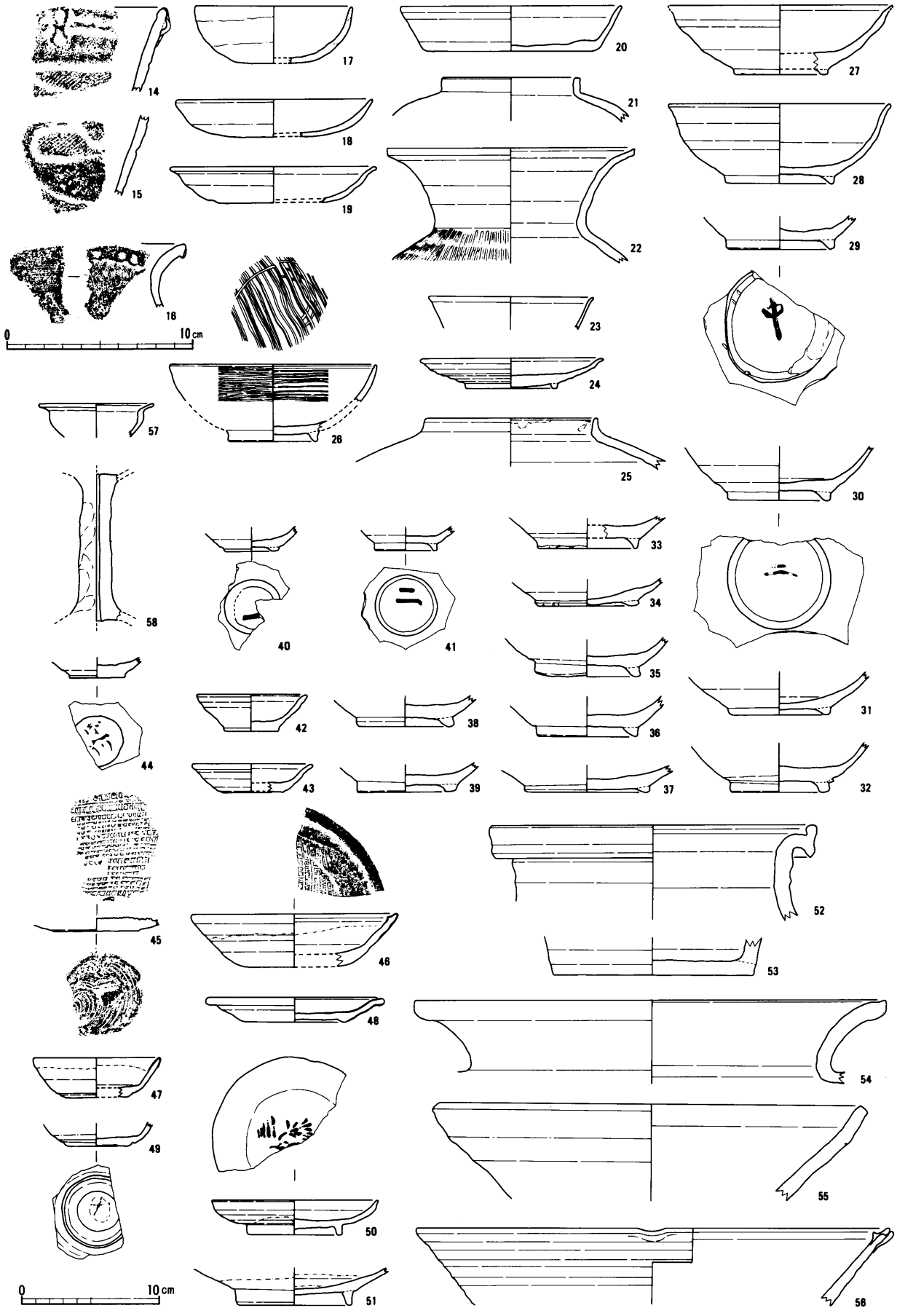
山茶椀（１～４）　図示したほかにも破片は多く出土している。４は３分の１ほどの残存であるが、図上で完形復元できた唯一のもの。内弯しながら立ち上がる体部は、口縁部で強く外反する。漬け掛けにより灰釉が施され、釉だれが高台付近にまで達している。高台は四角くつぶれ、籾殻痕が見られる。推定口径15.8cm、器高5.6cmである。

３も底部のみである。高台の断面形は三角形であるが、一部に籾殻痕が見られる。１、２も同様のものであるが、１は高台のつぶれがひどい。３は尾張産、他は渥美産と思われる。

この他、包含層出土として扱った32・35・36・38・



第104図　Ｂ地区出土遺物実測図・拓影（１：４）



第105図　B地区出土遺物実測図（1：4、ただし14～16は1：3）

39も、ＳＤ６の遺物として考えられる。

ＳＤ９出土遺物

土師器杯（６）　口縁部が内弯気味に収まる粗製の杯である。小片のため口径等も不確実であるが、時期的にはやや遡る平安時代のものであろう。

土師器鍋（７）　口縁部を内側へ折り返す鍋の口縁部小片である。折り返した後のヨコナデが強くないため、断面形は丸みをもつ。口縁部の外反度が大きい。

平瓦（12）　包含層などのいくつかの破片とが接合した。最大で18ｍほど離れたものが接合している。凸面はヘラケズリ、凹面は布目痕が明瞭に残る。端部は未調整。胎土は緻密で焼成も良く、青灰色を呈する。

ＳＤ10出土遺物

土師器甕（８・10）　８・10ともに前代の遺物の混入品であろう。８は全体に磨耗がすすみ調整技法などは不詳。10は長胴甕である。

他に（11）の土錘があるほか、多様な遺物が出土しているが、図示できるものはない。

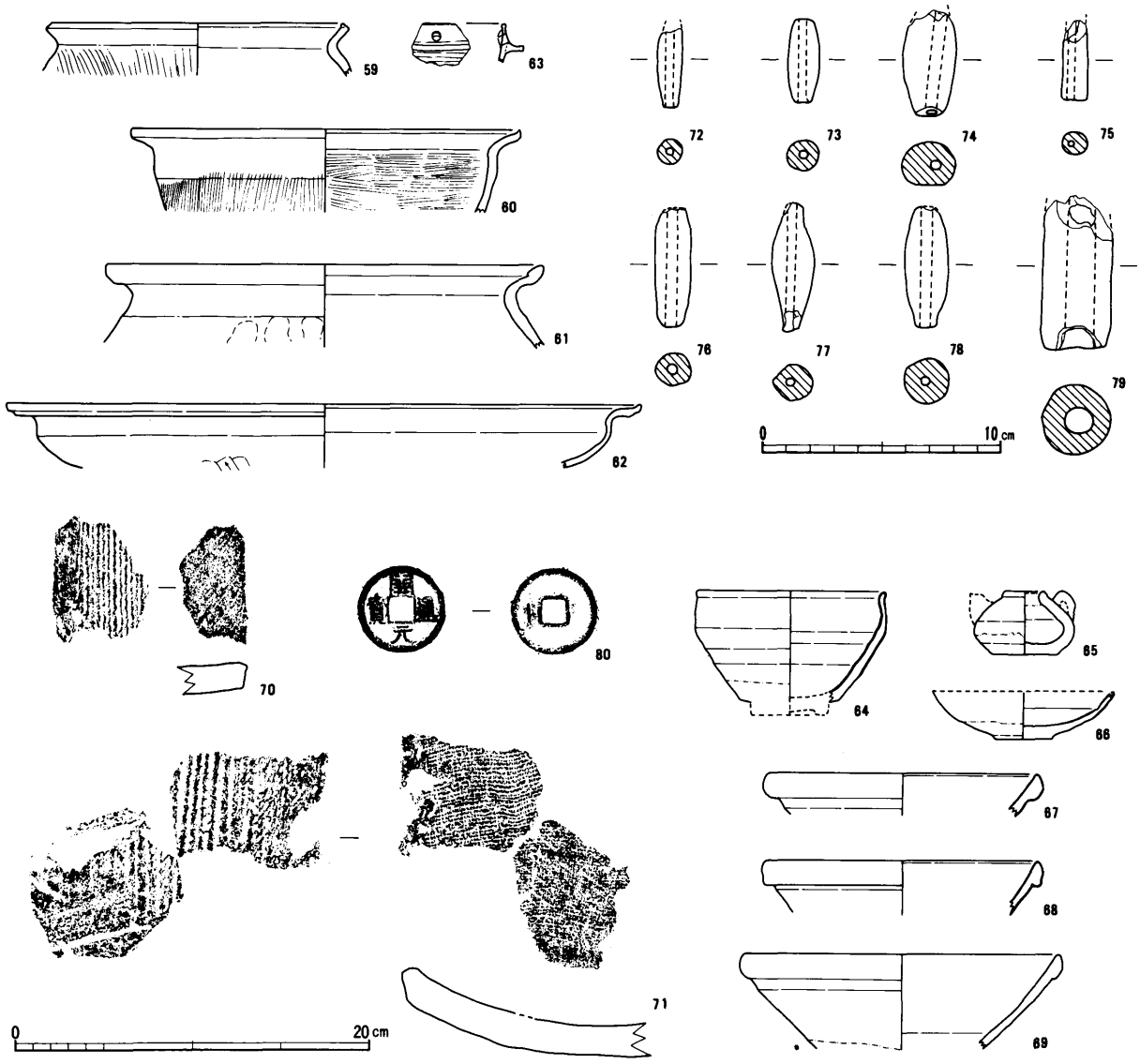
（２）．包含層出土の遺物

Ａ．縄文時代の遺物（14・15）

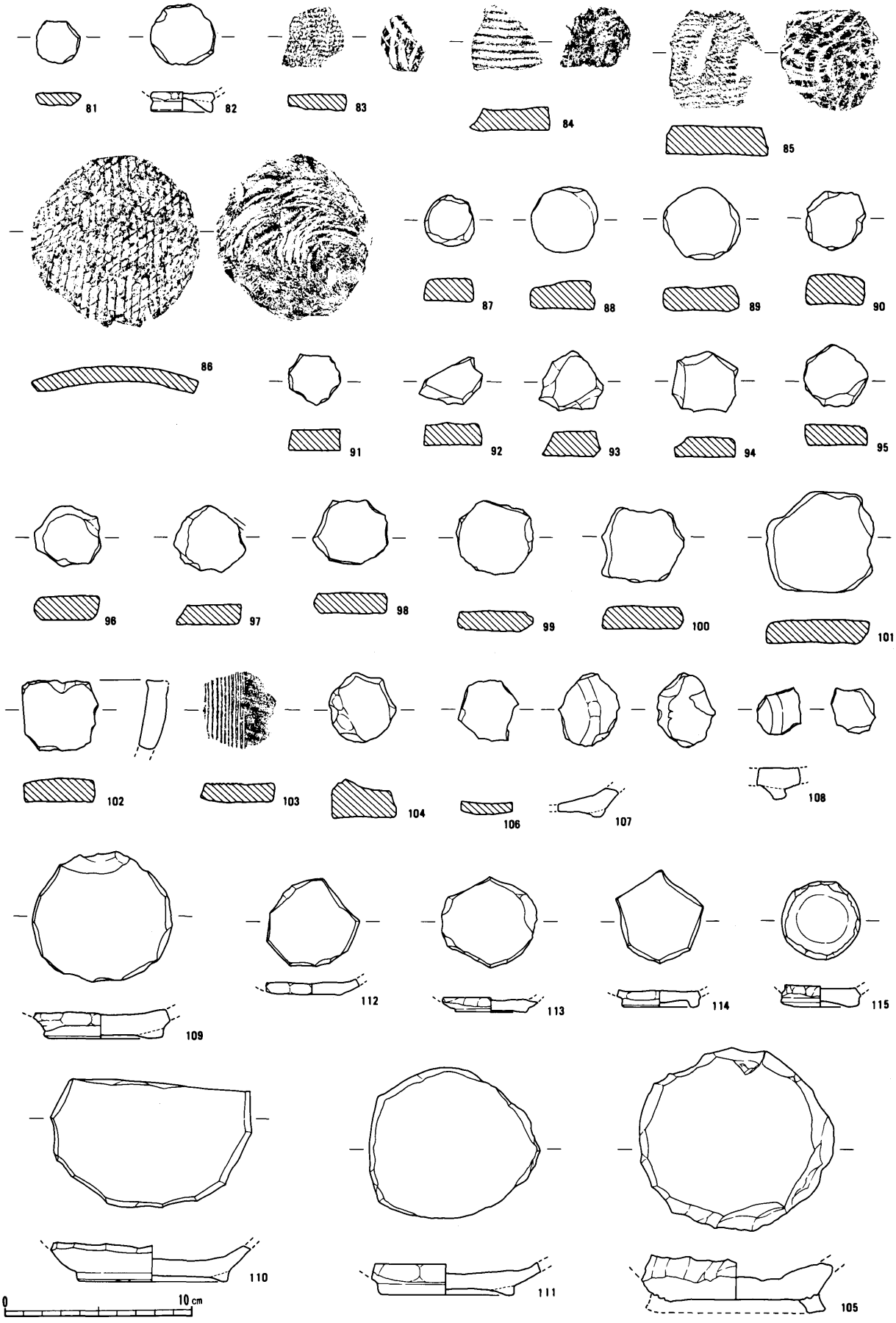
わずか数片であるが、14・15（同一個体）のような後期前葉の堀之内２式の深鉢片が出土している。

Ｂ．弥生時代の遺物（16）

１片のみ確認した。外反する甕口縁部の小片。内外面ともに細かいハケメ調整で、丸みを帯びた端部はハケキザミが施される。中期中葉ころのものであ



第106図　Ｂ地区出土遺物実測図・拓影（１：４、ただし72～79は１：３、80は１：２）



第107図　B地区出土遺物実測図・拓影（1 : 3）

ろう。

C．飛鳥～平安時代の遺物（17～25・59・60）

図示できたものは少ないが、平安時代の遺物が量的には多い。土師器椀17は飛鳥ないしは奈良時代、須恵器杯20、短頸壷21、甕22は奈良時代に比定できよう。24・25は灰釉陶器、23は緑釉陶器である。

なお、緑釉陶器の破片は細片を含め10片ある。

D．鎌倉時代以降の遺物（26～58・61～69）

平安時代末期～鎌倉時代の遺物量が最も多く、山茶椀（27～39）が主体をなすが完形品はない。

このうち、32・35・36・38・39は既述のとおり、ＳＤ６にからむものである。

27の内面には漆がほぼ全面に付着している。また、29の底部外面に『中』、30には『二』の墨書がみられる。

40～43はいわゆる山皿である。40・41は高台を有する小椀で、41は底部外面に『二』の墨書がみられる。40は欠損のため不明瞭であるが、『一』であろうか。

42・43は高台が付かないもの。42は底部から若干の立ち上がりの後、体部へと続くもの。43はほとんど立ち上がりがなく、小皿というべきものである。

26の瓦器椀は伊勢地方では客体的に分布するものであるが、近年の発掘調査の増加で南勢地方においても、しばしば確認されるようになった。当遺跡でもすべて小片ながら３片出土している。26は推定口径15cm、同器高5.7cm。口縁部内面の端部直下に沈線が施されるもの。内外面ともていねいなミガキ、底部内面にはジグザグ文と螺旋状暗文が施される。

57は土師器鍋のミニチュア、58は土師器高杯の脚部と考えられる。いずれも中世後期に比定できるものであろう。63は小型の土師器羽釜。穿孔が焼成前になされている。

陶器類としては、瀬戸産のおろし皿（45・46）、小鉢（47・49）、折縁皿（48）、常滑産のこね鉢（55）、甕（52・53）などがある。54は全体に器厚が厚めで、口縁部をやや肥厚させながらおさめるもので渥美産と思われる。その他に天目茶椀（64）、水滴（65）などがある。66は産地不明。

50はすり絵の皿、51は輪ハゲの皿か鉢、いずれも近世（18世紀代）に下るものであろう。62の土師器焙烙も近世のものと考えられる。

磁器類としては青磁のほか、白磁（67～69）がある。

E．その他の遺物（70～115）

そのほか、平瓦（70・71）、土錘（72～79）、加工円盤①（81～115）などがある。

81・82は土師器の転用品で、81は鍋の体部片を加工、82は小椀の底部を利用している。

83～86は須恵器甕の体部片を利用し加工を施す。84・85は未製品であろう。105は須恵器台付き長頸壷の底部を利用し、体部へ続く部分を打ち欠いて調整している。

87～101は陶器甕の体部片を加工するもので、量的に最も多い。87～89のように円形に形を整えた後に、全周をていねいに磨くものから、90や95のように部分的に磨くもの、磨かないものなどがあるが、未製品との区別はつかない。

102はすり鉢の口縁部、103は体部片を利用している。

また、山茶椀も多く利用されている。106～113のうち、106は体部片を、107・108は底部の一部を打ち欠いて加工しているほか、底部全体を利用しているもの(109～113)がある。なお、112・113は山皿の底部を利用するものである。

そのほか、施釉陶器(114)や天目茶椀(115)の底部を利用するものも見られる。

80は本調査区からの出土ではなく、東方に約百数十ｍほど離れた字相郡（あいこおり）の水田で採集されたもので、開元通寶（621年初鋳）である。

（３）小結

Ｂ地区では平安時代から室町時代にかけての井戸や溝などの遺構が、発掘区の北半を中心に検出された。住居跡は検出されず、今回の発掘区は、北に隣接する上ノ垣外遺跡の周辺部にあたる部分と考えられる。

遺構の中で注目したいのは、ＳＤ５やそれに直交する方位をもつＳＤ７・８である。これらは溝の埋没時期は把握できるものの、最初に掘削された時期はわからない。しかし、当地の条里の方向が座標北に対して約Ｎ９°Ｗであることから、多気郡条里制との関連が想定できよう。

出土遺物は縄文時代後期の土器・石器をはじめ、古墳時代の土師器や、中世から近世の遺物も混じるが、最盛期は平安時代後半から鎌倉時代にかけての時期であろう。（田村陽一）

3．結　　語

巣護遺跡はＪＲ紀勢本線の線路を挟んで南北に広がる水田地帯に立地する遺跡である。その中心となる時代は平安時代から鎌倉時代にかけてで、遺構については十分な成果は得られなかったが、当該時期の多種多様な遺物が出土した。

（１）遺構について

今回の調査で検出した遺構については、既に述べたごとく住居跡は検出されなかった。これは、当地区の地形条件が後背湿地と呼ばれる低湿地にあたるからで、居住に適さない土地であったからである。したがって、古代にあっては、水田として利用されていたことが考えられるのであるが、水田跡の考古学的な手法による検出はできなかった。

当地の水田開発の歴史は古い。段丘背後の丘陵から流れ出る小支谷を山麓で堰止めた溜池による潅水によって水田が営まれたもので、その開発の一部は一般的に８世紀以降に見られる「条里制の地割」に先立つ方格状地割として、古墳時代（５世紀末～６世紀頃）から開発が行われた[2]と言われている。

条里制地割りの名残は近年まで残っていたが、平成２年に行われたほ場整備事業により姿を消してしまった。今回の調査区では、Ｂ地区で条里に関連すると考えられる溝を一部検出したにすぎないが、この結果からは、当地の条里制地割は平安時代後半頃にまで遡れることが推定できるようになった。

ＪＲの線路を挟んだ南側のＡ地区では、条里制に関連するような畦畔・溝跡などの遺構は検出できなかった。大きな溝か沢沼地のような落ち込みの一部が検出され、底部には自然木や葉、枝などが腐食せずに堆積していた。

このように、Ａ地区はより人間の居住には遠い環境にあったことが判明した。ただ、遺物についてみると、Ａ地区では既述のように石帯や緑釉陶器片のような特殊遺物が出土しているし、全面にわたってかなり多量の遺物類が出土していることから、遺跡の周辺部だったとして簡単に片づけてしまえない問題を含んでいる。さりとてその理由を明快に論じれる結果は得られず、調査区の近辺に有力な組織・人物に関わる遺構の存在の可能性を指摘するにとどめざるを得ない。

（２）遺物について

縄文時代については、試掘調査時にＡ地区に相当するトレンチから、他に類例を見ない双口壷が出土した。胎土に砂粒をあまり含まないことや、薄手であることなどから縄文土器ではなく弥生前期もしくは中期の土器ではないかとの指摘もある。これについては類例もほとんどなく、確実なことは言えないが、当遺跡および上ノ垣外遺跡で縄文後期の土器が多数出土しており、逆に弥生前期もしくは中期に属する遺物が全くといってよいほど出土していないことから、縄文期に所属させるほうが妥当と考えられる。

時期の参考としては、岡山大学構内の津島岡大遺跡第５次調査で出土した加曽利Ｂ１式平行の双口の異形土器[3]がある。また、弥生時代後期と考えられるものに、名古屋市見晴台遺跡第33次調査の濠から出土した双口壷[4]がある。当遺跡例は形態的には見晴台例に近い。

また、類例のない異形土器として、当遺跡から約６㎞下流の金剛坂遺跡から完形で出土した環状壷[5]がある。これも、類例のないことや伴出遺物がないことから時期が特定できないもので、弥生土器説もある。ただ、この環状壷の体部に施された３本～５本単位の短沈線による複合鋸歯文状の文様は、当地後期前葉の縁帯文土器などにみられるものに似ることや、他の出土縄文土器が３本沈線を基調とした磨り消し縄文の福田Ｋ２式類似の土器が主体であることから、その所属時期を後期前葉に求めたい。

巣護遺跡出土の双口壷も短沈線を基調とし、口縁部外面に短沈線による鋸歯状の文様、体部にも同様

の文様が認められる点など、類似性も見られることから、金剛坂例とも近いのではないかと思われる。

ところで、当遺跡で出土している縄文土器型式は堀之内II式であり、北に隣接する上ノ垣外遺跡では中津Ⅰ式～堀之内式・加曽利B式などがある。この双口壷も概ね後期前葉～中葉頃のものと考えてよさそうである。

また、もう1点注目すべき遺物がある。それは県下25例目の出土になる石帯である。流紋岩製[6]の丸鞆であるが、第27表のように、県下25例のうち斎宮跡で6割にあたる15例が出土している。他では津市六大B遺跡のような地方官衙的な遺跡や、緑釉陶器が多数出土した度会郡御薗村高向C遺跡など、一般集落とは考えにくい遺跡からの出土がほとんどを占める。

巣護遺跡では、緑釉陶器片も11片出土しており、上ノ垣外遺跡を中心とする当遺跡周辺の特殊性の一端が窺えよう。近接する東寺領大国荘・川合荘の荘域推定地[7]との関わりの中でとらえられるものかもしれない。

（3）遺跡周辺の条里制地割りについて

当遺跡周辺の条里制研究は古くから行われ、主として歴史学からのアプローチ[8]がなされてきた。また1955（昭和29）年には藤岡謙二郎氏を中心として櫛田川流域の総合調査が行われ、歴史地理学的見地からの成果[9]が公にされた。その中で谷岡武雄氏が流域全域に展開する条里制について詳しく調査され、レポート[10]している。また、その中で中・下流域の条里地割の分布を25,000分の1地形図に復元された。その後、これらの成果をまとめた伊勢湾地域全域の条里制について集大成[11]も行われている。しかし、全国的にみると、いくつかの地域では考古学的な調査成果による条里遺構の研究が行われ、新しい成果も報告されているが、当地方では最近は研究が全く停滞しているといっても過言ではない。

したがって当遺跡周辺についても、条里の復元など基本的な問題については一定の研究成果があるものの、なお問題点も多い。それら先学の研究成果をもとに、当遺跡の周辺についても再検討がなされている。それについて本稿で詳しく述べる余地はないので、別稿[12]を参照されたい。

多気郡の古代条里制遺構として現地表に残存する（あるいは残存じていた）一町四方を基調とした方格地割は、現在までにすでに国道42号以東は圃場整備のため姿を消してしまった。残るのは国道42号以西の三疋田・四疋田地区のみであるが、ここも近い将来改変の手が加わろう。

古代にあって耕地を大きく改変したであろう条里制の地割は、長く歴史的景観として現代まで残ってきたが、平成の現代に圃場整備と言う名の大規模な土地改変によって、その姿を消そうとしている。当地の条里制研究に残された課題は多い。

（田村陽一）

【註】

① 既製の土師器、須恵器、陶磁器類を打ち欠くか磨ることにより、円形に仕上げたもの、あるいは高台を打ち欠いて加工したもの。小型円盤や加工円盤、円形加工陶磁製品など、いろいろな名称があるが、現在のところ統一された名称はない。とりあえずここでは加工円盤としておく。

（参考）

山崎恒哉「円形加工陶磁製品について」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990

② 倉田康夫『条里制と荘園』東京堂出版　1976

③ 山本悦世、阿部芳郎、富樫孝志ほか『津島岡大遺跡Ⅳ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1994

④ 名古屋市見晴台考古資料館伊藤正人氏のご教示による

⑤ 谷本鋭次　『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会　1972

⑥ 三重県立図書館磯部克氏のご教示による。

⑦ 前掲②

⑧ 大西源一　「伊勢国飯野、多気両郡に於ける条里の復元」『歴史地理』85-2　1954

⑨ 藤岡謙二郎ほか『河谷の歴史地理』蘭書房　1958

⑩ 谷岡武雄　「櫛田川中・下流域の条里」『河谷の歴史地理』蘭書房　1958

⑪ 弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979

⑫ 小林　秀　「伊勢国飯野・多気郡の条里復元について」『研究紀要』第4号　三重県埋蔵文化財センター　1995

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-02	山茶椀	M48 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台 底部外面糸切り痕	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	ロクロ回転方向不明
2	001-03	山茶椀	M48 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台 底部外面糸切り痕	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	ロクロ回転方向不明
3	001-01	山茶椀	M47 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台 底部外面糸切り痕	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	ロクロ回転方向不明
4	002-05	山茶椀	N46 SD6	(15.8)	5.7	—	ロクロナデ、付高台、底部外面糸切り痕、籾殻痕 灰釉漬け掛け、釉だれ	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100% 口縁部10%	ロクロ回転方向不明
5	003-02	山茶碗	N45 SE17	—	—	—	ロクロナデ、付高台、底部外面糸切り痕、釉だれ	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	底部内面に漆付着
6	002-03	土師器 杯	O46 SD9	(13.6)	—	—	口縁部ヨコナデ 体部内外面ナデ	良	良	外 7.5YR8/3 浅黄橙 内 5YR8/4 淡橙	口縁部20%	磨滅
7	002-02	土師器 鍋	O46 SD9	(20.9)	—	—	口縁部折り返し、ヨコナデ	並 砂粒を含む	不良	外 5Y5/2 灰オリーブ 内 5Y4/2 灰オリーブ	口縁部15%	
8	001-05	土師器・甕	S44 SD10	(14.1)	—	—	口縁部ヨコナデ	並	良	外 10YR7/3 にぶい黄橙 内 10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部20%	
9	002-01	土師器・甕	R44 SD11	(13.4)	—	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ハケメ	並	良	外 5YR2/1 黒褐 内 5YR8/3 淡橙	口縁部25%	体部外面付煤
10	004-01	土師器・甕	S44 SD10	(35.0)	—	—	口縁部ヨコナデ 体部内外面ハケメ	並	良	外 10YR8/3 にぶい黄橙 内 10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部10%	
11	001-04	土錘	S44 SD10	5.0 長	1.8 幅	—		良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	ほぼ100%	
12	005-01	平瓦	P46 SD9	—	—	—	凹面に布目痕 凸面にヘラケズリ	良 砂粒を含む	良	外 N4 灰白 内 N4 灰白	25%	
13	003-01	平瓦	N45 SE17	—	—	—	ヘラケズリ	良 砂粒を含む	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	細片	
14	006-03	縄文土器 深鉢	O44 包含層	—	—	—	ナデ、8字状浮文、撚糸帯、沈線、LR縄文	やや粗 砂粒を含む	並	外 10YR8/2 灰白 内 10YR3/1 黒褐	口縁部細片	15と同一個体
15	006-04	縄文土器 深鉢	O44 包含層	—	—	—	ナデ、沈線、LR縄文	やや粗 砂粒を含む	並	外 10YR8/2 灰白 内 10YR3/1 黒褐	体部細片	14と同一個体
16	006-02	弥生土器 甕	O51 包含層	—	—	—	口縁部外面タテハケ、内面ヨコハケ、端部キザミ	やや粗 砂粒を含む	並	外 10YR6/2 灰黄褐 内 10YR8/3 浅	黄橙	口縁部細片
17	007-02	土師器 杯	O45 包含層	(11.2)	4.2	—	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、粘土紐巻き上げ痕	良	良	外 7.5YR8/3 浅黄橙 内 7.5YR8/3 浅黄橙	口縁部～体部30%	
18	007-03	土師器 杯	O45 包含層1	(14.2)	2.8	—	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエナデ	良	不良	外 10YR7/3 にぶい黄橙 内 10YR5/1 褐灰	口縁部～体部40%	
19	007-01	土師器 杯	S49 包含層	(14.6)	2.6	—	ユビオサエナデ 口縁部ヨコナデ	精良	良	外 7.5YR8/4 浅黄橙 内 7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部～体部25%	
20	007-05	須恵器 杯	O43 包含層	(16.1)	3.3	—	ロクロナデ 底部外面切り離し後ナデ	並	良	外 N5 灰 内 N5 灰	口縁部～底部40%	ロクロ回転方向は左
21	007-04	須恵器 短頸壺	N47 包含層	(10.0)	—	—	ロクロナデ	並	良	外 N8 灰白 内 N6 灰	口縁部25%	ロクロ回転方向は不明
22	008-01	須恵器 甕	O46 包含層	(18.2)	—	—	ロクロナデ、体部外面平行タタキ、内面ナデ	良	良	外 N5 灰 内 N6 灰	口縁部～体部25%	ロクロ回転方向は不明
23	008-03	緑釉陶器 椀	P53 包含層	(11.9)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 2.5GY7/1 明オリーブ灰 内 2.5GY7/1 明オリーブ灰	口縁部30%	ロクロ回転方向は不明
24	008-04	灰釉陶器 皿	R52 包含層1	(13.6)	2.4	—	ロクロナデ、トチン痕	並	良	外 2.5GY8/1 灰白 内 N8 灰白	口縁部～底部30%	ロクロ回転方向は不明
25	008-02	灰釉陶器 短頸壺	O46 包含層	(12.4)	—	—	ロクロナデ、口縁部外面に灰釉	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	口縁部25%	ロクロ回転方向は不明
26	009-06	瓦器 椀	R51 包含層	(15.0)	(5.7)	—	内外面ミガキ、底部内面ジグザグ・螺旋状暗文	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	口縁部25% 底部100%	
27	010-01	山茶椀	O47 包含層	(16.3)	5.1	—	ロクロナデ、付高台 籾殻痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	口縁部～底部30%	ロクロ回転方向不明、内面に漆付着
28	011-01	山茶椀	O47 包含層	(16.1)	5.8	—	ロクロナデ、付高台 籾殻痕	良 砂粒を含む	良	外 N7/1 灰白 内 5B7/1 明青灰	口縁部20% 底部70%	自然釉
29	012-03	山茶椀	試掘T22②内表土～	—	—	—	ロクロナデ、付高台	良 砂粒を含む	良	外 N8 灰白 内 N7 灰白	底部80%	底部外面に『中』の墨書
30	013-08	山茶椀	O44 包含層	—	—	—	ロクロナデ、付高台	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部90%	底部外面に『二』墨書
31	011-04	山茶椀	O46 包含層	—	—	—	ロクロナデ、付高台	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部100%	自然釉
32	014-02	山茶椀	N47 SD6	—	—	—	ロクロナデ	良	良	外 10Y7/1 灰白 内 10Y7/1 灰白	底部100%	底部内面使用痕あり
33	010-02	山茶椀	L54 包含層	—	—	—	ロクロナデ、付高台 籾殻痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部40%	底部外面に朱書判読不可
34	009-01	山茶椀	O46 包含層1	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り痕、籾殻痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部30%	
35	014-04	山茶椀	N47 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台 籾殻痕	良	良	外 5N8/1 灰白 内 5N8/1 灰白	底部100%	底部内面に使用痕
36	014-05	山茶椀	N47 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台	やや粗 砂粒を含む	良	外 7.5Y6/1 灰 内 7.5Y9/1 灰	底部100%	底部内面に使用痕
37	009-02	山茶椀	O46 包含層1	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り痕、籾殻痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部30%	
38	014-01	山茶椀	N47 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り痕	良	良	外 2.5Y8/1 灰白 内 2.5Y8/1 灰白	底部100%	底部内面に使用痕
39	014-03	山茶椀	N47 SD6	—	—	—	ロクロナデ、付高台	良	良	外 10Y8/1 白灰 内 10Y8/1 白灰	底部80%	底部内面に使用痕

第29－1表　B地区出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
40	013-06	山皿	P46 包含層1	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り痕、籾殻痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部70%	底部外面に『一』の墨書、『二』か
41	009-03	山皿	N52 包含層	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部～体部100%	底部外面に『二』の墨書
42	013-03	山皿	N45 包含層1	(8.2)	2.7	—	ロクロナデ、糸切り痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部～体部50%	
43	013-01	山皿	R52 包含層	(9.0)	2.1	—	ロクロナデ、糸切り痕	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部～体部40%	
44	009-04	山皿	O43 包含層	—	—	—	ロクロナデ	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部～体部70%	底部外面に墨書
45	010-04	おろし皿	O51 包含層	—	—	—	ロクロナデ、おろし目 糸切り痕	並	並	外 10YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/4 浅黄橙	底部80%	
46	015-02	おろし皿	O51 包含層	(14.8)	3.9	—	ロクロナデ、おろし目 口縁部内外面に施釉	並	良	外 7.5Y8/1 灰白 内 7.5Y8/1 灰白	口縁～底部25%	
47	016-01	緑釉小皿	B地区水路 包含層⑥	(9.4)	2.9	—	ロクロナデ、口縁部内外面に施釉	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	口縁～底部30%	
48	013-04	緑釉皿	O46 包含層	(12.8)	1.9	—	ロクロナデ、体部内外面に施釉、削り出し高台	良	良	外 2.5Y8/1 灰白 内 2.5Y8/1 灰白	口縁～底部30%	
49	011-03		西排水溝	—	—	—	ロクロナデ、糸切り痕 体部外面ヘラケズリ	良	良	外 5Y8/1 灰白 内 5Y8/1 灰白	底部80%	底部外面に『大』の墨書
50	009-05		P47 水路	(12.0)	2.6	—	ロクロナデ、削り出し高台、底部内面にすり絵	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	口縁～底部50%	
51	011-05	皿、または鉢か	P48 水路埋土	—	—	—	ロクロナデ、削り出し高台	並	並	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部～体部100%	ロクロ回転左
52	012-04	甕	試掘T17①② 暗灰色粘	(23.4)	—	—	『N字状口縁、口縁部内外面ヨコナデ』	並	良	外 7.5R6/2 灰赤 内 7.5R7/1 暗赤灰	口縁部小片	常滑産
53	012-06	甕	試掘T17①② 暗灰色粘	14.8 底径	—	—		並	良	外 5RP4/1 明紫灰 内 N8 灰白	底部70%	常滑産
54	017-02	甕	R44 包含層1	(34.4)	—	—	口縁端部やや肥厚	並	良	外 N7/1 明オリーブ灰 内 N8 灰白	口縁部30%	渥美産？
55	018-01	鉢	O46 包含層1	(31.0)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 5RP5/1 紫灰 内 N8/1 灰白	口縁部30%	
56	018-02	片口鉢	O46 包含層1	(34.5)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 2.5Y7/3 浅黄 内 2.5Y7/3 浅黄	口縁部30%	
57	017-03	土師器 鍋 ミニチュア	M49 包含層1	(8.4)	—	—	ユビオサエ、ナデ	良	不良	外 10YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/4 浅黄橙	口縁部～体部50%	
58	009-07	土師器 高杯	Q50 包含層1	10.8 脚長	2.4 脚径	0.6 孔径	ユビオサエ、ナデ	並	良	外 10YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/3 浅黄橙	脚部100%	杯部、脚裾部は欠損
59	019-01	土師器 甕	試掘T16② 暗灰色粘	(16.7)	—	—	口縁端部内側上方へつまみ上げ、体部外面ハケメ	並	良	外 2.5Y8/3 淡黄 内 2.5Y8/4 淡黄	口縁部20%	
60	017-01	土師器 甕	S44 包含層	(22.2)	—	—	口縁端部上方へつまみ上げ、体部内外面ハケメ	並	不良	外 5YR7/8 橙 内 5YR7/4 にぶい橙	口縁部30%	
61	019-02	土師器 鍋	試掘T18 暗灰色粘質土	(24.6)	—	—	口縁部折り返し、ヨコナデ、体部外面ユビオサエ	並	良	外 7.5YR7/3 にぶい橙 内 7.5YR8/2 灰白	口縁部30%	
62	016-04	土師器 鍋	B地区水路④ 包含層	(36.0)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ	良	不良	外 5YR4/4 にぶい赤褐 内 5YR7/6 橙	口縁部30%	体部外面下半に付煤
63	012-05	土師器 鍋	試掘T16？ 表採	—	—	—	口縁部内外面ヨコナデ 焼成前穿孔	良	良	外 5YR8/4 淡橙 内 5YR8/4 淡橙	口縁部細片	
64	013-05	天目茶椀	O47 包含層	(11.6)	(7.0)	—	ロクロナデ 底部ロクロケズリ	良	良	外 7.5Y7/1 灰白 内 7.5Y7/1 灰白	口縁部～体部30%	
65	011-02	水滴	Q50 包含層1	2.4	3.6	—	ロクロナデ、体部上半施釉、糸切り痕	良	良	外 10YR8/1 灰白 内 2.5Y8/1 灰白	口縁部～底部60%	注口部欠損
66	013-02		P46 包含層1	—	—	—	ロクロナデ、体部内面に段、体部下半無釉	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	底部～体部50%	
67	016-02	白磁 椀	O45 包含層1	(15.2)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外面に施釉	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白	口縁部30%	
68	013-07	白磁 椀	B地区水路 包含層⑬	(15.5)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外面に施釉	良	良	外 7.5Y8/1 灰白 内 7.5Y8/1 灰白	口縁部20%	
69	016-03	白磁 椀	R44 包含層1	(18.0)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外面に施釉	並	良	外 2.5GY8/1 灰白 内 2.5GY8/1 灰白	口縁部30%	
70	010-05	平瓦	L50 包含層1	—	—	—	凸面縄叩き、凹面布目痕 側面ヘラ切り	並	良	外 10YR6/6 明黄褐 内 10YR8/4 浅黄橙	細片	
71	006-01	平瓦	R48 包含層1	—	—	—	凸面縄叩き、凹面布目痕 側面ヘラ切り	良 砂粒を含む	良	外 N4 灰 内 N4 灰	小片	
72	020-06	土錘	R35 包含層	(3.4) 長	1.1 幅	—		並	良	外 2.5Y6/3 にぶい黄	上端部欠損	
73	020-05	土錘	O46 包含層	3.5 長	1.3 幅	—		並	良	外 10R5/6 赤	100%	
74	020-04	土錘	Q50 包含層1	(4.5) 長	2.3 長	—		並	良	外 2.5Y8/3 淡黄	上端部欠損	
75	020-07	土錘	N47 包含層	(3.4) 長	1.1 幅	—		並	良	外 N8 灰白	上端部欠損	
76	020-03	土錘	P45 包含層1	(5.1) 長	1.5 幅	—		並	良	外 2.5Y8/1 灰白	上端部欠損	
77	020-02	土錘	S50 包含層1	5.6 長	1.8 幅	—		並	良	外 2.5GY7/1 明オリーブ灰	100%	両端部一部欠損
78	020-01	土錘	S49 包含層	5.2 長	1.8 幅	—		並	良	外 5Y8/3 淡黄	100%	上端部一部欠損

第29－2表　B地区出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
79	020-08	土錘	O43 包含層	(6.5) 長	2.9 幅	—		並	良	外 N8 灰白		上端部欠損
80	019-03	鋳貨 開元通寶	荒蒔 字相部(あい、ごおり)表採	—	—	—					100%	
81	021-02	加工円盤	N50 包含層1	2.4 縦	1.8 横	0.7 厚		並	不良	外 7.5YR8/3 浅黄橙 内 10YR8/2 灰白		土師器鍋の体部を転用
82	021-03	加工円盤	O52 包含層1	3.3 縦	3.3 横	—		並	良	外 10YR8/4 浅黄橙 内 10YR8/3 浅黄橙		土師器椀の底部を転用
83	016-06	加工円盤	水路⑧包含層	3.5 縦	3.4 横	0.9 厚	外面タタキ、内面青海波文	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		須恵器甕の体部を転用、未製品
84	016-07	加工円盤	水路⑧包含層	3.7 縦	4.4 横	1.2 厚	外面タタキ、内面ナデ	並	良	外 N5 灰 内 N5 灰		須恵器甕の体部を転用、未製品
85	006-06	加工円盤	P48 包含層1	5.3 縦	5.5 横	1.5 厚	外面タタキ、内面青海波文	並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		須恵器甕の体部を転用
86	015-01	加工円盤	水路⑨包含層	8.8 縦	9.4 横	0.9 厚	外面タタキ、内面青海波文	良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		須恵器甕の体部を転用
87	021-07	加工円盤	Q43包含層1	2.7 縦	2.7 横	1.2 厚	全周研磨	並	良	外 7.5YR8/4 浅黄橙 内 7.5YR8/4 浅黄橙		陶器甕の体部片を転用
88	019-06	加工円盤	試掘T22②表土～砂	3.5 縦	3.6 横	1.6 厚	全周研磨	並	良	外 2.5Y8/6 黄 内 2.5Y7/3 浅黄		陶器甕の口縁部片を転用
89	021-10	加工円盤	Q54 包含層1	3.9 縦	4.1 横	1.4 厚	全周研磨	並	良	外 10R5/8 赤 内 10R5/8 赤		陶器甕の体部片を転用
90	019-05	加工円盤	試掘T22②表土～砂	3.1 縦	3.2 横	1.6 厚	全周の一部を研磨	並	良	外 2.5YR7/6 橙 内 2.5YR7/6 橙		陶器甕の体部片を転用
91	015-07	加工円盤	水路⑤包含層	2.7 縦	2.8 横	1.1 厚		並	良	外 7.5YR7/6 橙 内 7.5YR7/6 橙		陶器甕の体部片を転用
92	015-05	加工円盤	水路⑬包含層	2.6 縦	3.1 横	1.2 厚		並	良	外 2.5YR7/8 橙 内 2.5YR7/8 橙		陶器甕の体部片を転用
93	019-07	加工円盤	試掘T17①②暗灰色粘土	3.0 縦	3.3 横	1.3 厚		並	良	外 2.5YR6/8 橙 内 2.5YR6/6 橙		陶器甕の体部片を転用
94	015-04	加工円盤	水路⑬包含層	3.4 縦	3.4 横	1.1 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		陶器甕の体部片を転用
95	021-04	加工円盤	O51 包含層	3.4 縦	3.3 横	1.1 厚		並	良	外 7.5YR8/4 浅黄橙 内 7.5YR8/6 浅黄橙		陶器甕の体部片を転用
96	021-11	加工円盤	N48 包含層1	3.3 縦	3.5 横	1.3 厚		並	良	外 10YR7/2 にぶい黄橙 内 10YR7/2 にぶい黄橙		陶器甕の体部片を転用
97	016-08	加工円盤	水路 表土中	3.5 縦	3.9 横	1.1 厚		並	良	外 2.5YR6/8 橙 内 2.5YR6/6 橙		陶器甕の体部片を転用
98	021-08	加工円盤	O47 包含層1	3.4 縦	4.0 横	1.1 厚		並	良	外 10R5/8 赤 内 10R5/8 赤		陶器甕の体部片を転用
99	012-02	加工円盤	試掘T17①②暗灰色粘土	3.9 縦	4.2 横	1.1 厚		並	良	外 10R4/1 暗赤灰 内 10R6/4 にぶい赤橙		陶器甕の体部片を転用
100	021-06	加工円盤	O54 包含層1	3.9 縦	4.3 横	1.2 厚		並	良	外 5YR6/6 橙 内 5YR6/6 橙		陶器甕の体部片を転用
101	021-09	加工円盤	P48 包含層1	5.5 縦	5.7 横	1.3 厚		並	良	外 2.5YR7/6 橙 内 2.5YR7/6 橙		陶器甕の体部片を転用
102	021-12	加工円盤	R44 包含層1	3.6 縦	4.0 横	1.2 厚		並	良	外 7.5R2/2 極暗赤褐 内 7.5R3/2 暗赤褐		すり鉢の口縁部を転用
103	006-05	加工円盤	N48 包含層1	4.5 縦	4.3 横	1.0 厚		並	良	外 2.5Y8/3 浅黄 内 2.5Y8/3 浅黄		すり鉢の体部片を転用
104	021-13	加工円盤	O51 包含層	3.7 縦	3.7 横	2.1 厚		並	良	外 5YR6/4 にぶい橙 内 5YR6/4 にぶい橙		陶器甕の口縁部付近を転用
105	019-04	加工円盤	試掘T18表土下～黄灰色粘	9.9 縦	10.4 横	1.2 厚		良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		須恵器台付長頸壺の底部を転用
106	015-03	加工円盤	水路⑬包含層	3.3 縦	2.8 横	0.6 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山茶椀の体部片を転用
107	015-06	加工円盤	水路⑤包含層	3.9 縦	3.3 横	0.9 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山茶椀の底部片を転用
108	015-08	加工円盤	水路⑤包含層	2.5 縦	2.3 横	0.9 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山茶椀の底部片を転用
109	021-01	加工円盤	M51T 1 包含層1	7.1 縦	7.5 横	1.1 厚		良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山茶椀の底部を転用
110	012-01	加工円盤	試掘T18表土下～	(6.9) 縦	10.8 横	0.9 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山茶椀の底部を転用、欠損
111	011-06	加工円盤	Q50 包含層1	8.2 縦	9.1 横	0.9 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山茶椀の底部を転用
112	015-09	加工円盤	水路⑥包含層	4.7 縦	5.1 横	0.6 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山皿の底部を転用
113	016-05	加工円盤	水路⑧包含層	4.9 縦	5.2 横	0.6 厚		良	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		山皿の底部を転用
114	021-05	加工円盤	M51 包含層1	5.0 縦	4.7 横	0.7 厚		並	良	外 2.5Y8/2 灰白 内 2.5Y8/2 灰白		施釉陶器の底部を転用
115	021-14	加工円盤	O46 包含層	4.2 縦	4.2 横	0.8 厚		並	良	外 N8 灰白 内 N8 灰白		天目茶椀の底部を転用

第29－3表　B地区出土遺物観察表

PL.1

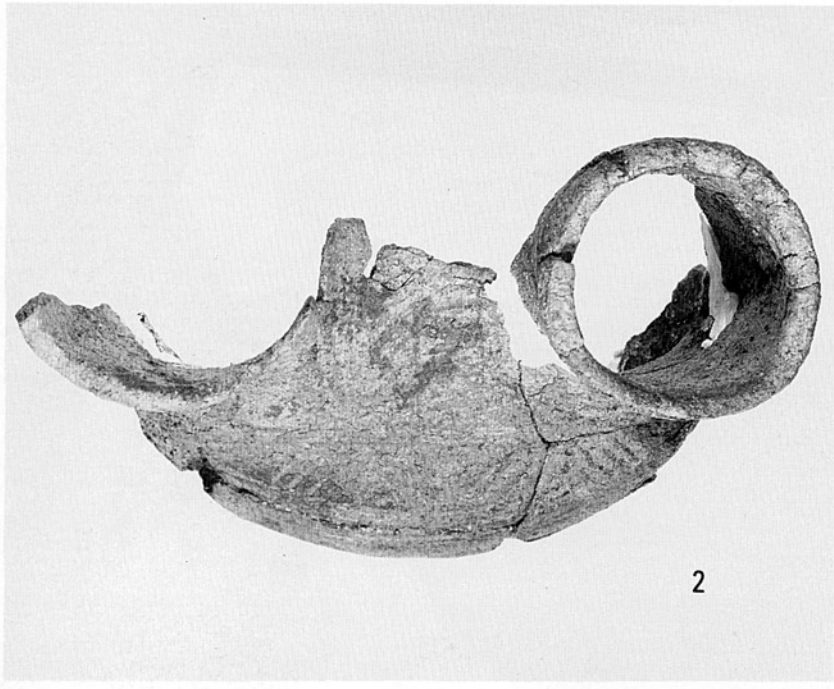
調査前全景（南から）

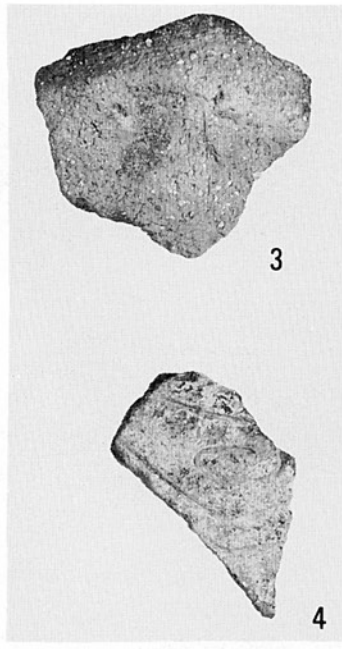
調査後全景（北から）

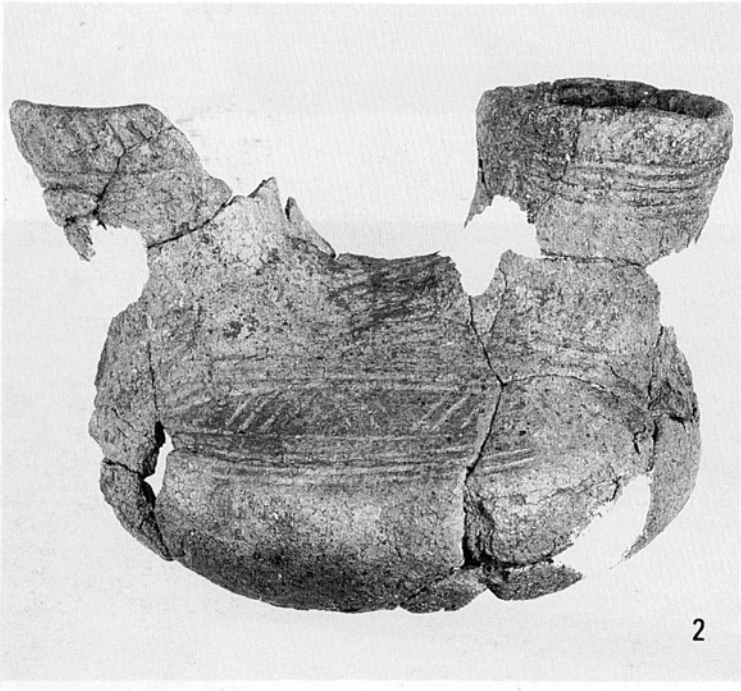
B地区全景（北から）

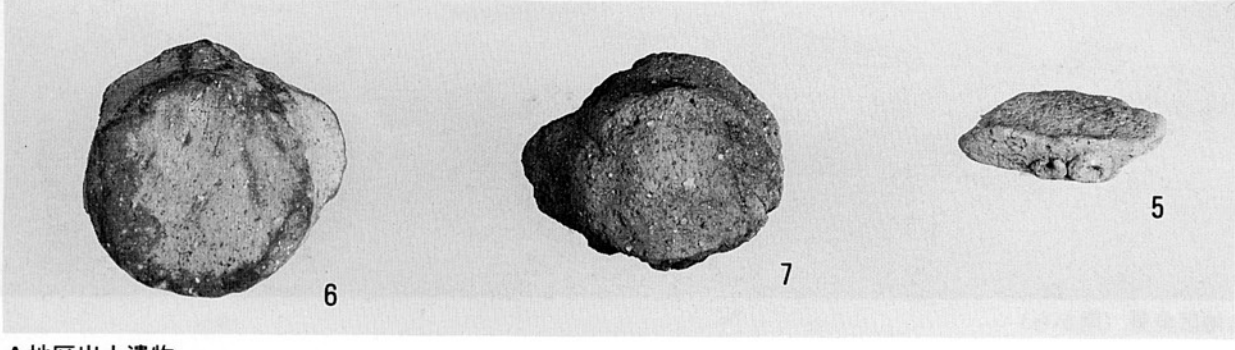
B地区全景（南から）

PL. 3

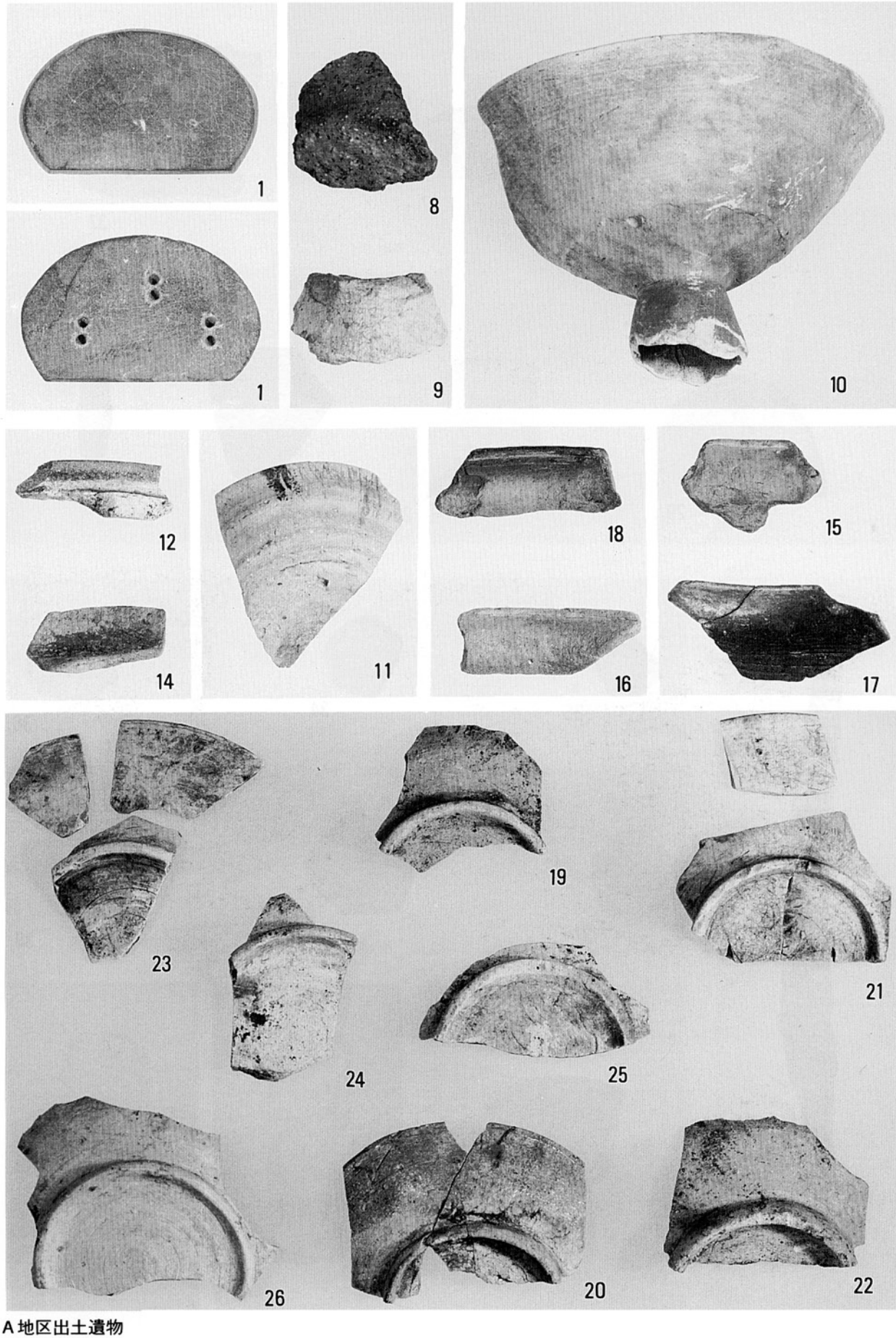




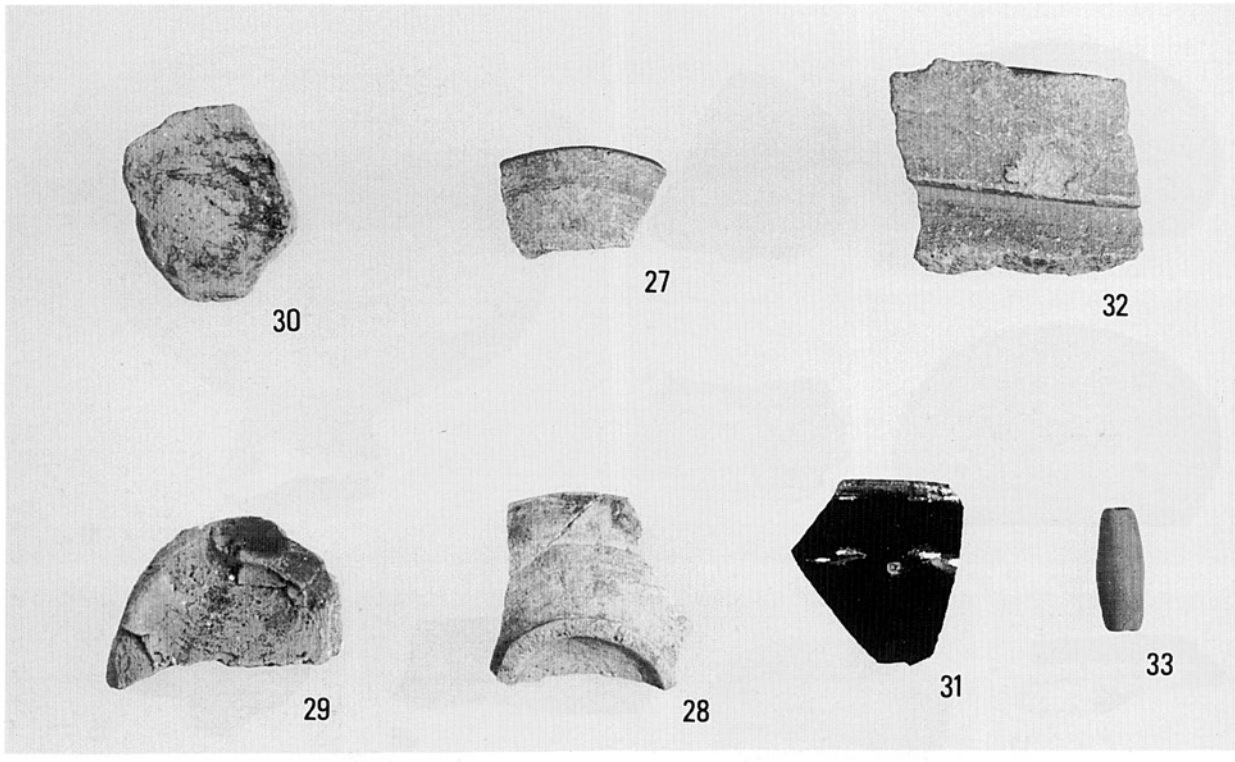


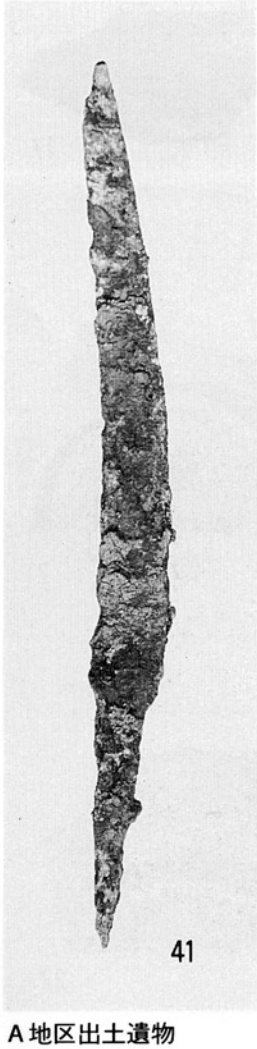


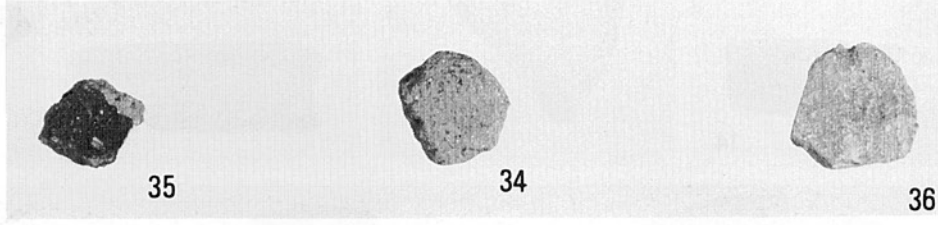
A地区出土遺物

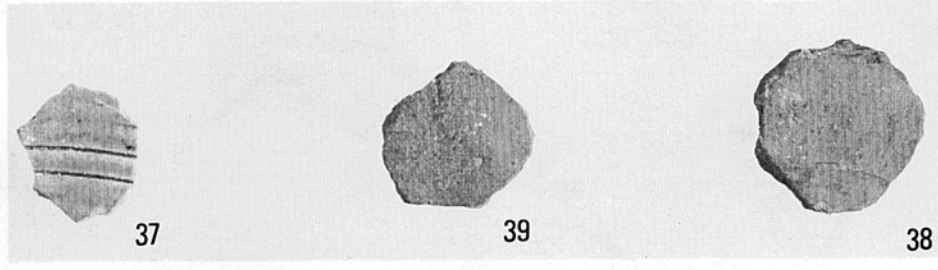


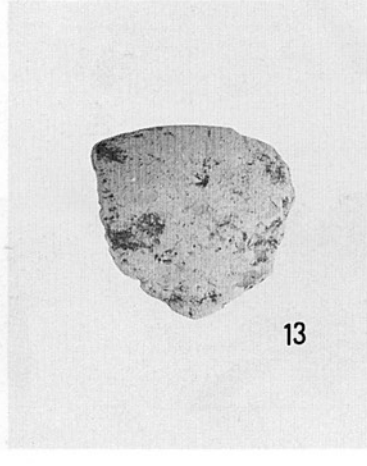
A地区出土遺物

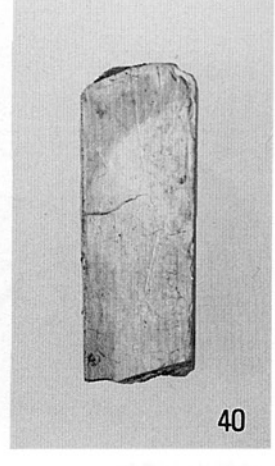




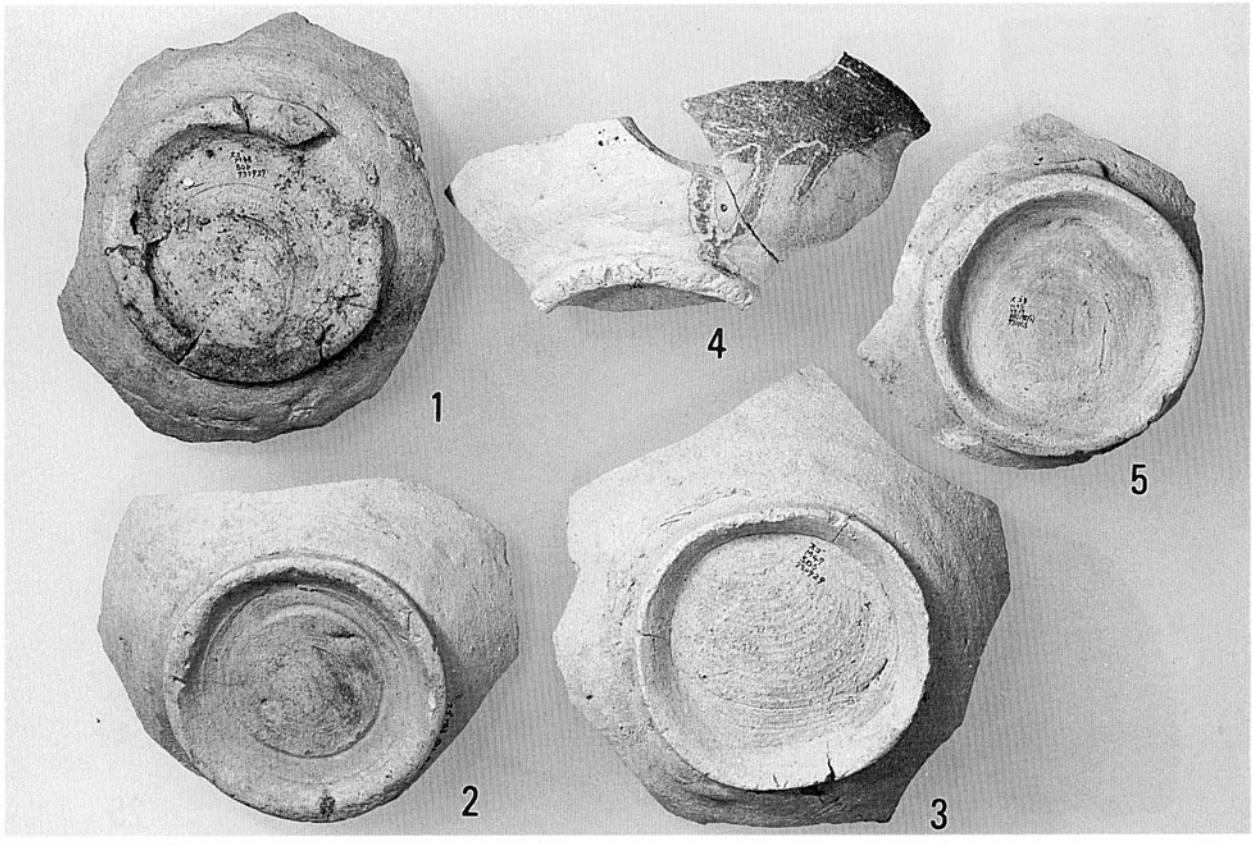




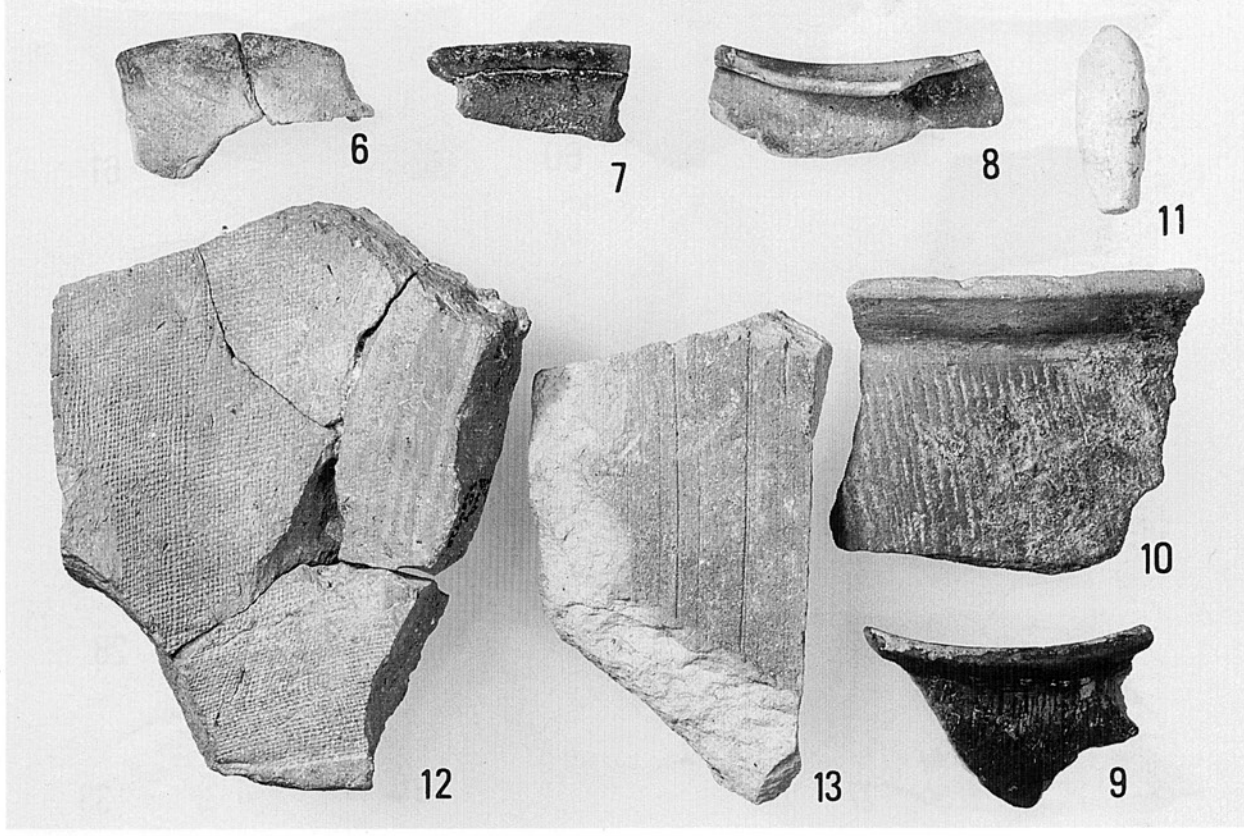




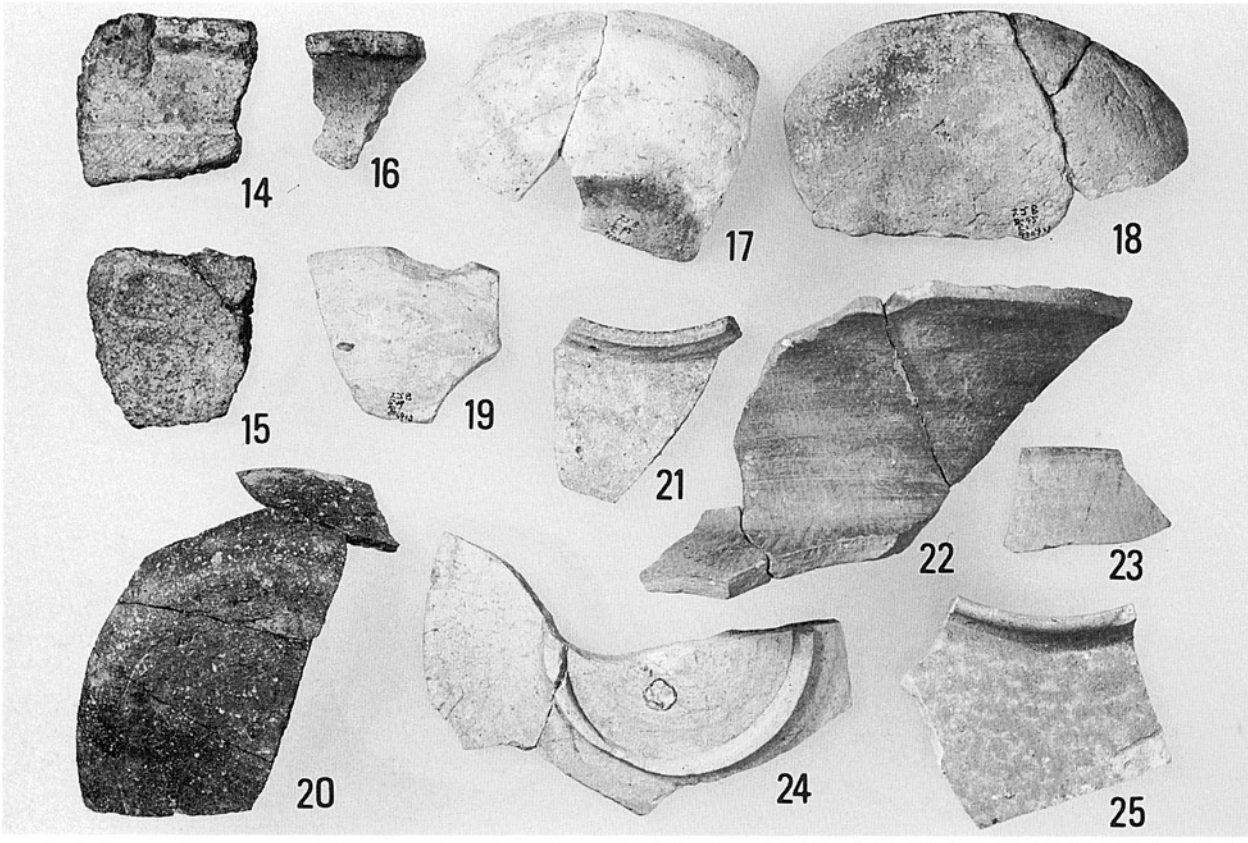
A地区出土遺物



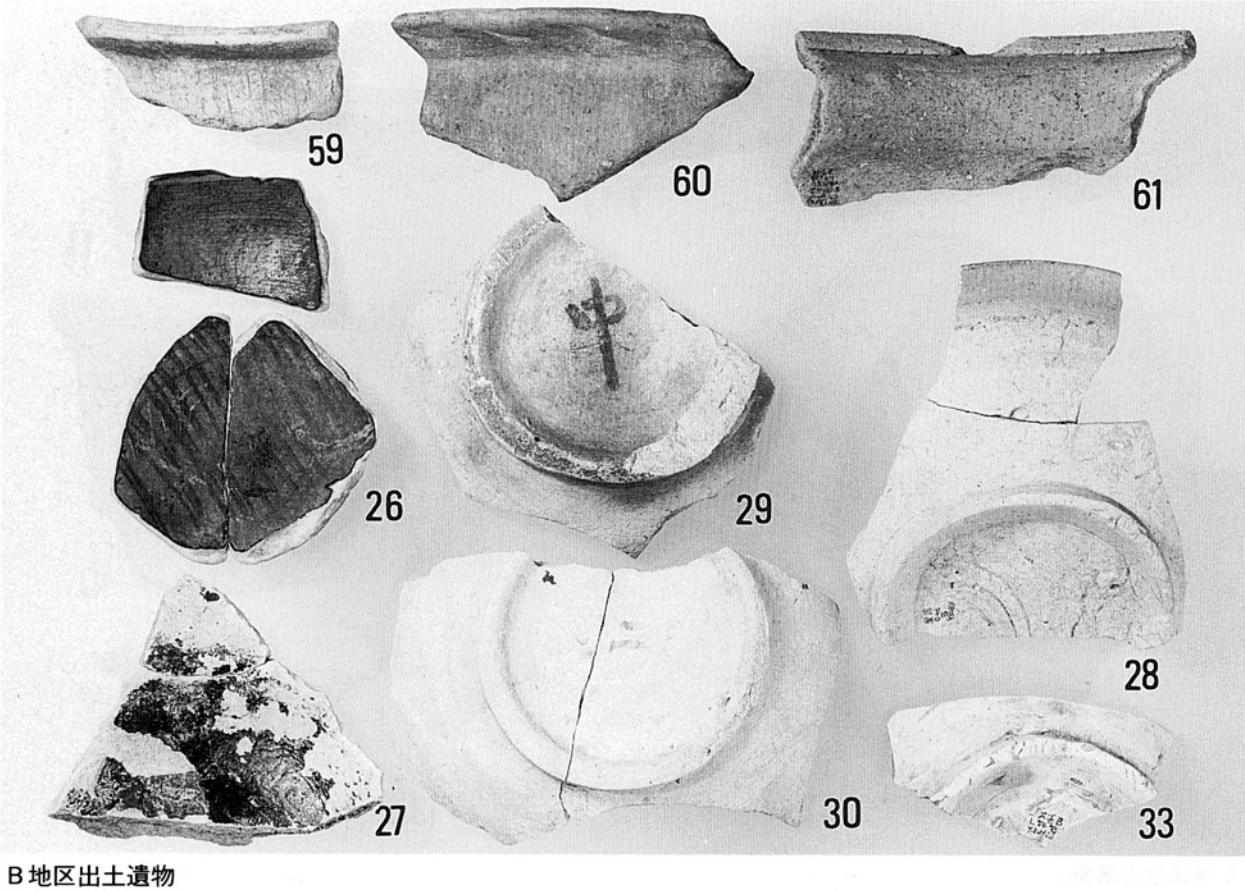
B地区出土遺物



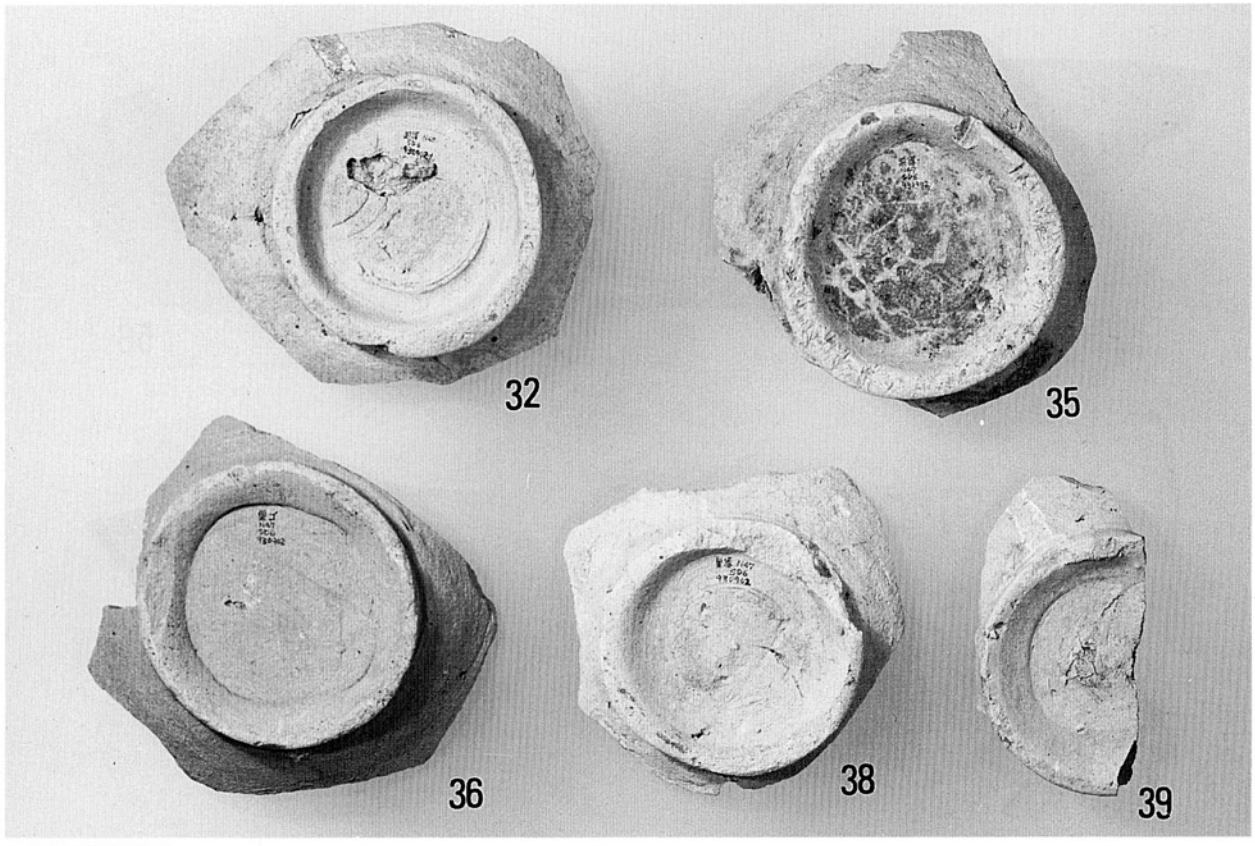
B地区出土遺物



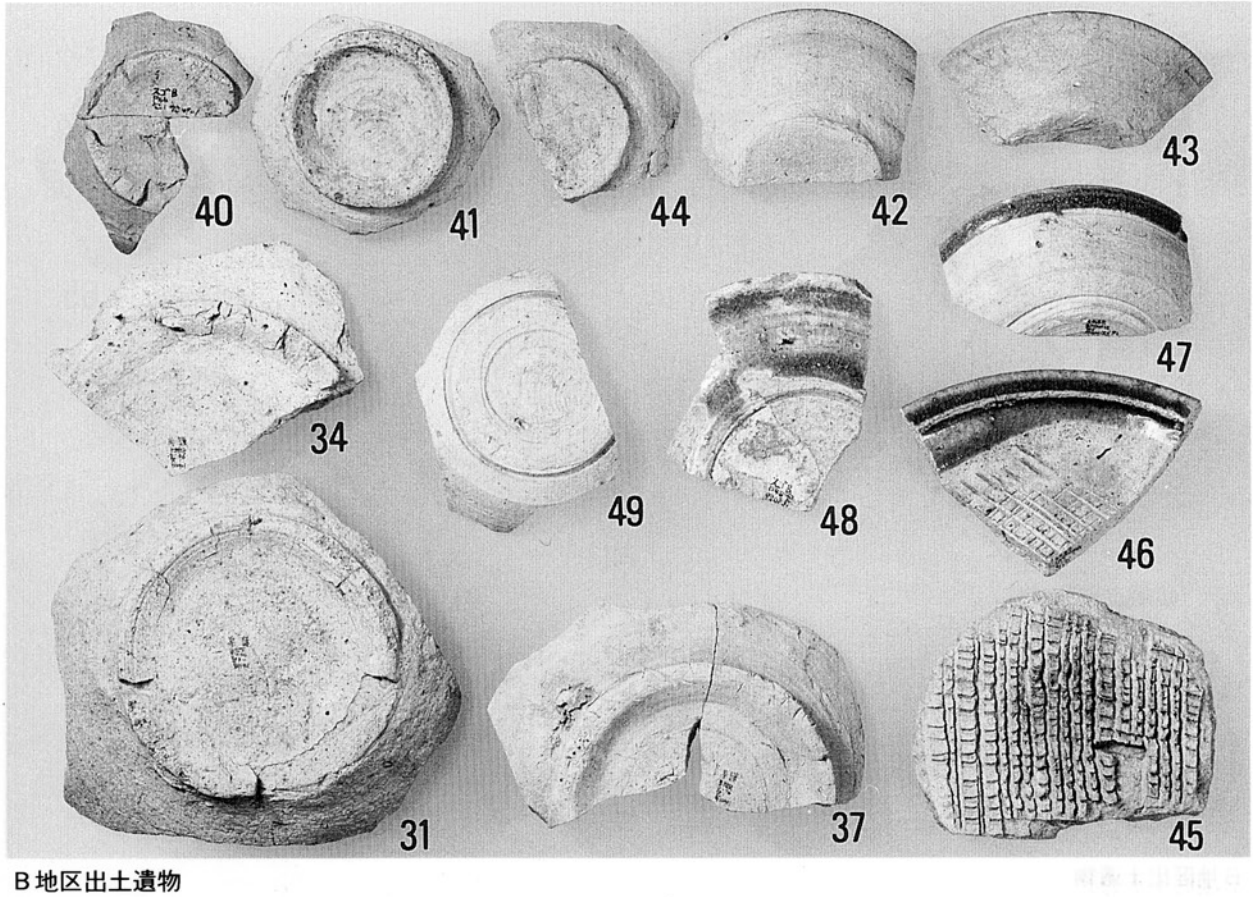
Ｂ地区出土遺物



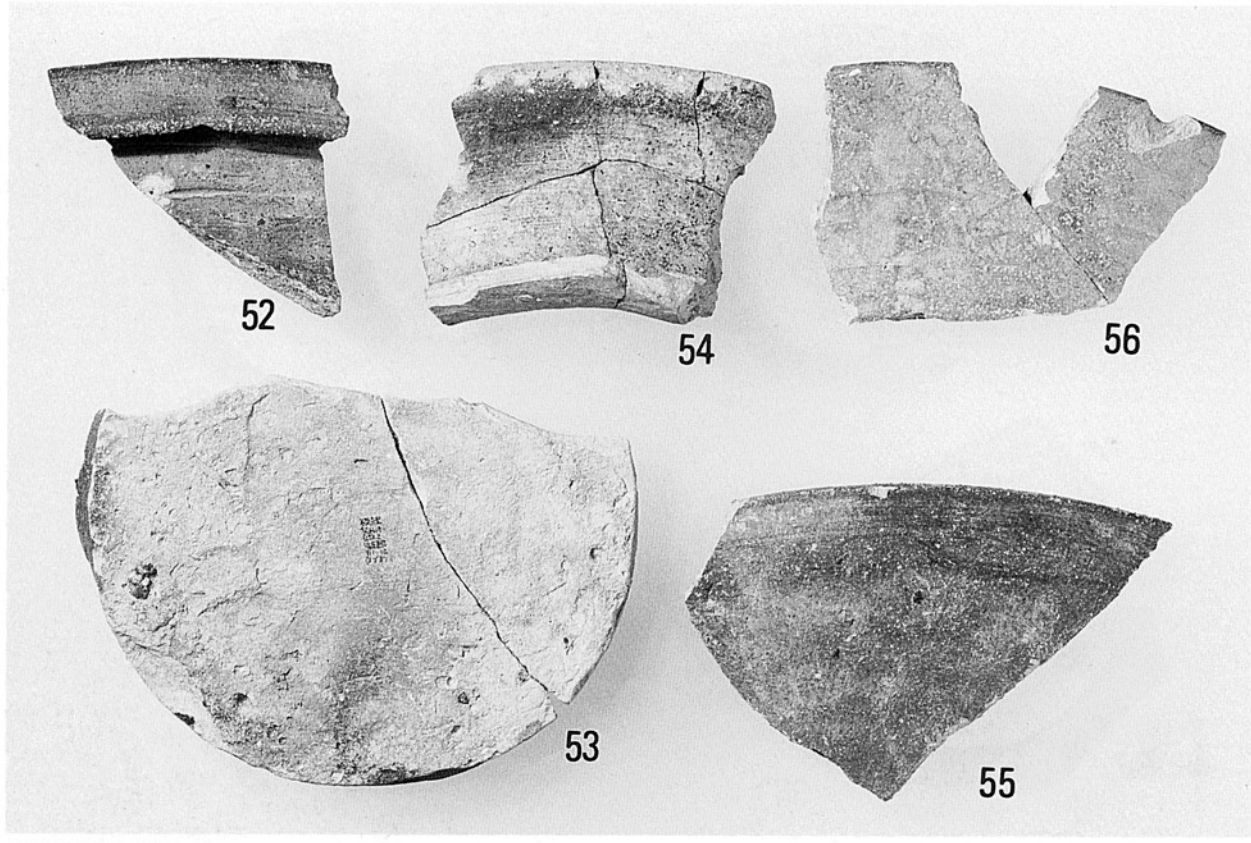
Ｂ地区出土遺物



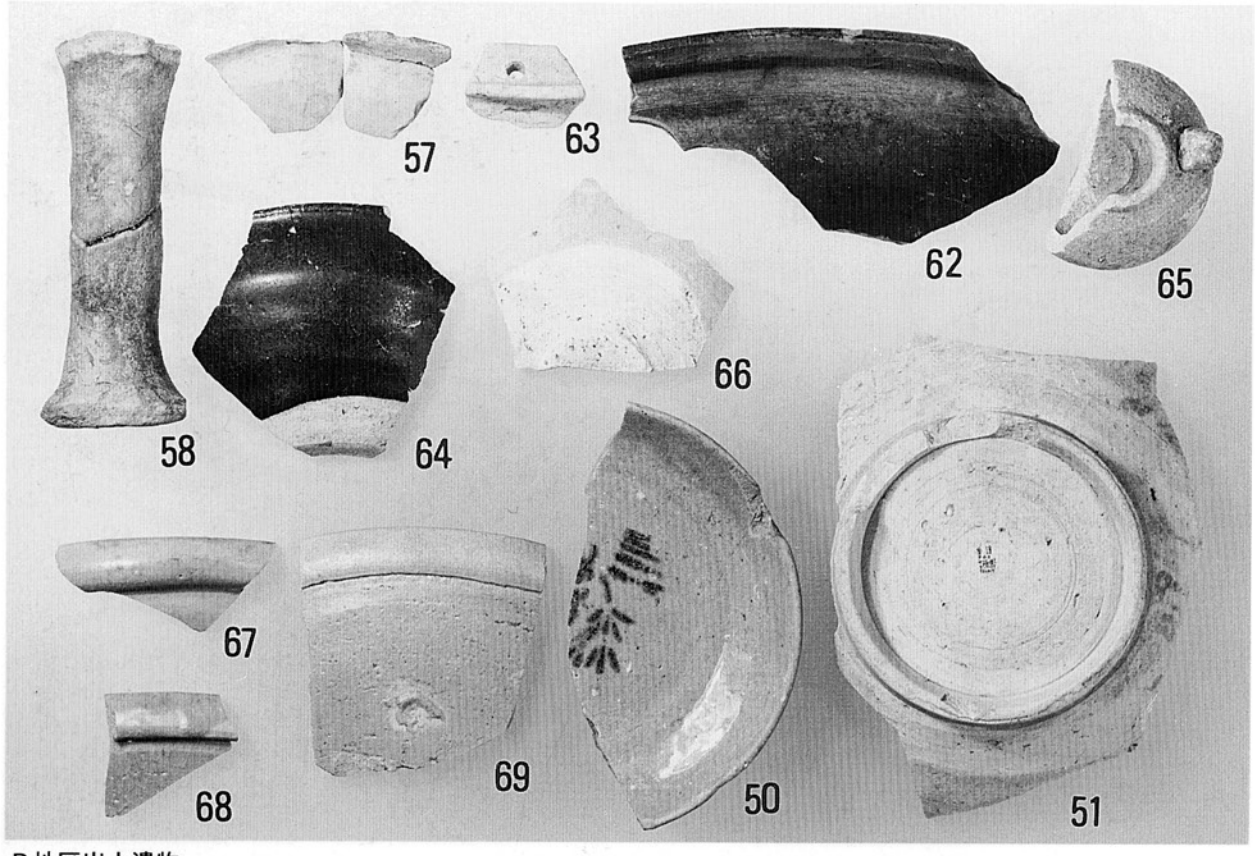
B地区出土遺物



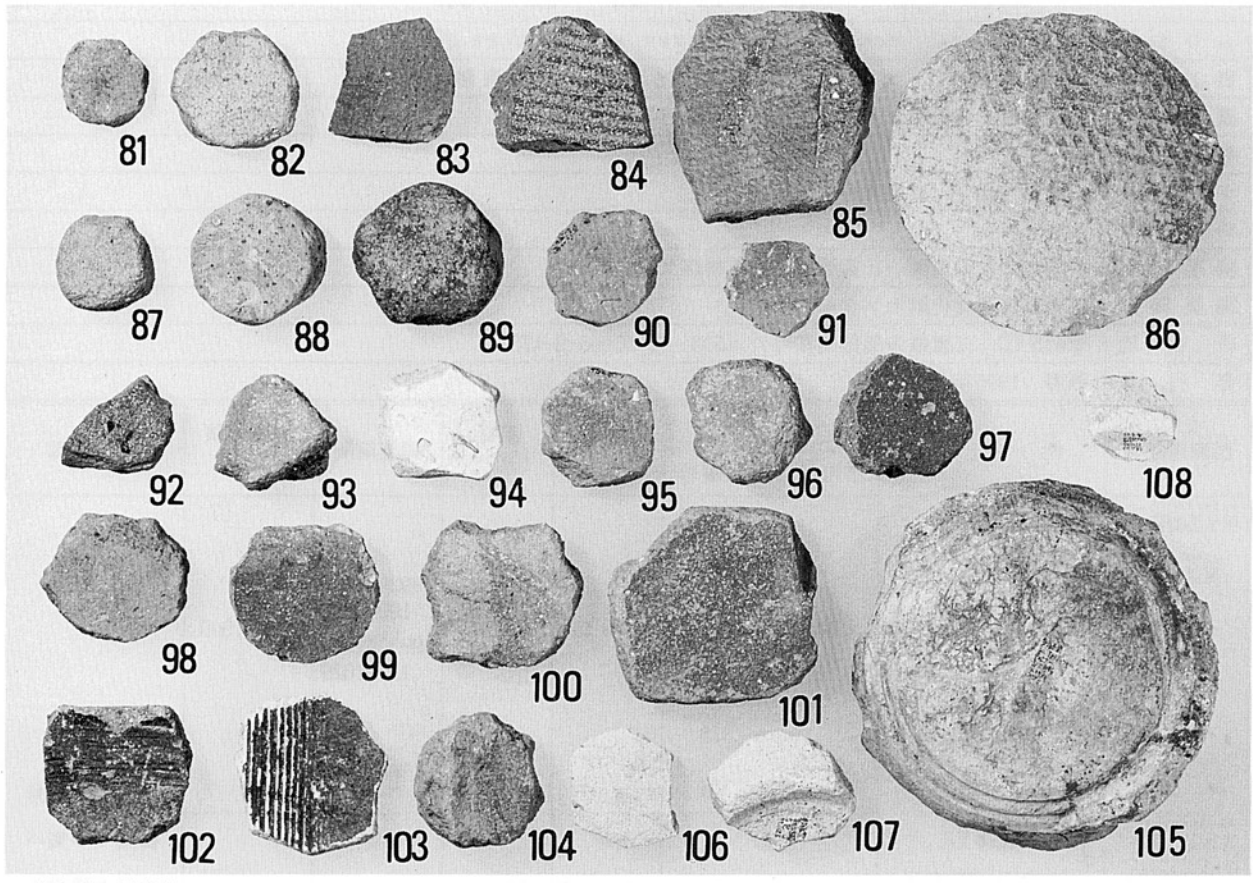
B地区出土遺物



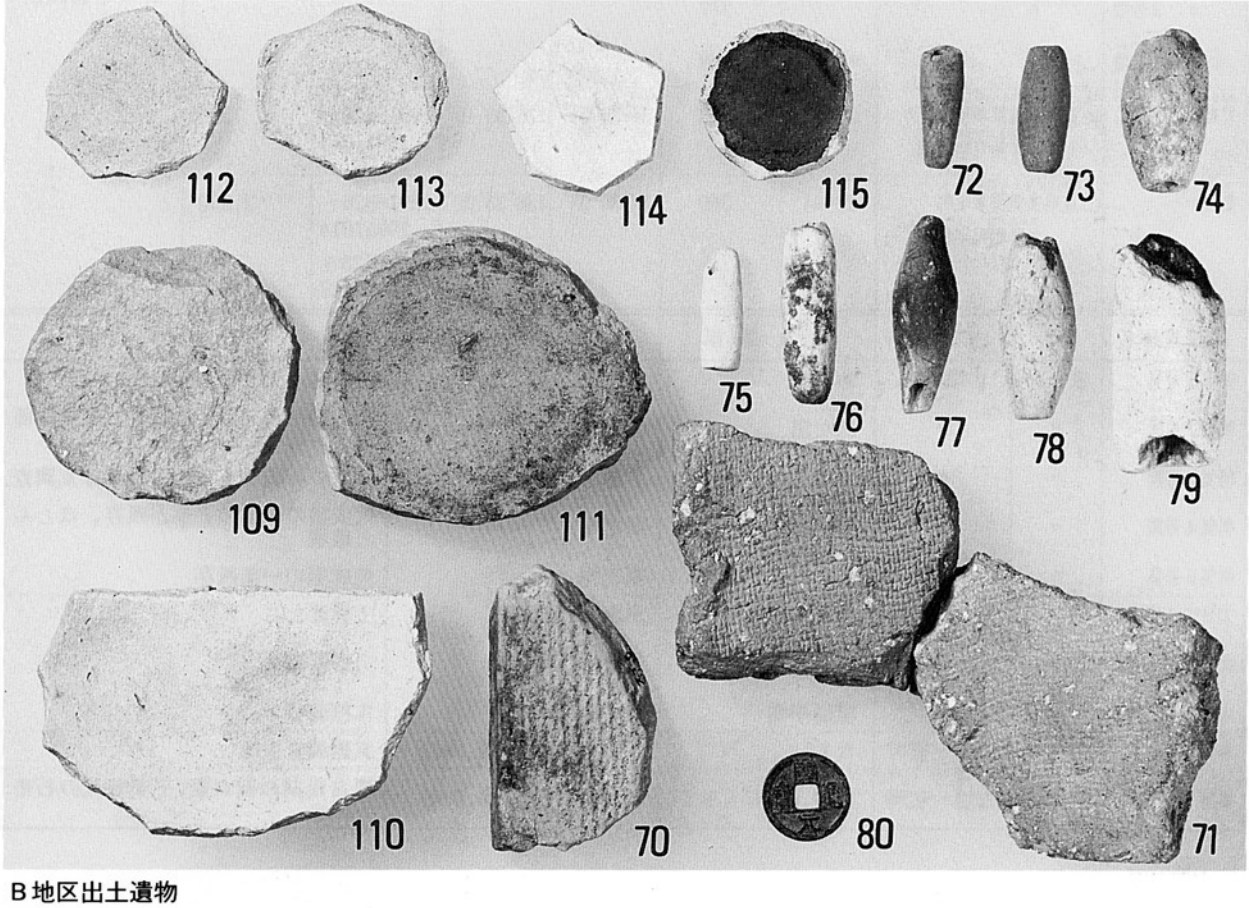
B地区出土遺物



B地区出土遺物



B地区出土遺物



B地区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	みょうげかまあとぐん　だいにちやまこふんぐん　あまかすいせき　すごいせき
書名	明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告
巻次	I
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	123−1
編著者名	伊藤克幸、田村陽一、東　良樹、西村修久、宇河雅之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503　℡ 05965-2-1732
発行年	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
みょうげかまあとぐん 明気窯跡群	みえけんたきぐんたきちょう 三重県多気郡多気町							
みょうげいちごうがま 明気1号窯	おおあざおうかあざみょうげ 大字相可字明気		370			19920511〜19920831 19930419〜19931029	2,900	一般国道42号松阪・多気バイパス建設に伴う事前調査
〃 にごうがま 2号窯	〃	22441	371	34°29′15″	136°33′15″			
〃 さんごうがま 3号窯	〃		372					
〃 よんごうがま 4号窯	〃		373					
〃 ごごうがま 5号窯	〃		374					
だいにちやまこふんぐん 大日山古墳群	みえけんたきぐんたきちょう 三重県多気郡多気町							
だいにちやまにごうふん 大日山2号墳	おおあざおうかあざだいにちやま 大字相可字大日山	22441	376	34°30′03″	136°33′10″	19940407〜19940610	600	
〃 さんごうふん 3号墳	〃		377					
〃 よんごうふん 4号墳	〃		378					
あまかす 甘糟	みえけんたきぐんたきちょう 三重県多気郡多気町 おおあざおうかあまかす 大字相可字甘糟	22441	368	34°30′04″	136°33′10″	19910826〜19911014	360	
すご 巣護	みえけんたきぐんたきちょう 三重県多気郡多気町 おおあざおうかあすご 大字相可字巣護	22441	369	34°30′08″	136°33′05″	19910826〜19911014 19930523〜19940127	2,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
明気1号窯	窯跡	古墳末期	あな窯	須恵器	焼成室の天井部一部残存
明気2号窯	〃	〃	あな窯	須恵器	焼成室の天井部一部残存、焚き口部完存
明気3号窯	〃	〃	不明	須恵器	灰原のみ調査を実施、窯体は未調査
明気4号窯	〃	〃	不明(あな窯？)	須恵器	焼成室の床面の一部が残存、ほとんど破壊
明気5号窯	〃	〃	あな窯	須恵器	焼成室の一部残存
大日山2号墳	古墳	古墳末期	径20mの円墳	須恵器	主体部なし
大日山3号墳	〃	〃	丘陵斜面にテラス状	須恵器、土師器	方形墓壙
大日山4号墳	〃	〃	墳径不明	須恵器	木棺直葬
甘糟	散布地	平安〜室町	なし	縄文土器、土師器、陶器	試掘調査遺跡
巣護	散布地	古墳〜室町	井戸、溝、ピット	縄文土器、土師器、陶器	縄文後期の双口壷、平安時代の石帯が出土

平成7(1995)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年5月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 123-1

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ

明気窯跡群・大日山古墳群
甘糟遺跡・巣護遺跡

1995年3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　オリエンタル印刷株式会社